

三浦俊三郎著

本邦
洋樂
變遷史



株式會社
日東書院
發行

序

本書は表題の示すやうに、甫めて我が國に洋樂が輸入されてから今日に至る迄の歴史的記述である。則ち歴史的認識の視角から、史實、年代、人物、作品、因果關係等を根幹として、特に日本に於て育成して來た西洋音樂の全般的な領域を鳥瞰的に展望したものである。

由來我が國の洋樂は、巨人の歩みを以て遂に今日の隆盛期に達し、歐米樂壇のそれと比肩して輝かしい進出を遂げるに至つた。然るに過去二十世紀間、世界音樂の玉座に君臨獨宰して來た純西洋音樂が今日競つて東洋音樂との握手に依つて其の新生面を拓かんと努力してある際、我が國に於ては即ち西洋音樂を此の幽邃な東洋の風土と、我が國固有の歴史的情勢、政治

的體制並社會的機溝の新しい殿堂に祭祀して如何に本來の音樂そのものの概念を擴充し宜揚する事を得たかは私達の冗言を要しない處である。茲に於て、此の一時代を立派に完成した我が樂界を新しい次の時代に止揚する爲めにも、既往の我が國に於ける洋樂の推移して來た史的經過を清算する必要に迫られてゐるのである。

文化の開進の要素が歴史の認識に依據する事を想起する時、苟も我が樂界並樂壇に對して深甚なる關心を有し、且新しい次の時代の一大飛躍を企圖する人々は、先づ既往の我が樂壇の歴史を正確に、且、克明に認識把握する事が最も肝要であると思ふ。

然るに現在我が國に於ては、洋樂の特殊題目、又は部分的問題に對する歴史的著書が纔かに二、三出版されてゐるのみで、此の最も重要性を帯びて居る總括的な音樂史の著述は遺憾乍ら未だに刊行されて居ない。之に鑑みて私は微力をも不願、速かに我が國の洋樂の全般的な變遷史の編纂を思ひ

立つて、非常な情熱と感激を以て仕事に着手したのであつた。尤も此の計劃の最初の意圖は横濱に居を構へたと居ふ記念に、幕末開港以來、日本文化の門戸となつた横濱に諸々の西洋文化に隨伴して賑々しく此の新舞臺に登場して來た西洋音樂の足跡を辿り、則ち我が國に於ける洋樂の發祥地とも稱すべき横濱に残された音樂上の史實を蒐集して、『金港音樂史』といふやうなものを編纂する考へで、仕事を始めたのが、關東大震災のあつた大正十二年の春であつた。爾來東奔西走、所謂荆棘の道を踏んで、孜々として史實の研究踏査や、材料の蒐集整理等に没頭してゐる中に、次第に纏つた全般的な音樂史の必要を認知するに至り、斯かる一地域に偏執するの不明を覺つたので、翻然取材の範圍を擴大して、今を去る四百年前初めて我が國に南蠻音樂が傳へられた、かの永祿開港當時から、今日商業資本主義の最尖端を行くアメリカニズムの坩堝の中から飛び出して來た、怪奇なジャズ音樂の流行に至る迄の洋樂の變遷史を精細に且、平易に叙述したものである。そし

て個人の獨斷論の潜入を防ぐ爲めに、成るべく事實の儘を記載して、史實の闡明に努めた。

尙震災直後の事として、參考に供すべき重要な文書の焼失或は散逸せるもの多く、其の蒐集に多大の困難を感じ、一方繁忙な職務の傍ら零細な餘暇を盗んで仕事を續けて行く外はなかつたので、竊かに種々不備の點の存する事を懼れて居るが、希はくは讀者諸賢の寛恕を庶幾ふ次第である。

尙本書には過去十幾年間苦心して蒐集して來た、明治時代からの各種の音樂會プログラムを年代順に配列して豊富に挿入してあるが、些細なる一片のプログラムと雖も當該時代の音樂界の情勢を最も敏感に、最も鮮明に、最も端的に表徴してゐるものであり、且、音樂の歴史的考察に當つて之を助ける最も卑近な且、最も重要な役割を果すものと信じて此の好個の參考資料を讀者諸彦に提供する次第である。

本書は斯くの如く荏苒數ヶ年の日子を費して漸くにして上梓、今日之を

江湖の音楽愛好の士に贈る事を得たが、幸にして讀者諸賢の御愛讀と嚴正なる御叱正を仰ぎ、併せて嚮後我が國洋樂の發展に聊かなりとも資する所があるならば、著者の歡喜は之れに過ぎるものは無い。

終りに臨んで本書を出版するに當り御援助を賜つた吉田信太氏、猪瀬久三氏、堀正文氏の御厚意を深く感謝致します。

昭和六年九月九日

横濱市神奈川の寓居にて

三 浦 俊 三 郎 識

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12

邦本洋樂變遷史目次

緒論

音樂史の特質と效果(一)——本書の研究對象並其の範圍(二)——本書の區分(三)——南蠻紅毛樂時代(四)——歐風音樂時代(五)——日本的洋樂時代(六)——世界的音樂時代(七)

第一編 南蠻紅毛樂時代

上 舶來音樂

第一章 吉利支丹音樂の渡來……………一

リユウト、ヴィヨロン、トロムベットの奏樂(一)——ザヴィエールと邦人の接觸(二)——教會音樂の嚆矢(三)——讚美歌、十誡、悔罪詠歌、諸聖頌德、經文歌

(三)——喇叭吹奏の歡迎 (三)——ミゼレレの大合唱 (四)——ミゼレレの樂的
價值 (五)

第二章 南蠻寺彌撒と風琴の傳來に關する史實……………六

最初の教會獻堂式 (七)——南蠻寺と讚歌 (七)——高槻の彌撒祭 (八)——洋學校
の音樂教授 (八)——吉利支丹學校の洋樂演奏 (九)——オルガン傳來の史實
(九)——オルゴールとオルガン (一〇)——彌撒と其の推移 (一一)

第三章 吉利支丹歌の讚仰と受難……………一三

吉利支丹歌の讚仰 (一三)——吉利支丹歌の日本化 (一三)——受難の吉利支丹
歌 (一四)——生月島の歌 (一五)——外海地方の歌 (一五)——浦上地方の歌 (一五)——
長崎地方の歌 (一六)——洋樂の仲介傳播者 (一七)

第四章 南蠻音樂と南蠻樂器……………一七

南蠻人 (一七)——南蠻人の進出 (一八)——長崎出島 (一九)——和蘭商館と甲比丹

の生活(三)——南蠻音樂の移入(三)——チャルメラ(二)——太平鼓、唢呐、笛
呐(三)——唐人笛、唢呐ちやらめら(四)——ラベーカー(四)——レベツカ(五)——
レバープ(六)——レベツクガイゲ(六)

第五章 ラベーカーに關する所説……………云

「糸竹初心集」の説(六)——「淺草舟行」の説(六)——「筵庭雜考」の説(六)——
「環海異聞」ラベーカーの圖(七)——「江戸時代の音樂」のラベーカーと響尾蛇
の説(七)

第六章 ヴァイオリン構造の發達……………云

提琴發達の經路(六)——レベツク(ラベーカー)(六)——トウムルンシャイト
(六)——ラードライヤー(六)——フィデル(六)——ヒヤロツタ(六)——大ガ
イゲ、小ガイゲ(六)——ギオーレ(五)——ギオーレバス(三)——提琴製作法
の創始者(三)——リユウトの沿革(三)

第七章 紅毛人の音樂並樂器……………云

下 鎖國と音楽

紅毛人と其の文化(三三)——元和時代の演奏樂器(三四)——クリスマス音楽(三五)——諏訪神事と紅毛樂(三六)——江戸町の兵隊さんの歌(三七)——紅毛樂器(オルゴール、カラヒール、ホルトピアノ、フロイド、ビヨール、トロムベツト、タンプール、トロンムル、テルヤンゲル、ファイオロンセル、ワルトホー
ン)(三七)

第八章 歐風樂器の移入

鎖國時の各國形勢(四一)——制限的通商(四二)——甲比丹ゾーフ(四三)——樂器輸入(四四)——最初の使用者(四五)——歐風音階(四六)——日本音樂の音程(四六)

第九章 蘭人の江戸參府と歌舞音曲

蘭人甲比丹の江戸參府(四七)——綱吉時代に於ける使節ケンベルの歌舞(四七)——吉宗時代に於ける使節一行の歌舞(四七)

第十章 洋樂の洗禮を受けた長崎音樂…………… 四

長崎人と音樂趣味(四)——長崎音樂の外國化(四九)——天明の和洋合奏(四九)

——諏訪神事踊(四九)——兵隊訓練歌(四九)——振遠隊の軍樂行進曲(四九)

第十一章 唐土音樂の日本進出…………… 五〇

魏九官の明樂(五〇)——鉦鹿民部の船樂(五〇)——唐僧心越の七絃(五〇)——月

琴、銅羅、鸞鈸、胡弓(五〇)——唐人唄、唐笛(五〇)——唐人踊、九連環看々踊(五〇)——

——和漢洋の混淆(五〇)

第十二章 鎖國と邦樂の爛熟…………… 五一

三味線樂の發達(五一)——箏曲の進歩(五一)——俗樂の隆盛(五一)——雅樂研究

者の輩出(五一)——十二平均律の發表(五一)——エリスの測定表(五一)

第二編 歐風音樂時代

上 洋樂の搖籃

第十三章 亞米利加軍樂隊の來訪…………… 五

琉球國王慰安演奏(五)——久里濱上陸の鼓隊(五)——米國々歌奏樂(五)
——軍樂々器圖解(五)——米水兵の舞踏と奏樂(五)——ポーハンタン號上
の軍樂(五)——水兵葬送の音樂(五)

第十四章 居留地外人音樂…………… 五

居留民の生活と音曲(六)——五ヶ國人合同の音樂行進(六)——片笛(六)
——手風琴(六)——長い喇叭(六)——ヴィオロンセロ演奏圖(六)——ヴィオー
レとアツコルジョン(六)——遊行音曲(六)——鈍宅なればの踊(六)——大
太鼓(六)——オルゴル(六)——訓練行列の吹奏樂隊(六)——舞臺音樂の濫
觴(六)——オルゴルに合せて踊る(六)

第十五章 洋風歌曲の胎生……………七

洋人歌曲(七)——「刺土温司諾」「尼牙底耳」「刺典米西」の歌(七)——活惚
は日本曲か(七)——活放連カッパレンの説(七)——「宮さま」の曲(七)——シーボルトの
日本旋律(七)

第十六章 歐風軍樂隊の起原……………七

軍樂の胎生(七)——蘭式鼓隊(七)——蘭式鼓笛譜(七)——西洋の笛喇叭
(七)——軍樂喇叭の濫觴(七)——佛人ギツチと小篠秀一(七)——鎌田眞平
(七)——英人フェントンの軍樂傳習(七)——ベツソン製樂器(七)——天
皇禮拜敬頌の歌(七)——軍樂器編制記錄(七)——直傳の軍樂曲(七)——維
新マーチ(七)——フェントンの「君が代」(七)——薩藩の洋式軍樂採用説(七)

第十七章 陸海軍軍樂隊の創設……………八

兵部省軍樂隊(八)——兵學寮佛國式喇叭隊(八)——初代の隊長西謙藏(八)
——軍樂に佛國式採用(八)——軍樂教師ダクロン(八)——アンジェール、ブ

レナッシュ(八二)——鐵道開通式と樂兵隊(八二)——軍樂隊の獨立と其營所(八二)
——初期軍樂隊條例(八二)——軍樂の市井開放(八二)——服制の制定(八二)——教
導團軍樂隊(八三)——英國式軍樂隊(八三)——官等級制定(八三)——軍樂器編成
(八三)——西南役の活動(八四)——募集規則の濫觴(八五)

第十八章 基督教讚美歌の生誕……………全

宣教師の來朝(八五)——オルガニスト、サルトフ(八六)——函館教會の聖歌(八六)
——邦語讚美歌の合唱(八六)——澤邊琢磨の挿話と創作曲(八七)——ゴープル
譯讚美歌(八七)——譯歌詞の發達(八八)

第十九章 各派讚美歌の翻譯出版……………八

仙臺福音會讚美歌(八九)——ルーミス讚美歌(八九)——ブラウン讚美歌(八九)——
——讚美の歌(八九)——ブラウン編聖書の抄書(八九)——デビス編さんびのう
た(八九)——教のうた(神戸)(八九)——さんびのうた(兵庫)(九七)——プレスビテ
リアン改正讚美歌(九七)——ライト編使徒公會の歌(九七)——デビソン編讚
美歌(九七)——フォス編讚美歌(九八)——ワーレン編眞神讚美の頌(九八)——カー

チス紙さんびのうた(九八)

第二十章 學制頒布後の教育音樂と圖書並歌曲……………九

小學校の創設(九八)——世界國畫の誦詠(九八)——教科書に現はれた洋樂器

(一〇〇)——異人双六に現はれた洋樂器の名稱(一〇一)——彼日氏教授論(一〇一)

——女子と洋樂(一〇二)——音樂改良論(一〇三)——雅樂唱歌の創作(一〇四)——皇

后陛下御下賜の女子師範校歌(一〇四)

第二十一章 雅樂家の歐米樂研究……………一〇五

明治維新の雅樂家(一〇五)——洋樂公開演奏(一〇五)——雅樂家の創作曲(一〇六)

——最初の洋琴練習者(一〇六)——雅樂家の歐米樂研究(一〇六)——「君が代」制

定と初演(一〇六)——樂部伶人の悩み(一〇七)——樂部伶人の待遇改善(一〇七)——

指揮者ドヴラキッチ(一〇七)

第二十二章 「唱歌の説」……………一〇七

筆者田口卯吉(一〇七)——唱歌の必要論(一〇七)——調子の必要(一〇八)——唱歌の

規律(二〇九)——唱歌に對する希望(二一四)——田口卯吉略歴(二二四)

第二十三章 「唱歌といふ名稱に就て」……………二四

唱歌の語源(二四四)——「しゃうか」の名稱に就て(二五)——Liedは唱歌、Gesang
は樂歌(二七)——筆者吉丸一昌略歴(二七)

下 音樂教育

第二十四章 文部省音樂取調掛の創設……………三四

音樂取調掛設置の動機(三〇)——伊澤修二の計畫案(三三)——音樂取調掛
創設(三三)——メーソン教師招聘(三三)——メーソンの閱歴(ポストンに於
けるメーソンの偉業(三三)——伊澤修二履歴(三九)

第二十五章 唱歌教育の濫觴……………三三

唱歌の授業開始(三三)——メーソンの個人指導(三三)——音樂取調掛傳習

募集(二三)——洋樂器の設備(二三)——皇后陛下御前演奏(二三)——學習院生に唱歌傳習(二三)——音樂演奏會(二三)——音樂取調事務大要(二三)——小學唱歌集の出版(三六)——女子傳習生の廢止(三四)——エツケルト教授囑託(三四)——音樂關係書籍(三四)——音樂取調所成績發表(三四)——文部省新樂館(四三)——第一回卒業演奏會(四三)——ソープレット(四三)——君が代四部合唱(四三)——取調掛當初の狀況(四三)——唱歌會の設立(四五)——東京唱歌會(四五)——芝唱歌會(四五)——府立唱歌速成所(四五)——東京音樂練習所(四八)

第二十六章 官立音樂學校の設立……………一四

東京音樂學校(四四)——同校設立の建議書(四四)——伊澤修二校長兼任(四五)——創立當初の商議員(四五)——音樂教師チツトリヒ略歴(四五)——幸田延子留學(四五)——校舍新築成る(四五)——村上範爲馳校長就任(五三)——第四回卒業式(五三)——授業法演習情況(五三)——高師附屬となる(五五)

第二十七章 テルシヤツクの音樂學校參觀記……………一五

御前演奏の榮を擔へるテルシヤツク(五九)——テルシヤツクの音樂意見

(二五)——大日本音樂會の演奏に就て(二五)——聲樂に對する批評(二五)——
器樂に對する批評(二五)——チットリヒと其の高弟(二五)

第二十八章 「君が代」の由來……………一五

歌詞の由來(二六)——歌詞選者の諸説(二五)——天皇奉祝の樂譜改訂上申
書(二六)——「君が代」選定委員(二六)——「君が代」の制定(二六)——永遠の頌歌
「君が代」(二六)——中村祐庸(二六)——林廣守(二六)

第二十九章 陸海軍軍樂隊の動靜……………一五

エツケルト閱歴(二六)——軍樂隊の共進會出演(二六)——アンナレーヤ(二六)
——司令長官旗に軍樂の隨從(二六)——専用喇叭譜制定(二六)——中國行幸
の供奉(二六)——海軍々樂隊の編成(二六)——軍樂條例制定(二六)——グスタ
ーフナルベ(二六)——軍樂練習所東京に新設(二六)——吳、佐世保に擴張新
設(二六)——第一次服制の改正(二六)——ダクロン當時の隊員氏名(二六)——
古矢弘政、工藤貞次留學(二七)——ダクロン解備後の頽廢(二七)——ルルー

の革新(二七二)——第二次服装の改正(二七三)——軍樂編成の推移(二七四)——ルールの告別の辭(二七五)——榴ヶ岡に於ける演奏(二七六)——陸軍々樂に獨逸式加味(二七五)

第三十章 音樂關係書籍の出版と創作歌曲……………一七

スベンサーの教育論(二七六)——諸祭日唱歌譜(二七七)——基督公會の歌讚美歌(二七八)——小學唱歌集(二七九)——唱歌掛圖(二八〇)——明治頌(二八一)——新體詩抄と拔刀隊の歌(二八二)——教育學(二八三)——音樂問答、樂典、音樂指南(二八四)——小學唱歌集三編(二八五)——拔刀隊の曲と其變形(二八六)——日本皇帝に捧ぐ、日本ワルツ(二八七)——譜付基督敎聖歌集(二八八)——新體詞選と「敵は幾萬」の歌(二八九)——音樂沿革史、サクソホーン實科大全書(二九〇)——音樂入門(二九一)——御下賜の御歌「金剛石」(二九二)——樂典初歩、明治唱歌(二九三)——大日本禮式(二九四)——日本民謡(二九五)——音樂要領釋義、音樂教科書、中等唱歌集(二九六)——唱歌萃錦、憲法發布頌(二九七)——新撰讚美歌(二九八)——帝國唱歌(二九九)——帝國議會開院の頌(三〇〇)——音樂雜誌と發刊主旨(三〇一)——國民唱歌(三〇二)

—音樂理論、風琴教授詳説、音樂利害(二〇五)——凱旋歌(二〇五)——脚本樂譜條
例(二〇六)

第三十一章 洋樂演奏會の發達……………二〇七

音樂取調掛演奏會(二〇〇)——第一回卒業演奏習會(二〇〇)——モーレル提琴獨
奏會(二二〇)——音樂取調所卒業演奏會(二二〇)——台覧の活人畫音樂會(二二〇)
——大日本音樂會(二二〇)——東京音樂學校演奏會(二二〇)——憲法發布祝賀夜
會(二二〇)——メーセルウエン歌劇音樂會(二二〇)——卒業演奏會(二二〇)——立太子
式祝賀音樂會(二二〇)——紀元節祝賀音樂會(二二〇)——テルシヤック演奏會
(二二二)——新築開校式演奏(二二三)——博覽會奏樂堂音樂(二二三)——パンジョー
獨奏會(二三二)——兩陛下御前演奏(二三二)——議會開院音樂會(二三三)——卒業演
奏會(二三六)——第十五回大日本音樂會(二三七)——後樂園と演奏場(二二九)——一
橋高商音樂會(二三〇)——樂友會演奏會(二三二)——卒業演奏會(二三二—二三三)——塙
國軍艦軍樂演奏(二三四)

第三十二章 舞踏會の勃興と私設音樂團體の出現……三三

- 外相の天長節祝賀夜會(三三〇)——鹿鳴館のダンス(三三六)——舞踏家ヤンソン中心の會合(三三三)——東京舞踏會(三三三)——東京俱樂部發企主意(三三六)——大日本音樂會の創立(三三七)——同會規約(三三七)——伊藤公主催假裝舞踏會(三三九)——歐化主義の非難(三三九)——音樂會社の設立と經營難(三四〇)——株式會社組織(三四一)——ホテルダンス音樂の爭奪(三四一)——リゼット一派の神戸進出(三四二)——内外裝飾會社(三四三)

第三十三章 祝祭日儀式唱歌の制定……三四三

- 唱歌の全國的普及(三四三)——儀式唱歌に關する通牒文(三四四)——儀式唱歌制定委員(三四四)——儀式唱歌作者(三四五)——祝日大祭日歌曲公布(三四六)——「君が代」樂譜研究(三四八)——「君が代」の標準レコード(三四〇)

第三十四章 洋風樂器と其の製作……三五〇

洋風樂器の種類(二五)——著語器(二五)——紙腔琴の製作(二五)——當時の雜誌に現はれた樂器廣告(二五)——西洋樂器の製作(二五)——最初の洋樂器製作者(二六)——松永定次郎製作品(二六)——才田光則製作品(二六)——西川オルガンとピアノ(二六)——山葉オルガン並ピアノ(二六)——鈴木ウアイオリン(二六)——ハリモニカ(二六)

第三十五章 ニコライ堂の聖樂合唱……………二五

教會堂附屬音樂學校(二五)——聖教神學校合唱隊(二六)——兩簿通過に「君が代」四部合唱(二六)——ケーベル博士と合唱隊(二六)——ニコライ堂鐘(二六)

第三編 日本的洋樂時代

上 軍歌調流行

第三十六章 日清日露兩役を機楔とせる軍歌の發展…二六

敵愾心に燃えた軍歌の發生(二六六)——士氣作興の軍歌(二七七)——征清軍歌の續出(二七七)——軍歌の英譯出版(二七七)——伊國皇后の軍歌御懇望(二七四)——明治二十八年出版の軍歌集(二七五)——戦後の軍歌流行(二七五)——明治三十七年刊行の軍歌集(二七五)——明治三十八年刊行軍歌集(二七七)——征露軍歌の樂的價值(二七八)

第三十七章 明治大帝の軍歌振興に關する大御心……二六九

一 視同仁の大御心(二七〇)——軍歌御添削(二六〇)——「成歡の役」「平壤の大捷」「黄海の大捷」(二六〇)——側近者に對する軍歌創作の御獎勵(二六〇)——海軍々歌(二六四)——陸軍々歌(二六六)

第三十八章 「哀の極」の創作と軍樂の擴充……二六八

大葬々送樂に軍樂の採用(二六八)——「哀の極」の勅令發布(二六八)——作者エツケルトと工藤貞次(二六九)——儀仗軍樂隊(二六九)——演奏規程の制定(二六九)——「哀の極」樂譜(二七〇)

第三十九章 戰時と平時の軍樂隊の動靜……………(二九二)

軍樂隊の出征(二九二)——戰地動靜(二九三)——「雪の進軍」の創作(二九三)——大本營付軍樂隊の活動(二九五)——旗艦松島乗組軍樂隊の戰死者(二九五)——臺灣征討に従屬(二九五)——喇叭鼓隊編成(二九六)——軍樂學校長渡獨(二九六)——軍樂教科書編纂(二九六)——奏樂請求手續(二九六)——吉本光藏の獨逸留學(二九七)——北清事變に従軍(二九八)——四元義豐(二九八)——舞鶴軍樂隊の新設(二九八)——英皇帝戴冠式參列(二九八)——永井建子渡歐(二九九)——日露戰役に従軍(二九九)——戰死者(三〇〇)——軍樂隊の擴張(三〇一)——凱旋大觀兵式(三〇一)——凱旋大觀艦式(三〇一)

第四十章 音樂圖書と作曲者……………(三〇一)

當代の作曲者概観(三〇一)——唱歌檢定制度成る(三〇三)——女學校唱歌教授要目(三〇三)——幼稚園唱歌集(三〇三)——小學唱歌(三〇四)——圖解ヴァイオリン指南(三〇五)——新編音樂理論(三〇六)——中等教育音樂教科書、音樂講義(三〇六)——佛教音樂論、音樂全書洋樂の栞、普通音樂教科書(三〇七)——俗樂旋律考

(三六)——エツケルト旅順陥落記念行進曲(三八)——「オーボエ教科書」(三九)
 ——「同聲會雜誌創刊」(三九)——「新撰樂曲大要」和聲學初歩「風琴洋琴行
 進曲」(三〇)——「新式唱歌」(三一)——「奉悼歌と哀の極」(三二)——「オルガン
 教則本」ヴァイオリン初歩(三四)——チットトリヒ「オルガンピアノ樂譜」
 (三五)——「祝日大祭日唱歌重音譜」(三五)——「鐵道唱歌」(三六)——「樂典教科
 書」方舞(三〇)——「新式樂典數科書」(三二)——「音樂遊戲界創刊」(三三)——
 「マンドリン教科書」進行曲萃「須磨の曲」(三三)——「歐米各國舞蹈大觀」
 「樂典大要」(三四)——「樂典教科書」音樂講義錄(三五)——「音樂新報創刊」
 (三七)——「ドヴラキツチ戰勝行進曲」(三七)——「オルガン・ピアノ練習書」
 「西洋音樂史」(三七)——「西洋音樂案內」常闇(三九)——附、外國音樂書目
 錄(三九)

第四十一章 東京音樂學校

高師附屬となる(三三)——四不思議の新聞評(三三)——小學唱歌講習科新
 設(三三)——チットトリヒの歸國(三四)——バットン、ブロックサム(三四)——辛

田延子の歸朝(三三四)——東宮殿下の御前演奏(三三五)——邦人創作ソナタの發表(三三六)——神田分教場設置(三三七)——ゲーベル略歴(三三八)——定期演奏會の嚆矢(三三九)——東京音樂學校の獨立(三四〇)——皇后陛下の行啓(三四一)——ノエル・ペリー(三四二)——アンナ・ラール(三四三)——規則改正(三四四)——瀧廉太郎(三四五)——皇后陛下の御前演奏(三四六)——ハイドリヒ就任(三四七)——島崎赤太郎獨逸留學(三四八)——渡邊龍聖、大島義修(三四九)——音樂得業士の廢止(三五十)——高嶺秀夫校長兼任(三五一)——當時の試驗問題(三五二)——湯原元一校長就任(三五三)

第四十二章 基督教各派讚美歌の統一……………三五七

基督教不振時代(三五七)——福音大會の讚美歌統一案(三五八)——宣教師大會の編纂決議(三五九)——讚美歌審議會(三六〇)——マクネヤ中心の「第一編」完成(三六一)——共通讚美歌編輯委員(三六二)——讚美歌の音樂的價值(三六三)

第四十三章 職業音樂隊と研究的音樂團……………三六〇

通俗音樂隊の普及(三六〇)——美裝の音樂隊(三六一)——商宣傳の音樂隊の起

り(三六)——所謂樂隊の演奏曲目(三五)——鼓隊獎勵と不振(三五)——研究的
音樂團體(三五)——各都市の音樂團體と其の活躍(三五—三五)——各府縣音
樂團體規則(三五—三五)

第四十四章 日比谷音樂堂の建設と公園奏樂……………三五

近代式公園の計劃(三七)——樂堂建設の要望(三七)——位置と構造と建築
費(三七)——開堂式と軍樂演奏(三七)——第二回公園奏樂(三七)——第三回公
園奏樂(三七)——公園奏樂の中止(三七)——樂堂聽衆席の改造(三七)——凱旋
大音樂會(三七)——公園奏樂の曲目(三七—三七)

第四十五章 中央に於ける音樂演奏會の趨勢……………三六

愛國的音樂會の傾向(三六)——音樂會に對する取締(三六)——和洋樂の對
峙(三六)——明治音樂會の設立(三六)——大日本音樂會の復活(三六)——ユン
ケルと交響曲(三六—三六)——ドヴラキツチの指揮(三六)——邦人の演奏指
揮者と演奏者(三六)——外人演奏者(三六)——自明治二十七年至明治三十

九年中央樂壇に於ける演奏會並曲目(三二—四七)

第四十六章 地方に於ける音樂會の普及……………四六

軍歌調流行と音樂の普及(四六)——音樂雜誌の普及率(四七)——洋樂の普及及概観(四七)——當代に於ける各府縣洋樂演奏會並曲目(四六—五〇)

下 洋樂の進展

第四十七章 洋樂の進展期に於ける主なる研究と

樂論……………五〇

理論的研究の先驅者(五〇)——美學的研究者(五〇)——音樂理論の民衆化(五一)——明治四十一年、二年の樂論(五一)——音樂家の藝人扱ひに對する概(五一)——歌劇上演禁止に對する一部の不滿(五一)——「音樂」に現はれたる研究と論說(五二)——同曲譜(五三—五七)——明治四十四年以降新聞雜誌に現はれたる研究と樂論(五元—五二)

第四十八章 歌劇の日本進出と日本歌劇の發達……………五二

オペラの日本進出(五二)——最初の日本歌劇「愛宕の夜嵐」(五三)——オペラ
研究會の創設(五三)——オルフォイス上演に就て(五四)——歌舞伎座の「露
營の夢」(五五)——文藝協會の「常闇」(五六)——樂苑會(五六)——バンドマン歌
劇の非難(五六)——ドラマチック俱樂部(五七)——帝劇の洋樂編成(五八)——
歌劇の輿論(五八)——有樂座の「青雉」(五八)——バンドマン・コミックオペラ
(五九)——演藝同志會の「エルガ」(五九)——帝國歌劇の初演(六〇)——胡蝶の
舞、釋迦、能野、の批評(六〇)——歌遊び「浮れ達磨」(六一)——歌劇に對する論
評(六一)——近代劇協會(六二)——國民歌劇會(六三)——寶塚少女歌劇(六四)——
歌劇専門のローヤル館(六五)——淺草公園觀音劇場(六六)——バンヴァー
ド喜歌劇團(六七)——山田耕作歌劇公演會(六八)

第四十九章 撥絃音樂の發展……………五三

フレクトラム樂器の移入(六七)——最初のマンドリンソサエテイー(六七)
——マンドリンの紹介者(六七)——マンドリン教科書(七三)——上野美術學

校のマンドリンクラブ(五七四)——同志社大學のマンドリンクラブ(五七四)——
慶應マンドリンクラブ(五七四)——サルコリーの指揮(五七四)——シンフォニ
カ・オルケストラ・タケイ(五七四)

第五十章 私立音樂學校並音樂團體の興隆……………五〇

帝都に於ける音樂團體(五七五)——女子音樂學校(五七五)——東洋音樂學校
(五七六)——東京音樂院(五七六)——女子音樂院(五七六)——東京フィルハーモニー
(五七六)——明治音樂會の活躍(五七六)——三越オーケストラバンド(五七七)——松
坂屋管絃樂團(五七七)——初等教育唱歌研究會(五七七)——如月社(五七七)——ハイ
ドンカルテット(五七七)——寶塚歌劇學校(五七七)——大阪音樂學校(五七七)——大
塚音樂會(五七七)——大連ヤマトホテル管絃樂團(五七七)——内外混聲合唱團
(五七八)——日本家庭音樂會(五七八)

第五十一章 各都市に於ける市歌制定の機運……………五一

市歌の意義(五八九)——京都市歌(五八九)——大阪市歌(五九〇)——横濱市歌(五九二)——

——名古屋市歌(五五)——第一次東京市歌の選定難(五六)——第二次募集と選者(五七)——東京市民歌(五八)——神戸市歌(五九)

第五十一章 我が國軍樂隊の飛躍……………五〇

軍樂隊の海外發展(五〇)——同隊の絃樂研究(五一)——日英博に軍樂隊の活躍(五一)——英國皇帝戴冠式參列(五二)——戴冠式後の消息(五三)——官等改正と異動(五三)——工藤貞次退役(五四)——東京音樂學校委托生(五五)——旅順軍樂隊の廢止(五五)——管絃樂公開(五五)——皇后陛下御前演奏(五六)——三師團軍樂隊増設(五五)——御大葬に參列(五六)——永井建子退役と告別演奏(六〇)——御大禮に京都供奉(六一)——瀬戸口藤吉告別演奏(六一)

第五十三章 譯歌謠曲並音樂圖書出版界の進展……………六四

獨逸歌謠曲の流行(六四)——譯歌せし人々(六五)——近藤朔風と其の作品(六五)——創作界概觀(六六)——歐洲大戰時の我が流行歌(六六)——排日歌の藝術觀(六七)——明治四十年以降刊行音樂關係圖書目錄(六六—六七)

第五十四章 此の時代に於ける東京音樂學校…………… 六四

圓滿主義の教育(六三)——フレック、ウエルクマイステル(六三)——各科の卒業式合併(六三)——當時の卒業演奏(六三)——オルフォイスの上演中止(六三)——規則改正の要點(六三)——音樂學校規則(六三)——ロイテル(六三)——ベツツォールド來歴(六三)——「音樂」の創刊(六三)——校舎の増築(六三)——小學唱歌編纂資料(六三)——第一回レコードコンサート(六三)——湯原校長歐米出張(六三)——ユンケルの功績(六三)——クローン、シヨルツ就任演奏(六三)——尋常小學唱歌の完成(六三)——皇后陛下御前演奏(六三)——兩陛下の御前演奏者(六三)——茨木清次郎校長就任(六三)

第五十五章 諒闇と音樂…………… 六七

歌舞音曲停止(六七)——音樂師匠の苦衷(六七)——音樂教師に對する非難(六七)——音樂の權威と力(六七)——音樂教師の態度(六七)——奉悼歌の由來(六七)——明治大帝奉悼歌(六七)——御大葬奉送曲「哀の極」(六七)

第五十六章 御大典に於ける奉祝音樂…………… 六九

奉祝歌詞 (六七九) — 審査選評 (六七九) — 歌曲當選者 (六八〇) — 樂譜審査委員

(六八一) — 樂譜の一部修正 (六八三) — 大饗夜宴の管絃樂 (六八三) — 曲目の選定

に就て (六八五) — ドウラキツチ作大典奉慶行進曲 (六八五)

第五十七章 中學校長會議に於ける音樂科無用論 …… 六五

全國中學校長會議 (六八六) — 文部省の諮問案に對する唱歌無用の答申

(六八七) — 唱歌科を缺く中學校數 (六八七) — 「中學校長諸君に問ふ」 (六八七) —

「誤られたる唱歌科の價值」 (六八七) — 「中學校に於ける音樂教師論」 (六八九)

第五十八章 洋樂演奏會の變遷…………… 六九

音樂會の開催難 (六九〇) — 警視廳の音樂會に對する壓迫干渉 (六九〇) — 新

進音樂家の地方進出 (六九〇) — 東京音樂學校管絃樂團の復活 (六九二) — 外

人音樂家の樂壇登場 (六九二) — 日比谷公園奏樂の活躍 (六九二) — 軍樂隊に

管絃樂新設 (六九二) — 全國的奉祝音樂會 (六九二) — 皇后陛下音樂學校行

啓 (六九二) — 此の時代に於ける音樂會並曲目 (七〇一) — 八四八

挿圖目次

第一圖	安土の吉利支丹學校 豊後の洋學校(三百數十年前の學校圖)……	九
第二圖	長崎港並長崎出島の圖(三百年前の和蘭人居留地出島)……	二〇
第三圖	平戸港の圖(三百年前の英人居留地平戸港)……	三
第四圖	レベツカ(ヴァイオリン前身樂器)……	二五
第五圖	ジャバ土人樂器レバーク(ヴァイオリン前身樂器)……	二六
第六圖	レベツクガイゲ(ヴァイオリン前身樂器ラベーク)……	二七
第七圖	バライカとケレブコ(百數十年前邦人の描いた洋樂器圖)……	二八
第八圖	大ガイゲ(ヴァイオリン前身樂器)……	二九
第九圖	小ガイゲ(ヴァイオリン前身樂器)……	三〇
第一〇圖	ギオーレ・バス(ヴァイオリン前身樂器)……	三一
第一一圖	各種絃樂器の圖…… (ヴァイオラ、コントラバス、バンジヨー、ヴァイオリン、ハーブ、ヴィ オラダモール、ギター、リュート、マンドリン、ヴァイオリンセロ)	三二
第一二圖	出島繪卷(三百餘年前に於ける室内樂演奏の圖)……	三五
第一三圖	出島蘭館クリスマスMASの圖(百餘年前に於ける管絃合奏の圖)……	三六

第一四圖	太鼓とラツパの圖(浦賀入港當時の軍樂樂器圖).....	五
第一五圖	米艦水兵の舞踏と音樂の圖(絃樂器、打樂器演奏圖).....	五
第一六圖	日本應接使幕吏ポーハンタン號上の饗應と奏樂の圖.....	五
第一七圖	ベルリ艦中に幕吏を饗する圖(吹奏樂演奏の圖).....	五
第一八圖	米水兵送葬行列の圖(送葬行進曲演奏の圖).....	五
第一九圖	橫濱鈍宅の圖(數十名の音樂行進の圖).....	六
第二〇圖	外國人どんたく遊覧行歩の圖(音樂行進の圖).....	六—三
第二一圖	橫濱異人屋敷の圖(ヴィオロンセロ獨奏の圖).....	六
第二二圖	異人商館屋敷の圖(六絃の提琴演奏の圖).....	六
第二三圖	異人遊行音曲の圖(屋外音樂行進の圖).....	六
第二四圖	異人盆踊の圖(打樂器のリズムに踊る一團).....	六
第二五圖	大太鼓の圖(大太鼓演奏の圖).....	六
第二六圖	亞墨利加人訓練行列の體(米國軍樂隊奏樂行進の圖).....	六—九
第二七圖	舞臺音曲演奏の圖(吹奏樂演奏の圖).....	六
第二八圖	小學讀本卷一の挿畫(スクエールピアノ彈奏の圖).....	一〇
第二九圖	音樂取調掛建物寫眞(東京音樂學校の前身).....	一三
第三〇圖	伊澤初代校長寫眞(唱歌教育の創設者).....	一三

第三一圖	音樂取調所の内部奏樂室寫眞(ピアノ並管絃樂器圖).....	一三
第三二圖	メーソン歸國記念寫眞(メーソン教師と其の高弟).....	一四
第三三圖	明治二十一年音樂學校卒業生寫眞(歐化主義全盛期の姿).....	一五
第三四圖	ダクロン指導の陸軍々樂隊寫眞(明治十四年於橫濱山手公園).....	一七
第三五圖	紙控琴の圖.....	一五
第三六圖	手風琴フラヂオレットの圖.....	一四
第三七圖	瀧廉太郎寫眞と其遺稿(荒磯樂譜).....	三九
第三八圖	浮れ達摩(和樂器をも取入れた小歌劇).....	六一
第三九圖	ユンケル指導の海軍々樂隊.....	五七
第四〇圖	アウグスト・ユンケル(我が國交響樂の恩人).....	六九

樂 譜 目 次

一、維新マーチ(フントン直傳の英式行進曲).....	六
二、フントン作曲 天皇禮式歌(最初の君が代).....	六
三、越天樂(平調律旋).....	一〇一
四、忠臣(越天樂を唱歌に改作のもの).....	一〇四

五、邦人作の抜刀隊の主旋律	二九二
六、ルルー作抜刀隊の歌	二九三
七、凱旋歌（永井建子作曲）	二九四
八、祝日大祭日歌詞並樂譜（官報第三〇三七號附錄）	二九七
九、哀の極（かなしみのきはみ）	二九〇—二九一
一〇、地理教育鐵道唱歌	三三七
一一、荒磯（龍廉太郎遺稿）	三三九
一二、横濱市歌	三五三
一三、名古屋市歌	三五九
一四、神戸市歌	三六〇

邦本
洋樂變遷史
目次
終

緒論

音樂史は音樂研究の一部門を構成してゐるもので、過去より現在に至るあらゆる方面の變遷に關する記録である。而して音樂史研究の効果は明確には計り難いものであるが、國民の美的情緒發達の徑路を明にし、且つ各時代音樂の特質、作品の相對的價值等を知ることによつて研究の指針を得せしめ、延いては音樂の將來の進歩をトし、併せて其の發展に資する等其の効果の著大なるものである。又一般音樂を完全に理解せんが爲にも、或る程度の音樂の史的智識が必要となつて來るのである。蓋し、國民精神の反映は各時代の音樂、即ち音樂作品並樂器に現はれて居るものなるを以て、健全清新なる作品は稠密精細なる研究に俟つべきである。

由來音樂は其の觀察の立脚點の相違に依つて種々の分類を爲す事が出来る。時間的に觀察すれば古代音樂、中世音樂、近代音樂等の別を生じ、又之を空間的觀察の視角よりすれば邦樂、洋樂、或は支那樂、印度樂、埃及樂、アッシリア樂、波斯樂等の各國々の分類と爲す事が出来る。其他音樂の形式、内容等の見地から音樂に對して種々の分類が與へられて居る事は一般に知悉されてゐる事實である。

而して「音樂史は音樂の起源、沿革、發達、盛衰等の變遷に關する一切の現實的、客觀的事象の記録である」といふ音樂史の定義よりすれば、音樂史其のものも亦、音樂の本質に關する分類に従つて、當然其の研究對象の相違に準じて種々に分類し得るものである。曰く古代音樂史、曰く中世音樂史、曰く近世音樂史、更に曰く、邦樂史、曰く洋樂史等々である。

然らば本書の研究対象並其の範圍は何であるか？ 言ふ迄もなく標題の示す如く、甫めて我が國に洋樂が移入されてから今日に至る迄の歴史的記述を主眼とするものである。則ち歴史的認識の視角から史實・年代、人物、作品、因果關係等を根幹として、特に日本に於て育成して來た西洋音樂の全般的な領域を、鳥瞰的に展望したものである。是が本書の研究対象並範圍に對する一つの限定であるが、同時に從來邦樂のみに關する音樂史は、相當多數刊行されてゐるに不拘、我が國に於ける洋樂のみを研究對唱とする、音樂史刊行の不備缺陷を補ひ充すといふ使命の一端を果すものと信するのである。

本書は便宜上左の四期に分つて説明叙述する事とした。云ふ迄も無く各時代の區劃上の年數の多寡廣狹は必ずしも、しかく嚴密ではあり得ない事を豫め斷つて置く。

第一期 南蠻紅毛樂時代

第二期 歐風音樂時代

第三期 日本的洋樂時代

第四期 世界的音樂時代

今之に簡單なる説明を加へて置く事とする。

南蠻紅毛樂時代 人皇第百五代後奈良天皇の天文十八年、サン・フラソ・サヴィエーの渡來より、人皇第百二十一代孝明天皇の嘉永五年に至る三百二十二年間を包括する。足利の末葉、雅樂が衰滅して武家音樂（能樂、謡曲）に移つた時に南蠻音樂即吉利支丹音樂が渡來した。當時一部の國民は邦樂を捨て唐土音樂から離れて直に南蠻紅毛樂へと走つた。信長の南蠻寺建立當時が吉利支丹音樂の全盛時代であつたが、其の後徳川幕府が鎖國主義を採るに至つて南

響紅毛樂は滅亡の機に瀕し、繼かに長崎音樂に其の名残りを止めるに過ぎなかつた。併し國內音樂が外來音樂の影響を受けて、一種獨特な日本國民樂の爛熟を現出するに至つた時代である。

歐風音樂時代 人皇第二百一十代孝明天皇の嘉永六年亞米利加船渡來後より、明治天皇の第二十五年に至る四十年間が此の時代に屬する。安政の開港は前代の保守的文物の破壊革新であつて、それは又必然的に我が國の音樂に著しい影響を與へた。帝室の雅樂は昔時の殷盛を止めず、能は武家制度の廢止と共に其の聲を潛め、三絃樂も亦其の餘波を受けて不振の境に沈淪する時に際して、獨り歐風音樂のみは、軍樂に、帝室音樂に、教會音樂にと其の赫々たる搖籃時代を作つた。

此の時代の前期作品に西洋行軍鼓譜、和蘭式太鼓教練譜、英國式鼓笛譜、基督教各派讚美歌集、越天樂風の歌謠等があり、後期に於ける代表作品には國歌「君が代」を始め祝祭日儀式唱歌集、讚美歌集、小學唱歌集、明治時代の流行歌の根源ともいふべき抜刀隊の歌（分列式行進曲）の主題等がある。鹿鳴館での音樂演奏會並に舞踏會が内外人に依つて行はれ又、大日本音樂會の如き或は唱歌會の如き私設團體の設立されたのも此の時代である。實に歐化主義萬能時代とも謂ひ得るのである。

日本的洋樂時代 明治二十六年より大正六年に至る二十五年間を指す。之を更に別け前期を軍歌調流行時代（明治二十六年……明治四十年）後期を洋樂の進展時代（明治四十一年……大正六年）とする。

此の時代には、歐風音樂時代即歐化主義萬能時代の反動として、保守的反歐化政策の國論が喚起された。それが日清日露の兩役によつて一層に強化され、日本軍歌の發展を馴致し、我が國獨特のブラスバンドの全國的の設立を見るに至つた。又雅樂のみの専有に屬した帝室音樂の御大葬奉送曲並に、御大典奉祝音樂に洋樂の進出を見るに至つたの

も此の時代である。後期は陸海軍々樂隊の飛躍著しく、日比谷公園音樂の基礎を確實に作つた。學校派は内面的の活躍進展を劃し、私立音樂學校並に管絃樂團體、音樂研究團體の併立を見るに至つた。蓋し世界的音樂の準備時代とも謂ふべき時代である。

世界的音樂時代 大正七年より今上陛下の大御代に及ぶ。前期を泰西音樂鑑賞時代（大正七年……大正十五年）後期を交響樂隆盛時代（大正十五年……昭和）とに別ける事が出来る。歐洲大動亂が齎した泰西音樂家の我が樂壇への登場、蓄音器ラヂオ等の科學發明品の發達に伴ふ音樂の民衆化、次いで童謡の勃興、民謡の新運動、オペラの進出等、作品にも演奏にも將た又一般民衆の鑑賞能力にも一段の向上を見るに至つた時代である。後期交響樂の黃金時代は日露交驩交響曲演奏會に於て其のレベルを上げ、其の後ジャズの紹介移入に依つて刺激され、御大典奉祝音樂に依つて發展し、更にはベートーヴェン百年祭、東京音樂學校五十年記念祭、或は又藝術祭に音樂祭にと遂に絢爛たる今日の交響樂黃金時代を成すに至つたのである。

附 最後の世界的音樂時代の項目は編纂の都合並材料の取扱上別に一本を編み續刊として不日刊行の筈であるから、豫め讀者諸賢の御諒恕を請ふ次第である。

第一編 南蠻紅毛樂時代

上 舶來音樂

人皇第百五代後奈良天皇の天文十八年サン・フランシスコ・ザヴィエーリ渡來より人皇第百二十一代孝明天皇の嘉永五年に至る三百二十二年間を包括する。

第一章 吉利支丹音樂の渡來

佛人ジアン・クラセ著「日本正教史」の中に斯ういふ事が記載されてある。

『我が國のリユット・ウイヨロン・トロムベツト及び都べて音樂は日本人の耳に樂とせず、日本人の音樂は亦我が國人にありては唯耳に喧噪を感ずるのみ』

此書は享保十九年（一七一五年）巴里に於て出版されたものであるが、天文十八年六月二十四日（一五四九年八月一五）サン・フランソ・ザヴィエーが鹿兒島に渡來後、寶永元年（一六八九年）までの記事を、當事我が國在留の宣教師達（伴天連、伊留滿）の通信文書を基準として、同地に於て纏めて編纂されたものである。

之に依つて見れば寶永年間以前に於て既に撥絃樂器のリユットや絃樂器のヴィヨロンや管樂器のトロムベツト等が我が國の何處かで演奏されて居た事は、動かすべからざる事實と推測するに十分である。

ザヴィエーが鹿兒島を發つて平戸に赴く途中、六里にして、或る城下を通つた。城下の主はイカン殿と呼稱され薩摩の國の屬將で、城は岩石の山なり：（中略）：新に教を奉じた者の中の正直な者を小教會の靈牧として洗禮の條規を書して授け、且註釋信經、耶蘇略傳、十誡、主經、悔罪詠歌、諸聖頌德、其他の經文並教會瞻禮日表等を與へ日曜日瞻禮日には、奉教人外教人を館内の一望に集めて經文と耶蘇傳記を各々一回づゝ朗讀して毎日諸聖頌德其他の經文を唱へ、金曜日悔罪詠歌を唱ふ可しと定めた。（日本正教史）

或る城下とは市來のことであるが、イカン殿とは何人であるか詳でない。しかし伊賀守か、猪鹿倉のいつれかであ

らう。

ザヴィエーが此の地を去る時に自家の祈禱文及讚美歌集を遺して行かれたといふ事實があるが、それから考へて見ても十誡、主經、悔罪詠歌、諸聖頌徳、經文等が歌はれたといふことは考へ得られぬことではないのである。

經文歌は器樂の伴奏の無い寺院音樂の一つで散文唱歌の如きものである。數部を以て構成されてゐるが長篇のものではない。ザヴィエーの註釋信經とは十二宗徒の經文でアポスールクリード即ち使徒信條の事である。十誡は羅馬字で書いたものをその儘歌つたもので、今日の讚美歌集にも十誡があるから其の曲想はどんなものであつたか位は想像される。其他の主經、悔罪詠歌、諸聖頌徳等も現今のものと同名稱こそ異つて居るが、其の幾分かを想像し得るものがある。

宣教師との接觸期間の短いにも不拘、之等の讚美歌を歌つたといふことに疑問の點が無いでもないが、之等の歌曲は極く單純なものが多く、殆ど旋律のない様な曲で例へば一小節に全音符が一つでそれに對して二天にまします父よ」の語が附いて居るといふ様な極めて簡單な捧讀のものであつたのである。音程としても一度か二度位のものが多く、五音階で基礎づけられて居た國民であつたにせよ、何事にも眞摯な吉利支丹信徒達には、與へられた全部に至らなくとも歌つたものであることを信ぜずに居られない。

ザヴィエーは此城を辭去して一路平戸に向ひ、海陸に横はる幾多の艱難勞苦を嘗め、漸にして目的地の平戸に到着した。同地在住の葡萄牙人は、ザヴィエーの來たるを聞くや、諸々の人達ひとたちに、人爲高位有徳の聖師であることを知らさんが爲に、禮を盡して之を待ちうけ、同師の入港と同時に祝砲を放ち軍旗粧飾を掲げ、舷側には幔幕を繞らし喇叭を吹奏して賀意を表した。又其船に近づく時船の人盡く歡喜の聲を發す云々。(日本西教史)

南蠻人上陸の圖に多くの人達が喇叭を吹いてゐるのを再三見受けた。舊國定教科書の挿畫にも出てゐるが、其のコンストラクシヨシを仔細に點檢すると、ザヴィエーの平戸上陸の事をでも描いたのではあるまいかと思はれる。喇叭とはいふものゝ現在のトラムベツトやコルネットの様な卷いたものではなく、古い時代のホルンやチャンメーラの形態を備えた所謂長い喇叭のことである。併し露西亞風の一米も二米もあるものではない。思ふに喇叭吹奏の歡迎が如何に單純幼稚なものであつたにせよ、西洋音樂としての雄大さを想像するに餘り有る。

中略……冬より春に至るまで國主の在らざる間危難の中に日を過せり。されど之が爲にカレーム祭中、日々經堂に於て説教を廢することなく、金曜日の午後には諸師の中一人救主苦難の事を一回づゝ講じ、其次に諸師及び日本人百名共に賣身杖を執て、ミゼレレの唱歌を爲す間、賣身の業を行ふ。時に異教人數名頻りに請ふて此席に列し、賣身の業を見て大に感じ、洗禮を受け、共に此賣身の業を行へり。尤も内外の人を感ぜしめしは、諸師非常の儀容を以て齊整たる禮式を修めし聖週日の大祭なり。(日本正教史)

カレーム祭とはどんな祭か、その正體を突止める何物をも持つて居ない。羅典語のカロ・ヴァレ *Caro Vale* 若くはカルナヴァレ *Carni Vale* 祭の謂であるとすればカルナは肉、ヴァレは告別の意で肉を食べない週間のことであり、悲の節の大齋、小齋、期前の遊樂期を指す語で通常四句、齊前三週間より既にカルナヴァルと稱して居る。

次に珍らしい事は「ミゼレレの唱歌」のことである。百餘名の内外人が賣身杖執つての合唱であるが「ミゼレレ」と云へば直ぐ聯想されるのはグレゴリオ・アレグリの作曲の有名な *The psalm Misereare mei Deus* である。十七世紀の作で今も尙羅馬のシステイン寺院で歌はれてゐるといふことである。ザヴィエーの來朝當時に於てはアレグリの曲は未だに生れては居ないが、ミゼレレ唱歌は既に歌はれ、殊に十六世紀に於ては、教會音樂を神逸莊嚴ならしむる爲に

多人數で唱誦し、之に眞鍮喇叭の吹奏を以て伴奏した。而して内容は飽くまで宗教的であり、高踏的であるが、他方にあつては漸次世俗的風韻を加味するに至つたのである。

之等の事はよく文献に依つて克明に吾々の認知し得る所で、天文年間に於ける「ミゼレレの大合唱」の如何に嚴肅なものであつたかを想像するに餘りある。

ミゼレレは懺悔の歌、哀願の歌で詩篇第五十一編の其冒頭が羅句語で *Misere mei Deus* 「あゝ神よ願くば我を憐みたまへ」となつてゐる處から、ミゼレレの歌を唱へる様になつたものである。

バルギット *Vulgate* の本の中では聖書の五十篇にあるサム *Psalm*……舊約聖書……の詩篇の五十一篇、自分の罪とダビテの子孫とバセバ等によつて作られたと言はれてゐるが、しかしこれは後に至つて作られたものであらう。教會では此のミゼレレを懺悔の表出の爲に聲をそろへて唱へるやうになつた。此の詩篇は神の恐異に對する奉仕の部分をかたちどつて居る、そして聖灰水曜日に讀まれる第十節、第十一節、第十五節は朝の祈禱、夕の讚歌とに於て短歌として皆で合唱されるのである。

有名なシステインチャペルに於けるミゼレレの合唱に就て米國音樂博士ミス・ハンセンが著者のために次の事を書いてくれた。

羅馬のシステイン寺院で歌はれた聖詩歌 *Miserere* *The Psalm Miserere Mei Deus* は最も賞讃を博し、今までに記されたいづれの音樂の演奏よりも優り、永い名聲を保つたものである。

ミゼレレは嚴肅なる禮拜の一部を爲したものであり、豊富にしてシンプルな調和を持つた歌であり、且つ又優秀な

る音楽家によつて歌はれて居るのである。これは一年中でたゞ三日間受難週の水曜と木曜日、そして受難日の午後暗く歌はれるテネブレー Tenete と呼ばれる禮拜の部分をして居るのである。其は大變に長い禮拜でミゼレレ詩歌其れ自身十六の詩歌と、舊約聖書からの讚詠一節から成り、其の外に九つの聖句と九つの對唱最後に頌榮を唱ふと云ふ順序である。

此の禮拜の初め會堂の聖壇は六本の高い蠟燭を立て、照し、そして他の三角型臺の蠟燭は歌の一節毎に一つずつ消され、聖壇の六本の蠟燭は頌榮を歌ふ間に一つずつ消され、たゞ一本の燈だけが三角臺の頂上に残されるのである。之は消されずに聖壇の後の全くかくされた所に置きかへられる。此の時には會堂は眞暗となり、たゞ見分けのつくのは聖壇の前の跪坐にひざまつきつゝ禮拜し居る大僧正の緋の衣だけとなるのである。其の間只一人のソプラノだけが答唱聖詩をいともいみじき表現で歌ふ「基督は吾等の爲に死に至る迄従ひ給へり」と、而して深き沈黙が続く、其の間にひそかに主の祈がなされ、然る後ミゼレレの持つ哀調が歌はれ有らん限りの靜かな調子から神の哀れみを希ふ最も哀れな叫びに變るのであり、其の光景は嚴肅其物と云つた場面である。今迄現れた人の中で異常の感激を發表するに最も妙を得たと云はれたメンデルゾーンですら、此の部分は全曲中のもつとも崇嚴な瞬間であるといつた程である。

(譯文)

第二章 南蠻寺彌撒ゴオルガンの傳來に關する史實

永祿十年(一五五六年)大村純忠は、長崎をして西教宣傳の根據地たらしめ、且は外國貿易の中心地たらしめんが

爲めに、當時口の津に瀧留の伴天連コスム・ド・トレス *Cosmo de Torres* に信書を贈り、長崎に一基の吉利支丹寺建立のことを申出た。伴天連は直に快諾の意を表して翌十一年トウトス・アス・サントス *Todos os Santos* といふ會堂の献堂式が舉行された。天草に滞在中の伴天連ガスパン・ビレラー *Gaspar Vilela* も來たり會して諸聖頌徳、經文、讃歌等に音楽を唱和し儀式は頗る盛大に行はれたものと想像される。而して長崎は僻寒の一漁村より忽ちにして日本の大湊と化すべき千歳一遇のチャンスをつ捉へて、葡萄牙の商人達も同地に落着く事になつた。

かくして長崎は開港場として、南蠻文明に風靡され天正七年より同十五年迄伴天連知行分となつてゐた。即ち大村純忠が長崎をして耶穌會の寺領たらしめたのであつて、音曲にも俗謡にも著しい影響を與へた。此近郊茂木及浦上も亦耶穌會の寺領となり、吉利支丹寺の祭式並吉利支丹の行列等には南蠻樂器による音曲が用ひられるやうになつた。

永祿十二年織田信長が宣教師ルイス・フロエスを、和泉の堺から京都に招いて、吉利支丹の教旨を聴取し宣教師の京都に居住布教を許した。また教會堂として永祿寺を建立し、五千貫文の田地を寄附した。後に南蠻寺と改稱したのも此の寺である。

信長とフロエスとの會見が永祿十一年と記されて居る文献が多くある。殊に「日本正教史」には永祿十一年となつて居るが、事實から推して見れば十二年であることを信ずる。又、信長が晩年に至つて吉利支丹伴天連の野心を看破し、之を保護した過去を悔いたといふ説の人もあるが、之は何等かの爲にする所の臆説で採るに足らないものであることを信ずるものである。

天正六年にはオルガンチンが來朝して信長に謁し、後安土の學林長となり我が貴族の子弟教育に盡した。

信長は吉利支丹信仰の心強く、世間の區々たる宣教師國書論には耳をかさずして、平素反對を退けて之を保護したことは實に其氣宇偉大なりと云ふべきである。彼が屢々南蠻寺に詣で自らも讃歌を唱へたと傳へられてゐるが、若し彼れに數十年の歲月を與へてあつたなら、我が國運の發展に絶大の成果を齎したことであらう。

山本秀煒著の「日本基督教史」に天正九年の復活祭の記録がある。「高槻に集りし信徒は一万五千の多數に達し、彌撒祭を行ひ、音楽を奏し一大行列をなして其の盛況を示した。其の行列は現今も尙歐洲の天主教國に行はるゝそれと同じく、基督又はマリアの像を擔ぎ信徒盛裝して行列を練り行く様は頗る美觀であつた云々」と。當時は供養經の邦人の手に成つたものさへ數多くあつて、合唱も多數で行はれて居た。既に又オルガンの備付もあつたといふが、我が國に於ては之を確める材料の無いのを遺憾とする。

一説には葡萄牙國、アジウタの圖書館に藏せられてゐる著者不詳の日本教會史 *Historia da Igreja do Japão* に出てゐるともいふ。或は又之等の記録のある文献は全世界にたつた二冊だけ（我が國には無い）の羅馬に有るものゝ中に書いてあるともいふてゐるが、之はグレゴリー十三世 *Gregory XIII* 偉業聖蹟要略に載つてゐるものではないかと考へられる。

豊後の洋學校の圖や安土に於ける吉利支丹學校（オルガンチンが學校長になつたもの）圖は皆、此のグレゴリー十三世偉業聖蹟要略所載のものである。この文献は西曆千五百九十六年（後陽成天皇の慶長元年）羅馬に於て出版されたもので、豊後洋學校の如きは其の建築費は凡てグレゴリー十三世の寄附に係るものであり、主として西洋の諸藝と神學、ラテン語、音楽、圖畫等を學ばせ、其卒業生に對しては大學士の稱號を授けてあつたといふことである。

第一圖



安土の利支丹學校



豊後の洋學校

安土に於ける吉利支丹學校の内容も豊後の洋學校と大同小異の事が首肯されるが、茲に面白い逸話がある。安土の吉利支丹學校の開堂式に、信長が自ら臨場して同校學生等の種々の發表等を興味を以て聽いて居たのであるが、生徒の一人日向國都於郡の領主伊東義益の子、伊東ゼロームの西洋音樂の演奏に非常な興味を感じてゐたといふことである。

どんな樂器をどんな風に奏してあつたかど全然判らないが、信長をして感心せしめたといふ事實から推してつまらないものでなかつたことが想像される。

之等を綜合して見ると當時、洋樂の教授に、洋樂器を使用したことは十二分に領れるが、さて其の樂器は何であるか問題である。當時オルガンの使用説が言ひ傳へられて居ることであり、且、考へられぬわけのものでないが何分確實な證左を手に入れることが出來ず、遽かに斷定を下す譯には行かないのである。而してオルガンと言へばゴシックの樂器、所謂パイプオルガンの事であるを思へば一層考へさせられるのである。

日本譯の「風琴」といふのは「パイプオルガン」に該當するものであると云はれてゐるが、其可否の如何に拘はらず萬延年間までの記録には風琴の譯語さへ見出せなかつたのである。

ワイドオルガン、キヤピネットオルガン、アメリカオルガン等、皆同じもので之等を稱してリードオルガンと呼び亞米利加に於て完成されてまだ百年にもならない。此のオルガンを教會に採用の可否が論議されたことが幕末の常時であつた事を思ふと古い事ではない。又、オルガンとハルモニウムとが同種のものとは言へ、送風の方法が全然相反してゐるにも拘らず「風琴」として混同誤譯されてゐたことは外人の記録に依て洞察し得るものである。又オルゴルは自鳴琴で風琴とは全く異つてゐるに拘らず、オルガンとオルゴルとを混同してゐる。其の關係で輸入の時期も確實でない。葡語のオルゴル (Orgel) を自鳴琴と譯し獨逸語の (Orgel) をば英語のオルガンと譯して居り、且つ葡語と獨語の稍似て居る點から推して當時の記録に於て混同してゐたことが考へられる。

彌撒 Missa

「ミサ」とは羅馬教會の聖晚餐の禮曲に附した名で、羅典語の「送り出す」といふミسس *Missa* より轉じたもの、英語の *Mass* であると解してゐる。

聖晚餐の始めは信者がパンと葡萄酒とを受くる意であつたが、此の兩品を神に供ふる獻物と見るやうになり、自ら基督の肉と血とを再び祭として神に獻するのであるとの解釋が行るゝに至つた。それから轉じて「ミサ」は大罪も赦される力あり、是に於て死者の爲に行ふ供養の如きものとなつたのである。

ザヴィエーの渡來後この彌撒祭は方々で行はれ織田信長の南蠻寺建立當時に於ても彌撒祭は擧げられ「供養經」が歌

はれ日本語の「供養經」さへも歌はれたと云はれてゐる。天正九年の彌撒祭の事實からいつても、又、彌撒祭後の行列が我が京都祇園の祭を生んだといふ事實から云つても、我が國人と「彌撒」との親しみが往時からあつたものと考へられる。それが鎖國から明治時代に至つては「ミサ」とか「彌撒祭」とかの語が一般民衆には聽けなかつた。無論カトリック教會に出入する者には能く理解あることであり、他の教會に於ても「ミサ樂」を歌つて居たことだらうに、その語さへも知られないといふ状態であつた。それには「ミサ」の全曲を歌はず「ヘルビユムの歌」とか「親しみの捧げもの」とか「アペマリアの讃歌」等と一部分をのみ合唱して居たといふことにも原因があることだらう。

最近に於ては「供養經」が「彌撒」と書かれ上野音楽學校の演奏や、津川主一等のオラトリオ團體等に依つて、その全曲を演奏されるに至つた。

彌撒は聲樂曲である。合唱曲の組曲とでも云ひたい感じのする樂曲で、オルガン或はオルガンとオーケストラとの伴奏付のもので殆ど器樂だけで活躍する所がない。

今日普通に羅馬カトリック教會で行はれてゐる彌撒は千六百三十四年に定められたもので *Ordo missae* 及び *Canon missae* の二部に分れて居る。羅典語以外の國語を以て歌ふことを禁じられて居る等、なか／＼嚴しく彌撒を重視して居る。この全曲は五章であるが區分すると次の六章にわけられる。

一、キリエ (主よ憐みたまへ)

神恵を求むる呼聲にして「主よ憐みたまへ、基督憐みたまへ、主よ憐みたまへ」を各三度も歌ふ。

二、グロリア (榮光神にあれ)

基督降誕前夜の天使の讚美歌「天上とところには榮光神あれ云々」

三、クレード（使徒信經）

我は信ずの語を以て始まる「我は天地の創造主全能の父なる天主を信ず云々」

四、サンクツス（聖頌）

「聖なるかな、聖なるかな、聖なる哉、万軍の主なる云々」

五、ベネディクトス（祝頌）

「主の名によつて來れる者は祝せられさせたまへ」の唱、（サンクツスの一部）

六、アグヌス・デイ（神羔頌）

「愛に依つて自ら犠牲となり給ふ神の羔云々」の唱

之等の諸部を全備せるミサは、第十五世紀乃至第十六世紀のポリフォニの大家が盛に創作した。又フランス人ジョスカンにもヴィラルルトにも創作があつた。又教會音樂の生存問題を解結すべく任務を與へられたパレストリナは、三つの彌撒を書いた。千五百六十五年四月二十八日ギテルロッチの宮殿で上演し、第三のミサ・ババエ・マルチュェルリ「*Missa Papae Marcelli*」（マルチュリ法王のミサの意）が今日尙一般の賞讃を博してゐるのである。

其後ミサ曲はバッハ、ハイドゥン、ヘンデル、ベートルヴェン等の手に據つて進歩發達して、華美長大なものが出現した。ベートルヴェン作曲のミサソレムニス等は、スコアで四百頁もあり第九交響曲よりも多い程で、之が演奏に一時半は猶にかゝる。音樂會で歌へばこそ連續して行くから一時間半位でも済むが、之が聖餐の式樂として行ふ場合には、司祭の讀み上げる祈禱文の所々に演出するもので、この演奏中に儀式が行はれて行くのであるから、多くの時間を要する。

歌詞は雅典語で簡単な意味の言葉を繰返して行くが、それと異つた旋律で歌ふといふ處が多いので單純さがあるが、ともかく大曲である。

第二十世紀に至つて（一九〇三年）羅馬法王令は此の長大華美を盡した「ミサ」を儀式に用ふることを禁じて居る。又プロテスタント派の如きは、あらゆるミサを廢して居る。惟ふに儀式音樂の膨大なるは、稍もすれば壯嚴さを缺き秩序を亂す恐れがあるのであるから、それ等を憂へたものとも考へられる。

第三章 吉利支丹歌の讚仰と受難

吉利支丹の歌

長崎は吉利支丹宗各派の根據地となつて幾ばくもなく、吉利支丹文化、南蠻文化に風靡されてしまつた。宏壯華麗をきはめた吉利支丹寺が街々に建てられ、アヴェマリアの鐘の音が人々の合掌禮讃をさそふ様につき鳴らされた。人々は悉く吉利支丹宗門に歸依し、衣食住ともに南蠻風を模した。それ故に宗教的色彩の濃厚な歌が行はれてゐたのは當然である。即ち耶蘇教信者の中で舊約全書乃至新約全書の物語を日本語に翻譯して詠つたもので、耶蘇や聖母に関する歌を相互にかはるがはる歌つた事もあつた。今でも行はるゝ教會樂の聯禱を模したものであらう。

イエス・キリストの像に天蓋をかむせ街上に之を運び行く時、耶蘇教會主は聖服を纏ひ、玫瑰花冠をいたゞき、聖母マリヤを讚仰した日本語の頌歌を、日本風の歌調によつて歌つたこともあつた。それから歌ふ際に代る代る水鏡を

たゞいた事などは、全く南蠻の鞞廠の風かと考へられる。

慶長七年には、長崎の兒童達は街上で吉利支丹の歌を誦ふ習慣を作つた。是等は未信者に著しい感化を與へたこととも云へ得る。(長崎市史)

フランシスコ、ドミニコ、アゴスチイニヨ等の門派の信者達も、亦ひとしく吉利支丹歌を作つた。そして耶蘇聖母のみに限らず、天使、諸聖人、聖女パライソ、諸門派の宗祖、祝祭日其他聖書の物語を歌謡化したもの等も盛に歌はれた。これ等はすべて吉利支丹黄金時代の寵兒であつたが、後年の迫害に逢つて、残されて居ない。却つて迫害を受けた時のいたましい心事を抒へたものが多い。

受難の切利支丹歌

御水尾天皇の元和八年(一六二二年)八月十九日吉利支丹宗徒が迫害に遭つて居た頃の記事(日本カトリック教史三木眞風著)に『司祭等は獄卒に逐ひ立てられ、刑場に行くために役所の門を出た時に、數千人の信者が集つて来て司祭を見る^{シラフ}と直に聖歌を唱へ出し其聲が天地に響いた、其中には小兒が讚美する聲もまじつてゐた。…中略…修道衣を着けた二人の司祭とドミニコ會の肩ぎぬを着けた十二人の信徒とは祈禱を誦へながら歩いて來た、後の山にも前の海にも信者達が見てゐた、海には船を漕ぎ寄せてゐるのであつた。山の入口や海では讚美歌の聲が高らかに響いてゐた。…中略…火焰は此頃は盛になつて見る見るうちに三人を焼いて、四十五分で骨となつた、其間遠く周圍にゐた信者等は讚美を唱へてゐた、云々。』とある。

惟ふに當時多くの讚美歌が、高らかに歌はれてゐた事並に迫害氣分を表現哀訴した歌が數々誦はれてゐたことを信

するに十分である。生月島に遺り傳へられてゐる古いパラットに、

参らうや参らうや

パライツの寺に参らうや

バラ イツの寺とは申すれど

廣い寺とは申すれど

狭い廣いは我が胸にあり。

(公教會復活)

生月島の傳説に據れば、聖ジョアン・パウチスタが、中江島(生月島と平戸の間)に流された時に謡つたもので、聖ジョアンとは日本人の洗禮名である。パライツは Paraiso で即ち天國である。

外海地方には、又

五島へ五島へ皆行きたがる

五島はやさしや土地までも。

(公教會復活)

これ等の謡に依つて、當時吉利支丹宗徒達が普通人の厭ふ遠い離島を華麗な都大路と同様に憧憬して淋しいけれども何處迄も清純な嚴肅な氣分を唄つてゐたことが理解される。

浦上の北端なる川上には往昔サンタクララの御堂があつたと言へ傳へられて居る、此方面で謡はれてゐる唄に、

家野よはよかよか昔からよかよ

サンタカラナで日を暮す。

これは「善か盆踊唄」として密かに傳へられてゐたものである。サンタカラナはサンタ・クララの Sant (Iara) (フ

ランシスコ派の聖女)の訛傳である。

又元祿十六年版行の「松の葉」の中に載つてゐる長崎節には、

昔より今に渡り來る黒船

縁が盡くれば鯨の餌となる

サンタマリヤ。

これ等はかなり俗語化したものであるが、歌の内容動機はいづれも内に迫られて、自ら迸り出た切實なる情操が認められる。

長崎出島の南蠻屋敷の南蠻人が追放される迄約百年間、この間に傳へられた南蠻文明の影響をうけて郷土に遺された俗語小唄が、其後二百數十年に涉つて行はれた。嚴しい迫害に逢ひながらも、例へ形は變へても片鱗だけでも現在まで傳へられたことは、一つの驚異であると言はなければならぬ。

ペレンの國の若君

いまは何處にをらすか

御讀め尊め給へ。

此の一齣は、長崎港外の離島の吉利支丹信徒に傳へられて居たもので、ペレンとはキリストの生國ベツレヘムの訛つたもので、祈りの文句と小唄とを交ぜ合せてしまつた所に異色がある。クリスマスの晩に唄はれたものと言ひ傳へられてゐる。

沖に見えるはバーバの舟よ、丸にやの字が書いてある。

浦上地方の吉利支丹教徒の間に、密かに傳唱されてゐたもので、*バーバ* (Papa) は羅馬法王の事である。吉利支丹の教義を傳へる使命を持つた黒船を寓意してゐる。丸にやの字はサンタ・マリヤをひねくつて、ウキチーな言ひ方をしたものである。實は基督教は、ドクトリン教義そのものが日本國民間に浸潤して來ると同時に、西洋音楽の一層偉大なる仲介傳播をなしたものであることは、疑ふべからざる事實である。科學の腦漿をしぼつて發明された精銳な航空船、兵器軍艦等の強要よりも吉利支丹文化の影響は、更に偉大なる自然力を以て、之を免れんとして免るゝ能はざる運命を與へたものであつた。

第四章 南蠻音樂と南蠻樂器

南 蠻 人

南蠻とは古は支那南部に住んでゐた蠻人を總稱してゐるが、足利時代の末葉から徳川の初めに於ける、呂宋、爪哇、暹羅、阿瑪港(澳門)等の南洋方面の諸外國を指稱してゐるのである。其頃葡萄牙、西班牙、阿蘭陀等の諸國が皆南方に植民地を持ち、其地から我國に往來したので、是等の歐人をも斥して南蠻といふたのであるが、當時我國人は外國事情に通ぜずして、南蠻國を以て「西は天竺と那陀國、南は鳥馬國、北は蜀國續き、東は蒼海漫々たり。」といつた程である。

之等の南蠻人(葡萄牙、西班牙)は永祿年間より寛永に至る七十年計り長崎に來舶した。そして彼等は宗教の宣傳

と有無の交易とに従事した。

第七代 後陽成天皇の慶長十四年(一六〇九年)和蘭は通商を許された。當時の商船は凡て黒船と稱した。三本マストの櫓の高い船で、エラスムス號の渡來したのも此の當時である。蘭船エラスムス號の船尾の飾であつたと稱するエラスムス像が、現在上野博物館にあるがその右手に持つ巻物に「ERASMVS」 「ROTTERDAM 1598」と判讀される墨書より推定して、和蘭貿易優秀船であつたことが推察される。

和蘭に稍遅れて英吉利も通商を許され、平戸に商館を設けて通商を開始した。之等の貿易開始はさきに豊後の海岸に漂着した蘭船のヤンヨーステンと、ウイリヤム・アダムス(英人)の力に俟つ所が多かつたのである。

この二人は家康の召により江戸に於て海外事情を問はれ、江戸に數年間居を構へたのである。八重洲河岸はヤンヨーステンの居所で安針町(航海師の義)はアダムスのゐた所である。葡萄牙貿易に深い溝を生ずに至つたのも、此二人に起因する處が多い。慶長十九年には吉利支丹破却と共に吉利支丹音楽も亦大鐵槌を加へられて、南蠻樂器等を取扱つて居る餘裕がなく、従つて唐人達に盛に用ゐられた。元和六年には病院墓地などの破却に遭ひ、宗教音楽は滅亡の淵に瀕した。

寛永十三年には出島に限り滞在を許され、混血兒三百が阿媽港へ放流される等南蠻人に對する苛酷な禁厭が加へられた。而して寛永十六年には南蠻人との通商を禁ぜられ、僅に唐人と蘭人とのみが、長崎に限つて通商を許されたのである。

長崎出島と和蘭商館

今の長崎市の出島の地で、總面積三千九百六十九坪餘の廣さである。寛永十一年に長崎の市民が幕命によつて私財を抛ちて築いたので、森戸大波戸の南に突出した砂嘴である。初め葡萄牙、西班牙の商館を置いてあつたが、島原の亂後和蘭人を平戸から此地に移し、幕末までの居留地としてあつた。當時出島の警備は甚だ嚴重で出入は必ず表門から爲し、且奉行所の許可證のない者は絶対に其の出入を禁止されてゐた。島内に在留する蘭人は、一年間に僅かの數を限つて市中の散歩を許可された程で、全く島内に盤居せしめられて居たのである。

出島和蘭商館長は之を甲比丹と言つた、甲比丹は從來蘭語の *Kapitan* を訛つたものと説かれたが、之は葡萄牙語の *Capitão* より出たもので甲比丹は和蘭東印度商會の名によつて任命派遣された一支店長に過ぎなかつたが、實際の權能は今日の公使にも等しいものであつた。

一八五五年來朝の和蘭國王侍從長 *Rindon* 伯著 *Couvenir du Japon* に出島を次の如く書してゐる。

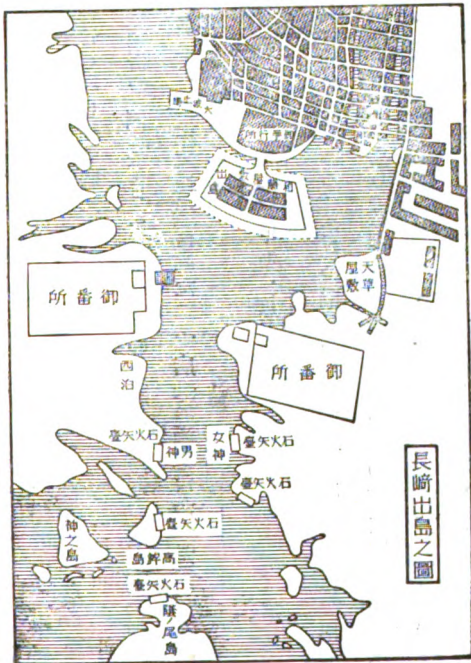
『出島は長崎港の中にしかも市街の入口に築かれた人口的の島である。それは扇形をなして上端は港の方に突出し下端は一つの石橋によつて市街に接続してゐる。島の長さ二百米あまりで幅は兩方共略等しい。街路には、蘭館と若干の倉庫が建つてゐる。日本式に歐羅巴風の習慣を加味した此等木造建築物に、いろんな色彩が施されてゐるので随分滑稽に觀える。斯様な建物の中で吾々は歐羅巴で馴されてゐるやうな快感を味ふ事は到底出来ないが、併し便利であり衛生的である。云々』

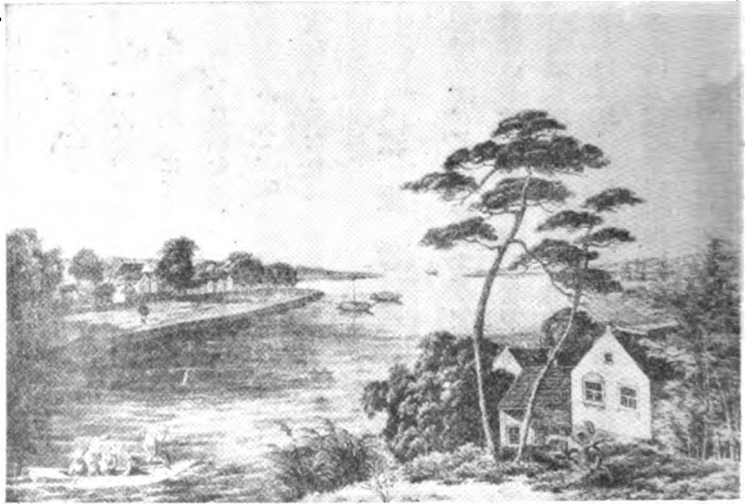
又我が官中要録には出島蘭館の内部の模様を次の如く詳説してある。

「阿蘭陀屋敷は長崎出島に在り、常に高き旗を立て目印とせり。門内へ入れば、家猪野牛羊の類を放ちて飼置たり。また阿蘭陀犬あり、其形鋭く見え、耳垂れ、多くは白にて黒點なり、其毛至つて細く綺麗なり、蠻人の主長を



長崎港





平 戸 港

甲比丹といふ。其部屋へ入りたるに、皆二階住居なり、二丈程もある段梯子ありて、登るに五十疊敷程の堂なり、額大さ六尺四尺計なるを五つ懸けたり、此圖は昔時阿蘭陀人が日本より彼地に歸るに大風に逢ひ船破れたる模様を描きたり、彼地の風俗にて、大變大難に逢ひたる事を忘れせざるため、畫きて後の戒とする事となん、扱其次の間に入るに、凡五六十疊敷の所なり其左の方には曲家七八個も置たり、其右の方に大なる佛間の様なる所あり、此上に硝子鏡、長六尺横四尺程なるを掛けたり、此中壇に四季の人形木によりて細工に刻みて、長一尺五寸程なるあり、皆婦人の形にして裸體なり、春は大根を持、夏は枇杷を持、秋は稻を持、冬は火にあたる圖なり、其下壇には硝子の燭臺長五尺程なるを二つ置たり、扱次の間に入るに三十疊敷程の所にて、右の方の五間程雨障子あり此障子硝子板にて張りたり、此所にも曲家七八

個も置たり、又長八尺程もあり横六尺程、高さ二尺計の床あり、四方の縁漆塗の皮にて飾り、其内はばんやの入りたる蒲團を敷き、一方は皮の枕、一方は足凭あり、皆其床に造り附たるものなり、又次の間に二十疊程の所にて、二方は雨障子、頃しも夏月にて、其障子は取放して幕を張りたり、海面一望に盡し涼風不斷なり、曲家三個、一人は甲比丹、一人は醫師、一人は侍者なり、始終曲家によりて應接する、彼地蜜漬の蜜柑をいだす、其味殊に美なり、又蜜漬の生姜あり、此生姜最大にてさらに柔和なり、又バンといへる物を出す、是は麥麴にて製したるものにてよく脾胃を消和す、味淡なり、又酒を出す、ちんだ酒は尤も氣味烈なり、きん、あ、ら、きは金海鼠酒中にあり、味少しく和せり、又茴香酒は茴香の匂ありて、味稍和せり、又葡萄酒は少し醋味あり酒和かなり、扱これより花園に行くに多くは日本の花を植えて賞翫する所なり。』

南 蠻 音 樂

所謂南蠻音樂とは、どんな音階でどんな音曲を奏してゐたかといふ事に就ては、茲に説明すべき材料を持つて居ない。持つて居ないが故に南蠻音樂と命名したとも、言へば言ひ得るのである。

南洋地方の植民地へ即ち當時歐洲列強の屬領地方に於ては、西洋音樂は比較的早く行はれて居た。東西兩洋混合或は訛つたもの等も行はれ、それが我國の開港通商貿易開始に伴つて、我國にも流れ込んで來たのである。ラベイカ、チャルメラなどといふ葡萄牙語の樂器は、之等南蠻音樂の一斑を示すもので、チャルメラの如きは長崎に於て明治時代までも行はれたものである。以下は等南蠻樂器に就て説明して置く事とする。

チャルメラ Charメラ

チャンメラ又はチャンメーラとも言はれてゐる。太平箏と譯してゐるものもあり、或は唐人笛と呼び又岡山冠山の「唐話纂要」には哨吶ソウナと突飛な呼方をしてゐる者もある。蘭語のチャラメラ、佛語のシャリユモ、英語のシャルム、獨逸語のシャルマイに當る。明治時代長崎に行はれた葡萄牙音樂に、特異な個性と情調を與へた長崎の一名物とまで言はれた樂器である。オーボエに等しく簧のある管樂器で、オーボエの如くに吹奏する。「長崎市史」には「シャルメラ吹は、唐船の媽祖像揚げの際や、唐寺の祭典或は唐人の葬式等の際などに吹奏するのを本業として居たが、元祿二年に至り十善村に唐人屋敷が設けられてから、俄に生計困難に陥り、爲めに當時屢當路者へ歎願する處があつた。併し乍らもとの様に自由に唐人に雇はれる事が出来なくなり、其後は特に正月に活動する傾向となり、後々は正月にはチャルメラ吹きが無くては叶はぬものとさへなつた」と書いてゐる。

長崎古今集覽名勝圖繪本を見ると「チャンメーラ吹」と題して正月門先に立つて、之を吹奏して居る様子がある。先端の開いた喇叭の様な形をした笛で、紐等がぶらさがつて居る物で、之を大人が尺八でも吹く様な姿勢で吹いてゐる。其の後に一人の子供が風呂敷包を脊負つて銅鑼を打ち、他の子供が又一人片張太鼓を打鳴らしてゐるのである。家々では六七文から十五六文を與へてやつたものとか。服装等も相當やかましくて、最初は無刀で必ず羽織袴を着用したものであるが、寛政文化の頃からは羽織だけに變り、明治の中頃まで長崎の市中に姿を現はしてゐたのである。日本に行はれた唐土武劇にはチャンメラを用ひることが屢あつて、長崎版畫によく見えてゐる。印度に於ては現在でも宗教的の音樂は勿論、婚禮の音樂にも此樂器が行列の先頭に立つて奏されて居る風習が残つてゐる。「噴吶ソウナ」「鎖吶ソウナ」の文字は慥に支那を意味してゐる。羅山の長崎逸事には「噴吶」と書いてあるが之は「噴吶」の誤と認められる。この記事は慶長十五年長崎に起つた媽港船擊沈事件を叙したもので、我が國に於ける「チャンメラ」

の記事としては最初のものと思ふ。こんな處から考察して見れば、此の樂器の移入は南蠻船渡來後であり、當時長崎在住の唐人の手を経て、邦人に傳へられたものは唐人笛とか唢呐とか云はれ、南蠻人直接のものはチャンメーラ、チャラメラ、チャラメレ等と訛つて呼ばれたものであらう。

寛永生れの西鶴が天和年間（一六八一年）に著した好色二代男五卷に京都五角堂の門前の景を叙した中に「錢太鼓唐人笛の響竹馬の鈴の音もの騒がしき中云々」とあるはチャラメルの事なるべく、又祇園町の十替り踊の様子を書いた中に「喇叭ちやらめら萬のものゝ音……」の語もある。當時既に全國的に知られた樂器とも考へられる。

前音樂學校長村上直次郎博士は、唢呐のサーナの發音はチャラの音から來たものであると云はれて居るが、ラ行とナ行との混同はよくあつた轉音例で、チャの音をサと呼び又はサ音をシヤ音と訛つたこと等から推して見れば、考へ得られぬことではないと述べて居る。

東京音樂學校所藏の清樂器の中には「鎖呐」と註してチャルメラがある。長崎のチャルメーラとは其の趣を稍異にして居るが、外人が支那のクラリネットと呼んだものだけに、そんな感じがした。しかし仔細に見れば簧等の關係はオーボエに似てゐる。

明治時代に片田舎などに於て飴賣等が吹いたチャラメラは喇叭といふ感じのするもので悠長な響をもつて居たものである。今幼い記憶を辿つて考へて見る時に異國の感じを起させるやうな、かなしい哀調を持つて居た樂器であつたことが領れる。

ラベイカ Rabeca

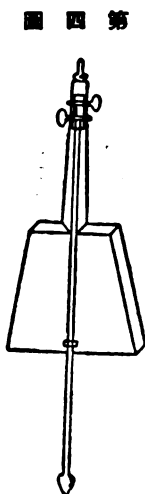
チャルメラと流行を共にせる南蠻音樂の姉妹樂器の名稱で、葡萄牙音樂流行の一斑を示すにたる物である。ラベイ

カは西班牙語レベツカ *Rebeca* の轉訛で、葡萄牙語ではラベیکاと呼ぶ。今日のヴァイオリンの前身楽器で、十六世紀頃歐洲に行はれてゐた物である。吾國の胡弓は此のラベیکاを模造しやうとして生れたもので、當時長崎人がラベیکاのやうな美しい音が出るやうに製作を試みたが、胴體が極めて複雑なデリケートな曲線美を持つて居る爲めに、到底斯様な精巧な楽器を完成する事が出来ず、従つて虎を描いて猫を得といふ調子の音色の異つた胡弓といふ新しい楽器が生れ出たのであると言はれてゐる。

寛永の頃の繪畫にはラベیکاは三絃の胡弓とあり、風俗畫報にも同様に書かれてあるが、田邊尙雄著「江戸時代の音楽」には總て四絃で稀には二絃のものがある云々と書かれてゐる。

大槻文彦の三味線志稿本には「ラベیکاは其の初二絃なりしが三絃となり、其の三絃の頃に渡來せし事分明なり、南蠻樂器なるも吉利支丹禁壓當時には琉球樂器として使用し、その調律は壹越、黃鐘、平調にして今の三味線の調に合すれば、二上りの調の如くにして平調の處のみ二調程高きものなり云々」とある。(明治十八年三月)

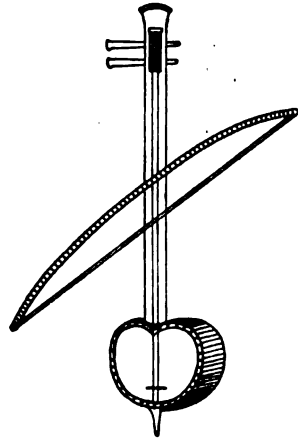
レベツカ(ツァミナーの音楽と樂器中より)



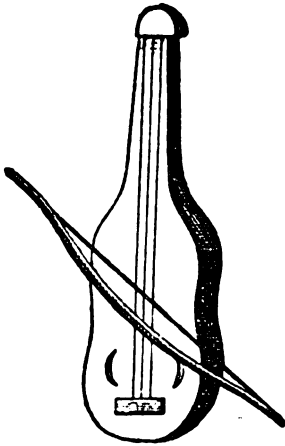
コーテは其著音楽史要に「レベツク *Rebek* (レバツプ、レベツク) は東洋から來り側壁をなす木材の框の上下に羊皮を張つたものである。此樂器は二絃を有するので、唱歌の伴奏文に使用したので、後には三絃となつたものである云々。」と説いてゐるが、これは第五圖の如きものであらう。この樂器は椰子の實を割つ

て、それに皮を粘つた胡弓様のものである。我國に最初渡來のラベیکاは、獨逸語のレベツクガイゲ *Rebek Geige* で、これは五度に調律された三個の絃を有する第六圖の如きものと信ずる。

ジャバ土人樂器 レバーフ



レベツク・カイゲ (ラポータの書より)



茲にガイゲとあるは此種の絃樂器を呼稱したものであつて、佛蘭西ではチーグ(Ciga)、獨逸ではガイゲ(Cigge)、伊太利ではチーガ(Ciga)と稱へてゐたのである。

第五章 ラペーカに關する所説

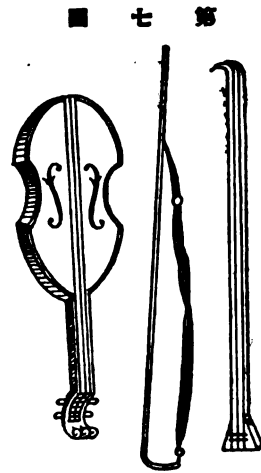
寛文四年出版の「糸竹初心集」に「ラペイカとは琉球で蛇を食ふ虫の名とし、其聲胡弓に違はず蛇之をおそる故、眞蛇を退かしめんが爲に專引也」と記されており、神田貞宜の「淺草舟行の記」には、「ラペイカは小弓なり。蛇を食ふ虫に蜈蚣なれども鳴くよしを聞かず、而して宋書王傳中、有蚺虫聲清長聽之使人、不厭而其形甚醜、素爲蚺賦以自況」とある。

喜多村信節の「筠庭雜考」の卷末には「ラペイカはバライカの訛で異國の三絃の名なり。其かみ琉球にて然か呼びける歟、又本邦には蠻語を傳へしか、仙臺の舟子漂流して魯西國に至りし紀聞を大槻茂實が録せる「環海異聞」に其圖を出す(第七圖)惟ふに之は蘭書の圖を漂客に示して書載せし物なるべし。

傳寫もわるければ遠へる處も大概は知るべき也。扱て此のバラライカは魯西亞の方言にはあらず諸に廣き名と聞ゆる

バラライカとケレブコ

は彼國古く爰に來りしことなきに其名傳はりたるこれ其證なり。然らば「こきう」も「ケレブコ」と稱するも魯西亞のみの名にはあらじ。羅甸語といふものに「ヤ」と書いてある。



第七圖

に入り、阮咸になり、後世に至つて變化して月琴になつてゐる。第七圖向つて右のバラライカは胴があまりに小さいので絃樂器の響體をして居ないが、之は傳寫したものゝ實と思ふ。

ラペイカは永祿年間には既に日本に輸入されて居ながら、寛文の頃には南蠻樂器たることすら忘れられてゐたと書かれて居るが、この樂器は日本ばかりでなく、東印度諸地方の土人間にも早く輸入されて居たものである。糸竹初心集にある毒蛇を退ける爲に、小弓を用ゐたといふことも、琉球のことではなく、印度に於けることであらう。田邊尙雄著「江戸時代の音楽」に次の様に書いて居る。

「印度には響尾蛇といふ猛蛇がある、印度に旅する者は屢其害を受けるのであるが、此響尾蛇は胡弓の音を好み、之を聴く時には人に噛み付くことがない。其爲に印度では有名な毒蛇の踊がある位である。そこで歐羅巴から東洋への航海をする水夫達は、印度に於て響尾蛇の害を避ける爲葡萄牙樂器で、あのラペイカを演奏して居たのである」と琉

球に於ける胡弓の話は、この話を混同したものと思はれる。

第六章 ヴァイオリン構造の發達

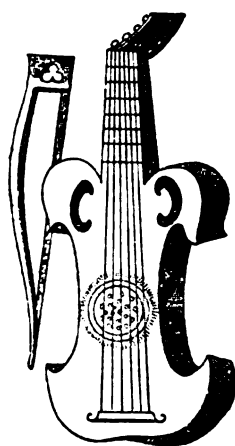
ヴァイオリン屬の弓樂器の構造の發達に就ては、十六世紀の始め迄は學者の與ふる所説は、纔かに断片的な覺書に止まり、充分な記録がなく適確に知悉する事が出来なかつた。

各研究者が同一樂器に異つた名を稱附して居るといふ關係もあつて、未だに不明な點が残されてゐる。ハンス・ゲルン Hans Gerle *Musika und Taktulotur* 1546 に至つて漸く記述が増して來たのである。この樂器の發達の徑路を一般的に説述して見ると、コーテ著「音樂史要」に次の順序を以つて書かれてゐる。之が最も正確なものと認められる。

- 一、レベック (Rebek)
- 二、トウムルシヤイト (Trumscheit)
- 三、ラードライヤー (Radleier)
- 四、フィデル (Fidel)
- 五、ヒヤロツタ (Charotta) クルトト (Crauth)
- 六、キオーレ (Viole) キオーリーネ (Violine)

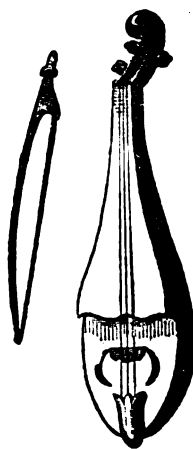
ラベーカー (葡語) と稱へてゐたレベック・ガイゲ (獨語) は、十五世紀中頃のもので、小ガイゲ、大ガイゲと同じ時代のものである。

大ガイゲ (ヴァイオリンディングによる)



第八圖

小ガイゲ (同上)



ギオーレ (Viola)

十五世紀の終りに現はれたもので、響體は頸の方で殆ど尖る程に細くなり、従つて上部は下部よりも細く、ギタル
レ Guitarre の様な柱を持ち、縁は高く響孔は鎌の様な形をしてゐた。響柱も大抵のものはあつた。又ギオーレは腕
を有するものと足を有つものと區分する。そしてその調子は、

高音ギオーレ (ギオレツタ)

(ヴィオラ・アルト)



中音及次中ギオーレ

(ヴィオラ・テノール)



低音ギオーレ (ガムバ)

(ヴィオラ・バス)

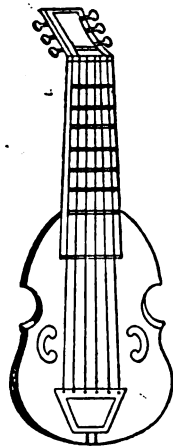


コントラバス (ヴィオロネ) は八度低くなる。

第十圖はギオーレバスであるが此のギオーレから今日のヴァイオリンが出来たもので、而も形を小にして且絃の數
を減じたものである。(コーテ音楽史要)

ギョーレ・バス (ハンスゲレルの書より)

第十圖



ヴァイオーレ Viola からヴァイオラとなり、それがデミニウデイズとなり、伊太利語のヴァイオリノ Violino 佛蘭西語のヴィオロンとなつたものである。

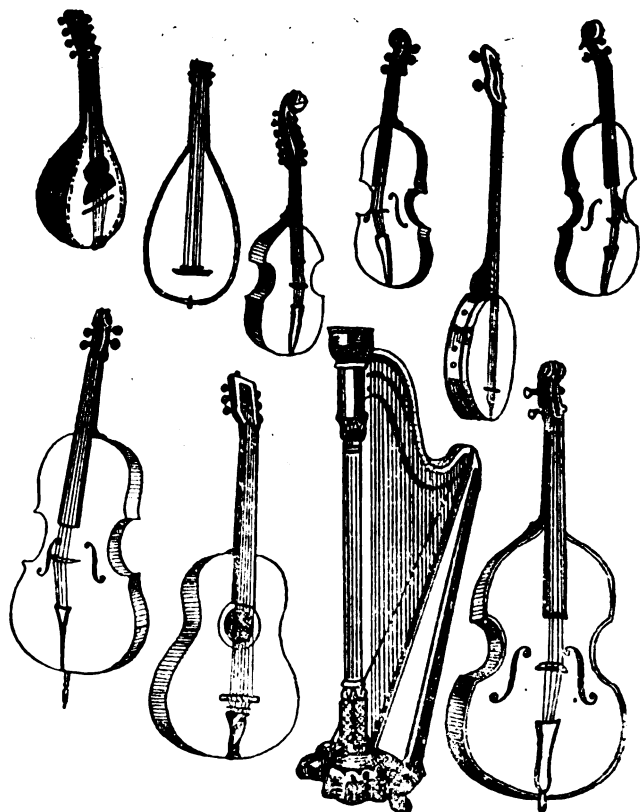
伊太利のヴァイオリン製造法の創始者はエルシユテイロルの人カスバル・エイーフエンブルツケル(伊太利語でガスバロ・デユイフホ・ブルツカール)と呼ばれる人であつて、千五百十四年にフランジンクに生れ、千五百五十三年リオンに赴き、此地にてラウテ、ギョスレ、バツス等の製造者として有名な工匠となり、多くの製作品を遺して千五百七十年に死んだ。

附 ヴァイオリンの沿革に就ては種々異説がある。現在出版されてゐる圖書の中にも、異説が錯綜して歸一する所を知らないかの様に思はれる。茲に書いたものも勿論異説と稱すべきものゝ一つであらうが、自分の信ずるコーテの著書を参考として書いたものであることを附言する。

附 リュート (Lute) の沿革

リュートは撥絃樂器オレトクムでかなり古くから使用された。

元來は埃及の樂器であるが阿刺比亞のものとなつて、それがアウル人に依つて西班牙に搬ばれ、伊太利に擴がり、その後十四世紀に到るまで歌謡ボカールの伴奏として、ピアノ代りの役目をつとめた。こんな關係で聲樂曲は、この樂器に書き移されて伴奏用につかはれた。



、ンリオイ、ヴ、ーヨジンバ、スバラトンコ、ラオィヴらか右
、ンリドンマ、トーユリ、ータギ、ルーモダラオィヴ、ブーハ
ロセンロオィヴ

マンドリンとギターとを合せたやうなもので柱を附けた指板には目盛りがしてあつて十一本の絃が張つてある。大きいものは十三絃のものもあるが、十六世紀の末に至つて指板の外に頸に沿ふて五本の低い線が附けられた。

オーケストラ・シンフォニカ・タケイ所蔵のリュートに現今之は撥絃樂器唯一の名手ラッファエレーカラーチエ作のものがあるが之は殆どマンドリンに等しい型をして居る。

コッポ	洋盃	(和、葡)	Kap, Copo	ビイドロ	硝子	(葡、西)	Vidrio
コンペイタウ	金平糖	(和)	Confitas	ビヨール	提琴	(和)	Viol
サフラン	泊夫藍	(和、葡)	Safran. Cafran.	ビロウド	天鵝絨	(葡)	Velludo
ザボン	朱纒	(葡)	Zambo	ビオロンセル	腰琴	(和)	Violoncell
サラサ	更紗	(葡)	Saraca	フラソコ	硝子瓶	(葡)	Frasco
シヤボン	石鹼	(葡、西)	Salao, Jabon	フラハオレット	銀笛	(和)	Flafiolet
ジユバン	襦袢	(葡)	Geibao	フロイア	横笛	(和)	Flit
タンブール	小太鼓	(和)	Tamboer	ブリキ	鐵葉	(和)	Blilk
タバコ	煙草	(葡、西)	Tabaco	ボウロ	菓子	(葡)	Polo
チャルメラ	哨呐	(葡)	Charamera	ホルトピアノ	洋琴	(和)	Porte Piano
ツツク	粗布敷物	(和)	Doek	ボタン	鈕釦	(葡)	Botto
トロンムル	太鼓	(和)	Torommel	メス	小刀	(和)	Mes
トロムヘイタ	喇叭	(葡)	Trompeta	メリヤス	莫大小	(西、葡)	Medias, Merias
トラムベツト	喇叭	(和)	Trompet	ラシヤ	羅紗	(葡)	Raxa Raixa
ドンタク	日曜、休日	(和)	Zandag	ランドセル	背囊	(和)	Randsel
ドーサ	明礬水	(和)	Dase	ワルトホーン	曲喇叭	(和)	Worthorn
パン	麵包	(葡)	Pao	ワカ	牛肉(ビーフ)	(葡)	Uaca

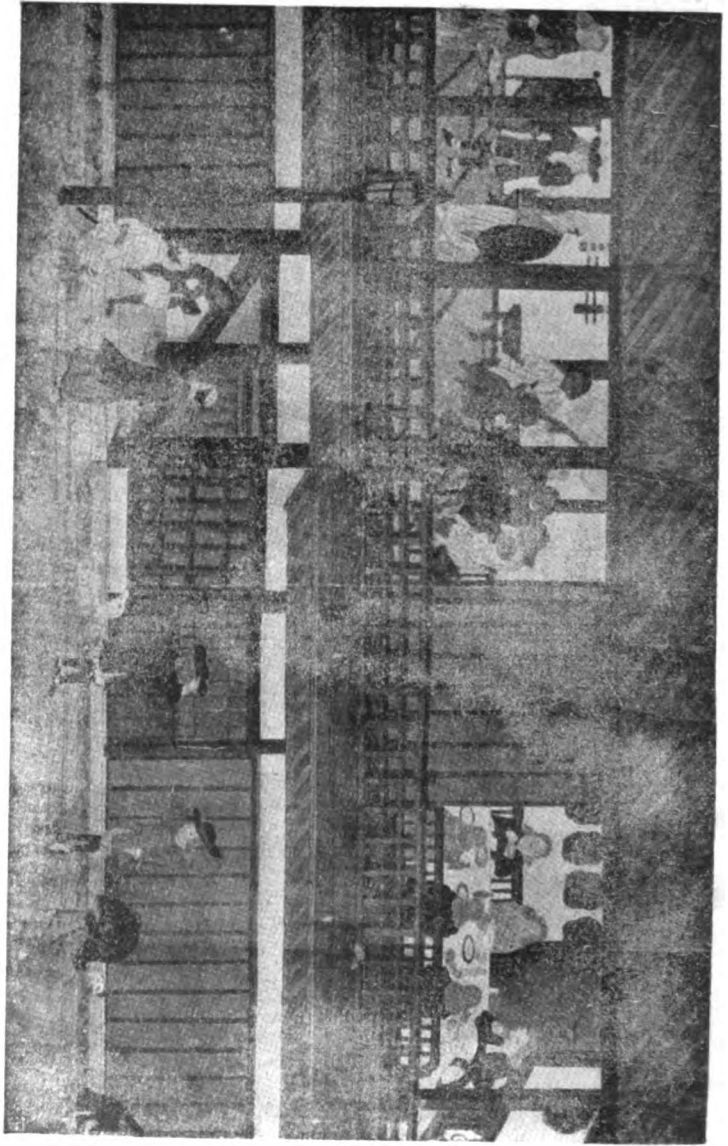
紅毛音樂

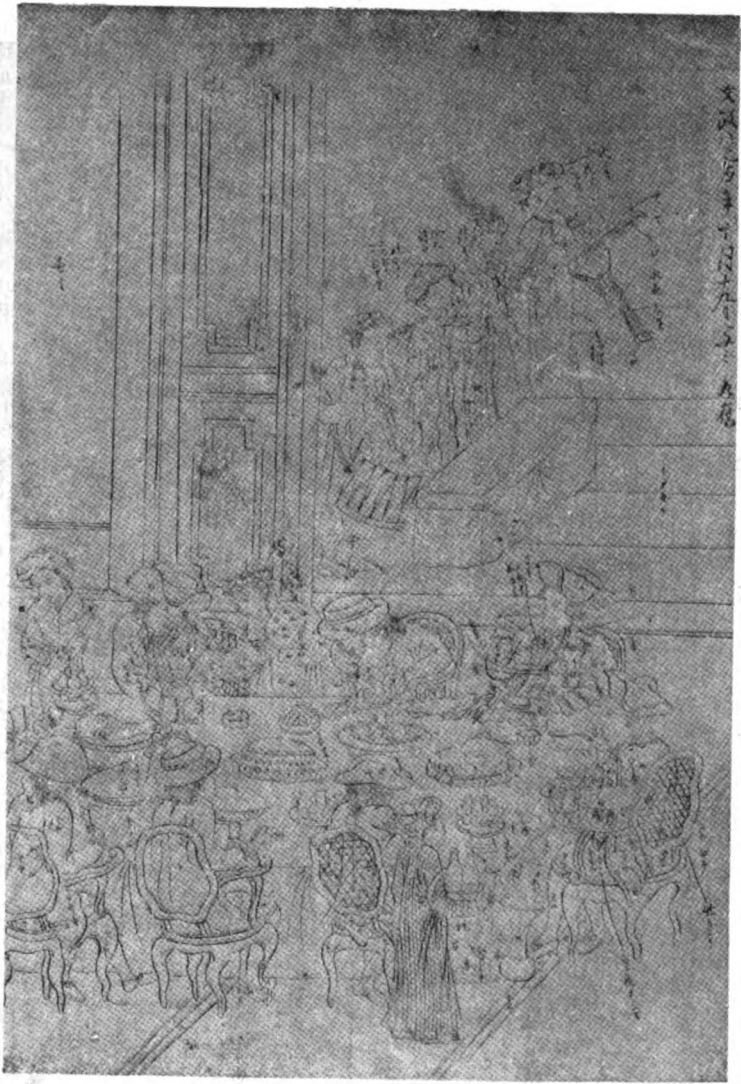
出島繪卷は、往時長崎奉行が渡邊秀石に命じて、將軍家と奉行所備付の繪卷を描かしめたもので、泰西文化の搖籃地たりし出島蘭館では横頭高く三色旗が翻へり、門内には探番(チキヤハン)(改め役)が控へ、空々で咬嚼(キヤウカク)肥黑坊(ヒキヤウ)が樂器を奏で、珍蛇酒の滿を引いてゐる。蘭人や通詞が青臺の上に立つてゐる構圖(コウト)が描かれてゐる。山羊、牛、猿、七面鳥、犬、鬻哥(イコ)等が舶載品の間にちらつく云々……秀石は唐繪目利役(トウエイ)(外國畫鑑定役)の初代を勤め、落款印章を用ひなかつた人である。此の繪は元和末より寛永初年の間になる作と思はれる(藏書者永見徳太郎世界美術全集の註)。二間半もある大作であるが、實に精密に描かれてゐる。第十二圖には色彩もなく、且不鮮明の爲、原畫の感じが現はれて居ないが、樂器は當時のフィオロンセル(ヴィオロンセル)(ヴィオロンセロ)と、ヒョール(ヴィオラ)カラヒール(ヴィオラ)(?)の三樂器の合奏であらう。

出島蘭館、クリスマスの圖(第十三圖)は「文政八年十月十九日寫之丸橋」と銘が打つてある。構圖は出來てゐるが色彩が毫もない。たゞ各部分に一々色の註をしてゐる處から推して、未成品のものである。ヴィオリン、フラジューレットウ、フリユート、太鼓の合奏である。旋律樂器のみ使用されて居たことも、個人として樂しむ場合には誰もが好む處であるから、これ等の編成は何等不思議のないものと考へる。

往年長崎江戸町の諏訪神事の「紅毛花草」に和蘭より取寄せた西洋樂器を奏したものである。又、江戸町諏訪神事踊入用蘭國注文品目錄によれば、トロンムル、フロイド、フラヘオレット、トロンベツト、ピオロンセルの五種目が記されてゐる。(長崎市史)

● 藝 事 展 覽 會 二 十 號





出島開館スクリスムの圖 第三十圖

萬延元年（一八六〇年）の秋、長崎に來遊した、ロバート・フォルチユーンの著書中の「江戸町の兵隊さん」の記事に「江戸町の兵隊さんは幼少な子供達まで参加して居た、小さい子供達まで紅毛の洋服をつけて居た事は珍らしい、紅毛女に扮せる者も居た、侍女も居た。之等の役は女兒が務めて居た。音曲はもとより、紅毛音楽で、訓練が了ると一しきり軍樂を奏するのである。」（玉國史料）それから和蘭の歌「和蘭兵隊さん」が歌はれるのである。

カーリンデカーリンデ、コクシンデカーリ

アーイノジョンブル、サンジューゴリンオーサシンクサレ

訛つてゐるので意味が通じない。この音曲といふのは、往年長崎の振遣隊の用ゐた軍樂に依つて居る。振遣隊は明治以前に活躍した一隊で、行進に際しては和蘭曲を奏した等、エキゾチイックのウルトラ・モダンであつた。

長崎の江戸町は出島蘭館とは橋一つを間にした町で、他の各町よりは蘭館に對して特權をもつてゐた。奉納踊に和蘭風のものを出したのもその爲である。現在の江戸町の奉納踊は普通の兵式教練で、紅毛風の匂ひはとうにぬけてゐる。無論こんな唄も歌はれて居ない。

紅毛樂器

紅毛樂器を輸入せしめたのは出島に居た甲比丹、ブックであつたことは能く世人の知つてゐる處であるが、該樂器の渡來は、それより以前に既に渡來してゐたのである。當時の名稱並註を其儘轉載することにする。括弧内は新註。

オルゴル (Or.g.) 自鳴琴 (蘭語) カラヒール (Klavier) 琴 (蘭語、又獨逸語クラヴィール Klavier, Clavier, は古くピアノの事を云つたものである)。オルトピアノ (Forte piano) (蘭語ピアノオルテ)。フロイド・フリュト (蘭

語横笛、フルエート)。ビヨール (Viol) (蘭語提琴ウ、イオリンの前身樂器)。トロンペット (Trumpet) 喇叭(蘭語)。タンブール (Tambour) 小太鼓

長崎蘭釋司吉雄耕平宅には和蘭琴カラヒールを所藏してゐた事が傳へられて居り、亦西洋兵衛の祖、高島秋帆の家には、紅毛陣太鼓トロンムルがあつて交際に使用されたとある。(梅園歸山錄)

和蘭樂器として長崎市の記録等より蒐集したものに、ワルトホーン(曲り喇叭)、オルゴン(自鳴琴)、フロイド(笛 Flute)、フラハオレツト(銀笛 Flageolet)、トロンネット(喇叭 Trumpet)、フイオロンセル(ウイオロンセル Violon Cello)、ビヨール(ビオラ Viola)、テリヤンゲル(トライアングル Triangle)、ホルトピアノ(ピアノホルテ Piano forte) 琴の類にして、手と足を以て之を弾くなり註がある。トロンムル(太鼓 Drum)、タンボール(片張太鼓小太鼓)、カラヒール琴 Harpsicord, Klavieren は發音だけによれば蘭語であるが、英語で Keys of a Harpsicord に當るが寧ろ蘭語の Klavecim で英語の Harpsicord (擊琴) に相當するものか。

「長崎名勝圖繪」には蠻方の樂器また甚奇なりとて、次の記事が記載されてある。

『ビヨール、板張の提琴なり、此方用る所の如く、皮を以て張ることをせざるなり。トロンムル、太鼓なり。トロムペツト喇叭なり。ワルトホーン曲り喇叭、テリヤンゲル、鏡杖を三角に曲けて籬を入れ、是を鏡の桴にて擊なり。フロイド笛なり。ホルトピアノ、琴の類なり手と足を以て之を弾す、カラヒール琴なり手を以て弾くなり』とある。タンボールは小太鼓、片張太鼓を指して居るのであるが、我が國の片太鼓は随分古くから用ひられた。ペーロン

(競渡)の時船先の太鼓打の用ふる太鼓は片張太鼓であつた。甲子夜話には「片面を張り扁は至つて淺し、夫故、片手に縁を持つて打つ聲至つてカンバリて聞ゆ云々」とある。チャルメラ吹きも持つて歩いた樂器であるが、邦人の製作に依つたものが多かつた。唐土樂器の中にある片鼓と同じものではないと思ふものである。

往時の洋樂器の使用法等は、概して唐土人の手を経て理解し且使用された傾向があつたのであるが、之を思ふ時に當時の歐風音樂の發達が如何に遅々たるものであつたかと窺はれる。

ピアノとカラヒール

渡來當時はホルトピアノと呼んで居た。單にピアノと書いても居る。そして琴の類で手と足で弾くと註してあるが、カラヒールなるものが、また同じく琴と譯して手を以て弾くとある。

クラヴィール (Klavier, Clavier) は獨逸語のピアノの古い名稱である處を見ると、同じものに二つの命名を與へて居たかの觀もあるが、唯足を使用しない處を見るとクワヴィコートか然らずば、それが更に進歩した處のハーブシユルドで、ピアノの前身樂器であつたものと考へられる。

ピアノフォルテといふのは、一の樂器で、ピアノとフォルテの兩方が彈奏者のタツチに依つて如何様にでも、自由に出せる所から斯く呼稱せられたまでのものである。洋琴と譯されたのは蓋しウキチーな思ひつきで明治以前にはこんな譯はなかつた。

ヴァイオリン

ヴァイオル (Viol.) から、ヴァイオラになったもので、何處でも大抵ヴァイオラで通るが、日本ではこれに適當な譯が付されてゐない。獨逸語ではブラツツェ (Bratsche) と云ひ、伊太利語では「腕ヴァイオル」といふて居る。

「ビヨナル」とは我國に渡來當時に呼んだ絃樂器の名稱で英語ではなく葡語である。提琴といふ譯語は既に文化の頃には見えて居た。而して之は現在のヴァイオリン系樂器の通稱であつたのである。

ファイオロンセル (ヴァイオロンセロ)

ファイオロンセルとか、ウイヨロンセルとは渡來當時呼んだセロの名稱であつた。腰琴と譯しても見るが、どうも落着かない。

元來は、ヴァイロンチエロと云ふべきで Violonello と綴るのである。之はヴァイオローネから起つたので、ヴァイオリンの大きいもの、ヴァイオラの更に大きいもので云ひ換へれば大々ヴァイオリンのことなのである。所が大々ヴァイオリンのことはダブルバスを指していふ。ところがセロ (又はチェロ) といふのは、小さいものを云ふのだから、小大々ヴァイオリンなのである。チェロ又はセロ丈では無意味なのだが、斯く呼稱する人が多くなつた。

オルゴル

オルゴルともオルゴールとも呼ぶ。和蘭語オルゲル Orgel の轉訛で自鳴琴と稱してゐる。函中に長短相並列した音階を作つた鐵櫛と、數多の刺を有する圓筒とを裝置して、之を「ぜんまい」仕掛で回轉せしめるのである。現在も置時計の底部に仕組んだものがあるが、あれに類したものである。其稍複雑なものは一回轉毎に其圓筒少し宛の位置を

換へて、其面の刺が鐵櫛に當る所を異にするによつて、連續して永い樂曲を奏し又は別の樂曲を奏し又は別の樂曲を奏することが出来るのである。従つて四回六回若くは十二回までの變化ある曲を奏することが出来、複雑なものになると、ラツバを吹き太鼓若くはベル、トライアングル等をも打鳴す裝置のものもあり、管絃樂合奏を聞く思ひがする云々と。蓄音器の發明ない當時に於ては唯一のものであつたことが察しられる。

我國に多く輸入される様になつたのは横濱開港後で、富豪の間に流行したのは明治維新後である。蓄音樂圖書館所藏のものに立派なオルゴールがある。因にオルゴール時計は文政年間に於て初めて渡來したものである。

第一編 南蠻紅毛樂時代

下 鎖國と音楽

第八章 歐風樂器の移入

鎖國以來西洋諸國の形勢は急激に變轉して行つた。即ち葡萄牙、西班牙、和蘭の諸國は次第に國力衰え、英吉利がこれに代つて歐亞の天地を席卷し、遂に印度を略し、更に東漸して清國に迫り、又新興の露西亞は亞細亞の北部を征服して次いでカムチャツカ半島をも領有し、次第に南下して千島近海に出沒するやうになつた。

鎖國といつても絶對的のものではなかつた。朝鮮には信書を以て往復し、和蘭とは制限を附して交通した。而して支那とも貿易したのである。たゞ何れにしても我れより進んで彼に赴くことをば絶對に禁止したのである。

此の鎖國中唯一の貿易國ともいふべき和蘭は、寛政六年一七九四年佛蘭西に征服されて、パタヴィア共和國と化し、ついで文化三年（一八〇六年）パタヴィア共和國治下の一王國となり、文化七年再び佛蘭西に併合された。當時英吉利西は蘭館ジャバを奪つて自國の總督を派遣して統治の任に當らしめ、出島入津の和蘭船に壓迫を加へた。

かゝる理由に依つて長崎出島には和蘭船の船醫を認める事が出来なくなり、甲比丹を初め在島蘭人は本國の消息を知る由なく、果ては日用品の缺乏に苦しみ、空しく自國船の入津を待つこと三年、其間空しくして佗しく和蘭屋敷の屋上に翻つてゐた和蘭國旗は如何に心意的な焦燥と國民的な屈恥を表徴してゐた事か、（當時出島蘭館の日記 Dag-register は現に和蘭のヘーグの國立古文書館に保存されてゐる。）

歴代の和蘭屋敷の長中で最も傑出してゐたのは、寛政十二年に來た甲比丹ワルデナールの部下として來朝したヘンドリック・ツーフであると言はれてゐる。

前代の甲比丹カピタンや館員の不正行爲から、館内の秩序財政共に紊亂してゐた後を承けて、非凡な才能を振ひ見事館務を整理して甲比丹に昇進した。

英國船の不意の來航や英艦が闖入して狼藉を働いたやうな事件に出會したり、露西亞からレゾノフが來て日本に通商を求めたりしたので、從來獨占してゐた蘭國貿易に甚しい脅威を感じしめられたり、果ては西歐の異變から蘭國南洋の植民地が喪失して了つた後の大難局等は、從横に奇智をめぐらし日本官憲を納得させて、商館の面目を維持したのである。

又蘭和譯の辭書「ゾーフ・ハルマ」を完成したことは、邦人が泰西の知識を獲得する道程に於て如何に便宜を與へ且つ又仲介の勞をとつたことか、彼は音楽にも理解を有して居て、洋樂器最初の移入者であると言はれて居る。何々の樂器であつたかといふ事の確實な記録を持つて居ないが、米人音樂博士ミス・ハンセンも右の如く述べて居る。

自分は繪畫其他物語等より之を綜合して見るに、トロンムル(太鼓)、カラヒール(立琴)、フロイド(横笛)、ヒョー(提琴)、ヴィオロンセロ(腰琴)、トラムベツト(喇叭)、ワルトホーン(曲喇叭)、テリヤンゲル(三角簫)、フラヘオ(銀笛)、オルゴル(自鳴琴)等を移入したものと推定するのである。而して當時之等の樂器は、丸山の遊女が所持して居たものもあり、黒坊が演奏したもの等であつた。出島蘭館は一般人民との交通は厳しく遮斷して居たが、丸山の遊女に限つて許して居た。こんな關係で、之等の遊女の中には洋樂器の奏法を會得したものや、和洋樂器の合奏を行ふ者等のあつた事は十分想像される。殊に遊女は三日より以上滞在出來ない事になつて居るが、ツンベルグの記事には、「三日滞留は表向きで一年でも二年でも留めおく事が出來た云々」とある。

ともかく、人間は學問や智識だけでは生の満足が得られない。波瀾萬里を越えて來て、出島に囚人同様の生活を忍

んでた甲比丹カヒタン以下の蘭人の生活の半面に幾多の情史が生れ、そこに詩が現れ音楽が演出された事は不思議でも何でもないことなのである。

歐風音階について

我が鎖國時代元祿年間を前後して現はれた、中根元珪が發表した樂律十二平均律なるものが、今日行はれてゐる西洋音階と稍等しいもので、ピアノやオルガンの樂律と略似てゐる。之は歐風音樂の影響を受けたものかどうかは判らないが、樂器の渡來と共に歐風音階が傳はつた事は十分想像されることである。殊にオルゴールの如き樂器によつて七音階を基礎づけられたといふことも考へ得られぬことでは無い。即ち今日の子供達の中には著音器の影響を受けて、雜解な交響曲の主旋律を口ずさむものがある。況して有鍵樂器の使用を見るに於ては、當時既に平均音階が傳はつて居たものと見ることが出来る。

しかし日本音樂の音程の續き方は自由であつて、第一の音が上高音(Cons. Supérieurs)の指圖に従つて、それと完全和絃を作るといふ義務に束縛されて居ないので、歐洲の意味でいふ音階は全くなして濟まされるのだから、この平均音階の音程は、當時の好樂家の腦裡を如何に惱ましたものであるかが想像される。

宣教師が苦心して、短音階を歌ふことを教へることに成效して曰く、『日本人の咽喉に相違があるのではなく、耳にあることが解つた。』といふた事は明清樂も邦樂もペンタットニツクの上に、五音階のスケールの上に、立てられてゐるからである。

第九章 蘭人の江戸参府と歌舞音曲

年毎に和蘭船の賣す「和蘭風説」なるものが、西洋諸國の事情、西南諸島の形勢を初めとして、宗教政體、風俗、戰亂等の新に聞く所を記録して、我が國に報じた事は、和蘭人が幕府に對して好意を盡した事であり、一方幕府は蘭人に對して好感を持つて居たことである。而して、この「和蘭風説」並に方物を献上の爲、態々長崎出島から江戸城まで、多くの日數を費して來たのであるが、茲に面白いエピソードがある。それは、時の將軍並に幕僚達が、蘭人の江戸参府を非常な樂みとして待つて居たといふことである。蘭人使甲比丹は、凡て大奥に召されるのであるが、この使により異國の生活様式を知らうといふ好奇心からのことと思ふが、他に對してはどかる様な質問を爲し、或は動作を爲さしめたといふことである。

綱吉公は、甲比丹一行を大奥白書院に通して種々餘興(歌舞等)を仰せつけられ、將軍が簾内から見物したことは、徳川實記にも、フアレンタインにもその記事がある。ケンベルの参府は、二回とも綱吉公の時代であつたから、彼は二度共種々の餘興を仰付けられ甚だしく迷惑してゐる。即ち、立つたり坐つたり、歩いたり停つたり、互に敬禮したり、諺つたり、踊つたり、あらゆる惡戯の具に供された。

次に吉宗公は好奇心の甚だ旺な人で、西洋の事物は何でも知りたがつたから、拜禮日と暇乞日との間に新に特別登城日を作つた。例へば保樂二年には二月二十八日に拜禮は済んだが、三月二日に蘭人の特別内見を行つた。この日御臺所以下の者も襖の蔭に在り、蘭人は將軍の間近に進みて強ひらるゝまゝ、歌舞試合などをし、又酒肴を饗され、箸

を取つて食事をした。又享保十年の特別内見では、洋食に必要な道具類を持参して之を示し、又歌舞した上酒肴を饗された。其の後の参府の時も歌舞の嗜ありやなど問はるゝ例であつたが、蘭人は甚だ當惑したのである。因に之等の歌舞は隨行の蘭人が行つたので、さすが甲比丹だけは和蘭の代表者であるから差控へて居たのである。

第十章 洋樂の洗禮を受けた長崎音樂

實に長崎は三百年間の本邦唯一の外國貿易港であり、將た又本邦唯一の海外文化輸入門戸として、諸外國との交渉接觸を絶えず存續してゐるのであつた。これが安政開港以後澎湃として押し寄せて來た泰西文化を、遺憾なく攝取消化せしめたことであり、安政の開國に十分なる準備を整へしめたことは、何人も疑を挾まざる所である。

長崎人は、國內の民衆を自己の港に誘致した。肥前の風俗を主體とした風俗と他地方のそれとを或程度まで融合調和させた。鎖國時代に於ては、自餘の地方に或程度まで及ぼせる異國風俗の影響は、必ず長崎を經由した上の事であつた。「長崎附見録」をのぞいて見ると、當時の長崎人の風貌を想像することが出来る。

「長崎の風俗、男女人品宜しく應接柔和に禮厚く見ゆ。然れども其場を去りては物事等閑にして少し行届かざる事もあり、就中酒肴の交を第一とする處にて、殊更魚類は天下第一の澤山なる地なり。夜分は深更に至るを厭はず、朝はまた五つ四つ時をも、いねる人多き所也。其勢東南に向ふを以て限りなく各月爐を置かざる家多く、婦人皆琴曲三絃を嗜み習ふ。會宴興に乗ずれば妻妾少女を分たず吟奏す。」（廣川書寛正十年版）

長崎が吉利支丹の都であり、唐船紅毛船の渡來港であつたことは、在來の日本音曲にも俗謡にも著しい影響を及ぼしたのである。

宗教と音樂とが密接不離な關係を有することは、今更據説する迄もないことであるが、吉利支丹寺の祭式、或は行列、演劇等に於て南蠻樂器が用ゐられ、吉利支丹歌が歌はれたことに就ては多言を要せぬ。(長崎市史)

かうした時、土地の匂ひを強く含む小唄、俗謡、音曲が南蠻紅毛風なものに影響されるのは、當然すぎる程當然である。

ラベイカ、チャルメラなどの樂器は、南蠻音樂流行の一斑を示すもので、チャルメラの如きは郷土音樂とさへなつて、明治時代迄も行はれて居たのである。

天明の頃、出島の和蘭屋敷の黒坊が、紅毛樂器と日本樂器との合奏を行つたことや、諏訪神事踊に、紅毛樂器が用ゐられたこと、江戸町の子供達が喇叭吹きならして兵隊訓練や「和蘭兵隊さんの歌」を歌つたこと、或は又チョン鬻に黒羅紗の軍服、腰に大小を差し銃を擔つた姿の振遣隊が、和蘭進行曲を奏したり、或は蘭曲に日本歌詞を附してトコトヤレナ……等と歌つたりしたこと等は、到底他郷に其の例を求むることの出来ないものである。

殊に吉利支丹禁歴の時代に不拘、出島に於ては毎年クリスマスが盛大に擧げられ、洋樂の演奏が行はれてゐた事實より想像する時に、長崎の音樂は、洋樂の洗禮を受けたといふても過言ではないと思ふのである。

第十一章 唐土音樂の日本進出

唐土音樂の流行も特筆しておかなければならぬ。唐人は南蠻人の渡來する頃から、盛に長崎に來航し、市中に滞在して商業貿易等を營んでゐた。元祿二年以後、幕末の頃まで唐人屋敷に限つて本邦滞在を許されたが、歸化唐人魏九官（寛文十二年西曆一六七二年歸化）が長崎に於て最初に明樂を傳へた。彼れは斯樂の大家で延寶元年（一六七三年）には内裏に召されて明清樂を奏上した。（魏田耕書）

其隣鹿鹿民部も亦よく世に知られた音樂家であつた。彼は京都に上りて堂上公卿達に厚遇せられ、安永元年河原御殿の泉水に於て、船樂を奏した時、有栖川宮より特に左の御歌を賜はつた。

珍しい 其品多き ものゝ音の

調べにそへて うたふ唐歌、

猶、冷泉爲村卿は

糸竹に あはす唐うた 唐衣

唐人ならで 唐めける舟

と詠つた。彼は安永三年に長崎に歸へつて捐館した。又、唐僧心越が延寶五年（一六七七年）に七絃を傳へた。天和元年徳川光圀に招聘された人である。七絃琴を弾じて唐音をうたふ者は全國的に擴まり、明治時代まで歌はれたが、現今は全く跡さへ絶つてゐる。

銅鑼、鑼鼓、胡弓、月琴、其他の樂器は普ねく行はれ、就中、月琴は長崎音樂の一特色とさへなつた。

月琴歌は全く唐音で歌はれ、しからずば唐音の譜で唄ふのであつた。又唐人唄と稱して、唐音や唐音に類似した邦語を混合して作つたものや、葡萄牙語を用いたものもあつた。これ等は天保の頃から江戸及大阪に入つて流行し、明治時代に入つて全國の津々浦々に迄歌はれたが、日清戰役後に急に落潮の運命を辿り現今では跡形も無くなつて居るが、唐人歌の節によるホーカイ節は、今尙三味線によつて吾々の日常耳にする所である。

之を要するに、明清樂が吾國洋樂の發達を蔭に促進した間接的な功績は、決して忘却し得ない所である。同時に明笛も普及して雨中迺登幾に「唐笛といへば其元は蠻樂のやうの物にして長崎等より來たりしや知らず、江戸上方などには一向なきなり」とある。月琴や胡弓、三味線等にも合せて吹奏したものである。

唐人踊、この中には南京踊、漳州踊、太平踊等があつて、其の中月琴に伴れて踊る九連環の看々踊等は、長崎人によつて關東地方にまで紹介せられたものである。

歌川國丸（文政年間の浮世繪師）の繪に唐人踊とて、樂器に合せて三人の踊る繪がある。樂師は月鼓か太鼓かを兩方から打鳴らし、三絃子と胡弓、それに筋羅（トライアングル）を打鳴らしてゐる。洋樂器と唐樂器との合奏とも言ふべき繪であるが、毫も不自然さの無い繪である。

第十二章 鎖國と邦樂の爛熟

顧みて日本音樂に及ぶと、極端な鎖國主義をとつてゐた關係で、長崎以外の地は國內文化の發展を見るに至り、一

種獨特な日本國民音樂が爛熟するに至つた。三味線樂が異常な發達を遂げ、また箏曲も通俗的に進歩して淨瑠璃、長唄、端唄、小唄、地唄三曲などの所謂俗樂が隆盛を極めた。

併し此時代の音樂は著しく差別的傾向を持つてゐた。即ち、上流の音樂と下層社會のと別れて居たといふ缺陷があつた。

次に古來の雅樂研究者も元祿時代に相前後して輩出し、中根元珪(數學者)が樂律に關する著書「律原發揮」には西洋音階に等しい音階十二平均律を發表した。之はピアノやオルガンに用ゐられてゐる音階と等しいものである。

明治八年、英國博覽會に出品の十二律音又を専門家エリスが測定したものを擧げて見れば

神 仙	二五八、六	上 無	二七四、八	壹 越	二九二、七	斷 金	三〇五、六
平 調	三二六、二	勝 絶	三四三、一	下 無	三六五、七	双 調	三九一、五
堯 鐘	四一〇、一	黃 鐘	四三七、〇	鸞 鐘	四六〇、〇	盤 涉	四九一、五
神 仙	五一七、三	上 無	五四九、五	壹 越	五八五、四	斷 金	六一一、二

又、获生徂徠が支那の宗代の音律書「律古新書」を基礎にして雅樂の樂律を調べ、藤原元成が「律古新書」の通俗化に努める等、雅樂の中興ともいふべき時代をつくつた。

第二編 歐風音樂時代

上 洋樂の搖籃

人皇第二百一十代孝明天皇の嘉永六年、亞米利加船の渡來後より明治天皇の第二十五年に至る四十年間を包括する。前期を洋樂の搖籃時代とし、後期を音樂教育時代とに分つ。

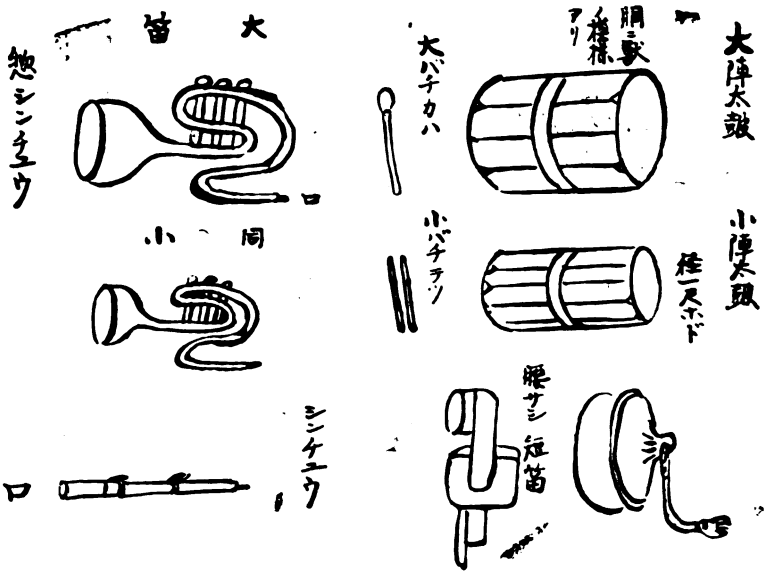
第十三章 亞米利加軍樂隊の來訪

嘉永六年五月二十四日、ペルリ提督乗艦、サスケエハンナ號外三艦は、清國を経て日本訪問の途次琉球に立寄た。彼等は辭を低うして國王に謁見を請ふたが、島人は怖れて國王は病床にあると言つて拒絶した。然らば慰安のため音楽を演奏して見やうと言つて、亞米利加海軍々樂隊が隊伍を組んで城中に入り數曲の演奏を行つた。後年、ペルリ提督に依つて脱稿された『日本遠征記』にも此事が載つてゐるが、果して何曲が奏されたかは不明であるが、半未開の島人に異常なるセンセーションを掻き起した事は疑ふに由が無い。

同提督は翌五月二十五日琉球を發つて江戸に向つて船足を急ぎ六月三日浦賀に來着した。久里濱上陸の際、六人の少年鼓隊も使節の一行に随伴して上陸した。一少年鼓を打てば、中官以下何れも携ふる所の劍銃に彈藥を込み、筒先を小屋の方へ向けて進む。小屋迄の間は六人の少年銅鑼、太鼓、笛の樂器を演奏した。

六月九日ブツカナン艦長が眞先に海岸に飛び上ると、續いて百餘人の水兵が上陸した。續いて音樂隊が二組上陸した。斯うして待ち兼ねた圖書の受渡は非常に鄭重に然も極めて儀式ばつて取り行はれ二三十分許りで悉く済んだ。歸艦の折は音樂隊は國歌の奏樂(Marching thro' Georgia)を爲しつゝ浦賀奉行の日本船に送られて歸つた。(日本遠征記) 維新史料編纂局所藏の亞米利加船浦賀渡來の繪巻物の中に當時使用した樂器が描かれてある。筆者は不明だが唐紙に描いたもので、樂器編成を知る唯一のものである。第十四圖には原圖の色彩(太鼓の皮とラツパ、シンベルが黄で房が赤)が出て居ないが註釋は原圖の通りである。

第十四圖

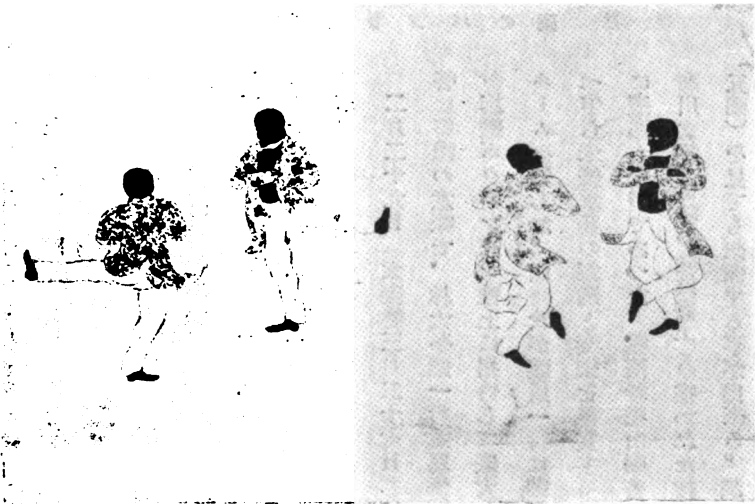
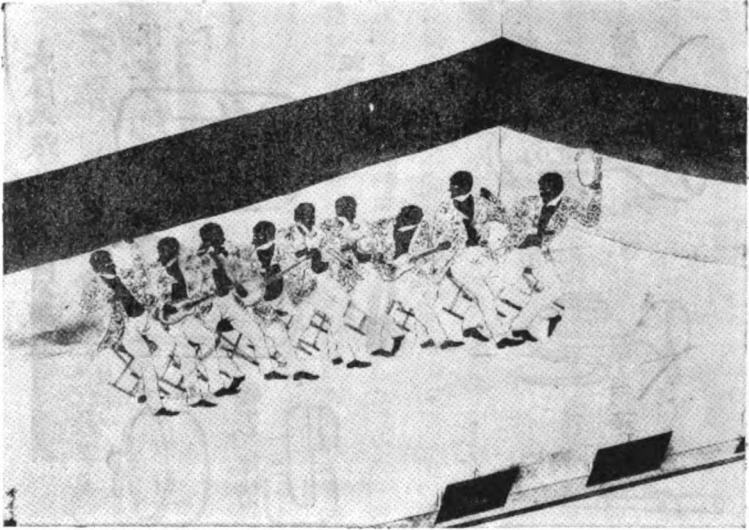


太鼓とツラのバツ

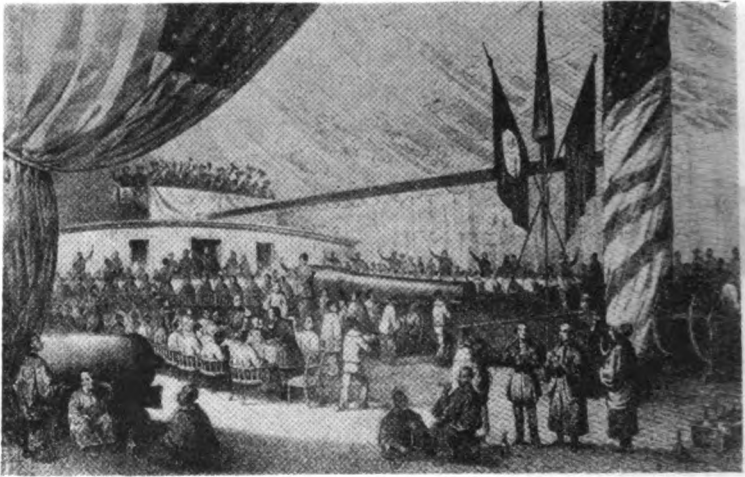
安政元年二月十日、米國使節ペルリ一行は横濱村に上陸して假應接所に於て幕府應接吏と會見した。

日本側林大學頭、井戸對島守、伊澤美作守、輔殿民部少輔、森山通譯、松崎滿太郎(儒者)の六人に對して米國側ペルリ提督、アダムス中佐(艦長)オーエイチペリ秘書、ポートマン書記、ウキリヤムス、アボット等で、茶菓の饗應を以て交禮を行なつた。二月二十九日(太陽曆三月二十七日)ペルリ提督は答禮の意味で、林大學頭一行並屬僚等數十名を旗艦ボウハンタン號上に招待して盛大なアツトホームを催した。此時我が隨員一行は御馳走を食べ乍ら米艦水兵の舞踊と奏樂を觀賞するチャンスに遭遇したのであつた。横濱野毛山圖書館所藏の高川文笠(當時の隨員畫工)の描かれた繪畫(第十五圖)を見ても想像する事が出来る。顔が黒くて黒んぼのやうに見えるが、之は餘興のため顔を墨

第五十圖



米水長舞の管樂の圖



日本應接使幕僚十六名ハータン上院の應與と樂舞

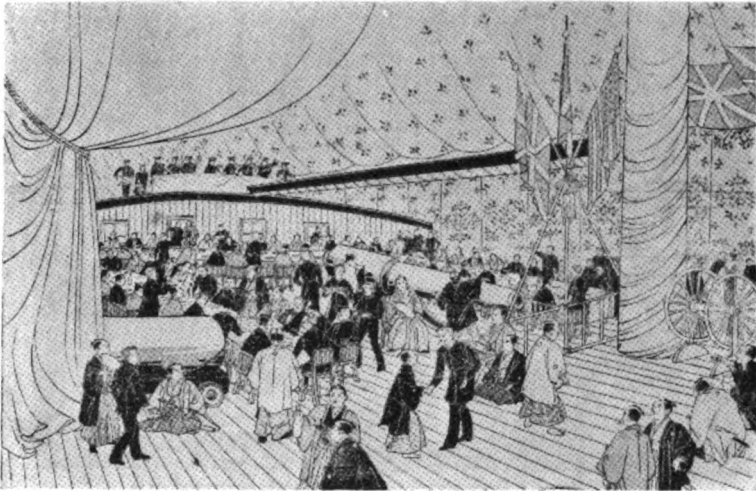
で塗りつぶして假装を施したものである。

舞臺の照明装置に蠟燭を點じ、九人の樂師の持つてゐる樂器は、タンバリン、トライアングル、ギター、ヴァイオリン、バンヂョ、フリユート、それに指揮者のバトンで、原色の黄とスカレットのモダンな洋服を着け、皆椅子に腰かけて演奏してゐる様子は、サキサホンこそないが、現在の流行ジャズバンドそつくりといふ型である。

第十六圖は、ペルリ日本遠征記所載のもので、安政元年二月廿九日提督ペルリが、我が日本應接使(全權)以下幕吏六十餘名を旗艦ポーハンタン號上に招待して音楽演奏の中に、午餐を饗した時の圖で、日本應接使は提督自身の室に於て、其他の属僚は上甲板の後部に種々の軍旗等を飾り、幔幕をはり廻らした中で饗應を受けたのであつた。砲身の上の處には二十人程の軍樂隊が太鼓を打ち大喇叭を吹奏してゐる。

第十七圖は横濱開港五十年史所載のもので邦人の描いたものである。原圖にも演奏樂器がはつきりして居ないが金屬製の吹奏樂器と太鼓等がよく描かれてゐる。人數に二三の相違

圖七十第



す嬰を更幕に中盤リルベ

圖八十第



圖の列行舞盆具水米

こそあれ、彼我の面白いコントラストである。第十五圖の高川文笠の描かれた黑人踊もこの日の出来事である。

第十八圖は安政元年二月十一日、米艦隊水兵葬式の圖、種烟翁輔筆である。米艦、ミシシッピー號乗組水兵、ロバート・ウィリアムスが同年二月八日死亡、幕府の承諾を得て同月十一日横濱増徳院境内(今の外人墓地)に埋葬の繪。其後日米條約に依り下田港を開いたので、同水兵の墓は下田港附近の柿崎村の玉泉寺に改葬し、現今も同所に葬られてゐる。

葬式の際は在泊各艦では弔旗を揚げ、葬列は悲壯な奏樂の中に靜に練つて墓地に来て、牧師の經文によつて始められ、最後に我が僧侶によつて行はれたのである。(横濱史料)

この日の事を「亞米利加船渡來日記」には次の様に書かれてゐる。之に依つて當日の葬送音曲の様子が窺はれる。「小船三艘に而横濱村字矢戸と申處え舟を着け鐵炮方樂人舟より出候得ば陸地に而はやし初候舟中に而棺をかき揚る追々異人上陸す、一番鐵炮二人次に三人次に二人都合鐵炮七挺次に笛一人太鼓一人塔婆持二人僧に似たる衣を着す、異人一人次に棺持四人手傳十人都合二十五人路次の案内として浦賀與力合原操藏異人不殘上陸いたし道々もはやし仕參り候處眞田侯御馬屋の近邊通り候時、馴見馴不仕異人異形の出立且笛太鼓の音に驚、數十疋の馬一度に跳蹴躍大騒動仕候……中略……葬式相濟歸る路々前の通りに、はやし仕候、尤眞田侯御馬屋處は、はやし休行過了後に又々はやし仕候云々。」

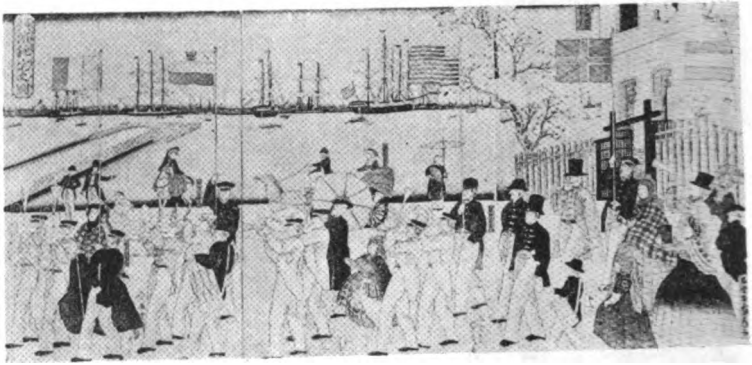
第十四章 居留地外人音樂

横濱開港と同時に、外人居留地には異人館が新築された。冬はビイドロ張の障子で密閉し、室内には炭火を澤山におこして置く。燃火の煙は銅製の煙突で排泄し、室内の烟らぬやうな仕掛に出来てゐる。夏は角力のまはしのやうなものを居間の上へ吊り、引けば團扇の如く風が起る奇妙な仕組を付けてあり。燈火はランポと名付くるビイドロ仕かけのもので晝よりも明い程である。座敷向の壁は皆張壁で柱の見える所はない、外廻りは皆石垣である。(元治元年記録) こんな所から洋人音曲が華かなメロデーで流れ出して來たのである。どんな音楽を奏してゐたことか、勿論土地の古老の言も確實でない。しかし乍ら各國々の民謡とか國歌とか舞踏曲を演奏してゐた事は、誰もが想像するに難くない。ラートオンスノースデリケン、ブランドウエインメツトソイクルウ、キーサルタツトベターレン、デコーニンフハンウエストハーレン。(萬延文久年間に謡はれたもの)

五雲亭貞秀や芳員等によつて描き遺された繪畫、橋本蘭齋等に依つて書かれた文献、之等は當時の情態を物語る唯一の洋人音楽資料である。當時世人が之等の西洋音楽に對して、如何に驚異の目を放つたかど、この繪畫と記述に依つて推察される。文久、慶應の名畫名著の中から拔萃轉載して見ると

文久元年横濱鈍宅之圖(第十九圖)貞秀筆である。鈍宅(日曜日)に居留地の外國人が音楽を奏し乍ら、遊覽散步する有様を筆者の眼に映じたる儘を、リアリスチックに描いたものである。圖の註書に曰く、「フランス人、オロシヤ人、アメリカ車、アメリカ人、イギリス人、かたふゑ、はゞけせきはうす。」とある。

五ヶ國の國旗が揚げられてゐる中で一ヶ國丈け註されて居ないが、旗から推して和蘭である事が分る。洋館には「はゞけせきはうす」と註されてあるが之は、HARBOUR GUEST HOUSEで横濱港迎賓館の事で、運上所の附近を描いたものと思はれる。



横濱の街の圖

樂器は各國々によつて異つて描かれて居るのが面白い。管樂器ではチユーバ、トロンベツト、コルネット、ホルンの様なもので「カタプエ」と説明をつけてある樂器は、片手に持つ喇叭の形をしてゐる。當時喇叭を稱して西洋の笛と稱へてゐたことから考へて、「片笛」はピストンの無い喇叭で、兩手を使用しない所から斯くの如き名稱を與へたものと推察される。

太鼓は鼓隊に用ひられた胴の長いもので、手風琴は婦人に依つて奏されてゐる。各國人がいかにも親しさうに老若男女打連れて活潑に音樂で調子をとり乍ら歩き遣つてゐる有様は、當時之を目撃した邦人の眼には如何に珍らしく映じた事であらうか。アツコルジョンの如きは發明されて間もないにも拘らず、既に演奏されてあつたことは珍らしい。

第二十圖は外國人どんたく遊覧行歩の圖である。前第十九圖と似かよつたもので「横濱史料」には各國人は盛に此の催を舉行し、隣保親善振りを發揮したものである云々と説明されてある。

各種の樂器を先頭にして國旗を押し立て、ねり歩く様は今日の、メデーのデモンストレーションに類するものであつた。樂器は管狀のものが多く、露西亞人の吹いてるうね／＼と長い喇叭は現在見ても珍らしい



く た ん ど 人 国 外

ものであるが、圖に不鮮明に出てゐるのが遺憾である。

第二十一圖横濱異人屋敷の圖は文久元年芳員之作、落着いた軟い色調の寫實的な繪である。日本繪師が眞面目に觀察した異人屋敷（アメリカ人宅）の内部の調理場と一家團樂の有様とを描いたものである。

ヴィオロンセロを弾く姿勢等は實に精細に描寫され、左指のポジション等も正確に描かれてゐる。たゞタイトルピンを描き落してゐるのが惜しい。

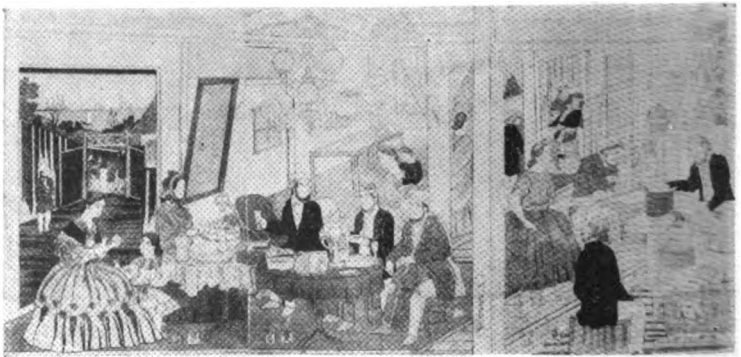
第二十二圖は貞秀南異人商館屋敷之圖である。

異人屋敷内部の生活狀況を描いた頗る華麗な繪である。左方の日本婦人は娼妓、右方は藝妓である。



遊覧歩行の圖

第十二圖



演劇人具服の圖

圖 二 十 二 第



圖 の 敷 展 館 商 人 異

圖 三 十 二 第

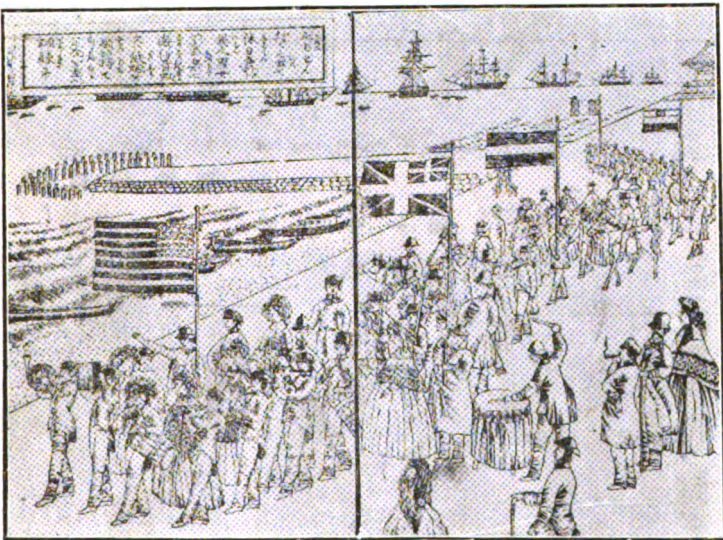


圖 の 由 營 行 遊 人 異



異 人 畫 關 圖

ヴァイオリン（ヴァイオリンの前身楽器で六絃）を胡弓のやうに持つて彈奏し、吹風琴と合奏してゐる構圖が描かれてゐる。華奢を極めた異人屋敷の内部から、硝子窓越しに碇泊の船舶を眺め、菓子園んで一家團樂食事に音楽にと行はれてゐる様は、エキゾチイックな横濱情緒を濃厚に描き出してある。

筆者はヴァイオリンを描いて居ながらも、描寫の誤りから六絃のものとしたとも考へられるが、附記しておく。

第二十三圖異人遊行音楽の圖（横濱開港見聞誌）

文久二年、五雲亭貞秀の描いたもの、註に「此の日はどんたくといつて休日なれば、異人男女、集て遊行音楽又は鐵砲を揃ひ持て足先を並て調練す」とある。

十數名の音楽隊を先頭に、數十名の一團が各國旗を押し立てゝの示威行列に如何に音楽が重要な役を務めたかゝ現はれる。路上に据置いてたゞいてゐる大太鼓は現在のテンパニーとも趣を異してゐるが、屋外に於

第二十五圖



大太鼓の圖

註に此の踊は外國にてどんたくには斯ようなる事を樂しむと思はる。吾國北奥蝦夷地にて鶴の子まひとて、眞丸に立ならび手びやうし揃へ廻りながらに踊るあり。然れば古代は萬國ともに喜びの時は何となく此ごとく踊りたる物と見ゆる。

又おしうぎある時は、手と手をにぎりつながり丸く立ならび片足地に踏て片足を上足首のこうらを天に向はず手はつながり合て又くるく〜とだんく〜に廻り踊る事ある國もありときくなれば、此日の踊り

ける踊ダンスに使用したものである。「どんたく」とは語源は和蘭語の *Zonder* である。土曜日を「半どん」と呼ぶのも語源はそこにあるのである。

第二十四圖 鈍宅なればの踊り。(横濱開港見聞誌)

註に「横濱渡來の異人集りて港崎町にて七月盆踊を初む大いに見物人入込たる時異人走り行く、是を見る其次月八日貞秀本町に用事ありて此日行きし時波止場に廣き所異人多數よりつどひ港崎町のごとく丸く並びその間少くはなれて大なる太鼓を打につれ男女兒迄一同に手拍手を揃へ足のふり廻しを揃へてくる〜と廻る何の事もなき沙汰に見ゆれど其國に有ることと思へば、問ひけるに、今日は「どんたく」にて踊るとのみ答ゆ。」とある。

第二十五圖 大太鼓の圖(横濱開港見聞誌)

もあへてたわいなき心にてをどるまじと思はる」とある。

オルゴールの圖 (横濱開港見聞誌第三編第十六圖)

註に「西洋より古く長崎に渡來の品にて、人よく知る所のオルゴールといふもの、小箱の内にて琴の音色を出すに大小ありて音の高きあり低きありて此品佛蘭西に製するを第一品とす。其異人の商館主人の奥居間にある國元より新船入津ありて、此オルゴール多く積み米り座敷の三方へ積みおきて主人船に用事ありて出行あとなにて男女の子供より集まり、此小箱大相のかぎをもつて一度に是をしらべければ、其音色大小合せて館内にビイドロ障子もさけるばかりなれば、子供は逃げ出して人氣もなき座敷に初めはしづやかなれども、後は嘶のきこへねばかり鳴り響きけるゆへ、此家に付ける所の南京をどろき此所にかけて來り見れば、人氣もなくふしぎながらも面白く音を止めたるあれば、またかぎにてしらべを出すをや。かくしてうろつくうちに主人の歸り來りて此體を見とがめて訝りいかり、南京も今さらにひよんな場合に出合ひ返答につまり大いにあやまりけると。此南京人本町(横濱)の商家に立ちよりて嘶しけるを此文中に出すなり云々。」とある。印刷の關係で圖を出しかねた事を遺憾とする。

第二十六圖 亞墨利加人訓練行列の體、其ノ一、二、

アメリカ油繪の玉板であると註されてゐる。彼地にて描きたるものを模寫したものであらう。寫實的な筆致でよく出來てゐる。樂器の種類も一見して直ぐ判る程に緻密に描かれてある。

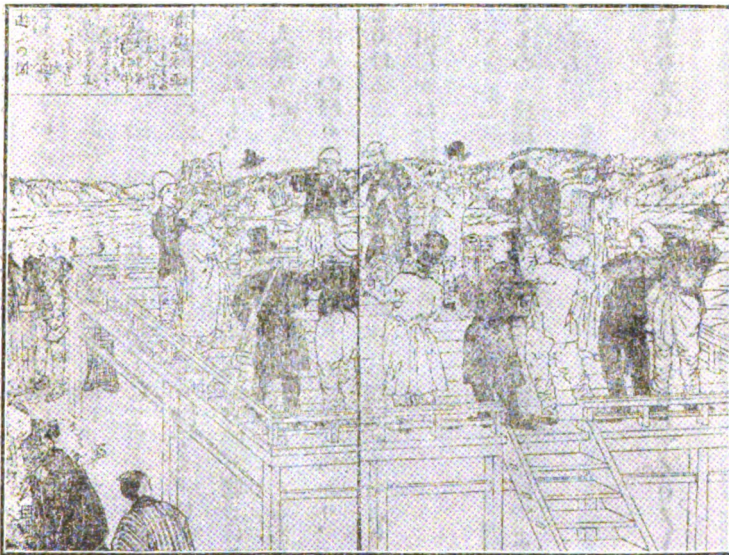
第二十七圖 舞臺音曲演奏の圖

註として「横濱にてアメリカ人休日に諸笛を持出して高臺に上り丸くつながり立て是を吹きならしてくりくりと廻り遊ぶの圖」とある。

圖 六 十 二 第

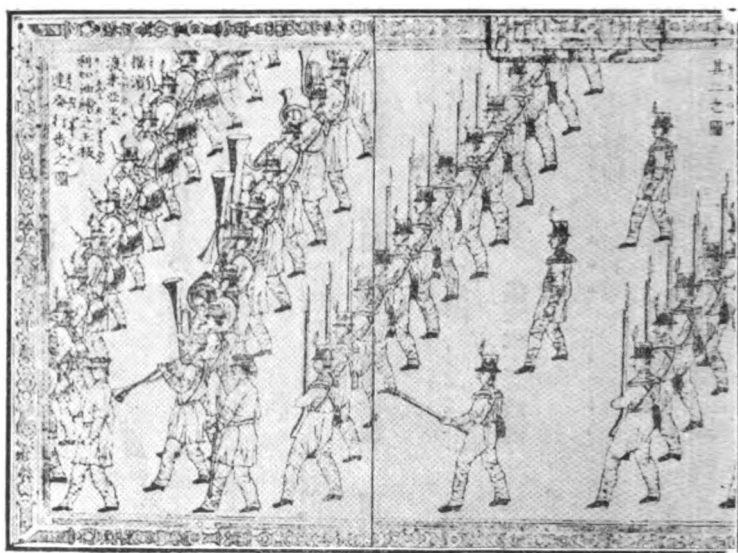


(一) 禮の行列護送人加利墨亞



圖之奏演曲音臺舞

第 二 十 七 圖



(其二) 亞加里人練行隊の體

此の繪を批評して、我が國オーケストラの濫觴であると主張してゐる人があるが、併し此畫面の中には、絃楽器は一つも含まれてゐない處を見るとブラス・バンドである事は誰もがうなづかれる事である。

此の屋臺の場所も土地の古老に訊くと神奈川方面であつたといふが詳でない。ともかく露臺上の奏樂の嚆矢といふべきものである。

又圖が無いが「横濱土産」に男女共腕を組み足拍子をととり乍ら鳴物オケウツに合せて踊るといふ記事がある。

「異人館に於ては夕食後踊あり男女とも腕を組み足拍子をととり鳴物に合せて踊るなり鳴物はウルゴロといふ琴、こきう、せう、ひちりき四色一所にしたる音色なり」と現今の人々が蓄音器に合せて踊るのと變りはないわけである。この書は横濱港崎町伊勢屋幸吉板で元治元年七月一日に刊行されてゐる。

第十五章 洋風歌曲の胎生

洋人歌曲

洋人音曲と共に歌はれたものは歌謡である。萬延年間に既に「洋人歌曲」と銘打つて次の歌詞が出版されてゐる。併しこの本は音楽書ではない。無論音譜は付してないものである。

刺土温司諾焉司得舞牽

貌爾馨度瑟屈 尾撤達彼答聯

得寧方勿司

吐合連。

譯曰 酒和糖漿 共傾一觴 誰其償值

西番國生。

尾牙底耳米那刺皮冊

外牽年尼的勿耳牽

野典年得舞牽臘温司去竟

司刺漫佐鹿吉弗牽。

譯曰 紅樓今夜宿誰邊

儂怯生人難敢前

如中大嚼如鯨飲

竟儂猪兒遠且眠。

刺典采西

婆賢哥面

可司可

焉刺典采西婆賢哥面

可司可

李氏譯之日

此席那須讓

佳人即上客

張氏譯之日

敬請小饗

筵宜泰卦

一譯未知孰是

外蕃官吏。

之は横濱繁昌記中にあるもので、洋人歌曲を漢譯されたものを更に日本語に重譯したもので、歌謡の意味を解する事は困難であるが當時唄はれてゐた唯一の歌曲である。同書は錦溪老人の著で噺談僊客の校本である。主に横濱開港

當時の光景を綴つたもので、外國船入津の圖や江戸から横浜への路程圖等が口繪に出てゐる。序に

海水接天接水。 東來一望意悠悠。 注眸試問房隘總。 無數舟船漲不流。

活惚カボレシ

活惚は西洋歌曲であるとして、こゝに掲出したのではない。併し乍ら活惚を純粹の日本曲だと断定するものでもなく、西洋音楽の影響を多分に受けて生れ出た、混血（ミッシュラット）の歌曲と見るのが穩當であると思考するのである。

昔日新話、元治二年の春の記事中には「封間末社の入亂れ、おどけ踊りのかつほれあれば……」とある。かつほれは平坊主の創作であるといふが、彼は明治四年二十九で死亡してゐる。（鳶魚隨筆）

藤澤衝彦編の明治流行歌史には「わたしやお前にカッポレだ」から起り幕末明治維新時代に平坊主のおどけ踊から明治の中葉にかけて素晴らしい勢で流行したものであるといふ。又曰く白い着けに淺黄色の投頭巾赤い鼻緒のつつかけ草履といふ扮装をした一團が、萬燈を擔いで吉原への入込み興行が流行の端緒をなしたが、元來之れは住吉踊の流を汲むもので長柄の晴織小蒼天を街頭に開き、頂に白幣を捧げ、擔に紅幕を張り二人これヲ携へて其下に立ち、片菜（かたな）織柄を蔽いて三絃鼓角に代り、櫓々錚々、和して一種の曲を爲し、兩三の活佛、手帕（てぬぐひ）を扭（ひね）つて額を括り、手を連らねて舞ひ、踵を列ねて踏み調子軽く踊り觀するもの即ち臚僧、住吉の祠前に踏歌する風俗を濫觴として其の手を一新し、奇曲妙調、腰を捻り裳を撐げて阿娘を形し面を掩ひ刀を帯びて情男を寫し、道化芝居の滑稽を演ずる者の提歌としての住吉踊唄である。かの「伊勢音頭と稱するものは蓋し此僧輩の末寺歟」と「東京繁昌記」にはるゝヤアートコセ踊唄にやがて、深川節を加味して、本所かへを唱ひ、活惚を新作して、こゝに愈々初代梅坊主が活躍の時代を展開す

るのである云々と書いてゐる。

田邊尙雄著「東洋音楽概説」に、「西洋音階を使用するに至つたことは可なり古く、我が邦に於ても江戸時代に長崎を通じて洋風の旋律が輸入され「カツポレ」の如き洋楽形式の音楽が行はれるに至つた」と書いてゐる。又「江戸時代の音楽」には「外國音楽の影響に依つて生じた端唄も相當にある。實例を以て言へば、伊太利の古い舞踏曲が歐羅巴人より傳へられそれを三味線で其の儘演奏して來たものが「かつほれ」である。是は伊太利の「カポーレン」といふ曲である」といはれてゐる。

四籠仁遷の曰く「活惚は文久年間の作でもとは「活放連」と言つたものである。これは、ギリシヤの古い舞踏曲で往時來船の英吉利西軍艦内の軍樂隊が演奏して居たものを、軍艦見物に行つた品川邊の人々が聞いて來て之を模倣したものであり、この曲を聞く爲に幾度も通つたと迄傳へられて居る云々」と。

四籠仁遷は仙臺藩の人、明治十七年の音楽取調所時代の卒業生で、明治中年代の民衆音楽の貢獻者四籠納治の實弟に當り、我が音楽教育搖籃期に寄與した東北地方の第一人者である。

要するに此の曲は日本人の創作であると信じ難い。明るい曲想を見ても、洋樂の形式を踏襲してゐることから推しても、西洋音楽の模倣作であると推察する外は無いのである。品川彌次郎が明治初年の作に、

宮さま 宮さま 御馬の前で ひら／＼するのは 何ぢやいな トコトヤレトヤレナ

があるがこの作曲者に就ても種々なる説がある。和蘭の行進曲が長崎に於て日本化したものであるとも傳へられて居るが、又一面には短い曲であれば偶然合致したものであるとも傳へられてゐる。ともかく西洋曲の日本への移入であり消化であり、燒直しであると言へる。安部正美が一九二六年、ボストンでエンディカット賞に當選した作品「ポスト

ン生活の思ひ出」と題する四樂章からなる大曲の中に此の「かつほれ」の旋律が用ひられて居る。日本の持つ固性的なベーツスを「かつほれ」の旋律の採用に依つて表現したものだと思ふが、結局日本音楽といふよりも、寧ろ洋樂的な色彩の濃厚な曲であつた。

明治七年（一八七四年）刊行のものに「Japanische Volksmusik（日本旋律）」Sibold ヨングヘル・ホン・シーボルト著がある。日本旋律がそのまゝに寫し出されて居ない處に之にも亦ハーフ・プラットの感じがないでもないのである。

第十六章 歐風軍樂隊の起源

徳川幕府の末期に於て諸藩各大名が漸く軍事を泰西の兵術に倣ひ、傳來の陣鐘や陣太鼓等も新式の蘭式鼓笛隊に換へ、行軍訓練に相應しい俗謡等を選び、軍容を整へ、士氣を鼓舞しやうとした時代に、我が軍樂が胚胎したのである。

慶應元年十月 江戸西丸下に定番役出張警衛し、毎月横濱より交代したのであるが、其往復は英式歩兵一大隊砲兵一小隊軍樂師一隊（蘭式の鼓隊で大太鼓の外は二十歳以下の少年である）で、皆緋羅紗の戎服を着てゐた。明治元年出版の「英國歩操新式圖解」には之等を物語つてゐる。此の年の諸家の銃隊は諸方の訓練場に至るに歐風の大鼓を打鳴らして隊伍を組んで密集隊型で行軍してゐた。當時用ゐられてゐた鼓譜に「西洋行軍鼓譜」がある安政三年刊行

のもので所謂蘭式鼓笛譜である。又一和蘭千八百六十一年式太鼓教練譜」等がある。

慶應二年 五月からは砲術行軍等の調練には西洋の笛を用ゐた。服装も筒袖黒陣羽織股引を用ひられた。(武江年表)
西洋の笛とは金屬製の軍隊喇叭を指して居る。明治四年頃迄の記録にも各種の喇叭を諸笛と稱され、明治八年頃に出版された小學讀本には西洋の笛と註が附けられてある。

此年に福井藩は幕府の命を奉じて横濱に佛國公使館付陸軍大尉を聘して佛式調練を行つた。鼓隊の制あるに拘らず佛蘭西式喇叭を容れて軍事上の號音たらしむるの可を主張して、之を採用するに至つた。之が我國軍隊喇叭の濫觴であつて、軍樂隊の演奏者は之等の喇叭手より輩出したのである。

當時の喇叭手小篠秀一の如きは京都の人で鼓擊喇叭の技を佛人ギツチに就て研鑽し、先天的に其技に長じ、時の山田兵部少輔に擧げられ、東京に於て兵學頭曾我祐準の麾下に喇叭教官となり、軍樂隊の制成るに及び軍樂隊長に補せられ陸軍々樂隊初代の隊長になつたのである。

明治二年九月 薩摩藩が藩士の鎌田眞平氏を差引人として鼓隊の中から三十名を撰拔し、軍樂傳習の目的で上京を命じた。

一行三十名英國船にて出帆四日の後神奈川港に上陸、翌五日江戸神田島津邸に入つた。十月初旬横濱に至つて英吉利西軍樂隊長フエントンに就て軍樂の傳習を受けたのである。最初の一ヶ月間は山手某寺院内で練習をはじめ「右向け」「左向け」の調練と號令喇叭の吹き方等であつた。十一月に入つて横濱本牧^{ホノカサ}北方の妙香寺に移つて練習を繼續された。彼等は見做れない五線紙上の讀譜練習で攻められたのである。服装はチョンマゲは落してゐたが、頗る振つた恰好で帯刀陣羽織に膝迄の股引を穿いて居たのである。

同軍隊は横濱駐劄の英吉利公使館護衛隊歩兵第一番隊に屬し、通稱「赤隊」といはれてゐた。シオン・ウイリヤム・フニントンが樂長であつた。傳習生たる三十名の擧拔生は只一つの遊軍で固より樂器等の設備もなく爲に藩主はフニントン樂長に托してロンドンのベツソン會社へ樂器の註文をした。併し當時は歐洲各國への航路は未だ開けず註文品到着までには、半歳を要するといふ始末で其間鼓隊の練習と讀譜練習等を毎日繰り返してやつてゐた。

此の傳習中にフニントンは、我が天皇陛下に對する頌歌の必要を説き茲に國歌制定の擧起り、歌詞の選定成ると共にフニントンの作曲（七十九頁參照）が出来上つた。嚴密に言へば薩摩藩で作つた天皇陛下禮拜敬頌の歌である。それが翌明治三年九月八日越中島で明治大帝陛下の御閱兵のあつた時に同藩の樂長が之を演奏して天聽に達し、明治九年の天長節の祝賀式迄は之を演奏されたのである。明治二年「君が代」選定前には天皇陛下及神社佛閣に參拜の時の曲が無かつたかといふが、そうではなく、定められた笛の譜があつたのである。

明治三年六月 曩きに英國へ注文した軍樂々器が到着した。樂器の種類と編成の記録を擧ぐれば、差引人樂長役鎌田眞平、當時年齡二十六歳であつたが幾何もなく職を辭した。名前は新平、或は直平とも書かれてゐるが、直平は眞平の誤りなるべし。

コルネット	額川宗之進 (二〇)	(症之進とも書かれてある莊之進の誤記か)
フルートピッコロ	飯島 太十郎 (一八)	
コルネット	精松伊太郎 (二〇)	(阿部松とも書かれてある)
ユーフォニオン	尾崎平次郎 (一八)	(後海軍出身)
クラリネット	坂本定次郎 (一六)	

E♭	ペンチルホーン	國生宗次郎 (一九)
B♭	クラリネット	弓削六十二 (二七)
	トロンベツト	四 謙 藏 (二五) (鎌田榮長の後を次ぎ指導者となる人)
E♭	ペンチルホーン	額川吉次郎 (二五)
	テノールトロンボーン	武田直左衛門 (一八)
F♭	ペンチルホーン	精松清之進 (一八)
B♭	ベス	濱田正太郎 (二七) (後海軍出身)
E♭	ベス	國生 孫 七 (二七)
B♭	クラリネット	谷山嘉次郎 (一六)
B♭	ペンチルホーン	野田雄右衛門 (一九) (後海軍出身)
	テノールトロンボーン	原 田 八 郎 (一九) (伊勢と改姓海軍出身)
	クラリネット	溝口吉之助 (一六) (海軍出身、嘉之助ともある)
E♭	クラリネット	額川宗次郎 (二二) (海軍出身)
	コルネット	弓 削 常 助 (二七)
	クラリネット	川 畑 勇 次 郎 (一八)
	大太鼓	肥後權之丞 (二五)
	ベスクラリネット	鳥越新次郎 (一八) (海軍出身)

クラリネット 溝口新次郎 (二六) (海軍出身)

小太鼓 川畑金之助 (二六)

トクラリネット 高崎矢一郎 (二四) (後能行と改名海軍々樂長となり中村祐庸を補佐し海軍々樂隊の爲めに貢獻す、現に神奈川縣下の戸塚に居住す)

コルネット 内野熊太郎 (二六)

アルトホーン 長倉彦二 (二八) (後中村祐庸と改め海軍々樂長となり海軍々樂隊の基礎を開拓した)

アルトホーン 四元平四郎 (二八) (後義豊と改め陸軍々樂長となり軍樂隊の基礎をつくつた)

森山孫十郎 (二八) は傳習中死亡した。

傳習生の主なるものゝ氏名を挙げると、次長は精松伊太郎小頭は長倉彦二、額川宗之進である。

軍樂鼓隊の組織は横笛一挺、喇叭一挺、小太鼓一個で大隊毎に大太鼓一個を加へたのである。

新樂器の到着によつてバンドの編成も定まり、具體的教育を開始されたが、同年九月に至り藩藉奉還の爲、薩藩は横濱在留中の傳習生を歸藩させることになつた。此間約一ヶ年間に於いて傳習を受けたものは僅々四五の曲譜で、即ち日本禮式(當時編制の君が代)と英國行進譜並徐行進譜等である。其他に單に「英式」てふ曲で鼓笛隊に使用されたものもある。これは英國行進譜と同じものと認められるが、當時の傳習歌曲なればこゝに掲載する。「英式」といつたものが後に維新マーチと改題されたものである。

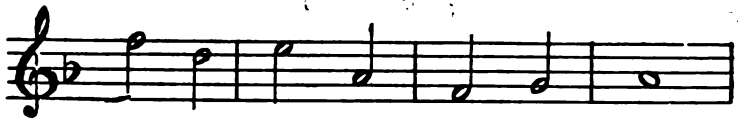
この曲は前田軍樂兵曹長に編曲して貰つたものである。彼の岳父は明治維新の宇和島藩の鼓隊の指揮を司つた人である。

次にフエントン作曲の日本禮式、所謂當時の君が代をも掲載する。これは川村虎藏投稿の「教育研究」や、山本壽著

維新マーチ



フェントン作曲 最初の
君が代



「国歌集」に発表のものとは多少曲譜が異つて居る。

以前に發表されたものは、第二段第二小節の「上」が二音下つてゐるので、この曲よりは歌ひ易いが、ともかく一風變つた曲である。(第二十八章若が代の項参照)

軍樂隊傳習生歸藩後、藩主は第一音樂隊第二音樂隊を編成して前の傳習生をして之が教授の任に當らしめ發達に努めてゐた。而して四國九州地方の各藩に於ても英式曲を奏するやうになつたのである。

薩藩が他に卒先して洋式軍樂を採用了したのは軍樂の洋式化と殆んど同時であるが、遡つて案ずれば更に南蠻紅毛音樂時代に其の遠因を胚胎せしめてゐる

たものと考へられる。『文久三年、生麥事件發生によつて英國艦隊の襲撃を受けた際、海上遙かに敵艦内に起る嘯唳たる軍樂隊の音を聞き、其の勇壯なる状態を目撃し其感激に依つて逸早く劃時代的な此の計劃を起した云々。』と書いてあるものもあるが、島津久光公の其意企那邊にあるかを思ふものである。

第十七章 陸海軍々樂隊の創設

明治四年 三月十三日 勅命により薩長土の三藩は更に、御親兵を仰付けられた。薩摩藩からは歩兵第四大隊、砲兵四隊(四砲註)が出京することになり、第一第三の各大隊には英式軍樂隊を附けて上京、市ヶ谷の現在の陸軍戸山學校の位置に駐屯せしめたのである。

同月兵部省が新たに設置され、軍樂隊は其所管となつた。五月には各藩から蘭式鼓手を召集し軍樂を傳習せしめたのである。時の軍樂指導者は英國軍樂隊長フントンであつて、八月より向ふ十八ヶ月間、月給二百元といふ兵部省の御屋であつた。九月に至り兵部省を廢し陸海軍兩省が新設され、従つて軍樂隊も二分され陸海軍々樂の基礎が定められたのである。フントンは引續き其後の海軍々樂を指導して行つた。

陸軍省に於ては四元義豊以下若干名と兵學寮佛蘭式喇叭隊とが合同して、陸軍々樂隊を組織し、西録藏が同隊長に補せられたが、間もなく病氣辭任するに及び喇叭教官であつた小篠秀一が其後を襲ひ、次いで陸軍初代の樂長に任せられた。

明治五年 七月、陸軍は英國式を廢して佛蘭西式に改良されたので軍樂隊も亦廢されフエントンの傳習生數名は

海軍々樂隊への編入を志願して一部は海軍々樂隊に投じたが他は悉く御親兵を志願して、更に佛蘭西式軍樂を傳習せん事を希望してゐた。併し當時佛蘭西軍樂教師が無かつたので僅に復習をして居た丈けである。間もなく喇叭傳習の爲めとして佛蘭陸軍四等樂手喇叭伍長ダクロンを傭聘した。彼は多少他の軍樂をも學ばれて居たので、喇叭以外の軍樂をも教授致度旨申出た。由つて同年九月 御親兵の樂人をして陸軍教導團に入營せしめ茲に始めて佛蘭西軍樂の傳習を受くるに至つたのである。併しダクロンは金屬製樂器には熟練してゐたが木管樂器即ちクラリネットやフルートの類に至つては不十分な點が多かつたので教授の任に適しなかつた。恰度其時我國在留中の伊國のアンヂェールといふ人が居て「クラリネット」や「サクソフォンヌ」の熟練者であつたので直に其囑託を命じたのである。(因にいふ、アンヂェールは伊太利の大尉にして軍樂長の職に居り諸般の音樂に通じ、曾ては歐洲に於て數百人の大奏樂の指揮者をした經驗の持主である。)が其後故あつて解備となり同七年更に佛國より一等軍樂手ブレナッシュを招聘してトロンボーン、ベース等の教授を受ける事殆んど二ヶ年有半、各樂器の使用奏法を會得した。ブレナッシュは解備されたがダクロンのみは指揮者として明治五年より十一ヶ年間其の教授に任じ、明治十六年に至つて職を辭した。

同年九月十二日 鐵道開通式の樂兵隊

『朝九字(時)御出門新橋鐵道館(當時停車場の譯語なし)に入御高等官外國公使等に拜禮すみ徐に停車場に御進行列車に入御、一同乗車列立の次第は一車二車護兵、工部省長官鐵道頭、三車御官方太政大臣侍從等扈從、四車參議卿、外國公使書記官等、五車、卿大輔少輔、外國代理公使書記官等、六車司法官軍人等、七車華族等八、九車式部寮侍從等

第十字御發行第十一字横濱鐵道館に着御、縣下衆庶への勅語、外國商人の祝辭等あり、十二字御發車第一字新橋鐵道館に還御勅語あり、衆庶への勅語と工事に係れる者に御賞詞あり、夫より延送館に臨幸勅任官及び各國公使等の祝詞を受けさせられ御歸營。……中略……

此日行幸の際國旗を掲げ、國樂を奏し、新橋横濱鐵道館には近衛兵鎮臺兵の警備あり、御上車の際は近衛砲隊、日比谷操練場にて祝砲百一發し品海艇泊軍艦より二十一發つゝ、賀砲を發つ御車御歸車の時、新橋にて樂兵隊奏樂す云々。(日要新報)

明治六年 一月、鎌倉に野營演習を行ふに際し初めて軍樂隊が獨立した。鹿兒島縣人草場新作(後征韓論事件に關して歸國した人)が専ら監督し風教師ダクロンの指揮を以て稍々具體化した軍樂隊を長くも叢聞に述したのであるが、是れを以て我が軍樂隊の光榮ある御前演奏の嚆矢である。當時營所を和田倉門外、備前邸に置いたが、幾何もなく霞ヶ關に移轉した。

明治八年 初期軍樂隊條例設定と服制。此年軍樂隊に關する條例を規定せられ、樂長以下官等を他兵科に準ぜられた。

又一般庶民の奏樂依囑にも應ずるの規則を設けられた。而して同年十一月には初めて仙臺の大槻某の祝賀の宴席に於て奏樂した。之が洋式音楽を市井に開放提供したる最初の試みで、現時の出張奏樂請求手續に依る奏樂のイニシヤアテイヴといふべきである。

服制は正略二装で、正装は上衣黒絨を用ひ之に紺青色の肋骨を付け袴は茜色絨に紺青の側章を施したもので帽子は黒青の艶革(バケツ型)に白羽毛の前立を附され、略装は他兵科と同じく黒絨蒐縁付帽子は黄緑を附せる黄緋の大黒帽

を用いたのである。

組織、兵學寮の青年學校が士官學校と改稱し教導團と改るや、軍樂隊は教導團に直屬となつた。同團歩兵科志願の一部を加へ當時四十餘を一隊としてあつた。

海軍々樂隊並鼓隊は、海軍省の海軍歩兵隊及海軍砲兵隊の附屬となつた。中村祐庸が樂長となり九名の樂師が主屬となつて二十七名の生徒の軍樂鼓隊の養成訓練に努めた。また曩きの英人軍樂隊長フ・レントンは兵部省の廢止と共に海軍々樂隊の方へ廻され引續き軍樂の指導に従事した。

陸軍々樂隊に於ては指導者なく陸軍々樂隊を組織するや、海軍側から池上、四元外數名を無理に引取つたといふのもこの當時のことである。

この年には軍樂隊の官等級が設けられ、軍樂隊長は曹長相當、軍樂次長は權曹長相當、樂師は軍曹相當、樂手は伍長相當と制定せられた。又樂器の編成も發表せられ左記の記録が胎されてゐる。

樂器編成表

明治四年九月

フリートピッコロ……………	第一ベスクラリネット……………	E♭第一トロンベツト……………
E♭クラリネット……………	第二ベスクラリオネット……………	E♭第二トロンベツト……………
B♭第一クラリネット……………	B♭第一コルネット……………	E♭第一オルトホーン……………
E♭第二クラリネット……………	B♭第二コルネット……………	E♭第二オルトホーン……………
E♭第三クラリネット……………	フリユゲルホーン……………	E♭第三オルトホーン……………

E♭ 第四オルトホーン……………	—	ベストロムボン……………	—	小太鼓……………	—
E♭ 第一テノールホーン……………	—	第一ユーフォニオン……………	—	大太鼓……………	—
E♭ 第二テノールホーン……………	—	第二ユーフォニオン……………	—	合計……………	三六名
第一テノールトロンボン……………	—	E♭ ベス……………	—		
第二テノールトロンボン……………	—	B♭ ベス……………	—		

明治七年 海兵隊に軍樂隊を附屬せしめた。爾來海軍は軍樂に益々力を入れ出した。

明治九年 海兵隊が廢せられたので、別に軍樂科を設け、軍務局の管轄となつた。十二月海兵隊の解除に際して鼓隊員は喇叭手として信號兵に轉ぜしめ、信號喇叭の基礎を作つた。軍樂專務のものは軍樂手として其儘残したのである。又官等が改正されて、樂長は判任十等官、樂次長は判任官十一等官、樂師は判任十二等官、樂手は判任十三等官、樂生は十四等官となつた。

明治十年 創立以來の軍教師フエントンの職を解いた。また同年三月、西南の役が起り海軍々樂隊は河村參軍に附隨して出征したのである。

陸軍々樂隊も同月軍樂隊長小篠秀一、一隊を率ひ參加し征討軍團の高瀬本營に在つて、それより各地に轉戦し大いに軍旅を慰め、將卒の士氣を鼓舞して功績をあらはした。東京に凱旋したのは十二月で此間東京に於ける留守隊は生徒を召集し教師ダクロンが教育を繼續し軍樂次長四井政信克く軍旅を振肅された。

同年九月二十三日 軍樂隊奏樂、西南の役も勝敗の數既に決し官軍は明日を以て愈最後の總攻撃を行ふと云ふ九月二十三日の夜、恰も仲天には明鏡一基が皎々と冴え、屍の累々として横はり鮮血の河をなして悽慘たる戰場を照し

眞寂寂として聲無く、陣營は死のやうな静寂さに支配されてゐたと思はれる時、官軍陣地の最高所である大明神山の頂上から、突然あまりにも突然、唳々として勇ましい軍樂が響いて來た。半歳以上血腥い硝煙彈雨の中で闘ひ、疲憊した魂を抱いてゐるつはもの共の精神に、敵味方共に如何に清新なそして甘美な鎮魂曲とはなつたであらうか。こは官軍の計劃で、明治維新の大忠臣であり、陸軍建設者の恩人である前陸軍大將近衛都督兼參議の要職にあつた西郷隆盛に對し、敬意を表し武士道の儀禮をつくして最後の惜別の奏樂を行ふたもので、鹿兒島に回航してゐた軍艦から艦々戰場に招致して奏樂せしめたものであつた。

官軍本營は山縣參議を始め諸將兵士之を聽いて戎衣の袖を絞つたといふことである。

明治十一年　陸軍々樂隊長小篠秀一、職を辭し次長四元義豊其の後を襲ひ同年六月、生徒を市井の少壯より募集し、併せて各鎮臺歩兵科よりも志願者を募集し教育補充するの規定を定めた。之は現今に於ける生徒召集規則の濫觴である。海軍に於ても陸軍と同様に軍樂生徒十名を一般青年より募集して軍樂の専門教育を授けた。

第十八章　基督教讚美歌の生誕

吉利支丹宗禁歴以來暫くの間は宣教師の影が見えなかつたのが、安政の開港と同時に新舊兩派の宣教師が續々と渡來して傳道に従事するに至つた。

羅馬天主教とプロテスタント派が長崎を起點として東漸し、又ギリシヤ正教會は函館を起點として西漸して來た。従つてプロテスタント新教は亞米利加人の宣教師、天主教は伊太利人又は佛蘭西人が多く、ギリシヤ正教は露西亞人

であつた。

ジョン・リツギンス、 シー・エム・ウキリヤムス、 ジェー・シー・ヘボン夫妻、 エス・アール・ブラウン、 デー・ビー・シモン、 ジー・エフ・フルベツキ、 ゼームス・バラ、 デヴィッド・タムソン、 ニコライ、 ショナサン・ゴール等は文久三年（一八六三年）迄の來朝者である。

續々來朝したが、到る處基督教國禁の制札が目を覆ひ公然其教を傳へることが出来なかつた。

萬延元年 函館に來られた露西亞人、ニコライが明治五年に至つて、露國領事館の費用を以て聖堂を建立した。我が東方教會の嚆矢で、當時函館のギリシヤ教會のみが得た特權ともいふべきものであつたのである。同教會の司祭は軍艦附長のマホフで傳道には一切從事せず、殆んど露西亞軍艦の乗組員や領事館員等の爲の教會であつた。

明治五年 ニコライの上京後は、アナトリー博士（明治四年十二月來朝）其後を繼いで劃策を廻ぐらしてあつた。オルガニストのサルトフが來たつて、教會音樂の基礎確立に努力したのもこの當時で、サルトフは明治六年滞在一年にして歸國した。明治七年露西亞出版の「我が正教會創業時代」といふ三井道郎譯書に據つて見るに、當時の事がよく観はれる。

「聖體禮儀は日本語で行はれ少數ながらも日本人の詠隊が組織せられてゐて、讚美歌を歌ふてゐる。目下は未熟のやうであるが段々進歩する見込がないわけでもない。調子はロシヤ教會で用ゐるのと殆ど同じである。終夜禱も、翻譯が出来上つて日本語で行はれることゝなつてゐた。云々」

當時、讚美歌の重音合唱等がこの會堂で盛んに歌はれ、澤邊琢磨が此合唱を聞いて、日本語の讚美歌を創作したといふエピソードさへある。

土佐の志士坂本龍馬の高弟澤邊琢磨は劍客として函館に脱走し、ニコライの布教する宗教を朴滅して彼を驚さうと決心して出掛けた人であるが、遂にニコライ師に説教されて正教會唯一の信者となり、音階も知らないこの武骨一點張りの武士が、日本語の讃美歌詩篇第一百三番を歌ふたといふのである。以つて挿話となさざる可けん哉である。

大沼竹三郎が澤邊琢磨に直接聞いたといふ言葉が「樂星」第三卷第十號に載せられてゐるが、何でも其の頃西洋音樂の知識どころでなく何一つ知らないので、唯だ露西亞の軍艦の水兵達が唱ふのを聽いて、自ら努めて之に眞似たのであると。直接聽いた人の話に據ると、日本の謡曲の節が七分に義太夫節が二分、あとの一分が端唄のやうな節で形容の出来ないやうな變つたメロディーなので、参指の露西亞人達も其場に居たくまらずに脱け出した程であつたと言はれて居る。其の旋律や音程、調子等を想像するに餘りある。

第一百三、聖詠（ダヴィドの詠世界創造のこと也）

我が靈や 主を 讚揚げよ

主 我が神や 爾は 至りて大なり

爾は 光榮と 威嚴とを被れり

我 生ける中 主に歌ひ 世を終るまで

我が神に 歌はん。

第一百三は「一」より「三十五」まであるを「二」より「三十二」迄と「三十五」を省いたものである。（三井道郎談）

萬延元年三月に來朝したジョン・サン・ゴープルは、基督教の日本化といふことを唱へた人である。會堂の構造は寄席

風にすること、禮拜の讚美歌には喘唄や都々逸式の曲譜を用ひ、樂器は三味線又は琴を用ふる事の必要を力説したのである。彼は路傍説教の時など禮贈する時に「オ、天にいらつしやる 私の旦那さん」と言つたとか後世末代迄の語り草となつてゐる。當時來朝の宣教師達は純粹の音樂家でこそは無かつたが、多少の音樂的素養を備へてゐるが、ゴールだけは音樂的にも文學的にも惠まれて居なかつた。しかし聖書や讚美歌の日本譯を最初に手つけた人である。彼の慶應二年の讚美歌の譯に、

よい國 あります

大そう 速方

信者 榮えて ひかりぞ。

之は「There is a happy land」といふ英語讚美歌の譯であるが、後にフ라우ン博士は其の著讚美歌集に

たのしきくには とほくある

信者 榮えて かどやく。

と譯して歌はれた。それが明治十二年十一月 カーチス編の「さんびのうた」には

たのしきくには 天にあり

しんじや さかへて かどやく。

と譯歌してゐる。又明治二十年出版の植村、杉山、奥野等の「新選讚美歌」には

たのしきくに 天にあり

聖者は さかえ かどやく。

と譯され現今使用の讚美歌に接近してゐる。三百五十番には、

あまつみくには たのしきぞ

清く 友がら うちつどひ。

とある。最初のゴープルの譯は拙劣ではあるが兎に角最初の讚美歌であるだけに尊い。この譯歌詞はゴープルの持つて居た馬太傳の扉に自身で鉛筆書きしたものが國民新聞社記者會我部某の所に殘されて居たのであるが、大正十二年の大震災で同書も烏有に歸してしまつた。

第十九章 各派讚美歌の翻譯出版

明治七年になると基督教各派は中央に集中しはじめ、プロテスタント新教も羅馬天主教も次第に勢力を増大して來た。三派の教へる聖歌や聖樂もそれ／＼其國の特色を具備してゐた。讚美歌の出版も時を経るに従つて次第に其數を増し、教會といふ教會には皆オルガンが備付けられた。但しギリシヤ正教會のみは儀式には一切樂器を用ひなかつた。讚美歌の合唱の際には、指揮者がAの音叉コンルトを以て合圖をして無伴奏のコーラスである。これは現在も同じ方法で行はれ伴奏樂器等は使用して居ない。この合唱曲譜も一寸變つたもので、各小節の縦線が無く節奏がず／＼になつてゐて、他派のものとは頗る趣を異にしてゐる。彌撒ミサに「ヘルビイムの歌」や「親しみの捧げもの」や「アベマリヤの讚歌」等ギリシヤ時代の階調其のまゝのものもあつた、が殆んど出版されなかつた。

明治六年 仙臺福音會の詠歌隊の記録に因ると、當時讚美歌を歌つたことは事實で、最初は聯禱の時に「主憐め

よ」の一句位を歌つてゐた。之は詠歌隊の唱ふもので、大聯禱の「我等安和にして主に禱らん」といふ祈に對して、詠歌隊は「主憐めよ」と歌つたものである。(Antiphone 二組の唱歌者が交互に掛合に歌ふ Anthem の如きものか)それが明治六年の九月頃に至つて

『聖天主 聖勇毅、聖常生なる者 我等を 憐めよ』

『主の獨一子 及び言なる者 云々……』

の聖歌を歌ふ様になり出版にもなつた。其後教會が建てられてからは、ニコライの東京神學校中途退學者等の歸郷で詠歌隊を組織するに便利になり漸次歌はれるに至つた。而して之等の讚美歌も改訂して

『聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者や、我等を憐めよ』

『神の獨生の子並に 言や死せざる者にして 我等を救はんが爲 甘じて聖なる生神女永貞童女 マリヤより身を
取り 神の性を易へずして人となり、十字架に釘うたれ 死を踏破りし ハリストス神や聖や聖三者の一として
父と聖神と共に 讚榮せらるゝの主や 我等を救ひ給へ。』と歌つた(聖體禮式)。

同六年、横濱に於てルーミスが第十六編の讚美歌を翻譯した。此年は日本基督教に新しいエポックを劃し、寛永十五年より二百三十有五年間禁止の耶蘇教制札が二月に漸く撤去され庶民は信仰の自由を得るに至り、米國宣教師三十九名が來朝布教に従事し、横濱浸禮教會の設立を見るに至つたのも此年であつた。同年五月、ブラウン博士が讚美歌を翻譯した。彼は語學に秀で日本語もよくしたので二月來朝早々に不拘、讚美歌を日本歌詞に譯出したのである。

天に ますます わろ われ等の 父よ

みなを あがめて たふとませたまへ

二

みまつりごとを よに のぞませよ

てんになる おんむね ちにも なさしめよ

三

にちえうのかてを さづけたまへよ

われ ひと ゆるせば われを ゆるせな

四

まどひに ためし みること なしに

あしきより 我れを すくひてのがせよ

五

みまつりごとゝ ゐこうと さかえも

みなかみに きせん よゝまでも あゝめん。

明治七年 ブラウン博士は小讚美歌を出版した。彼れの子息も來朝協力の上、之が印刷に従事して立派なものを完成した。此の讚美歌に就てペンネットは次の如く言ふてゐる。

「ブラウン博士が讚美歌を編纂しはじめた時分は、日本人は歌ふことは出來ぬと云はれて居た當時で、其の主の祈の譯は恐くは日本語でかゝれた最初の讚美歌であらう。一番最初に出版された讚美歌は極く小さいものであつたが、

段々増加へられて大きくなつた。ブラウン博士は手が痺れて、最早ペンを持つことが出来なくなるまで書かれた人である云々。(バプテスト讚美歌英文序)

「讚美歌」同年横濱に於て刊行のもので歌の数は二十首、奥野昌綱が版下を書いたものと言はれてゐる。

世界よ よろこべな 主が 來たるぞ

あゝ 天地と萬物は その主を見よ。

「讚美の歌」 同年六月長崎にて刊行、飛鳥實二郎、瀬川茂、ダッチ・リフオームド、メソヂスト兩ミツシヨンの協同編纂のものである。

「聖書の抄書」 同年秋横濱にて刊行、ナタン・ブラオン編のものでバプテスト教會唯一の讚美歌と言はれたもの、ローマ字と平假名とを交互に書いてあるものである。

「さんびのうた」 同年十二月神戸印行のもので、組合教會のジエー・デピスの編纂になるもの。

「教のうた」 同年神戸で刊行ベレー醫師、松山高吉、前田泰一、小野俊二等の協力編輯せしもの、十九首紙數十四枚よりなる小本である。

一

エス われを愛す 聖書にぞ しめす

來たれば 子たち よわきも つよい

あゝ エスあいす 聖書に しめす。

二

エス わがために てんの 御戸^{いど} ひらき

まよいはすれど 天に 住まはせんと

あゝ エス あいす 聖書にしめす (以下省略)

一

エスの名に まさる 天^{てん}に 地にも なし 神の をんめぐみを 世界に あらはし

われら エスの前 うたふを 好む

この名 天にも 地にも いやまし たふとむ

二

われの 救ひ主^{すけ}は 天より くだれり ばんみんを 救ふ故に エスと なつけり

(われら エスの前……折返……) (三、四省略)

一

われの神に ちかづかん よしやうれひ しのびなん

われうたふべき われの神に ちかづかまし ともならん

二

さまよふまゝに われ等も 目さへくらみ なほうたふ

岩のまくら ねむらんときは 神とわれや あらんかも (以下省略)

一

われをば たのまじ 十字架に のぼりし

エス われを よべり われ キリストにゆく

二

われは 待ちをらで エスにこそ すがれ

つみを 洗はんため われ キリストにゆく (以下省略)

一

けふ 主が まねく きたれよ

夜道 たどる さまよふ人

二

けふ 主が まねく のがれよ

ほろび近く きたるぞ (三、四省略)

一

地に すめる 萬民ばんみんや エホバを たふとめな

すくひ主の 御名を よろづの人 ほめよ

二

めぐみは たへせじ 聖書は たしかなり

み國は をほくならん かぎりなくまसानん (三、四省略)

一

われたる	いわや	われを	かこめな
さきたる	わきの	水また	血しほ
つみも	なやみも	きよく	あらへよ

二

かひなは	よわく	おきてに	たえず
こゝ	はげめど	なみだ	たえずも
わが	きみのみと	つみ	能くあがなふ

三

手に	ものあらず	十字架に	すがる
たすけなき	肌身	けがれし	この身
主の	たすけ	たゞ	死なん
	なくば	われは	

四

つゆまの	いのち	きえは	てんとき
見ぬ國	のほり	主に	まみえんとき
われたる	いわや	われを	かこめな。

この歌詞は多くの人に譯されてゐる。明治十五年六月發行の原胤昭の公刊されたものと比較して見るのも好參考で

ある。

一

われたる いはよ
われを かこめな
さかれし わきの みづまた ちしほ
つみも なやみも きよく あらへよ

二

わが身は よわく おきてに たへず
こゝろ はげめど なみだは もろし
わが君のみぞ つよく あがなふ

三

手に ものあらで 十字架に すがる
よわき この身も けがれし たまも
主の たすけ なくば ながく 死ぬべし

四

くさばの つゆと いのちは きえて
みぬ世に うつり 神を みるとき
われたる いはよ われをかこめな。

(原胤昭編)

明治八年 讃美歌の出版は前年に比して著しく少かつた。僅に兵庫出版の「さんびのうた」といふローマ字版のと、組合教會のジェー・エッチ・デフォレスト編纂になる、「さんびのうた」、小形横本のとがあるばかりである。

しかし之は宗教音楽の不振でもなければまた翻譯の不振でもない。前年のは所謂過渡期に屬するもので多年蓄積してゐたものが基督教の解禁と共に急に頭を擡げたもので比較すべき性質のものではないのである。

明治九年 刊行のものに、

「改正讃美歌」 明治九年五月十字屋刊行、プレスビテリアンのもので小形の横本である。

めぐみあるかみを さんびせよ 天下の人

さんびせよ 天の軍勢 父と子と聖靈、

「使徒公會の歌」 小形の横綴の本で聖公會第一の歌集と言はれた。歌數二十六、ダブリュー・ピー・ライト編纂のものである。

「讃美歌」 同年刊行、黄表紙の横本讃數二十三。

たのしき くにあり せいとぞ すめる

うきをば しらす たへせぬ ひる。

明治十年 刊行のものに、

「讃美歌」 メンヂストのデビンソン編輯のもので、文部省の小學唱歌位の大きさの横本で歌の數五十三、頌歌四、そ

れに譜が七つ附されてゐるが、譜付の歌集はこれをはじめてだつたのである。

「讃美歌」 同年出版、デビンソン編でこれにも敎曲の譜が添はつてゐる。

「讚美の歌」^{さんび} 同年出版、聖公會エッチ・ジエー・フォス編でこれも横綴の小本歌数が六首だが譜がない。

明治十一年 刊行のものに、

「眞神讚美の頌」 大阪川口英三番刊行、シー・エフ・ワーレン編、聖公會、朝の歌、晩の歌など三十首を収む。

明治十二年 刊行のものに、

「さんびのうた」 十一月カーチス編、歌五十七首、チャント六首。『There is a happy land』

たのしき くには 天にあり

しんじや さかえて かどやく。 (以下略)

第二十章 學制頒布後の教育音楽と圖書並歌曲

明治五年十月文部省は新たに學制を定めて、全國に頒布し、國民教育作興の道を樹て、より地方に於ても唱歌をも普通學科の一つに加へられるに至つた。然し乍ら未だ普ねく行はれてはゐなかつたのである。

明治二年 寺小屋組織より一轉して京都府少參事植村正直は、京都市内に數十の小學校を創めたが音楽寺の學科はなかつた。

聖明治三年六月 小學校を東京に設けて、大學の管轄となし同四年大學が廢されて文部省の直轄となつたがこれも現在の小學校とは全く其の趣きを異にしてゐた。

新學制による小學校は二等に分れて居て、男女六歳より九歳に至る者を下等とし、十歳より十二歳に至るを上等として在期は八ケ年である。而して從來の學校は悉く廢止せしめ、新制に據つて全國的統一の緒に就いたのは明治五年である。芝増上寺内源流院に小學第一校、市ヶ谷田町二丁目洞雲寺に小學第二校、牛込神樂坂源國寺に小學第三校、湯島切通峰祥院に小學第四校、淺草新堀西福寺に小學第五校、深川船藏前西光寺に小學第六校を開いたのは抑も新しい教育の始であつた。而して官立小學校が急速な勢で新設を見るに至り此年中に十校も増加したのである。

當時の學科目は、書、算、筆、だけで授業料は月二分であつた。福澤諭吉作新體詩「世界國盡」などが小學生徒間に愛誦され旋律もついて歌はれたのであつた。

「世界は 廣し 萬國は おほしと いへども大凡

五つに分けし 名目は 亞細亞 阿非利加 歐羅巴

北と南の 亞米利加に 堺かぎりて 五大洲

大洋洲は 別に また 南の島の 名稱あり

土地の 風俗 人情も 處變れば しなかはる

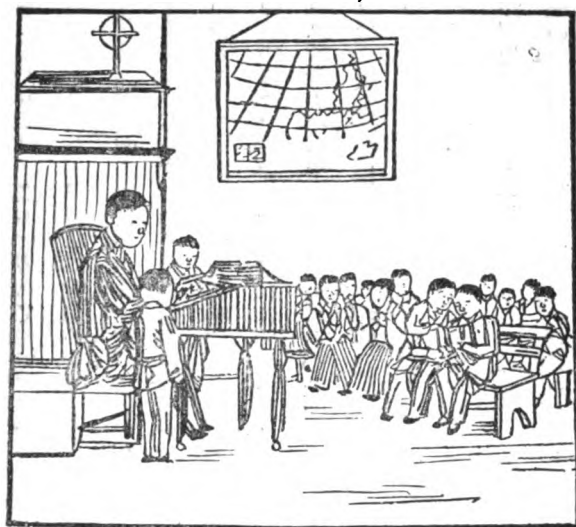
その様々を 知らざるは 人のひとたる 甲斐もなし

學びて得べき ことなれば 文字に 遊ぶ 童子へ

庭の訓の 事始め まづ 筆とりて 大略を

しるす所は 亞細亞洲』

これは泰西文學の輸入と共に現はれた新體詩で明治二年作である。



圖の裏面にノアビルーエクスで重歌唱
(畫挿の一巻本讀校學小)

明治六年 文部省刊行師範學校編輯の「小學讀本卷一」が出版された。西洋樂器に關する記事等を見ると實に面白事實が発見される。即ち其の第三に、

「彼等の持ちたる、笛の名をば何といふぞ 此は喇叭なり。彼等は樂隊の、兵卒ゆゑに、此笛を、吹くことを鍛錬するなり。此笛は兵隊の、行列を整ふる合圖に用ゐ、又は祝日の音樂に用ゐるものなり。此笛は管長くして先きの開きたるものゆゑに、聲を發すること、最大なり。」

惟ふに當時は喇叭をも笛と呼んでゐたことが頷かれる。またこんな記事もあつた。

『この箱の中に響あり 汝は此響を何なりと思ふや。此箱の中にあるは鼠ならずば猫なるべし。汝は何なんと思ふや。この響甚小なるゆゑに、吾は小さき鼠なりと思へり。凡て響は其物に應じて度に過ぎざるものなれば、猫にもあらず犬にもあらずと思へり。』

此の書は明治八年八月に至つて改訂され二十年頃まで使用したのであるが、西洋樂器に關する知識が發達して居なかつたことを證明し得る好材料の一つ

である。この第二十八圖は小學讀本卷一の挿畫で「この箱の中に響あり……云々」がこの繪の説明であらうが、唱歌室でスクェール・ピアノを演奏して居る有様で、當時の我が小學校教育の情態とは思へない。現在第一高等學校に保存してあるピアノ（明治二年特許獨逸製）がこの種のものであるが、中學が出来たのが明治十二年であるから高等中學校などいふたのは其後の事で、この挿畫とは全然關係の無いものである。多分外國畫の模寫であらうと。

また當時出版されたもので「新版異人双六」てふ芳員の描いた版畫の双六がある。萬延文久の頃に出版したもののらしいが、明治四年版のものもある。之に據るとこきうと題してヴァイオリンを描き、ふよと題して吹風琴を描いて居る。金屬製の喇叭に至る迄笛と註して居る處から推察するに、當時吹くものは一切合財笛と呼んだことは動かすべからざる事實である。

明治九年十二月 文部省は「彼日氏教授論」を發行した。此の書の原名は「セオリー・エンド・プラクティス・オブ・ブレイチング」と云ひ、教授の理論及實際といふ義である。米國アルバニー公立師範學校長デウヰット・ペーキンス・ペーの編著で一八七三年ニューヨーク州印行、今荷蘭人ファン・カステールに囑して之を譯さしめ、子弟教育の業に従事する者の爲に示したももの。音樂に關係の部分のみを抜萃すれば、『第四章教師必要の文學を論ず』の中に、

第二十一條（歌曲） 歌曲は至當とするに非ざれども、善良なる教師は能く其原理を會得し、且其術を得て亦一美事と謂ふ可し。方今最良なる學校にては、皆音曲を以て心體を操練する具となす。之を奏すれば實に快爽を覺ゆ、此に由りて生徒自音聲を糾察することを學び、自然讀方言語を改良す可く、又知覺を養殖して更に鋭敏ならしむ可し。加ふるに音樂は校中の和靜を得るに於きて殊に功驗あり。何となれば生徒久しく課業に従事して倦勞する時は必ず耳語喧嘩終に粗暴に陥るに至る。此時に及び其の氣を發散せしむるものは音樂に如くはなし、譬へば蒸氣機關の漏氣竈に於

けるが如し、其の行走を羨慕する氣此に由りて漏散し、一の損害なく反りて娛樂するなり。

夫のマルチン・ルーソルの言に曰く、教師にして歌調を能せざるものは、余之を見ることを欲せずと、此語稍刻に似たりと雖も其之を能するものを以て能せざるものに比すれば大いに榮美と謂ふ可きなり。

「第十二章教師自ら健康に注意す可きを論ず」。

前文省略……保養の具と爲し、殊に快樂を得るものあり、音楽是なり。然れども亦少しく恐る可きものなきこと能はず、蓋し快樂といふ由縁のものは疲勞せる心意を慰するに足るを以てなり。又恐る可しと云ふ由縁のものは、之を行ふに許多の時間を費すを以てなり。夫れ人の教育に従事するもの皆歌謡を能し、樂器を使用するが如きは亦善ず可きに非らずや。若し自之を能せざれば、人をして歌はしめ、或は器を調せしむべし。其他善美の樂禽鳥の音の如き皆以て聴かしむ可し。其之を聴くもの、必ず常に吟なきことを得ず。其詩に曰く、雜鬧と焦心との爲に腦を煩す故に余が耳切に靜爽の音調を聞かんと欲す。……以下略……

女子の教育熱も一部に盛になつて來た。明治四年十一月五名の米國女子留學生を出した事は、五女子の父兄の卓見といふべきである。永井繁子の如きはピアノの研究を積んだ關係で、歸朝後は我國音楽教育上に貢献した處が尠くない。音楽家傳記上我が國最初のピアノリストであつたのである。

横濱フェリス和英女學校は明治三年七月、メレーギタ女の創立で、山手町の共立女學は同四年の創設であるが組織の上からは最初の女學校で、女子教育の第一晨を告げたものである。官立の東京女子師範學校の創立よりも遙に早く、爲に東京に於ける華族商家等の子女が競つて門前に馳せつけるので入學生徒の大淘汰を爲し、試験制度によつて生徒數を減することに努めた程であつた。

越天樂 (平調律旋)



學科は英語が主で當時は音樂科は無かつたが、オルガン、ピアノの設備もあり英語唱歌等の課外教授もあつたのである。單獨に新日本の開發啓蒙を目的としたものであつた。

明治十年 「音樂改良論」が仙臺市發行の講習餘誌に現れた。摘記すれば

「夫れ文明とは禮樂の盛んなるを云ふにあらずや然るに文明を期する我が日本國にして樂の備はらざるは實に缺點なり。試に思へ樂む所は下等にありて志す所は上々等にあると云ふは決してなき理にして野蠻淫辭を樂みながら其思想品行ばかり數等の上進は出來ざるにあらずや故に我輩は目今人民の品位を上進せしむるの樞要急務は、音樂を興し、風俗を化するにありと思ふ。」云々……之は小野庄五郎の筆であるが當時のク

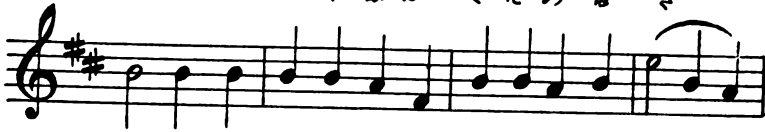
忠 臣



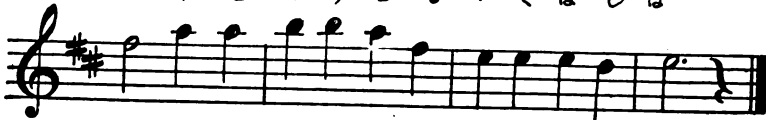
かさぎの やまを りでしより



さして ゆくゑは さだめなき



きみを やすむる いさほしは—



み なんと かは にぞ のこりけり

リスチャン達は既に此の様な觀念を抱いて居たものが尠くないのである。

明治十一年 式部寮雅樂課は、東京女子師範學校の依頼によつて教育唱歌の創作を試み、教育唱歌として「風車」「冬の圓居」などを作曲した。之等は雅樂の旋法で出来たもので「笠置の山を出でしより……」のやうに雅樂の越天樂殆其のまゝに歌はれたものもあつた。之等の唱歌は殆んど限られた或る一小部分で語られたもので、明治十四年小學唱歌集の現はれる前の唯一の歌曲であつた。

この項に於て掲載するは洵に長れ多いことであるが明治七年九月二日、昭憲皇太后陛下の東京女子師範學校へ行啓せられた時に御歌

磨かずば 玉も 鏡も 何かせん
學びの道も かくこそ 有けれ。

を御下賜になつた。同校では此の聖慮に感激して、明治十一年の十月に至つて伶人東儀季鶴に作曲せしめ、同校の校歌とした。豊越調律旋の曲であるが洋楽器の伴奏によつて全校生徒が如何に聲高らかに、歌はれたことであらう。我が國、校歌の嚆矢といふべきである。

第二十一章 雅樂家の歐米樂研究

明治維新は我國政治史上に劃期的な大變動を與へたが、同時に又我日本音樂にも著しい影響を與へたのであつた。帝室の祭祀音樂としての雅樂は、東京に遷都せらるゝや、京都に置かれた雅樂伶人と、江戸城内の紅葉山の伶人とを合せて、明治三年雅樂局が新設されたが、往時の盛觀を止めず、平曲の如きは明治四年の盲官の廢止と共に斯道は中斷し、六百餘年の古曲が滅没の危機に瀕したのである。又、能は武家制度の廢止と共にあはたしく其の聲を潛めて中絶の哀れなる姿を呈するに至つた。

これに反し洋樂は陸海軍々樂の進展につれ、其の研究者は雅樂家に勢力を得、式部寮雅樂課に於ける伶人達も明治七年には海軍々樂長の中村祐庸に就いて、又同八九年頃にはフエントンに甫めて洋樂を學んだ。而して漸次宮中御宴にも洋樂が進出して遂に併用が行はれるに至つた。

明治九年十一月三日の天長節祝賀に於ては伶人達は歐洲樂を演奏してゐる。同十一年には雅樂部の練習所に於て、

新に傳習した洋樂と從來の雅樂との公開演奏會を開催した。また此年は東京女子師範學校等の依頼があつて、雅樂部は今いふ教育唱歌の創作に當り、保育唱歌或は照憲皇太后御歌の「磨かずは玉も鏡も何かせん」等に作曲したのである。君が代の作曲も此當時のものである。

明治十二年三月十九日には奥好義、芝葛鎮の二人は宮内省より洋琴練習を仰付られてゐる。

此年の春には獨人エツケルトが海軍々樂庸教師として招聘され、宮内省の方へも兼務した。明治十三年には音樂取調掛教師米人メーンソンを招いて絃樂の教授をも受け、管絃樂の傳習にも手を伸した。上眞行、辻則義、多久隨、奥好義等が後に音樂取調掛の教師に選ばれたのも、メーンソン教師の指導の賜物である。上夢香(上眞行)の「洋樂」と題するその當時の詩に洋樂を會得した態度が窺はれる。

音律由來彼我同 區々何必限西東 取他長所補吾短 始見洋々盈耳功

この年若が代が制定され、宮内省としては雅樂部長の芝葛鎮、林廣守、東儀季瀧等が關係した。(制定委員には芝葛鎮のみが選ばれてゐる)同年十一月三日には雅樂部員によつて宮中に於ける、これが初演奏も行はれた。

伶人は累代雅樂家の裔族の爲、聽官器が鋭敏で運指等も巧みで洋樂の進歩は實に著しいものがあつたのである。最近祝賀會を催された同部樂師蘭十一郎は、明治二十年頃エツケルトについてトロンボーンの傳習を受けた中の一人で四十有餘年の現在も同樂器を吹奏してゐる。

大日本音樂會が創立されて間もない當時に、メンデルゾーン作の賀婚行進曲や、ストラウス作のワルツの舞踏曲等を、オーケストラで演奏してゐたことがプログラムに現はれて居るが、當時は管絃樂の演奏は陸海軍々樂隊等には出來なかつたのである。如何に雅樂部員が歐米樂研究に精進したかと頷れる。

明治二十一年三月獨逸人エツケルトが官内省樂部の專務になつてからは益々洋樂が發達したが、當時伶人等に對する待遇上が舊時と大差あり、爲に古き歴史を有する雅樂其ものに就て將たまた後進者を誘掖獎勵する上に憂慮惜く能はざるものがあるとの理由の下に、遂に先輩四十餘名袖を聯ねて辭表を呈するに至つた。問題は可なりにこんがらかつて一時はどうなる事かと迄あやふまれたのであつたが、當局者も顧る所あつて、全部を復職せしめ紛擾も忽に一段落を告げた。

明治三十年十二月には官制中の改正によつて雅樂部々長並副部長の外皆判任であつたものが、伶人長を雅樂師長として、樂師長と共に准奏任(八等)年俸四百圓若くは、三百六十圓とし、而して雅樂師(准判任)はこれ迄の伶人長に當る月俸を三十圓乃至十六圓とし、伶人を雅樂手に伶人員を雅樂生に改められた。雅樂師、樂師は准判任四等以上で、雅樂手は准判任五等六等である。

明治三十五年には音樂廂教師としてグリエルモ・ドヴラヴツチがエツケルトの後を繼いで來朝、爾來二十四年間同部の爲に盡された。當時明治音樂會の指揮を司つてゐるが、鮮かな指揮振りを示した。上野音樂學校のウンケル教授の熱のあるのに對して、華者であるとの評があつた人である。

第二十二章 田口卯吉「唱歌の説」

法學博士田口卯吉は當時の新人であつた。文明開化論者でありながら始終一貫、政治的被壓迫のイデオロギーを頑守せられた。彼の本領は經濟學に在つたのであるが其の才氣縦横なると趣味の多方面なることは其の著作に躍如とし

てゐる。この論文「唱歌の説」は明治十一年頃のもので、初め共存同業第二年會筆記に掲載したものであるが、今から見ても珍重な文献であり、我國唱歌に大なる影響を及ぼしたことは疑はない所で、我が國唱歌の發達史上看過する能はざるものである。

「唱歌の説」

田口卯吉記

紀の貫之が古今集の序に「花に鳴く鶯、水に住む蛙の聲を聞けば生とし生けるものいづれか歌をよまざりける」と記せしは眞にうつくしき詞になんありける。然れども其所謂歌とは唱歌にはあらで、筆に記し或は口に吟みて心を慰むるものなれば、絶えて音聲に發する事とはあらざるなり。貫之何等の才思ありて鳥虫の心を悟り得るかはしらねども、音聲に發せぬものを以て音聲に發するものと比べられしはいといぶかし。余私に考ふるに彼の唱歌といへるものこそ、鳥虫の鳴く聲と同一なるものなれ、鳥虫の鳴く所以は其心の苦樂如何は知らねども、人の歌ふも強ちに樂める時のみに限るにあらず。彼の鼻歌の如きは心におもふこともなく諠ふが如し。鳥虫の鳴く所以も亦此美の事にや、故に余は茲に貫之の語を假りて「生とし生けるものいづれか歌を謡はざりける」と云はんとす。

鳥類の事はいざ知らず人類の歌に至りては、自ら動かすべからざるの法則ありて、口より發する聲々は皆此法則に循ふにあらざれば決して唱歌とはならざるなり。此法則を調子と云ふ如何なる因縁ありて、斯くも人の音聲に、調子付き纏へるかば余の推究し難き所なれども、想ふに唯だ言葉の最も言ひよく聞きよきものなるべし。

余熟ら小兒が言ひ始むるを聞くに、父はト、母はカ、犬はワンワン小さきものはネンネー欲しきものはウマウマ等の如く、凡て皆な重複せる語を用ふること常なり。其然る所以のものは父母の言ひ習はせるによるものあるべし

と雖も、自ら小兒の天性に於ても斯る重複の語の言ひ易き所以の理なるものと思はる。さればこの事獨り我が國の小兒のみ、然るにあらずして、何れの國の小兒も其趣きを同ふする由聞及べり。彼の唱歌に必要な調子も蓋し亦此等の所より發するものならん。

抑も唱歌の趣味も其述ぶる所の主意の宜しきにある事固より論を俟たずと雖も、其言ひ廻はし方の自ら曲調に合ふと否らざるとに因りて、聞く人に感ずる所大なる差別あり。其聲に合ふと言ふは重に同じ様なる文句の重複するにあるが如し。されば支那の詩は對句あるもの多く、殊に律に至りては必ず對句を交ふるの規則なり、是も重複の句調は自ら歌ひ振りに味ひありて聞く人に面白く感ぜしむるの理あるに由なるべし。西洋唱歌の事、余未だ其理を詳にせざれども亦調子あり、且支那の詩の如く押韻ある由なり。此押韻をなすは實は同じ様なる言廻し方の文句を得んが爲めに起りしものなるべし。

日本の唱歌に於ては學士の注意淺かりし故にや、未だ規則の立たざる様に思へるものもありと雖も決して規則なくて一文句なりとも諱ひ得べきものにあらざるなり。元來琴には平調子、半雲井及び雲井の三調子あり。三味線には本調子二上り三下りの三調子ありて能く日本人のあらゆる音聲に適し、宮商角徵羽の音は更なり變宮變徵に至るまで一として此調子によらざれば決して唱歌と爲す能はず、固より一文句を諱はんには種々の音聲を發せざるべからざれども其は皆一調子の中において高低する故に其上るも自ら同じ様なる進退を爲して調子に叶ふことなり。其狀恰も波瀾の風に激して盪漾するが如し、南風に激して發する波は皆北向し北風に激して發する波は皆南向せり。故に其間大小高低の差なきにあらずと雖ども、皆整然として亂れざるものは其形狀の同一なればなり。唱歌も亦之に同じ、平調子の抑揚は皆平調子の漸を得るが爲に其上るも皆其趣を同ふし、下るも亦其趣を同ふせり。故に其音累々として

實珠の如く能く調和する所あるなり。若し之に反し、平調子を以て論ひ始め俄かに雲井の聲を發するときは、恰も南向の波と北向の波とを混同したるが如く相衝突するに至るべし。されば日本の唱歌とても決して規律なきことなし、規律なければ決して謡はれざる筈なり、今規律を示さん。

〔第一例〕 雛 鶴 三 番

波のこま／＼ 打や鼓の 松吹く風も

颯々として すゝむなり すゝむなり

音も 住居の

幾夜 經ぬらん 夜遊の舞樂

拍子を 揃へて 足拍子を 揃へて

時も 夜明の鳥飛 云々。

〔第二例〕 道 成 寺

梅と櫻は いづれ 兄やら 弟やら

あやめ かきつばたは いづれ 姉やら 妹やら

右は最も善く似寄りたる調の文句をのみ引證したる様なれども如何なる長文句にても其音聲の上り工合、下り工合に注意して聞きたらんには同一轍に出づること恰も波瀾に大小あれども其上下の勢一様なるがごときことを發見せらるべし。斯る動かすべからざる規則あればこそ、我唱歌の中にも調子の改まるものには必ず合の手と云へるものありて前後の調子の合はざるものを連續せしむることなり。之を察せずして日本の唱歌に規則なき様に論ずるは大なる

誤なり。

又俚歌又は端歌の如きも必ず此調子なかるべからざるものなり。嘗て聞く故乙骨耐軒は日本の俚歌に押韻せるものなし、其押韻せるものは唯だ

第一例、伊勢は津で持つ、津は伊勢で持つ、尾張名古屋は城で持つ。

第二例、坂は照る照る、鈴鹿は曇る、田の土山雨が降る。

の二歌のみといへりと、然れども近頃鹿兒島人の歌を聞くに、

ダアテロサント。カアテロサント。

兄弟アンデハ。ゴザラヌカ。

何ガソングー。ゴザルカ。

ニチヨシタデ。イ、モシタガ

コワノシヤ。シモハンド。コワノシヤ。シモハンド。

此歌は始にトの韻を押し、次にカを押し次にドを押せしなり。且つ同じ文字を以て終りたる文句のみ韻を押しせるものと爲すべからず。五十音の横行にて音の合するものは亦韻を押しせるものと見做して可なるべし。

例へば左の如し。

第一例、御前を待ち待ち蚊帳のそと。蚊に喰はれ。七ツの鐘の鳴るまでも。コチヤカマヤセヌ。

第二例、御前は濱の御奉行さま。鹽風に吹かれて御色が眞黒だ。コチヤカマヤセヌ。

第三例、官ちやん官ちやん御前の御肩にピラピラするのは何んぢやいな。……あれは朝敵征伐せよとの錦の御旗

を知らないか。

又仙臺人の歌に……(猥褻なれば削略す)

又一つの文句を二度讀みかへして調子をあらはせるものあり。

一つとや……一夜明れば、にぎやかで にぎやかで お飾り立てたる松飾 松飾。

斯の如く繰返して調子を合はせる事は、長歌に於て最も行はるゝものと思はる。

又合詞を夾みて調子を合はせるものあり。

第一例、富士の白雪きや ノーエ

富士の白雪きや ノーエ

富士のサイサイ 白雪きや 朝日で溶ける。

溶けて流れて ノーエ

溶けて流れて ノーエ

溶けてサイサイ 流れて 三島へ落つる。

第二例、花のときよ島へイ、カ、糸の機ばし懸けてカ、ボンサン 獨り弾いて イ、カ、トチンガラリント

カ、あせりや ナントカ、ヤンレイカ、エー。

第三例、新井御番所はノーモシエー

箱根がナケリヤエー

連れて行きたや ノーモシエー

又一文句には韻を押せることなきも、此と同様なる文句を數多集めて調子を合せるものあり。

第一例、

花の御江戸の兩國橋で 坊さん簪シヨ 買ひに來た、

坊さん 簪シヨを 買ひソナコトヨ。

御寺が ドテラを 買ひに來た、

御寺が ドテラを 買ひソナコトヨ。

瞽さんが 目鏡を 買ひに來た、

瞽さんが 目鏡を 買ひソナコトヨ。

第二例、

ドンツク、ドンツク、ドンツクドン、其又隣のドンツクニ、灯燈買ひに遣つたらば、灯燈と云ふこと忘れて、

火事の玉子と觸れ廻はる。

ドンツク、ドンツク、ドンツクドン、其又隣のドンツクニ、金魚と云ふこと忘れて、血の池地獄の門番だと觸れ

廻はる。

されば俚歌の類は同一の文字を以て、或は同音の文字を以て、或は同一の文句を反覆して、或は同一の夾み詞を以て、或は同一の文句を合して韻を押し調子を合することゝ知るべし。ネンネコの歌、萬歳の歌の如きも、苟も調子の整へるものは之を聞きて厭はず、之を歌ふて味あり。是則自ら法則あるが爲なり。

抑も唱歌は文學の一科にして、其鑿義精粗は大に一國の文運に關するものなり、然るに我が國現今の唱歌は其語卑しく其文拙くして其情味甚だ淺し。僅に調子あるを以て人をして感動せしむるに過ぎざるのみ。是豈學士輩の此に注意せざるに因るにあらずや。嗚呼日本の語何ぞ卑野ならん。之を用ゐて唱歌を作る、以て王公の前に奏すべく、以て軍人の心を勵ますべし。切に思ふ日本唱歌の一たび碩學の注意を経て、照代の一具とならんことを、是余の日夜に勉企する所なり。(明治十二年十月共存同業會第二年會筆記)

筆者田口卯吉は安政二年四月二十九日江戸に生れ儒官佐藤一齊の孫に當る。明治十一年大藏省官吏を辭し經濟雜誌、自由新聞等に筆を執り明治二十七年衆議院議員となり同三十二年法學博士となる。北清事變並日露戰役の時、占領地等の觀察を爲し國家經營に就て大いに期する所があつたが惜しいかな明治三十八年四月五十一歳で病死した。著作に日本開化小史外十數卷(鼎軒田口卯吉全集に收む)國史大系、續國史大系、徳川實記、續徳川實記群書類從續群書類從、大日本人名辭書、日本社會事業等がある。

第二十三章 『唱歌といふ名稱に就て』

吉丸 一昌 記

この記録は大正五年のもの故第三編に掲載すべきものであるが前章と聯關せしめこゝに挿入したものである。

唱歌といふ語は竹取物語にも源氏物語にも出でたり。されど、今の發音と違ひ、竹取物語には、

日暮るゝ程、例の集まりぬ、人々或は笛を吹き、或は歌をうたひ、或はしやうがをし、或は口笛を吹き、扇を鳴らしなどするに。

とあり。源氏物語、若菜の巻には

拍子取りてさうがし給ふ。院も時々扇打ちならして加へ給ふ。

とあり。この中しやうがと云ふ發音は、近く明治の初年の頃までも稱へ、今もなほ宮内省の伶人諸氏はしやうがと發音するなり。(さうがの語は遠くの昔滅び去りぬ。)

さて今と昔と其の名稱の讀みやうが異なるのみならず、その語意も亦今と昔と異りて、古くは今の如く、單に歌曲、または樂歌の意味には用ひず、器樂曲の旋律を口吟むの意味に用ひたり。即ち今の語にて云へば階名にて歌ふと云ふ意味に用ひたるなり。その證は古今著聞集に、

大納言宗俊卿、草子宮の蓋を拍子に打ちて萬秋樂の序を唱歌にせられけり。

とあるを見よ。萬秋樂は唐樂にして、聖武天皇の時、婆羅門僧正傳來したるもの。如來在世の時、彌勒菩薩の作と稱せらるゝ舞曲なり。大納言宗俊はこの舞曲の第一段の旋律を口吟みたるなり。なほ例を擧ぐれば、體源抄に、

唱歌の詞は百濟國の語なり。我朝の音樂産虜は百濟國より渡るなり。チリ、タリ、皆かくの如き、詞、皆彼の國の語なり。

とあり。チリ、タリは素より百濟の語にあらず、もとは笛の擬聲音にして、謂ゆる笛の譜なり、笛曲の階名なり。これを以て見ても、唱歌といふ語の意味は、器樂曲の旋律を、その擬聲音を以て口吟むの意に用ひたるを知るべし。従つて前に擧げたる竹取物語の「或は歌をうたひ、或はしやうがをし」は、或は器樂曲を歌ひ、我は器樂曲を口吟むといふ意味に見えざるべからざるなり。

然るに、大槻博士の言海の解釋によれば「樂に合はせ歌ふこと」と説きたり。この解釋は右述べたるが如き古意に

あらざるのみならず、今の聲樂の歌詞と云ふ意にもあらず、聲樂曲を唱誦することが唱歌と云ふものとなつて、即ち唱歌とは歌を唱ふ事なりといふ事になるなり。解釋の體を得ざるのみならず、その意義に於いても、何時代に用ひられたる意義とも解釋かとも分らざる説嘖なり。頗る惑はしき説明と云ふべし。

さて、既に述べたるが如く、古意にては、唱歌とは器樂曲を口吟む事を云ふなれども、後には小形式の聲樂曲の歌詞の名稱となり、足利氏以後の小歌の歌詞をば唱歌しやうがまたは章歌しやうかとも書き、隆達節の唱歌しやうが、一節切の唱歌しやうがと呼び、琴、三味線の歌詞をも同じく唱歌と呼ぶに至れり。されどなほ吾人が今日用ふる唱歌の意味にあらずして、恰も Lied の意味に用ひたるなり。吾人が今日用ふる唱歌の意味は、聲樂曲の總ての歌詞を總括したる名稱にして German の譯語なり。Lied は German の一種類の歌曲たるは誰れも知れる事なるべし。

然れども、こゝに不思議なることは、或は一部の人は、唱歌しやうがとは中等學校及小學校にて唱ふ歌又は簡易なる歌、低級なる歌曲の事と考へて居る事これなり。言換れば Lied の意味に考へて居る人あり。即ち足利氏以後の唱歌の意味に考へて小形式の聲樂曲の歌詞のことと思惟せる人あり。誤りは誤りなれど、前例もあることなれば當然の誤りと云べし。元來唱歌を German の譯語に當てたるにつき、ちと異存なきこと能はず、樂歌とでも譯したらば、かやうの錯誤は起らざりしなり。我が音樂學校の樂語調査掛にて、是非何とか改定ありたきものなり。

そはとまれ、シャウガの發音が、明治となつて急にシャウカと澄みて發音するに至りたるは何故か。以前にてもシャウカと澄みて發音したる事はなきか。この二つの疑問あるを以て、心當りの人々に尋ねたれども分明ならず、結局左の如き推定を下したり。かの明治十二年の頃、音樂取調掛といふもの文部省に設けられ、音樂教育が唱道せられたる時、この當事者は皆當時の新智識の青年者にして、漢文學の素養ある上に西洋文明の鼓吹者なりし事とて、從來論

曲其他の音楽に用ひ來れる發音、及從來一般通俗に呼び來れる國語などには一向無頓着に、漢學者流の發音によりて稱呼する事恰も源氏、先祖、陰陽師と云ふべきを、ケンシ、センソ、オンミヨウシなどゝ發音すると同じく、シャウガをもシャウカと清音に讀みて、譯語に充てたるものなるべく、別に何等の深き據り處あるにはあらざるべしと思はるゝなり。

言語は變遷するものなり。今更これを濁りて發音するにも及ばざれど、前にも云へるが如く唱歌は昔の通りに Lied に充て German をば樂歌とでも言ひ代へたきものなり。(音樂、第七卷第二號)

筆者吉丸一昌は明治六年九月十五日豊後國北海部海湊村に生る。

明治三十四年七月、東京帝大文科大學國文科卒業、同四十一年四月東京音樂學校教授となり生徒監に補せられ、大正五年三月急性心臟狹穿病にて逝く、享年四十四、著作に「作歌法」新作唱歌十集」其他二三の國文教科書がある。合歌曲に「雲井仰げば」歌遊びうかれ達磨」歌劇「春日杜」などがあり俳味をおびた歌、ユーモアを含んだ歌に先鞭をつけた處に非常な好評を拍した。最も多いのは學校唱歌、校歌の作で其の數が數百に多きに上つてゐる。我が國言語學、音韻學等の研究を學生の目的としてゐたのであるが早逝は惜しかつた。

第二編 歐風音樂時代

下 音樂教育

(明治十二年—明治二十五年)

第二十四章 文部省音楽取調掛の創設

明治五年文部省が始めて學制を全國に頒布して國民教育の目的を更新してから、唱歌科は普通科の一つに列せられた。併し實際には之を授くるに教材がなく、且又教授方法等は勿論考へられて居なかつたのである。

翻譯論吉の「世界國盡」が謡はれても曲がなく、「宮さん宮さんお馬の前で……云々」と謡はれても之は唱歌とは言ひ得ることは出來ず、又たとへ箏や胡弓を使用しても差支ないとあつても何處でも實施はされなかつた。當時伊澤修二の曰く「唱歌は未だ一つも行はれし例を聞かず是れ該科の無用に屬するが故ならんや、唯其着手に當り種々の障礙あるが故に今日まで之を實行するを得ざりしのみ、今其一大障礙の由て來る所を察するに是れ素と唱歌を實施するの難きに非ずして却て適當なる音楽を選擇するの難きにあるものゝ如し云々」と。こんな風で適當な歌曲の選擇難にせまられて、文部省が音楽取調掛を彼れに命じて音楽教育の施設に關する調査を爲さしたのである。

明治十二年十月 文部省が音楽取調掛を創設し、同時に東京師範學校長伊澤修二を音楽取調の御用係に任命した。之は東京音楽學校の前身で、其の基礎は既に五十年前の此時に於て定められたのであつた。

伊澤修二案の計劃は忽ちにして成り、同月三十日寺島文部卿の許に提出された。創置所務概略を拔萃すれば、

- 一、東西二洋の音楽を折衷して新曲を作ること。
- 二、將來國樂を興すべき人物を養成すること。
- 三、諸學校に音楽を實施すること。

新作の歌曲を得る時は之を東京師範學校附屬小學校及東京女子師範學校附屬幼稚園、並練習小學校生徒等に實施して其の適否を試み其の佳なる者を探んで掛圖及謄本を製し漸々他の諸學校に普及するの途を求むべし。

右三項の事業を實行するに要する人員は、西洋音樂教師一名、日本音樂に通ずる者三名、日本文學に通ずるもの一名、通辯一名、吏員五名で、其費用の概略を擧ぐれば（一ヶ月の費額）

一金百九十圓吏員五人給料、金二百九十圓外國教員給料、金百七十圓內國教員五人給料、金十二圓小使三人給料
金十圓諸賄料、金三百五十圓需用費、金二十圓營繕費、金五圓郵便電信、金二十圓刊行費、金五圓運送費、金百二十圓生徒學資、計金千百九十二圓。

又右取調の爲相當の家屋が必要である。然るに當時我省勤儉を旨とせらるゝの際なれば、音樂院を新設するの舉の如きは暫く之を他日に譲り、先づ在來の家屋を修繕し止を得ざる分は増築して目下の用に供するを以て足れりとす可し。然して斯る目的に適する者はモルレーの舊居館ならん、因て其の模様替増築等の見込は別紙圖面に認め其費用の概略を掲記する。

一金三千七百七十七圓五十錢其の内譯は、一金七百圓奏樂堂新營壹棟、一金九百九十圓習樂場及小使詰所並押入廊下共新營壹棟、一金七百四十二圓五十錢音樂教場習樂場廊下共新營壹棟、一金九十五圓玄關新營壹棟、一金百五十圓教場事務所渡廊下共新營壹棟、一金二百五十圓大小便所同渡廊下共新營貳棟、一金八百五十圓本郷用地舊教師十六番館修繕。

但窓日除及敷物、人力車置所、外構周圍柵等の分は除く、（雜誌五八號）

明治十三年三月、音樂取調掛は本郷文部省用地内第十六番館を以て之れに充てた。文部省音樂取調掛の建物（第二



管 樂 取 調 機 建 物

十九圖)は平屋の木造で屋根は瓦で鍍張りをベッキで塗つたものである。玄關より入つて右手の内廊下の兩側は講義室、左手の方はピアノ練習室で後に十餘臺のスクエールピアノが据えられたのである。

メーソン教師の宿舍は此の校舎の裏側の二階建てで、教室から廊下續きに行けるやうになつてゐた。メーソンの應接室、食堂等もあつて、一寸見て小さい建物のやうに見えるが中々餘猶があつた。

同月二日、同掛音楽教師として米人ルーサル・ホワイチング・メーソンを備聘した。

メーソン 閱 歴

メーソンの閱歴並に米國唱歌開設の情況は、彼が本國出發の際、波斯教公學監督フェルブリツキの演說中に書かれてある。そればかりでなく、當時の米國の音楽界の情況をも伺ふに足るものである。茲に斷つて「音楽取調申報要略」中の記事を轉載する。

之は一八七九年十二月十三日米國ボストン府に於て、メイソンの送別會席上でジョン・デイ・フィルブリツチの演説抄譯である。

今日余が此會に陪し得る所以は、委員諸君が余を以てボストン府唱歌教授改造の歴史を熟知せる者とし今や將に此府を去り他の宏大なる事業を成すの域に侘んとする我が高名なる教師且教育家の此府に在て無比の美績を該科教授上に奏せしを正確明瞭に記するに堪える者と思考せられしに由るならんと信するなり。

余は現今開化の世界に於て苟も學制の完備整頓する公立學校にして、唱歌を以て最要の教科とし之を其課程に加へざる者あるを見ず。然りと雖も學校に於て廣く該科を民衆に授くるの方法整備せしは實に當百年代に始る者とす。且、今日と雖も學校の各級に於て皆充分に該科を授る者は人民の教育最も進歩するの國に於ても猶稀に見る所のみ。我が合衆國に於て該科を興すの舉は實に千八百三十年（天保二年頃）の頃地理學者コンネク・チコツト人ウイリアム・ウイードブリツチがスウィツル國を歴遊し彼學校に唱歌の行はるゝを見て歸國の後其の要旨をボストン府に演說せしに始るなり。該氏の說にマルチン・ルーサルは音樂の實益を舉示して之を一般に教授せんことを主張せし人なるが其の言に曰く少年をして此藝に習熟せしむべし。蓋し善良有徳なる士民を造成するは之に如く者なしと、又曰く此優美なる藝術の實用は至大無量にして達識の學者と雖も未だ充分に其理を説き盡す能はずと、然るに其後ロメニアス、ロック、ルーサウ、ベスタロツチ等の教育家輩出して心力發育を以て教育の中心と爲す論旨に基き音樂の教授を一層確實なる地位に置けり乃ち其理に従へば曰く各人皆生れながらに多少音樂を好むの性を有する者なれば豈に之を發育せやして可ならんや。是れ音樂の教育に缺く可らざる所以なり。且人間中全く音樂の感情を具せざる者斷へてなき非やと雖も其甚だ稀有に屬するは經驗に由りて之を保證し得る所なりと、是れウイードブリツチが普通

本校の教科中に音楽を加ふべき論旨を演説せし概略なり。

ウード・ブリツヂの説一たび出でしより其の感化を被り音楽を興すの舉に賛成する者尠からず、就中ジョージ・スネリングは一八三二年の冬一書をポストン府教育局に呈し、音楽を公立學校の教科に加ふべきの理由を詳論せり。然りと雖も當時一般の人は猶未だ此舉に同意するに至らず、爾後八年間有志輩の盡力に由り、遂に一八三八年を以て教育局に於て始て該科を學校に置くに決するに至れり。然りと雖も最初は其進歩遅緩なりしが二十一年以來其の教授の方法頻りに改進整備して既に今日に及びては殆ど世界中最上の位置に達せしむるを得たり。

此舉に就きては教育局の役員中教育の範圍及目的に狹隘の見を固執する者始終抗拒を逞うせし爲めに、其の教授の手段も完全に至る能はず又進達の程度も今より之を回顧すれば頗る低下の點に在りしを覺ふ。又該科を以て正科として之を教授せしは唯「グラマ」學校の上等二級に限り而して其授業も一週間僅に二回にして各々半時間に止り高等學校及初等學校等は之を授くる事なかりき。且音楽教師撰任の方法等其宜を得ざるより種々の困難を來たし其の成績頗る拙劣を極めたり幾もなく女子師範學校の設立ありて唱歌を教科に加ふるの美舉ありと雖も其の成績に至ては亦た「グラマ」學校に著しき超過あるを見ず僅に二部合唱を授けんと試みし者あるのみ。

一八五六年の頃には其の狀況概ね斯の如くなりしが爰に改良の端緒を開きしは特別委員を命じて公立學校に音楽を興すの方法を取調べ其意見を申報せしめたるの一舉なり、抑も其申報は適切なる意見數條を開陳せし者にして忽ち認可する所となり一八五八年より實際之を施行するに及べり。

降りて一八六一年(文久二年頃)に至り音楽取調委員長ドクトル・アフム更に申報書を教育局に致し、當時に在て至良と認定せし音楽教授方法の要旨を略述して曰く音楽部に一人主幹を置き以て高等學校の教授を司らしめ且助

教若干を付して其の以下の學校の教授を監視せしむべしと、其計劃頗る善と雖も實地に之を施行するに當り許可の困難を惹き起し、遂に其効驗を現はす能はざりき。

是に於て上等諸教の進歩を謀らんには先づ其事業を初等小學に起さざる可からざるを悟ると雖も、能く其教授を整齊完備すべきの人物を得る能はず、蓋し此事業の如きは全く新奇に屬する者にして此邦に於て未だ之が先規故典あらざればなり。茲に一八六四年に至り、彼委員等は幸にルーサル・ホワイチング・メーンソンを得て初等學校の音楽監督兼教師に任じたり。抑もメーンソンは熟練の教師にして此の如き事業に熱心し、幼兒の教導に稀有の天才を有し教育の理に通じ我慾を去て事業に就きしは、余をして屢々ベストロツチの氣象を回想せしむるに至れり。彼赴任後幾くもなく判然紙上の規則と生人の事業と其の成績に差違あるを證明し得たり、何となれば數年間紙上の規則には既に唱歌を以て正科と爲すと雖も未だ實施の方法あらざりし故なり。此際に當り彼が奉行せし事業は、小學校教員等に唱歌を教授する方法を得、且其教員等を監督の任たる常人の能く勝ふる所に非ざる可けれども、其事績の能く擧たるは實に感ずるに餘有り。

メーンソンは數年間小學用の唱歌掛圖を製するの事に従ひ許多經驗を経、幾多の困難に逢ひ、通常の人なれば殆ど絶望すべきなれども彼は能く之に忍耐して終に今日の如き優等の掛圖を製し、之が爲め大いに教員の教授力を増し且教授費を減ずるを得たり。若し斯等の器械を假るに非れば焉そ些少の費額を以て盛大の事業を成すの美績を望むを得んや。

其他切要なる事件の記すべきは唱歌用書及教師心得書の編纂にして、是は監督長及監督等が各得意の伎倆を盡して同心戮力遂に其功を擧るに至れり。就中初等學校の用書及心得書の編纂は、一にメーンソンの功に歸する者とす。

又幾くもなく樂器を諸學校に交付せしより毎年の奏樂會は、當時に在て恰も教育の花の如くボストン府民が外國貴賓等を優待するの具となりて大いに公衆の歡心を得るに至れり。斯の如く徐々歩を進めたる成績は果して如何ぞや今日此大都に於て公立學校に就學する五萬人の生徒は其齡五年より十八年まで毎級に完備せる唱歌の教科を學ばざる者なし、之が價格及程度を以て他に比較するに余が内國及外國に在て數年來觀察する所に據れば、公立學校に唱歌を教授するの事に於て其方法の完備且質素なるは世界の大都府中ボストンの右に出る者なしと斷言して可なり。

余はボストン府唱歌教授の歴史に三期あるを覺知す。乃ち其第一期は一八三八年にロウエル・メーンソンを音樂教師に任ずる時に起り第二期はドクトル・フアムを音樂取調委員長に擧るの時に起り第三期はルーサル・ホワイチング・メーンソンを初等學校音樂監督兼教師に任ずるの時に起るものとす。

或る名家の言に曰く、初等學校及グラマ學校の諸級に於て至當の方法に據り唱歌を教授せば其以上の學校に於て之を完成するは容易の事業なり。若し夫れ初等學校に於て之が基礎を作らざれば、其成果を得んこと殆ど期すべからずと。メーンソン赴任前は、其基礎たるべき者未だ成立せざりしを以て、上等諸級敎習の成績も今より之を見れば實に不充分の極なりき。而るに彼は先づ基礎を立るに當り小學校敎員を訓練して以て其事業に従はしめ、遂に二萬人の小學生徒をして充分に唱歌を習熟せしめたり。是れ誠に古今未曾有の一事業にして彼が功績と才力を卓然特立するは此舉に就て見るべきなり。今日の功績斯く見るべきも、未だ以てメーンソンの美績を表章するの時熟せりと謂ふ可らず、却て之を永遠の日に讓て可ならむ。然りと雖も余は爰に一言を發して、將來我ボストン府學制沿革史を編する者あらば、必ず正筆を以て初等學校音樂初代監督在職中の事蹟を錄せざる可らずと明言するの自由を得んと欲す。抑も彼の始て當府に來るや新聞雜誌等の論說に畫々之を報せしに非ず、唯謙遜の服務者として薄給と機會

とを求め熟練と學識とを實地教授の際に示さんとするに在りしのみ、然るに今にまで之を回想すれば、彼の來府は實に我が音楽教授上に就き一大期を表せしや明々たり。

メーソンの事業を擧げし最要の地は當時に外ならずと雖も、公私の學校に音楽教授を興張するの感化力は當時府内に限らず我が州中に止らず數年間我が國內の各部より或は來て實地教授の景況を觀、或は書を寄せて其方法を習ふ者等續々相繼ぎ殆ど間斷なかりき、又遠隔せる洋外の歐洲に於ても音楽の中心たる諸都府には多少其感化を及したり。

夫れ日本は數年我亞米利加に就き教育事項を拾蒐し、且諸大國に就き至良の事物を搜索し、殊に其心力を學事に竭したり。彼國今メーソンを聘して公立學校音楽教師養成所の攝理とし、以て其音楽教授の方法を制定、否、劍定せしめむとするを見れば（是は傳用の誤なるべし）余は彼國政府が其目的を誤らざるを信ず。想ふに此聘に應ずべき者、我米國中メーソン其人を捨て、他に復た其の適任の人あらざるべし。

十四年前メーソンがボストン府に率務するに當り、余敢て品評して曰く、若し天才と教育とに由り特別の事業を成すに適する人を擧ればメーソン實に其人なり。故に至當の協力補手を與へ其事に従はしめば、其成績の完美に至るや復た疑ふ可らずと余は今日至り寧ろ斯く語氣を強むるも更に斯旨意を變すべきの理由を見ざるなり。

以上數章の講説は敢てメーソンの聽を演ずの意に出たるに非ず、唯臨場諸人に向て之を演述せしのみ故に其論を此に結び更に一言を呈して以てメーソンの別を送らむとす。

今君が此府を辭し去るに臨み、余をして君が始て此府に來るの時を回想せしむるは蓋し思考伴生の律自ら然らしむる所なり、乃ち今古を比較すれば其狀況の相異なる實に著明なる者あり、十七年前君が遠隔の地より此府に來る

に當り、保證狀を有せしに非ず、又名聲の廣く聞へしに非ず、唯其唱歌事業を以て他の判斷を乞はむ爲め報酬の有無を問はず僅に之を五六の小學に實施するの允許を得、勉勵以て其明證を表すべきの途を求めしのみ。

今日君が此府を去るの狀曩日君が此府に來るの狀に異なる何ぞ其れ甚しき、君の名聲と事業とは業に已に地球の極遠地に聞へ今や一帝國政府の聘に應じ、其公立學校教員養成の爲め最も貴むべき事業に就むとす。聞く所に據れば彼國其目的を達せむ爲め相當の建物を設け適任の助手を附し且各種の要品を備へ加之君の給料館舎等一も充足せざる所なしと、斯の如く君の身は昇進すと雖も、君の目的は専ら教育興張に盡力するの好機を見るの外更に餘念なかるべきを以て、何等の好事甘味あるも其成績を助る者に非れば、毫も以て意に介せざるは余が信じて疑はざる所なり。嗟呼君は實に自己の利益を捨て、唯事業の成就を以て義務とするを確信するの人なり。

余は我がポストン府が其最良の教育家を送り、日本國民事業に就かしむるの特例あるを喜ぶなり。余は彼國民の性質を観察し、常に之を尊敬して舍かず。君が彼國に在留する間は唯利益を彼等に與ふる而已ならず、亦た君が快樂を増すの一端を得るならむ。

今君は教育なきの國に赴くに非ず、日本には既に完成せるの教育あり特に其帝都たる東京には世界に冠たる教育書籍館兼博物館あり、一八七八年巴里府博覽會に陳列せし教育品は彼帝國理事官九鬼君の主裁せし所にして萬國審査官の驚嘆を喚起せし者尠からず。余は此良辰の記念の爲め恭く彼出品目錄一冊を呈し君に彼の國教育の景況及進歩の概略を明知せしめんと欲するなり。行けや我が信友、君の新任に赴き氣を鼓し望を懸け以て君の新事に就け、余輩が君に望む所實に大なり。余は今日臨場諸人が感發する所の衷情を左の歌曲に表出するのみ。

余等の心、余等の望、余等の祈念、余等の悲涙、

余等の懐に克ちたる余等の信心、

凡て汝と共に在り。凡て汝と共に在り。

猶メーソン教師の履歴を語る寫眞が東京音樂學校に保存されて居る。メーソンが獨逸のライプチヒ唱歌教授法檢定委員と共に撮影せる連寫々眞で、それに伊澤修二の添書(左記)がしてある。

米國人メーソン氏は、稀世之音樂教育家にして、明治十二年本邦政府の聘に應じ來りて余と共に學校音樂の創始の局に當り小學唱歌集初篇編輯の如きも、氏興りて大いに力あり。今茲獨逸國に遊び歐洲音樂の中心と稱せらるゝライプチヒ府にて音樂教育局の囑託に應じ、氏が得意の音樂教育の講義を爲すこと數回、終に同府教育會の議決によりて氏が著述の音樂唱歌教授書を其公立學校に採用するに至れり。此圖は即ちライプチヒ府唱歌教授法檢定委員長以下數名にて氏をエルド山中に招待して眞影を寫し永く其の記念に供したるものなりといふ。中心に杖を立てゝ坐するものメーソン氏なり。(明治二十四年十月十五日夜)

伊澤修二履歷

明治年間に於ける初等教育開拓者であり又、音樂教育に多大の功績を遺した所の第一人者である。嘉永四年四月信濃國伊那郡高遠城村下に生れ、慶應三年江戸に出で、獨學にて洋學を修得し、次いで京都に上つて蘭學を學んだ間もなく郷里に歸省して英語の獨習を續けた。

明治二年再び江戸に出で、米國宣教師等に就いて英語を學び、後眞進生に擧げられて大學南校に入つた。それより一時工部省に奉職して技師とならんとしたこともあるが、明治七年愛知縣師範學校長に任ぜられ、翌八年教育研究の



伊 達 初 代 校 長

爲めに洋行を命ぜられたのである。

彼は米國ブリツチナートル師範學校に入り明治十年七月同校を卒業して新教育學說を吾國に傳へたのみならず、グラームベルに就て啞子に發音せしむることを學んだ。後に彼が吃音矯正の爲に學校を起したのも、これに因して居るのである。

彼はブリツチナートル師範學校卒業後直ちにハーバート大學に入り理學を學んだ。明治十一年五月歸朝して東京師範學校長に奉職し體操傳習所主幹となる。時の校長補は留學を

共にした高嶺秀夫で彼もまた米國のオスウエゴ師範學校に入り歸國後ベスタロツチの傳達者となつた。爲に、師範教育の大改革を斷行した。明治十二年十月音樂取調掛を命ぜられ、後十四年六月文部省書記官に轉じ或は會計事務に或は編輯事務に當られた。

明治十八年四月文部省權大書記に進み越えて十九年三月編輯局長となり、我が國最初の國定小學讀本を編纂し小學校教科書に一大進歩を促した。明治二十一年一月二十七日音樂學校長に兼任明治二十三年六月編輯局の廢止と共に音樂學校長と東京盲啞學校長を兼任した。明治二十四年には此等の總ての公職を辭した。之より先、明治二十三年に國

家教育社を創立し、「國家教育」と題する雜誌を發行した。明治二十七八年の日清戰役後には臺灣に渡り教育行政の衝に當つた。同三十年それを辭して三十二年八月再び東京高等師範學校長に任ぜられたが三十三年十二月には辭して、晩年は専ら吃音矯正事業に盡力せられた。勳選貴族院議員從四位勳二等であり、我が西洋音樂の始祖であり、吃音者の慈父である。大正六年四月三十日午後九時に歿せられた。享年六十七。

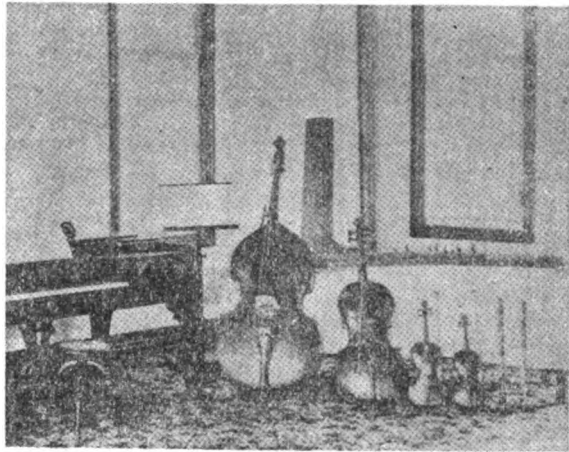
第二十五章 唱歌教育の濫觴

明治十三年四月、音樂教師メーンソンが東京師範學校に於て同校生並に同校附屬小學校生徒に對して、唱歌の傳習を開始した。

最初は發音の方法から漸次八音の結合等に至り、皆自然の順序に従つて音聲發音の大意を授けはじめたのである。七月には同校本科二級生に對しても之が傳習を開始した。

又メーンソンは音樂研究者の爲めに個人教授も行はれ、鳥居忱の如きは四月三日當時に於て既にメーンソンの高弟として洋琴の傳習を受けて居たのである。五月には音樂取調掛は官立學務局の管理に屬し文部省中單立のものとなり九月同掛の傳習生三十名を募集した。而して十月に二十二名の入學を許可した。此の中には宮内省の伶人出身も居た、又後に音樂學校教授となつた鳥居忱等も此の第一回の傳習生であつた。

メーンソンの來朝と共に彼は洋琴並風琴を十五臺程日本へ輸入した。其の中の十二臺程は、音樂取調所に備付けられた。サイドホール型やメーンソン型等もあつたが、このメーンソン型はメーンソン教師とは何等の關係もないのである。



管樂取調所の内室

又ヴァイオリン、ヴィオロンセロ、コントラバスの如き絃樂器にクラリネット、フルート等の管樂器も此の時に備付けられた。

明治十四年二月、第二回の傳習生の募集を行った。試験の結果十二名に對して傳習の假許可を與へた。爾後其勤學の効ある者のみに限つて本許可を與へる規定で、かなり嚴格であつた。

全國各府縣から此の召募に應じやうとする者も相當に有つたが、既に定員に滿ちてゐたので之等全部の許可を與へなかつた。同年五月、皇后陛下東京女子師範學校に行啓あらせられ、其の折音樂取調掛傳習生一同は、陛下の御前に於て管絃樂の演奏を行った。管絃樂は至難の音樂とされて居たにも不拘、伶官出身者は之が進歩特に目醒ましく極めて音律聽別力

が鋭敏であつたと評されてゐた。

同年九月、學習院生徒に對して唱歌の傳習を開いた。發聲練習と音階練習位のものであつたと考へられる。

同年十月、伊澤修二は音樂取調掛長に任ぜられた。九月には唱歌掛圖初編が出来、十一月には小學唱歌初編及唱歌掛圖を出版した。この年の東京兩師範學校生に對する唱歌傳習は、前年の後を受けて單音歌曲の體を成すまでに稍々進

歩いてゐた。

明治十五年一月三十日、三十一日の兩日は、音楽取調掛の成績発表の爲め、昌平館に於て音楽演奏會を舉行した。來賓として文部卿輔以下諸官並内外貴紳淑女多數、演奏者は音楽取調掛傳習生、兩師範學校生徒並附屬校生及學習院生徒であつた。

一月三十日の演奏會に於ては音楽教師メーソン立つて唱歌並音楽進歩の情況を報じ、間もなく演奏に移つた。メーソンの報告大要を摘記すれば、

「數年前伊澤修二、目賀田種太郎等が米國に在學の際本務の餘暇、余の宅に來られ音楽のことを研究され其の由を文部省に開陳されたのが因で、余がこの地に迎へられたのである。着任後傳習したそのものに、進歩の著しいものがある。實際に徴せられよ云々。」その發表した演奏順序を示せば、

唱歌 春山 外單音唱歌七種 東京師範學校附屬小學校生

洋琴 (曲目不詳) 六曲 音楽取調掛傳習生

唱歌 單音唱歌 三種

唱歌 複音唱歌 一種

唱歌 高等單音唱歌 二種

休憩後、本邦俗樂を奏して第一日終る。

一月三十一日に於ては音楽取調掛長伊澤修二、立つて音楽取調掛の現況を報告した。

「我が邦音楽と他の文明國の音楽とを比較するに音律は理論上に於ては小差があるといふが實際に於ては相等しい

ものとしてゐる。之は東西音楽家の證認する處である。然して彼我の音律が相同じとする時は其の旋律の法如何を究めなくてはならぬ。是れは亦彼我の旋律を同一の標準に歸させなくてはならない。即ち各國普通の樂譜に據るより他に道がない。

然るに我が國に於ては笙には笙の符があり笛には笛の符がある俗曲には樂譜がなく一に記憶に屬するものが多い。故に本掛は従來本邦風の樂譜あるものは之を普通の樂譜に移し其の無いものは新に之を附すのに據つて我が國旋律の法を研究することが出來た。

斯のやうに本邦の音楽を解剖して、其美惡を比較判定することが出来るに至れば、樂曲の善美なるも歌作の宜きを得ざるものは、其歌を改作し、また樂曲の旋律の宜きを得るも和聲に乏しきものは之を調和して其の和聲を作り得る。又彼我の旋律法を酌量して新曲を作り得る。既に本掛に於て作曲したるものは歌曲である、大和撫子、仁義禮智、鏡なす等は是である。其他希臘古樂旋法中に我音樂の律呂二旋法及俗曲旋法等皆具有した事を説き、且唱歌集出版の事、樂器試製の事、國歌資料撰定の命を蒙りし事情等を述べられた。』

右演奏會の情況を摘記すれば兩日共天氣清朗にして寒、將に去つて春、將に來らんとするの好畧に際し文部卿輔已下諸官は云に及びず皇族大臣外國公使其他朝野の紳士、學校生徒の親族、朋友の臨場實に意外に出て滿館立錫の地なきに至れり。蓋し和漢洋雅俗諸樂曲を一場に演奏せるは本會を以て嚆矢とす云々。(伊澤修二一申報書)

明治十五年一月、音樂取調事務大要が制定された。その内容は頗る精細を極めてゐるが茲には其要點のみを披萃する。

音樂取調事務大要

第一 諸種の樂曲取調の事

「諸種の樂曲中特に取調を要するものは、本邦の部に在りて雅樂俗樂とし、外國の部に在りて西洋樂清樂とす。」
俗樂に於ては、箏曲、長唄、等を始め其他各種に及び、西洋樂に於ては古樂現代樂等皆其取調を要するものとす。

第二 學校唱歌の事

「學校唱歌に就き要する所の事項は樂譜及び歌詞の撰定、圖書の編輯、樂器の練習及び唱歌普及の方法とす。」
樂譜は本邦人若くは西洋人の作を採用し歌詞は既存の樂譜に従つて作爲するものと樂譜の撰定に先立ちて作爲するものととの二種とす。

圖書の編纂は唱歌掛圖、唱歌本及唱歌教授法とす。

學校唱歌に用ゐる所の樂器は本邦の箏、胡弓、西洋のヴァイオリン、風琴、洋琴と定むべし。

學校唱歌を普及するは師範學校生徒と當掛練習生とによりて其目的を達すべし。

第三 高等音樂の事

凡そ音樂の高等なるは管絃樂に如くものななし、而して高等の音樂は國民に高等の思想を開發せしむるものなれば、國歌の撰定等宜しく之に依るべきものとす。今之を分ちて本邦及西洋管絃樂の二種とす。」

本邦管絃樂は、特に雅樂局の設ありて之を専修するが故に當掛に於ては特別の理由あるの際に非ざれば之を練

習するを要せざるべし。

西洋管絃樂は練習の日猶淺しと雖も、當掛助教等は既に譜面によりて之を合奏し得るの地位に進みたれば、歐米諸國より此類の樂譜を購入し之によりて進歩の方法を研究すべし。又本邦人作曲にても一旦其和聲を作為する時は皆此類の樂器を以て合奏し得るものなり。

和聲の事たる其の理頗る高尚に涉り本邦人の未だ曉通せざる所のものなりと雖も、メーソンの講義及諸種の著書等によりて其理を研究し且樂器によりて實際に之を試るの方法を設くべし。

第四 各種の樂曲撰定の事

國歌資料の撰定を始め、其他將來當掛に於て作る所の樂曲は彼我、雅俗、流派を論ぜず、最良と認むるものは之に和聲を附し漸次蒐集して書冊と作し之を世に公にすべし。」

此類の歌曲撰定の方法は先づ最初に當掛員をして歌詞を作らしめ、之に依りて同掛員中音樂に通ずる者をして樂譜を作らしむべし。然れども茲に撰定する所のものは、通常の和歌と異り、樂器に和して歌ふべき歌曲なれば其專旨とする所も亦樂曲に在りて、歌詞は之に次ぐものとす。

樂曲は、總て普通の譜法を用ひて之を記し、其最佳なるものを選び、メーソンをして其和聲を作らしめ、又は歐米各國の音樂新誌に載せ歐米人をして之が和聲を作らしむべし。尤も豫じめ其新誌に廣告して至良の和聲を作りたる者には若干の賞金を附與する方法を設くる時は随分有名の大家も喜んで其事業を執るべければ、少許の費用を以て最良の結果を得、且つ本邦人の作りたる樂曲も博く世界に知らるゝの理にして頗る良法といふべきなり。

第五 俗曲改良の事

俗曲は我が民衆なり。故に此曲の正否は世教に影響を及ぼすこと少からざれば、宜く改良の途を求むべし。其法蓋し二あり。即ち其曲を全存して其歌詞のみを改むべきもの、及び其曲の一分を存して之が歌詞を作るべきものなり。

第六 音楽傳習の事

『當掛に於て傳習人に授くべきものは唱歌、洋琴、風琴、箏、胡弓、及歐洲管絃樂器とす。』

唱歌を練習するには最初簡單なる單音歌曲に起り漸次高等の唱歌に及ぶものとす。

諸重音唱歌を教授するは甚だ難事に屬すと雖も、現今に在りては當掛助教授等略其理に通じたれば、自今は高等の唱歌書及メーソン掛圖等より適當の歌曲を拔萃し、先づ之を當掛練習人に施して其適否を試み、次に女子師範學校に施し漸を以て諸學校に及ぼすべし。

洋樂の練習は將來彼我雅俗何れの音樂を學ぶにも必要にして、實に音樂の基礎とも稱すべきものなれば當掛傳習人必習の科目と定むべし。

箏々胡弓は將來學校唱歌に適用すべきものなること既に前章に述べたる如くなれば、是亦必習の科目と定むべし。風琴を授くるも亦其理由之に同じ。

管絃樂器は高等の音樂に進むの徒必ず學ばざる可らざるものなれば、當掛に於ては傳習人の志望に任じて之を

撰習せしむべし。

當掛に於て若干名の傳習人を置き之を教養するを要する所以は學校唱歌の事たる創設に屬するを以て、新曲を得る毎に先試に之を施して其適否を検するの具無かる可からず、是れ傳習人を置くべき理由の一なり。音樂の事たる頗る習熟し難き一科にして尋常の人にては僅々數年に成業する能はずと雖も之を本邦音樂に熟する者に傳習する時は短少の歲月を以て好結果を得ること既に當掛の經驗に於て明瞭なり。故に此の如き徒に傳習するは至少の費額と年月とを以て至適の音樂教員を養成することを得べし。是れ傳習人を置くべき理由の二なり。

將來我が國樂を振興改進することの如きは、我が音樂に熟し能く音樂の理に通ずるものを得るに非れば能はず。是の如き者は當掛に於て養成するに非れば決して他に求むべからず、是れ傳習人を置くべき理由の三なり。

『女子師範學校に於て練習すべきものは唱歌、風琴、箏及胡弓とす。』

當掛に次ぎ唱歌の最も高尚の地に達すべきものは東京女子師範學校に在り、該校生徒は諸重音唱歌の初歩も既に練習するに至りたれば、自今は當掛に於て研究の上一層高等のものを得るに隨ひ、メーソン及助教等をして之を該校に施さしむべし。

風琴は音調の狂ひ極めて少く學校唱歌の教授には最も適當にして、且習ひ易きものなれば之を該校生徒に傳習せば他日唱歌を教授するに當り大なる助となるべし。

箏及胡弓は之を習ふ事風琴に比すれば遙かに難しと雖も、本邦普通の樂器にして且其價も廉なるが故に學校唱歌には頗る適當のものとす。故に該校生徒必習の科と定むべし。

東京師範學校に於て傳習すべきものは、女子師範學校に大同小異なりと雖も、甲校の唱歌は乙校の唱歌に比すれ

ば、稍下等に居り又箏、胡弓の傳習は難きに過ぎ到底之を施すこと能はざるものとす。

『學習院には専ら唱歌の傳習を爲し特別有志の輩には管絃樂器の傳習を許すものなるべし。』(雜誌五八號)

明治十五年四月 文部省に於て小學唱歌並唱歌掛圖編纂が完成した。唱歌集初編は三千部の出版を了し、唱歌掛圖初編は千五百部同續編は三百部の出版を了した。唱歌集と唱歌掛圖とは歌曲同一のもので、之を直轄諸學校並各府及外國教育家等に配付した。小學唱歌集は最も江湖の望を滿し、出版後、日成らずして二千有數百部を賣捌れたるを見ても如何に此書の眞價が認められたかと窺はれる。

唱歌集 初編

第一、か を れ

かをれ にほへ そのふの さくら

とまれ やどれ ちぐさの ほたる

まねけ なびけ 野原の すゝき

なげよ たてよ かはせの ちどり。

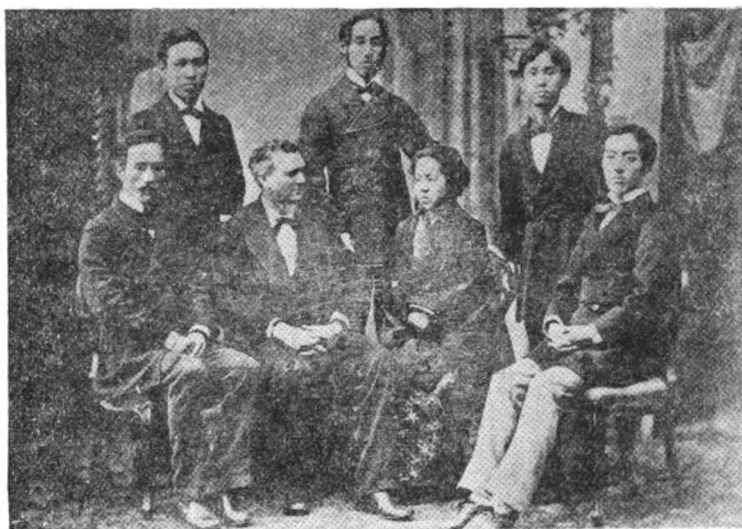
第二、春 山

春山に たつかすみ 秋山に わたるきり

さくらにも もみぢにも きぬきする 心ちして。

(以下省略)

七月一日、メーソン教師賜暇歸國の送別演奏會を昌平館に於て開催された。メーソン立つて一場の挨拶を述べ、次いで福岡文部卿も別辭を叙せられた。その際何曲をどう演奏したものか不明であるが、メーソンの高弟が腕に擔りを



念 記 朝 歸 ソ ー メ

かけての演出であつたことが頷れる。

メーソンは七月歸國したが十一月に至つて解傭した。歸國に際しての記念撮影の寫眞がある。音楽取調掛最初の關係者で、前列右から、助教の辻則承、次は通譯の中村專子、(後の高嶺秀夫夫人)メーソン教師、芝葛鎮(小學唱歌集の雅樂風の作曲者)後列右助教の奥好義、同助教、上眞行(明敏の人而して文學に深く、永年音楽學校の教授を勤めた唯一の現存者)次は東儀彭質(クラリネ、ト奏者で英語をよくした)で雅樂部出身の秀才揃ひといふところである。

東京兩師範學校生徒は、唱歌傳習開始以來三年目に於て複音唱歌につゞいて和聲學の初歩教授の地位に至つたもので其の進歩の見るべきものがある。

八月 音楽取調所傳習生教則と東京師範本科並附屬小學校並女子師範本科並附屬女學校の唱歌科教授細目を編成した該科細目の編成の最初のものである。

明治十六年一月 音楽取調掛傳習生は男子に限るの制

を立てられ、女子傳習生は廢止し、依つて女子中の優秀なる者、六名を選抜して之を見習生として指導することになつた。

二月十日、同掛に於てメーンソンの歸國解雇のため音楽教師缺員せるを以て、海軍省の雇教師獨逸人フランツ・エツケルトを傭することになつた、主として管絃樂及樂典調和の教授を囑したのである。

二月、小學唱歌集三千部出版發行された。一ケ年を経やして五千部を賣捌いたことは當時の著書に於て其例稀なものであつた。同唱歌第三編は十月に至つて編纂が出来た、之が十七年三月に至つて出版され高級の歌曲を集めたもので重音唱歌がある。六月「音楽取調所掛規則」が制定され、七月には「幼稚園唱歌」の編纂が成り、又同月、文部省蔵版の「音楽問答」及「樂典」が出版された。前者は音楽の大綱を問答體にて書いたもので、初學の學徒にとつて好參好書である。後者は音楽の典則規矩を條述したもので四編七百條から出来てゐる。『第一條音樂上の聲音を表示する記號は之を名付けて音符といふ。第二條音符は之を五線上に……云々』といふ様に書いてあるもの。七月鳥居忱等は取調所の助教を命ぜられた。九月「音楽指南」を發行した。これはメーンソン著の譯で音楽教授法で音楽の初歩から漸次歌曲の練習に至り、盡く本掛撰の唱歌掛圖に合せたものである。

音楽取調掛創置以來、音楽教科書に乏しく、傳習上の一大障礙であつたものが以上の圖書出版によつて、傳習上大なる進歩を見るに至つた。又唱歌の傳習も稍普及して千百五十八名の唱歌者を見るに至つた。十二月現在の唱歌傳習のものを調査したものとすると、取調所傳習生十五名、東京師範學校並附屬生三百三十名、女子師範並附屬女學校生六百五十八名、それに學習院生百五十八名で、計千五百五十八名を算する。

明治十六年、東京兩師範學校に於ては音楽取調掛制定の規程に依て、之を傳習し、遂に音楽唱歌を以て正科の一と

爲すに至つた。

東京師範學校生徒は音樂傳習の時間に乏しいが、亦其學業の素養あるにより音樂の理義を解するに易く、爲に自助の益を得、進歩の速かなるを致した。女子師範學校生徒は、女子の質として音聲といひ氣韻といふも自然音樂に適するところがあり、特に進歩の著明なるものがあつた。

師範學校兩附屬小學校及幼稚園生徒の如きは、最も年齒に當み皆人聲變轉の以前に屬するを以て、音聲訓練の最好時期で、加之其の修學年間の緩長なるより唱歌の傳習もまた、緩にして密である故を以て、其進歩もまた正當の順序に出て褒賞に堪へざるものである。且、唱歌傳習以來、自然體育上及德育上に感化を及ぼしたことは、既に見るべきものがある。

學習院は音樂取調掛助教員の唱歌教授法研究の爲、臨教する所であつた。生徒は華族の子弟多きに美術上に於ては自ら高級の氣韻を有する者で、また其の進歩大いに觀るべきものがあつた。

二月、音樂取調掛長伊澤修二は「音樂取調成績申報書」を大木文部卿に呈し、次いで五百部を刊行して内外朝野四方に贈呈した。

本書は大綱十四ヶ條である。創置處務内外音律の異同研究のこと、本邦音樂音階のこと、希臘樂律のこと、音樂沿革の大綱、音樂と教育との關係、音樂唱歌教則編成のこと、音樂唱歌傳習のこと、唱歌集及掛圖編成出版のこと、音樂書類刊行のこと、樂器試製改造及模造のこと、學校用樂器の適否研究のこと、俗曲改良のこと、明治頒選定のこと、以上。

この取調書は英譯されて外國博覽會に出品されたことが屢々で、現に東京音樂學校に保存されてゐる。

三月、唱歌集第三編が出版された、文部省音楽取調掛編纂で前編の單音唱歌に比し本編は複音の歌曲で、小學校師範學校中學校の教科用書である。同月音掛教師エツケルトの兼務を繼續した。四月、各府縣に函牒を發して府縣派出傳習員を募つた。五月、文部省取調掛の事務規程を定めた。六月、更に改正追加した。又音楽取調成績申報を拔萃して英譯したものを千部を刊行し博く之を内外に配布した。世は歐化主義全盛の機運に近づいたのである。九月、各府縣派出の音楽傳習生二十名の入學を許可した。

明治十八年二月、音楽取調掛は、音楽取調所と改稱された。これと同時に東京師範其他に教員として派出して音楽唱歌を傳習することを停め、傳習生に對しては専門的樂器を專修せしむる事に改正された。七月、文部省は上野公園地東四軒寺跡、文部省用地教師館建物修繕増築の上音楽取調所へ交付した。之は文部省新築館といふ和風の大建物で、五六百人を容れ得る堂々たるもので、よく音楽演奏會や卒業式に使用したものである。七月二十日には音楽取調所全科卒業生幸田延子、遠山甲子、市川ミチ子の三名並各府縣派出生二十名の卒業式を舉行した。之は取調所と改稱され組織が改正されてからの第一回の卒業生であるから、當日は文部省新築館でオーケストラ伴奏付のコーラスが催された。(別項音楽會プログラム参照)、當日は太政大臣三條實美卿はじめ文部省高官三百餘名の臨席で、三條公の如きは三時間といふ長時間を、まるで造り人形のやうに威儀を正して聞いて居られた。

八月、音楽取調所に於て、音楽改良有志者發起の許に外國人數名の音楽演奏會を開いた。曲數、九曲(演奏會の項参照)此の年英國に於ける萬國發明品博覽會に音律の説明書等を出陳して、金賞牌及賞狀を贈られた。本邦雅俗樂の音律の外、諸學者の研究を經る端緒を開いたといふのが最初であると云はれてゐる。九月十一日には第一回の入所式が行はれた。大正天皇の御幼時(御七歲)湯本武比古等が御付添申上げて音楽取調所に折々お出ましになり演奏を觀

聞あらせられたと洩れ承るも此の當時である。

明治十九年一月、文部權少書記青木保は音楽取調所主幹を兼任し、二月に至つて兼官を免ぜられた。而して同月神津專三郎同所主幹となる。三月エツケルト期満ちて兼任の備を解き、四月在横濱の和蘭人ジ・ソープレットルピアノ科教師として向ふ一ヶ年間の教授を囑託した。當時の在所生は小山作之助、納所辨次郎、内田兼太郎、白井規矩郎、比留間賢八等で我が音楽教育の貢献者揃であつた。比留間は後年商業の目的で歐米に赴いた際、新しい樂器の輸入をした。マンドリンの日本紹介では第一人者と言はれてゐる。

明治二十年二月、音楽取調所卒業演奏會が催された、「君が代」の四重音の合唱、これが我が國最初のことである。小山作之助が生徒總代で謝辭を述べたのもこの時である。七月、同所生總員の演奏會を開いた。曲目が不詳で掲載することが出来ないが十四曲の演奏が行はれてゐる。在所生として岩城寛、鈴木米次郎、小林錠之助等が居た。十月五日勅令を以て音楽取調所を東京音楽學校と改稱し文部省直轄學校となつた。

音楽取調掛當時の事に就て上野校の乙骨教授が調査したことが同聲會報百五十六號に載せてあるが、好資料なればこゝに轉載する。以下、乙骨教授に對してものせられた上眞行の談並に手紙である。

『取調掛建物の入口から左は全部奏樂室及集會室に充てられて居た。又掛員が仕事をしたのも此の室である。寫眞では見えないが、後の方にメーソン翁の宿舍があつて、それは一部分が二階建になつてゐて、前面の建物から廊下續きに行けるやうになつてゐた。さて入口から右手はピアノ練習室其他に充てられ、練習室には十餘臺のテーブル形ピアノが据えてあつた。』(以下手紙文)

『音楽取調掛の教室寫眞中玄關に向て右手の各室(内廊下の兩側共)は總てピアノの練習室の様申上候處後にてよく考

へたるに玄關に接したる右手の室（窓二つの廣さ？）は樂理其他の講義室に使用され居一時依田百川翁（文部省より兼務）なども此室にて倫理の講義を致され候、神津氏も此室にて我々助教に音樂史等の講義を致され候又玄關から眞直に廊下を西へ十數歩進みたる右手の諸室（メーソン氏が客間又は食堂に用ひられたる跡）は掛長室、事務室、食堂、教員室等に使用されたる様相覺え候其の比掛長伊澤先生も生徒の或者者に親しくビヂブル、スピーチの講話やヘルムホルツの音響學などを講義されたるがこれは奏樂室の廣間に黒板を置き其前にて致され候。

又初期の傳習生中には比較的年寄りが多かりしが其一人なる富本の家元豊前大夫の如きは五十恰好の禿頭翁なりしがそれでも傳習生の一人としてメーソン教師や我々助教から唱歌の傳習を受けたり小學唱歌集開卷第一のカタレ〇一ニホーへ〇一ソノ一フノ一サク一ラ〇一此の〇（レスト）の處で必やといふ豪勢な掛聲を發したるは頗る珍妙なりしがどうしても此の奇習を止むることは不可能なりし。」

以下乙仲教授の質問に對する答

……「當時オーケストラの眞似事をした頃、この寫眞にある丈の樂器があつた。日本樂器としては在來の雅樂の樂器（琵琶、笙、箏、箏、笛）の外に伊澤校長の考案した樂器もあつた。先生は大きな琴を作つて唱歌教授の伴奏にするといふ試みを爲し、又新案の胡弓（皮の所へ桐薄板を張つたもの）をも作つて見られたが、これは甘く行かなかつた。」

唱歌會の設立

明治十九年頃、高崎五六が東京府知事（市長の職をも兼ねて居た）をして居た時のことである。高崎知事は西洋音樂が大嫌ひで是を教育に用ゐまいとした位であつて、東京府に於ける音樂は洵に四而楚歌の聲であつた。音樂取調所の伊澤掛長は頑として此の潮流に反對し孜孜として唱歌教育の爲に盡力し、其の進歩發達を見たわけであるが實に彼

れの剛骨な所に俟つ處が多かつたのである。

如斯當局者は元より世間も未だ西洋音楽に對しては至極冷淡であつたに不拘、こゝに特志なる四人の小學校長即ち小野義倫、加藤清門、岸田松次郎、山岸輝光等が居て大いに音楽の必要を唱へ、神田區裏猿樂町尙綱小學校に百有餘名の小學教員を集めて、音楽唱歌會を開いた。講師としては鳥居忱、上眞行、辻則承、奥好義等で、ベビー・オルガンの風が出て鳴るのか、入つて鳴るのか、手先に空氣の動搖を感じるやうな、不完全な樂器を使用しつゝ唱歌教授を行つたのである。

非常の好景氣で時恰も、嚴寒で盛に炭火を利用する爲に經費が膨脹するので、月謝二十錢を一躍二圓としたが其れでも會員は別に減ぜず、一盛一衰前後七ケ年間、明治二十六年頃まで繼續して居た。

一方には音楽取調所は傳習生を募つて、大いに音楽の發達に資した。傳習生中の四辻訥次等は東京府師範學校に鳥居忱等は第一高等中學に奉職して大いに其必要を唱導する等、高崎知事に向ふを張つた。

明治二十年音楽取調所の卒業生小山作之助は四辻訥治等の後を繼いで東京府下の音楽普及に勉め、芝唱歌會を芝區愛宕町に設立した。彼は音楽教授に繁忙のため毎夜の晚餐は九時に至つて漸く箸を手にする程であつたと云へば如何に唱歌會の盛んであつたかゞ想像される。

其後の小山作之助組織の唱歌會は益々隆盛に趣き東京市内外は彼の勢力範圍と言へ得るに至つた。

東京府は東京唱歌會に對して學校組織にするやうにと交渉があつても「ソナナ面倒なことは眞平……」と鳥居忱等は應ぜず、従來通りでやり通して來たが、同會の勢力は漸次市内より地方的に傾いた。

明治二十三年五月、高崎府知事その職を辭し、蜂須賀茂韶侯其の後を繼いだ。音楽學校商議員である彼は、音楽唱

歌に對する理解を有して居たが、歐化主義全盛時代の反動として國粹保存の強調起り、其の進歩發展を鈍らしたことが尠くなかつた。

明治二十四年七月、蜂須賀侯の後任として富田鐵之助、府知事に就任したが音楽上の特記すべき施設は無く、獨り私設唱歌會の活躍を見るばかりであつた。

東京唱歌會 東京神田區今川小路一丁目一番地

一、目的 諸學校音楽教員を養成する所である

一、本科 尋常科、高等科、各六ヶ月

一、撰科 唱歌、風琴、

一、受験科 東京音楽學校の受験科を授く

一、管理者 島居忱

一、教員紹介 諸學校音楽教員を紹介す

一、樂器検査 樂器購入の際實費支辨候は各自の依頼に應ずる

芝唱歌會設立は二十年の春頃で、小山作之助が同會長である。芝區愛宕町に移轉後は明治四十年迄存続したものである。創立當時の弟子に田邊尙雄理學士の母堂等がある。それは二十二年十一月二十三日付小山作之助署名の卒業證書様のものであるとのことである。

明治二十三年十二月には東京府唱歌速成傳習所補修生臨時卒業試験があつた。辻則承が唱歌とオルガンを、山田源一郎が音楽理論の試験を行つて居るが、試験問題が參考資料なれば茲に轉載する。

- 第一 唱歌 (1) ねやの板戸 (2) かすめる空 (3) 操練
- 第二 風琴 (1) 君が代 (2) 年立今朝 (3) 眞直に立てよ
- 第三 理論 (1) 左に掲載せる音階の主調を示し且つ其發見せる方法を記せ

i	1/2
7	1
6	1
5	1
4	1
3	1/2
2	1
1	1

(ト字記號)

- (2) 旋律及和聲なる語の字義を詳解すべし
- (3) 協和音及不協和音は如何なる音程より生ずる哉
- (4) 全音階中第一音より第七音に至る各和絃の名稱及其性質を述べよ

明治二十五年五月、東京音樂講習所が講習員を募集した。高等科、専修科、速成科の諸科に缺員が有るためである。科目は唱歌、風琴、ヴァイオリン、本邦箏曲、清樂、の五種で小學校令改正のために特に小學教員志願のものに臨時速成科を設け三ヶ月にて卒業せしむることにした。

第二十六章 官立東京音樂學校の設置

明治二十年十月五日、勅令を以て音樂取調所を東京音樂學校と改稱し、文部省直轄學校となつた。前年十一月伊澤修二等外七名が時の文部大臣森有禮に對し、これが設立の建議を上申したのが抑の動機である。當時最も優れた有識階

級の人達によつての建議であるが、教育施設に就ては兎角閑却され勝の秋に於て、此の方面に迄注意を向けられてゐたことは特筆すべきことである。

明治十九年十一月 音楽學校設立の儀に付建議

伊澤修二、櫻井銳二、矢田部良吉、外山正一、穂積陳重、村岡範爲、箕作佳吾、菊池大麓等より森文部大臣へ差出したる建議書は左の如し。

音楽學校設立ノ儀ニ付建議

方今教育ノ制度大ニ舊來ノ面目ヲ改メ、上ハ大學ヨリ下ハ小學ニ至ルマテ其秩序整然定立シ、吾國將來教育ノ方針ハ業ニ既ニ確定ヲ告ケントスルノ期ニ達セリ。是レ吾輩カ國家ノ爲メ大ニ慶賀シテ措カサル所ナリ。然リト雖モ猶其間尙モ缺典ト見ルヘキモノ一モ存スル所アラハ、敢テ議ヲ閣下ニ献シ、以テ明鑒ヲ懇請スルハ吾輩教育ニ從事スルモノ、本分ト思惟スルニヨリ、謹テ鄙見ヲ左ニ開陳ス。

抑教育ノ要ハ身體ヲ强健ニシ、智識ヲ増長スルヲ以テ重シトスルコト素ヨリ論ヲ待タスト雖モ之ト同時ニ亦心情ノ養成ヲ怠ル可ラス。蓋シ邦國ノ開明進歩ヲ致スハ單ニ人智ヲ物質上ニ施スニ職出スルカ如シト雖モ、其實高尚ナル心情ノ力主トナリ之カ因トナルモノアルニ非レバ、盛大善美ノ化域ニ達スル能ハザルハ識者ノ皆許ス所ナリ。然リ而シテ心情ヲ高尚ナラシメンニハ一般ノ趣味ヲ優美ナラシメサル可ラス、優美ノ趣味ヲ養成スルハ主トシテ美術ノ力ヲ假ラス、是ニ於テカ美術教育ノ要起ル。

我輩今日教育施設ノ方向ヲ察スルニ、諸般ノ學藝皆完美ニ至ルニ拘ラス獨リ美術ノ一點ニ於テハ、或ハ缺クル所ナキカヲ疑ハザルヲ得ス、曩者我省音楽取調所ヲ設ケラレ、近頃又圖書取調委員ヲ置カル、抑音楽圖書ノ二者ハ美術ノ

高位ヲ占ムルモノナレバ是レ此舉タル美術教育獎勵ノ旨ニ出タルヲ證スルニ足ルト云フヲ得ヘキカ、圖書ノ如キハ暫ク是ヲ措キテ論セスト雖モ音樂ノ事ニ至リテハ吾輩同志ト共ニ其改良進歩ニ熱心スル所ナルハ、敢テ一二ノ忠言ヲ聞下ニ呈セン、惟フニ音樂取調所ハ數年前ノ設立ニ係リ、爾來汎ク本邦及西洋音樂ヲ考查シ、佳良ノ樂典ヲ撰定スルヲ以テ其職トシ旁ラ音樂生徒ヲ養成シタルモノナレハ今日ニ至リテハ既ニ幾多ノ經驗ヲ積ミ進テ一個特立ノ音樂學校トナルヘキノ期限ニ熟セリト云フモ可ナラン。然ルニ今日音樂取調掛ノ實況ヲ觀ヘハ、其ノ規模或ハ前日ヨリ縮少スルモ更ニ之ヨリ伸張シタルノ實ヲ見ザルカ如シ、是レ吾輩ヲシテ美術教育獎勵ノ點ニ於テ或ハ缺クル所ナキカヲ疑ハシムル所以ナリ。

願テ世上一般ノ情勢ヲ察スレハ社會ハ益々改良ノ運ニ赴キ頃日既ニ演劇改良ノ美舉アルヲ見ルニ至レリ。

然ルニ音樂其他優美ニ屬スル藝術ヲ授ケ、實地演技ニ堪フヘキ人物ヲ養成スル所ハ全國中未タ一モ其設立ヲ見サルニ非スヤ、是レ吾國民ノ一大不幸ニシテ、亦社會ノ缺典ト云フヘシ、故ニ今ニシテ我省音樂學校ヲ設立シ、優等ノ藝術家ヲ養成シ、且最良ノ音樂ヲ擴張普及スルノ實ニ非スンハ、吾社會ノ大勢ニ背クノ譏ヲ招クノミナラス、將來我國ノ開明進歩ヲ妨クルノ憂ナシト云フ可ラス、依テ吾輩ハ速ニ一個ノ音樂學校ヲ設立セラレンコトハ閣下ニ建議ス。冀クハ吾輩力微衷ヲ察セラレ本議ヲ嘉納セラレンコトヲ、謹白。

十月十四日、元音樂取調掛主幹、神津專三郎は同校幹事に任ぜられた。

明治二十一年

一月二十七日、文部省編輯局長伊澤修二、東京音樂學校長に兼任され、我が音樂教育は茲に新しい發展の途に就いた。同月、音樂教師ソープレット契約満期に至つたが更に囑託を同二十二年一月迄に延長した。三月、同校職務規定



明治二十一年七月音樂學校卒業生

及商議委員規定が設けられ、蜂須賀茂韶侯、高崎正風男、外山正一博士、矢田部良吉博士、末松謙澄博士、村岡逆彦博士等が商議委員に列せられた。四月、入學志願者心得を假定して、豫科修業年限一ケ年、本科師範部二ケ年、専修部二ケ年となつた。

七月、岩城寛、小林錠之助、鈴木米次郎の卒業生を出した。卒業記念寫眞を見るに歐化主義全盛の名残が偲ばるゝ、亞米利加歸りのピアノリスト瓜生繁子、洋行準備の幸田延子、ソープレットの偉大さ、伊澤校長、小山作之助、上眞行等の聰明さ、官立學校の意氣を示して居る。

十一月五日、新に招聘の音樂教師奧國人ルードルフ・ヂットリヒ來朝就任した。ウキンナ駐在の我が公使の紹介に據つたのである。

ルードルフ・ヂットリヒ略歴

ヂットリヒは一八六一年四月二十五日澳斯利・匈牙利國ガリチアン洲のピアラに生れ、幼にして郷學に入學甫めて五歳で洋琴を學び七歳でヴァイオリンに入り九歳で風琴を

始め十歳にして音楽の理論に嚮つた。

十五歳の時はゼルマンのプレスデンに來り高等普通教育を受け、側ら音楽修行を兼ね、そして其業を卒へ更に音楽専門の志を立て、ウキンナに來り一八七八年を以て其業を卒へた。

卒業に際してヴァイオリン、オルガンの二科各第一等につき賞與あり卒業證書には同院に於て最も名譽とする銀牌の賞を附して授與された。一八八三年國民の義務として兵役に就き、よく之を卒へ一八八四年音楽を以て世に專にす。是に於てロットシア男の爲にオルガン奏者の職を執り、兼てユダヤ宗大教院に於て樂長と成り、且つ風琴の演奏を掌理して、此職の財務を果すの傍音楽教育の要旨を研究し、時々ウキンナの重大な音楽演奏會に臨みヴァイオリン獨奏、管絃台奏樂、室内奏樂、若くはピアノソロ、オルガンソロ及伴奏等を負擔し一八八八年に終に吾が國の招聘に應じたのである。

小山作之助曰く、デットリヒは人格者でもあり、學識も豊で且つ本職であるだけにオルガンの大家ではありヴァイオリン、ピアノ、コーラス何でも出來たために生徒にとつては最もよい開發者となつた。音楽學校の島崎赤太郎等はこの人によつて完成されたと言つてよからう。』

三月、遠山甲子教授囑託となる。

十二月六日、鳥居忱東京音楽學校教授方囑託、彼は第一高等中學校軍歌教授囑託より轉任されたのである。

明治二十二年一月、東京音楽學校規則を制定した。一月九日、囑託教師ジ・ソープレットの囑託を解いた。四月、雅樂部樂師兼伶人上眞行、教授に兼任された。四月十三日、幸田延子、海外留學生を命ぜらる。音楽專修の爲め文部省留學の嚆矢として注目された。七月六日、東京音楽學校、專修部生、山田源一郎、小出雷吉、高木次雄の三名の

卒業式を挙げ卒業演奏をも舉行、伊澤校長の演説と辻文部次官の祝詞等があつた。これが第一回卒業式で師範科生八名は十二月に卒業してゐる。

明治二十三年

官制に依つて學則が定められ、東京音樂學校の目的は音樂師と音樂教員を養成することとなり、愈々伊澤修二等の建議書之目的に添ふやうになつた。二月十一日、紀元節祝賀演奏會を同校に催した。(プログラム別項参照)同日又新校開業式も行つた。新校の敷地面積七千八百八坪七合五勺、新築建家合面積三百八十二坪六合六勺五才といふ。當時は實にスマートな新鮮な感じのするものであつた。二月二十六日、更に練習室を一棟文部大臣から交付された。而して五月に至つて之が全部の落成式を挙げ演奏會を催した。次いで十月二十九日、御眞影御下賜、十二月二十五日、勅語謄本の御下賜があつた。この年には規則改正により卒業生はなかつた。

明治二十四年

二月十一日、紀元節祝賀演奏會を開催した。第一回の勅語奉讀式で、「君が代」を二回歌つてゐる。四月、上原六四郎教授となる。六月十三日、伊澤校長は非職を命ぜられ、神津仙三郎氏校長心得を命ぜられた。同八月十日、女子高等師範教授理學博士村岡範爲副校長に就任。

九月にはチツトリヒに對して向ふ三ヶ年間の音樂教師を繼履された。十月七日、烏居忱教授となる。

當時の同校職員定員は教授五名、助教五名である。

本年度卒業生は第四回であるが新築以來第一回の卒業で、チツトリヒが去る二十一年に就職以來熱心なる勉強と鍛錬とに依りて卒業せしめたるもので、實に本年の卒業生の幸なる賜である。

卒業生氏名○専修部 岩原愛子、石岡得久子、荒井慎子、瀬川勲子、依田辨之助、根岸磯菜子、久間和喜子、村松秀子、丸山登か子○師範部 高木武子、福長竹男。

卒業式當日に於ける授業法演習の狀況

教授者 高 木 武 子

來賓に一禮してそれより男女二列の生徒に向ひ

「妾は本校の音楽教師に聘されました、皆さんの中に音楽に熱心なる方は手を上げ」と命じたるに一同は手を舉げたり、それより鞭にて卓を拍ち又「アー」と一聲唱へ此二種の音がどちらが奇麗な音とお思ひですかと問ふ。

一生徒立て「アー」といふ方が奇麗ですと答へ、次に黑板に「 $A-1-2$ 」の如く書き風琴にて此の二音を弾き鳴らす。其の二音を口音に移して之を四五回生徒に練習せしめ又 $1-2-1-2-1-2$ と書いて其音符に長短あるを示すが爲に $1-2-1-2-1-2$ と「 $豆$ 」と「 $横線$ 」の區別を授け次に「ハルハハナミ」の歌詞を授く。

此時一生はハルハハナミと唱ふ者有、

「某さん、かふいふ時はハルと書いてもハルワと讀みますと教ゆ、

…此時滿場笑聲起る……

今日は時間がありませんからこれで止めます。杯と如何にも其辯舌のお喋りなる其舉動の小生意氣なる風に見えしが、聞く所によれば其の着物の如く赤々しきビラシヤラを好まずして、平常温厚端正にして且音楽の天才ある評判高き熱心家なりといふ。(音楽雜誌)

明治二十五年

四月十二日、普通學務局長より、同校特選生を各府縣に募集した、五月には一般生徒募集を廣告した。男三十名女

三十名、試験の上入學を許す。志願の者は體格健康高等小學校卒業以上のもので唱歌集初編卒業以上、英語は綴字、讀法、文法の類、以上。而して九月中假入學十二名であつた。

四月、小學校教則大綱第十條中に唱歌は耳發聲器を練習し云々の箇條に基き聽音發音の學理等を知らしめる爲、本科二年三年に音樂的性理を課し、亦音樂と共に和文和歌等の講義をも程度を引き上げた。

七月、五名の卒業生中には、橋糸重、多極雅などが居た。同月小山作之助同校教授となる三十六年九月まで十有一年間の勤續者である。

八月、四龜納治、同校の囑託となる。音樂學校四不思議の謎もこんな處にあつたのかとも考へられる。二十七年三月に至つて退職した。

十二月、規定を改正して本科の學科中に音響學を加へ、文學、(詩歌學、及作歌)を増置し、尙課外に和文、和歌及生理學の講義をも加へられた。而して音樂教育が漸次其の進歩改善に向ひつゝあつたのであるが、議會の壓迫を受けて遂ひに再び獨立の立場を失ひ高等師範學校の附屬となるに至つた。

第二十七章 テルシャツクの東京音樂學校參觀記

テルシャツクは澳國の音樂博士でフリートの名手である。明治二十三年洋琴家のシューレルを携へて來朝するや、大日本音樂會に聘せられて演奏會を開催した。同會長鍋島侯が感激のあまり上聞に達して、宮中に於て御前演奏の光榮に浴したのである。音樂學校の音樂教師チツトリヒとは同國人で御前演奏も共に行はれた。本文參觀記はテルシャ

ツクが音楽學校を參觀し、同校で日本音樂會の演奏を聞いた時の感想ともいふべきものをメール新聞に載せたものでそれを轉載したものである。

凡て一國の文明は其學者と藝術家の數に由てト知すべきことは之を歴史に徴する所である。往時工藝美術の志操未だ會て歐洲人の腦裡に萌芽せざるの前より日本は既に工藝美術に其の花を滿開せしめた。即ち彼の有名なる絹、縮緬、錦繡の如き、薩摩燒の意匠卓絶、金光燦爛たるが如き、漆器塗物類の如き、金銀銅鐵の細工物の如き畢く天下の清賞を得ざるはなく、萬國の人目を驚かさざるはない。

故に此日本國民にして尙其固有の傳説を保持信仰し漫然他に模倣するの詭念を起さざらんは、日本は即ち此工藝美術を以て争ふべからざる最高の位地を世界に保存發達するであらう。蓋し才能と能と好風采と穎敏なる藝術上の感情とは、其の眼中に入る者を吐露するものである。

工藝上の部内に於ても此の如き動勉奮興したる成績あるに反して、彼の美術中の最美にして最後進なる音楽は恰も大人が童謡を唱ふ如く世に棄却せられて殆ど下流に沈んでゐる。最ベルシヤやアラビヤに於けるの諸例と同じく一種頑固の弊風より音楽の十分進歩を障碍したる者である。所謂ベルシヤやアラビヤの國民は數學、天文學、物理醫學、詩學等の如きものは頗る高尚の度に進んでゐたが、ベルシヤの數學、家アルフハラビーをして音楽を修め他の諸藝と均しく高等の度に達せしむるを得ざらしめたのである。がアルフハラビーも音楽に精通するを得ず、勢ひ誤解の過失に陥り音程の部分に於て第三音を以て不快の音と認め之を不協和音と爲した。而して此の如き理論なるを以て協和絃は稍ありと雖も其の進行はなくベルシヤ、アラビヤの音楽は終に其度を進むるを得ざるに至つた。

今や日本が長足の進歩を爲し、歐洲文明が此の日本の地に通路を發見して進入したことは、既に歐洲人の眼目を驚かすところで、今又此愛すべき國土に音樂成行の如何、即ち如何なる音樂を如何に處置するかの一斑を知るに至らば、又大に其感情を満足せしむるに至るであらう。

嘗て日本音樂會の演奏會に際し、東京音樂學校生徒の演奏は、此感情を満足せしむるの最好機會を與へたる者である。同會の演奏曲目は、多く有志の者を以てなり、歐洲諸國に於ける聴衆をも興ぜしむる程の者が多かつた。

ジョン、セバステアン、バツハ作、クルシフィキサス曲、

メンデルゾーン・バルソルテール作、ボーラス中の抜粹曲、

の如きは混聲の合唱曲で又ルドルフ・デゾトリヒ作の「ソナチネ」曲はヴァイオリン十一個の合奏で洋琴も這入つて居た。クルシフィキサス曲の結果は豫想外の好成績を收めたか唯惜むらくは女子中十分口を開くに乏しき者あるより天賦の美聲を完全に表現せしむるに至らなかつた。然し其の奏法の抑物頓挫があつて始終の規律正しき點、合唱をよく理解したものである。

ボーラスの抜粹曲も亦優劣なき好結果である。

此の時聴衆をしてあつと驚かした事がある。それは合唱歌を奏したる女子が更に出てヴァイオリンソロを弾いた。曲はデットリヒの秀作ソナタで初部は奏法殊に能く作曲者の旨意を演出した。作曲者自ら洋琴の座に就いた時は既に成果の巧妙なるべきを卜知する事を得たほどである。抑々デットリヒの伎倆を知らんと欲せば先づ其の高弟なる生徒其の唱歌を聴き其生徒のヴァイオリンを聴くべきである。此有爲の音樂家を得たるは實に東京音樂學校の爲に祝福する所である。

チツトリヒの音楽上の知識は鞏固なる基礎より成り、虚飾なく表裏なき純乎たる者である。チツトリヒは東京音楽學校の目的に能く適したる音楽家で今後更に同校に動續任用せられんことを切望して居るものである。

又チツトリヒが日本を去るの後も彼の記憶は永く公衆の心中に遺留せんこと必せり。

余曾て東京音楽學校に於て同校二年生中村松子スボーアの教科書第一卷第六號を聞いた。其奏樂の體裁甚に純良であつた。又岩原某子は勇氣を奮ひ著明なる音調を發してウイキルの教科書中より一曲を奏した。石岡は更に柔和なる性質を具ふる者の如くに見受けたが、又スボーアの教科書中第一卷の第十二を能實し得て稍其の勞を覺ふるまでに至つた。

幸田幸子は十三歳の妙齡にして良好の音響を發し用弓法も宜く、奏樂の體裁純良にして其活潑の性質を以て演奏したるは更に優秀なもので將來大に其業を成さんこと今茲に之を豫言する。

洋琴の部に於て根岸いそなの演奏あり。之はチツトリヒの教授を受けたること尙僅一ヶ年半にすぎないが、少しく怯懦する氣性がある。ベルチニーの教科書中より奏するに未だ十分の力を發揚することが出来ないと雖も尙將來動勉と忍耐とに依ては、必ず其業程の進歩を見るべき者多々あることを信ずる。

第二十八章 「君が代」

「君が代」の由來は多くの人に依つて研究されたが、現在に至るも歌詞の選者が判明しないのである。選者が無かつたのではなくて、多過ぎて誰が正しいかに迷つて居るのである。

「君が代」の歌詞は、古今集にあるのであるから既に千有餘年も以前にあつたもので、和漢朗詠集にもあれば、古今六帖にも出てゐるといふ様に、其の間、多くのものに掲載されてある。薩摩琵琶の「蓬萊山」にもあれば、南都興福寺延年歌の中にもある。謡曲の「老松」の中にも、又伴信友の著「古詠考」の中にもある。こんな風ですつかり國民化した歌であることが想像される。それ故に歌詞選定が、期せずして多くの人の一致を見たとも言ひ得ることであり、國家としても喜ぶべきことである。今歌詞選定者を列擧して見ると、

○大山元帥説（當時砲兵隊長）

これは故小山作之助が文部省からの調査の爲に公府邸に派遣されたのであるが、公の曰く自分の選んだものであると直接に言はれてゐる。

○肝付半平説（後に兼廣と改む）

島津公の御側務の人で平素愛誦の「蓬萊山」から選定したといふので、之には中村祐庵樂長も同意を寄せてゐる。西鐵藏も「蓬萊山」から選び出したものといふ説を持つてゐる處を見ると肝付説を裏書するものと思はれる。又河村純義伯説や其他にも二三の説があるが省略する。

東京高師教授當時の田村虎藏が教育研究紙上に掲げられた「君が代」の來歴上貴重なる新事實の發見物としての最初の天皇禮式の歌も研究資料の一つである。（第十六章の曲譜参照）

みたみわれ いけるしるしあり

あめつちの さかゆるときに

あへらく おもへば。

この古歌は萬葉集中にあるものであるが、この選者も判らない。作曲は最初の「君が代」の曲と殆んど同じで、フントンの作曲である。これはフントンの通譯を務めた鹿兒島藩の原田宗助の唱つた「武士の歌」の旋律を聴いて、それによつて作曲したものであるが前述の通りである。この曲は威嚴がなくて間が抜けた感があるので録川樂長は他日の改作を期しながらとりあへず使用したものである。(第十六章歐風軍樂部隊の起源参照)

明治三年九月八日の越中島に於ける薩、長、土、の三藩兵の御閱兵式には薩藩の軍樂隊は、陛下御前にこの曲を奏して天龍に達したのである。其後鎌田眞平樂長が職を辭して中村祐庸が軍樂長となり、明治九年に之が樂譜の改訂を實行しやうとして「天皇陛下を祝する樂譜改訂の儀の上申書」を書いて宮内省に提出した。

明治九年海軍々樂長長倉祐庸^{スヱツヤ}上申書

天皇陛下を奉祝する樂譜改訂之儀上申

宗國元晦日、人生而靜天之性也、感於物而動性之欲也、夫既有欲矣則不能無思、既有思矣則不能無言、既有言矣則言之所不能盡、而發於咨嗟咏歎之餘者必有、自然之音響節族而不能已焉、此詩之所以作也云々。

史を関するに支那は上古より詩賦音樂を尊崇し君主政を施くに其の郷閭巷の俚歌を聴き以て民情の向背奈何を觀察し、樞機順序を慮定せり。周の盛りし時朝野其言粹然として正に出でざるなく聖人固とに己に其詩歌を以て之を聲律に協へ之を郷人に用ひ之を邦國に用ひて大いに天下を化するに至り孔子は古詩を刪編して以て之を萬世に傳へ樂を以て六要藝の一に置けり。

又歐洲に於ては夙に希臘及羅馬等音樂演劇等の進歩に心を用ひ、近今猶亦歐米諸國技藝、建築雕像圖畫音樂詩歌等の體裁を美藝にし速かに人心を感激せしむるに足るを以て之を敬重し其の進歩を圖るに至れり。瑞士國、イカ、フ

ル・エチユリ曰く、音樂の世事上に利害あるは之を學問に比すれば更に少しと雖も其の功用の曠く人情を感動せしむるは遙かに學問に優る云々、と聞く國家は先づ自己の形貌を佳麗にし儼然たる國威を輝かし其尊貴顯榮を表するを以て實に緊要の事となすに依り歐米諸國は殊に各其の君主を祝するの詩歌樂譜ありて、現に今英國人民の女王陛下を祝する歌の如き試に之を國語に譯するときは

『上帝が我仁惠なる長命の貴き女王陛下を守護し、陛下の勝利幸福及び名聲を交付して、長く我等の統轄する主權を賜ふ、神現はれて敵軍を揮散す、而して彼等を死しむ、國事を擾亂する邪曲狡計を打毀す。』

といふ意なり。然り而して聘問往來等の盛儀大典あるときは、各國互に其の樂譜を謳奏し以て其の獨立自立國たる隆榮を表認し、其の君主の威嚴を發揮するの禮款に於て缺く可からざるの典となせり、依之觀之、凡そ音樂なるものは吹奏の音律をして正しく詠謳する聲響に協合せしめざれば蓋し其言辭音節の主意を失し、徒らに鐘々虺々然々たるのみにして其人心をして感動せしむるの機能を顯はす能はざるなり、然るに現今、我 天皇陛下を祝するの樂譜、「君が代」は其記する所の音律我が國民の詠誦する聲節と全く不妥迭違にして之を吹奏するも、聽者をして何の音樂たるを辨知する能はざらしめ、爲に程々儼然たる我 天皇陛下の尊榮威嚴を表し、及び之を崇敬する儀禮の主意を失し前陳途に鐘々虺々然たるのみ。

抑々此聖世の譜は、嘗て鹿兒島藩に於て樂隊削置の際、教師英人フエン・トンをして撰造せしめし所に係り、當時、同氏歸國の期至り、殆ど僅々餘日なきに臨み、校正を加ふるの暇なく爾後亦之を改訂するの擧なく、默許襲用今日に至れるなり。因て希くは今更に改訂を加へ宜しく音節を正し、以て前述設樂の本意に適合せしめん事を、別紙改訂見込書を奉る。……

臣等樂伶の職にあり日夜憂慮己を能はず極めて僭踰の罪を甘んじ敢て庸陋の見を顧みず謹で芹悃を上る、伏て惟れば其足らざる所を哀れみ其愆を矜んで、而して採納焉惶懼再拜。

會々西南戰爭其の他の事故の爲容易に實行を見る事が出来なかつたが機到り遂に明治十三年七月に、改訂委員を設けられた。

明治十年の西南の役で國歌改訂の義は遷延して遂に明治十三年宮内省は將來我が天皇陛下を崇敬する儀典に聖世の樂譜を謳奏せしめん事を議した。而して宮内省雅樂部では「君が代」の歌詞を基として改訂の數曲を作り何れを採用すべきかを選定する爲に宮内省雅樂部長芝葛嶺、陸軍々樂長四元義豐、海軍々樂長中村祐庸及洋樂屢教師獨逸人フランツ、エツケルトの四人を選定委員として宮内省へ出頭せしめ、種々協議の結果現在使用の樂譜即ち、宮内省雅樂部大伶人林廣守作曲になる雅樂壹越調律旋のものを當選と認めたとである。

其處で更に音樂教師エツケルトに和聲をつける事を命じたので、エツケルトは之に最も相應しい和聲を謹作して、芝葛嶺、林廣守、東儀季熙等に聽察せしめ、茲に始めて國歌完成の事が成り、明治十三年十一月三日の天長節には宮中で演奏されたものである。國歌「君が代」の作曲が完成すると同時に將官禮式に使用する「海行かば」の曲も同時に選定され、之は雅樂冷人東儀季芳の作曲で、エツケルトの調和に係りたるものである。歌詞は萬葉集にある「海行かば」の古歌で我が國軍歌の始であると言ひ得るものである。

エツケルトのつけた「君が代」の和聲は主として英國の教會風の和聲に因んだものと言はれてゐる。當時或る者は日本の情緒に乏しいとの説もあつたが、仲々壯嚴で、世界各國の國歌と比較して日本趣味を保たしめた事に就て此のエツケルトの功勞は永く吾人の腦裡から去り難いものである。

新様な次第で「君が代」は 天皇陛下に對する陸海軍の奉祝歌であつたのであるが、明治十五年太政官より國歌として制定の令出で、明治二十一年には此の樂譜を「大日本禮式」と題して海軍省から各條約國へ公然と通知を發した。

作曲學上より見たる「君が代」。

「君が代」の音調は長い雅樂調の中に、斷片的に屢々出て來る雅樂の旋律で雅樂の一節を取つて調整したのでと言ふてゐる人もある。之を洋樂作曲法より見れば音階第二度の音より發して同音で終り、十一小節と云ふ不思議な數で結ばれてゐるのが、全く日本獨特のものである。エツケルトのつけた和聲も初と終りとに和聲を附して居ない處が日本の特徴をよく現はした處で、後年ノエルベリーがつけた和聲にもこの氣分が消えては居ない。雜誌「ララ三ノ七」に據れば、今から十數年前獨逸の音樂大學に於て其の教授達が、世界の國歌研究の時に、第一等に推されたのは日本國歌「君が代」であつたさうである。其の説明に曰く「歌詞は永遠の頌歌であり、曲は大海を思はせる様な自然の旋律であり、作曲學上類例のない程の名曲で、永久に歌ひ飽きる事はないとまで激賞されたのである」と。

「君が代」制定の功勞者、中村祐庸の略歴

幼時長倉彦二と呼ぶ、人となるに及び中村祐庸と改む。鹿兒島の藩士、嘉永五壬子年十月十五日鹿兒島郡坂本村に生れ、明治二年鹿兒島藩に洋樂隊を設けらるゝや選ばれて横濱に來たり、英國陸軍歩兵十番大隊に屬する樂長フェントンに就て洋樂を學ぶ。時に十八歳。明治五年海軍最初の軍樂長を命ぜられ、爾來三十有餘年間海軍に職を奉じ、其間軍樂隊の基礎を定め、大いに洋樂の普及に努められた。

明治七年宮内省雅樂部伶人に洋樂教授のため出仕し、同九年國歌改訂の義を上申された。同十三年國歌制定委員に擧げられ、同十八年信號喇叭譜制定委員となり、同三十五年には、英國皇帝戴冠式に派遣され、同三十六年十月十五

日後備役に編入された。

大正十二年七十二歳の高齡を以て逝去されたが、彼の功績は認められ特に勳五等双光旭日章を賜はつた。實に國歌制定の功勞者にして洋樂界の先覺者である。

「君が代」作曲者、林廣守略歴

林廣守は天保二年大阪に生れ、林廣倫の第三子である。天性音樂を好み笙にも琵琶にも舞ひにも通じ、加之笙の製作にも亦極めて巧妙であつたのである。

第三子でありながら宗家を襲うた、祖父の廣濟、養父廣就について樂道を勉強したが慶應元年十月、雅家の試験に滿票即ち滿點でパスした、雅家試験がはじまつてから二百餘年になるが滿票でパスしたものは、廣守以外に以前四人しかなかつたと言はれてゐる。

官仕をはじめたのは天保十二年十月で、佐兵衛權少尉に任ぜられ、明治元年正月内侍所、非常付勤番仰付られ、同二年大阪御親征にお供して東京に入り、大伶人となり、同十七年雅樂部副長に任ぜられ、同二十一年五月雅樂部々長に任ぜられ正七位に叙せられた。同二十六年四月に至つて職を辭した。明治二十九年四月五日齡六十六歳にして故人となられた。「君が代」作曲當時は四十九歳で宮内省の雅樂部世襲の五十餘家の外から雅樂部に入り、遂に其の部長に迄なつた事は彼の才能をよく物語るものである。昭和五年は彼の誕生百年に當る。

「君が代」制定の功勞者として獨逸人フランツ・エツケルトがある。履歴詳ならず、茲に省きたるも次章陸海軍々樂隊の項に、來朝後の經歷を記してある。

第二十九章 陸海軍々樂隊の動靜

創立以來、海軍は英吉利式、陸軍は佛蘭西式で軍樂の進歩發達を見てあつたが、明治十一年に至つて兵制は共に獨逸式となり、軍樂も亦之が影響を受けるに至つた。

創立以來の軍樂教師フニントンも明治十一年に至つて解傭され、同十二年春には海軍々樂教師として獨逸人フランツ・エツケルトが赴任した。彼は音樂教師として、陸軍にも宮内省にも音樂取調所にも關係した人で、我が獨逸音樂の祖といはれた音樂大家である。陸軍には明治五年以來の佛蘭西人ダクロンが居たが、軍樂の經營に腐心して陸軍々樂のみを守るに過ぎず、エツケルトの比ではなかつた。

フランツ・エツケルトの閱歷

エツケルトは明治十二年の春、海軍々樂教師として來朝し、東京芝公園内の前政友會本部の横町にある寺に住んでゐたが、當時三五六の壯年であつた。海軍の方が本務で明治二十一年三月迄滿九ヶ年間軍樂及音樂理論を教授して居た。其間明治十六年二月から音樂取調所の音樂教師を兼務し、同所には契約滿期後も更に繼續して十九年三月迄教授に當つてゐたのである。陸軍にも此間兼務を爲し獨逸式軍樂を實施するに至つた。

彼は作曲に秀で其の創作曲も多いが、我が「君が代」に和聲を附した爲に其の名を永久に我が國にとゞめるに至つたのである。「君が代」が制定された當時はエツケルトの作曲であると言はれ、海軍省發表の「君が代」樂譜の表紙にはエツケルト作曲と記載されて居る處を見ても疑はれる。

又明治二十八年旅順陥落の折には、同記念行進曲を作曲し發表をして居る。後に「君が代マーチ」として青少年間に歓迎されたのもこの曲の一部の改作である。又、御大葬に奏せられる悲曲「哀の極」は、英照皇太后御大葬當時の作曲であり、實に我が國音樂の偉大なる貢獻者である。彼は、其後朝鮮の皇室李王家の樂長に招聘されて行つたが可惜、大正五年八月胃痛で彼の地に客死した。

海軍々樂隊

エツケルト就任後の海軍々樂隊は非常に活氣を呈して各所に迎へられた。

明治十二年十月十二日、横濱の製茶共進會褒狀授與式に於て海軍々樂隊の演奏が行はれた。内務、大藏卿を始め總員五百餘名式場狹隘にして頗る雜沓を極む。既にして海軍々樂隊の奏樂があり、勸農局長、内務卿の演説あり此間奏樂……云々。』

同年十一月、横濱糸蘭共進會に於ける海軍々樂隊の奏樂は同廿五日の褒狀授與式當日に行はれた。式畢はつて公園内に於ては海軍奏樂、烟火戲等あり夜は球燈數千個を點じ園の内外縦寬の群集で頗る賑ふ……云々。(横濱開港頭末) どんな曲目をどんな風に演奏されたかと判らないが共進會の褒狀授與式等に既に軍樂隊が活躍して居たのである。

明治十三年には、海軍に於ては、獨人アンナ・レーヤをピアノ教師として招聘し、軍樂員十名を撰抜して之れが練習を爲さしめた。ピアノの練習は非常な難物で明治二十三年迄滿十ヶ年間もつゞいてゐた。

明治十五年一月、軍樂志願者を募集して十五名を採用した。瀬戸口藤吉の如き後年の名樂長は此年に入團されたのであつた。

明治十六年九月には、十八名から成る軍樂一隊は戰艦扶桑に乗組んだ。司令長官旗に軍樂隊を附せられた始めて「海

軍將官禮式」海ゆかば……の曲を洋上に響かせたのである。十一月には軍樂隊概則が制定され、俸給技藝加俸を改正し、一年二回の試験を行つて、其の成績に依り加俸の増減を施した。之が技術の發展を著しく促進し、一方に又非常なる緊張味を招來せしめた。

明治十七年、海軍省官制改革が行はれ、軍樂隊は軍事部の所轄となつた。

明治十八年、陸海軍専用の喇叭を制定した。従前の海軍使用の喇叭譜は英國式其儘であり、陸軍のは佛國式であつたが爲に、陸海軍からの委員によつて陸海軍専用の喇叭譜を制定した。委員の名を擧ぐれば、

委員	長	海軍	少佐	鮫島	員	規
同		陸軍	少佐	今村		某
編纂委員	長	海軍	大尉	富岡		定恭
同	委員	海軍	々	樂長	中村	祐庸
同		同		樂次長	石橋	常昌
同		同		陸軍歩兵	曹長	中村
同		同		喇叭教官		某

七月 天皇陛下には山口、岡山、廣島三縣下に御巡幸のため御召船横濱丸へ軍樂隊を乗組ましめられた。發着共に横濱からで當日は陸軍々樂隊も奉送迎に演奏を行はせられた。

明治十九年二月、常備艦隊司令長官旗艦に増加員として軍樂隊一隊二十六名を置かるゝ制を發表された。三月、軍樂隊は横須賀鎮守府所轄となり、横須賀屯營新選座分營と稱することになつた。四月、海軍省令を以て軍樂隊定員を

定め一隊の編成を二十六人に定められ樂器編成を左の如く定めた。

フラットピッコロ	一	E \flat 第二トロンベツト	一	バスボザウネ	一
E \flat クラリネット	一	第一ホルン	一	バリトン	一
B \flat 第一クラリネット	二	第二ホルン	一	E \flat バス	一
B \flat 第二クラリネット	二	第三ホルン	一	B \flat バス	一
B \flat 第三クラリネット	二	B \flat 第一テノールホルン	一	小太鼓	一
第一コルネット	二	B \flat 第二テノールホルン	一	大太鼓	一
第二コルネット	一	第一ボザウネ	一	計	二六
E \flat 第一トロンベツト	一	第二ボザウネ	一		

七月軍樂條例を發布し、服役の年限を定め同時に官階が左の通りとなつた。

軍樂師(准士官)	一等軍樂手(二等下士)	二等軍樂手(二等下士)
三等軍樂手(三等下士)	一等軍樂生(一等卒)	二等軍樂生(二等卒)
三等軍樂生(三等卒)		

明治二十一年三月、海軍々樂教師エツケルトを解備した。彼は明治十二年三月以來の軍樂教師で、我が獨逸音樂の祖と言はれた。解備後は官内省に雇はれたが其後と云へども軍樂教師を兼務して一週一回教導の任に當つた。

明治二十二年三月、海軍々樂練習所條例を設け練習所を東京海軍大學校構内に新設し海軍大學校の所轄となる。四月獨逸人グスターフ・アルベを軍樂教師として傭聘、二十五年迄勤務。七月、海軍々樂生徵募細則を設けられた。四

等軍樂生及五等軍樂生の等級を置くことになつた。同年技術加俸の制が撤廢された。十二月横濱町會様上官民大懇親會に於て海軍々樂隊の奏樂を行つた。即ち横濱市會解散、増田市長、以下助役市參一同辭した折の和解懇親會に出演したもので、海軍々樂隊の奏樂は實に目覺しいものであつた。

明治二十三年三月、海軍ピアノ教師アンナ・レーヤ解職、同月、軍樂練習所を廢し、横須賀海兵團に移る。四月、軍樂練習規則を發布。七月、軍樂隊一隊を佐世保、吳海兵團に擴張新設した。

明治二十五年三月、海軍備教師グスター・アルベを解備した。

陸軍々樂隊

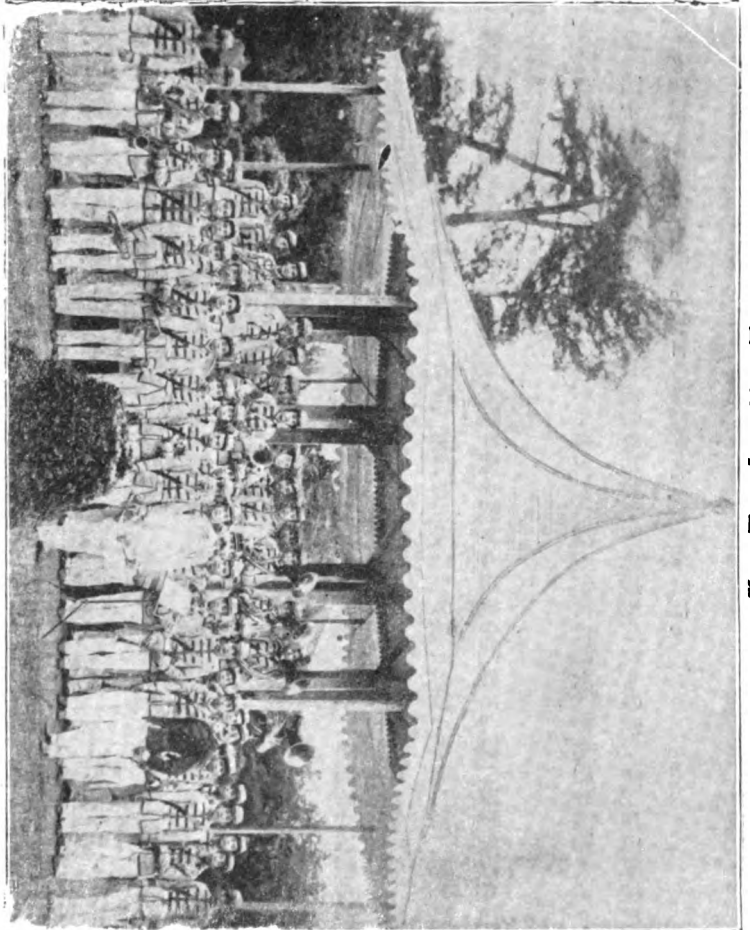
明治十三年、陸軍々樂隊第一次服制の改正が行はれた。即ち正裝の改正で帽子は佛蘭西式軍帽の型を採り、上端紺青、下端茜之れに黄色の線を施し、上衣は紺青に茜の肋骨を付したのである。袴は従前の儘で帶革は白色の革で美しいものである。又第一次擴張と營所移轉も行はれた。總員を二隊に分ち第一、第二を冠し第二軍樂隊長に四元許豊、第二軍樂隊長に樂次長池上藤之丞を任じ、第一軍樂隊は霞ヶ關より馬場先門外に、第二軍樂隊は和田倉門附近に設置し、第一軍樂隊は教育を擔任することになつた。

明治十四年、夏陸軍々樂隊は横濱山手公園に於いて華々しい演奏が行はれた。音樂雇教師佛人ダクロンの訓練による四元樂長の率ひた四十七名の一隊である。當日此の地に於て記念撮影したものが、今、戸山學校に保存されてゐるが樂器編成等は殆ど現在と異なる處が無い。當日の隊員氏名を列記すれば、

和久 鈴四郎 仙葉 勇松 因中 興三郎 永井 岩井 元義 聖井

岩田 游造 田高 積爲 築田 幸吉 佐々木 龜之助 見護 本

林 義方 杉浦 傍順 (ダクローン敬願) 杉江 幸平 工藤 貞次 村岡 寅太郎 子求 五郎 成川 定次郎 關子 求五郎 石川 辰之助 林 義方



安 保 角 謙 野 重 太 郎 林 六 管 杉 安 山 本 直 太 郎 本 直 太 郎 時 顯 重 功 知 郎 功 知 郎 功 知 郎

石 川 川 石 近 高 林 石 藤 屋 源 之 助 源 之 助 源 之 助 源 之 助 源 之 助 源 之 助

小 島 賢 太 郎 高 西 池 上 橋 岡 長 取 永 承 平 源 之 助 永 承 平 源 之 助 永 承 平 源 之 助

近 藤 孝 五 郎 內 澤 池 鳴 田 澤 池 田 田 出 登 三 五 郎 內 藤 盛 三 郎 內 藤 盛 三 郎 內 藤 盛 三 郎 內 藤 盛 三 郎

(廣所按學山戸軍陸) 隊 鑾 軍 軍 陸 の 旗 指 シ ロ ク ヲ 々

加藤 鉦太郎 福田 竹次郎 永井 庄三郎 高橋 武七

以上四十七名 (寫眞撮影位置順)

寫眞中に目につくのはダクロンの偉大なる體軀で彼の指揮振りが察せられる。四十七名中には四元樂長(二十九歲)も居れば佛蘭西留學を命ぜられた、工藤貞次(當時一等樂手)もゐる。後に樂長になつた、永井岩井、近藤時明、池上藤之丞等もゐた。山手公園の音樂堂は四阿屋式のもので、外人の團體によつて經營されて居た。公園内に設備されたもので大震災前まではその原形が見られたのであるが現在は無い。

明治十五年、陸軍通譯官古矢弘政、一等樂手工藤貞次の二名、軍樂研究の爲佛蘭西巴里に留學を命ぜられた。我が國に於ける音樂研究留學生の最初である。彼等は、渡佛後コンサーバーハール十學に入學し明治二十一年十月に歸朝する迄、滿五年間の研究を積まれたのである。

六月には「卒」相當の等級に置かれた。此の當時の採用法は體格及學術の試験合格者に通學を命じ、四ヶ月間一ヶ月四圓五十錢を支給し、自宅より私服通學せしめ、四ヶ月後に到り試験を行ひ及第者は三等軍樂手を拜命し、落第者は更に二ヶ月間練習せしめ尙不成績の者は通學を免ぜらるゝものであつた。

明治十六年、陸軍々樂教師ダクロンは解僱された。彼は軍樂隊の創立より教育に従事し幾多の整根錯節の間に介在して種子を培ひし其の功績は軍樂史上忘却すべからざる恩師である。

ダクロン解僱後に於ける軍樂隊は、目を追ふて頽廢し、軍紀も亦俱に弛緩し、之を收拾調節するに困難の狀況を呈した。

時の陸軍卿大山中將は大いに時態を憂ひ、軍事視察として渡歐に際し、軍樂教師の適材を佛蘭西に求め、同國陸軍

樂長にして名聲噴々の聞えあるシャル・ルルーを抜き雇教師に招聘し、陸軍々樂隊の刷新興起を依頼することになつた。ルルーは明治十七年十一月に赴任した。

シャル・ルルーの革新

彼は剛毅果斷武士的典型の高潔なる士で「軍樂の成功は人格にあり」と唱導し躬行品性に重きを置き萬難を排して革新を斷行された。即ち因襲の陋弊を除き先づ兩軍樂手を試験し重に少壯有爲を抜き更に生徒を新募し自己理想の決行を企てる等かなり急激で而も大膽な革新を行ひたる當時の風雲が、實に軍樂史上の一維新であると言はれた。

十九世紀以來の文化中心と誇つた佛國の精銳が起ちて明治二十年以前の軍樂を自國の時代の如く見えたる革正は、夥しき犠牲者を出さずに居られなかつた。第二軍樂隊長池上藤之丞は其の職を辭して樂次長近藤時明之に代るに至つた。彼は又邦樂を伊澤修二、芝葛鎮、山勢松韻等を師として研究し、日本的の作曲もある。抜刀隊の曲等はよく歌はれたものゝ一つである。

明治十九年一月、軍樂教師ルルーが革新の第一歩とも見るべき服裝の改正が行はれた。政府當局はルルーの意見を容れて、帽子は佛蘭西式にして茜絨黃線、日章白羊毛の前立を用ひ、上衣は黒絨茜紺絨金線の裝飾に襟章として緊琴ウクレレを用ふ。(現時音樂徽章として「リール」を廣く用ふるを見るも本邦に於て之が嚆矢である)袴は茜絨に紺青の側章を施し従來正略二裝の制を改め、正裝の場合は帽子に前立を附することに改正した。之が軍樂隊に於ける第二次服裝の改正で、ルルーの理想は着々として歩を進め、上司も亦彼の腕を信頼する事篤く、彼の經倫が日一日として實現されていつた。

軍樂隊創立以來の定員の變遷は最初フュントン時代は三十二名、ダクロンに至つて四十二名に増加し、それがルルー

一の意見に依つて五十名に増員した。五十名の編制要員は、隊長として一、二等軍樂長一名、軍樂次長一名、一等軍樂手三名、二等軍樂手六名其他樂手補、樂生を合せて五十名としたのである。

又ルールの教育科目は次の通りに定められた。

一、學科 初等樂理、高等樂理、初等唱譜、高等八種、音部の唱譜、音樂歷史、調和學、轉寫譜記、樂器保存法、唱歌（單首歌）

二、術科 專任樂器調音法、一齊律若くは指揮法、聞記、唱歌（單音）、洋琴及調查術、運動と奏樂連鎖、轉調演

明治二十一年二月、軍樂隊第二次擴張増設が行はれた。第一、第二の軍樂隊を合併し、之に卒業生を加へ、三分三隊を編成し、一を基本隊として教導團に置き、教育を掌り（現戸山學校軍樂生徒隊の前身である）他の二隊を近衛及大阪鎮臺に設置した。當時の記念寫眞に據ると九十六名が現はれてゐる。

近衛軍樂隊には四元義豐を隊長とし、大阪鎮臺軍樂隊は樂次長、永井岩井を擧げて隊長と爲し、基本隊は近藤時明を隊長としてゐた。ルールは依然教育を擔當したのである。

因みに基本隊長近藤時明は後、幾何もなく病没し、近衛軍樂隊長四元義豐其職を兼ねた。當時の官階次の通りである。

一等軍樂長 少尉相當官

二等軍樂長 准士官

軍樂次長 曹長相當官

一等軍樂手 軍曹同

二等軍樂手 伍長相當官

樂手 補 上等兵同

樂生 一等卒同

四月、陸軍近衛軍樂隊は仙臺釋迦堂(榴ヶ岡)に於て演奏會を開催、甫めて仙臺市民にデヴューした軍樂隊の演奏は素晴らしい人氣を博し、二日目の演奏には「さんさ時雨(伊達公凱旋の歌)に和聲を附して演奏したら一齊に手拍子添へて話し出した。さては踊るものさへあつたと、同所は櫻の名所であれば花見の客の多かつたとも想像される。

明治二十一年九月、佛蘭西留學中の古矢弘政、工藤貞次は學成つて歸朝するや、古矢弘政は一等軍樂長に任ぜられ基本隊に、工藤貞次を二等軍樂長に任じ基本教練教官に補せられ、同時に近衛軍樂隊長は基本隊長兼職を解かれた。

明治二十二年一月、佛國政府は突如日本在留の軍樂教師ルルーに對して本國に召還した。同時にルルーは辭任して歸國した。在職年數四ヶ年餘、此間我軍樂の爲め寧日なき奮闘的貢獻は軍樂隊中興の偉績者であるのみならず、一般社會に及ぼしたる音樂上の感化も實に偉大であつた。我が軍樂の今日あるは實にルルーに培はれ、其根底を成したものと云ふべきである。陸軍分列式に用ふる扶桑歌は彼れ在任中の作である。

ルルーが歸國に際して軍樂隊一同に對して曰く、

『余が諸君に音樂の教授を試み今日の良結果を見るに至つたのは畢竟前任教師其の人の誇いた教育が發達したもので、數字をも知らない者に分數教授を説くのは何等の益のないのみか、空しく貴重な時間を消費するに過ぎない。然るに諸君は方さに其の域に進んでゐたので余が不束なる教授も、克く今日の好結果を致した。彼の三個の軍樂隊(全員を三分して、一は近衛軍樂隊、一は大坂軍樂隊、一は軍樂基本隊となせるをいふ)の鼎立をなすに至つたについて

は四元軍樂長に望む處のものは君が往時フュントン並ダクロン等に教授された處を維持された如く、余が教授したとによつて樂手諸君をして將來を維持せられんことを」と懇切周到なる數語を残して袂別の名殘とした。

其後教導團所屬であつた軍樂隊は教導團の千華縣國府臺へ移轉するに及び、軍樂基本隊は其所屬を新らたに戸山學校の所轄する所となつた。

明治二十四年七月には、軍樂基本隊を軍學會と改稱せられ、含内に生徒隊を設置せられ之に伴ひ基本隊長古矢弘政は軍樂舍長に、教官たりし工藤貞次は生徒隊長に補せられ、十月、營所を馬場先門外より牛込戸塚町の陸軍戸山學校内に移轉した。

明治二十五年、軍樂學會は樂手を養成し、本科諸般の進歩を計るを綱領とする上に於て、陸軍々樂創業當時の關係上、佛蘭西式にのみ偏するは軍樂研究上考慮を要するものであるとの見地から、戸山學校校長茨木惟照は獨逸式軍樂隊をも容れて、比較研究するは將來に於ける斯道の發展上有利なりと認め、宮内省樂部の音樂教師獨逸人エツケルトを招聘し、明治二十七年四月に至る三年間主として獨逸軍樂編成樂器についての演奏の指導を受けた。

第三十章 音樂關係書籍の出版と創作歌曲

此の期に於て新たに出版されたものは、理論方面では「樂典」と「音樂の教授書」であり、歌謡方面では「小學唱歌集」が現はれて時代を風靡した。「讚美歌集」は明治六年の基督教解禁以來逐年新刊の發行を見るに至り、此の期に入りては改訂或は改譯のものが増加して來た。明治十三年、基督教各派を縱斷する一様の讚美歌を制定しやうとの議が畿内の宣教師會議に於て決議せられたが、實現を見るには至らなかつた。また外山正一、矢田部良吉、井上哲治郎等の「新體詩抄」が生れ、之れに對して曲が附けられた事等は、當時の流行歌ポピュラーソングの根源を爲すに至つたもので特筆するに價あるものである。

「斯スチュア氏教育論」明治十三年四月文部省刊行、同版權所有の物、此書は英人ハバート・スペンサーの著述で、其の教育に就て、心知、道德、及び體軀の教育を論じた書である。

原本は一八七五年紐約府鑛行の書に係る名譯を以て知られ、今に至るまで譯文參考としても用ひられてゐる。(尺振八譯書)左に音樂に關する箇所を抜萃する。

「音樂に至つても亦等しく學術の助を藉らざるべからずと曰はゞ人の之を怪むや更に大ならん、然れども音樂なる者は、原と物に觸れ情に感じて發動する自然語を想像して之を寫出せしものに外ならず、故に音樂なるものは其自然語の定法に能く相合ふと否らざるとに由て、善惡の別あらざるを得ず。蓋し内に感動する精思の種類と深淺とに従て外に發出する聲音に萬種の抑揚あり、是則音樂の由て作る所の根原なるや明なり。且つ其聲音の抑揚は固より偶然若く

は作意に出でたる者にあらず。即ち生活の道理に循て起れる者にして、其能く人を感動すると否らざるとは、此に循ふと否らざるとに因るは亦甚だ明なり。故に樂詞及之を集合して作りたる曲は此道理と相合ふにあらざれば、人の情思を感動せしむる能はざるや必せり、今此論旨を適當に講明するは、容易の事に非らず。然れども今日世人が其客室に於て奏する所の價值なき歌謡を以て學術上の理に反したる樂曲の例と爲し、以て此理を解明するに足る可し。此等の歌謡は、人の情思を感動するに足らざる思想を、音樂に作出するを以て、已に學術の旨意に反し、且つ其寫出せる思想は或は能く人を感動するに足るものあるも、之と毫も自然の關係を有せざる樂詞を用ゐるを以て、亦學術の旨意に反するなり。畢竟此等の歌謡は自然に戻るが故に善美ならざるなり。而して自然に戻るとは、他なし學術の旨意に合はざるの謂なり。

……中略……

技に又吾等の着眼せざるべからざる一大事實あり。即ち學術は彫刻、圖畫、音樂、詩賦の基礎たるのみならず、亦自ら詩賦の性を具ふること是なり、世人が學術と詩賦とを以て其性全く相反せる者とするは誤れりと謂ふ可し。……云々。

「諸祭日唱歌譜」第一、二編ギリシヤ正教會明治十三年出版、横綴の洋本四冊より成り、ソプラノ、アルト、テナー、バスに分かれたれ、従來の日本讚美歌中では一番大型のものである。樂譜は、ト字記號、ハ字記號、ヘ字記號等に分かれたれ各小節が殆ど切らずに、續けて書いてゐる。どことなく露西亞式の大きい處が見えるもので、現在使用して居るものも之に大體似てゐる。

著名なエピソードを持つてゐる聖詠百三番「我が靈や」は、澤邊琢磨をして明治初年當時の旋律通り歌はせて、之

をイヤコフ・チハイが樂譜に寫し、リズスカウント法の短旋法和聲をつけ四重音として正教歌の晚禱歌に撰曲したものである。日本正教會に於て始めて邦人の作が歌はれたのは之である。

明治十四年

「基督公會の歌」が同十四年に發行された。聖公會、エツチ・ジエー・フオスが編纂をなし、二十九首含まれてゐる。「讚美歌」同年四月出版六月發行のもので、原胤昭藏版、日本紙刷、歌の數百三首の黄表紙小本である。祈禱の歌一八、感謝の歌一二、讚美の歌一三、教の歌一九、祝の歌九、雜歌三一にわかれてゐる。

「小學唱歌集」が編著出版されたのは、同年十一月である。初編に於ては、三十三種の歌曲、第二編に於ては十六の歌曲が載せられてゐる。

三千部の初版が瞬忽にして賣捌かれ、同十六年三月には更に「第二編」三千部の出版が行はれたことは、如何に熱烈なる江湖の要望を受掖しつゝあつたかを窺ふに充分である。同十七年三月には「小學唱歌集」第三編も成り、是を以て「小學唱歌集」の完成を告げたのである。

樂譜は概して西洋曲が多く、それに新作の曲も加へられたのであるが、箏曲其儘のものも含まれてゐた。歌詞は泰西文學の影響をうけてソングを模したものが多く、眞正面から「唱歌」と名乗つて打つて出たのが「唱歌」としてのはじめで、これが文學界に與へた影響も大なるものがあつたのである。

用語の古雅と形式とに拘泥し過ぎた嫌ひがあるといふ非難もあつたが、さもあらばあれ當年の風雅趣味に隨從して明治の末期に及んだことは、何と言つても音楽取調掛の一大傑作と謂はなければならぬ。永く語はれたものには西洋曲が多い。而してその歌詞も洋風の感化を受けたものである。「菊」はトマス・ムアの最後の夏の薔薇 *The Last Ros*。

of Summer に「才女」はアンニー・ローラー Annie Laurie に「思ひ出づれば」スコッチ・メロディー Scotch Melody に「花鳥」はゲイテの詩編に「美しき我が子や何處」はスコットランドの青鐘 Blue Bell of Scotland によつたものである。然かもロマンチックなエキゾチックな旋律と、純日本的な古典的な用語とが、一見調和しないかの如くに見えるが、事實は玄妙な新調和を形成して爾來三十有數年間、青少年の胸のやるせない青春の思慕とセンチメンタリズムの表白の中介物となつたのである。

日本曲では「富士筑波」とか「四季の月」などいふものが論はれたが、生命は西洋曲のそれよりも短かゝつた。「螢の光」はスコットランド民謡である。日本に於ける初歩の唱歌教授には、半音が無くていゝ教材であると評された。メーソン教授も専ら此の曲を授けて唱歌の音程の基礎をつくつたと云はれて居る。五音階に基礎づけられた邦人には長音階であれば半音のない曲が歌ひ易く、教會に於ける讚美歌教授の際も、屢々此の曲が利用されたのである。それが「螢の光」は「別れの歌」として歌はるゝに至つて其の壽命が非常に長く生きた。この曲で基礎づけられた明治年間の教育者間には、現今に於ても儀式の歌等にこの歌曲を用ゐてゐるが、考ふべき筋のものであることを思ふ。歌曲數三編を通じて九十一、其の中より數種の歌詞(曲は省略)を擧ぐれば、

あふげば尊し

一

あふげば 尊とし わが師の恩

教への庭にも はや いくとせ

おもへば いと疾し、 このとし月

いまこそ わかれぬ、 しがさらば

二

互に むつみし 日ごろの恩
身をたて 名をあげ やよはげめよ

わかるゝ後にも やよ わするな
今こそ わかれめ いざさらば

三

朝夕なれにし 學びのまと
わするゝまぞなき ゆく年月

螢の ともしび つむ しら雪
いまこそ 別れめ いざさらば。

思ひいづれば

おもひいづれば 三年のむかし
かしらなでつゝ まさきくあれと

わかれしその日 わがちゝはゝの
いひしおもわの したはしきかな。

二

あしたになれば かどおしひらき
わがおもひごは ことなしはてゝ

日數よみつゝ ちゝまちまさむ
はやいつしかも かへりこなんと。

(三、四省略)

螢の光

一

ほたるのひかり まどの雪
いつしか年も すぎのとを

書^つよむつき日 かさねつゝ
あけてぞけさは わかれゆく。

二

とまるもゆくも かぎりとて

こゝろのはしを ひとことに

三

つくしのきはみ みちのおく

そのまごゝろは へだてなく

四

千島のおくも おきなはも

いたらんくにょ いさをしく

うつくしき吾子

一

美しき 吾が子や いづこ

ゆみとりて 君の みさきに

二

美しき 吾が子や いづこ

太刀帯タチオビで 君の みもとに

花 鳥

かたみにおもふ ちよろづの

さきくとばかり うたふなり。

うみやまとぼく へだつとも

ひとつにつくせ くにのため。

やしまのうちの まもりなり

つとめよわがせ つゝがなく。

うつくしき わが かみの子は

いさみたちて わかれゆきにけり。

うつくしき わが なかの子は

いさみたちて わかれゆきにけり。

(以下略)

一
山ぎしは しらみて 雀は なきぬ はやとく おきいで 書よめ わが子

ふみよめ 吾子 書よむ ひまには

花鳥めでよ。

二

書よむ ひまには 花とり めでよ 鳥なき 花さき たのしみ つきす
たのしみ つきす 天地 ひらけし はじめもかくぞ。

菊

一

庭の 千草も むしの 音も

枯れて さびしく なりにけり

あゝ 白菊 あゝ 白菊

ひとり おくれて 咲きにけり。

二

露に たわむや 菊のはな

霜に おごるや 菊の花

あゝ あはれく おゝ 白菊

人の みさをも かくてこそ。

寧樂の都

一

ならの都のそのむかし みやびつくして 官人の あそびましけん

立田河原の もみぢ葉 たつたがはらの もみぢば

今もにほふ 千しほの色に 残るかたみは 千代も朽せず
今か今かと 君をまつらん その紅葉

二

古きみやこの そのむかし 櫻かざして大君の あそびましけん

滋賀の花園 花さき 滋賀の花園 花さき

今もにほふ 色香もそへて ゑめる姿は 千代もかはらず

今やいまやと 行幸まつらん その花は。

才 女

一

かきながせる 筆のあやに そめし紫世々あせず

ゆかりの色 ことばの花 たぐひもあらじ そのいさを。

二

掃あげたる 小簾コサのひまに 君の心もしら雪や

蘆山アサヒの峯 遺愛オトコイの鐘 目にみる如き そのふぜい。

遊 獵

一

さながら山もくづるばかりに をのへにとよむ 矢玉のひどき

神てふ虎も てどりにしつゝ いさみにいさむ 益荒雄の徒

二

葦毛の馬に しづ鞍おきて あつさの眞弓 手にとりしげり
みかりたゝすは ますらをなれや み獵たゝせる そのいさましさ。

富士筑波

一

するかなる 富士の高根を あふぎても

動かぬ御代は しられけり。

二

筑波根の このもかのもゝ てらすなる

御代のひかりぞ ありがたき。

四季の月

一

さきたほふ 山の櫻の 花のうへに

かすみて いでし 春の夜の月。

二

雨すぎし 庭の草葉の 露のうへに

しばしは やどる 夏の夜の月。

三

見る人の こゝろごころに まかせおきて

高嶺に すめる 秋の夜の月。

四

水鳥の 聲も身にしむ 池のおもに

さながら こぼる 冬の夜の月。

第三歌詞の、最初のもは

「世をわたる人の鐘が隈もおちず、みれどもあかね秋の夜の月」

とあつたものが訂正せられたものである。

編纂者の言葉……「本書は唱歌掛圖中のものを取て之を冊子に印行し、各自生徒の便に供するものなり。即ち其初編は唱歌掛圖初編及其續編中のものなり。其第三編に至りては唱歌掛圖の出版なし。是第三編に稍々其程度の進むものにして音楽初等訓練の法、即ち唱歌掛圖の方法に據らずして可なるを以て、之が出版を要せざる所以なり。」

明治十五年

「唱歌掛圖」初編と續編とは同十五年四月に出版された。小學唱歌集の歌曲と同じもので文部省の藏版である。これを文部省は全國各府縣並外國教育家等に頒布した。同年の出版部數は千五百部で續編が三百部であつた。

編纂者の言葉……『右は初めて音楽を我教育上に施行せんが爲音楽教育の學理に基き適法を研究して編纂したるものなり。抑音楽を學校教科の一として教授せんには、音楽上、要する所の記號、譜歌、曲等を其時々黑板に記書するを要すべし。而して之を黑板上に記する時或は解明ならざるものあり、或は匆卒誤謬を免れざるものあり、又限ある時間にして成し得べからざるものあり、此れ之の掛圖の編纂せる所以あり、書中記載の條項は音楽教育初等の練習用に供する音階の圖、長短音符の區別等より起り、逐次單複唱歌に到るものなり。』

初編定價二圓五十錢、續編及二編定價一圓五十錢。

同年一月、文部省は音楽取調掛に對して、「明治頌」の撰定を命じた。先づ忠君愛國の大義に基き汎ねく古今の事を斟酌し、明治聖代の隆運を發揚するを以て主義と爲し得る處の歌案六編を以て三月中之を文部卿に呈し、其體裁内定を請ふた處が、音楽取調掛の所見に違はず、右の體裁を以て更に一層精撰し速に撰定の功を竣へ稟申すべき旨を傳へられた。

茲に於て國歌資料撰定の體裁が決定して、四月に至つて歌按四編を再び上申した。

「明治頌」

國を照すは 鏡なり 國を守るは 劍なり

國の光りは まが玉の 妙なる玉にぞ たとふべき

天津日嗣の つぎくに 三種の寶 傳へ來し

皇御國は 大君の 千世 萬世も 治しめす國。

(合唱)

國民よ 君 萬歳と 唱へかし 君 萬歳と 祝へかし
國民よ 君 萬歳と 祈れかし。

以上の他に「國旗」「黎悔」「外征」「明治維新」等の歌詞もあつたが省略する。

而し國歌としての決定には至らなかつた。當時「君が代」は「大日本禮式歌」として陸海軍と宮内省に於て制定したものであるから、一般的には殆ど知られて居なかつたのである。

「改正讚美歌」 明治十五年五月に出來た、カーチス編纂のもので、歌數百三十六首、チャント十四首ある。

「眞神讚美歌」 も同年の發行で、聖公會が函館で出版したもので、歌數九十九、頌歌一首で百首。

「新體詩抄」 初編 明治十五年七月刊行。

之は外山正一、矢田部長吉、井上哲治郎等の撰で、各自の創作を以て共版したもので新體詩の命名もこの時である。同書凡例にその詩の生命が揚げられてあれば茲に轉載する。

一、均しくは是れ志を言ふなり、而して支那にては之を詩と云ひ本邦にては之を歌と云ひ、未だ歌と詩とを總稱するの名あるを聞かず。此書に載する所は詩にあらず歌にあらず而して之を詩といふは泰西の「ポエトリー」と云ふ語即ち歌と詩とを總稱するの名に當つるのみ、古よりのいはゆる詩にあらざるなり。

一、和歌の長きものは、其體或は五七調、或は七五調なり。而して此書に載する所も亦七五調なり。七五調は七五と雖も、古の法則に拘はる者にあらず、且つ夫れ此外種々の新體を求めんと欲す。故に之を新體と稱するなり。

一、此書中の詩歌皆句と節とを分ちて書きたるは西洋の詩集の例に倣へるなり。

一、詩歌の初めに往々序言を附するは、嘗て新聞雜誌の類に掲げたる者にて其事頗る詩學に關係あるを以て、復た之を此に掲げ敢て其煩を厭はず、看官幸に之を諒せよ云々。(十五年五月)

また目次を見ると

ブルウムフェールド兵士歸郷の詩、山仙士(外山)、カムプベル英國海軍の詩 尙今居士(矢田部)、テニソン輕騎隊進撃の詩、山仙士、グレイ墳上感懷の詩 尙今居士、ロングフェルロー人生の詩、山仙士、玉の緒の歌 巽軒居士(井上)、テニソン船將の詩 尙今居士、拔刀隊の詩、山仙士、勸學の歌 尙今居士、チャールス、キングスレー悲歌、山仙士、鎌倉の大佛に詣で、感あり 尙今居士、高僧ウルゼーの詩、山仙士、シャルル、ドレアン春の詩 尙今居士、社會學の原理に題す、山仙士、ロングフェロー兒童の詩 尙今居士、シエークスビール、ヘンリー第四世中の一段、山仙士、同ハムレット中の一段 尙今居士、同ハムレット中の一段、山仙士、春夏秋冬の詩 尙今居士、以上

此の詩集中當時學生に歡迎されたものは、外山博士の輕騎兵進撃の詩、カムベルの英國海軍詩、拔刀隊の詩で殊に拔刀隊の歌は、内外人數名の作曲によつて多くの青年に誦はれた特筆すべきものである。

拔刀隊の序に、(新體詩抄拔萃)

『西洋にては戰の時慷慨激烈なる歌を誦ひて士氣を勵ますことあり、即ち佛人の革命の時「マルセイエーズ」と云へる最も激烈なる歌を誦ひて進撃し、普佛戰爭の時普人の「ウオツチメン、オブ、ゼ、ライン」と云へる歌を誦ひて愛心を勵ませし如き皆此類なり、左の拔刀隊の詩は即ち此例に倣ひたるものなり。云々』

拔 刀 隊

我は官軍我敵は

天地容れざる朝敵ぞ

敵の大將たるものは

古今無雙の英雄で

之に従ふ兵は

共に慄悍決死の士

鬼神に恥ぬ勇あるも

天の許さぬ叛逆を

起しゝ者は昔より

榮えし例あらざるぞ

敵の亡ぶる夫迄は

進めや進め諸共に

玉ちる劍抜き連れて

死ぬる覺悟で進むべし。

皇國の風と武士の

其身を護る靈の

維新このがた廢れたる

日本刀の今更に

又世に出づる身の譽

敵も味方も諸共に

刃の下に死ぬべきぞ

大和魂ある者の

死ぬべき時は今なるぞ

人に後れて恥かくな

敵の亡ぶる夫迄は

進めや進め諸共に

玉ちる劍抜き連れて

死ぬる覺悟で進むべし。

西南事件に對して官軍の心理を諒つた四章の軍歌であるが以下略す。

尙今居士作の勸學の歌もよく諒はれたものゝ一つである。

青唐土の朱文公

よに博學の大人ながら

わが學問をすゝめんと 少年易老の詩を作り

一生涯は春の夜の 夢の如しと嘆きけり。

國の東西世の古今 人の高卑を問はずして

學の道に就くものは いかにか能ありとて

同じ多少の感慨を 起さぬことのあるべしや。

春の初花秋の月 夏のみどり葉冬の雪

渾て此世の物事に 心をとむる時あらば

わが學藝を省みて 過る月日を思ふべし。 (以下省略)

抜刀隊の歌は非常に流行して當時の青年學徒間に愛唱されたのである。作曲者は外にもあつたが陸軍々樂教師ルル
1の作は十九年流行のもので一寸難しいが面白い。現在陸軍分列式に吹奏する扶桑歌はこの曲である。この曲を日本
橋の官田樂譜彫刻店で彫んだとあるが實物を見た事はない。又、十九年に出た錦繪には曲は載つてゐない。

「教育學」 伊澤修二著、同十五年十月十二日、白梅書屋藏版。

日本人の手に成りし最初の教育學、米國留學中の筆記を基とし、心理學上より教育の大要を講述せるもの。

第二章情緒の或る一部抜粹、

「幼時に於て喜悅の情を養ふの要。」

人幼時にありては萬物を友視して常に喜悅の感情を發し、恰も前章説くが如き境遇に在るの想をなすこと最も多し
故に唱歌遊戲等により、務めて此種の感情を養ひ、以て教授に適用するときは、大いに事業の活潑を助け、善學の厭

倦を防ぐの効益し少からずとす。

「憂情は詩歌の學には要あり。」

古來有名の詩人中、憂愁無聊の情態にて一生を送り、其詩は却て雄偉なるものあるを見れば、此感情も是れ高等の専門教育に要すべきことにして、普通の教育には其要を見ざる所のものなり。學校唱歌に悲曲を用ひざるの理、普通の學校に施す所の唱歌に悲哀の調に屬する歌曲を用ひざるは亦、此理に由るものとす。

「幼時に於て美妙の情緒を養ふの要。」

美妙なるものを論究するは美學の專旨とする所にして、其理論甚だ多岐に涉ると雖も、實地教育に要する所は、幼時より圖畫彫刻音樂等の如き美なる事物に就きて、美妙の情緒を養成して成長の後其趣味を高尙にし、以て君子温如玉の結果を得んことを務むに在り。

明治十六年

「音樂問答」 七月出版、米人ユーンシー著、瀧村小太郎譯で音樂の大綱を問答に擧げたものである。

「樂曲」英人カルコット原著を神津元譯、神津專三郎校訂で四編七百條の條文になつてゐる。カルコットは倫敦諸教會のオルガニストをして居た人で、作曲も數多あり、又オックスフォードの音樂博士を受けた人である。

「音樂指南」 前同様七月出版のもので、共に音樂研究者の好參考資料として好音樂者の需用が多く、いづれも文部省藏版である。

初めて譯語を作つた譯者の苦心は一通りでなかつた事を信ずる。然しその譯語の大部分が今日迄吾國音樂の専門語として行はれて居るのであるから、骨折甲斐のある仕事であつたといふべきである。

「聖公會歌集」チングの編纂のもので九月に出版、歌數百四十五首。

明治十七年

「小學唱歌集」第三編 三月出版、音楽取調掛の編纂で、複音唱歌がある。

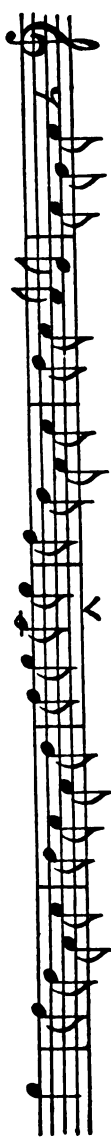
明治十八年

「學習院歩操唱歌」作歌里見義、作曲音楽取調所、四月十八日決定。

「讚美歌」同年三月江藤書店發行、歌數百六首。

「讚美歌」同年一月組合教會出版、今村謙吉翻刻のもので、歌數百三十六首、チャント十四首。

「抜刀隊の歌」は外山博士の新體詩抄の出版と共に多くの青少年に詠はれた。



この歌は多くの人に作曲され右の曲は歌ひ易かつた爲か全国的に流行した。明治十七年に來朝した陸軍々樂隊傭教師も此の歌に作曲された。これは明治時代の流行の根源ともいふべきもので「ノルマントンの歌」や「あゝ夢の世や」などから續いてラツバ節に移り、三味線樂に姿を消してしまつたのも、皆この曲の主題の變化で、唱歌體から陰陽混合旋法の生粹の日本物となり「トコトツト……」の囃子が附せられて、技に純然たる流行唄の形式を具備するに至つた。こゝに掲げた樂譜は、或は音の分割上等に多少の誤謬はあるかも知れぬ。併し乍ら、旋律には大差は無いと思ふ。陸軍戸山學校の軍樂隊保管の分列式、扶桑歌中のトリオの部がこの曲と等しいのだが、八分音譜に書かれて

拔刀隊の歌

ルルー作曲



ゐるので歌ひ易く出来てゐる。たゞ吹奏楽曲に編んだので調子が高い。昭和四年春新響の近衛秀磨が此の曲を管絃楽曲に改編して演奏した。ラヂオ放送も行つたがよい出来であつた。元來此の曲は進行曲として作られたものではないのかと思はるゝ點が多い。即ち短調に始り關係長調に轉じ、再び原調に戻り、更に原調と同主の長調に入つて終つて居る。唱歌としては易しい型のものではないにも不拘、非常な勢で學生間に歌はれた。唱歌といふものが謡はれ出して幾何も経ないのに斯様な難曲が流行する譯がないのに、事實は之と反對に學生間に歡迎されたのである。

其の原因を探究すれば、作曲家外山博士（イシザキ、山）は音楽に興味を有し自らが、虎の門工科大学の講堂のステーチで、唱歌を歌つたことさへある人である。作曲者は佛蘭西人シャル・ルルーで、加ふるに歐化熱全盛時代の風潮が大河を決するが如き流行を馴致したと考へ得るのである。

併し乍ら曲の後半は難しいので正確に歌はれてはゐなかつたやうである。試みに五十歳前後の人々に對して、此の曲を尋ねて見るならば、始の數小節だけを明確に記憶してゐるだらう。此の曲の主部が外國人の作にも似合はず非常に日本風であつた事、それが延いては、明治十九年十月二十四日英船ノルマントン號沈没の歌の主題となり、續いて明治時代の流行唄の根源になつたものである。

明治十九年

「日本 皇帝に捧ぐ」ソープレット著（作曲）“A Majeste L'Empereur du Japan”, G.Sauvlet (一八八六年)刊行。
「日本ワルツ」ソープレット著（作曲）“Nippon Valse”, G.Sauvlet 同年刊行。

著作者ジ・ソープレットは和蘭の人で、明治十九年四月一日から音楽取調所ピアノ科教師として囑託され、同十二年一月迄其の職にゐた音楽家である、彼の高弟に小山作之助、納所辨次郎、白井規矩郎等がある。

「贈付基督教聖歌集」明治十九年五月日本横濱印行、美以美教會雜誌會社發行。二百四十四の歌曲と三首の讚詠、十首の頌歌から出來て居る。ジェ・シー・デビソンの編輯されたもので、詩人岩野泡鳴や松本榮子などが助勢したものである。曲は全部四部重音で書かれ、當時は一般に歌曲はおもしろいと評された。今より見れば歌詞はなだらかでないし、曲も四重音でありながら單純過ぎるが、十九年代のものとしては印刷も裝幀も實に立派なものである。

A charge to keep Thau の譯が

かみを あがめ おのがたまの、

すくひを もとむるは わが つとめなり。

これを新撰讚美歌には、

われは かくく まもるべきの

つとめある ことを こゝろにとむ。

とあり。また現行のさんびかには、左の如くに譯して居る。

われは かくく こゝろにとむ

まもるべき つとめ 身におへるを。

「新體詞選」山田武太郎編輯、同年八月東京香雲書店藏梓、これは曲がなく従つて音楽書ではない。併しこの本の出版は當時の音楽家に誦はれたもので「敵は幾萬」等は既にこの時に作られたものである。その自序に曰く、

「爰に集めし新體詞はおのれの外に數名の友人の作にして、皆文法を譯らす。唯佳作といふべきは僅に二三篇ながら五六年來我が國に現はれたる物の内にて、かの和讃か鞠唄か、さらずば西洋文章の直譯には非ずやと訝る迄に氣韻無く、而も文法譯りたる新體詞より優れる事、豈一等の比ならんやといへば……中略……俗曲改良の美事もやうやく初まるべき折からなるに此頃は世に新體詞の勢力も稍熾なるものから、かのグリースのベリクルス類に歌曲を獎勵してもつて國民に美術の識を得さしめし其如き結果を得べき方法の一端すこしく現れたる喜端なりと思ふうれしさに早くまた鞠唄めきたる……和讃めきたる……直譯めきたる物ども全く跡を絶え、眞美眞佳の新體詞のあらはれなんを願ふのあまり、憎まれ口をたゞくになん希くは江湖の才子望むらくは一二の作者。その巧拙に至りては才子諸君の具眼なる、作者の諸氏の博識なる、おのれが評を俟たずとも既に知らせたまふべし。唯小成に安んぜず進取の氣象をはげまして、よくや傑作ならずとも、せめては和讃、鞠唄めかず、又直譯めきたらぬを作り出ださせたまはん事を。なまじかに是非の差別無く西洋風を持込みて、日本固有の美妙の趣味を汚すなど云ふことは厭ふべし嫌ふべし云々。」

とある。又、目録を見るに、

- 一、書生歌 縁山敬史作
- 二、士卒の夢 延春亭主人作
- 三、隅田川花見 美妙齋主人作
- 四、佛國革命歌 梅の家作
- 五、行燈 蛙船作
- 六、戦景大和魂 樵耕作
- 七、路易帝斷頭臺 延春亭作
- 八、古戦場 梅のやかほる作
- 九、大川友右衛門 美妙齋作
- 一〇、リツプ・パン・ウンクル かをる作 以上

「戦景大和魂（敵は幾萬）は山田武太郎（美妙齋であり、樵耕であり蛙船たる人）の作詞であるが、歌曲ともに種々批難は向けられてゐたが、大正時代を過ぎた今日も尙、歌はれて居ることは吾人をして軽々に看過するを許さざる何物かといひそんでゐる。

敵は幾萬ありとても

すべて烏合の勢なるぞ

烏合の勢にあらずとも

味方に正しき道理あり

邪はそれ正に勝難く

直け曲にぞ勝栗の

堅き心の一徹は

石に箭の立つ例あり

石に立つ箭の例あり

などて怖るゝ事やある

などてたゆたふ事やある。

亂砲亂發百雷の

音凄しく吹く風は

血の臭氣を運來て

鼻にかぐだに腥き

思へば死人多からん

敵に死の多からば

そはよき機上採潰せ

味方に死人多からば

そは危かり疾く救へ などで怖るゝ事やある

などでたゆたふ事やある。

風にひらめく聯隊旗 記紋は昇る旭あさひよ

旗は飛び来る弾丸に やぶるゝ程こそ譽なれ

身は日本の本の兵士よ 族にな恥ぢぞ進めよや

斃るゝまでも進めよや 裂かるゝまでも進めよや

族にな恥ぢぞ恥ぢなせぞ などで怖るゝ事やある

などでたゆたふ事やある。

雪を含める朝風に 向つて嘶く馬の聲

凍る手先取緊めて 吹きぞ合はする喇叭の音

是等の響聞く時は 鈍き心もまた勇む

さるを何ぞや武士が 勵まぬことの有るべきぞ

いざや敵をば破らんづ などで怖るゝ事やある

などでたゆたふ事やある。 (以下四章を省略す)

明治廿年

「キリスト教聖歌集」(ローマ字書のもの)があるメソヂスト・イビー編纂のもの。

「附附基督教聖歌集」五月發行、デビソン編輯のもので十九年刊行のものゝ三版なり、殆四重音歌集である。

「新選讀美歌」植村、奥野、杉山、オレチン共編、九月發行。

「家庭唱歌」第四集迄、四竈納治、岡村増太郎著作、東京普及舎より八月出版。

「幼稚園唱歌集」音楽取調掛編、七月五日出版權届出、十二月出版のもの。

「幼稚唱歌集」眞鍋定造著、三月發行。

「音楽沿革史」佛國ラボワー著、村越銘譯。

「サクソホース實科大全書」佛國マイユール著、村越銘譯。

「音楽入門」恒川鎌之助著、十月發行。

明治二十一年

皇后陛下御詠を華族女學校に御下賜になつた。 同年三月

一

金剛石も磨かやば 珠の光も添はざらん

人も學びて後にこそ 眞の徳はあらはるれ

時計の針の絶間なく めぐるが如く時の間も

日陰惜みてはけみなば 如何なる技かならざらん。

二

水は器に従ひて その様々になりぬべし

人も交はる友により 善きに悪しきうつるなり

己に勝るよき友を

選り求めて諸共に

心の駒に鞭うちて

學びの道に進めかし。

「新撰讀美歌」五月發行、前年九月發行のもの等しい。譜はなく詞だけで主として杉山高吉、奥野昌綱、植村正久、がつくられたもの、譜は二十三年に至つて、ジョージ、オルチンの手によつて作られたものであるが、「あめにいまして、よををさめ」等の賑はしい、をりかへしなどは彼の作曲とか現行さんびか第一編三百七十番では調子をやゝ下げであるのも、この歌集の特徴であると。(別處梅之助著作より)

「樂典初歩」ジエームス、カリー著、内田彌一譯、文部省印行四月十五日出版。

「新選小學唱歌集」原田砂平著、四月發行。

「明治唱歌」四冊、大和田建樹作歌、奥好義作曲、五月東京に於て出版發行、「故郷の空」夕空はれて秋風ふき、月影落ちて鈴虫なく、思へば遠し故郷の空、あゝ吾父母いかにおはす。等の歌曲を收めてゐる。

「尋常唱歌集」全、吉田鈺橋著、十月發行。

「明治唱歌幼稚の曲」二冊、大和田建樹作歌、奥好義作曲、十二月發行、

「孝女白菊の歌」本ではない東洋學藝雜誌、落合直文が井上巽軒の孝女白菊の漢詩を七五調に邦語譯したもの、篇約三百節千五十六行といふ大作で其の一部を擧ぐれば、

阿蘇の山里秋ふけて

眺めさびしき夕まぐれ

いづこの寺の鐘ならむ

諸行無常と告げわたる

折しもひとり門にいで

父を待つなる少女あり

年は十四の春あさく 色香ふくめるそのさまは

梅か櫻かわかねども 末たのもしく見えにけり。

「大日本禮式」：“Japanese Hymne” エツケルト作曲、明治二十一年刊行、

この本は歌詞の附してあるのではない。吹奏樂用の總譜になつて居るもので十五種に分れて居る、「君が代」の旋律の全部あるのは第一Bクラリネットだけで、それも何處かで一オクターブ上つて居る處がある。始と終りに和聲の附いて居ない處が、エツケルトの手腕のあつた處であるといふが、この曲の始終には、實際に和聲が附してない。附されなかつたのではなくて、附けない處に過分に日本趣味を増したのである。

速度記號は、ラルゲットで *Andante* となつて居る。第一、二小節はピアノで、第三小節以後はメツツヲフナルテである。二度繰返して奏するべき反覆記號はない。

この年海軍省が各條約國へ公然と通知したのはこの樂譜で、此の本を送付したものである。

“Japanese Volksmusik” エツケルト作

「日本民謡」と命打つてゐる。外國博覽會に出品したといふ本を見たので、實際はどんな本で何の爲にこんな曲を集めたものか見當がつかない。

全部ピアノ曲的に編曲されたもので第一頁に品川彌次郎作の「宮様」の曲があり、次に「一つとや」「春雨」「六段」「亂」と澤山ある。全部が和聲的になつて居る處が作者の苦心の所と見た。

Clarovx が前年に於て作曲された「日本及支那歌調」“Airs Japonais et Chinois”「日本古樂標本」“Specimen of the Japanese Classical Music”も外國博覽會に出品されたものである。

明治二十二年

「音楽要領釋義」アザール著、同年十月發行。

「撰曲唱歌集」二冊、四竈納治著、同年五月發行。

「學校用唱歌」上下、二宮勝壽著、同年七月發行。

「倭唱歌」村田敬輔、同年八月發行。

「新撰樂譜軍歌集」倉知甲子太郎著、同年九月發行。

「新編唱歌集」井上喜文著、同年九月發行。

「中等唱歌集」東京音楽學校藏版、同年十二月發行。

「唱歌萃錦」奥好義著、同年十二月發行。

「音楽教科書」白井規矩郎著、同年三月發行。

「風琴獨稽古」二、橋本民著、同年三月發行。

「憲法發布頌」音楽學校編、同年二月發行。

明治二十三年

「新撰讚美歌」同年十一月、一致、組合、兩教會の委員の手によつて譜附のものが出版された。歌詞は明治二十一年に出たものを踏襲し、曲譜はジョージ・オルチンの心を籠められたものが數ある。

さりにしひとの　こしかたを　かへりみすれば　うつせみの

もぬけのからと　なりしかど　こゝろはいかで　きえぬべき。

これは二百六番で現今の「さんびか」の三百六十七番明治女學校の創立者木 鏡子の葬式に、植村正久の詠まれたもの。

奥野昌綱の歌にはいかにも情熱があつた、百七十五番は彼の病中の作である。

われやめるとき なぐさめあり

われらにかはつて 血をながし、

耶穌イエスのくるしみを おもひやれば

われ等のいたみは とみにされり。』

現今の「さんびか」三百二十五番にあるが以前の面影が見える。

かみのめぐみ 主エスのあい

ゆたかにみつ このみとの

といふ二十五番は「さんびか」の二十三番になつてゐる。靈南坂教會新築のをりの作とか。(別處梅之助著讚美歌物語)

「音楽初歩譜附唱歌集」北條芳三郎著、一月發行。

「學校歌曲集」二冊、恒川鏝之助著、一月發行。

「小學開學唱歌集」上下、加藤精一郎著、六月發行。

「帝國唱歌」五冊、恒川鏝之助著、十二月發行。

○創作曲 雜誌音楽に揚載のもの。

「宮城」湯本武比古作歌、納所辨治郎作曲。

「帝國議會開院之頌」中村秋香作歌、上眞行作曲、ヂットリと調和。(同上)

「音楽雜誌」第一號、明治二十三年九月二十五日、音楽雜誌社から發刊された。四竈納治が之を主宰し六十一號以後は「音楽」と改題したものである。上野音楽學校學友會發行の「音楽」とは全然別個のものである。

雜誌經營は難事中の難事で、之を刊行して名利の機關とするものに限つて永續しないのであるが、該「音楽雜誌」は、明治年間に於ける樂壇唯一の權威ある中央機關雜誌で、十有餘年間の永續を見たことは編輯者の奮闘に俟つ處が大である。編輯者四竈納治は仙臺藩の人、兄弟共に文筆に秀で納治と仁邇は共に音楽取調掛時代の出身者で、兄納治は不幸にして晩年逆境にあつて昭和三年死去したが、明治音楽普及の貢獻者の一人である。創刊號に掲載せる發刊の主旨を轉載すれば、

發刊の主旨

四 竈 納 治

今や吾邦百般の事業は日に改良の途に赴き、月に文明の域に達するに至り教育の制度は大に舊來の面目を改め、社會の交際は最も其陋習を脱して事々物々皆よく新日本を作爲し、隨つて人智の開發太古迅速にして心情も亦高尚優美に向ふ。然り而して、此高尚優美の趣味を養成するには美術音楽の力其最一に位するものなり。故に政府は已に其令を全國一般の各學校に布き汎く音楽の科を課設せらる。

茲に於てや、明治十二年吾文部省中に音楽取調掛を置かれ數年の實驗其功を累ね、同二十二年に更に音楽學校と改められ、本年五月新校落成の盛典を擧げらる。

其の建築の宏大壯麗なる實に人目を驚かすに足る。今や此宏大なる音楽學校の開設を觀るに至るは、已に一般の教育に社會に音楽の効用空しからずして、缺可からざるを確認せられたるに由ると信するなり。

爾來吾邦に歐風音樂の入り來るや駁々其馳るが如く社會に行はれて、現今府下のみにすら盛大なるも舉て算ふべからずと雖も、今其主なるものを概すれば陸海軍には勇壯活潑なる軍樂の備あり、音樂學校には高尚なる管絃樂優美なる聲樂ありて能く其の生徒を薰陶し、常に鸞鳳の音を絶たず、式部寮には雅樂所の吹奏管樂の兩樂ありて宮中に嘯啞たり華族女學校には洋琴、ヴァイオリンの妙音細やかにして婢媚たる令嬢の鶯歌に和せられ、大學、學習院には開豁なる原語の歌清爽にして綠々たる安園に聞え、高等中學商業學校には清潔淡泊なる運動歌等巧みに高尚に高等師範校に女子師範、高等女學校、尋常師範の如きは皆いづれも愛慕なる風琴の音嬌々として滿講堂に響き、市中音樂會には艶美にして愉快なる吹奏の樂自由に市濱の樓閣に溢れ、各聖教會堂には清朗嚴雅なる讚美の唱歌會堂の滿場に湧き、各公私立學校及附屬幼稚園等に至ては實に盛んに實に愉快に實に活潑に遊戲散步の間に唱はれ、坊間の丁稚も亦其の風を慕ふて使用の途上に眞似る等盛なりといふべし。

其他大日本音樂會ありて内外貴顯紳士貴婦令嬢の俱樂部として舞踏會あり、盲啞院あり東、京唱歌會あり、唱歌專門學校あり、共立唱歌學校、私立何區唱歌會等實に枚擧に遑あらずして府下にすら猶ほ且つ斯の如し。各縣の各種學校等に至ては恐くは其數を知らざるべし。

音樂の道全國に洽しともいふべきか。

然れども事盛んなれば隨て其弊起り其害萌す、一利一害は天下の通例にして見るべからざる處なり。

此に於てや其弊を矯し、其の害を防と共に其正を助け、其邪を戒め倍々正格優美なる音樂を翼けて文明の榮域に達せしむる紹介をなす者は何ぞや、音樂雜誌を發行するに若くはなし。故に本誌を發刊する時期將に到來したるものと信するなり……(後略)……

明治二十四年

「新定唱歌集」全、岩城寛著、同年四月發行。

「國民唱歌」戰景大和魂が載せられてゐる。これは有名な敵は幾萬……の曲である。小山作之助作曲のもので、東京にて七月發行。

「音樂綱要」鷹野該吉編、同年五月發行。

「音樂理論」鳥居忱著、同年發行。

「風琴教授詳説」米國シヨルヂ・オールチン著、須原徳義譯、同年刊行。

「音樂利害、一名樂道修身論」神津專三郎著、和綴四冊、同年刊行。

和漢洋に亘つて随分丹精に調べたもので音樂上の傳記や逸話に富んで居る。

○創作曲

「凱旋歌」永井建子作曲、同年五月雜誌音樂所載。

「道は六百八十里 長門の浦を船出して」の曲である。

調子は随分高くなつて居るが實際に歌はれたのは二調位であつたと思ふ。また其後、訂正になつて居るのだらうと思はれるが、こゝに載せたのは世の中に初めて出た時のものである。曲の旋律等も現在歌はれて居るのとは随分異つて居る。

雜誌に掲載の時の誤謬かとも認められるが第三十六圖は其の儘である。

凱旋歌

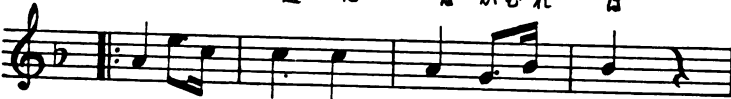
永井建子 作曲



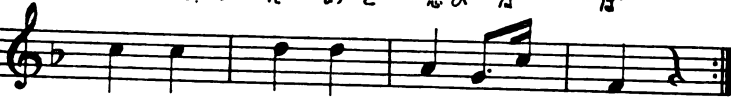
連は六百八十里
軍二とせき八十分の



長門の浦を舟出して
山を遙にながむれば



曇りかちなるたびのそら
御園のためと思ひなば



晴さによらぬ日本のは
露より麗き人の身は



こころを命の捨てどころ



身にはたまきず、つるきまが

明治二十年十二月廿八日

○勅令第七十八號を以て樂譜條令公布せらる。

脚本樂譜條例

第一條 演劇脚本及樂譜は出版條例及版權所有に據り之を出版し及版權を所有することを得。

第二條 演劇脚本若くは樂譜を出版して版權を所有する者は版權年限中に其興行權（即ち利益の爲め公衆の前に演ずるの權）を併せ有することを得。但、興行權を有せんとするときは其脚本又は樂譜に興行權所有の五字を記載すべし。

第三條 演劇脚本及樂譜の興行權は制限を附し若くは附せずして之を賣渡すことを得。

第四條 演劇脚本若くは樂譜の興行權を犯したるものは興行權所有者に對し損害賠償の責に任すべし、著作者又は其の相續者の承諾を経ずして未だ出版せざる脚本若し樂譜を興行する者亦同じ。

第五條 興行に關する損害賠償の責は其興行權を犯したる最終の月より一年を以て滿期得免の期となす。

以 上

第三十一章 洋樂演奏會の發達

陸海軍々樂隊は隨時隨所に於て演奏會行はれ、追々に其眞價を認められつゝあつたが、當時は尙日本音樂を洋樂器で演奏するものが歡迎される方であつた。それが歐化主義全盛期に入つて鹿鳴館より發祥した舞踏の流行に依つて野

外樂が室内樂に迄で入つて來た。音樂會の曲目編成には、邦樂が重視されなくなり従つて洋樂主の音樂演奏會も現はれるに至つた。

音樂取調掛の音樂演奏會は開所以來の成績報告を目的として明治十五年一月開催された。

演奏手續書

一、唱歌 春の山 外單音唱歌 七種 東京師範附屬校生

一、洋琴 (曲目不詳) 六種 音樂取調掛傳習生

一、唱歌 單音唱歌 三種 東京女子師範生及

一、唱歌 複音唱歌 一種 音樂取調掛員助教

一、唱歌 高等單音唱歌 二種 員並傳習生

一同休憩後本邦俗謡を奏して第一日を了る。

同年七月、メーソン教師送別演奏會を昌平館に於て開いた。

明治十八年七月

音樂取調所第一回卒業演習會 於文部省新築館

第一部

洋琴獨奏曲 ボロネーズ ショパン作

唱歌

遠山甲子女
本所生徒

仰げば尊とし

鏡なす

太平の曲

塙生の宿 四部合唱

洋琴運弾曲

レ、ゼーゾン

洋琴獨奏曲

洋琴連奏曲

本邦俗樂…(省略)…

洋琴獨奏曲

第二部

アフタルデルンクツ、ム・タンツ一、ウエベル作

指揮者

同 箏

胡 弓

同 箏

同 弓

胡 弓

同 箏

同 弓

胡 弓

上 眞 行

野 中 武 雄

高 田 銆 女

傍 島 萬 年 女

會 津 鹿 之 助

門 奈 短 理 郎

遠 山 甲 子 女

森 富 子 女

傍 島 萬 年 女

市 川 道 女

小 山 作 之 助

白 井 規 矩 郎

市 川 道 女

幸 田 延 女

遠 山 甲 子 女

幸 田 延 女

歐洲管絃樂 テレセン、ワルツ フォースト作

指 揮 エツケルト 本所生徒職員

絃樂四部合奏

クワルテツト ヘーデン作

フルート 奥好義
ヴァイオリン 多久隨
ヴィオラ 辻則承
セロ 上眞行

唱歌

其ノ一、不二山 樂曲ヘーデン作 歌詞加部巖夫作 ヴァイオリン、ヴィオラ、セロ、フルート共奏

其ノ二、君は神 樂曲ベートーヴェン作、歌詞里見義作、歐洲管絃樂器共奏

△プログラムは實に立派に印刷されて居る。活字の大きさから紙に對する罫方等、現在見ても恥しくない。表紙には「音楽取調所卒業演習會手續書」と邦字で書いてゐる。證書授與とか、校長の詞や大臣の祝詞とかいふものはこゝには省略した。

當日は太政大臣三條實美卿以下文部省の高官等三百餘名の臨席があつて非常な盛會であつた。

音楽會入場券寫、

音楽取調所卒業演習會

「三條附屬二人」 臨場

明治十八年七月二十日（月曜日）午後第二時より上野公園地内文部省新築館に於て執行

音楽取調所長

伊 澤 修 二

注意、此切符に宿所姓名等詳記無之者は何人によらず受付係に於て堅く謝絶すべし。

英文のもの省略す。往復葉書大のもので、英文と和文と同様に記載され實に立派に出来てゐた。

八月十日外人音楽家演奏會を文部省新築館で開いた。演奏者、提琴家モーレル、唱歌者モンニエードーリヤ、ピアノ伴奏者レオンチノミ女である。本邦に於ける高級な室内樂の最初である。

明治十九年

七月十日、東京鹿鳴館に於て、大日本音楽會員第一回音楽演奏會を開いた。曲目十二。

明治二十年二月十九日

音楽取調所生徒卒業式並演奏會手續書 於文部省新築館

一、管絃樂

卒業生一同

メジテーション

グノー作

ラ・シーン・ドバル

ソープレット作

二、洋 琴

ラ・チューテレー メーエル作

グランド、ワルス ゴバルト作

三、唱歌 四重音 君が代 寧樂の都 わかな

四、箏曲 越子 獅子

五、洋琴 二人連彈

トロバドール ウエルデー作

エコー、ダメリキュー クレマー作

六、ヴァイオリン曲 洋琴 合奏

セレネード シューベルト作

ヴァイオリン 洋琴

七、洋琴連彈 ボイルドー作

ワイセダーメ

八、唱歌

ザオ・スター・オフ・エブニング フラレッツ・アプト作

セレネード・オフ・ドン・パスリエール ドニゼツタイ作

○主幹神津專三郎報告、卒業證書授與、辻文部次官祝詞、卒業生總代小山作之助謝辭。

九、管絃樂 シンフォニー ベートーヴェン作

一〇、唱歌 ほたる

木村作子
小山作之助

森、幸田、山勢

白井規矩郎

ソープレッツト

林 蝶子

林 富子

林 蝶子

比留間賢八

納所辨次郎

卒業生一同

生徒一同

卒業生一同

生徒一同

三月十二日、同廿六日 博愛社活人音楽會

博愛社（赤十字社）主催の活人畫音楽會を虎門工科大学講堂に開いた。廿六日には畏れ多くも 皇后陛下（英照皇太后）の台臨を賜はつた。

最初に序詞が附いてゐる。詩聖、ゲエテの詞で始まつてゐる。この序詞は何人かゞこれを見物の前で讀んだものと思はれる。この序詞の途中で「見給へ、人々」とある直ぐ次ぎに（幕上つて「慈悲」の場が現はれる）とイタリツクで書いてあるので斯く推察するのである。それと同時に丁度活動の辯士の如く場面を指しながら説明してゐる語があるので、いかにも見てゐる人々の實感を誘ふて、病める者、憐なる者に喜捨を求めた狀を歷々と知る事が出来た。

この序詞の次ぎから餘興に掛つてゐる。

一、歌劇「ストラトニース」前奏曲（メユウル作）……………陸軍近衛軍樂隊。

二、序幕「慈悲」乙女峠の場。奥手に富士山。饑に泣く兒を抱へた哀れなる寡婦が路傍の常夜燈の下に倒れてゐる。

一人の武士が測隠の情を起して施しをしてゐる。傍にサマリア人が背と胸とに赤十字の標を附けて立つてゐる。

此の場の音楽は「豫言者」中の「貧しき女に恵め」である。

三、次ぎの幕との間をつなぐ音楽。エツケルトの“*Soh ein Knad, ein Roslein stehn*”……………海軍々樂隊。

四、第一番目「野薔薇」音楽はシユウベルトの「野薔薇」原詩はゲエテ。丘の上の野原。少年少女が羊の群を番して居る。少年がギオロンを奏でる。少年は樂の音に魅せられてゐる。腕の花籠が地に落ちる。何故ともなく彼女は泣く。少年は弾く手を止めて歌ひながら彼女の體を抱く。彼女は立ち上り怒つて去る。少年追ふといふやうな牧歌的な情景である。

五、音楽「悪魔ロベエル」(マイエルベエル作)の意想曲。……………陸軍近衛軍樂隊。

六、第二番目「ゼゼンハイムのフレデリック」音楽はワグネルの「飛びゆく和蘭人。」場面はゼゼンハイム。人物は若きゲエテの戀人フレデリック。ゲエテと相愛の間ながら結婚する事は出来ないと言めたフレデリックが家族の人々に、オリワ、ゴオルズミススの「キカ・オフ・エックファイルド」を讀み聞かせてゐる。しかし彼女の思ひは愛人に馳せてゐる。犬の吠える聲が聞える。果然近づき来るのはゲエテである。

七、音楽「ロルヒエン・ポルカ」(フアルバツハ作)……………陸軍近衛軍樂隊。

八、第三番目「ハンス・ザックスとエワ」音楽はワグネルの「トリスタンとイゾルデ」ハンス・ザックスはドイツ中世の狂言作者。これにエワといふ娘が情事の相談をする場面。音楽「Stabat Mater」……………陸軍近衛軍樂隊。

九、第四番目「聖母禮讚」音楽はグノーの「聖母禮讚」場面は伊太利。日没の山上の小村。教會の「夕禱」の鐘の音。漁夫に持った籠を置いて合掌する。それと同時に一人の婦人が珠數を爪繰る。

一〇、音楽、「フアウスト」の兵士の唄、(グノー作)……………海軍々樂隊。

一一、第五番目「カウルバツハのマルグリット」音楽、歌劇「フアウスト」の教會の合唱。場面はゴチック式の教會の入口。中から唄が聞える。マルグリットは病める母の看病をして遅れて來たのである。これを待受けてゐるのはフアウトとメフィスで、フアウストは彼女の美しさに恍惚としてゐる。

一二、音楽、「ロオヘンダリン」(ワグネル作)中の抜粹。……………海軍々樂隊。

一三、第六番目「ロオヘンダリン、フラバンドのエルザに暇を乞ふ場」音楽。「ロオヘンダリン」中の哀歌。

一四、音楽「バグダットの酋長」(ボイルチウ作)の前奏曲。……………陸軍近衛軍樂隊。

一五、第七番目「オデンとブルネハウト」。「音楽は「ミリオツチの二部合唱」。「場面は「ニイベルグンの指環」ワグネル作）の一節で、ワルキリイの場である。古いドイツの神話時代。神々の父なるオデンが、自分の娘ブルネハウトに別れるところである。

一六、音楽、日本進行曲「風藻歌」(ルル作)……………陸軍近衛軍樂隊。

一七、第八番目「紅雀の巢」。「音楽、ピアノ「夏の夜の夢」(メンデルゾーン作)の二重唱。題材をグスタアフ・フライタクの連作小説中の同名の物に採つたものである。場面は古いドイツの城主伯ゲルハルトがテュリンゲンの居城に學徒イモを招き響應する所である。

一八、歌劇「ツアルに捧げし命」。(グリシカ作)の意想曲。……………海軍々樂隊。

一九、第九番目「マルクス・ケエニヒ」。「音楽、「夏の夜の夢」(メンデルゾーン作)同じくフライタクの連作小説中の同名の物に取材してゐる。マルクス・ケエニヒは十五世紀のトルンの市の富裕な商人である。場面はケエニヒは教師フアプリアエの傍に座して大形の本を讀んでゐる。併彼の思ひはフアプリアエの娘アシナの上にある。フアプリアエは眼鏡越しに娘を見てゐる。彼は娘を愛弟子レグルスに婚せやうと思つてゐるところである。

二〇、終曲。「カンポチャ風の曲」(シルマンズ作)……………陸軍近衛軍樂隊。

以上、(明治文化文學藝術篇)

……明治二十年プロシヤ人イルクネルは其前年本社病院開式に方り、來賓中に在り、廊下に於て、皇后陛下に敬禮を行ひ、陛下之に御會釋あらせ給ひしを無上の光景となし、感激の餘り慈仁の聖徳に報ひ奉らんことを思ひ、我が國にて未だ行はれざる歐洲活人畫の技藝を興行し、其收益を本社に寄附するに如かやとの一案を起し、パロン・ド・シー

ポルト及大山陸軍大臣、樺山海軍次官、獨逸大使フォン・ホルレーベン等の協賛を得、二十年三月十二日同廿六日虎の門内工科大学校場に於て此技を演じ、公衆の觀覽に供し、第二の開會に於ては忝くも 皇后陛下にも御覽あらせられ、且金千圓を賜ふに至れり。此興行に關する收益金及器具一式を本社に寄附し以て其意を致せり。(日本赤十字社史稿)

三月十七日、大日本音樂會員第二回演奏會を鹿鳴館に於て開く。曲目、十二。このプログラムを外山文庫のを一寸見たが、全部花文字のくしやく字體でそれが佛語で綴つてあるので、遂ひ茲に轉載することを略した。當時のプログラムと云へば、殆純西洋式で、厚手の紙に印刷したものである。一枚のプログラムを見ても歐化主義全盛時代が偲ばれる。

七月九日、文部省音樂取調所に於て同所總員の演奏會を開く。曲目十四。

十月十九日、華族會館に於て大日本音樂會員第三回演奏會を開く。曲目十二。

十二月九日、華族會館に於て大日本音樂會員第四回演奏會を開く。曲目十二。

明治二十一年

二月十一日、工科大学講堂に於て、森文部大臣主催元節祝賀演奏會を開く。演奏者は大日本音樂會員。曲目四。

七月七日、東京音樂學校に於て同校職員生徒の演奏會。曲目十二。

明治二十一年七月七日午後二時 於上野公園華族會館にて

東京音樂學校音樂演奏會奏樂順序、

一、歐洲絃樂 シンフォニー ハイドン作

本 校 員

二、唱 歌 ぶりわけ髪 なこそこの關

三、歐洲絃樂 ボヘミア進行曲 ウエーベル作

四、ヴァイオリン連弾曲

サウンズ・フロム・ホーム ゴンダール作

五、洋琴連弾曲

ディアベリー・オペラ百四十九

一、洋琴獨彈曲 グランド・ガロブ・ミリテール ボーム作

二、學校用音樂教授法演習

卒業生
同 同

三、唱 歌 治る御代

四、洋琴獨彈曲 ソナチネ モツァルト作

五、二部合唱歌曲 夏の 曉

本校員及生徒
本校生 徒
幸 田 延 子
森 富 子
依 田 辨 之 助
近 山 兼 人
山 田 源 一 郎
鈴木 米 次 郎
小林 錠 之 助
岩 城 寛
本校員及生徒
遠 山 甲 子
幸 田、森、林、岩原
宇野、長谷川、六女

六、歐洲絃樂 オーバチユニア ケラ・ペラ作

十一月二十七日、鹿鳴館に於て大日本音樂會員演奏會を開く。

明治二十二年

一月二十六日、鹿鳴館に於て大日本音楽會員演奏會。曲目十二。

二月十一日、憲法發布當日には鹿鳴館に於て内外人の盛大な夜會が催された。

三月二十一日、學習院に於て大日本音楽會員演奏會。曲十二。

五月八日、高等女學校に於て、慈善音楽會を開く。曲目十五。

五月十八日、鹿鳴館に於て、大日本音楽會員演奏會を開く。曲目七。

六月十九日、厚生館に於て、メーセルウエンの歌劇音楽會を開く。數番。

七月六日午後三時、於上野公園華族會館

東京音楽學校生徒卒業證書授與式音楽演奏順序、

一、唱歌

君は神 里見義歌 ベートーヴェン作

歸りゆくとも、燕

二、ヴァイオリン曲 管絃合奏 ヤンヅ作 第一、ヴァイオリン 卒業生

笛 同

第二、ヴァイオリン

ピオラ

セロ 卒業生

ベース 同

本科 生 徒
豫科 生 徒

山田 源 一 郎
鷹野 國 藏

林 蝶 子
納所 辨 次 郎

小出 雷 吉
高木 次 雄

三、獨奏唱歌 わが大君 中村秋香歌 メンデルゾーン作

長谷川 象 子

四、洋琴曲 クネヒト、リユーブリヒト シューマン作

近山兼人

五、二部合唱歌

高音

長谷川兼子

ゆめ

中村秋香歌 メンデルゾーン作

中音

荒井慎子

さらばよ故郷

中村秋香歌 メンデルゾーン作

瀧川作

岩原愛子

六、ヴァイオリン曲

洋琴合奏

ヴァイオリン

石岡得久子

ロマンス

ルース作

岩原愛子

久間和嘉子

宮崎玉子

村松秀子

遠山甲子

七、本邦樂

箏曲 薄霞

洋琴合奏

學友に告別の歌

日本ホルカノ曲

伊澤修二作曲

ピアノ

幸田幸子

内田菊子

上原鶴子

荒井慎子

長谷川兼子

遠山甲子

八、二人連彈洋琴曲

軍人進行曲

エフ・シューベルト作

根岸磯菜子

木村作子

九、獨奏唱歌 もり歌 中村秋香歌 ヘルマン・エリア作

岩原愛子

一〇、洋琴曲 インビテーシヨン・フホア・ゼ・ウルツ ウエーバア作

瓜生繁子

一一、校長演述、證書授與、辻文部次官祝詞、卒業生答辭

一二、唱歌 管絃合奏 ぶじの山 加藤嚴夫歌 ハイドン作曲

校員及生徒一同

十一月三日、華族會館に於て、天長節立太子式祝賀會音樂會を開く。曲目五。

十一月二十日、鹿鳴館に於て、大日本音樂會員演奏會を開く。曲目十一。

十二月十一日、鹿鳴館に於て、大日本音樂會員演奏會を開く。曲目十二。

明治二十三年

一月二十七日、鹿鳴館に於て大日本音樂會員演奏會を開く。曲目十二。

二月十一日、東京音樂學校紀元節祝賀音樂會

一、唱歌 美しくしき燕にしるし

豫科生

二、洋琴 ミニユエト シェールホー曲

橘糸江

三、唱歌 やよ御民

専修一年

四、ヴァイオリン イ調練習曲 ウエツクル曲、ホ調練習曲 スホーア曲

佐久間

五、獨唱 迎春 シューベルト曲

瀬川さく

六、風琴 花や紅葉。雲。

高木たけ

七、唱歌

八、洋琴 進行曲 メンデルゾーン曲

本科 二、三年生
根岸 いそな

九、唱歌 秋 章

本科 一、二年生

一〇、ヴァイオリン曲 ヤンザ作

専修 生

一一、唱歌 御稜威の光 モツアルト曲

本科 二、三年生

三月十一日、鹿鳴館に於て歐洲音樂博士テルシヤツク（フリユート名手）、洋琴専門家ルイザ・シユレル夫人の臨時音樂會を開く。曲目六。

五月十二日、東京音樂學校に於て、同校新築開校式に付職員生徒の演奏會を開く。曲目七。

六月二十一日、東京音樂學校に於て、大日本音樂會員演奏會を開く。曲目十二。

三月より開催の第三回勸業博覽會に於て、開期中奏樂堂に於て陸海軍々樂其他の演奏會が開かれた。奏樂堂は十二角形のものが博物館の噴水の左右に二つ建てられた。一時的のものであるが公園音樂堂の濫觴といふべきである。

九月二十三日、京都祇園館に於ける慈善音樂會。演奏者、バンジョー獨奏フチールド。ヴァイオリン獨奏フチールド。ヴァイオリン、ピアノ合奏モーレーとスタンフォールド夫人である。此當時に於てバンジョーの獨奏したのが珍しい。此會の目的は貧民救恤で基督教聯合會の主催で當日は三千餘の聴衆であつた。

八月 兩陛下の御前演奏

畏くも 兩陛下には澳國音樂博士テルシヤツク並東京音樂學校教師チットリツヒ、澳國音樂師シユレルの三名を宮中に召させられ、親しく音樂並に其の由來を聞召さる。

テルシヤツクは作曲家で、横笛フエトの専門家であり、シュニレルは洋琴ピアノ伴奏者である。

諸國皇帝の御前演奏によつて勳章或は御物を拜領したことが尠からずあつたといふことである。

日本に來るや大日本音楽會に聘せられて獨演奏會を催した時、會長鍋島直大侯等が激賞のあまり、遂に上聞に達したものであると。

此日 兩陛下 午後四時三十分頃より宮中千草の間に出御在らせられ、數番の曲を聞召され御機嫌殊の外麗るはしくあらせられた。

獨り千載一遇の寵榮を荷つた音楽家の面目は云ふに及ばず、日本音楽會の面目として暗黙の中に自今斯道の爲に奮勵すべき誓約を爲したるも宜べなる哉である。

當日の曲目

一、コンセルト、アレグロ、百四十七番(澳)テルシヤツク自作 テルシヤツク

軍事上の物語りを曲にしたもので、吹笛にシュニレル女のピアノ伴奏。

二、バラード及ボロネーズ (白) ビュータン作 デットトリツヒ

ポーランド古代の物語り及歌舞の様を疑したるもの、デットトリツヒのヴァイオリンにシュニレル女の洋琴を合奏す。

三、匈牙利古歌 (匈) リスト作 シューレル女

同國古代の歌舞に擬したもの シューレル女、ピアノ獨彈

四、日本歌調「花競ハナケウマ」と「櫻」 テルシヤツク自作 テルシヤツク

樂曲集中の花鏡、及櫻の二曲を編入し、自ら本邦歌曲の趣味を存せるもの。

横笛テルシャツク、ピアノ合奏シューレル女

五、ガバチナ (獨) ラ フ 作

家内親愛の情を叙したものの。

ハンガリ歌 (澳) ハウセル作

ハンガリ歌舞の狀を寫せるもの。

ヴァイオリン、チットリツヒ、洋琴伴奏シューレル女

六、コンセルト、ボルカ (英) ワ レ ス 作

今様の舞踏曲

七、ファンタシア (澳) テリシャツク自作

「ソナンブラ」の歌劇四十三番の趣向に擬せるもの、
テルシャツクフルリット横笛獨奏、シューレル女洋琴

十二月

東京音樂學校に於ける議會開院祝賀音樂會。

一、唱歌 憲法發布の頌

歐洲 管 絃 樂、伴奏

二、洋琴 聯奏

シューレル女

チットリツヒ

シューレル女

テルシャツク

音樂學校教員及生徒一同

官内省式部職業部員

同校女生徒數名

三、祝辭

四、國歌「君が代」(二同起立)

五、唱歌 議會開院の兒歌

ピアノ伴奏 チットリヒ

六、唱歌 帝國議會開院の頌(二)

ピアノ伴奏 チットリツヒ

七、ヴァイオリン合奏

八、唱歌 帝國議會開院の頌(一)

歐洲管絃樂伴奏

當日は代議士を招待したので、伊澤校長は祝辭中に音樂の沿革から音樂の必要論を説き、音樂を重用せられたき旨を力説せられたのであつた。

十二月六日 午後二時半より 上野公園地内東京音樂學校奏樂堂に於て。

日本音樂會第十二回演奏會、

第一部

一、歐洲管絃樂 賀婚進行曲 メンデルゾーン作曲

二、本邦箏曲 松虫

伊澤音樂學校長

同校教員生徒及來賓

麴町、番町、坂本、城東

泰明、寶田、櫻川、櫻田

の小學校生徒百餘名

高等商業學校生徒四十名

同校專修科生

同校生徒一同

式部職業部員

式部職歐洲管絃樂隊

東京音樂學校選科生

三、ヴァイオリン曲 洋琴合奏 ヤンサ作曲

音樂學校ヴァイオリン専修生

四、二部合唱

チツトリヒ夫人

甲、逍遙者夜歌

ルーピンスタイン作曲

グラスマン夫人

乙、思想的囚婦

ドボルジャツク作曲

五、中音サクソホーン曲

タイロル人想像曲

シツク作曲

陸軍近衛軍樂隊

第二部

六、歐洲管絃樂 ワルツ舞踏曲

ストラウス作曲

式部職歐洲管絃樂隊

七、合唱 歌 無伴奏

東京音樂學校

甲、村上義光 加藤殿夫歌

シユーマン作曲

乙、遊獵

ウエーバー作曲

八、合唱 歌 歐洲管絃樂合奏

音樂學校

帝國議會開院之頌 中村秋香作歌

上眞行作曲

チツトリヒ調和

式部職管絃樂隊

九、合奏ヴァイオリン曲

東京音樂學校ヴァイオリン専修生

甲、リエンドレル古代舞樂

シヤルウエンカ作曲

乙、陽春歌

マンデルゾーン作曲

一〇、舞樂 胡蝶

敦實親王作舞

藤原忠房作曲

雅樂部生徒

一一、パルトーン獨奏曲 管絃樂器合奏

アタム作曲

陸軍近衛軍樂隊

第二部八番の「帝國議會開院之頌」は帝國議會議員諸君の懇望によつて之を加へたもので、貴顯紳士外國人の聴衆で殆んど満員立錫の餘地がない程の盛會であつた。

明治二十四年

二月十一日、東京音樂學校に於て紀元節祝賀音樂會を開く。

五月二十九日、横濱一七八番なるバインヤイクに於て音樂演奏會を開く。

七月十一日、東京音樂學校第四回卒業式並同演奏、午後三時より同校に於て舉行。臨場者は貴顯紳士淑女外國人等二千餘名、滿場寸地の餘裕なく戸外にて傾聽する者さへ多かつた。

演奏順序

一、君が代 二回 滿場直立

二、ピアノ連弾

ガボツト・エト・ミューゼツト、インテルメツソ

三、作文二篇

忍ぶ處を述べ

ハルモニー (英文)

四、唱歌 螢 狩

五、洋琴 獨 彈 ソナタ

橘 糸 重
中 村 照 子

石 岡 得 久 子

瀬 川 朝 子

本 科 生

依 田 辨 之 助

六、授業法演習 (別記参照)

七、ヴァイオリン獨奏 ミニユエツト

セント 合奏

八、箏曲 ヴァイオリン合奏

春の花

九、演説 忘れがたみ

一〇、洋琴 水車

一一、演説並卒業證書授與

一二、マジテーション 洋琴、風琴、伴奏

一三、祝詞

謝辭

一四、唱歌 仰げば尊し

高木武子

岩原愛子

卒業女生八名

幸田幸子

内田菊子

卒業生

外山文學博士

根岸磯菜

校長心得 神津専三郎

ヴァイオリン 卒業生共十五名

伯爵 大木文部大臣

卒業生總代 岸原愛子

生徒一同

オルガン伴奏 福長竹男

明治二十五年六月四日午後四時。

後樂園に於ける日本音楽會第十五回演奏會。

一、吹奏樂 急速進行曲

『囃院活潑にして心神を濳ふが如き旋律』

陸軍々樂舍 指揮工藤貞次

二、吹奏樂 君が代

『君が代を奏して有栖川宮殿下を奉迎』

式部職雅樂部員 指揮芝葛鎮

三、吹奏樂 ダズ、イスト、デル、ターグ、デスヘルン大序

清樂 拔萃、西皮調

近衛軍樂隊 指揮四元義豐

『西元樂長編成曲にして傍聽者の嗜好に適合てか靜聽した微聲の微響と蝴蝶の舞ふあるのみ』

四、吹奏樂 パール、コステューメ

陸軍々樂舍

『古代樂器「カスターネット、タムパールドバスク」の二樂器を加へた』

五、吹奏樂 維納府新舞曲

雅樂部員

『曲中に外國人の小兒五六人愉快に舞踏を初め漸々奏樂の場所に踊り寄りしは自然の感動と習慣の嗜好とを不知の間に發せしめたもの』

六、吹奏樂 ロシニーの序

近衛軍樂隊

七、吹奏樂 君が代

陸軍々樂舍

『君が代を奏して有栖川宮殿下を奉送す』

小野の山 箏曲 古矢弘政編制

『傍聽席の婦人には得々の色を顯して聽く者多く見受けた』

八、コルネット獨奏、吹奏樂件奏

雅 樂 部 員

トルカト、タツワ、曲中のカウアチーン、

『東儀後龍の、コルネット獨奏であるが巧みにして童兒等又舞ひ山彦之に和した』

九、吹奏樂 ローヘンダリン、プロフェツト

式部、近衛、學舎聯合百三十餘名

指 揮 エ ッ ツ ケ ル ト

「其聲天地に響き山水共に踊り出すかと思ふ斗りで、勇快愉快此指揮者の鞭の巧妙なる舞ふが如く踊るが如く樽織るが如く狐幕の如く東八幕の如にして響へふるに物なく愉快の中に閉會を告げたが傍聴の喝采所望の拍手實に天地も轟く斗り、終に活潑なる進行の一曲を奏して午後七時頃全く閉會を告げた。

當日の來會者は貴紳淑女外國人等一千餘名其中外國人は三分を占む、會長を始め幹事の幹旋其宜しきを得優待の貴賓並に演奏者一同には立食の饗應があつた。』

日本音樂會は最良の音樂を擴張普及し本邦公衆の音樂趣味を高尙ならしめ、且交際上の便益を増進せんとするの目的を以て從來音樂學校、式部職雅樂部、陸軍々樂隊等相聯合して四季に大會を開き來つたのであるが、今度更に其組織に改正を加へ室内、室外との區別をなし、夏秋の二季は野外に吹奏し、春冬の二季は室内にて奏樂する事に決せし由音樂の性によつて室内の外に區別せしは適當の改良法といふべきか。(音樂雜誌)

後樂園と野外演奏場

園は小石川區砲兵工廠内に在つて水戸公の舊邸である。東は本郷に界へし、北は富坂に接し、西は牛天神に隣し南は礪川の流れに浴ふて小石川橋に對つてゐる。左門を入り直行數十歩で萱葺の門がある。

石敷の小徑あり溪流潺々として流る、又一門あり。明舜水之瑤が後樂園と題せる扁額を掲げてゐる門を入れば、老樹陰森天を蔽て日光を洩さず、右に大池あり池畔櫻樹多く其の景仙境の別天地である。

徑側に六尺餘の碑あり、駐歩泉の三大字を篆刻せり、又一珍亭を見る鳴立澤西行堂の名がある音羽の瀧を眺めつゝ小丘を迂回すれば、二三百人を容るに足る一家屋があり、庭前稍廣く即ち當日の野外演奏場である。西に又池あり、芝生の浮橋東南に架し、渡月橋と名く橋を渡りて富士山てふ山を登れば頂上に清水觀音堂あり、柱扉皆な彫刻を以て飾る、朱塗欄干の納涼臺あり、懸崖に突出し西南を望めば牛込小石川の眺景尤も佳である。演奏場は園内の廣場で、數百の椅子を並列して傍聽者の席とし、傍聽者は自由に園内を散歩し更に時を待たざるものゝ如し、忽にして音楽の聲起るや山を下り溪を出て橋を渡りて四方より集り、椅子に倚るあり、芝生に坐するあり、石に腰するあり、小丘に登るあり、各其好む所に座を占む云々。(音楽雜誌)

六月五日

日本橋區常盤小學校卒業生親睦會、音曲を催されたる番組

一、清樂履門、流水

九連環、西皮調

月 琴 前野きよ、關根じう
洋 琴 天 羽 ひ で
提琴及鼓琴 唐 澤 く ら

二、箏 曲 箏、ヴァイオリン合奏 六段、櫻狩、八千代獅子

三、箏 曲 落 梅

第一名、ヴァイオリン二名

△小學校の親睦會等に於ける洋樂の進出ぶりを示したるもの。

六月十日、高等商業學校音楽會、

一、唱歌 君が代

高商音楽會々員

二、唱歌 旅 泊

同會々員

三、唱歌 聖徳の歌

同會々員

四、洋琴獨彈

納所辨次郎

五、自由の樂

高商音楽會々員

六、音楽上の談話並獨逸歌獨唱

和田垣謙三

七、唱歌 治る御代

高商音楽會々員

八、唱歌 進軍の歌

同會々員

九、唱歌 凱 旋

同會々員

一〇、Rally Round the flag

同會々員

一一、唱歌 一致

同會々員

一二、洋琴獨彈

納所辨次郎

一三、Good night

高商音楽會々員

年に一回大會を開き、其他は時々演奏會を開きつゝあつたものである。和田垣博士の獨逸語の獨唱は珍らしい

六月十一日、午後一時 樂友會演奏會、牛込雅樂稽古所に於て。

一、舞樂、安摩……天笠樂 白濱……高麗樂

二、歐洲吹奏樂 遍歷婦人歌劇大序

三、吹奏樂 ローベルト

コルネット	東儀俊龍
アルトホルン	多忠基
ボザウネ	蘭十一郎

『三音伴奏で何れも其巧妙天敏に在るを知る』との評があつた。

四、吹奏樂 輕騎兵馬術の曲

雅樂所員

『抑揚頓挫實に其宜きを得、輕きは輕舟の靜海を帆走るが如く、又駿馬の馱驅の如し。強きは千軍萬馬の敵陣を躡躑し、或は電光一閃百雷怒濤を衝て奈落の底を拂ふが如し』

聽者をして此感を起さしむるも指揮者其人平常の勉勵に在りと雖も、亦樂自熟練の進歩は一二年前の樂に比して實に驚く可き進歩を呈せり。(當時の評)、樂友會は式部雅樂所員を以て成る。

七月九日 東京音樂學校生徒卒業證書授與式音樂演奏順序 於上野音樂學校、

一、唱歌 薩摩 湯鳥居枕歌 シューマン作

同校生一同

二、ヴァイオリン曲 洋琴伴奏

卒業生 中島梅雅

ソナタ ウォールフアールト作曲

同 石坂敏子

同 頼母木駒子

三、洋琴曲 セレネード ジェンセン作

卒業生 成川熊雄

四、唱歌 甲、他郷の月 佐藤誠演歌 メンデルゾーン作 同 校 生 一 同

乙、眠なし鳥 大和田建樹歌 プラームス作

五、箏 曲 四季の友 ヴァイオリン伴奏

六、村岡校長演説證書授與、大木文相演説、卒業生總代橋糸重謝辭

七、唱歌 告 別 黒川眞頼歌 メンデルゾーン作 同 校 生 一 同

八、演説 末松文學博士

九、ヴァイオリン曲 石岡得久子

ヴァイオリン、コンセルテノ第一、二、 シット作 幸 田 幸 子

一〇、箏 曲 越後獅子

一一、洋琴曲 三人連彈 橋 糸 重

甲、雅典の荒廢より拔萃進行曲 ベートーヴェン作 中 村 照 子

乙、婚姻進行曲、メンデルゾーン曲 麻 生 富 久 宇

一二、本邦俗問の歌調 甲、地つき歌 乙、琉球節 丙、めでた チットリヒ調和及編制

一三、唱歌 女聲三重音 洋琴伴奏付 卒 業 女 生 一 同

卒業式の歌 中村秋香歌 ワインチル作曲

明治二十六年

九月十八日、塙國軍艦の慈善音樂會

横濱碇泊の塙國軍艦エリサベス號軍樂隊は、山手公園奏樂堂に於て午後三時より午後六時迄音樂會を催した。演奏吹奏樂のみで非常な盛會であつた。奏樂堂といふのは四阿屋式の小さいもので、それに天幕の日覆を廻したものであつたのである。而して入場料は悉く貧民救助費に充てられた。

七月八日、東京音樂學校生徒卒業式順序、於同校

一、唱歌

聖代の光

中村秋香歌

シュューベルト作

卒業生一同

卒業式の歌

本居豊穎歌

シュューベルト作

二、風琴曲連奏

ソナタ第二部 メンデルゾーン作

島崎赤太郎

三、ヴァイオリン曲

ドンジュアン 歌劇幻想 モツアルトヤンザ作

石原重雄

四、洋琴獨彈

タランテラ

ヘルレル作

幸田幸子

五、箏曲、ヴァイオリン合奏

夏の夜

黒川直頼歌

チツトリヒ作

遠山甲子

六、唱歌

潯陽江

鳥居忱歌

シューマン作

卒業生一同

七、村岡校長式言、證書授與、井上文部大臣式言、卒業生總代謝辭

七、村岡校長式言、證書授與、井上文部大臣式言、卒業生總代謝辭

七、村岡校長式言、證書授與、井上文部大臣式言、卒業生總代謝辭

七、村岡校長式言、證書授與、井上文部大臣式言、卒業生總代謝辭

七、村岡校長式言、證書授與、井上文部大臣式言、卒業生總代謝辭

八、ヴァイオリン、風琴、洋琴合奏

ヴァイオリン、風琴、洋琴合奏

ヴァイオリン、風琴、洋琴合奏

ヴァイオリン、風琴、洋琴合奏

ヴァイオリン、風琴、洋琴合奏

八、ヴァイオリン、風琴、洋琴合奏

ヴァイオリン、風琴、洋琴合奏

ヴァイオリン、風琴、洋琴合奏

ヴァイオリン、風琴、洋琴合奏

ヴァイオリン、風琴、洋琴合奏

八、ヴァイオリン、風琴、洋琴合奏

ヴァイオリン、風琴、洋琴合奏

ヴァイオリン、風琴、洋琴合奏

ヴァイオリン、風琴、洋琴合奏

ヴァイオリン、風琴、洋琴合奏

ヴァイオリン 頼母木、戸田子

告別シンフォニー　　ハイドン作

風　　琴
洋　　琴

石　原、島　崎
元橋其他は卒業生以外

九、箏曲　ガボット(無踏曲)　　バツハ作

一〇、ヴァイオリン曲

甲、セレナタ　　モスコウスキー作曲

乙、セレッオ　　ビゼー作曲

丙、タランテラ　　シツト作曲

一一、洋琴曲四人連弾

十八世紀ミニユエツト　　ヂウメグリオ

一、
二、

一二、唱歌　ヴァイオリン、風琴、洋琴伴奏

此徳の華　　佐藤誠實歌　　シニューベルト曲

頼母木　駒子
戸田　忠　義子
島　崎　赤太郎
石　原　重　雄
其　他　數　名
遠　山　甲　子
麻　生　富　久子
橘　糸　重　子
松　重　ふ　み子
卒業生　其他

第三十二章　舞踏會の勃興と私設音樂團體の出現

條約改正を基として、日本の舊來の陋習卑俗を廢止しなければならぬといふ歐化主義萬能の傾向は滔々として、當時我が國上流社會を風靡してゐた。

明治十二年十一月三日、外務卿夫妻の主催で天長節祝賀夜會が延遊館に於て催され、皇族方を始め、高位顯官並民間名士が奏樂、舞踊に夜の更くるをも知らぬ迄歡々踊り、聖壽萬歳を唱和した。此會は明治十六年迄は延遊館で行はれ、其後は鹿鳴館で催されたが、明治二十七年十二月に至つて華族會館の手に歸したのである。

明治十五年、天長節祝賀夜會は如何に盛會を極めてあつたかと、同月六日の時事新報記事に載つてゐる。

「去る三日天長節を祝し例年の通霞閣外務卿官舎にて午後七時から、大臣參議各國公使へ晚餐の饗應があり、畢つて九時より夜會を催され來會の内外貴紳貴女、無慮七百名、奏樂舞踏等の催あり、全く散會したるは午前二時過ぎであつた。當夜外務省の表門へは菊花の瓦斯燈を點じ官舎の廻り樹木の枝等に無數の紅提燈を下け庭前には絶えず大小の花火を擧げ頗る鄭重な饗應であつた、外には小商人達が屋臺店を並べて居り見物人が右往左往する様は丸で金比羅水天宮の縁日といふ景氣であつた。」（時事新報）

明治十六年に至つて西洋崇拜熱の益々熾烈に赴くと共に、内外人の社交親睦の機關設置の必要にせまられ建築されたものが鹿鳴館である。十一月二十八日の竣工で、明治政史に曰く「晝夜舞踏音楽骨牌捧珠等物として適せざるはなく、以て内外貴人の情を結ぶの便に供したものである云々。」

明治十七年七月、内外人の親睦の爲め伊藤總理大臣、井上外務卿等が發意で外人舞踏家ヤンソンを舞踏教師として、七十餘名の舞踏練習會を催した。此會は引續いて東京舞踏會と爲り貴族高官及御雇外國人及夫人令嬢を限り入會を許したものであつた。即ち上流階級獨專のものであつたのである。

明治十七年五月十四日、東京俱樂部第一回例會を開催。

井上外務卿の發起に係るもので、其旨意に曰く、「修好の媒介を謀り、内外人の交際を親密にせんが爲、海外諸國に

現行する、くらぶの體裁に準據し、茲に倶楽部を設立し、會員を募集す云々。其一意専心只管、洋風を慕ひ以て交際を求めんとする處の舞踏會は此時に於て開け、華奢風流の餘に出る婦人慈善會は是時に於て起り、其他和を脱して洋に入る羅馬字會あり、風教を捨て、現狀を取る演劇改良會あり、古雅を迂として直情に馳する講談歌舞の矯風會あり、書方改良、言文一致、小説改良、音樂改良、唱歌改良、美術改良、衣食住改良、其の他曰く何、曰く何……と、貴賤上下翕然として洋風是擬し西人は倣ひ、其甚しきに至つては矯激なる人種改良論を主張し、光輝ある歴史を有する我が大和民族に換ふるに、コーカサス人種を以てせんとするに至る。是に於て遂に擧ぐも洋裝衣服を宮廷内に行はせ奉り、其禮式も亦歐洲に模擬せしめ奉る。是國家の基く所社會の仰ぐ所なり、故ある哉其所爲矣。

明治十九年七月、大日本音樂會が創立した。鍋島直大侯の會長で伊澤修二の副會長である。會員は内外の紳士淑女を網羅し、其の數二百數十名を計上し、其内、外國人は六十餘名もあつたのである。

同會の名譽書記をして居た小山作之助の曰く『此會の共金の一部として各國の公使達が赴任或は辭任の度毎に相當の寄附金をする慣例になつてゐたので充分に資力を持つて居たのである』と。

會員中には外山正一博士、菊地大麓博士、櫻井錠二博士等があり、工部大學の大講堂のステージに立つて唱歌を歌はれた事が屢々あつた。當時は伊澤修二主催のもとに大學教授達が「唱歌研究會」を起して樂界のために盡されたのである。

大日本音樂會規約

- 一、本會の目的は最良の音樂を擴張普及し本邦公衆の音樂上の趣味を高尙ならしめ且、實際上便益を増長するに在り。
- 二、前項の目的を達せん爲め其場所と時日を定め隔月一回常集會を開くべし。

三、常集會には會員集會して音楽上の歡樂を共にし、且、會員中の紳士婦人にて朗讀講話又は演説等を催すことあるべし。

四、會員中實地音楽を習はんとするもの、便益の爲適當なる會員に托し常集會外の場所及時日を以て唱歌又は樂器の訓練を爲すことあるべし。

五、音楽名家の來遊の如き好機あるに際し本會に之を招聘し其の技を演ぜしめんとするときは特に大音楽會を催すことあるべし。

六、會員は名譽會員特別會員及通常會員とす。

七、名譽會員は高位の紳士婦人にして本會の趣意を贊助し本會の推選に應じて入會せられたるものたるべし。

八、特別會員は本會を補助し得る所の音楽専門家或は音楽に長ずる人にして本會の撰擧に應じて入會したるものたるべし。

九、通常會員は紳士婦人にして本會の趣意に同意し本會員たらんことを望むものたるべし。

一〇、會員は常集會毎に各員金一圓とし通常會員に切符を配布し之と交換して受取るべし。

但、切符一枚にて二名迄の入場は差支なし。

一會員にて二名以上の入場を要する時は更に切符を請ひ之に相當する費用を拂ふべきものとす。

一一、名譽會員特別會員其他特に臨場を請はんとする者へは本會より切符を贈進すべし。

一二、大音楽會の費用は之を開くの前特別に委員を設け其の募集の方法を定むべきものとす。

一三、本會には幹事五名を置きて會務を處理し其内一名を互選して主幹とす。

主幹は時宜により書記を置くことを得。 以上。

明治十七年の鹿鳴館ダンス流行時代は更に益々進展の勢を示してゐた。宴會の旺盛なるは此時代に如くものは無く、彼所に總理大臣の議會あり、此所に外務大臣の夜會あり、朝には東京府知事の官邸に、夕には陸軍大臣の邸内に響く樂の音云々と明治政史は云ふてゐる。就中明治二十一年四月二十日に行はれた伊藤公主催の假裝舞踏會等に至つては實に其の極に達し、一般庶民階級に對しても一大センセーションを與へたのである。人或は之を評して『未だ羅馬の盛時に至らずして、先づ其弊を學ぶものなり』とか、日本の體嚴を傷けるものであるとして囂々たる世論を捲き起し新聞紙上に於ても侃諤の文字を以て大いに論難され、輕薄文弱の氣風を糾彈せられたのである。

明治二十一年十月、歐化主義を批評すと題して末廣重恭の演述が當時を物語つてゐる。

『今日我が政府の主義とする處は内を本とするか、外を先にするかは第一に起る所の疑問であります。一二の事實に就て考へますれば我政府は内を本にするよりは、寧ろ外を先にするの主義ではあるまいかと思はれます。其證據には政府は地方官に命じて馬車人力の取締を嚴重にせらるゝことがありませう。因て之に向ひ何の必要によつて此の如き規則を設けらるゝやと問ますれば、御役人方は髭を捻り乍ら、『外國人の澤山に入込で居る都會や開港場などで穢な人力車や乞食、馬車のからく往來するのは如何にも我國の面目に關することじや』と云はるゝであります。』

政府に於て街路取締を嚴重にせらるゝことがありまして之が爲に人民の迷惑を感じるを以て反對論が起つた時には、『追々内地雜居も始まる時節になつて道路取締の行届かぬのは不體裁じや無いか』といふ答辯が出来るであります。服裝を變し、殊に婦人に西洋服を着ることを誘導せらるゝは何の御主意かと聞きますれば、曰く外人と交際する爲なりと。紳士貴女方が鹿鳴館杯で頻に舞踏會を催さるゝのは畢竟勢力ある人々の誘動に出るといふことであります。

すから、何の必要があると問ひますれば、曰く、外人と交際する爲なりと。……(中略)……

第一の手段として西洋に流行する舞踏の稽古をして御突合の出来る様にせねばなりませんから、鹿鳴館や諸紳士の邸宅に於て毎夜ちやん／＼どん／＼音楽の聲を聞きごと／＼踊りの足拍子を聞くも勢の當然であります。已に舞踏が盛になれば夫の袖にびら／＼して跳る度に白き股の出る日本の衣服は不憚裁千萬だから是非とも貴女子達に西洋服を着せ寒天に乳の袖にびら／＼して跳る度に白き股の出る日本の衣服は不憚裁千萬だから是非とも貴女子達に西洋服の家屋は不便利至極なり、速に改正せざるべからず。別して今日の交際の源と云はるゝ卍顯諸君が外賓を接待し内外の紳士を招いて盛なる宴會を開かんとすれば、是非とも盛大なる邸宅が必要でありますが、如何に貴紳君子の經濟に長ぜらるゝとも一時に數萬圓の金を出して新築を始めらるゝことも困難なる事なれば、遂に諸大臣の爲に官邸を設くるの必要あるに至らん……云々と。』(明治政史第二十編)

斯くも鹿鳴館のダンスは二十年の四月がその全盛最高頂であつた。併しダンスの流行に伴ふダンスの音樂は依然として歓迎を受け、軍樂隊は臨時に出張出演々奏の收入が非常に多く、海軍の如きは一ヶ月の臨時收入が五六十圓に上つたのである。従つてこれが需用を満すべく私設の音樂會社が經營されるに至つた。

私設音樂會社の設立と經營難

鹿鳴館に内外人のダンスが始まり其他京濱間にも之が流行と共に音樂團體の需要が生じて來た。所が其の供給先は陸海軍、式部職、學校等に限られて居て勿論報酬を拂ふ許りでなく、一々軍樂隊拜借願ひを差出さねばならない。この機に乗じてと、曩きに海軍を退職してゐた加川力、井上匡次郎、池田辰五郎の三人が主唱して民間の洋樂團體を計畫した。然るに幸運にも洋樂器がしかも十六人分横濱の五十五番コツキング商會に轉がつて居た。これは英國ベツソン

會社の製品で、海軍の注文流れの樂器であつた。其價格は千二百八十圓で花月園の平岡某が金主となり、顧問に澁澤榮一を頼み資本金一萬圓で洋樂の株式會社東京市中音樂隊が構成されたのである。

市中音樂隊の元祖は、明治十八年十月の設立であると廣目屋が云ふて居るが、音樂生を募集して教育を開始したのは、明治二十一年の事である。練習所ともいふべき假事務所は芝區愛宕下の藥師寺で、音樂練習生二十二名、教師としては井上匡次郎、加川力等であつた。

然し當時は外人崇拜の時代だったので、外人教師の招聘に腐心し、日本に渡つてゐた曲馬團の樂手米人ジョージ某を指揮者として雇入れた、處が淺才短識遂に其の責を全ふすること能はず、幾も經ずして自ら辭した。何でも譜が讀めなくて逃亡したとも言はれてゐる。

其の代りに折よく飛込んで來たのはフランス生れのアレキサンドル・リゼットといふ、米艦マナカツシー號の信號喇叭手を勤めてゐた彼を採用することになつた。リゼットは腕も確かなので直に教師に据ゑた。こんな有様で音樂生がどうやら世人に認められたのは明治二十二年池の端に競馬場が出来て其時潰突したのが始であつた。

處が其後ちつとも需要がなく維持がだん／＼困難となつて來た。所へ海軍々樂隊の方では一時に十八名も退職者が出た。

收入皆無の損失を幾分でも救ふ爲に、此の株式會社東京市中音樂隊は一週一回横濱に遠征してグランドホテルの舞踏會をプラスチックバンドで煽り立てた。之が可成成功して、遂にリゼットは横濱に生徒十二名を引き連れて常備となつたのであるが、これが明治二十三年三月迄確實に成立してゐたのである。

此頃恰度、加川力と密約のあつた海軍々樂隊の十八名は一舉に退職して市中音樂隊に加はらうとしたが不景氣の爲

うまく行かない。そこで退職者連は別個に獨立を計畫して樂器も買ひ事務所も借りて東洋音樂會を組織した。これで我が國に民間の音樂團體が二つになつた。この二つは並行して盛に洋樂の普及に努めたが、然し需要が増加しない、そこで東洋音樂會も横濱のグランドホテルを狙ひ、前から居るリゼット一派に立合演奏を申し込み、其の結果が東洋音樂會も一週一回グランドホテルで演奏する事になつた。

而して此の演奏競争は火の出るやうな激しいものであつたが、やがて共に相刻の不利なるを悟り協調合同をなして東洋市中音樂會が作られた。兩雄併び立たず遂にリゼット一派は旗を卷いて横濱を去り神戸に引越し同地オリエンタルホテルを根據として十五名の神戸市中音樂會を作つた。明治二十五年の春これによつて關西に初めて洋樂團の出現を見るに至つた。

明治二十五年競争に勝つて横濱グランドホテルを乗取つた一黨は何しろ天狗揃ひ、しかも統率者を失つた所から内紛が絶えなかつた。その中に八人程は當時横濱碇泊中の米艦オマハ號軍樂隊へ轉職した。當時の月給が約八十圓といふ高給に有頂天になつたと云はれて居る。尤も當時は月給十圓位が世間並だつたといふから無理はないが、これも一年有半米艦が横濱を去ると共に池田某の外は下船し、或者は再び市中音樂隊へ或者は遠く臺灣へと走つた。之等の出來事に依り邦人洋樂手が外人に劣らぬ力を立派に證據立てられた。

此間東京に残つた東京市中音樂隊の樂手達は、芝の彌生館を根據として第二回の生徒募集を開始した。それは日清戦争で出征軍人の歡迎のめた需要が滅茶々に殖えた。

此の時に廣目屋、專廣商會、旭組の三廣告業者合同で、内外裝飾といふ會社を起し、東京市中音樂會を買収してつた。

北海道の屯田兵で音楽隊を組織し有馬某が樂長となり明治二十四年頃に稽古をして居たものも樂長附で樂器（千二百圓）もろともに、同會社の方へ買収されたのであるが、日清戰爭當時は之が爲に非常な利益を得たのである。

樂長の給料が十八圓、演奏料は一時間十五圓、後一時間毎に五圓といふ十二三人のプラスチックバンドである。それが日露戰爭後は十八人一組で三十五圓位で、人數少い六人一組が十二圓で時間制度でなくなつて來た。活動寫眞と音楽隊は附物のやうになつて、素人樂隊も増加して音楽が餘興視され墮落の傾向を示して來た。

第三十三章 祝祭日儀式唱歌の制定

教育音楽促進の實蹟大いに擧がり、國家制定の祝祭日等に於ける儀式唱歌は、全國的に普及するに至つた。茲に於て文部省はその歌曲の選擇を重視して之が採用について屢々訓令を發せられた。また同歌曲の制定の爲兼査員の任命も行はれた。明治二十四年の文部省普通學務局長より各府縣等に對する通牒を摘記すると。

明治二十四年十月八日

「祝日・祭日の儀式用唱歌は現在に於ては適當なる歌曲に乏しく擧式の場合に不便のことと思ふが其の歌詞樂譜の選擇については慎重に考慮せらるゝ様に」との訓令である。

同二十四年十一月廿九日、

從來祝日大祭日の儀式に用ふる目的を以て著作したる歌詞及樂譜に乏しく儀式施行の際不便尠からざるべくと存候依て先づ文部省及東京音楽學校の編纂に係る唱歌集の歌詞及樂譜にして右儀式を行ふの際唱歌用に供し差支なき

ものを挙げ別紙(左記)に掲載し念の爲め御通牒に及候

尤も表中「君が代の初春」は一月一日に「天津日嗣」は元始祭日及神武天皇祭日に「紀元節」は紀元節に「瑞穂」は新嘗祭日に又「瑞穂」歌詞中新嘗の神と修正して新嘗祭日に「天長節」「我大君」は天長節に其他は適宜御用ひ相成可然と存候此段申添候也

(左記)

我大君	君が代	天津日嗣	榮ゆく御代
五日の風	太平の曲	祝へ吾君	瑞穂
治まる御代	君が代の初春	紀元節	天長節(通牒全文文寫)

同年十月二十日祝祭日唱歌(歌詞及樂譜)審査委員左の通り任命された。

委員長	東京音楽學校長理學博士	村岡範爲
委員	東京帝國大學教授文學博士	黒川眞頼
同	東京高等師範學校教授	野尻精一
同	東京女子高等師範學校教授	篠田利英
同	文部省視學官	渡邊熏之助
同	文部屬	佐藤誠
同	東京音楽學校教授	上原六四郎
同		上眞行

同 同 鳥居忱

同 同 爪生繁子

顧問 同 備教師 チットリヒ

附 チットリヒは右唱歌撰定顧問であるが、和聲を附すべきことの口達があつたのである。

明治二十五年に至つて更に委員を増加し、三月十八日左の通り審査員を任命した。

委員 東京音楽學校教授 神津專三郎

同 宮内省雅樂部副長 林廣守

三月二十二日更に四名の追加増員した。

委員 音樂家 小山作之助

同 宮内省雅樂部伶人長 山井基萬

同 宮内省雅樂部伶人 林廣權

同 學習院教授 納所辨次郎

而して幾多の會合を重ね、遂ひに明治二十六年五月に至つて審査成り、當選者が左の通り決定されたのである。

一月一日 千家尊福歌 上 眞行曲

元始祭 鈴木重嶺歌 芝 葛鎮曲

孝明天皇祭 本居豊顯歌 山井基萬曲

春秋季皇靈祭 谷勤、坂正臣歌 小山作之助曲

神武天皇祭	丸山作樂歌	林廣守曲
天長節	黒川眞頼歌	奥好義曲
神嘗祭	木村正辭歌	辻高節曲
新嘗祭	小中村清短歌	辻高節曲
勅語奉答	勝安房歌	小山作之助曲

明治二十六年八月十二日

文部省は告示第三號を以て「祝日大祭日歌詞並樂譜」を公布せられ、初めて全國的の統一を見るに至つたのである。同日の官報第三〇三七號附録を見たのであるが、原形のまゝ凸版に印刷することが出来なかつたことを遺憾とする。全部で「八歌曲」が官報附録として告示第三號の別冊となつてゐたものである。「君が代」に就ては國歌であるだけに、種々研究が積まれ、屢々之が歌が等に關して論議され、また、公布の月日等も八月二十六日であるなどと明記してゐる人もあれば、特に官報の寫を掲載したのである。

官報のに依ると速度記號は何も無く發想記號も附してない、單にスラーと呼吸符があるばかりで現在歌つて居るのと異なるのは「吾のむすまで」を一息に歌ふ様に書かれてゐるのである。

明治二十一年にエツケルトが書いた「大日本禮式」で「君が代」の曲は海軍省から各條約國に贈つたもので器樂專用に書かれてゐるのであるが、之に依ると速度記號はラルゲットで *♩ = 70* となつて居る。而して、第一、二小節はピアノで、第三小節以後はメツツツァルテとなつて居る。無論この樂譜には、「君が代」の旋律が表はれてゐるが、一オクターブの差があるので比較すべき筋のものではないかも知れない。従つて呼吸符の印が何處にも附してないの

祝日大祭日歌詞並樂譜

新	天	神	紀	元	一	勅	君	
嘗	長	嘗	元	始	月	語	が	日
祭	節	祭	節	祭	日	奉	代	次
						答		

君が代



歌 古 歌

作曲、林廣守

君が代は

千代に八千代に

さざれ石の

いはほと

なりて

こけのむす

まで

である。

であるから官報掲載の通りに「君が代」を歌ふべしといふ事は、そこに不統一をきたす因となつたのである。九月には文部省編纂の「祝日大祭日唱歌」が出版されて各府縣に配布されたが、之は官報と等しいもので無伴奏のものである。

當時の「君が代」といへば極めて速度遅く一度歌ふに一分半位かゝるのが珍らしくなかつた。従つて呼吸符等は出鱈目で、告示にある通りの五息等で歌ふものは一人も無く、却つて七息に歌ふを以て本體としたのである。これには正當な理由がある、即ち原作者林廣守の曰く、雅樂調では、「君が代は」「千代に八千代に」「さよれ」「いしの」「いは」となりて」「苔の」「むすまで」である。こんな關係で官報通りは歌はれなかつた。當時音楽學校教師であつたデットリヒはエツケルトに做つて「君が代」に和聲を附した。これがデットリヒが解備後の明治三十三年二月に於て「祝日大祭日唱歌重音譜」となつて出版されてゐるが、此の樂譜に依ると、二十六年の官報のものとは異つて、速度は六十九となり、呼吸符が七個所にあつて非常に歌ひやすくなつてゐる。發想記號等は明治二十一年版の「大日本禮式」の通りで、和聲も最初と終りには附いてゐないのである。爲にこの君が代の曲譜が正しいものとして歓迎もされ、また東京音楽學校出版といふので之に做つて歌はれたのである。爾來「君が代」の歌曲は殆どこの「祝日大祭日唱歌重音譜」に依つて複寫された關係で、文部省告示の原曲が殆ど忘れられてしまつた。

それが明治四十年に至つて「君が代の論方に就て」論議された。曰く歌詞の上から「さよれ石の」は一息で歌ふべきであるといふのである。官報告示に依ると一息に歌ふ様に書いてあるに不拘こんな問題が起きたのは音楽學校藏版の重音譜に依つたものであることが頷かれるのである。和聲的に根據を置けば「さよれ」「いしの」と切るのは當然で

あり、尙且、雅樂調から言へば、當然こゝで切る様になつて居り、原作者が切つて居るのである。

それで問題にすれば、大きい問題にもなるのであるが、問題にもならず、専門家の研究材料にもならないでしまつた。音楽第十二卷第一號(上野校發行のものにあらず)の記事には「さよれ石の」を一呼吸に譚ふべきである、と云ふことは嚴格に考へる必要はない。又「君が代」は何回唱ふべきものかの規則はない。惟ふに何回でも差支はない。二度唱ふといふのも十一小節では短かく、且半端の倚數樂節であるから一回では物足りないといふに過ぎないので當時問題にはならなかつた。明治二十年二月音楽取調所卒業演奏會には「君が代」の四部が一回歌はれて居る。明治二十四年七月十一日東京音楽學校第四回卒業式並同演奏會には「君が代」二回演奏のはじめであると言はれて居る。

これが、先例となつて、全國に歌はれ、ひいては儀式に關する訓令等にも「君が代二回」等の文字が設けられたのであると思ふ。

其後、殆ど「君が代」は二回歌ふものとなり、誰もが不思議さへ抱かぬまでに習慣つけられたのである。

「君が代」制定に貢獻した、官内省雅樂部に於ても、海軍々樂隊に於ても、「君が代」の奏樂は一回に限られて居る、但、行幸の場合に於ては、陛下の御通過遊ばさるゝ間幾度でも奏することになつて居る。

昭和二年來朝の獨逸軍艦エムデン號乗組の軍樂隊が日比谷公園奏樂堂に於て演奏した。時の我が國歌「君が代」は一回演奏して二回目第二小節迄演奏して終つた。二回演奏したといふ意であらう。此の時の演奏を聽くに「さよれ」「石の」は完全に切つて居る、これはその後伊太利軍樂隊のものも聽いたが、いづれも切つて居る。無論、我が軍樂隊は當然であるが、東京音楽學校に於ては最近「さよれ石の」は切らぬがよいといふて居る。

何處までも作曲者の言に従ひ、之が制定委員の補正の通り歌ふべきであるが、明治二十六年八月十二日公布の原曲

譜で速度等の缺けてゐる部分を補ふて歌ふことは、第一の途であると思ふ。

最近、上野東京音楽學校の奏樂堂に於て、「君が代」の標準とでもいふべきものレコードの吹込を爲した。島崎赤太郎教師並にラウトルツプ教師の細部に涉る注意のもとに、澤崎定之指揮で行はれたのであるが、之は要するに明治二十六年八月公布の官報等を斟酌したものであらうが、發想等も從來のものとは變つた點もよく解る。

第二十四章 洋風樂器とその製作

洋風樂器として、當時我が國に於て使用されたるものは大約左記の如きもので、現今使用されてゐるものゝ總てが既に使はれてゐたのである。此の外に陸海軍々樂隊に於て現在使用してゐない樂器で、當時輸入されてゐたものもあつた。

絃樂器

ヴァイオリン、ヴァイオラ、ヴィオロン・チェロ、ダブルバス、ハープ、ギター、マンドリン、パンジョー、ピアノ。

吹奏樂器

フリュート、ピッコロ、オーボエ、クラリネット、ホルネット、トロンベット、サクソフオーン、トロンボーン、イングリッシュホルン、バセットホルン、バズーン、テナーチューバ、バスチューバ、オルガン、アツコルジヨン。

打樂器

ドラム、バズドラム、タンバリン、トライアングル、シンバル、カスタネット、クシロフオーン。

玩具樂器

ハーモニカ、吹風琴、銀笛。

機械的樂器

圓筒盤蓄音器、自鳴琴オルゴール、ピアノプレーヤー。

絃樂器も、吹奏樂器も、打樂器も、茲に掲出してある位のは、既に明治維新前に輸入されてゐた事は前章に屢説した通りであるが、機械的の樂器、蓄音器はこの時代には殆んど委を見せなかつた。

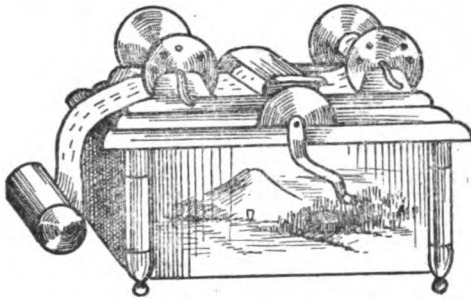
蓄音器

明治十一年頃の藝術雜誌上の「蓄音器ホノグラフ」の發明があつたとか、同十二年四月發行の同誌には之が實際に演ぜられた様子等が載つてゐたが、實物の到來したのは明治十九年で、米國駐在の陸奥宗光が歸朝の節之を齎したのが、抑々の始であると言はれてゐる。當時のものは、蠟管レコード蓄音でゴム管を通して聴く装置であつた。後に祭や縁日の時などに僅の料金で之を聴かされたことがあるが、一般的に輸入されたのは、日清戦争後のことで、明治二十九年横濱に居た外國商館のホーンといふ人が取扱つたものである。其後多くの輸入を見たが明治三十七年に至つて平圓盤のレコードが使用され同四十一年からは内地で製作を開始した。

紙腔琴

蓄音器が普及してゐない明治十七年頃に紙腔琴といふ樂器が日本人の手で製作された。之はオルゴールに似たもので、回轉装置の洋風樂器で、實は手風琴に用ゐるものと同じである。函の中央部に縦に排列され、回轉柄を採つて回轉すれば、風力により音を發する装置をしたものである。其簧列の上に長き紙面に譜孔を刻んだものを載せると、其

第三十七圖



譜札の長さは全音符、二分音符より三十二分音符までがあるので、其符によつて、長短を定める。而して音譜の高低は音列の上に當る譜紙面の位置によつて定まるから、奏者は各譜の巻紙を挿入して適宜の速度を以て回轉すれば小兒でも自由に音楽を奏することが出来るが、其の音聲がいかにも器械的で妙味がなく、蓄音器等の比ではない。

紙腔琴の製作披露會は明治十七年六月二十三日東京の江東中村樓で開かれてゐる。此の樂器は明治の初年にアメリカの宣教師ガルブルスといふものが、之を以て讚美歌を奏して居つたのを東京の人戸田欽喜（明治二十三年歿す）が之を日本唱歌に應用しやうと、上原六四郎（後に東京音樂學校主事）と謀り、種々工夫の結果第三十七圖の如きものが出来、栗原勳雲が之に命名したもので、此の樂器は音樂的價値の微弱なものであるが、音譜の編纂と其の製作の努力とは買はなければならない。明治三十二年後、蓄音器の輸入に壓せられて同

三十五年頃には全く其の姿を沒してしまつた。明治二十八九年當時の雜誌に現はれた廣告文を抜萃して見ると、

本器ハ軍歌軍樂唱歌及ビ長唄端歌常盤津ハ勿論和漢洋秘曲ノ歌謡ヲ奏シ其音律ハ精巧ニシテ能ク實地ニ叶ヒ形狀ハ最美ヲ盡シ又器ノ堅牢ナルハ世間流布スル音樂器ノ比ニ不殊ニ本器ノ輕便ナルハ習ハズシテ誰人ニモ自在ニ奏シ歌謡秘曲ノ蘊奧ヲ究ムルヲ得可シ是レ幼年者諸君ノ教育上有益必要ノ佳器ナリ乞フ江湖ノ諸彦御購求美妙ノ音樂御試奏アランコトナ

大形	特製	十	二	四	同	上製	八圓、六圓
小形	特製	四圓	五十錢	同	上製	三圓、五圓、十圓	五十錢



明治二十九年音楽雑誌に現はれた樂器の廣告

手風琴代價

貳圓貳拾錢	貳圓五拾錢	參圓四拾錢
參圓八拾錢	四圓五拾錢	四圓五拾錢
五圓五拾錢	五圓五拾錢	六圓四拾錢
六圓五拾錢	七圓貳拾錢	六圓八拾錢
拾圓五拾錢	拾貳圓	七圓五拾錢
拾七圓五拾錢	拾貳圓	八圓五拾錢
		拾五圓
		拾五圓
		拾五圓
		拾五圓

フラジオレット代價

五圓五拾錢	六圓五拾錢	七圓九拾錢
八圓五拾錢	八圓五拾錢	八圓九拾錢
九圓五拾錢	壹圓八拾錢	壹圓貳拾錢
壹圓五拾錢	壹圓八拾錢	壹圓貳拾錢
壹圓五拾錢	壹圓八拾錢	壹圓貳拾錢
壹圓五拾錢	壹圓八拾錢	壹圓貳拾錢
壹圓五拾錢	壹圓八拾錢	壹圓貳拾錢
壹圓五拾錢	壹圓八拾錢	壹圓貳拾錢
壹圓五拾錢	壹圓八拾錢	壹圓貳拾錢

マウスハーモニカ代價

參圓五拾錢	四圓五拾錢	五圓七拾錢
六圓五拾錢	六圓五拾錢	七圓七拾錢
八圓五拾錢	八圓五拾錢	八圓七拾錢
壹圓五拾錢	壹圓五拾錢	壹圓七拾錢
壹圓五拾錢	壹圓五拾錢	壹圓七拾錢
壹圓五拾錢	壹圓五拾錢	壹圓七拾錢
壹圓五拾錢	壹圓五拾錢	壹圓七拾錢
壹圓五拾錢	壹圓五拾錢	壹圓七拾錢
壹圓五拾錢	壹圓五拾錢	壹圓七拾錢

右之外舶來風琴、洋琴、ヴァイオリン等ヨリ、セレンチナ、ローラ
 ーオルガン等種々持合セ有之候何レモ音律之正確ナルハ勿論構造
 ノ堅牢ニシテ且ツ裝飾ノ美麗ナルハ世上無双ノ逸品ニ御座候何卒
 御用向奉希上候

鈴木製ヴァイオリン山葉製保險附風琴大賣捌所

明治三十年頃音楽雜誌に現はれたる樂器の廣告

大 太 鼓 拾六圓 貳拾圓 貳拾五圓 參拾圓 小 太 鼓 六圓半 拾 圓 拾參圓 拾五圓

シンバル 小 四圓 大 七圓 コルネット イー、フラット ビー、フラット共 金貳拾圓位ヨリ 金七拾圓位迄

アルト イー、フラット 參拾五圓 テ ナ ー ビー、フラット 參拾八圓

バリ トン ビー、フラット 四拾五圓 パ ス ビー、フラット 五拾圓

コントラ、バス 七拾圓位ヨリ

クラリオネット イーフラット 參拾圓 參拾五圓 ビー、フラット 參拾圓 參拾五圓 五拾圓 舌大 小共拾五錢宛

トロンボーン アルト、トロンボーン 參拾五圓 テナー、トロンボーン 參拾八圓

右ノ外カスタネット、トライアングル、フリユート、ニツケルオポー、ニツケルクラリオネット、等ヨリ信號喇叭、マウスハーモニカ、チカリナ、等其他鼓隊用横笛等ニ至ル迄凡ソ西洋樂器種々持合セ有之候何卒御用向ノ程被仰付下度候尙ホ詳細ノ雛形代價御入用ノ向へハ送呈可仕候

鈴木製ヴァイオリン 定價改正廣告

ヴァイオリン	一號品	改正定價	五圓	弓	一圓	箱	一圓五十錢
	二號品	同	七圓	同	一圓五十錢	同	二圓
	三號品	同	八圓	同	二圓	同	二圓五十錢

以上ノヴァイオリンハ弓箱共附屬 拾五圓 貳拾圓 貳拾五圓 參拾圓

二分ノ一、四分ノ三、ヴァイオリンハ並ヴァイオリント同代價ニ御座候

明治三十五年十一月音楽雑誌に現はれたる楽器の廣告

オルガン

第一號形	十八圓	第二號形	二十圓	第三號形	二十七圓
第四號形	三十三圓	第五號形	三十七圓	第六號形	三十九圓
第七號形	四十三圓	第八號形	四十八圓	第九號形	五十五圓
第十號形	六十五圓	第十一號形	七十五圓	第十二號形	八十五圓
第十三號形	百圓	第十四號形	百二十圓	第十五號形	百五十圓

舶來オルガン百圓以上三百圓迄

ピアノ

横濱西川風琴洋琴製造所にては堅臺形日本漆塗濕氣よけ重量輕き美音強聲なる洋琴を金參百圓にて製造し目下製法
 研究中なる由猶ほ日本家屋に適當なる品を製造し更に安値にする由目下は米國製英國製の原料を用ひ居る由其上千
 圓以上三千圓位迄あり山葉の製品は金四百五十圓以上同價までの由何れも各種勉強せり。

其他洋琴用椅子は(一)八圓、(二)十圓(三)十三圓の三種あり。

尙亦風琴用椅子は大形二圓二十錢、中形二圓、小形一圓八十五錢、大形テレンプ張三圓八十錢迄

ヴァイオリン

舶來式一種	二十圓	舶來式二種	二十五圓	舶來式三種	三十圓
舶來式四種	三十五圓	舶來式五種	四十圓	舶來式六種	五十圓

- 第一號形 五圓 第二號形 七圓 第三號形 八圓
 第四號形 八圓五十錢 第五號形 九圓五十錢 第六號形 十圓
 第七號形 十一圓五十錢 第八號形 十二圓 第九號形 十二圓五十錢
 第十號形 十五圓 第十一號形 二十圓 第十二號形 二十五圓
 第十三號形 三十圓 以上悉皆弓無し。

ヴァイオリン箱は

- 第一號品 一圓五十錢 第二號品 二圓 第三號品 二圓五十錢
 第四號品 三圓 第五號品 三圓五十錢 第六號品 四圓五十錢

其他舶來弓は二圓以上數種あり。卷絲は和製一個十錢舶來二十錢、緒留は和製二十錢舶來五十錢、緒留掛ケは二十錢緒留糸は一トカケ分十錢、駒は和製八錢舶來二十錢以上數種弱音器は二十錢、絲和製一、二、三、四各種把宛一組三十五錢舶來は一組一圓、調子笛はA一音五十錢G.A. D.E.四音一圓、脂は和製五錢より十五錢迄舶來は二十錢より三十錢迄、調又は舶來A C各六十錢、隈當は五十錢より一圓五十錢迄數種。

各種樂器

ピオラ……二十圓以上各種 セロ……三十圓以上各種 マンドリン……十五圓以上各種 ギター……二十圓以上各種
 種 バンジョー……二十圓以上各種 大太鼓……二十圓、廿五圓、三十圓 小太鼓……十圓、十三圓、十五圓あり
 シンバル……四圓、七圓、九圓の三種 コルネット……イー、フラットは金三十圓より四十八圓迄、イー、フラットは三十圓より七十二圓迄
 アルト……イー、フラット……三十五圓 テナー……イー、フラット……三十八圓 パリト……イー、

1、フラット……四十五圓　バス……ビー、フラット……五十圓、コントラバス……七十圓、ビー、フラットは百六十圓
 トロンボーン、クラリネット……兩方三十五圓　フリユート……金十圓以上　ピッコロ……五圓以上　フラ
 ジョーレット……七十錢　ニツケルクラリネット……二圓七十錢　ニツケルオポー……二圓五十錢　手風琴……二
 圓五十錢より二十五圓位迄

西洋樂器の製作

明治十三年西川虎吉は横濱市日出町に洋樂器の工場を設け、樂器の製造を始めた。彼は千葉縣の生れて、幼少から
 三味線の職工となり、遂に技術の進むに至つて、明治九年之が製作を試み、獨逸人カエルノ（音樂博士カイロと書い
 てもゐる）や英吉利人クレーンに就て前後七年間も之が研究に没頭したのである。

風琴の製造の事に就て、伊澤修二書に「風琴は明治十三年より之を試作せしに、追々其功を奏するに近しといへど
 も惜い哉、本邦は樂器を製するの良材に乏しくして未だ完成の功を奏せず。蓋し西國には乾材機なるものありて林中
 に就て新古に伐採したる材木も之を乾材機に附して一二週間枯干せしむれば、忽ち數千年間乾枯せし古木と異なるなき
 を得せしむるを以て、斯の如く良材に乏しきの患なし云々」と書かれてある。

又同十三年東京深川の邦樂器の名匠松永定次郎（三十一歳）が洋樂器の製造を思ひつき、ヴァイオリンの模作しやうと
 其のヴァイオリンを尋ね廻つたといふ話がある。當時露西亞の音樂家デミトリイ・リオブスキーが駿河臺のニコライ堂
 にあつて洋樂教授をして居た處から、彼れに請ふて、彼の携ふ所の愛器を檢察して此年の八月之が模作をした。其後
 研究を重ねて製作の結果、明治四十年の博覽會に於ては官内省の御買上の榮を得たのである。

明治十四年西久保才田光則がオルガンの製造に功を奏した。現在のオルガンと外見は毫も變りがないが、弾いて見ると音が弱くて出ない。風袋が悪いのか、現在いくら修理してもだめなのである。日本最初のオルガンとして音楽展覧會に出品されてあるのを二三回見たが、これは附屬品全部が舶來品でそれを組立たものである。

明治十五年に至つて本邦樂器師某がヴァイオリンの製作に成功した。之は桑材を用ひたもので従來製作者の桐材を使ったものよりは遙に成功したものである。某は老練な樂器師で官内省伶人のヴァイオリン熱心家達の意を承けて模造したもので、其の功を奏して後も、音樂取調掛教師メーソンに就て木材の用法及其他製作上の詳細なる指導をも受けて更に完成の功を占めたと云はれてゐるが、詳記する材料を持たない。當時絃絲は未だ本邦製が出来て居なかつた。惟ふに當時製作のヴァイオリンは現今のものとは到底比較にならぬものであつた。

西川オルガン

明治十七年に至り横濱四川樂器店主虎吉は始めて本邦産の材料のみによる風琴の製造を試みた。これが和製風琴の嚆矢である。而して此年文部省の試験を請ふて採用の通告に接したのである。又洋琴製造も行はれてゐたが、總ての材料が舶來品のみで、單にこれを組立てたに過ぎないものであつた。しかし明治二十年の工藝品共進會に於て銀牌を受け、同二十三年の内國勲業博覽會に於ては洋琴で有功二等賞、風琴で三等賞を贏てゐる。

山葉オルガン

明治十八年、静岡縣濱松町山葉寅楠は當時醫療機の製作に従事して居り、同十七年に同地小學校のオルガンの修繕を引受けて之を解剖したのが動機で、それより一ヶ年間研究の結果、遂に山葉オルガンの製造に成功したのである。この事に關して「明治事物起源」には次の如く書かれてゐる。

明治十七年頃、遠州濱松の學務委員に樋口林次郎といふ人あり、非常に學事熱心にて唯一つ義太夫の消樂あり、ある時一人の風來人流れ込みしあり、其の三味に妙なるを聞き、樋口林次郎一日之をよびて棹を執らしめ、得意の一段を語りしに、律呂能く調ひて氣に入りたれば直に招きて食客となしたりき。偶然小學校備付のオルガン破損して音を發せず、この食客は樋口林次郎に伴はれて學校に赴き全く未経験のオルガンを解剖して一二日の後修繕を加へて元通りの音を出す様にせり、この天稟の伎倆には一同舌を捲きしといふが此風來人こそ、山葉寅楠なり……云々と。

山葉寅楠は其後研鑽大に努め製品の改良工夫に没頭し、明治二十二年に始めて三萬圓の樂器社を起し、同二十三年には第三回内國勸業博覽會に出品して風琴は有功二等賞、洋琴は三等賞を受け、同二十四年には東京音樂學校から感謝状を受けた。後米國を視察して歸り、同二十六年頃には外國の輸入を防遏し得べきものゝ製作を得、明治三十一年株式組織に改めて日本樂器製造會社を起し、ピアノ、オルガンの製造に當り、一方西川樂器製造會社の經營困難なるを見て合併した。現在日本樂器會社は資本金四百萬圓を擁して、オルガンの製造能力は年二萬臺に上るといふ本邦唯一の樂器製造會社となつたのである。

因に山葉寅楠は和歌山の人、明治三十五年綠綬褒章下賜せられ、又明治三十六年清國政府から双龍寶星を授けられた。大正五年六月八日六十一で病歿された。

鈴木ヴァイオリン

名古屋の人、鈴木政吉の製作によつて成功したものである。政吉の父は尾張公の御家人で公務の傍内職として三味線製造をして居た。そんな關係で幼少から父の手助をして弾く事にも造ることに上達し明治十六七年頃知人より西洋に日本の三味線に類似したヴァイオリンといふものがあることを聞き、材料及構造等の説明を聞いて製作に努力し

た。其後一二年を経て岐阜縣師範學校に教授用の舶來ヴァイオリンの來たのを見るや、自己の作品の物にならないのに落膽し、到底日本人の製作し得ざるものと諦めてゐた、が氣を取りなほして研究を續け、明治二十二年には音楽學校の外人教師チツトリヒの批評をうけて漸次改善し、遂ひに翌二十三年内國勸業博覽會に出品して三等賞を受けた。

爾來年々改良を加へ獨逸の輸入を防ぎ、明治末期に至つては海外輸出をするに至つた。現在は二階建の工場三棟、平家三棟、倉庫物置八棟を有し製造に力を入れてゐる。

棹は楓、胴は表が姫小松、裏と側面が楓又は栃、絃は三線が羊腸、一線は銀線、弓の糸は白馬の尾、用材は彼の發明せる渦卷鉋削機械等で切る。

製出高一萬五六千、弓二萬、箱五千、價格十五萬圓餘、大正三、四年頃歐米を始め海外諸國に認められ、世界有數の絃樂器工場とも言ひ得るに至つた。

ハ ー モ ニ カ

ハーモニカの輸入せられたのは明治二十四年頃の事で、玩具の域を脱してゐなかつた。従つて日本で製作される様になつても、樂器店よりも勸工場とか博品館とかいふ様な處で販賣されたものである。

それが大正の初に到つて品質上長足の進歩を爲し、高級品は充分樂器としての機能を備ふるに至つた。トンボ印ハーマニカとか、鶯聲社製品は、國産品としては早い方で大正三年頃には日本樂器製造會社のが製作され、偶歐洲戰亂の勃發するに會し、製造力を急激に増大する等ハーマニカを内地市場に供給し、大正六年當時は一年間の輸出額が百萬圓を算する迄に至つた。大戰後輸出は激減したが内地市場から獨逸製品を殆ど驅逐するに至つたのである。

第二十五章 ニコライ堂の聖樂合唱

ニコライ音楽學校と聖教神學校

ニコライの音楽學校は、明治八年露西亞音楽博士イアコフ・チハイの創立である。明治十三年にはデミトリイ・リオフスキも來たつて音楽教授の任に當つた。此間デミトリイ・クルゼフスキ補祭も音楽の指導に従事して居た。

學科は聲樂が主で發聲法と音階練習、それに時々和聲を行ふ位であつたが、之が當時としては實に難しいものであつた。又ヴァイオリンやピアノ、オルガン等を専攻した人々もあつたが教科書によいものがなく、マザスやペリオの教科書等が用ひられた。イアコフは大使館付となつてからは、デミトリイが專任教授に當り、彼れの高弟には小原甲三郎（早逝）中川嘉之進（金須と改姓して仙臺に）前田河信近（仙台人、故人となる）東海林重吉（故人）中島六郎等が居た。又女でも澤邊房子（森田と改姓）があり、ニコライ主が、彼女のためにピアノを買つて特に彈奏を練習せしめたと云ふ事實もある。

彼澤邊は明治十七八年頃の所謂鹿鳴館時代にニコライ出身唯一のピアニストとして米國で鍛えて來た永井繁子等と共に、社交場裡に活躍した人である。

聖教神學校は男子と女子とに分れ七年制度のもので、現在の駿河臺日本大學の校地に堂々と建てられてあつた。生徒數も多く各七八十名もあつた。神學校の男女生から組織された合唱隊は、毎週一、二度行はれ、ギリシヤ正教の特色ある讚美歌の四部合唱が一本のバトーンの下に幾つもが歌はれてあつた。

明治二十二年頃はニコライ正教會の合唱隊が全盛に達した圓熟の時代である。

憲法發布の盛典當日(紀元節) 兩陛下の直簿が御通過の時にニコライの合唱隊が霞ヶ關の露國公使館前に整列して奉迎し翌日は神田の眼鏡橋の畔りで奉迎したのであるが、金須嘉之進指揮になる混聲四部の大コーラスで「君が代」を二唱し、次に宗教歌で有名な「我が皇帝に敵に勝たしめ」といふ露國々民歌を歌ふた。

單音の「君が代」が漸く歌はれる時代に、此の三百に近い混聲の大合唱が如何に民衆の注意を惹いたかと考へられる。

鳳聲が御通過の折に大學生等は一齊に萬歳々々を歡呼したことも珍らしいことで、之が明治時代の萬歳の始であると言はれてゐる。

また大沼魯夫雜誌樂星の記事に

「御警護の一騎兵が、「君が代」の合唱後來たりて、合唱隊の旗に目を注ぎ校名を手帖に記して行つた云々」とあるが實に恐れ多いことであるが之を立證する材料を他に見出しかねたのを遺憾とする。

其後帝大哲學科教授として來朝されたピアノストのケーベル博士が、明治二十六年當時此の教會の日曜禮拜には缺かさなかつたことや、合唱隊の活躍等に感心されてあつた等のが云へ傳へられて居る。容易に他を賞讃しないケーベル博士の言が事實とすればニコライの合唱隊が如何に立派なものであつたかと立證されるものである。

ニコライ堂に於ける該學校經營は爾來四十有餘年間も永續せられたのであるが、大正七年に至つて廢校になつた。同音楽部出身で大正十二年樂界に乗出した人にハイ・テナーの澤出哲治等がゐる。

ニコライ堂の鐘

東京見物の一つに數へられてゐる駿河臺のニコライ堂は、明治十七年に着工、同廿四年に至つて落成した。

それが大震災に見舞はれて復舊、覺束なきまでの痛手を受けたが、それが再び舊體を維持するに至つた。しかし彼の鐘樓のみは、丈餘も低くなつてゐる。

彼の鐘樓に縦つた鐘が八個で二長調のスケールを持つて居た。而してコーラス等の場合には樂器を用ひなかつた關係で、音叉の代りに一音をトニツクして聲を取る程に音楽的なものである。このスケールの鐘で和音を鳴らし、其の打方によつて主教の仕度や入堂や歡迎の意味と動作とを暗示した。

天正の頃、(一五七〇年代)長崎地方に吉利支丹寺が街々に建てられ、アヴェマリアの音が人々の合掌の禮讃をさそふが如くに打ち鳴らされたと云はれたことも、この鐘の音をきくと何となく想像される。諸行無常を告ぐる佛寺の鐘は淋しいが、教會堂の和聲的の鐘響には明るさが多く、少しも蔭鬱の所がない。

此の鐘の打方が最初日本人には音楽的素養がなくて出来なかつた。爲に態々露西亞から鐘つきがやつて來たことがあつたと言はれるほどに複雑を極めて居る。現在の鐘塔に上つて見たが、ベルの大きい型で口が開いてゐるものばかりで、中央のが六百貫もある物で漸次小さくなつて居る。小さくなるに従つてスケールがのぼるといふわけである。

現在の鐘は六個で、大きいのは明治初年箱根の塔澤教會に備へたものを其後函館教會に送り、それが今度ニコライ聖堂に寄贈されたもの、其他のはポーランド製の新しいもので、時價二千數百圓のものであるとか、昭和四年四月二十一日釣鐘成聖式を擧げてゐる。

現在は金曜日の晚六時、土曜日の朝晚六時、日曜日の朝九時と十一時半の集合の前後に打鳴らされてゐるが、往時の感じがない。

第三篇 日本的洋樂時代

上 軍歌調流行

(明治二十六年……明治四十年)

日本的洋樂時代は 明治天皇の二十六年より 大正天皇の六年に至る二十五年間を包括し、更に之を二分して前期を軍歌調流行時代、後期を洋樂の進展時代とす

第三十六章 日清日露兩役を楔機とせる軍歌の發展

明治二十四年首夏、東亞の風雲たゞならず、日清兩國間の國交はいよいよ險惡を加へて來た。折しもあれ此の年七月には清國の水師提督丁汝昌の率ゐる大艦隊が横濱に入港した。威風堂々海を壓し、見る者をして直ちに一大示威運動たることを感得せしめるに十分であつた。期せずして我國民は齊しく、清國に對する敵愾心に燃えた。小山作之助作曲の國民唱歌はこの七月に於て發行され、國民的感情を強調してゐる。「敵は幾萬ありとても、すべて烏合の衆なるぞ……」(明治十九年八月山田作歌参照)は往々歌曲に對するとやかくの非難はあつたが、當時に於ては如何に人口に膾炙してゐたものであつたかと覗はれる。即ち軍歌調流行の根源ともいふべき名作であつたのである。

又陸軍々樂隊の永井建子作の「凱旋歌」が同年五月に發表された。

道は六百八十里

長門の浦を船出して

早や二とせを故郷の

山を遙かに眺むれば

曇り勝なる旅の空

晴さにやならぬ日の本の

御國の爲と思ひなば

露より脆き人の身は

こゝが命の捨て所

身には弾きつづ劍きつづ

負へどもつきぬ赤十字

猛き味方の勢は

敵の運命窮りて

脱ぎし宵の戦の尖

申てぞ還る勝利軍

空の曇りも今日はれて

一層高き富士の山

峰の白雪消ゆるとも

勳を建てし丈夫の

名譽は永く盡きざらん

只遺憾乍ら何時の凱旋歌であるか詳かにする事が出来ない。しかし日清戦役後の作と書いてゐる人々の誤譯であることが明である。

又明治二十三年人籟樂士作曲の「元寇の歌」に、

四百餘州をこぞる

十萬餘騎の敵

國難こゝに見る

弘安四年夏の頃

何ぞ恐れん我に

鎌倉男子あり

正義武斷の名

一喝して世に示す。

が當時流行したことも宜べなる事と思はれる。

明治二十五年に入ると「敵は幾萬」は非常な勢を以て歌はれ、四月 納所辨次郎作曲の「日本軍歌」も同じく國民的精神の反映とも見らるべき作品である。

明治二十六年には、奥好義作曲の「新編軍歌」が出版になり、又郡司大尉の「短艇遠征の歌」や福島中佐の「單騎遠征の歌」がこの時代の國民精神を大いに作興し士氣を鼓舞したのである。

明治二十七年八月、遂に日清間の國交斷絶して宣戰の詔勅が下つた。「征討軍歌」は汗牛充棟の勢で出版販売され、洛陽の紙價を高からしめた事は事實である。同月小山作之助著の「忠實勇武軍歌集」、九月白井規矩郎著の「新選樂譜

闘戰軍歌」並永井、山本、芝等の作曲になる「軍歌唱護國の音楽」菟道春千代著が出版された。又讀賣新聞社に於ては、軍歌の懸賞募集を行つて大いに全國的に征清氣分を發揚するに與つて力があつた。此の歌詞は鳥居枕編の「大東軍歌」に收められて居る。十月には菊地義清作歌、奥好義作曲の「婦人裕軍の歌」が音楽雜誌に掲載された。

一

火筒の響遠ざかる 跡には虫も聲たてず

吹き立つ風はなまぐさく 紅ふかし草の色。

二

わきてすときは敵味方 帽子飛び去り袖ちぎれ

露れし人の顔色は 野邊の草葉にさも似たり。

三

やがて十字の旗をたて 天幕をさして荷ひゆく

天幕に待つは日の本の 仁と愛とに富む婦人。

四

眞白き細き手をのべて 流るゝ血しほ洗ひ去り

まくや縹帯白妙の 衣の袖はあけにそみ。

五

味方の兵の上のみか 言も通はぬあだ迄も

いとねんごろに看護する 心の色は赤十字。

六

あな勇ましや文明の 母といふ名をおひ持ちて
いとねんごろに看護する 心の色は赤十字。

次に菊地義清作歌、萩野理喜治作曲の「喇叭の響」を掲出する。

一

渡るにやすき安城の 名はいたづらのものなるか
敵の打出す彈丸に 波はいかりて水さわぎ。

二

湧き立ちかへる紅の 血汐のほかにみちもなく
先鋒たりし我が軍の 苦戦のほどぞ知られける。

三

この時一人の喇叭手は とり佩く太刀の束の間も
進め進めと吹きしきる 進軍喇叭のすさまじき。

四

その音忽ち打ち絶えて 再びかすかに聞えたり
打ち絶えたりしは何故ぞ かすかになりしは何故ぞ。

五

打ち絶えたりしその時は 彈丸のんどを貫けり
かすかになりしその時は 熱血氣管にあふれたり。

六

彈丸のんどを貫けど 熱血氣管にあふるれど
喇叭ははなたす握りつめ 左手ひだりてに杖つく村田銃。

七

玉とその身はくだけでも 靈魂天地をかけめぐり
なほ敵軍をやぶるらむ あな勇ましの喇叭手よ。

八

雲山萬里かけへだつ 四千餘萬の同胞も
君が喇叭のひびきには 進むは今と勇むなる。

「雪の進軍」第二軍従屬軍樂隊作（永井建子）

一

雪の進軍氷を踏んで
どこが河やら道さへ知れず
馬は倒れる捨てゝも置けず

こゝはいつくぞ皆敵の國

まゝよ大膽一吹やれば

頼みすくなや煙草が二本。(二、三、四省略)

以上の作は實際を物語るものであり、多くの人に歌はれたものである。即ち俗曲調で日本式の軍歌調の流行を見たのである。

「往け往け日本男兒」外山、山作歌伊澤修二作曲、

一、往け往け日本男兒 千歳の一遇ぞ

開闢以來の昔より 鍛へたる私の腕まへ

試すは今の時 失ふな此機會

神の敵人の敵 うち殺せこの腕で

起て大丈夫往け 往け往け天下に周く

武勇を示せ。(以下省略)

「豊島の戦」小中村義象歌、納所辨次郎作曲、

とりの林に風たちて ゆきゝの雲の脚はやし 吉野浪速秋津州……

「勇敢なる水兵」佐々木信綱作歌、奥好義作曲、

煙も見えず雲もなく 風も起らず浪たゝす

鏡の如き黄海は 曇りそめたり時の間に。

空に知れぬいかつちか

浪にきらめく電光か

煙は空を立ちこめて

天つ日かけも色くらし。

戦今がたけなはに

つとめつくせる丈夫の

尊き血もて甲板は

から紅にかざられつ。

彈丸のくだけの飛散りて

數多の傷を身におへど

其のたまの緒の勇氣もて

つなぎとめたる水夫あり。

副艦長のすぎゆくを

痛む眼に見とめけん

苦しき聲をはりあげて

彼はさけびぬ副長よ。

呼びとめられし副長は

彼のかたへにたゝすめり

聲をしぼりて彼は問ふ

まだ沈まずや定遠は。

.....

之等の諸作は、大家の傑作集として「征討軍歌」と銘打つて、日本橋東雲堂書店から發行され、『勇敢なる水兵』の如きは大正年代に至るまで、小中學校の運動會の音楽隊に吹奏されたほど人口に膾炙したものである。

十一月に至つて、『明治軍歌』鈴木米次郎、納所辨次郎共著と、『新曲支那征伐軍歌』中島長吉著が發行された。十二月には山田源一郎著の『大捷軍歌』第一集が發行され、引續き第七集までの刊行を見た。軍歌集中の白眉とも言ふべきものが、數多く掲げられてゐた。

開戦以來の出版軍歌を擧げて見ると、

征清の軍歌 新潟師範學校石原重雄作。勝軍祥瑞 四重納治歌東儀季治作曲。軍歌敵の逃走 永井建子作歌撰曲。成歌の歌 阪正臣作歌白井規矩郎作曲。陸戰 榮の戸主人。征清軍歌 小中村義象作歌。すゝみ行け 大阪青雨作。黄海激戰 町田久作。清軍征伐の歌 石原重雄作。北京の天長節 野村傳四郎作。討清軍歌 鎮西山人の作。征清軍歌富山師範學校鷹野園藏著。御國の光 福羽大人の作(美靜)。征清の歌 宮城師範四重仁邇編仙台高藤書店發行。第十八聯隊 佐藤正大佐作歌多忠基作曲。鴨綠江 司令官山縣有朋作歌古矢弘政作曲。旅順口 旅團長長谷川好道作歌辻則承作曲。黄海の大捷 海軍々樂隊作曲。海戰 吉本光藏作歌作曲。惠の露 乃木希典進擊途上の新年作林廣繼作曲。大和魂 西寛治郎作歌東儀季治作曲。義勇奉公軍歌 中村秋香作歌、上眞行曲。

明治二十八年、歐米諸國の新聞は、我陸海軍の快捷並に我國民の舉國一致盡忠報國の大和魂を激賞した。文字を書き連ね、國民軍歌、討清軍歌の威力に迄言及してあつた。而して、陸軍參謀本部編纂官横井忠直作の討清軍歌は原語のまま「トウセイゲンカ」の標題で歌詞は英譯されて、ロンドンの某書店から刊行されるに至つた。英米の諸新聞雜誌は同書の内容を書きたて、日本人の膽力と勇氣は逆も歐米人の企及す可からざるものである、と迄賞讃してあつた。右譯著者はこれが諸批評を纏めて「トウセイゲンカ」と同封して、陸軍省へ寄贈して來た。海軍水交社には、是等の記念す可き書類が保管されてあるとのことである。

討 清 軍 歌

膺てや 懲らせや 清國を

清は 御國の 讐なるぞ。

東洋 平和の 弊なるぞ

伐ちて 正しき 國とせよ。

御國の權利を 妨ぐる

傲慢無禮の 敵を伐て。

東洋平和の 義を知らぬ

蒙昧頑固の 敵を伐て。

うてや こらせや 清國を

うてや こらせや 清國を。

.....

これが横井忠直作の討清軍歌であるが、『威海衛陥落當時の状況を詠じた軍歌の内容を見て英米紙が書きたてた云々』と當時の讀賣新聞には報道されてあるが、横井忠直作の威海衛陥落當時のは遂ひに見出しかねてゐる。「威海衛」の歌に中村秋香、山田源一郎曲のものがあり、「水雷艇」大和田建樹歌、納所辨次郎曲の威海衛夜襲を歌つたものがある。

月はかくれて海暗し 二月四日の夜の空

暗をしるべに探り入る 我軍數隻の水雷艇。

「威海衛軍港陥落」といふ海軍當局の作があつたが、これは一般には知られなかつたものである。

伊國皇后陛下我國軍歌を懇望あらせらる

伊國皇后陛下におかせられては、我陸海軍々業隊に於いて新作した「軍歌譜」を我陸海軍兩省に對して懇請あらせられた。歐米新聞紙の報道に依て、御所望あらせられたものか否やは不明であるが、我が軍歌の名譽として、特筆大

書すべき事である。陸海軍兩省に於ては此の光榮に感激しつゝ直ちに權威ある軍歌を選定して贈られたものである。
(雜誌五十三號)

實に我國軍歌の海外的に發展を見た時代であり、日本音楽の中に「日本軍歌」なる特殊なものが生れ、海外からも認められた時代である。

明治二十八年出版の軍歌集も數多くあつた。

二月發行の、小山作之助著の「かちどき」三月發行の「新編帝國軍歌」、元橋義教作歌、多梅雅作曲、四月發行の小山作之助編の「忠勇軍歌集」二編は八月に於て出版された。五月には、殿上人の作「黄海の大捷」成歡の役「平壤の大捷」があらはれた。また「大元帥陛下奉迎の歌」が音楽學校に於て黒川真頼作歌、小山作之助曲のものが出版された。六月には鳥居忱編の「大東軍歌」山田源一郎著の「招魂祭の歌」大和田建樹作歌、伊奈俊作曲の「凱旋歌」本居豊穎作歌、伊奈俊作曲の「招魂祭の歌」が出た。九月には、菟道春千代編の「國民軍歌」が二冊、十月に日本軍歌會編の「凱旋軍歌集」が出た。

鳥居忱編纂になる「大東軍歌」は軍歌の代表的作を收めたものであつたが、將さに編纂成らんとした際、日清の平和克復し、其の時機を失したのは惜かつた。「大東軍歌」の内容を舉げて見れば、

山縣大將、西郷海軍大將、近衛學習院長、勝樞密顧問官等の題辭があり、その次に鳥尾中將の序文、佐野顧問官の序文等の書かれてゐるのが、一寸珍らしい。

作曲は全部日本人の作で、百二十有餘曲、陸海軍々樂隊、宮内省式部職雅樂所、音楽學校等の専門家の手に成つたものである。歌詞の中には、前年讀賣新聞社の懸賞募集したものゝ當選歌並秀逸のもの等がある。傑作ぞろひといふ

處である。

次に當時の音楽雑誌に掲載された歌曲を列挙して見れば、「旭の御旗」四籠納治作歌、奥好義作曲「大勝利」四籠納治作、二月號以降には「戦捷ポルカ」小仙作曲「戸毎の御旗」山本統三郎作曲、次に、「み空の月」、奥好義作曲、「名譽の痕」仙花作歌、山本銃三郎曲、「凱旋軍歡迎歌」酒井悦治郎、海軍々樂隊羽山菊太郎曲、また、「北白川能久親王殿下」本居豊穎作（十一月近衛師團凱旋の際に新作）「凱旋軍歌」乃木將軍作歌、山本銃三郎曲、「我日の本の軍人、強き敵とて何懼るべき……」十二月には「凱旋の歌」二つ山田源一郎作曲、旗野十一郎作歌、納所辨次郎作曲、黒川眞頼作歌「戦死者を弔ふ歌」共に音楽學校出版のものである。

凱旋軍の歡迎は國を擧げての催で、全國津々浦々に至る迄凱歌は歌はれた。従つて青少年音楽隊等は、横笛に太鼓或は手風琴、銀笛など、いふ組織の音楽隊が流行した。

演奏する歌曲といへば、軍歌の「元寇の歌」とか「勇敢なる水兵」などで、それにマーチ二三曲を奏した位のものである。中には「元寇の歌」ばかり奏して居たといふので「元寇音楽隊」の名さへ附されたものが現れた。而して、戦捷軍歌は歌はれて、遂に軍歌調流行の時代を現出するに至り、この流行が速く日露戦役に迄及んだのである。

明治三十七年、日露兩國間の風雲が險惡となつた當時は軍歌は稍下火となつて、武士道鼓吹の浪波節が忠臣義士を稱へて、國民の志氣を鼓舞して居た。日清戦前とは、かなりはその趣を異にしてゐた。二月十日の宣戰布告間もなく森桂園編の「露西亞征伐軍歌」や、酒井勝軍の「日本唱歌」が出版された。又「駒の蹄」「……行け行け男兒、日本男兒……」等が勇ましく歌はれはじめた。

此年の出版歌曲集を擧げて見ると、

一月「軍歌武人の夢」越雲散士編、戦前の作。

二月「露西亞征伐軍歌」森桂園編、「日本唱歌」酒井勝軍編。

三月「國民軍歌露西亞征伐」第一編、山田源一郎著、「征露軍歌集」第一編旅順海戦、高折周一作曲、「國民軍歌旅順の海戦」第二編、大和田建樹作歌、山田源一郎作曲。

四月「征露海陸軍歌」旗野十一郎作歌、渡邊森藏作曲、「討露軍歌かちどき」第一、二、小山本元子作曲、共益商社編、「七十七士唱歌」楓蔭散史作歌、葭田東海作曲、「日露戰爭國民唱歌」一、佐々木信綱歌、上眞行作曲。

五月「露國征伐軍歌」福島安正作歌、田村虎藏作曲、「王帥遠征歌」日本音楽會編、「露國征討軍歌」福島少將作歌、小山作之助作曲、福島少將の舊作に作曲されたものである。

「新大捷軍歌」初編、納所辨治郎、田村虎藏共編、「旅順の海戦」、山中少佐の歌曲は勇壯なもの。

六月「戦捷軍歌軍神廣瀬中佐」修文館編輯、「戦時唱歌」一、福澤悦三郎編、「常陸丸」「東海丸の船長」

七月「學校家庭言文一致叙事唱歌」六、眞下飛泉、三善和氣共著、「征露の歌」時事新報社編、

十一月「戦争唱歌」二、文部省編、「橋中佐」多くの人に作曲されてゐる。十二月「戦死者を弔ふ歌」吉岡平助編、

明治三十八年、「旅順陥落祝捷歌」渡邊森藏編、他に旅順陥落の歌は三種もある。「奉天會戦の歌」作曲者も數多く「神鳩」鳥居忱作、「橋中佐」「三勇士」……あられたばしる遼東の荒野原の……「日本海大海戦」大和田建樹作歌、

田村虎藏作曲、「東郷大將」大和田建樹作歌、田村虎藏作曲、「皆兵軍歌」日高藤吉郎編、「日本海々戦」尋常小學唱歌、納所辨治郎、田村虎藏共編、「凱旋」文部省編等がある。又雜誌に現はれた創作歌曲に

早稻田大學祝捷行進歌（四百餘州譜）

大東旭日國の

光は天に滿つ

祝へ勝軍

前古に例あらず

ベルシヤ破しヘラス

世界史變へきと云ふ

我に如かめやも

前古に例あらず

見よや平和の且

東西文化の粹

こゝに渾融し

又見む大亞典

正義暴横に勝てり

祝へや勝軍

東天闇晴れて

かどやく旭日影

三月二十三日に於て約七千人によりて謡はれし行軍唱歌である。

征露軍歌には價值評價上傑出したものは殆んどなかつた。歌はれたには歌はれたが、それは單に交戦中の國民總意の激情を表出したに止まり、後世に迄愛唱される歌曲の藝術的價值を保存してゐるものは殆んどなかつた。日清戦争當時の作にかゝる「婦人從軍の歌」等が却つて昔に變らない清新味を有し人々に愛唱されたのであつた。

横井忠直作の「征露軍歌」は「討清軍歌」を改作した感じを抱かしめ、力強くアツピルして來る何物も持つてゐなかつた。又明治二十七年刊行の「大捷唱歌」に對して「新大捷唱歌」も新(ネオ)と大見得を切つたのはいゝが、どこにネオのネオたる處が嚴存するか、是れ又餘りにも無智な意氣地の無いナンセンスな自己を暴露したに過ぎないものである。

従つて征露軍歌集の形式は征清軍歌集のその如きものが多く、只僅に叙事唱歌の銘打つて「三勇士」……あられた

ばしる遼東の荒野の原のこゝかしこ……「廣瀬中佐」……七度此の世に生きかはり、朝庭の仇を絶やさんと……「霹靂の夢」「須磨の曲」「離れ小島」等の作者北村季晴作等が出て、軍歌調を離脱して新しいフォルムに飛躍して行つた。同じ叙事唱歌の銘を打つたものでも、三善和氣の「戦友」は口語體で全然其の趣を異にし軍歌的に歌はれたものであり、戦後に至つても流行してゐたが其他の軍歌は、三十九年頃既に姿を消してしまつた。三善和氣は京都市某小學校訓導でこの「戦友」は從軍中の作と言はれてゐるが、彼は後に市會議員に選出されてゐる。

第三十七章 明治大帝の軍歌振興に關する大御心

畏多くも 明治大帝は御一代十萬首の御製を詠み出でさせ給ひ、寔に不世出の「歌聖」に渡らせ給ふた事は吾々國民の齊しく存じ上げ奉る處である。

御在世中の御製の數に於ても、萬葉集や古今集中のどの歌人も、到底企て及ぶ所にあらず、まして御歌調の御力強く且、御幽玄な御心の御發露を拜する時には畏多くも古今獨歩の人麿も貫之も、皆三舍を避けることであらうとさへ言傳へられて居る。

日露戦後 明治天皇の御製の英譯された書物を拜讀した或る外國人の述懐に「日本 皇帝陛下は戰爭を好ませらるる御方であるやうに自分は思つて居たが、今日はからずも御製を拜見して見ると單なる武勇に勝れ給ふばかりではなくて、御文藻も非常に豊富に互らせられ、且其の内容も崇高であり、特に仁義を重んじ給ひて地球上の人類を四海皆兄弟であるといふ、眞に一視同仁の聖慮を拜するに及んで、從來自分が 皇帝に對し奉つて誤解してゐた事を覺える

と同時に 日本皇帝は實に博愛主義の大詩人で在らせられた事を領得して大いに驚歎した」といふ事がある。

國のためあだなす仇はくたくとも

いつくしむべきことなわすれそ

したしみのかさなるまゝに外國の

人もこゝろをへだてざりけり

わだつみのなみのよそにもへだてなく

親しむ友はある世なりけり。

「これ等の御製を拜誦したものは、この外國人と同感である事は疑ひない云々。」(明治大帝講談社編)

日清戦争の際、兵卒の士氣を鼓舞する爲に作られた日本軍歌等に對しても、殊の外御意をととめさせられたといふ事實を洩れ承る。

此の當時の軍歌中には側近に奉仕する者の創作にかゝつたものもあつたが、之等の軍歌には、大帝御自ら御添削の筆を執らせられたと承るだに長多い極みである。

「成歎の役」並「平壤の大捷」「黄海の大捷」は其の主なるもので、

頃は菊月半ば過ぎ 我が帝國の艦隊は

大同江を艦出して 敵の所在を探りつゝ

目指す處は大孤山 波を蹴立てゝ行く道に

海洋島のほとりにて 彼の北洋の艦隊を

見るより早く開戦し

或は沈め又は焼き

我が砲撃に彼の艦は

あとしら浪と消え失せぬ

忠勇義烈の戦に

敵の氣勢を打挫き

わが日の旗を黄海の

浪路に高く輝かし

功蹟をなして勇ましく

各艦ともに揚鼓ふ

凱旋は四方に響きけり。

.....

此の軍歌は、戦後も永く人々に依つて愛唱されたが、吾々國民は其の作者をも知らずに歌つてゐたことは、洵に良多い事である。

此の歌曲に關して、日清戦争當時、侍從武官として廣島大本營に奉仕した、宮中顧問官海軍中將川島令次郎が講談社編の「明治大帝」に次の如く載せてゐる。

『日清の役、九月十五日大本營を廣島に移させ給うてからは御出征中の御事とて 皇后陛下と御離れ遊ばしおはした事は可なり長かつた。其の間 兩陛下の御間には絶えず御安否の御使があつた。十一月三日天長節の祝賀の際には香川皇后官大夫が東京から 皇后陛下の御旨を奉じて特に廣島へ参られ、恭しく御慶を言上せられた。』

その前日即ち十一月二日嚮に臨時議會を開かれた、バラツク建の議事堂を式場として、盛な戦勝祝賀會が催され、大帝の臨御を仰ぎ奉つた。餘興として軍艦の形をしたものを冠つた兵學校生徒の海戦ごっこ、或は假裝行列など催され、近衛及び海軍の軍樂隊が、選曲を奏して興を添へたので、大帝は非常な御機嫌に涉らせられた。

餘談に涉るが、陛下は奏樂を好ませられ、殊に勇ましい軍樂隊の奏樂には深き御興味を有せられ、大本營にては毎

晩御夕食の御時間にこれを聞し召すことを御樂しむと遊ばされた。

此の軍樂隊が軍歌を樂曲に合はせて唱ふのを面白く思召した事より成歡の戰と黃海々戰に就いては遂に御製の軍歌を下さるゝに至つた。

この軍歌に曲譜をつけ奉奏し始めたのは其の年の十一月の初であつた。東京から廣島の大本營へ伺候した香川大夫に對して、大元帥陛下は態々軍樂隊を召し、假裝行列をなさしめ、御製軍歌を唱奏せしめられた。

この記録によると畏多くも大帝の御作であると明記されてある。外大敵を恐れ給はぬ剛膽の大帝にして、内、霸々たる御やさしみに満たせらるゝ、内外相應じ、剛柔調和し給うて、眞に偉大なる御人格を成させられたことは、實に世界の何處にも求め難い英主にましました所以である。

又、元侍從職出仕石山基陽の記述の中にも(前略)軍歌の御作も日清日露兩役中には士卒の困苦を偲ばせ給ふ大御心から澤山に御作り遊ばされ、御内儀に於て女官や侍從に御うたはせになつたことも屢々あつた……云々。』と。

又同書中の御歌所寄人阪正臣の書いた中に、

明治三十二年八月、高崎正風を通じて、教育勅語の中の言葉を唱歌にせよ、との御詔を、中村秋香と私(阪正臣)に下さつたことがある。

中村のは「徳ヲ修メ業ヲ習フ」私のは「克ク忠ニ克ク孝ニ」であつたが、私共は謹んで命を奉じ、幾たびか稿を更めて、漸くにして作り上げ、叙覽を乞うたところ、幸にして御採用になり、特に學習院の生徒をして歌はしめよ、との御沙汰があつて、お下げになつた由を承り實に無上の光榮に存じた。其の唱歌は、

たぐひまれなる

み國ぶり

やまと島根の

すべらぎは

おほみたからの

親にして

君と仰がれ

おはします

二

君に忠なる

人こそは

やがて親にも

孝ならめ

親に孝なる

人こそは

やがて君にも

忠ならめ

三

忠と孝とは

二つなり

更に思へば

一つなり

ひとつ心に

つくせ人

國に親なる

君の爲め

と、いふやうなことであつたと思ふ、少々ちがふかも知れぬが、今は確と覚えぬ云々。

想ふにこれは勅語の御趣旨を、如何にもして國民に……殊に純真な幼きものに徹底せしめたい、との聖慮に出づるものと拜察する。大御心の有難さはこゝにも、春の水の如く満ち溢れてゐる。

又、元侍従武官海軍中將松村龍雄は次の如く述べてゐる。

……前略……明治三十三年大演習の砌り、自分等側近に仕へ奉る侍従武官に對して、

『今度演習に参加した軍艦の名を入れて、軍歌を作つて差出すやうに、記念とするから。』

と御下命があつた。文筆に縁の遠い我々もこの有難い思召に感激し、一生懸命で作り上げて、御手許に差出した。

大帝は、演習中御用務御多端の際にも拘らず、親しく御添削をたまひ、伊東軍令部長に御下賜の上、軍樂隊をして奏樂せしめられ、將卒がこれに和して高唱歡乎するさまを御覧になつていと御満足のやうに拜し奉つた。

又明治三十五年十一月、九州に於ける陸軍特別大演習の際にも、同じ思召を以て、侍従武官に軍歌を作らしめられ参謀總長に御下賜があつた。

殊に漏れ承るところによれば、一日の演習を終へさせられてから、行在所で御入浴の際にも訂正の個所を指摘遊ばされるなど、侍従の方々を御相手に軍歌の推敲に御餘念がなく、時には汽車中御食事の間に於てさへ、親しく御添削を賜はつたといふことである。洵に畏れ多いと申し上げようか、涙の出る程有難いことである。

思へば日清・日露の戦役に於て、我が忠勇義烈の將士は、唯々大元帥陛下の御爲、大日本帝國の爲と、自ら進んで死地に赴き、君國を百年の安きに置いたのも、かうした恵み深き大御心に報い奉らうとする、感激の表れに外ならぬのである。

不肖の身を以て、日の如く神の如き大帝の御盛徳を云爲することは、誠に恐懼に堪へぬ事ながら、敬仰の念、追慕の情、年と共に已み難く、請はるゝまゝに、まのあたりに拜し奉つた一斑を申述べて、聖徳を偲ぶすがとなした所以である。(明治大帝講談社編)

海軍々歌

頃は明治三十三年 やよひの春の末つ方

紀伊水道のほとりにて 實にいさましき大演習

彼方は富士を旗艦とし 續く高千穂和泉艦

笠置千代田や秋津洲 世界にほこる敷島艦

遊撃隊には扶桑艦 松島橋立殿島

共に進むる鎧遊就

雷、電、不知火の

浪をけ立てゝ進み行く

常磐、千波に高砂や

小鷹、福龍、単に

後に従へ向ひゆく

彼我の艦隊衝突し

煙は黒く立ち揚り

乗御なりたる浅間艦

八重山號と陽炎艇

此戦況を御覽あり

彼我兩軍はいつとなく

彼方此方に別れゆく

富士の合圖に従ひて

和歌の浦には碇泊す

やみを便に此方なる

十六隻の水雷艇

水雷驅逐の曙や

東雲、叢雲、夕霧と

此方の旗艦は八島艦

吉野、龍田と豊橋は

其外十二の水雷を

午後の一時を過ぐる頃

打ちつ打たれつ諸共に

砲聲天に轟けり

供奉は明石と宮古艦

隊を亂さず進みけり

交戦數時に渡りつゝ

立つ白波を後にして

波風なきて春がすみ

彼の艦隊打連れて

日も暮れ果てゝうば玉の

旗艦八島の命により

岩もくだけと突入す

すは大事ぞと各艦は

照す光に速射砲

其の有様ぞいさましき

帝國萬歳萬々歳

電氣燈をば向け直し

霰の如く打出す

是ぞ御國の稜威なり

陸軍々々歌

明治三十有五年

大元帥の御旗をば

大演習の統監を

雲の如くに集まれる

其の外對馬警備隊

君の御前に現して

ながく傳へて大八島

赤きこゝろは人々の

峻しき山の阻の道

勇往邁進いさぎよく

我が隊長の命令を

畏みうけて任務をば

頃は霜月半ば頃

肥の熊本に進められ

親しく爲させ給ひける

六と十二の兩師團

日ごろ鍛へし腕前を

武勇のほまれ後の世に

折しも染めし紅葉ばの

動作の上にあらはれて

早き流れの丸木橋

困苦缺乏堪へ忍び

大元帥の仰せぞと

盡し果して汝等を

股肱とたのむ御言葉に
宇土川尻や松橋に
砲聲雷をあざむきて
武威を四方に輝かす
龍顔いとも麗しく
還御の路次も長洲なる
皇禮砲の勇ましく
忽ち後に箱崎や
硯の海に浮べたる
軍艦明石奉護して
假の官居に入り給ふ
夕霧薄雲不知火の
電気艦飾煌々と
燈をも欺くばかりなり
武備を親しく御覽あり
飛ぶが如くにくはの里
常備艦隊七隻は

背かじものと競ひつゝ
追ひつ追はれつ戦ひの
劍光天にひらめくは
末たのもしき丈夫と
筑紫の汽車に召されつゝ
沖には濟遠碇泊し
迎へ久留米の山川も
香椎の宮も打過ぎて
御召の船の吳丸を
波平かに豊浦の
滿珠干珠の間には
水雷驅逐三艦は
海と山とを照しつゝ
明くるひの山砲臺の
山陽鐵道汽車の道
沖のかなたを見渡せば
君の通御を松島や

八雲常磐に殿島

橋立艦に水雷艇

朝日に輝く滿艦飾

續いて宮島水道は

吳鎮守府の所屬なる

八島大和に筑波艦

水雷艇ももろともに

赤き心のおふれたる

奉賀の聲は君が代の

千代萬代を誇きて

天地にひびくばかりなり

天地にひびくばかりなり。

戰時中は勿論戰後に於いても戰捷軍歌は盛に歌はれ、遂ひに未曾有の軍歌調隆盛時代を實現するに至つた。氣魄の溢れる所更に海外迄も進出して、我が日本軍歌の特質を發揮するに至つたことは蓋し、明治大帝の軍歌に對する特別の御聖慮の賜であつて、單なる時代の反映ではなかつたのである。

第三十八章 「哀の極」の創作と軍樂の擴充

大葬の葬送曲に西洋音樂が採用されることになつたのは、英照皇太后陛下の御大葬の時が最初であつた。大喪使廳に於ても頗る難問題となり、兒玉事務官と工藤軍樂學校長との間に、數回の交渉熟議が交換され漸くにして西洋音樂に依る葬送曲が創作されたのである。従來迄の軍樂は、葬儀に關するものとしては、軍人戰死に對する哀悼歌、例へば「命を捨てゝ大丈夫が……」の如きものゝ或は西洋の送葬行進曲等の奏樂で、未だ大葬に關するものゝ専門の樂譜は制定されてゐなかつたのである。それ故に、いきなり西洋曲を奏するのは穩當を缺くし、また聖壽萬歲寶祚無窮を

讀えた國歌「君が代」は目出度い時に限つて歌ふものであるし、さりとて蒼卒の間に大葬の樂譜を作曲することは不可能であるため、當局者は心外の苦慮腐心を繰り返したのであつた。然るに、三宮式部職長官は音楽屋教師、エツケルトに托して作曲せしめられつゝありしを以て、軍樂隊はこの曲を用ふことに一決したのである。

大葬の曲「哀の極」は勅令で發布され、作者エツケルトと工藤軍樂長とは協力して夜に日を續いで作曲を急いだのであつた。

結局近衛軍樂隊と第四師團軍樂隊とが、儀仗に列することとなり、第四師團の永井軍樂長外中村、川越兩海軍々樂長等は直ちに上京、又各軍隊喇叭長は呼集に應じて、軍樂學校に集合し、東海道沿道には、特に軍樂手を派遣して傳習せしめる等準備に忙殺された。

作曲者、フランツ・エツケルトは「哀の極」創作に當り、數多の泰西の名曲を涉獵取捨選擇して非常なる苦心研鑽の結果完成したもので低調ではあるが、哀々切々一脈の莊重味を帯びて容易に人の魂を悲しみの涙に溺れしめる。後世に傳ふ可き名曲である。(曲譜參照)この曲譜は 明治天皇、昭憲皇太后、大正天皇の御歴代の御大葬の折に奏されたもので、平素は練習さへも行はしめず倉庫の奥深く秘られてゐるものである。

此年陸軍大臣は陸軍建百五十三號を以て陸軍々樂演奏規定を制定して左の場合に於ける軍樂の演奏を定められた。

一、君が代 陛下及皇族に對し奉る時

二、海ゆかば 將官及同相當官に對する時

三、すめら皇國 軍隊相逢ふ時

四、足 曳 軍旗に對する時

哀 の 極 ヌツケルト作曲

dim. p

哀の極

A musical score for the piece "哀の極" (The Extreme of Grief). The score is written on ten staves. The first two staves are vocal lines in G major, 4/4 time. The third staff is a piano introduction in G major, 4/4 time, marked "Trio". The remaining staves are piano accompaniment, featuring a variety of rhythmic patterns and melodic lines. The score includes various musical notations such as notes, rests, slurs, and dynamic markings.

五、扶桑歌 分列行進の時

六、あらし岩根 登坂の時

七、大君の 歸營行進の時

八、國の鎮め 拜神の時

九、水漬く屍 靖國神社參拜其他招魂祭の時

一〇、哀の極

一一、命を捨て、 一般葬禮の時

一二、吹なす笛 途上行進の時

但、吹奏歌詞は喇叭吹奏歌に同じ。

一〇番の「哀の極」の下蘭に何等の記載のないのは國民として餘りに畏れ多い故であらう。

第三十九章 戦時と平時の軍樂隊の動靜

明治二十七年、日清兩國は遂ひに戰端を開き、全國民の動員出動と俱に、陸海軍々樂隊も之れに參加出征した。

第四師團軍樂隊（元大阪鎮臺軍樂隊）は、七月朝鮮に上陸、大島混成旅團に屬し、後に第一軍に従屬した。又近衛軍樂隊は、九月大本營に屬し、廣島市に向つた。軍樂舍（戸山軍樂隊）は、生徒隊長工藤貞次を隊長として一隊を第二軍に従屬せしめ、十月關東方面に向ひ花園河口に上陸した。軍樂舍々長古矢弘政は補充業務を掌つて東京に残留

した。

酷寒に向つた軍樂隊の動靜は、實に悲惨なもので、各隊ともかなりの困難に遭遇したのである。

十月 第二軍に従事した樂長工藤貞次の率ゐた軍樂舎の一隊の情況を摘記して見ると、

『出征後金州城に冬籠なれど、他隊休戦に反して軍樂隊は多忙極めること夥しく、今日迄一日も安閑座食することがなく、戰時勤務に服して居る。』

寒さ強くて奏樂中に金屬管樂器の指管ピストンが凍り、甲はF音で止り、乙はソ音で發聲が打絶へたといふことは、指管の凍つた形容である。木製笛類は氣息凝結垂下して三寸位の垂氷となることは普通の状態である。

十一月十八日早朝、金州南門を發してから二十二日旅順へ向つた。而して旅順攻撃の際に参加したのであるが、戰場の大困難を初めて嘗めたのである。前年東京に於ける音樂會の際に軍樂隊は軍人として武裝するは當然なれば、武裝のまゝ登壇したのを見て、聽衆の一部が之を忌み嫌らつた事を耳にしてゐるが、今日の此裝をして登壇したら何と言ふか。云々」と書かれてあるが、軍樂隊の活動には、休養の暇のないことが、痛切に感ぜられる。「雪の進軍」は此の當時の作である。

一

雪の進軍氷を踏んで

何處が何やら道さへ知れず

馬は倒れる捨てゝも置けず

こゝは何處ぞ皆敵の國

まよ大膽一吹やれば

頼み少くなや煙草が二本

二

焼かぬ乾魚と半煮飯に

なまじ命のある其内は

こらへきれない寒さに焚火

けむい管だよ生木がいぶる

澁い顔して功名話

すいといふのは梅干ひとつ

三

きのみ着のまよの氣樂な臥房

背囊枕に外套かぶりや

背のぬくみで霜とけかゝる

夜具の黍稈しつほり濡れて

結びかねたる露營の夢を

月は冷たく顔のぞき込む。

この歌は第二軍々中の作で、一讀したとけでも當時の状態が想像される。作曲者の明記がないが、第二軍々隊には

有名な永井建子(軍樂次長)が出征して居たのである。

十月二十五日、大本營に屬した近衛並海軍々樂隊に對して、出征軍人の負傷のため廣島豫備病院に在る患者の無聊を慰める爲、病院に於て奏樂せしむべき旨、大元帥陛下の有難い御沙汰があつた。優渥無邊なる天恩の篤きに感激の涙を禁ずる事が出来なかつた。

海軍々樂隊は各司令長官旗艦に一隊を乗組ましめ、又大本營付として田中穗瑞樂長の率ゐた一隊を廣島に置いた。此戰役に於て旗艦松島の軍樂隊員中、戦死者四名、負傷者三名を出して居るが、海軍々樂隊の活躍振も以つて省察するに足る。

明治二十八年、五月皇軍大捷して各隊は陸續凱旋した。

第一軍に從屬して復州の野に轉戦した第四師團軍樂隊は、同月大阪に凱旋した。

第二軍に從屬の軍樂舍軍樂隊は、旅順、蓋平、威海衛、牛莊、田庄臺と轉戦して、五月、軍司令部と俱に東京に凱旋した。

大本營付の近衛軍樂隊は、同年四月、京都に轉じ五月に歸還したが、八月に至つて臺灣征討軍に從屬せしめられ渡臺した。そして十月東京に凱旋した。(以上日清戰役に於けるもの)

海軍々樂隊は五月各鎮守府に凱旋歸隊した。同年三月には第四回内國博覽會が開かれ、音樂々器等の審査員として、軍樂師吉本光藏が囑託された。九月からは宮内省備教師エツケルトは軍樂教授のため、横須賀海兵團に一週一回宛來團することになった。これが明治三十二年迄も續いた。同年、海軍大臣は、東京、神奈川、靜岡の一府二縣から、三十名の海軍々樂生を募集した。

明治二十九年、軍樂部條例中改正及鼓手長の教養が變つた。六月、軍樂學舎を軍樂學校と改稱され、此年軍事上の必要より歩兵聯隊に鼓隊を編成するの議起り、戸山學校に各聯隊の喇叭長若くは其候補者を召集し、軍樂學校をして之が教育の任に當らしめた。而して一面には校長古矢弘政を獨逸に差遣し鼓隊の狀況を取調べしむることゝなつた。

八月二十二日には拜謁並賢所參拜被仰付廿三日佛船サガリアン號で出帆した。彼は嘗て陸軍最初の留學生として佛蘭西にて七年間も軍樂研究をされた人で、今度は獨逸並に佛蘭西駐在を被仰付たものである。

明治三十年八月歸朝して鼓隊の教育を繼續し鼓手長として教養したものが實に百五十名の多きに達した。一時は喇叭長を鼓手長と改稱さるゝに至つたが、幾何もなく廢止されたのである。

明治三十年三月、軍樂長少尉相當官の官階を設けられた。

五月、海軍々樂學理的教科書を備教師エツケルトを顧問として左の編纂委員に囑された。(三十一年十二月刊行の上發布す。)

編纂委員、軍樂長中村祐庸、軍樂師吉本光藏、軍樂師大山藤吉(後瀬戸口と改姓)

十月二十四日、陸軍大臣の告示陸軍々樂隊奏樂請求の手續が發表され、隊務に支障なき限り、公衆の請求に應ずるといふのである。奏樂の爲め派遣する一隊(五十人)に付二十五圓、半隊(約二十五人)に付十五圓を添へて請求すべしと改正されたのである。

二月十六日、東京府知事に於て告示を爲す。

「陸軍々樂生徒二十名召募相成候條志願の者は來三月十日までに出頭すべし。」

明治三十年、陸軍大臣は陸軍々樂演奏規定を定められた。

英照皇太后大葬の時の「哀の極」が勅令で發表になつたものであるが、此規定に加へられてゐる。

明治三十一年、軍樂部條例中改正及譜調學生教育、

四月、軍樂部條例中改正せられ、譜調學生教育の件、下士卒給料改正の件等の外軍樂學校に教官を置くの制度を設けられ、之に伴ふて軍樂次長永井種子樂長補に進級同校教官に補せられた。

各軍樂隊に樂長補一名を置き、尙樂手以下の官制を改めて定員を増加した。從來の一、二等軍樂長を軍樂長と改稱し二等軍樂長である。准士官階級を樂長補と稱し、樂次長を一等樂手と改稱し、一等軍樂手を二等樂手とし新たに三等樂手の制を設け、軍樂手補を樂手補と改稱し、樂生の制度を廢し師團軍樂隊は隊長(樂長)一樂長補一、一等樂手一二、二等樂手八、三等樂手一二、樂手補二六、計五〇名とし、軍樂學校は校長(樂長)一、生徒隊長(樂長、樂長補)一、教官(樂長補)一、一等樂手三、二等樂手一二、三等樂手一六、樂手補二八、計六二名とし、外に樂手補十名以内を増員することが出來得るやうに改正された。

四月、軍樂生徒召募規則を改正し、各師團管下に試験場を設け、試験官を派して試験せしむることとなつた。

因に從來の召募規則は志願者を東京に集め軍樂學校に於て試験を行ひ、合格者を一ヶ月間通學せしめ、更に入學生徒を命ずるの規定であつたが、條例改正に伴つて譜調學生教育は其第一回を明治三十一年九月入校させ、教育を開始した。

明治三十二年三月、傭教師エツケルトの兼務を解いた。彼は明治二十八年九月以來宮内省傭教師より、海軍々樂隊の兼務(一週一回)をして居たものである。五月軍樂師、吉本光藏に對して三ヶ年間の獨逸留學を命じた。軍樂研究のためである。

明治三十三年、北清事變に於ける軍樂隊。北清事變に際し、各國聯合軍の北京集中するや、我國も出兵した。軍樂隊は臨時の編成を令せられ、各軍樂隊の軍樂手を以て混成の一隊を組織し、軍樂生徒隊長工藤貞次を同隊長として第五師團に從屬して北京に出征駐屯した。

明治三十四年六月、大阪第四師團軍樂隊は、清國駐屯軍樂隊編成を令せられ、再び各軍樂隊樂手を以て混成した一隊を組織した。同隊長は軍樂隊附隊長補小島賢八郎で、さきに出動した軍樂隊と交代せしめたのである。海軍々樂隊は戰艦常盤に乗組み参加し、陸上に於ても其演奏を屢々行はれて居つた。後駐屯軍樂隊は、同年十一月内地に歸還した。本事變に際して我軍樂隊は初めて各國先進軍樂隊と伍し、常に國際的演奏を行ひ、戰時に於ける軍樂隊の眞價を發揮したのである。

明治三十四年三月、近衛師團軍樂隊長四元義豊病死し、一時近衛師團參謀長牟田敬九郎軍樂隊長事務取扱を命ぜられ、同年六月に至り在清國駐劄中の臨時軍樂隊長工藤貞次の生徒隊長を免して新に近衛軍樂隊長に補さる。同時に軍樂學校教官永井建子を生徒隊長に一等樂士山本銃三郎を樂長補に進級同校教官に補された。

因に近衛師團軍樂隊長四元義豊は陸軍々樂創業の士で「君が代」の選定委員の一人である。彼は初め四元平四郎といつたが改名して後、義豊と稱し、明治二年英人フエントン時代の傳習生で、陸海軍々樂の分離に際して陸軍のため軍樂隊の基礎をつくつた人である。其後ダクロンと共に陸軍々樂の發達に努めルルと共に之が改革を爲し、三十餘年間の其功蹟は軍樂史上没すべからざるものである。

十一月、軍樂隊一隊を舞鶴海兵團に新設した。同軍樂隊長は軍樂師赤崎彦二で、舞鶴軍港音樂に貢獻せられた。明治三十五年六月、海軍々樂師吉本光藏は獨逸より歸朝した。彼は三十二年五月渡歐したのである。同月軍樂長中

村祐庸は一隊を編成し、英國皇帝戴冠式参列の遺英艦隊旗艦淺間に乗艦した。我が軍樂隊の歐洲への派遣は之が嚆矢である。

明治三十六年二月、軍樂研究の爲軍樂長補永井建子の佛國、獨逸、白耳義の三ヶ國に差遣を命ぜられた。而して三十七年十二月歸朝した。之が陸軍々樂隊に於ける第二次の留學生である。

六月、軍樂部條例中の改正等により、軍樂學校を戸山學校軍樂生徒隊と改稱、校長古矢弘政は當該隊長に、軍樂隊長であつた永井建子は教官に補せられた。

十二月、軍樂生徒隊長古矢弘政は第四師團軍樂隊長に轉じ、永井岩井は近衛師團軍樂隊長に、近衛師團軍樂隊長工藤貞次は戸山學校軍樂生徒隊長に轉補せられた。

明治三十六年三月、軍樂師田中穂瑞一隊を編成し、海軍少尉候補生練習艦旗艦に乗組し、濠洲方面に回航した。八月、軍樂隊操式を發布さる。

明治三十七年二月、海軍々樂隊に於て豫備役の召集が行はれ、第二第三艦隊に軍樂隊を置かれた。

第二艦隊長 吉 本 光 藏

第三同 赤 坂 彦 二

日露開戦に際し、聯合艦隊各旗艦に軍樂隊一隊宛乗艦、戦役に従事した。

二月、日露國交際を生じ、我が陸軍の出動するや軍樂隊も戦時編成を令ぜられ出動した。

五月、近衛軍樂隊の半隊を以て第一臨時軍樂隊の編成を令せられ、隊長永井岩井之を率ひて清國鳳凰城方面に出動し、第一軍司令部の隷下に入つて各地に轉戦した。

六月に至り更に第四師團軍樂隊半隊を以て、第二臨時軍樂隊の編成を令せられ、同隊附樂長補小島賢八郎之れを率ゐて第二軍に屬し、普蘭店方面より各地に轉戦した。

其の殘餘半隊を以て、第三臨時軍樂隊の編成を令せられ、隊長古矢弘政之れを率ひて第三軍に屬し、旅順方面に出動し更に奉天に向ひそれより各地に轉戦した。此の時隊長古矢弘政は病氣のため後送され、爲に生徒隊教官樂長補山本銃三郎其の後任として出征した。

出征部隊の外、内地軍樂隊の狀況は、第四師團は全部出征せしめた閉鎖するに至り、近衛軍樂隊は殘餘の人員に軍樂生徒隊より補充要員を仰ぎ、隊附樂長補吉田又三郎隊長代理として留守隊の事務に服し、軍樂生徒隊は隊長工藤貞次補充及教育を掌り、軍樂生徒を召募しては應急教育を施し、兩隊共に戦病死者の葬儀或は豫備病院に傷病兵の慰問奏樂等に専日なく、其活動に目覺しきものがあつた。尙出征各軍樂隊員の依病送者漸く繁きを告げ、補充上困難を生ずるに至つたので、十二月に至り後備軍樂手の召集をなし、之を教育して辛うじて補充を圓滑ならしめたのである。

次に佐世保海軍病院に於ける軍樂隊の記事に面白い逸話があるから附言して置く。

我聯合艦隊が二月九日旅順口を砲撃せし以來、幾多の接戦に於て名譽の負傷兵は、多く佐世保海軍病院に收容された。軍樂隊はこの慰安のため毎水曜日に演奏が行はれた。當時は未だ管絃樂の設備なく吹奏樂のみであつたが、その目的を充分に達することが出来た。四、五月の驅逐隊交戦の折には敵の捕虜數名も收容した。其内一名は如何なる事情の在りしか佐世保病院に留置せられ永く此で療養せしめた。

彼は〇〇を切斷せられ歩行も自由ならず判へ語るに友なく見るに書なく只戀々郷土の念禁する能はずして日夜涙涕病衣を濕さぶることはなかつた頃日劇院たる音樂の病窓を破て枕邊に響くや永く憂愁の雲にとざれし彼は漸時恍惚

として漂魂殆ど己を知らず遂に痛手も忘れて自起窓口に身を出し萬眼いと哀れなる光を放つて之を聞いた軍樂長は彼のため *Salvation from Tpe Russian Opera "Janepnus Leczor" s. Einka* を奏するや流石歐洲に生れし彼は満面喜色を帯び之を快聽する様あたかも千秋の苦界を脱して爛熳たる萬花に酔ふが如く愁情何處に宿るか彼忽ちにして兩眼をとち憂涙潜々轉だ戀郷の念に堪へざる者の如し嗚呼彼生國のため身命を犠牲に供し勇戰奮闘止むなく敵國に捕へられて深情厚き吾國の恩澤に霑被し又此に尤も戀愛すべき歌曲を聞き得たる彼の心中果して何をか感起せし云々。

明治三十八年一月、海軍々樂隊の一隊を旅順鎮守府に設置。軍樂隊長は佐野國盛で明治四十一年迄存続した。

六月、第四艦隊に軍樂隊を置かる。

十一月、第二、第三、第四艦隊の軍樂隊解散、之は戰時中臨時編制したものを解散したものである。日露戰役中海軍々樂隊の戦死者は七名、負傷者十一名を出した。又軍艦三笠の大破損の際は死者十三名を出したのである。非戰鬥員たる軍樂隊員の、如斯多くの戦死者を出したことは、如何に、その海戰の激烈なる矢面に立つて活躍したものであるかを想像する。

明治三十九年、第三次軍樂隊擴張増設、

二月、韓國駐劄軍樂隊編成を令ぜられ、各軍樂隊樂手の混成を以て組織せる一隊を、軍樂生徒隊長工藤貞次を隊長とし韓國に駐劄せしめられた。軍樂生徒隊長の後任は教官永井建子轉補した。

此年五月、東京に凱旋大觀兵式を執行せられ、各軍樂隊を帝都に集中し此盛典に参加せしめられた。

同月、海軍は第二艦隊に軍樂隊を置いた。

十月、陸軍は關東軍樂隊の設置となり、韓國駐劄軍樂隊の編成に準じ混成を以て組織し、近衛師團軍樂隊附樂長補

吉田又三郎該隊長となつた。

兩隊とも幾多改遷の後常設部隊となれるを以て、茲に軍樂隊の大擴張となつた。其後關東軍樂隊長吉田又三郎は現職中死亡し、隊附一等樂手守谷龜造樂長補に進級同隊々長に補せられた。

此年 天皇陛下凱旋報告祭の爲、伊勢參拜の節第一艦隊軍樂隊供奉して其の任務に服した。又、東京灣に於ける、凱旋大觀艦式舉行に際し全部の海軍々樂隊が集合した。

第四十章 音樂圖書と作曲者

戰勝の氣焰が各般の方面に揚つて、軍歌の流行と共に、創作歌曲の出版が其の數も質も共に激増して來た。

作曲者としては「敵は幾萬」の小山作之助、「大捷軍歌」の山田源一郎、「勇敢なる水兵」の奥好義、「豊島の戰」……鳥のはやしに風立て……納所辨次郎、次に鈴木米次郎、多作家の田村虎藏、北村季晴それに新進の瀧廉太郎が現はれた。又、多梅稚作曲の「鐵道唱歌」は全國を風靡し、吉田信太作曲の「港」……空も港も夜は晴れて……は教育唱歌界に三拍子の規範的好教材として歡迎された。瀧廉太郎の「荒城の月」田中穗瑞の「美はしき天然」は青年子女の感傷表白の唯一のはけ口となり、感情、洗練の基礎となつたことは忘るべからざることである。

明治三十年には、京都市に市歌が生れ、上眞行に依つて作曲され、同三十六年には大阪市歌、明治三十四年には、一高の寮歌の作曲に續いて寮歌、校歌の新作が現はれた。教育的學校唱歌の創作も、ぞく／＼と出版されるに至つた。こんな風で創作歌曲の激増に連れて駄作も現はれはじめたので、明治二十七年十二月には文部省は之が取締のため、

訓令第七號を以て、小學校唱歌用歌詞樂譜採用に關する通牒を發した。

『小學校に於て唱歌用に供する歌詞及樂譜は、本大臣の檢定を経たる小學校教科用書中に在るもの、又は本大臣の撰定に係るもの、及地方長官に於て本大臣の認可を受けたるもの、外は、採用せしむべからず。但、他の地方長官に於て、一旦本大臣の認可を経たるものは此限にあらず。』

當時の唱歌集には文部省の檢定済といふ刻印付のものは無く、歌集の中の一歌曲に對して採用の許可を経たものが多かつたのである。

それが、該訓令と共に檢定出願者も増して明治二十八年には小山作之助著「かちどき」奥、大和田共著の「明治拔萃小學校歌集」、奥好義著の「歴史唱歌一等、最初の檢定済のものが出版された。

明治三十六年三月には、文部省訓令第二號により高等女學校教授要目が發せられて音樂科の指針を定められ、同四十年四月には師範學校規定の改正により音樂科に關する規程が示された。

此時代即明治二十五年から三十九年迄に於ける音樂に關する理論書又は唱歌集の出版並に雜誌新聞等に現はれた創作歌曲を各年次別に掲載して、その創作と作者について調べて見れば、

明治二十五年音樂出版圖書、

『幼稚園唱歌集』第一編、第二編、エ・エルハウ著五月發行、外人の著書としては唯一の唱歌集である。翻譯歌詞なれば、原語の持つ獨特の響の過半を失つてゐるが、現在も猶フレーベル式の幼稚園では歌はれてゐる。勿論曲は實にいゝものばかり集めてある。

つ　ば　め

つばめはさかんぞ
のきの下に
毛や木の葉どろもて
その巢つくる。

春の風

はるのかぜふきぬ
野山の草は

みな生命を得て
花ぞさきにほふ

みかみをほめよ。

春の風吹きぬ
地はめをさまし

草木は萌え出て
もろともに歌ふ

みかみをほめよ。

「小學唱歌」全六冊、伊澤修二編、二月發行、積年の研究經驗に出た編纂。第一卷は初學生徒の口授唱歌に便し、第二卷以下は數字及譜表によつて唱歌を授くるの用に供したものである。本邦律旋法、自然音階及俗樂調を併用して彼の視話法より發明した。發音練習法をも加へたものである。本邦固有の童謡を始とし新古に拘らず、新知徳の養成に益し歌詞の興味あるものを選んで祝日大祭日の歌をも加へ、教育に關する勅語の旨意を貫徹せんことに努めたものである。樂譜は廣く東西古今音樂家の作曲を採り方今歌學上音樂上に有名な諸大家の賛同を得て大成したものである。

エノコロ

エノコロ来いくまゝ食はせう。(狗の子)

からす

からす からす 勘三郎

親の恩をば 忘るなよ。

雁

かりかり渡れ 大きなかりは先に

小さなかりは後に 仲よく渡れ。

仰ぎ見よ

仰ぎ見よ 富士の高根のいや高く

秀づる國の その姿。

小 隊

一

小隊右向け 一二三

小隊進めや 一二三

小隊止まれや 一二三

號令守れや 良き兵士

二

小隊直れや 一二三

向導左へ 一二三

小隊進めや 一二三

油断をするなよ 良き兵士。

「圖解ヴァイオリン指南」、山田源一郎著、ヴァイオリンの奏法を示した最初のもの、三月發行。
「帝國唱歌」尋常小學二冊、高等小學二冊、大和田建樹著、五月發行。

「歌曲集」澤登代吉著、八月發行。

「新編中等唱歌」奥好義著、十二月發行。

「新編音樂理論」英人オシレー著、鈴木米次郎譯著。

「西洋樂譜日本歌曲集」附手風琴獨習譜、小島賢八郎調曲、永井岩井撰曲。

創作歌、

鳥居忱作歌「田家少婦」は一月廿日の作「薩摩潟」は七月二十五日の作で、シューマンのチゴイネル、ワイゼンの曲に作歌したもので今猶歌はれてゐる。「領巾魔嶺」は十二月廿五日作。

明治二十六年音楽出版圖書、

「小學唱歌」(乙號)四集迄、伊澤修二著、八月發行。

「中等教育音楽教科書」白井規矩郎著。

「祝日大祭日唱歌」全一冊、文部省編、九月發行。

「儀式唱歌」全、奥好義著、十月發行。

「小學唱歌集」上下、白井規矩郎著、十月發行。

「音楽講義」鳥居忱講、尋常師範科講義の内(二六―二九)。

創作曲、(一月號音楽雜誌所載)

東儀季治作曲の輪唱唱歌「來れよ來れ」米國のルーミス著の唱歌教授法を讀んでの創作で、我國輪唱歌創作の始めである。

「來れよ來れ へだてなき友よ この花園に遊ばん君と
つどへあつまれ いざうちつれて 業しき歌を謡はん ともに。」

明治二十七年音楽出版圖書、

「佛教音楽論」岩井一水著、七月、京都法藏館發行、

西洋樂の始祖に印度にあり、釋迦如來も印度なりといふ點から説かれ、音楽を説教演説の前に奏するは、無量日
以美妙音楽歌佛德受法歡喜無量と説いてゐる。

世界のたみくさ もろともに

眞理の園に つどひつゝ

ほとけの讚歎 するこゑは

天地をとほして ひどくらん。

「橋本佛教唱歌集」岩井一水著、

佛世尊一代の事がわかるやうにした本で、小學生女學生に歌はれるやうにつくつたもの。

「佛教唱歌集」第二編、青年教會婦人會少年會用。

「新選小學唱歌集」小島壽雄著、一月發行。

「歴史唱歌」奥好義著、六月發行。

「音楽全書洋樂の栞」百足登著、九月發行、マーチ、ポルカ、ワルツ、マヅルカ等が書かれてゐる。

「普通音楽教科書」米人ペロウ著、山田源一郎、白井規矩郎共譯著。

創作歌類 鳥居忱の「雷鳴」、「春の行方」、「箱根八里」、「荒城の月」、等の名作がある。

明治二十八年音楽出版圖書、

「明治唱歌拔萃小學唱歌」大和田建樹作歌、奥好義作曲、三月發行。

「明治唱歌拔萃中學唱歌」大和田建樹作歌、奥好義作曲、三月發行。

「尋常小學新體讀本唱歌集」白井規矩郎著、七月發行。

「帝國讀本唱歌」日賀田萬世吉著、十月發行。

「平安奠都紀念唱歌」加藤里路、楠美恩三郎共編、三月十二日發行。

「基督教聖歌集」増補出版、デビソン並山田寅之助編輯、歌曲四百二十九、君が代も同歌曲中に收められてゐる。

「俗樂旋律考」上原六四郎著、八月十五日發行

本書は洋樂書ではないが、俗樂旋法に就ての總てを西洋樂譜に依つて系統的に研究した文献で、當時音樂理論研究の幼稚な時代の著書として實に立派なものであり研究者の指針である。

近年になつて田中正平博士、及その繼承者である田邊尙雄理學士がこれについて根本的に違ふ説を樹立してゐるが一言で言へば上原説は簡單明瞭であり、田邊説はやゝ込入つてゐる。理學者の研究に俟つべきものであれば略す。

創作曲

「旅順陥落紀念行進曲」エツケルト作曲である。旅順陥落の折、紀念として作曲したもので、俗に「君が代マーチ」と呼ばれて居る。それは其中の一節に「君が代」が出て来るからである。突貫喇叭の導きに依て始められてより、愉快な二つの旋律が交互錯雜に聞えて恰も占領、陥落の歡喜は横溢を眼に見る様である。次でそのミツドル、ムーブメン

ト入りて君が代の嘹亮たる音がコルネットとボザウネに依つて示され、ヴァイオリンが遙かに遠く欣喜狂舞する國民熱誠の歡呼の聲と喧騒とを夢の様にきかせ、再び第一主題の旋律の快活なる感情が叙せられて終りになるのである。進行曲としては恥しからぬ美事な作品である。

「楠公小楠公」佐藤誠實作歌、チツトリヒ作曲。

「新年」野村王岬作。

「手鞠歌」小山秋峯作。

「四季の歌」堀井磊作。

「海國少年の歌」佐々木信綱作歌、入江好治郎作曲。

明治二十九年 音楽出版圖書。

「應用音楽理論」深澤登代吉著。

「學校式日唱歌集」元橋義教、深澤登代吉著、五月發行。

「學校必要唱歌集」楠美恩三郎著、六月發行。

「教育勸語唱歌集」巖美重由、元橋義教著、十一月發行。

「小學修身唱歌」恒川鎌之助著、十一月發行。

「オーボエ術科書釋文」外數種、戸山學校藏版、七月三十一日出版。(同校教科書)

「同聲會雜誌」創刊號、四月五日發行、上野音楽學校同聲會(學友會)發行のものである。

「樂理教範」鷹野國藏著。

「新撰樂曲大要」石原重雄著。

「和聲學初歩」米人エメリー著、神津仙三郎譯著。

「孝明天皇祭歌」十二月音樂學校出版。

「管屬樂器獨習之友」第一集、四竈納治編。

手風琴、橫笛、フックルビオン、フックルビオン、フックルビオン、フックルビオン 縱笛、コルネット 喇叭、太鼓等の使用法を圖解せしもの。

「手風琴獨習之友」(第三集迄)、四竈納治編。

「風琴洋琴進行曲」納所辨次郎編。

「風琴用唱歌集」第一卷、(本譜略譜付)

本書は舊文部省音樂取調掛編纂小學唱歌集並に祝祭日唱歌中樞要なる歌曲數種を選拔し、簡易な低音(ベース)を附加調和した唱歌集である。

「新編教育唱歌集」第八集迄、教育音樂講習會編。

明治三十年 音樂出版圖書。

「哀の極」ひたしきき 一月宮内省式部職屈エツケルト作曲。

英照皇太后御大葬儀當日奉奏すべき奉悼行進曲である。(第三十八章同曲参照)

「教科適用新唱歌」二冊、山田源一郎著、二月發行。

「日本唱歌」三冊、多梅稚著、六月發行。

「國教唱歌集」小山作之助著、八月發行。

「新式唱歌」(一名トニツクソルファー唱歌集)、鈴木米次郎編著、十一月發行。

内容を示せば五十餘年前英のジョンコーエンが嘗てグロバー女史のドレミなる文字を洋琴中に張り付け唱歌を教授したるを見て案出したものであると、歌曲目次を掲げて見れば、

學問の禮、旗野十一郎作。一月一日、千家尊福作歌、上眞行作曲。紀元節、高崎正風作歌、伊澤修二作曲。朝日、佐々木信綱作歌。春、一花はほほえみ中村秋香作歌、伊澤修二作曲。小舟、佐々木信綱作歌、伊澤修二作曲。豊島の戰、小中村義象作歌、納所辨次郎作曲。稻刈、中村秋香作歌、上眞行作曲。旅順口の戰、旗野十一郎作曲、鈴木米次郎作曲。水雷艇、大和田建樹作歌、納所辨次郎作曲。威海衛、中村秋香作歌、山田源一郎作曲。凱旋、黒川眞頼作歌、納所辨次郎作曲。開校の歌、樋口勘次郎作歌、鈴木米次郎作曲。勅語奉答の歌、勝安房作歌、小山作之助作曲。元始祭、鈴木重嶺作歌、芝葛鎮作曲。雪、(さくら)の曲中村秋香作歌、箏曲。『ねざめさゆる 閨の雨戸の すきまぞ白き しぐれくく くれにし空は やがて雪となりやせし。』
月、(濟き流れの曲)中村秋香作歌、箏曲。

『つもれば老と敷きつゝ 我が身一つとかこちつゝ』

昔の人の眺めし影と 思へば親し夜半の月

見ればなつかし空の月。』 (以下省略)

「國民唱歌集」小山作之助編。

さくら、あめつち、大皇國、その水上、やさかの玉、外數十曲。

「新撰樂曲大要」石原重雄著、二十九年版の改訂版。

「風琴修復及取扱法」白井胡短郎著。

創作曲（音楽雑誌所載）

「孝明天皇祭歌」本居豊頼作曲、山井基萬作曲。

「同三十年祭遙拜式歌」福羽美静作曲、小山作之助作曲。

「歌劇的遊戯」（脚本）永井建子作、

オペラをそのままは無理なればと創作したもので櫻井驛の、正行、正成は、獨唱、（最初序樂を奏するをよしとす
而して合唱よりはじまる。）

「砧」粟本清夫作曲、芝間隠子作曲、

京の四秀、高村新調、歌は西洋譜、三味線は伴奏譜に。

「音楽適用遊戯の技折」大村芳樹編改正増補である。

「日本男兒」東郊作曲、瀧康太郎作曲、

日本男兒そは何ぞ 日本男兒そはたれぞ

大砲小砲何かある 硝煙彈雨も何かある

息の根たゆる笛の音は 消えても消えず君が名は。

（喇叭卒を歌へるもの）

「養老」梁塵亨作曲、石野巍作曲。

「英照皇太后奉悼歌」（附御傳記並哀の極）共益社發行、福羽美静校閲。

「孝明天皇祭歌及遙拜式唱歌」文部省にては一月三十日孝明天皇祭の儀式に用ふべき歌曲を揀定し、既に之れを發布せられたが之れが 作歌は本居豊頤にして作曲は山井基萬、又同日執行遙拜式に用ふべき唱歌の作歌は皇考 孝明天皇三十年祭遙拜式奉行會長福羽美靜にして、作曲は小山作之助である。

「送卒業生赴任の歌」三輪義方作歌、奥好義作曲。

「芳野櫻」土屋重正作歌、吉田恒三作曲。

「汐干狩」撫年女作歌、山本靜野作曲。

「招魂社」近森出來治作。

「鳩」石井しげ子作。

「散步」瀧廉太郎作曲、中村秋香作歌。

ほのぼのと あけゆく空の朝風に

たもとかへして 枝たつさへて

そこともいはず こゝかしこ

あなこゝちよや。

「勅語奉答の歌」中村秋香作歌、伊澤修二作曲。

あなたふとしな大詔……………

皇太后陛下の崩御を悼み奉る歌 「ときはなる」 黒川真頼作歌、上眞行作曲、二月音楽學校出版。

「戦死者を弔ふ歌」大和田建樹作歌編、納所辨次郎作曲、十一月發行。

「奉悼歌謹上」至仁至慈にましませし 皇太后陛下の崩御につきては、我同胞四千萬衆、悲痛措く能はず、そが哀意は種々のものによりて表はるゝが中に、音楽學校職員一同は、奉悼歌に曲譜を添えて、謹上せる由、冀くは全國の諸學校も其謄本を得て、祭日毎に職員生徒打そろひ、最も慎嚴に之を合唱して追慕の誠意を表したきものである。(音楽雑誌)

明治三十一年 音楽出版圖書、

「若越郷土唱歌」吉田恒三著、七月發行。

「學校唱歌」明治音楽會編、八月發行。

「小學校用讀本唱歌」稻岡美賀雄編、十二月發行。

「琴」(伴奏付)、林蕨臣作歌、上眞行作曲。

「都の春」鍋島直大作歌、山勢松韻、小山作之助作曲。

高尚なる好唱歌集である。

「京都市歌」(愛郷歌)、市歌の嚆矢である、黒川眞頼作歌、上眞行作曲。(第五十一章参照)

明治三十二年 音楽圖書出版、

「小學歴史直歌」安田俊高編、二月發行。

「新選小學唱歌」萩原太郎著、十一月發行。

「唱歌華錦」奥好義著、十二月發行。

「オルガン教則本」一、島崎赤太郎著、十二月發行。

「ヴイオリン初歩」多梅稚著。

「新編帝國唱歌」渡邊弘人編。

「小學唱歌集用オルガン、ピアノ樂譜」東京音樂學校藏版。

元教師デットリヒの小學唱歌集の歌曲に和聲を附したものを編纂したもので、第一は唱歌伴奏の用に供し、第二はオルガン、ピアノ練習用に供するもの。

明治三十三年 音樂出版圖書。

「祝日大祭日唱歌重音譜」東京音樂學校藏版、二月發行。

「幼年唱歌」第十集迄、納所辨次郎、田村虎藏共編、六月發行。

「重音唱歌集」小山作之助著、八月發行。

「女學唱歌」上下、山田源一郎著八月發行。

「四季」瀧廉太郎著、八月發行。

彼が獨逸留學前の作で、今尙世人に誦はるゝ明治時代の傑作ともいふべきもの。

「地理教育世界唱歌」著者不詳。

「123唱歌集」全、入江好次郎著、十月發行。

「初等教育英語唱歌」石原重雄著、十一月發行。

「修正小學讀本唱歌」目賀田萬世吉編、十一月發行。

「新撰小學唱歌教法」石原重雄著、十一月發行。

「新編、帝國唱歌」渡邊弘人編、二月十三日修正發行。

「オルガン教則本」二、島崎赤太郎著、八月發行。

「東宮殿下御慶事奉祝の歌」音楽校編、四月發行。

やへがき、くる みそのふの かすみにあさる

「南朝忠臣の歌」落合直文作歌及訂正、山田正雄作曲。

青葉しけれる櫻井の 里のわたりの夕まぐれ

木の下かけに駒とめて 世の行末をつくくと

忍ぶ鎧の袖の上に 散るは涙かはた露か。

「ミエヌエツト」湖廉太郎作曲、十月一日作。

「地理教育鐵道唱歌」第一集より第四集まで。九月發行。

全國を風靡した歌曲として、特筆大書すべきである。この歌は、最初は無名作歌のものであつたが、西野虎吉が大阪開城館に居た時に買収して、大和田建樹の補作を經、多梅稚の作曲で出版したものである。

それと同時に西野自身は此の歌曲を樂隊に演奏せしめて、東海道五十三次を宣傳して來たのであるが、遂に沿道の青少年を盡くこれに随はしめたといふことである。

この歌曲は作曲上から見ても新味があつて、この曲によつて當時青少年の俗謡試唱の傾向から救済したとまで言はれてゐる名唱歌である。只其原曲はと遡つて調べて見ると、八分と十六分音符の結合のみでピョンピ、コくして居て歌ひにくいものであるが、それが不知不識の間に歌ひ易く修正され歌はれてゐるのである。

鐵道唱歌

月梅雅作曲



東海道第一集

汽笛一聲新橋を

はや我が汽車は離れたり

愛宕の山に入り残る

月を旅路の友としても

二

右は高輪泉岳寺

四十七士の墓どころ

雪は消えても消え残る

名は千載の後までも

三

窓より近く品川の

台場も見えて波白く

海のあなたにうすかすむ

山は上總か房州か

四

梅に名をえし大森を
すぐれば早も川崎の

大師河原は程ちかし
急げや電氣の道すぐに

五

鶴見神奈川あとにして
行けば横濱ステーション

港を見れば百船の
煙は空をこがすまで

六

横須賀行は乗換と
呼ばれておりる大船の

つぎは鎌倉鶴が岡
源氏の古跡や尋ね見ん。(以下省略)

この洗練された旋律の美的價值に於ては優秀作品とも言へよう。津々浦々に至る迄も論はれ今も猶、かなりの若々しさを以て我々に對して居る處は決して偶然な事ではなく、作者が微細な點に對する注意の生んだ賜である。近年新に鐵道唱歌が出来ても新味なく、従來のものに優る處を認められないのが遺憾である。

明治三十四年 音楽出版圖書、

「中學唱歌」全、東京音楽學校藏版、三月發行。

「日本遊戯唱歌」七冊、鈴木米次郎編、三月發行。

「新定唱歌」三、中村林松、南堂知足共編、四月發行。

「新選國民唱歌」五、小山作之助編、七月發行。

「教科統合新體唱歌」二、米野鹿之助、小林貞吉共編、七月發行。

「幼稚園唱歌」共益商社編輯、七月發行。

「尋常國語讀本唱歌」小山作之助編、八月發行。

「高等國語讀本唱歌」小山作之助編、八月發行。

「尙武軍歌」第五集迄、東京尙武會編、八月發行。

「中等單音唱歌」益山謙吾編、九月發行。

「讀本唱歌」第五集迄、富山房編輯部編、十一月發行。

創作歌曲、

第一高等學校西寮々歌「春爛熳」三十九年帝大政治科出身矢野勘治作在學中の歌、

春爛熳の花の色

紫匂ふ雲間より

紅深き旭影

長閑き光さしそへば

鳥は囀り蝶は舞じ

散り來る花に光りあり

明治三十五年音楽出版圖書、

「新編中等唱歌集」第三卷迄、鈴木米次郎、野村成仁共著、一月發行。

「女子唱歌集」吉田信太編、五月發行。

「高等小學帝國唱歌」二、大和田建樹編、七月發行。

「新調韻文青年唱歌集」二、山田美妙齋編。

「樂典教科書」入江好治郎著、六月發行。

「名媛唱歌」樂友社編。

神宮皇后、辨内侍、大政所、松下禰尼、賀々千代、靜御前、紫式部、山内一豐妻、春日局、淺岡局、清少納言、小督局、女學生、

「唱歌大海原」雄島清太郎作歌、金須嘉之進作曲、

多年露國に其技能を修練した彼は、軍歌調を帯びないもので其雄大麗美なる旋律を有するもの。

「公德唱歌」二、澁谷愛作歌、作曲者數名。

「唱歌適用遊戯法」横地捨次編、

「童話唱歌」全三、池邊藤園作歌、山田、納所、田村作曲。

一編 鳥と狐 蟻と蟬

山田源一郎作曲

二編 桃太郎

田村 虎藏作曲

三編 狼と犬

納所辨次郎作曲

「女訓唱歌」乙川鯛助作歌、兒童遊戯研究會撰曲。

「勤學唱歌」青木久次郎作曲。

「唱歌教科書」四卷、教師用、兒童用、共益商社樂器店編、五月發行。

「方舞」吉田信太編。

本書に女子高師其他の學校に於て實施せらるゝ舞踏の方法及樂譜を記載せしもので、随分永い間使用された本で

ある。他に類例の書なく現在に至るまで版を重ねてゐる。

「幼稚園唱歌遊戲法」山田春耕編。

「國歌集」上下、條約締盟國の國歌を自國語にて、音楽書院編、八月發行。

「新式樂典教科書」近藤出來治著。

「淑徳唱歌」第一集、渡邊勉作歌、河合邦子作曲。

「歴史唱歌天孫降臨」大和田建樹歌、小山作之助作曲。

「唱歌界」第一編、春夏秋冬、大和田建樹歌、田村虎藏作曲。

「唱歌界」第二編、雪の嵐、大和田建樹歌、芙蓉館曲。

「地理教材風景唱歌」大和田建樹歌、山田源一郎作曲。

創作歌曲。

「南菱文庫の開庫の祝歌」これは開庫式に鳥居忱作歌に多梅稚作曲のものである。この曲は、後に英國劍橋大學在學中音楽を研究して居られた徳川頼貞が多少の旋律を改めて伴奏を附して更に發表されたもの。(歌曲省略)

「青森八甲田山雪中行軍の歌」大和田建樹作歌。

「一高東寮々歌」……嗚呼玉杯に花うけて……。

明治三十六年 音楽出版圖書。

「國民教育新撰唱歌」全、田村虎藏著、一月發行。

「少年唱歌」八、納所辨次郎、田村虎藏共編、四月發行。

- 「オルガン使用法及修理法」山根硯州著。
- 「師範教育音楽教科書」共益商社樂器店編、五月發行。
- 「中學唱歌教科書」共益商社樂器店編、六月發行。
- 「高等女學音樂教科書」共益商社樂器店編、七月發行。
- 「言文一致唱歌」言文一致會編、七月發行。
- 「輪唱複音唱歌集」鈴木米次郎、野村威仁共編、七月發行。
- 「育兒唱歌」四、渡邊森藏編、八月發行。
- 「音樂と詩歌」塊人アムプロス著。
- 「輪唱歌集」小山作之助編、八月發行。
- 「中等唱歌集」楠美恩三郎編、八月發行。
- 「山田唱歌集」山田源一郎編、十月發行。
- 「英語唱歌愛吟集」英語世界社發行。
- 正略譜付、目次 ホーム、三人の漁夫、英米國歌、ポートの歌等。
- 「國民唱歌海國男兒」研究生高折周一作曲、音樂の友社、野村兎兒作歌。
- 「歴史唱歌扇の的」一、音樂學校講師旗野十一郎作歌、同前田久八作曲、三月發行。
- 「小式部内侍」一、山田源一郎作曲、俗樂調。
- 「音樂遊戲界」一卷一號、二月、神田共究會發行。

「大阪市歌」、一柳芳風作歌、小山作之助作曲。

此年一月六日大阪ホテルに於て市歌の披露式を擧げた。歌詞は大阪朝日新聞社の歴賞募集に當選のものである。曲は卜調四拍子譜は省略。

「懺」瀧藤太郎作曲、三十六年二月十四日作。

明治三十七年 音楽出版圖書、(軍歌は別項に)

「教科統合新體唱歌」第一、二集、米野鹿之助著、第一集は同文館より、第二集は寶文館より發行。

「滿洲唱歌」大和田建樹作歌、田村虎藏作曲。

「西伯利亞鐵道軍歌」丸山正彦歌、天谷秀作曲、四月發行。

「マンドリン教科書」比留間賢八編。

「教科統合少年唱歌」五編、納所辨次郎、田村虎藏共編。

「輪唱歌集」小山作之助編、五月發行。

二部、三部、四部の輪唱的歌曲を集めたもの「螢も雪も」、「海原」、「朝日櫻」、「惜時」、「春は來ぬ」。

「九九唱歌」井上鍊作歌、酒井勝軍作曲、五月十字屋發行。

「進行曲粹」第一集、開成館音楽課編纂、十一月發行。

「須磨の曲」叙事唱歌第一編、北村秀晴作、十月發行。

「離れ小島」同、第二編、同、

「露營の夢」同、第三編、同、

「新春歌曲類纂」本譜略譜付、一月發行。

入船 前田久八、春風 石原重雄、學草 岡野貞一、百合花 齊藤左右田、待梅 田村虎藏、飼犬 天谷秀、

風船 高折周一、才媛 澤田孝一、

「興國新唱歌」第一、二、三、四集、微笑軒書房編、一月發行。

「新式日本唱歌」酒井勝軍編、二月發行。

「音樂遊戲教材」第二編、ボルカ圓舞、鈴木米次郎編、三月發行。

「小學校唱歌教授法」新清次郎編、三月發行。

「地久節」山登萬和作歌、北村秀晴作曲。

「新教育唱歌」小出雷吉編、三月發行。

「尋常小學讀本唱歌」二、中田書店編輯部編、四月發行。

「國定小學讀本唱歌集」七冊、內田象太郎、楠美恩三郎、岡野貞一共編、五月發行。

「小學校唱歌教材集」高折周一編曲、八月發行。

「國定小學讀本唱歌」八、田村虎藏編、七月發行。

「日新唱歌」女子用、大和田建樹編、十二月發行。

「歐米各國舞蹈大觀」長原政二郎編。

「樂典大意」音樂全書第一編、鈴木米次郎著。

「音樂全書」第一編樂典大意、中島萬吉發行。

「音樂管見」大日本音樂會編。

「中等教育教科用樂典」高井德藏著。

「新編音樂問答」北條靜著。

「唱歌法大要」青木兒著。

「訂正重音唱歌集」第一、二、小山作之助編。

「樂典教科書」入江好治郎著、三月發行。

「音樂遊戲教材第一編繩跳運動」鈴木米次郎編。

「中等教科唱歌集」楠美恩村郎編、三月發行。

「學童唱歌」第一集、同文館發行。

「音樂講義錄」二十九年完結、大日本音樂教師協會編。

音 響 學

海軍大學校教授理學士

木 村 駿 吉

樂 歌 學

東京音樂學校教授文學士

武 島 又 次 郎

審 美 學

東京音樂學校教授文學士

富 尾 木 知 佳

樂器修繕調律法

オルガンピアノ製造所所長米國音樂得業士

松 本 新 吉

教 育 學

東京音樂學校講師

中 島 半 次 郎

樂式一斑和聲學作曲法

東京音樂學校講師

ノ エ ル ・ ペ リ

樂 典

東京音樂學校講師

岡 野 貞 一

唱歌教授法

東京音樂學校助教

內田 条太郎

西洋音樂史、日本音樂史

東京音樂學校教授兼東京高等師範學校教授囑托

上原 六四郎

音樂遊戲法

東京高等師範學校教授兼東京音樂學校教授

鈴木 米次郎

風琴使用構造法

東京音樂學校助教

天 谷 秀

唱歌教練

東京音樂學校教授

多 梅 稚

教材撰擇

東京音樂學校講師

齋 藤 左右田

東京音樂學校講師

岡 野 貞 一

東京音樂學校講師

石 野 魏

東京音樂學校講師

野 村 成 仁

東京音樂學校教授

小 山 作之助

東京音樂學校教授

山 田 源 一 郎

東京音樂學校教授

鳥 居 忱

東京音樂學校助教

楠 美 恩 三 郎

東京府第三中學校音樂教諭

石 原 重 雄

福井縣師範學校音樂教諭

益 山 謙 吾

東京音樂學校講師

前 田 久 八

東京音樂學校講師

高 折 周 一

誌上俱樂部擔任講師

作曲講師

會 長

侯 爵 大炊御門 幾 廣

評 議 員

上原六四郎 島 居 忱 小山作之助 山田源一郎
多 梅 稚 内田条太郎 楠美恩三郎 上 眞 行

「音樂新報」第一卷一號、音樂新報社二月十一日發行。

山田源一郎、酒井勝軍の編輯になるもので、明治四十一年に至つて「音樂界」と改つたものである。

創作曲。

「戰勝行進曲」ドヅラウキツチの新作で三十七年の十一月明治音樂會の演奏會にて發表されたものである。

豪壯な曲といふよりは輕快なといふ風で、當時雜誌評を摘記すれば飛瀑千仞といふ風はないが、溪流切々の趣きはある。欣然として春郊に戯るゝ少女の如き、第一旋律が漸く幽かにして歩武整々終日遠足を喜べるが如き、第二旋律が漸く明かに、面白く聞えて來る。やがてミツドル、ムーブメントに入つてホルネットの華やかな旋律が絃樂を抜けて酔はしめるやうに快く響く云々。(音樂の友)

明治三十八年 音樂出版圖書、

「君が代」林廣守作曲、ノエル・ペリー和聲。

「オルガン、ピアノ練習書」ノエル・ペリー編。

「西洋音樂史」石倉小三郎著、百科全書第一三六編。

「唱歌遊戯教授書」(國定教科書尋常科、吉田信太、原藤藏共著。

「地理唱歌」高須作歌、小山本元子作曲。

「初等オルガン教科書」天谷秀、多梅雅共著、君が代や儀式唱歌等もある。

「進行曲粹」第二集、開成館音楽課編、十二月發行。

「初等樂典教科書」山田源一郎、多梅雅共著。

「高等小學讀本唱歌」四、中田書店編輯部編、四月發行。

「學校家庭言文一致叙事唱歌」六、眞下飛泉、三善和氣共著、七月發行。

「尋常小學修身唱歌」吉田信太著、八月發行。

「皇民唱歌集」渡邊森藏編、十月發行。

「尋常小學唱歌」十二、佐々木吉三郎、納所辨次郎、田村虎藏共編、十月發行。

「唱歌美はしき天然」田中穂瑞作曲、十月出版。

作者は海軍々樂長で、日露の役に出征し、凱旋と共に故人になつた人である。美はしき天然の作曲は日露戰爭前のもので、其後久しく世に出なかつたものであつたが、故人の遺稿中から選用したもので、音楽社編輯部でアレンジして音楽新樂譜に掲載したものが抑のはじめである。

軍歌調、倦いた、青年子女に大いに歡迎され、全國的に永く歌はれた六拍子の歌謡流行のさきがけであつた。これが、俗謡間に入つて明治四十年頃「野口男三郎の歌」となり、つゞいて「海老茶式部墮落の果」など々名打つて謡はれ、遂に姿を消して了つたが流行唱歌としては上品な歌曲であつた。大正に入つて澤田柳吉に依つてヴァイオリン曲に編曲され、「荒城の月」等と共に日本代表的歌曲の仲間入して外人演奏家によつて演出されるに至つた。

明治三十九年 音楽出版圖書

- 〔新編教育唱歌集〕開成館編、四月發行。
- 〔デューエツト、トリオ唱歌集〕伴奏付、楠美恩三郎編、五月發行。
- 〔女子日新唱歌〕大和田建樹編、八月發行。
- 〔佛教唱歌集〕初編、佛教音樂會編、八月發行。
- 〔日本唱歌集〕樂書刊行協會編、九月發行。
- 〔高等小學唱歌〕八、大橋銅造、納所辨次郎、田村虎藏共編、十一月發行。
- 〔小學唱歌集評釋〕旗野十一郎編。
- 〔コールユーブンゲン〕音樂新報社（筆記代用）七月發行。
- 〔歌曲題目全集〕宮澤甚三郎編。
- 〔音樂と其趣味〕山崎恒吉編著。
- 〔教育と音樂〕酒井勝軍著。
- 〔西洋音樂茶内〕一名通俗樂理一斑、田邊尙雄著。
- 〔常闇〕坪内雄藏作歌、東儀季治作曲。
- 〔普通樂譜法〕樂書刊行協會編。
- 〔小學唱歌新教授法〕天谷秀著。
- 附、外國音樂書、
- 明治三十七年六月號「音樂の友」の樂藻欄に外國音樂書第一回の新着。（東京樂友社）

Franklin's Song Correction. 1-8.....	九圓
Tuff's Normal Music Course	(五圓)
Ma on's Memorials of Musical Life.....	(五圓)
Dabney's Musical Basis of Verse	三圓七十五錢
Mees's Choirs and Choral Music	(二圓七十五錢)
Krabbiel's How to Listen Music	二圓七十五錢
Leland's Song of the Sea and Lays of the Land.....	(一圓七十五錢)
Grey's Studies in Music	(五圓)
Naumann's History of Music. 2 Vol.....	(九圓)
Levernoe's Academy of Song Book	(二圓二十五錢)
1. Hart's The Violin and Its Music	(六圓)
1. Phipson's Voice and Violin.....	(二圓五十錢)
1. „ Famous Violinists and Fine Violins	(二圓五十錢)
1. Penrice's The Musician.....	(二圓五十錢)

明治三十八年五月には次の書籍の新着案内が出てゐる。(京都十字屋楽器店)

ホーヤンヴァイオリン教科書	全五冊	一冊	金 六 拾 錢
ホルヤンソロコース (ヴァイオリン)			金 六 拾 錢

	ヘオペラチツクメロデー (同)	金六拾五錢
	同進行曲、舞踏集 (同)	金七拾五錢
	同メロデー (ピアノ及ヴァイオリン)	金七拾五錢
	同オペラチツクメロデー (同)	金七拾五錢
	同進行曲、舞踏 (同)	金七拾五錢
	ボーゲル進行曲 (ピアノ曲)	金六拾錢
	ルサールト青年進行曲 (ピアノ曲)	金六拾錢
	コーラルピアノ教則本	金 壹 圓
	ラインハート風琴教則本	金貳圓二拾五錢
	ハーモニウムアルバム (風琴用曲譜)	
第一篇	スタフ	金六拾五錢
第二篇	同	金六拾五錢
第三篇	同	金六拾五錢
第四篇	同	金六拾五錢
第五篇	メンデルゾーン	金六拾五錢
第六篇	ペードーヴニン	金六拾五錢
第七篇	シユーベルト	金六拾五錢

第八篇 モツアルト

金六拾五錢

第九篇 バツハ

金六拾五錢

第十篇 同

金六拾五錢

ウインナーパンジョー教則本

金壹圓貳拾五錢

同 手風琴 同

金壹圓貳拾五錢

ウインナーフリユート 教則本

金壹圓貳拾五錢

東京と京都のとは比較にはならないが、當時の音楽の傾向が見える。横濱のドーリング商會等は、明治三十年代に、音楽の洋書を販賣して居た唯一のものであつた。

第四十一章 東京音楽學校

歐化主義全盛時代の反動として起つたのは國粹保存の強調である。國家主義を陣頭に振りかざして先づ基督教主義を打破し、次で歐洲音楽に對しても壓迫を加へ隆盛の途上にあつた西洋音楽の發展を一時阻止するに至つた。

明治二十六年六月より東京音楽學校は高等師範學校に附屬せしめらるゝ事となり、同月教授上原六四郎主事を命ぜられ、校長嘉納治五郎の下に同校の事務に當つた。形式上獨立の地位を失つても、内容上には何等の變動が無かつたのであるが、當時の社會は同校に對する注目が激しかつた。明治二十七年四月の新聞に「音楽學校の四不思議」と題して左の記事が掲載せられた。「火の無い處から煙は立たぬ」と見てあやまらの無い處と見て差支無いものと思ふ。

一、表向きの改革即ち職員は官のみを免じて矢張り元と同然。

二、機關には「音樂雜誌」ありて保護を與へ且つ其社長といふのは名のみにて、實際は書記をして居る。

三、時々艶聞の泄れるにも關らずして相變らず盛んに妙齡の男女を同室に教授する。

四、職員が多き故、夫程用事がなく、書記及或る教員の如きは、一週間に唯一日位の出勤、夫れも煙草をスバくし

てゐるのみ。(四三號萬朝報)

以上であるが、裏面に或る陰影を想像させられるのである。

明治二十六年三月、科目の増加と共に授業時間を増加する必要にせまられ、規則の改正が行はれた。同六月には同校生徒の病氣休學の規程が設けられ、六月二十九日には、高等師範學校の附屬音樂學校となつた。獨立以來僅に七年にしてこの態は實に情けないことである。

此年米國シカゴに世界博覽會が開催され、同校からは樂器及音樂圖書を出陳した。(同樂器類は總て同校に保管されて居る)

七月、十名の卒業生を出した。頼母木こま、島崎赤太郎、北村季晴、石原重雄等の級で島崎赤太郎は八月同校補助に命ぜられた。爾來三十有九年の間の教授生活が如何に同校の基礎を確立せしめたかと窺はれる。

明治二十七年一月、頼母木こま同校助教となる。四月と六月に外人音樂教師チツトリヒの送別演奏會を同校に於いて開いた。六月同校の規則改正追加して毎年一回の入學期を改めて臨時入學をも許すこととなつた。又入學試験科目を改め、且其の程度を明示した。讀書(國語漢文講讀)作文(往復文、記事文)算術(四則分數小數、比例、開平開立)、英語譯讀(ナショナル第四讀本程度)及唱歌(文部省小學唱歌集の五科目である。又小學唱歌講習科を新設し

て、本科最修學年の生徒をして之に就き實地教授を爲さしめた。(此の科は三十三年以後は乙種師範科として繼續せられたのであるが、昭和に入つて入學志願者を受付けず、中止して居る。)

七月、卒業生六名が巢立した。ヂットリヒの黨陶を過分に受けた卒業生であるに不拘、將來に名を爲したものは尠かつた。七月二十一日には、ヂットリヒが歸國の途についた。富士見軒に於ける、三十有餘の送別會に饒別として四陣織物二巻を贈り、又四童音楽雜誌社長は「大和土産」なる一冊を英文に譯して贈られた。

上眞行、神津專三郎の二教授は退職し、十月、エミリー・ソフィヤ・バットン並、アダー・ビートリース・プロツクサムの兩女が傭教師として採用された。

明治二十八年三月、音楽學校教授に對して第八回尋常師範學校、尋常中學校、高等女學校教員(音楽科)檢定委員の任命があつた。

同年四月と七月に十六名の卒業生を送つた。初等教育界から東の田村、西の吉田と譏はれた東京、廣島兩高等師範の教授、田村虎藏、吉田信太が此の年の出身である。

十二月には幸田延子が歸朝した。明治二十二年四月以來、渡歐ウキンナの音楽學校に勉學して同校卒業後、歐米漫遊の途に上り英、伊、獨、米の諸國を歴観してかへつたのである。此の年は日清戦争の終結を告げた時で「大元帥陛下奉迎の歌」「戦死者を弔ふ歌」「凱旋の歌」が同校から出版された。

明治二十九年三月、同校教授に對して第九回の音楽科教員檢定委員の任命があり、七月には二十名の卒業生を出してゐる。安藤幸子、永井幸次等の級で、此當時既に安藤幸子の右に出づるものがなかつたのである。

永井幸次は卒業後關西に其の名を爲し、作曲家として、果たまた、私立音楽學校長として其の名を顯して居る。同

年三月規則を改正し、聲樂器樂・教育學の學年成績評點は他の學科に比し其率を高め、又師範部卒業生は唱歌教授法の研究生たる事を得せしめた。五月、職員の定員の改正も行はれた。

明治三十年二月、音樂學校助教山田源一郎外三名は東宮殿下（大正天皇御青年時代）の御前演奏の榮を賜はつた。それは沼津御用邸に御遊幸中の 春宮殿下の御召により、日清戰爭の幻燈を御覽に供し奉り、同時に山田源一郎作の大捷軍歌を合唱し或はヴァイオリン、フルート・オルガン、ヴォーカルにて數回演奏せられたのである。光榮を擔ふた彼の四人は感激措く能はざる處であつた。

音樂學校助教 山田源一郎 學習院助教 納所辨次郎

高等師範學校教授 鈴木米次郎 式部職伶人 奥 好 義

四月、小學唱歌講習科を改正して小學校教員に限らず、廣く志望者の入學を許すこととした。本年度卒業生は十七名で、橋本正作が卒業演奏にピアノ獨奏をしてゐる。其他器樂の獨奏は無かつた。

五月、同校學友會臨時音樂會に於て、新進の幸田延子は自作の「ソナタ」を發表した。本邦人の和聲的器樂曲の創作として當時實に珍らしいものであり特筆すべき價值あるものであつた。

此の年初代の外人音樂教師メーソンに對して勳四等の叙勳の恩命があつた。

明治三十一年二月、東儀季治、菊間義清、坂部行三郎等は「音樂の不振は時勢の罪ではない」との主旨のもとに、音樂學校並式部職の樂部、陸海軍々樂隊の有力者の會合を催し、和應會と名命して、音樂の作興を促したものである。日清役後、明治樂衰退して邦樂が勢を得、歐洲音樂の不振の情態にあつたことが窺はれる。

同月、同校教官が京都、大阪、兵庫縣下の唱歌科の實況視察等があつた。

本年度の卒業生は僅に七名に過ぎなかつたが、秀才の聞え高かつた、瀧廉太郎が出てゐる。

四月、教授上原六郎主事を免ぜられ、教授理學博士矢田部良吉が主事を命ぜられた。五月には神田區一橋通高等師範學校附屬地に分教場を設置して、選科の一部及小學唱歌講習科を此處へ移すことになつた。これは現在の神田區鈴木町にある分教場の前身で、神田一橋通のは大正十二年の大震災で焼失したのである。

同月、帝大哲學科教授ラファエル・フォン・ケーベル博士をピアノ教師として招聘した。明治四十三年三月迄約十二年間ピアノ演奏術の開拓に貢献されたことが甚大である。

ラファエル・フォン・ケーベル博士略歴

ピアノ教師ケーベル博士は、明治二十六年（一八九三年）ハルトマンの推薦で東京帝國大學に於ける哲學の教授として招聘された人である。樂才に長じ、千八百六十七年、父の意志に反して、露都（モスコ）の高等音樂學校 *Konservatorium* に入り、ニコライ・ルービンシュタインや、チャイコフスキー、クリンドウルトに師事した。千八百七十二年同校を卒業して後は、志望を學者に轉じ、獨逸大學に於て哲學を専攻し、千八百八十一年にシヨペンハウアーに關する論文によつて學位を得、その一小部分（人間の自由に關するシエリングの説を論じたもの）を論じて博士となり、エー・フォン・ハルトマンと交通する様になつた。

爾來、各地の音樂學校等に於てピアノと和聲學の教授を受持、又音樂史や音樂美學を講じた。

來朝當時は屢々ニコライ堂の禮拜に行き、聖樂合唱等に對して批評を試られて居つたが、明治三十一年五月から四十二年九月迄上野音樂學校の講師としてピアノを見て居た。橋本重教授などが二十九年頃から個人指導をうけた人でケーベル博士の高弟である。

六月、矢田部主事は高等師範學校長に任ぜられ、教授渡邊龍聖が代つて主事となる。七月選科の規程を改正し、學に堪ふる者は隨時入學せしめ、所選の科目を修了したる者には卒業證書を授與することにした。十月、同校生の授業成績を公表する爲に音楽演奏會を舉行する事になり、第一回演奏會を十二月に開催した。爾來引續き現在に至つてゐるのであるが、明治四十三年春秋二季の演奏會となるまでは年一回の催であつた。

明治三十二年四月四日、高等師範附屬音樂學校であつたものが、獨立して再び東京音樂學校と改稱した。同月渡邊主事は校長心得を命ぜられ、其後間もなく同校長に任ぜられた。

此月の二十一日には、皇后陛下（照憲皇太后）の行啓を仰ぎ、職員生徒一同晴れの光榮に浴した。就中ケーベル博士、ユンケル教師（此月音樂教師として獨逸より赴任の提琴家にして、名指揮者である。第五十五章略歴参照）の御前演奏は立派なものであつた。

七月の卒業生は僅に六名で神戸絢子等の級である。これより先四月には山田源一郎並頼母木こま子教授に昇進し、七月には田村虎藏、九月には瀧廉太郎、十二月には吉田信太等助教授として就任した。又十一月には外人教師ノエル・ペリーが着任して、愈々教師の勢揃ひが出来て、三十三年の新春を迎へたのである。

明治三十三年一月、外人音樂教師アンナ・ラル招備、三月職員の設定改正せられ、教授六人、助教授八人、書記四人となり、次で九月には規則の大改正が行はれて、其の結果、新に豫科（修業年限一ケ年）本科（三ケ年）研究科（二ケ年）師範科及選科を設置し、本科を分つて聲樂部、器樂部、及樂歌部とし、師範科を分つて甲種（中等學校教員に適切なる學科を授け修業年限二ケ年と二學期）乙種（小學校教員に適切なる學科を授け修業年限一ケ年）とする事になつた。豫科の學科目は倫理、唱歌、ピアノ、樂典、寫譜、國語、英語、體操、方舞とし、課外に漢文を置いた。本科

聲樂部は倫理、獨唱歌、諸重音唱歌、ピアノ又はオルガン、和聲學、樂典、音樂史、音樂學、樂式一班、審美學、歌文、外國語、體操、方舞、本科器樂部は、倫理、器樂、諸重音唱歌、和聲學、樂典、音樂史、音樂學、樂式一班、審美學、歌文、外國語、體操、方舞。本科樂歌部は、倫理、歌文、支那詩文、西洋詩文、歷史、重音唱歌、ピアノ又はオルガン、和聲學、樂典、樂式一班、音樂史、音樂學、審美學、外國語、體操、方舞。尙隨意科として教育學、教授法を講し、課外學科として生理學、心理學、樂器構造法及調律法を置いた。甲種師範科は倫理、唱歌、オルガン、又はピアノ、樂理、和聲學、音樂史、詩歌評釋、教育學、教授法、英語、體操、遊戲及び諸禮。乙種師範科は、倫理、唱歌、オルガン、樂理、唱歌解釋、唱歌教授法、體操遊戲及諸禮。以上、

七月、四名の卒業式を挙げた。この卒業生の中に、歐樂的長唄調法とかいふ日本長唄を洋琴等で彈奏して歩いた高折周一などが居た。

九月、瀧廉太郎官命を受け獨逸留學に放立つた。彼は、留學中肺を病みて翌年中途歸朝、三十六年六月二十九日二十五歳で病死した。實に秀才であり音樂學校男卒業生の最初の留學生として大なる期待を受けた丈に、その死は惜しまれた。作曲に、「中等唱歌」の「箱根山」、「豊太郎」、「荒城の月」、「四季」等の如く世人に傳唱せらるゝもの多く、遺曲にも猶世に出でざるものが多い。(第四十圖參照)

明治三十四年三月、職員の定員を改正せられ、八人の助教教授は九人に増加せられた。六月四日 皇后陛下（昭憲皇太后）の行啓を仰ぎ、重ねて御前演奏の光榮に浴した。ヴァイオリンの幸田延子、ピアノの橋本真、オルガンの島崎赤太郎等の合奏、専修部三年の女聲四重唱等が珍らしいものであつた。

七月の卒業生は十一名、専修科四名師範科七名で、音樂の友社々長の岩本捷治等の出身年である。九月には「汽笛



况 磯

広瀬隆太郎 作曲 進藤

A musical score for the song 'Ise no Kiwa'. It consists of three systems of staves. The top system has a vocal line with lyrics and a piano accompaniment. The second system continues the vocal and piano parts. The third system shows the final part of the piece. The lyrics are: あらその香にくだりし月かげを / ひとつになしてかへる旅かな

あらその香にくだりし月かげを
ひとつになしてかへる旅かな

一聲」の鐵道唱歌で有名な多梅稚が同校に赴任した。

前年十一月、生徒心得細則を規定し、本年度師範科入學者の年齢を變更し、これ迄「二十五歳未満の者」と定められてゐたのを「十七歳以上の者」と改めた。

明治三十五年一月、ハイドリヒ同校外人教師として獨逸より招聘せられた。彼はベルリン音楽學校卒業生で、東京獨逸公使の推選にかゝるものである。三月、職員の定員の改正行はれ、前年に比し教授一名、助教二名の増加を見るに至つた。又同月、島崎赤太郎音楽研究のため獨逸留學を命ぜられこの月に出發した。四月には、甲種師範科に一學年三十名に限り官費生徒を置くことになつた。

五月、同校春季演奏會が、文相菊地大麓の主催といふ異例の催で、招待者等も文相關係者のみに配布したといふ關係で、新聞等で批難された。時の校長渡邊龍聖に其の責任がかゝり、社會問題となつて、可成苛酷に打たれた。所謂職權濫用して官紀を亂したものであると、又從來の慣習を破り生徒の父兄又は演奏者の父兄に對して入場を斷つたといふのであつた。(中央新聞)が官僚味たつぶり時代の事故、難なく收まつた。菊地文相は、伊澤修二等と共に音楽學校創立に努められた士で、我が音楽の貢獻者の一人として、錚々たるものである。

五月六日、前年に引續いて 皇后陛下(昭憲皇太后)の行啓を仰出された。當時の御模様を摘記すれば

午後一時御出門高倉典侍御陪乘、香川大夫、山内亮、津守權掌侍、吉田權掌侍、三上命婦、岩佐侍醫等の供奉にて上野公園内東京音楽學校へ行啓あらせられ同四十分御着菊地文相大臣渡邊校長を始め以下教員一同玄關に生徒は門内兩側に整列して奉迎申した 陛下には渡邊校長の御先導にて便殿に入らせられ暫時御休憩の上文相大臣以下高官に拜謁を賜ひ夫れより奏樂室に臨御敷曲を聞召され同四時頃還啓仰出された。當日の奏樂曲目一二部合して十二

曲にして殊に等曲新晒は今井慶松の創作和洋折衷の變化多き面白き曲にて殊の外御意に召されしとかもれ承る。(プログラム第四十四章参照)。

九月、校長渡邊龍聖は清國政府の招聘に應じて、直隸總督袁世凱の教育顧問として渡支せられた。

十月、同校教授大島義修は校長に就任した。同月獨逸留學中の幸田延子は學成りて歸朝し、同瀧廉太郎は病氣の爲め中途歸國せられた。

本年度の卒業生は師範科六名専修科八名で福井直秋等が出て居る。

明治三十六年三月、同校學友會演奏會が華々しく開催され、同月には甲種師範科卒業式が行はれた。卒業演奏は全部が女生であつたことが情ない。内田条太郎は神田分教場の主任心得を命ぜられ、鳥居忱、楠美恩三郎兩教授は、名古屋や京都方面に出張を命ぜられた。

四月、甲種師範科入學應募者が百五十餘名に達し、二十名の入學許可には可成り競争が行はれてあつた。

七月、規則改正の結果「本科を卒業したものは音楽得業士と稱することを得」の一ヶ條を削減された。卒業して重荷をおろして一息つくといふ際だつたので、卒業生の中には不満を抱くものがあつた。また九月の規則改正で研究科の學科目中、唱歌指揮法、聽音、管絃樂指揮法を削り、又他學科の時間數を減じた。

この年の卒業生は、三月と七月の二回で山本正夫外十六名を出して居る。

十月、多梅稚、遠山甲子、退職、十二月山田源一郎休職となる。

明治三十七年二月、大島校長は專任の文部省視學官となり兼官を免ぜられ、女子高等師範學校校長高嶺秀夫、同校長に兼任せられた。

此年に於ける甲種師範科の入學志願者も非常に多かつた。當時の試験問題を參考に掲載する。

第一號 國語科入學試験問題

一、左の文を簡明に解釋すべし

仁和寺に或法師年よるまで石清水を拜まざりければ心憂くおほえてある時思ひ立ちてたどひとりかちより極樂寺高良などを拜みてかばかりと心得て歸りにけり僧かたへの人に逢ひて年頃思ひつる事はたし侍りぬ聞きしにも過ぎてたふとくこそおはしけれそも參りたる人ごと山へ登りしは何事かありけむ

大納言入道召し捕られて武士ども打ちかこみて六波羅へゐて行きければ資朝卿一條わたりにてこれを見てあなうらやまし世にあらむ思出立斯くこそあらまほしけれとぞいはれける。

二、左の語句中文法上の誤謬あらばこれを訂正しかつその理由をしるすべし

○この頃はいかゞ御暮しなされ候ふや御伺ひ申し候ふ。

○流行を追ふて華美に流れしむなかれ。

○悲しきといへどもなげくべからずうれしきといへども喜ぶべからず。

○御都合よろしく候へば御出で下されべく候ふ。

第二號 地理科入學試験問題

(一) 北海道の國名并に每國の市邑

(二) 北海道並に樺太と對岸滿洲の地形大體を略圖(記憶圖)し所要の地名を填記せよ

(三) 亞細亞全洲の國名を東より順次に列擧せよ

英語科入學試験問題

譯 釋

The records of the lives of good men are especially useful, useful. They influence our hearts, inspire us with hope and set before us great examples. And when men have done their duty through life in a great spirit, their influence will never wholly pass away, "The good life," says George Herbert, "is never out of season."

唱歌科入學試験問題

(1) 長 音 階

めぐれる車、墳墓 (二曲の内一曲を選択すべし)

第二號 歴史科入學試験問題

一 封建制度の始終

二 論曲、猿樂、義太夫に就て知る所を記せよ

三 第一世那勃翁が露西亞と交戦の大體

第二號 理科入學試験問題

一 音の高低強弱は如何なる原因に依るか

二 虹の現るゝ理由

三 燃焼の理由

以上 二時間

四 鐵の性質及其利用

五 單子葉植物と雙子葉植物とを比較せよ

六 石炭の生因

以上 二時間

第二號 幾何入學試驗問題

(1) 正三角形の一つの外角を二等分する直線は一つの邊に平行なり

(2) 圓外の一一點より圓に引きたる二つの切線は相等し

(3) 圓に外接する三角形の一邊 BC を $B'C'$ に移すときは

$$AB+AC-BC=AB'+AC'-B'C'$$

(4) 三角形の各邊の正中に立てる垂線は一一點に會す。(以上證明を求む)

算術

(1) 甲乙丙三人に百三十三圓を分與するに甲は乙より五圓多く乙は丙より七圓多し各所得幾何

(2) 分數の分子と分母とに同一の數を加ふるときは一に近づくことを例を擧げて説明せよ。

(3) $9.9.10$ 及 12 にて除すれば孰れも 9 を剰す所の最小なる數を求めよ。

(4) 甲乙の一步の長さの比は $\frac{3}{4}$ 乙丙の一步の長さの比は $\frac{5}{6}$ なり甲丙の一步の長さの比幾何。

作文

我等は何が故に音楽を學ばむとするか。以上二時間。

讀書

一、後奈良天皇の天文十二年歐羅巴洲の葡萄牙國の人百餘人ばかり交易にて遙々我が太陽國種子島に渡り來りしに其商船の中に烏銃といふ軍器ありしかば島主時堯といふ人購ひ得て其術をも學びたりしに戰國の習ひ忽ち世間に廣まりたり、天主教の日本にも來たりし此亦時ぞ始めなりける。

二、左の文章に文字に誤れるものあらば訂正すべし。

雲を凌ぎて高くそびへたる山を越へ行けばこゝは小き村也。そここゝを見渡せば糸を操る老嫗あり。からくれないのみじをもてあそぶわらべあり、書籍を讀める學生あり、氣候あたゝかく風姿柔和にして他郷の人といへどもこれを待遇すること甚だ手あつし。

以上

三月、師範科卒業生十九名、七月の本科卒業生六名、聲樂科出身に三浦環があり、現在も猶世界音楽行脚に成功を収めてゐる。師範科出身には南能衛等がある。

同月、岡野貞一、助教授となつた。五月には一橋分教場試業會なるものが上野の奏樂堂に開催された。九月、獨人マリー・カイゼル、聲音教師として傭はる。

十一月、ノエル・ペリー解僱された。作曲、樂式、和聲學及オルガンの教師として去三十二年十一月以來熱心と勤勉とを以て教授せられてあつたが本務上の都合上同校を辭さなければならなくなり、遂ひに十九日付で退いたのである。和聲學には卓越なる頭腦の持主であり、本國に有りても實に錚々の聞えあつた人であつた。ペリーが調和した「君が

代」もある。彼の解備後は和樂と樂式はハイドリツヒ、(但師範科は幸田延子)オルガンはユンケルに於て教授することになつた。

明治三十八年一月、戰勝の新春に於て同校卒業生から成る同聲會は祝捷會を神田分教場に於て擧げられた。同月、音樂教師ハイドリツヒの音樂演奏會が横濱パブリックホールで催された。戰勝氣分が演奏會に迄好影響を與へた。

三月、甲種師範科卒業生男十二、女十三、といふ多數の卒業生を出した。需用も多く俸給額が三十圓から四十圓位の處であつた。

本科卒業生は十三名で三十六名の卒業生を同時に出した事は同校以來のことで聲樂科に外山國彦、鈴木乃婦子があり、器樂科に東儀哲三郎等が居り師範科に 大正天皇御即位式奉祝唱歌の作曲者、松本徳藏等が居る。

同月、職員の設定改正せられ、教授十一人助教十三人となり。七月、校舎の一部改築せられ奏樂堂準備室及事務室が加へられた。

十二月、甲種師範科官費生徒の定員を六十名とし、其樂器圖書貸付に關する條項並乙種師範科の學年を改正した。明治三十九年四月、獨逸スタンウエー製四號、グランドピアノを購入した。現在同校にあるピアノの中で一番古いものである。

五月、規則改正に依り保護科目を置き、クラリネット、フリユート、ヴィオロンセロ、バス等の管絃樂を學習するものに學資を支給する事となつた。

本年卒業生には器樂科に小松耕輔、久野ひさ子、聲樂科に原田潤がある。甲種師範科には草川宜雄がある。

此の年外人教師アフグスト・ユンケルは獨逸政府より王國普魯士樂長の稱號を附與せられた。國籍は米國なるも出生

並學問等は獨逸である。

明治四十年二月、甲種師範科課程中詩歌評釋、英語を削除し、音楽史、國語の授業時数を増加した。同年六月高嶺校長兼官を免ぜられ、同月、北海道事務官湯原元一同校長に任ぜられた。十月、唱歌編纂掛規程及邦樂調査規程を定められて、着々これが調査機關の活動を促した。

第四十二章 基督教各派讚美歌の統一

明治十八年頃歐化主義全盛時代に於て基督教も爲に其の傳播が著しく普及してあつた。然るに國會開設の前後からして歐化主義が批難され、國粹保存が強調され従つて基督教其のものも浮薄の衝點と認められるに至つた。

三宅雪嶺博士が國家主義のもとに立ち、井上哲次郎博士が基督教を難じてクリスチャンとの論争となり、内村鑑三の御眞影事件、クリスチャン政治家の森有禮大臣の惨死等、事件が頻々と起り、基督教は非愛國派の立場に強て立たせられ、又一方に於ては對外問題の紛糾から日清戦争となり、國民は舉國一致して國難に當つた。而して軍歌は高潮されて、讚美歌の不振となり、それが遂に基督教の不振時代を出現するに至つたのである。

讚美歌の出版も其の數少く、従て各派の統一の案が起るに至つたのもこの不振に起因したと言ひ得るものである。

明治二十九年には「基督教讚美歌」が出版された。バプテストの譜付のもので、以前出版された歌集の比ではないが二十八年版よりは薄いものである。

明治三十三年には「基督教聖歌集」が出た。デヒソン編のもので何の斷りもないが訂正増版のもので、二十八年版

が随分間違が多いので、別處梅之助訂正のものである。

此年四月に、各派讚美歌の統一の案が起つた。福音同盟會の大會の時、原田助の案である。提出者の曰く、歌集は各派異つても其中、主なる譯歌詞と譜とを一つにしたい。』といふのであつた。而して、この會に於ては原案通りの通過を見たのである。其後同年十月、東京に於て開かれた宣教師大會に於ては共通讚美歌の編纂に賛同され、此時に委員を擧げて之に權限を委ねたのである。(別處梅之助日本讚美歌について參照)

明治三十四年十月に於て、各派讚美歌共通歌の編纂事務を開始した。先づ各派宣教師達が、銀座會館に於て屢會合して百二十五首の歌を選び、それを改譯して作りなほすといふ事になつた。三輪源造、湯淺吉郎、松山某の三人が起草委員といふ格で、後に別處梅之助も加はつたのである。

三十五年の暑中には輕井澤に於て共通讚美歌の議を審議した。議長は聖公會のフォス監督で、書記はデー・エム・マクネヤと三輪源造で委員には別處梅之助、松山某、バアシレー、藤本傳吉、和田秀豊、櫻井成明の六名であつた。

歌の基礎をおかれた。オルチンは本國へかへり、スペンサーは旅行中、湯淺吉郎は不參で百二十五首の歌の修正は十日程で極めた。歌の數三百五十首位といふ豫定がそれよりも殖えた。

日本基督教會の委員が編輯した日本語の讚美歌の原稿が立派なものであつた。外國語の材料は一週三日、一日おきに集つて歌の詞をきめ、他の三日にマクネヤの許で樂器にかけて合せ、合なければ作りかへたのである。斯くして三十四年十月初から翌年の九月初まで一ヶ年間程で、「さんびか第一編」の大多數の歌を作りあげたのである。詞の修正、歌の排列、印刷校正等まで三十六年十一月にやつと出版されたのである。

これより先三十四年に於て「古今聖歌集」といふ古典風な銘をうつてクリスマス頃に現はれた。歌數四百十二首で

従前のに比して、嚴な堂々たる調子の曲が多い、そして品のよい歌集であつた。これには日本聖公會で用ゐるため共通讃美歌百二十五首を載せたもので、これが選擇については、フォス監督や別處梅之助等が關係されてゐたものである。

「讚美歌」第一編

歌數四百八十三に、「君が代」一首、これは主としてマクネヤを中心として出來たものである。

各派共通讃美歌ともいふべきもので三十四年十月以來左の代表委員に依りて編輯せられたものである。

組合 文 會 ジー、オルチン(メリー・アイ・グリン)、小崎弘道(湯淺吉郎)(三輪源造)

日本基督教會 石原保太郎(和田秀豊)稻垣信(湯淺碓一郎)テー・エム・マクネヤ

メソヂスト教會 セー・エル・カウエン(テー・エス・スベンサー)エツチ・エツチ・コーツ(櫻井成明)

漫禮教會 ダブリユービーバアシレー(ヘレン、ユーバアシレー、エー・エー・ペンネット)藤本傳吉

基督教會 ビー・エー・デビー(エム・ビー・マデン、メーテル・イー・ヘギン)別處梅之助

(活孤内の姓名は、代表者の更代前の人で、著作権は十二名の委員にある。)

新しく翻譯したもののうちに、

「よのなかにふみてふみは」百二十七、「にほひしはるも、ゆめとなりて」三百三十九、「ひがしのはるは、ほのぼ

のと」三百八十六―九、などは湯淺の原作。「のやまもくさ木も、のどけき春を」六十九といふ趣のは三輪の作。

「はにふのやどの、をししがきの」三百八十五、は藤本の作。「いらかをかをきそひ、たまをみがく」三百八十四、「い

まもむかしの、ためしとて」三百九十五、は別處梅之助の作で斯く邦人の創作のものも加つたのである。(讚美

「讚美歌」第一編は、教會創立當時のものに比べると、實に立派に出来上つて居るが、翻譯歌曲の短所である。原語の持つ獨特の響の過半数を、失つてしまふので總じて歌詞のアクセントと曲とが一致しない、歌つて見ても歌詞の感じが胸にびつたりと來ない。讚美歌の翻譯のはじめた當時から三十餘年間の變遷を見ると、随分と苦心の跡が見られる。五七、五七七の短歌體の可なりに多かつた時もあった。その關係で小節のアクセントと、言葉のアクセントが一致しないで一字が二音になり二字を一音に收めたものが各曲のやうに入つてゐる。現在の唱歌と比られば四重音なるばかりでなく、壯重なそして古典的の感じの深いものが、數多いが、外來曲ばかりで歌詞から受ける感じの所謂讚美歌臭のあるのが、更に改良の餘地があるものと思ふのである。

讚美歌は實に宗教生命の表現の一つである。西洋音樂史を見る時に宗教音樂の消長は藝術の興隆に甚大なる影響を與へて居るが、之を思ふ時に我が讚美歌に依つて我が國宗教生命の如何を知るには、あまり物足りなさを感ぜずに居られない。しかし「さんびか」の發行部数は勿論數十萬部に達して居ることを考へる時に、教會音樂の旺盛は見のがすべからざるものである。

第四十三章 職業音樂隊と研究的音樂團

戰勝欽舞的な要求に促されて、明治二十七年以來は、不完全極まる音樂隊が各所に組織され、いぶかしい演奏が夥しく普及した。

爾來社會が一時の潮流に浮かされ、歡迎とか運動とか慰安慰勞とか此種の集會には音楽隊を招かねばならぬ時代を作り、それが遂には一の慣習となつて、このあやしげな音楽隊に満足して何等の不滿を抱かず、却つて歡迎する迄に至つた。

音楽家達の中にも、此の種の音楽隊を矢鱈に鞭達しては寧ろ榮譽として憚らず、其の指導する力のないにも不拘、種々なる名儀のもとに組織して、遂に音楽を墮落せしめるに至つた。即ち音楽を見せもの視して美事な服装とか或は美少年等を集めることに腐心した。或る者は憲兵大佐正服に等しいものを作り、或は海軍のエボロット位の肩飾、下袴は草色の二筋といふ美しい姿のものもあつた。商賣の宣傳に音楽隊を用ふるに至つたのも此の當時からである。これに就ては、明治二十五年横濱に渡來した米國賣藥商セグナ等の一行が、晝夜居留地及市内を異形の服装で馬車乗りまはしての奏樂が、抑の初であると云はれて居るが、併し之等を眞似たといふよりも、時代相のあらはれであるといふことが確實に認められる。

音楽隊の演奏し得る曲目はといへば、ポルカ、マーチ、ワルツの數曲位のもので、これ等が普通で、其他は軍歌調の歌曲を吹奏する位のもが多かつた。中には「四百餘州の歌」のみを奏してゐたといふので、元寇音楽隊と命名されたものさへあつた。

當時陸軍々樂舎の永井建子等は之等のあやしげな音楽隊の組織に心を痛め、寧ろ鼓隊組織は音楽的である事を力説した。

鼓隊は士氣勃興の要素であるが故に強兵を唱ふる文明國には鼓隊が必ず徒歩部隊に屬してゐるとて、今時の戦争の結果から隊鼓組織の必要を頻りに稱へた。明治二十九年八月には軍樂學校長古矢弘政が獨逸へ鼓隊の研究視察に行か

れたことも意味あることであつた。

併し乍ら鼓隊は遂に行はれず、民衆は美装の音楽隊に眼を奪はれて之が發達を益々助長せしめた。

明治二十七年七月、帝都に於ける私設の音楽團體には、明治十九年創立の大日本音楽會をはじめ、宮内省式部關係樂會、官立系の音楽學校學友會、それに唱歌音楽が主の、明治唱歌會、聲樂協會、東京唱歌講習所、芝唱歌會がある。

之等は研究的な音楽團體であつて、時代を代表するに足るものであり將來善良な音楽に向つて伸びて行つた。職業的のものでは、東京市中音楽隊があつて、之は陸海軍の退職した樂手がその過半を占めた團體で、横濱グランドホテルと帝國ホテルの音楽を受持つて居たのである。

其他のは友樂會、東京音楽隊、長幼音楽隊、日本橋幼年音楽隊等いふ所謂美装の音楽隊である。東京少年音楽隊は、マーチ、ワルツ、ポルカの數曲を奏して東京府下から近縣迄も備はれて歩いた。二十八年十二月中に於ける奏樂日程を参考に擧げる。

十二月一日	南足立梅島村軍人慰勞會、岩倉公府祝宴會
同 三日	神田三河町軍人歡迎會
同 四日	神田猿樂町軍人歡迎會
同 七日	埼玉日勝村軍人歡迎會
同 十日	埼玉安行村軍人弔籠會
同 十四日	麻布旗尾町軍人歡迎會
同 十五日	京橋區弓町軍人歡迎會、赤坂區小學校共同大運動會

- 同 十六日 日比谷大神宮祭典
 同 廿一日 岩倉公爵祝會
 同 廿二日 日比谷大神宮上棟式、松田大佐金鷄勳章祝會
 同 廿五日 麻布日曜學校クリスマス
 同 廿七日 東京各雜誌社懇親會

明治二十八年に至つては、旭組調練隊、美奈茂登音楽隊、講武所音楽團等が出來た。

横濱にも、横濱市中樂隊が出來た。明治二十八年に第一回演奏を港座に開いて、其の實力を示した。矯風會音楽隊、實業樂隊、元街同窓會音楽部、戸部教育會音楽部、神奈川音楽會、扶桑團、七葉音楽隊等の多くの音楽隊も生れたが、不完全なものであつた。貿易商青年會のアツコルジョンバンドは割合に新味のある手風琴主のもので評判がよかつた。

又、宗教的のものには、救世軍の傳導音楽隊があつた。明治三十年の初から男女共に隊伍を組み、鼓笛股々讚美歌に合して街衢にその音を響かした。これは救世軍音楽隊の最初である。

大阪の音楽隊は、合名組織の大日本樂隊が新設されて、演劇に演説會に幻燈會にと巡回演奏を行つた。服装は當時の憲兵大佐正装のと等しいもので、實に美しいものであつた。大阪音楽會は近縣からの需要が多く、又浪波音楽會、關西鼓勇會はブラスバンドである。中央音楽團體は小團體だか招聘者が多く、其他に青年音楽團などいふのもあつたが、大阪の洋樂は大都市中最も拙劣なものであつた。

神戸には明治二十五年に東京市中音楽隊の片割で設立した市中音楽隊がある。其他神戸音楽隊、風琴樂會、神戸俱

樂部、神戸風琴音樂會があり、神戸教育音樂會は唱歌の講習會で教員養成を爲し毎週火木の二回、集會するものであつた。

博多には博多私立音樂隊があつた。元陸軍々樂手黒川源一等が率ゐたもので、明治二十八年、當時に於ける演奏狀況を記せば次の如くである。

一月二十日 三池炭坑開業式

同 十三日 門司港出征軍見立

同 廿三日 福岡警察署上棟式

同 廿五日 博多停車場出征軍見立

二月 五日 筑台鐵道幸袋開通式

同 十四日 木山口戰捷祝賀會

同 十八、九日 六師團戰捷祝賀會

同 廿四日 佐賀縣神崎戰捷祝賀會

同 廿五日 青木村鐘崎三郎葬儀 以上

仙台市には、明治二十七年五月に鳳鳴會なる音樂團體が設立され、西洋樂部長に四竈仁運が擧げられた。日清戰役の出征軍人の歡送迎に活躍した。又常集會は五城館に於て舉行してゐる。又宮城少年音樂隊も同市に設立、芹澤三次、篠原某、橋本忠治郎、早川智寛、遠藤敬止等の協賛を得て一組十二名の一隊を三隊も組織し、左の如き樂器類を整へた。

ピッチクラリネット、グランドクラリネット、コントラバース（シベモール）、シンバル、アルトバース、トライアングル、ピッチケース、グランドケース。

明治二十九年三月二十五日、挾琴館に於ける發表式の狀況を見るに、黒羅紗の上衣に赤ズボン、それに紅帽といふ所謂美裝の音楽隊で式場の中央に馬蹄形に列び十數曲を演出してゐる。

明治三十一年春に、上原六四郎を會長とする明治音楽會が設立した。専ら歐風の管絃樂の普及に力を致し、音楽學校の奏樂堂に或は神田青年會館にと演奏會を催す等、その基礎固く、明治四十二年頃までつゞいたものである。

明治三十二年頃には、音楽改良論がさげられ、甲論乙駁雜誌にも新聞紙上にも現はれた。

「我國從來民間に流行しある俗樂は、擧げて妖歌なり怪曲なり、須らく全然之を排斥撲滅してその痕跡を絶つべし云々」の語に對して、「如何に妖歌怪曲にせよ其の淵源や遠く其根底や深し云々」と反駁し、又他には唯一音楽論を主張して音楽は上下同一の善良なものを行ふべきであるとして俗樂を否認するのがある。東大哲學科のケーベル博士はまた「余は日本の音楽をば常に索漠に又死ぬ許りに退屈に感じてゐる、その形式は不整であり旋律も和聲もなくさうして自分には俗樂ならぬ優秀な邦樂と言はれるものほど嫌味が増して來る」と言はれた。

明治三十四年頃に至つて教育音楽團體が地方的に目醒めて、同三十五年からは全国的に音楽團體が創立された。而して中央に於ける音楽研究所の如き或は私立音楽學校の如き純洋樂主の音楽團體の設立を見るに至つた。

明治二十七年以降の音楽團體の規約を當時の儘掲載して參考に供する。

明治二十七年五月創立、 鳳鳴會規約 （仙臺市）

第一條 本會は音樂の眞理を研究し移風易俗の實を擧ぐるを以て目的とす

第二條 本會を鳳鳴會と稱し當分事務所を空堀町十三番地に置く

第三條 本會に於て講究する音樂は左の數種とす

雅樂 和樂 八雲琴 西洋樂 清樂 諸曲 等

第四條 本會の目的を達するため

一、小集會、年四回、二月、七月、九月、十一月

音樂理論上の講究

音樂の合奏、音樂の講話

一、大集會、年一回、五月

會務の報告、小集會にて講究せる事項の演習

第五條 操行端正にして音樂に篤志の者は會長及幹事の承諾を得て正會員たることを得

第六條 本會に裨益ありと認むる學術家並に名望家を推薦して名譽會員とす

第七條 會員左の五部に

雅樂部 和樂部 八雲琴部 西洋樂部 清樂部

第八條 整理するため左の役員を

一、會長一名(會務一切を總理するものとす)

一、幹事二名(會長を輔佐して會務を整理するものとす)

一、部長各部一名

部内音樂の發達上進を計り併せて部内一切の事務を整理す

第九條 正會員入會の節は基本金三十錢を差出すものとす

第十條 會員は開會當日本會より貸與せる一定の徽章を佩用するものとす

第十一條 會員は會費毎月五錢を差出すものとす

第十二條 會員中本會の名譽を毀損する所爲ある者は會長及幹事の評決を以て除名することあるべし

第十三條 會員若し集會に出席し能はざる時及退會を望むときは其旨届出づべし

第十四條 本會の規約は會員過半數の議決にあらざれば變更するを得ず

會長 四應 仁通

幹事 高橋 菊三郎 野村 虎松

和樂部長 山下 松琴

西洋樂部長 四應 仁通

雅樂部々長 佐藤 靜嘉

清樂部々長 野村 虎松

八雲琴部長 増田 道子

六月 本校規則改正追加して生徒の入學期は毎年一回となる、亦小學唱歌講習科新設さる。

明治二十七年六月創立、博多音樂隊規則

第一條 博多音樂隊有志者發起に成立ち徳性涵養を以て目的とす

第二條 本隊は樂主と樂員とを以て組織し樂主は本隊の固定金を出資し樂員は技藝を出資す

第三條 樂員は品行方正にして樂主の命令に違背せざるべし

第四條 樂員は身元保證として自分の樂服を調整し樂主に差入るべし

第五條 樂員は入隊の節樂主に對し誓約證書を差入れ而して樂器の必要ある時は證書を入れ借用する事を得

第六條 奏樂の招聘は別に定むる招聘手續に準據するものとす

第七條 奏樂の招聘に應じたる際は規律を嚴守し尠も卑猥の行爲あるべからず又本隊の旨趣に背戾せざる限りは可成招聘者の希望を充たし奏樂を爲すべし

第八條 奏樂の報酬金は其全額より雜費を扣除し殘額を折半し壹半を樂主に壹半を樂員に配賦すべし

但新に加入したる樂員は滿一ヶ年間報酬の配賦を受けず之を修樂費に充つるものとす

第九條 創立の際出金贊助したる向を發起者と唱へ奏樂の必要ある時は無報酬にて其需めに應ずる事あるべし

第十條 本隊には左の役員を置く其擧擧は樂主の特選とす

樂主 一名 樂長 一名

樂次長 二名 幹事 二名

第十一條 樂主は本隊一切の事務を總轄し樂員に對し命令し及賞罰を行ふべし

第十二條 幹事は樂主の命に従ひ要務を補佐するものとす

第十三條 樂員に於て本規則又は誓約に違背すると認むる時は除隊の處分をなす

明治二十七年十二月創立、東京少年音楽隊概則

第一條 本隊組織の目的は野卑なる音楽を避け優美なる正曲を練習して風教を裨補し漸次文明の眞音楽に移らしむるに在り

第二條 男女を問はず年齡十歳以上入學を許す尤も六ヶ月目毎に試験を行ひ入隊定みの者は本隊助手に採用して月々若干の手當を給す

第三條 教授時間は毎週月水金午後四時より午後七時までとす速修月謝を要せず

第四條 練習中は本隊より總ての樂器を貸與す
但、樂器修置料毎月十日までに多少に係らず差出すべし

第五條 本隊事務所は當分の中麴町區有樂町三丁目一番地に置く

第六條 本隊に用ゆる樂器の種類左の如し

- 一、手 風 琴 アツコロジョン
- 一、仙 花 琴 メンダリン(マンドリン)
- 一、銀 縦 笛 フラジョレット
- 一、小 横 笛 ピツチフリユート
- 一、大 太 鼓 グランドケース
- 一、小 太 鼓 ビツチケース
- 一、三 角 網 トライアングル
- 一、小 鈸 サンパール(シンバル)
- 一、振 太 鼓 タンポロン(タンバリン)
- 一、横 笛 フリユート

- 一、クラリネット
 - 一、サクソホン
 - 一、コントラバース
 - 一、パーカス
 - 一、絃樂器類
- 以上

明治三十四年一月創立、山梨音樂會則

- 第一條 本會は善良なる音樂を演奏し社會の音樂的好尚の發達を計り兼て音樂を講究するを以て目的とす
- 第二條 本會には研究會を常設し又時々音樂演奏會を舉行す
但、演奏會場と日時とは其都度之を定むべし
- 第三條 本會は山梨音樂會と稱し事務所は未定
- 第四條 本會は第一條の目的を達する爲め各地へ會員を派遣することあるべし
- 第五條 本會は音樂上に關する器械並に書籍を蒐集して會員の研究材料に供す
- 第六條 會員を分ちて名譽會員及通常會員とす本會に功勞ある人并に本會の事業を贊助する人を名譽會員とす
音樂を講究するもの及び演奏するものを以て通常會員とす
- 第七條 本會に會長一名副會長一名幹事二名協議員若干名を置き會務を整理す
- 第八條 本會の經費は寄附金を以て支辨するものとす
- 第九條 研究會の細則は別に之を定む
- 第十條 本會に入會せんとするものは事務所へ申出づべし
- 第十一條 會員にして不都合の所爲あるものは役員協議の上退會せしむることあるべし

明治卅四年一月

會長 視學官 鈴木重持 山梨音樂會
講師及委員 山梨縣高等女學校助教諭 生島辰作 外十二名

明治三十五年十月、東京唱歌學校の擴張

分教場を四谷赤坂本郷に開設

講師 酒井 勝 軍

科目 音樂理論 總釋法 發音學 獨吟法 合唱法 指揮術 等

卒業期 尋常科、高等科、三ヶ月

入會金 一回、授業券は一回拾錢、特別授業券は一回五拾錢

場所 神田區美土代町二丁目 神田教育會内

同年五月、慶應のワグネル、ソサイターの創立

樂聖ワグネルの會名は、思想界の動搖を藝術の方面から救濟せんと企圖した。ワグネルの精神に感激の餘り撰んだもので、當時豫科一年生の創立委員秋葉純一郎の撰んだものなりと、田中一郎、中村泰一、細谷保次郎、植杉達道、岡野榮次郎等は熱心なる創立當時の委員である。最初から、オーケストラとコーラスの完成に努めた。

明治三十六年三月創立、國民音樂傳習所規則

第一章 總 則

第一條 本所は善良なる音樂の普及上進を計るが爲め一般篤志者に傳習するを以て目的とす

第二章 學 科

第二條 學科を別ちて左の五科とす

ピアノノ科 ヴァイオリン科 風琴科 唱歌科 等 科

第三條 隨意科として樂典及音樂教授法を課す

第三章 時 間

第四條 毎日の教授時間は午後三時より同八時迄とす

但、日の長短により伸縮することあるべし

第四章 入 退 學

第五條 入學せんとするものは男女を論ぜず年齢に拘はらず篤志の者とす

第六條 入學の許可を得たるものは保證人連署の上左の書式に依り在學書を認め差出すべし

第七條 保證人は丁年以上にして父兄若しくは親戚たるか又は市内に於ては一定の業務に従事する者たるべし

第八條 在學書式(用紙美濃紙)

第九條 生徒疾病又は止を得ざる事ありて退學せんとするときは其理由を詳記し保證人連署の上願出づべし

第十條 生徒學業の懈怠若しくは所規命令及訓誡に違背して秩序を紛擾し風儀を壞亂するの行爲ありと認むるときは之れに退學を命ず

第五章 學期修業證書

第十一條 本所は學期を分たずと雖も一箇年以上在學のものにして修業證を望むものには其成績に依り之れを授與す

第六章 休 業 日

第十二條 本所の休業日左の如し

日 曜

大祭祝日

本所設立紀念日

冬期休業 十二月廿五日より翌年一月七日まで

夏期休業 八月一日より同月三十一日まで

第七章 授業料 樂器使用料

第十三條 各科授業料を定むる左の如し

ピアノ科 ヴァイオリン科 風琴科 各金壹圓

唱歌科 箏科 各金五拾錢

但し二科兼修する者は相當の減額をなすことあるべし

第十四條 樂器使用料を左の如く定む

ヒ ア ノ 一箇月 金 五 拾 錢

風	琴	一箇月	金貳拾錢
ヴァイオリン		一箇月	金參拾錢
箏		一箇月	金參拾錢

第十五條 入學するものは入所の際入學金壹圓を納付すべし

第十六條 授業料は其月廿五日迄に翌月分を納むべし

第十七條 生徒在學中は課業を缺きたるものと雖とも授業料を徴收す

第十八條 授業料未納者は停學をすることあるべし

第十九條 既納授業料は何等の事故あるも返付せず

第八章 成績、生徒心得

第二十條 生徒成績は時々發表することあるべし

第二十一條 本所生徒心得は別に之を定む

第九章 時間割

第二十二條 教授時間割は別に之を定む

所長 貴族院議員男爵 生駒親忠、講師 鈴木米次郎、前田久八、石原重雄、丸山とめ、矢吹義政、渡邊六郎

明治三十六年四月創立、通俗教育音楽部規則

第一條 當部は音楽を傳習する所とす

第二條 場所は當分東京市麹町區飯田町一丁目日本體育會内に置く

第三條 當部を普通科及選科の二種に分つ普通科は初等教員たらんとするもの及音楽を専修せんとするものゝ爲めにして選科は各自希望の一種又は數種を隨意に傳習を受くる者とす

第四條 普通科の修業年限は二箇年とし選科は期限を定めず

第五條 普通科目は左の如し

- 一、聲樂 單音唱歌、諸重音唱歌
- 一、器樂 ピアノ、オルガン、ヴァイオリン等
- 一、樂典 一、音樂史 一、和聲學初歩 一、唱歌遊戲

第六條 選科の課目は左の如し

一、聲 樂 單音唱歌、諸重音唱歌 一、器 樂 ピアノ、オルガン、フルート、クラリネット等
一、唱歌遊戯

第七條 普通科學生は四月十一日に始まり翌年三月三十一日に終る

第八條 學年を分ちて三學期とし第一學期は學年始め四月十一日、第二學期は九月一日、第三學期は一月八日とす。

第九條 試験を分つて學期試験及卒業試験とす

第十條 普通科の試験に及第したる者には卒業證書を附與し選科を一箇年以上修業したるものには證明書を附與す
但、時宜に依り變更することあり

第十一條 休業日左の如し

日曜日、大祭日、春期休業は四月十日まで

夏期休業は七月二十六日より八月三十一日まで

冬期休業は十二月二十五日より翌年一月七日迄とす

第十二條 普通科の入學期は學年の始めとす選科は之れを定めず

但、普通科は臨時入學を許すことあるべし

第十三條 入學者は男女を問はず高等小學校卒業者若くは之と同等の學力を有するもの

明治三十六年七月創立、音樂遊戯協會々則摘要

一、目的 善良なる音樂及び遊戯の普及獎勵を計る

一、事業 普通教育に在する音樂及び遊戯を調査研究す適當の時機に於て隨時講習會を開設す

時々音樂演奏會又は遊戯舞踏演習會を開く

毎月一回機關雜誌を發行して會員に配布す

一、會員 名譽會員、贊助會員、通常會員

一、會費 通常會員は會費として一ヶ年金一圓二十錢を前納す但し二期に分納することを得

音樂遊戲協會講習所規則摘要

- 一、目的 男女を問はず普く音樂科遊戲科教員志望者又は右學科研究志望者のため適當なる教授を施すを以て目的とす
- 一、學科 普通科、高等科、專修科、東京音樂學校受験科の四科に分つ、普通科は小學校教員、高等科は中等程度各學校教員養成の爲めに之に設くるものにして修業年限は各一ヶ年とす
- 一、課目 唱歌、オルガン、ヴァイオリン、ピアノ、樂理、和聲學、教授法、遊戲舞蹈
- 一、時間 毎日午後三時半より五時半迄土曜日は午後二時半より四時半迄（自修時間は別に之を定む）
- 一、講習科 各科共一ヶ月金一圓五十錢但し專修科は金一圓以上金五圓以内にて之を定む
- 一、卒業證書 規定の學科を修了したるものには試験の上卒業證書を授與す

名譽會長 正五位勳四等 伊澤修三 東京市神田區淡路町二丁目四番地 音樂遊戲講習所
理事長 正七位 山田源一郎 理事 五味和十

明治三十六年十月創立、石川縣音樂研究會々則

- 第一條 本會は善良なる音樂の普及上進を計り兼て音樂を講究するを以て目的とす
- 第二條 本會は石川縣音樂研究會と稱し事務所は當分石川縣師範學校内に置く
- 第三條 本會に於て行ふ事項左の如し

- 一、音樂に關する各種の事項及教授の方法を研究すること
- 二、音樂演奏會又は講話會を開くこと
- 三、音樂に關する質疑に應ずること
- 四、適切なる時機に於て講習會を開設すること
- 五、作歌作曲の需に應ずることあるべし

第四條 本會に左の役員を置き會務を處理す

會長 一名 副會長 一名 幹事 三名 委員若干名

第五條 本會々員は左の特權を有す

一、音楽に關する質問をなし得ること

二、本會に於て行ふ諸種の會合に出席し得ること

但し講習會に出席せんとする者には外に會費を徴收す

第六條 本會々員は會費として年額金四拾錢を前納すべし

但し二期(四月、十月)に分納することを得

第七條 本會に入會せんとするものは住所姓名を明記し會費を添へて事務所に申込むべし

第八條 本會の目的を賛同し事業に助力せらるゝ人を推して賛助員とす

第九條 會員にして不都合の所爲あるものは役員評議の上退會せしむることあるべし

明治三十六年十月創立、 樂術研究會々則

第一則 本會に入會せられたる諸彦は隨意に毎月一回作曲譜なれば一曲其他音樂上に關する質問なれば二件以下の講究質問案を御郵送有之らば本會は最も鄭重なる研究審議の上一々同案に御返答申上べきの便宜を與ふ是れ即ち地方通信教授の方法なり

第二則 會員の御郵送ありし歌曲、樂説にして最も意を盡したる佳作は音樂之友誌上に掲載披露する事あり

第三則 會員には毎月一回音樂之友一冊を過呈す

第四則 會員の御質問案は郵送の時は必ず返信封として差錢切手封入有りたし

第五則 會員は一箇年前納は壹圓五拾錢半箇年前納は八拾五錢郵券ならば壹割増の事

第六則 入會せんと欲せらるゝ方は左記の入會願書を御郵送有之たし

第七則 入會願書郵送後入會を許可したる者は別に返書を差出さゝる代りに次號の音樂之友誌上に入會者の姓名を掲載披露するを以て入會許可の證とす

第八則 樂術研究會は樂友社内に設置す(下谷區中徒士町樂術研究會)

明治三十六年十月創立、 山形縣酒田郡飽海音樂會々則

第一條 本會は音樂の學理と技術とを研究し尤も且有効に之を教育上に應用するの道を求むるを以て目的とす

第二條 本會は飽海音楽會と稱す

第三條 第一條の目的を達せんか爲に左の事を行ふ

一、通 常 會

二、演 奏 會

三、部 會

第四條 通常會は毎月一回開くものにて技術の批評、講話、討論等をなす
演奏會は臨時に演奏を行ふ

前二回の期日及場所は前回に於て之を定む

部會は必要に應じ便宜研究をなす

第五條 本會の事務を整理せんが爲に左の役員を置く

正副會長 各一名

幹 事 三 名

第六條 會長は會員中より會員之を推選し或は他の適當の人に囑托す

幹事は會員中より選舉す

第七條 本會の主旨に賛成するものは何人にも會員たる事を得

但し會員たらんとするものは居、所職名氏名を記せる名刺を差出し會長の許可を受くべし

第八條 退會せんとするものは其旨會長に届出づべし

第九條 本會に於て費用を要する時には會員中より之を徵收す

第十條 本會員中本會の體面を汚す所行あるものは之を除名す

會長酒田高等女學校長白井重任、幹事岸本芳子外二名

明治三十七年六月創立、關西音楽會々則

第一條 本會は會員相互の技術を練磨し兼ねて音楽の普及上進を計るを以て目的とす

第二條 本會は關西地方に在る音楽専攻者中の有志者を以て組織す

第三條 本會は關西協樂會と稱す

第四條 本會は凡そ春秋二季に於て音楽演奏會を開く

第五條 音楽演奏會開催地は會員の在住地に於て適宜交替に協定するものとす

第六條 音楽演奏會に於ける曲目選定及其練習等に關する件は總會を開き協議決定するものとす

第七條 本會に幹事若干名を置く

第八條 幹事は會員在住の各府縣に於て各一名宛を其府縣の會員中より相互選出するものとす

第九條 最も近き將來に於て音楽演奏會を開催すべき府縣の幹事を當番幹事と稱す

第十條 當番幹事は會務を總理し、幹事は當番幹事を輔けて會務を處理するものとす

第十一條 幹事の任期は一ケ年とす

第十二條 會員は會費として一ケ年金一圓宛を春季音楽演奏會の際に於て當番幹事に納むるものとす

第十三條 本會に入會せんとする者あるときは會員二名以上の紹介に依り總會の決議を俟ちて入會せしむるものとす

第十四條 會員にして職務又は住所等に異動ありたるときは直に當番幹事に報告すべきものとす

第十五條 本會則の變更又は本會に於て新に企圖せんとする事業、其他重要なる事件は會員半数以上出席せる總會の決議を經るに非れば實行することを得ず

(本會事務所當番は幹事の宿處を以て之に充つ、)

幹事近森出來治外數名

明治三十七年七月創立、 大阪七聲會々則

第一條 本會は七聲會と稱す

第二條 本會は左の目的を以て立つ

- 一 會員相互の親睦を計ること
- 一 教育音楽の普及を計ること
- 一 小學校唱歌科教材選擇及研究をなすこと
- 一 音楽科教授法の研究をなすこと

一 大阪市内各高等小學校の唱歌科の統一を計る事

一 高等小學校と尋常小學校及中學校との間に唱歌科の連絡を計ること

一 教育音楽に關する各種の事等を起すこと

第三條 本會は市内各小學校唱歌科の實務者を以て組織し之を通常會員と稱す

第四條 本會は博識知名の士を名譽會員に推薦することを得

第五條 通常會員は會費として毎月金拾錢を納むべし

第六條 第三條に該當するものにして入會を望むときは會員の紹介を經常幹事の承認を受くべし

第七條 本會に常置幹事一名輪番幹事一名を置く

第一項 常置幹事は通常會員より互選し毎年四月一日より翌年三月三十一日に至る間を其任期とす而して此間會務一切を處理す

第二項 輪番幹事は通常會員各在勤學校より一名宛を選出し毎月輪番常置幹事を補助し各般の周旋に従ふ

第八條 本會の目的を達する爲毎月一回便宜の日に於て其月當番幹事所在勤學校に集會を開く

明治三十七年十月一日創立、私立東京音樂學校規則 (下谷區坂本町私立東京音樂學校)

第一章 總 則

第一條 私立東京音樂學校は男女を問はず汎く音樂教員又は音樂研究志望者の爲め適當なる教授と之れが攻究をなさしむるを以て目的とする所なり

第二章 學 科

第二條 本校の學科を大別して専攻科、師範科及受験科とす

第三章 專 攻 科

第三條 専攻科とは唱歌、ピアノ、オルガン、ヴァイオリンの技能を専攻する者の爲めに設けたるものにして修業年期は二年を以て終るものとす

第四章 師 範 科

第四條 師範科とは唱歌、オルガン、ヴァイオリン、遊戯、舞踏、樂典、唱歌教授法の諸學科を研究し以て専ら音樂教員たる

んとする者の爲めに設けたるものにして修業年期は一ケ年を以て終るものとす

第五章 受験科

第五條

受験科とは師範、中學、高等女學校、音樂教員受験者、文部省直轄東京音樂學校兼科若くは師範科並びに各府縣小學校音樂教員受験者の爲めに設けたるものにして修業年期は各受験學科の都合によりて異なるものとす

第六條

各科とも隨意科として和聲學、音樂史、音樂學、樂式一環、樂典、教授法、樂器構造法及同調律法の學科を志望者の都合により隨時に兼修せしむることを得るものとす

第六章 教授時間

第七條

樂器の練習時間は毎日午前十時より午後九時迄とし教授は毎週二回乃至三回を定とし當時間割、日割等は豫め生徒の都合を承合して幹事之を定む

第七章 學年、休業

第八條

學年は四月八日に始まり翌年四月七日に終る

第九條

學年を分ちて三學期とし第一期の授業は學年の始めより七月十日に至り第二期の授業は九月七日より十二月二十五日に至り第三期の授業は一月八日より三月三十一日に至る

第十條

年中の休業日は左の如し

日曜 日 毎 週

大祭 祝 日 年 七 回

冬 期 休 業 十二月廿六日自至一月七日

第 二 期 休 業 四月一日自至四月七日

夏 期 休 業 七月十一日自至九月六日

第八章 入学、退學

第十一條

入學の期は別に一定せずいつにても入學を許可す

第十二條

本校に入學せんとするものは男女年齢等を問はず其志望學科を明記して左記の通りに認めて届出つべし
(用様式省略)

第十三條

生徒にして學科を勤めず又は校規、命令及調誡に違ふものあるときは之れに退學を命ずることあり

第十四條 疾病其他の事故により退學せんとするときは其事由を詳記して保證人連署の上届出つべし

第九章 授 業 科

第十五條 各科の授業料を定むること左の如し

一、専攻科一ヶ月 金壹圓五拾錢

二、師範科一ヶ月 金壹圓五拾錢

三、受験科一ヶ月 金壹圓五拾錢

第十六條 入學の許可を得たる者は入學金巻圓を納むること

第十七條 各科にありて二科樂器を兼修せんとするものは一科を加ふる毎に金五拾錢を増納するものとす

第十八條 授業料は毎月二十五日迄に翌月分を本校會計掛に前納すべきものとす

第十九條 生徒在學中は課業を缺き若くは何等事故あると雖ども授業料を徴收す

第二十條 既納の授業料は何等の事故あるも之を返付せず

第十章 卒業證書

第二十一條 本校所定の學期を終りて講師の推薦により修業を卒へたるものには卒業證書を授與す

第十一章 休學、退學

第二十二條 生徒疾病に罹り或は正當の事故により二ヶ月以上修學すること能はざるものは休學届を出すべし

第二十三條 校規命令及訓誡に違背して秩序を紛擾し生徒の風儀を壞亂する者と認むるときは校長之に退學を命ずるものとす

第十二章 生徒心得

第二十四條 生徒心得は校長別に之を定む

第十三章 音樂會

第二十五條 生徒の樂技獎勵の爲め時々試業演奏會を開催し衆庶の傍聽を許すことあるべし

校長 高折周一 幹事 堤 正夫 評議員 岩本捷治 講師も音樂學校卒業生である

明治三十九年二月一日 山田源一郎私立女子音樂學校創立し同校長となる。(規則書、省略)

明治四十年五月三日 鈴木米次郎私立東洋音樂學校を創立して同校長となる。(規則書省略)

第四十四章 日比谷音樂堂の建設と公園音樂

日比谷は元、陸軍省の用地で東京市が之を譲り受けて公園にしたのは明治三十六年の春であつた。

之が設置計劃に關しては種々なる異論者多く、従つて計劃設計は衆目的となり、當局に於ても不勘困難を感じて居つた。時の市長松田秀雄は石黒忠憲を公園計劃委員長に擧げ、本多林學博士等を設計委員に囑し、三年有餘の日子を費してその計劃案通りの近代的公園の竣成を見るに至つた。

竣成當時は音樂堂の設備が無く無論始めからの計劃にも無かつたのであるが、樂堂建設の要望は、あらゆる方面から翕然として起り、遂ひに明治三十六年七月音樂堂豫算調査委員會は六千圓の豫算額を決議し、同年十一月計劃設計成り一年半の豫定で工事に着手した。

音樂堂の位置は正門から運動場へ入つて手前右寄りの梅林の傍にある約三百坪の地域で、高さは約四尺五寸で、周圍の傾斜面に芝生を植え四方に昇降口を設け、中央二十坪を樂堂の敷地としたのである。この樂堂は大震災の際倒壊したが、聽衆席は、現在見るものとは大部違つてゐる。この當時から位置問題では、かなり避難されてゐたのである。當時の記事を見ると「餘りに茫として取離された如きは奥ゆかしさなし、殊に電車線に近きところは殊に悪し、音樂は聴くべきものに地響を高むる必要なし」とて音樂學校の奏樂堂の様子と比較して論ずるもの等が多かつたのである。

構造は鐵骨木皮、周圍は八角形、柱八本土台は花崗石、土台から棟飾まで三十九尺、床は三尺上りで敷礎を以て彩

り、天井の高さは十六尺、檜製のニス塗で音響をよくした。周囲の鐵柵は模様のあるもので、屋根の頂上半圓形の部分は銅板を展り、その他はスレート葺、棟飾には東京市の金色のマークをつけ、建築費豫算は五千八百六十圓であつた。

明治三十八年、平和克復後戰捷に酔つた國軍相次いで凱旋し、世は祝聲歡呼に満ちてゐた。樂堂の竣成豫定は三月であつたのが遷延して遂に七月に至つた。

七月漸くにして奏樂堂の建築成り之が開堂式を擧ぐるに至つた。演奏者の選定といふ事に就ては、輿論もあつたが市が慎重な選衡の結果、陸海軍々樂隊の外、市中音樂隊の類を一切登壇せしめざるの方針を採つた。

八月一日午後五時開堂式が行はれた。來賓は兩院議員、市會議員、市役所吏員、各國公使並貴夫人、陸海軍人、新聞記者等で、時の市長尾崎行雄は、竣功遅延の理由を述べ、次に奏樂堂建設の理由として「禮樂を以て天下を治む」と云ふ古人迄は行かずとも品性修養に資する音樂を普及するため、此音樂堂に於て淫靡の曲に代ふるに、崇高の曲を以てし柔弱輕浮の調に代ふるに、勇壯活潑なる調を以てして市民が終日の勞を慰め得べきを思ひて云々。」と告げ終つて第一回の演奏會が開かれた。

我が國公園奏樂の濫觴ともいふべきで、此の演奏會に臨んだ永井建子の指揮する陸軍戸山學校軍樂隊は無二の榮譽を擔つた譯である。

八月一日午後五時、日比谷公園音樂堂第一回演奏

一、行 進 日章旗

永井建子作

二、大 序 歩哨の警報

クロドミール作

三、歌 劇 フォスト(第一)

四、ヴァルス 安留爾多

五、ホルカ行進 タ、ラ、ラ、ボンデレー

一、行 進 米國旗と永久

二、大 序 ギュイヨーム、テル

三、歌 劇 タンホイゼル

四、長 唄 老 松

五、ヴァルス 深林の會合

グーノ作

アルヂチー作

セイエール作

スーザ作

ロシニ作

ワグネル作

戸山學校軍樂部曲

ストラウス作

第一にある日章旗は永井建子佛國留學中の作で「君が代」の旋律に始まつてゐるもの、二部が二の大序はウイリアムテルの序曲である。平和克復の情爽たる夕、斯かる快適な新設備の場所に於て自由に斯る美しいメロデーに陶醉する事を得たのは切實に聴衆の感激を興起し萬歳聲裡に閉會した。軍樂隊員は五十餘の大編成で、服装は未だ戰時氣分を脱し得ず武裝して居たので一部の非難もあつたやうである。

此の演奏曲目は昭和二年六月十八日に於て、再び戸山學校軍樂隊に依つて演奏された。二十二年後の今日、同じ曲目で演奏されても誰一人不思議を抱くもの無く満足して居つた。音楽は演奏表現が第一の比較すべき點ではあるが、過去の軍樂演奏も立派なものであつたことが想像される。因に昭和二年の曲目には番外としてテノールの川崎仵の歌劇二つが加へられオーケストラ伴奏が附せられてあつたのである。

八月十二日午後七時、日比谷公園音楽堂第二回演奏 指揮 海軍々樂隊長 吉本光藏

- | | | |
|---------------|-----------------|-------------|
| 一、前衛隊 | 行進曲 | オード、ヒューム作 |
| 二、賀節 | 大序の曲 | エワ、フホン、フロー作 |
| 三、波 | ワルツ舞曲 | ローザー作 |
| 四、歌劇 | 「ローヘン格林」中の佳節抜萃曲 | リヒアルド、ワグネル作 |
| 五、長唄 | 雛鶴三番叟 | 海軍々樂隊調曲 |
| 六、華盛頓郵報 | 行進曲 | スーザー作 |
| 七、歌劇 | 「藝妓拔萃曲」 | シドニー、ジョンソ作 |
| 八、西班牙國トレド市の舞曲 | | オード、シユーム作 |
| 九、長唄 | 越後獅子 | 海軍々樂隊曲 |
| 一〇、タ立 | ガロツプ舞曲 | ヨワニ、シユトラウス作 |

當時のプログラムは極めて貧弱な紙に謄寫版印刷といふもので、それも一般民衆に與へたものではなかつたのである。

海軍々樂隊は艦隊司令官及鎮守府司令長官旗艦の増加定員として設けられて居る爲、陸軍の如く多人數の組織でなく約半數といふ二十六名であつた。

- | | | | |
|--------------|-----|--------------|----|
| フリユート及ピツコロ | 一名 | エス、クラリネット | 一名 |
| ペー、クラリネット第一、 | 二名 | ペー、クラリネット第二、 | 二名 |
| 同 | 第三、 | コルネット第一、 | 二名 |

つたもので、筋は日本人を馬鹿にしたつまらないものであるが、作曲は中々面白い通俗的な興味の深いもので歓迎されてあつた、考ふべきことである。

九月二日午後七時、日比谷公園音楽堂第三回演奏

一、行進	ミユツシナン	カ	ー	ル
二、大序	エグモンド	ベ	ー	ト
三、歌劇	夏夜の夢	ト	ー	マ
四、ヴァルス	夜會の招待	ウ	エ	ベ
五、ガロツプ	汽車の進行	プ	ー	エ
コルネット第二、	一名	ト	ロ	ム
トロムベツト第二、	一名	コ	ル	ノ
コルノー第二、	一名	コ	ル	ノ
テノールホルン第一、	一名	テ	ノ	ール
テノール、ボザウネ第一、	一名	テ	ノ	ール
バス、ボザウネ	一名	バ	リ	ト
エス、バス	一名	ベ	ー	、
小太鼓(トライアングル、カクタネット)	一名	大	太	鼓
プログラム中の「歌劇藝妓中の拔萃曲」は英國の作曲家ジョンスが我が國の風俗を描寫した喜歌劇として定評のあつたもので、筋は日本人を馬鹿にしたつまらないものであるが、作曲は中々面白い通俗的な興味の深いもので歓迎されてあつた、考ふべきことである。		一	名	
		ト	ロ	ム
		コ	ル	ノ
		コ	ル	ノ
		テ	ノ	ール
		テ	ノ	ール
		バ	リ	ト
		ベ	ー	、
		大	太	鼓
		一	名	

一、舞踏行進 黒奴嬉戲

二、歌舞伎 レー、エリニー

三、ヴァルス 青籃

四、長 唄 勸進帳、上編

五、名曲拔萃大集

ホルズマン

マスネー

マルジ

陸軍々楽部

ラ タ ア ン

陸軍々楽隊の演奏の八月二十六日の豫定が雨天の爲め延期されたものである。三千名の聴衆が集まり、美しい音楽を聴き乍ら喜を以て初秋の宵を心ゆく迄アプレシエートした。殊に第五の汽車の進行曲は當夜の大喝采を拍したものである。九月五日以後の演奏は中止となつた。それは日露議和條約に對して一部慨世の國民は大いに之を痛憤し其の結果我が國最初の國民大會が日比谷原頭に開かれ、事態は更に險惡化して遂ひに帝都に戒嚴令が敷かれるに至つた。其後人心が未だ鎮靜せず群衆の集合を警戒して音楽演奏の催がなかつた。而して此の休止中に音楽堂の改造の輿論が起り、翌年三月日比谷音楽堂の聴衆席改造が實現された。

従來は、聴衆席が音楽堂より低い位置にあつた。それ故に演奏される音楽は充分遠くに達しなかつたので、今後之を改めて音楽堂の北方に半圓形にて自然傾斜の小丘を設け、その斜面を十二分の一とし、平地より高さこと十尺音楽堂の地盤より五尺の高所にあつて聴くことが出来るのである。尙以前八百人の聴衆席が千五百人に改造、費用二千八百八十圓、内千六百八十圓自然傾斜の埋立に充て、他は鐵欄と樹木代に充てた。

明治三十九年五月、凱旋大觀兵式を青山練兵場に於て舉行、翌日、市主催凱旋大音楽會を日比谷公園にて催した。

七月一日午后四時半、日谷比公園音楽演奏 吉本海軍々隊長指揮

一、結婚行進曲

二、佛國風喜歌劇序

三、金髪の美人 ウォース舞曲

四、歌劇「共同射的」抜萃曲

五、方舞曲

六、埃及風行進曲

七、歌劇「ツアムバ」進曲

八、告別小夜樂

九、歌劇「アリエレ」大詰の曲

一〇、三鞭酒 ガロツプ舞曲

七月二十二日午後六時、日比谷公園音楽演奏

永井陸軍々樂長指揮

一、龍騎兵行進曲

二、アンジューの雛菊序曲

三、軍歌劇マスコツト

四、ドノー岸の婦女 ヴアルス

五、ホト、ギスとコホロギ ポルカ

六、神記豫言劇中の大行進

メンデルゾーン作

ケラベラ作

ゴツドフレイ作

ウエーバー作

カール作

ストラウス作

ヘロールド作

ヘルフルド作

オト、バツハ作

ルムビイ作曲

クロドミール作

マイエルベール作

オードラン作

ストローズ作

ヘルズオーク作

マイエルベール作

七、大歌劇 又芳

八、意想詩 怪物輪舞

九、喜劇 (長唄)

一〇、「サンブルノエ、ムーズ(佛國觀兵式)

七月、雨のため延期九日に催す、日比谷公園音楽堂演奏

吉本海軍々樂長指揮

一、北米合衆國々旗行進曲

二、歌劇「ネブカドチザール」王序曲

三、「マンドリナーター」伊太利府の歌曲

四、朝報ワルツ舞曲

五、帝國波蘭國風舞曲

故兒玉大將哀悼のため送葬行進曲

六、歌劇、露帝と木匠拔萃曲

七、林中の消息 (コルネット獨奏曲)

八、聖詠曲「天地創造中の合奏曲」

九、准歌劇「日本藝妓」拔萃曲

一〇、「ヨナーヴ」伊國陸軍行進曲

八月十七日午后七時、日比谷公園音楽演奏

永井陸軍々樂長指揮

グ ノ ー 作

ムホニツク、サンサン作

ロ ス キ ー 作

ス ー ザ ー 作

ヴ エ ル デ ー 作

ザ ラ デ マ ル 作

ス ト ラ ウ ス 作

イ ー ヴ ア ン ス 作

シ ョ バ ン 作

ロ イ ツ イ ン グ 作

シ エ ッ フ ア ー 作

ハ イ ド ン 作

シ ョ ー ン ス チ 作

一、高等學校行進曲

二、歌劇 假裝舞踏會序

三、ミカド ヴァルス

四、長唄 汐汲の一節

五、軍歌劇デロフレ、デロフラ姉妹

六、タンホイザー大行進

七、森林の反響 變則ボルカ

八、シヤレー劇中 (バス獨奏)

九、大歌劇 ワルキユル

一〇、カンドニアン人 方舞

九月二十九日、日比谷公園海軍奏樂

一、來因聯隊、行進曲

二、歌劇セミラミ女王序曲

三、夢の面影ウオース舞曲

四、カヅアチーネ調、歌劇中の獨唱短歌

五、獨逸大學生歌カドリユー方舞曲

六、タンホイゼル拔萃曲

スーザー作

オーベール作

ビュガロン作

ルコツク作

ワグネル作

リエデール作

アダム作

ワグネル作

クラール作

ロツシニー作

メイスラー作

エツケルト作

カール作

ワグネル作

ワグネル作

ワグネル作

七、ワルツアー咏嘆調、(クラリネット獨奏)

八、ロマネスカ 伊太利古代の輪舞曲

九、印度デルヒの叛亂 戦争行進曲

一〇、ナイト、ヒュオン ガロツプ舞曲

プログラム四の曲はフランツ、エツケルトの作曲で我が國に於て陸海軍雇教師當時の作、獨唱の形式を具備する短い歌である。本曲はコルネットを主とした想象的獨奏曲である。従來午后六時の開始であつたが、午后四時開會となり一回は一回毎に漸々に數を加へ民衆の態度も變つて來た。此の日總衆五千。

十月十四日、日比谷公園海軍演奏 吉本樂長指揮

一、ウユルツブルグの射的會、行進曲

二、歌劇 白夫人序曲

三、大洋、歌謡曲

四、生活を樂しめ、ワルツ舞曲

五、觀艦式記念行進曲

六、歌劇 カルメン拔萃曲

七、尼寺の鐘、夜樂曲

八、牛闘者とアンダルシア人、歌劇假裝舞拔萃曲

九、音樂の詐偽、接續雜曲

カール 作

チツコフ 作

ブリツトハム 作

プロインリヒ 作

ベツカー 作

ボエルヂユ 作

シユーベルト 作

ストラウス 作

吉本樂長 作

ピゼー 作

ウエリイ 作

ルーピンスタイン 作

シユライネル 作

一〇、氣輕な人種、ガロツプ舞曲

ストラウス作

五番目の觀艦式行進曲は參列した記念の曲で其三段に「君が代」の頌歌を用ひて複旋律を捩るたのは御召艦の各艦列間を徐航觀閲あらせられたるを寫したものであると。(作者の言葉)

此日、小春日和の氣候で聽衆は一段の愉快を加へた。

十月十八日、日比谷公園演奏 永井陸軍々樂長指揮

一、膠州灣行進曲

エツケルト作

二、秋の七草 箏曲

三、蒼空的海色 ヴァルツ曲

ミルリヨケル作

四、歌劇 名射の隱士

ウエーベル作

五、百年祭の行進

ワグネル作

六、タランテール、ボレロ曲

ダツソンワイユ作

七、クラリネット獨奏曲(阿部樂手)

ベルグソン作

八、マルタ劇 別名リシユチン市の大序

フロマブ作

九、マルタ本劇抜萃

フロマブ作

一〇、予と俱に 方舞ランシエー

永井建子作

第一の「膠州灣行進曲」の作者は我傭致師を辭して日本を去らんとする直前、端なくも獨逸軍隊が山形省の一角に關係せしより直に其意を綜合して中外に公にせし曲であつて、全曲盡く輕快な殊に支那劇大湖船の歌及樂器をも咀嚼

した邊り、珍奇にして一異彩を呈したのである。

第十の「予と俱に」の永井建子作曲は、先年舞踏の流行に際し、實驗上その心持で推敲した作で運動會向、天長節の夜會向にもと作曲せられたものであると。

明治四十年四月十四日午後三時、日比谷公園奏樂 永井陸軍々樂長指揮

- 一、自由の感謝 行進曲
 - 二、小鈴劇の大序
 - 三、願望ヴァルス曲
 - 四、北方の清音
 - 五、才女 ボルカ曲 (コルネット獨奏 高津樂手補)
 - 六、歌劇泥匠
 - 七、眞珠 ヴァルス曲
 - 八、英國雜曲集
 - 九、初子の日 長唄調
 - 一〇、博覽會行進曲
- スーザー作
ヘロルド作
ベートーヴエン作
キユスレー作
ロエハ作
オーベール作
シガルド作
エツケルト編
エツケルト作

八番、一〇番は元傭教師エツケルトの作である。博覽會行進曲は日本博覽會の戰捷の國光を仰ぐ市民の歩を歌つたものである。

四月十八日午後三時、日比谷公園奏樂 吉本海軍々樂長指揮

一、花の面影 行進曲

二、歌劇大序ウキンブルの三人女房

三、牛闘の勇士西班牙風 ワルツ舞曲

四、菩提樹の歌曲

五、「笑談」 パリトン獨奏曲

六、歌劇「タンホイゼル」行進曲

七、小歌劇「アンゴ夫人の娘」拔萃曲

八、春鶯囀 ボルカ舞曲

九、歌の花束 接續曲

一〇、回遊列軍 ガロツプ舞曲

五月十二日午後六時、日比谷公園奏樂 永井陸軍樂々長指揮

一、フリドリヒ第二世劇の序

二、平和の連鎖、獨、塊、伊三國歌徐行進

三、歌劇 靈船の一節

四、小野の山 箏曲

五、神托豫言劇の接續歌

六、フィデリオ大序

カム ベル 作

ニコライ 作

トラレスラチユール 作

シユールベルト 作

グランドシヨーンス 作

ワグネル 作

レコック 作

ソロヰキオーフ 作

エツケルト 作

ハイエル 作

ヘルスオーグ 作

ヴァルネーフエル 作

ワグネル 作

マイエルベル 作

ベートーヴェン 作

七、雪 ヴァルス曲

八、チクネル男爵の方舞

九、悪魔の分據劇抜萃

一〇、日本行進新曲

行進新曲は戦捷を祝し大山元帥に捧げたものでパリズアンに類似した趣もあるが、新しい形式を用ひた剛健の曲である。

五月十六日午后三時、日比谷公園奏樂 吉本海軍々樂長指揮

一、横須賀行進曲

二、悲劇「エグモンド」大序曲

三、蘇格蘭の歌集 カレドニア方舞曲

四、歌劇「クラナダの狩屋」咏嘆調及齊唱曲

五、鐵床の音 ボルカ舞曲

六、歌劇「ローヘングリン」序曲と祝言の歌

七、テレーゼ夫人 ワルス舞曲

八、歌劇「ファスト」抜萃曲

九、秘れたる戀 ガヴォット舞曲

一〇、土耳其の巡邏兵行進曲

メ ト ラ 作

ストロース 作

オーベール 作

アイスレル 作

ヨ ル ク 作

ペートーヴエン 作

ゴータイア 作

クロイツェル 作

バルロウ 作

ワグネル 作

ファウスト 作

グ ノ ー 作

レ ッ シ ュ 作

ミカエリース 作

横須賀行進曲は露艦「ドミトリ、ドンスコイ」が横須賀入渠の際乗組の軍樂長ヨルクがこの曲を作り、時の司令長官午田中将に敬意を表したもので、この軍艦は日本海の大戦で脆くも沈没したのである。

六月九日、日比谷公園奏樂 永井陸軍々樂長指揮

- 一、歌劇拔萃行進曲 アンゴラ夫人の娘
 - 二、大序ブリュスキノ
 - 三、海賊劇中の詩曲
 - 四、多羅河底の眞珠 ヴアルス
 - 五、獨逸の學生歌集
 - 六、大序アレキサンドロー、ストラダフ
 - 七、歌劇 ミニヨン拔萃 其二
 - 八、方舞コチリヨン編
 - 九、日清俗曲集 其二
 - 一〇、匈牙利人行進
- ル、一作曲の日清俗曲集は俗曲を藉りて純粹の洋曲化せしもので味はひのある曲である。彼は拔刀隊の歌の作曲者で明治二十年頃の軍樂教師である。
- 六月三十日午后四時 日比谷公園奏樂 木村海軍々樂長指揮
- 一、ラデツキ將軍行進曲
- ル コツク 作
 ロ シニ 作
 ヴ エルデ 作
 ス トロ 作
 エ ツケルト 編
 フ ロト 作
 ト ー マス 作
 ル ル 作
 シ エラ 作
 ス トラウ 作

二、歌劇(他郷より歸郷)大序

三、我一生は愛と樂み ワルツ

四、各者の爲めに非ず ポルカ

五、土耳其の巡邏兵 行進曲

六、勇將 行進曲

七、舞踏要求

八、女學生 ランサー舞曲

九、經文 接續雜曲

一〇、登れ彼方に ガロツプ舞曲

日比谷公園奏樂堂の奏樂は斯如く、陸海軍々樂隊の演奏に依つて専ら其の効果を收めるに至つた。音樂進展時代に至つては十年一日の如き演奏であつたが、それでも非常な興味を以て迎へられてゐた。

其の後漸次音樂の普及するに及び奏樂堂の狹隘を告げると同時に、交響曲等の演奏に不尠不便を感ずるに至つた。さり乍ら新音樂堂の出来る迄十八ヶ年間何等の支障も無く演奏され、公園奏樂の確實なる基礎を固めたのは實に此の奏樂堂の賜物であつたのである。

日本の音樂史上由緒ある此の四阿家式の奏樂堂は彼の大震災で倒壊したのであるが、再び修繕されて昔のままの姿を現はしてゐる。

メンデルゾーン作

ストラウス作

メンゼル作

ミカエリース作

シューベルト作

ウエーベル作

キエール作

マイエルベール編

ハウスト作

第四十五章 中央に於ける音樂演奏會の趨勢

由來音樂會は其の時代の社會的情勢に支配されて行くものであるが、日清戰爭の勃發と同時に全音樂會の傾向は果然、熱烈な愛國精神に統一された。義勇報國音樂會とか、恤兵釀出音樂會とか、或は恤兵義捐演奏會とかいふ名稱の音樂會が當時の榮耀を賑はした。それが漸く戰爭の終焉を告ぐる頃に至るや祝捷音樂會、戰死者遺族慰安とか、傷病兵慰安とかいふ種類の演奏會に變り慈善的音樂會に變貌された。

義勇報國的精神に篤い我が國民として斯くあることは疑ふべき餘地なく、全國的な趨嚮と見るべきである。

一説に當時警視廳の取締法規が改正され、音樂會が興行物と同一に取扱はれるやうになつたので、開催手續が非常に繁雜になり、其の手續を省く爲に濫りに慈善的名稱を冠するに至つたとも言はれて居るが、是れは勿論取るに足らぬ牽強附會の言辭に過ぎないと思ふ。

維新後全盛を極めた明清樂も日清戰爭の勃發と共に全く其の影を潜め、之に變るに邦樂家の活躍が著しくなつて來たのは特筆す可き現象である。音樂會といふ音樂會には、洋樂曲の外に必ず邦樂曲の演奏が加へられ、時代の反映は斯くの如く鮮明であつた。無論、邦樂のみの演奏會は非常な勢で頭を擡げたのである。

明治二十年代の歐化主義全盛時に於ける大日本音樂會や、鹿鳴館時代に於て見るやうな洋樂曲のみのプログラムは次第に尠くなつて來た。殊に東京音樂學校が高等師範學校の附屬校となつた事は、洋樂界の勢力を相當減殺するに至つた。大日本音樂會の如きも明治二十七年に至つて中止するに至つた。陸海軍々樂隊の出征の爲演奏者に不足を告げ

たとは言へ、唯一の洋楽團體の中止は正しく時代の反映と見なければならぬ。

其後再び洋樂勃興の機運に向ひ、明治三十一年一月、上原六四郎を會長とする明治音樂會が設立された。上原六四郎は東京高等師範學校附屬音樂學校の主事として其の名高く、邦樂を西洋音樂の如く組織的なものに組立てた第一人者で、我が國音樂の貢獻者である。

二月には一旦中絶して居た大日本音樂會が復活して再び鍋島直大侯を會長に擧げ、副會長に伊澤修二、庶務主幹に小山作之助、技術主幹に芝葛鎮、四元義豐、古矢弘政、工藤貞次、幸田のぶ、東儀季綱、上眞行等が新に選任された。

此の二つは私設の團體として此の時代の中堅であつた。

演奏家としては、提琴家のデットリヒの歸國後は帝大のケーベル博士の獨舞台で、ヴァイオリンの幸田延子教授がケーベル博士とのピアノ二重奏等が演出されてゐた。ミセス・バットやミス・プロツクサムスの兩教師などが居てもステージ向ではなかつた。

明治三十二年、アウグスト・ユンケルが東京音樂學校の音樂教師として招聘されるや、我が樂壇は急激に活氣を呈した。同年四月、畏くも 皇后陛下行啓に際してはユンケルのヴァイオリン、ケーベルのピアノ合奏の御前演奏が行はれた。ユンケル教師は、我が國交響曲の父と呼ばれた丈けあつて、既に此の時代に於て、交響曲の演奏の完璧を期すべく計劃されたのである。併し彼の頭腦と我樂人との距離があまりに懸絶してゐた爲め、久しい間の準備時代が設けられてゐたのである。

明治三十三年には東京音樂學校にオルガニストのノエル・ペリーが外人教師として傭聘された。彼は演奏家といふよりも音樂教育家で、樂友會俱樂部のコンダクターとなつたことがあつたが、平凡で到底ユンケル教師とは肩を並べ

ることが出来なかつた。

明治三十四年には宮内省樂部にオースタリー人、グリエルモ・ドヴラウキツチが來た。ケーベル博士の伴奏で屢々ヴァイオリンソロを演出した。

明治三十五年に至つてピアノストのハイドリヒが東音校の教師として來朝した。而して一流音樂家が漸く上野の森に勢揃ひをするに至り、帝大のケーベル博士も亦兼務をして之れに合流した。

五月に 皇后陛下行啓あらせられ、ハイドリヒ、ケーベル、ユンケル等の外人教師は御前演奏の光榮に浴し、我が樂壇に光明を與へた。絃樂部は全然同校職員生徒のみで十分であつたが、管樂の部は極く少數で官内省樂部の伶人も加つて居た。しかしこの冷人中には同校の囑託で平素管樂を生徒に教授してゐた者もある。當時之等の管絃樂の演奏者數は四十五六人で（明治三十七年現在）樂器の種類は二十近くもあつた。指揮者のユンケルが交響曲を演出した事も窺はれる。

ユンケルはドヴラウキツチの華奢な指揮振りや、ノエル・ペリーの平凡なのに比して極めて熱情的な處があつた。演奏が始まるや滿身の力をパトーンに集めたといふ調子で、同校の呼物となつた。合唱と奏樂を、既に彼の時代に築き上げたのである。しかし當時の雜誌批評には舞踏タクトであるとかパネ的タクトとか、あまり全身に力を入れ過ぎると批評されてゐた。

又ドヴラウキツチは樂風も伊太利風の頗る淡彩なもので自らヴァイオリンを手にして指揮されることもあつた。當時人々は之を評して曰く「癖であるとか、或はヴァイオリンを小脇に抱へるのは氣取つたのであるとか、或は又、右向け左向けして指揮するのは運動會の綱引の應援の様であるとか……」總て當を失した批評であり幼稚な解釋であつ

たことが判る、が之を今考へて見るに、指揮者は其の演奏表現に如何に主力を注いでゐたかと窺はれるのである。例へば第一ヴァイオリンが其の音が冴えない場合には、自ら樂器を取つて弾くといふ様な風に出たもので、音樂に未熟であつた當時に於ては斯くあるべきは當然と思ふのである。晩年のドヴラウキツチはヴァイオリンを抱いてステージに立つた事は一度も無かつた。無論彼の高弟にヴァイオリストが多く輩出してゐたからでもあらう。

次に邦人の指揮者として指摘すべき人は此時代には殆ど無かつた。ニコライ堂の合唱指揮の金須嘉之進、雅樂部の芝萬鎮、學友會の小山作之助、山田源一郎等あつた。又陸海軍々樂隊には明治廿年以來の指揮者があるばかりである。

最後に此の時代を終始しての音樂演奏者を擧げて見れば、ケーベル博士あるのみで之に次いで幸田延子教授である。ユンケル教師もドヴラウキツチも永い方ではあるが、三十年代に過ぎない。又、ヴァイオリンの頼母木駒子、幸田幸子、ピアノの神戸絢子、橋糸重、前田久八等も當時の演奏家である。高折宮次等も居るが彼は地方廻りが多かつた。ピアノの久野久子やボーカルの柴田環、外山國彦は此時代の末期から活躍をはじめた人々である。

此の間にミス・カイゼルの如き獨逸ヴユウルンブルグのコンセルバストリウム音樂院出身の獨唱家等の來朝があつて數年間中央樂壇に其の華を咲かせた。彼は明治三十七年九月より約半年間上野校聲樂教師に囑託された。

次にデピスのヴィオロンセロ、ゾーマス、ジン等の獨唱、マダムアレキサンダーのピアノ等が演出されたが、一時的のものであつた。

演奏指揮者としてはデットリヒの歸國後は其の人なく、寥々たるものであつたが、ユンケルの來朝に依つて管絃樂團體が確立した。其翌年宮内省にドヴラウキツチが來朝して同省樂部と明治音樂會の指揮に當つた。此の二者を除いてはノエル・ベリーがゐるが演奏表現の上に比較にはならなかつたと言はれた。

上野校の合奏並管絃樂指揮はユニケル教師で、管絃樂團は同校職員及在校生の團結に依るものである。此の時代に於ける演奏會プログラムを年次別に掲載する。當時を忍ぶ資料にもと努めて其儘掲載したのであるが、不詳の點は寛恕を願ひ度い。

自明治二十七年
至明治四十一年 中央樂壇に於ける演奏會

明治二十七年四月十五日

テットリヒ送別演奏會 於高師附屬音樂學校 明治二十一年十一月以來音樂教師として其職に盡したのであるが、同校校友會主催のもとに開催されたものである。外人の集るもの多く頗る盛會であつた。

明治二十七年五月五日午後八時

慈善音樂會 獨逸公使バーン・フォングートシュミットの主催 於鹿鳴館

一、ピアノ連彈(ピアノ二台)

遠山、麻生、橋、松野

甲、グノー作曲 マーチ 乙、メグリオ作曲 ミニユエツト

二、獨唱、甲、アム、ウーフェル、デス、フルツセス 乙、アム、ブルンネン
グラスマン夫人

ピアノ伴奏 ケー ー ベル

『抑揚頓座能く適ひ音聲の美容貌の壓拍子滿場を破るが如く暫くも止まらず再び登壇して一禮するや一層拍手劇しく遂に馳りて逃ぐ』

三、三曲合奏 都の春 鍋島直大作詠

今井慶松外三名

『合の手は面白く熟練の功が見えた』

四、ヴァイオリン合奏

音樂學校生十名合奏

甲、シ、リアノー　乙、モーメント、ミュージカル　ピアノ伴奏者　チツトリヒ

丙、イン、デル、トロイカ

『チツトリヒは伴奏しながら眼鏡越に處々を目戒^{ミツ}みてゐた』

五、ピアノ獨彈

グリフキンのソロなるも病にてチツトリヒ代つて彈奏

擬日本曲　獨逸協會の教師エーマン作曲

『第一節は清樂漫板流水の趣を含み第二節は箏曲の質を帯び第三節は洋曲に歸るやの思があつた』

六、ヴァイオリン獨奏

ウキョータン作曲、コンサート第五

チツトリヒ

ピアノ伴奏　ケーベル博士

『一點の欠もなく或は百鳥の囀り合ふが如く或は帛^{ウメ}を裂く如く聞くさへ愉快にて喝采拍子滿場に止まず』

一、ピアノ、トリオ

ピアノ　フォン、ケーベル

モザート作　トリオ

ヴァイオリン　チツトリヒ

ヴァイオラ　ラムゼゲル

『珍らしくして喝采を得た』

二、獨唱

ヘルブ夫人

甲、リーベストロイ　乙、イヒ　リーベ、ヂヒ　丙、エス、プリンク、デル、タラ

『恨むが如く或は泣くが如く聽者をして斷腸せしめた』

三、ピアノ獨彈 ウンガーリツシエー、メロデー

ケーベル博士

四、唱歌合唱 甲、富士登山 乙、薩摩瀉

音樂學校男女生六十餘名

「チットリヒの指揮にて合唱せしが、甲曲の如きは男女の行者が隊伍を作つて遠近四方より誦名登山の様を想像せしめて中々の出来であつた」

五、薩摩琵琶 河中島

吉水經和

『琵琶曲は一體洋人には聽馴たるものゝ、少なきものなるが、四方よりヨイヨイの賞聲切りに起るに依り西洋婦人の中には却つて其賞聲に膽を減せるものもあつて中々妙であつた』

六、ヴァイオリン、オルガン、ピアノ合奏

音樂學校生

甲、クウキンテット 乙、ミニユエツト 丙、ファンドール

『午后十一時迄首尾よく局を結んだが雲上の貴顯各國公使等實に滿場立錫の地なく近來に無き珍しい盛會であつた』

この會は近來に無い音樂家揃の演奏會で、明治二十七年五月に於て斯様な演奏のあつた事は現在の人々にはあまり知られて居ない。左に演奏者の來歴を示せば

ケーベル博士は明治二十六年帝大哲學科教授として來朝した人で、モスコイ音樂學校出身のピアニストである。上の野の音樂學校でグランドピアノを新に購入した時にも、ケーベル博士は其の披露演奏會にオーケストラの伴奏で、ピアノソロの演奏を爲し、ピアノソロイストとしての定評があつたのである。ケーベル博士に對する當時幸田延子の批評を寫して見ると『ケ博士の演奏はピアノの音は細めの美しいもので、例へば細い線かきの繪の様な感じがする。又

博士には獨特の洒落た粹な拍子があつて、それが又非常に美しいものである。リストのロツシニーなどは實に美しい
彈方をする云々」この時代唯一のピアニストであつたのである。(東京音樂學校の部参照)

ルードルフ・ヂットリヒは上野の音樂學校の備教師である。澳國人でウキンナの音樂學校卒業時にヴァイオリン並
オルガンの二科優秀のため第一等賞を得た人である。明治二十一年十一月赴任、明治二十七年七月歸國した。(東音校
の部参照)

明治二十七年六月十六日

ヂットリヒ送別演奏會 於鹿鳴館、大日本音樂會主催

一、マリタナ歌劇大序

式部職音樂部員

二、婦人唱歌 龍の宮 (ピアノ伴奏付)

附屬音樂學校生徒

三、雅樂 陵王(童舞)

式部職雅樂部員

四、獨唱 タマイの物語

ミス・プロクサム

五、バイオリン獨奏 甲、レヴェクー 乙、コンセルト第一番末句

ヂットリヒ

一、洋琴及ヴァイオリン聯奏

ケーベル

ヒীগノツト歌劇の大幻想曲

ヂットリヒ

二、獨唱 月の出しほ

ミス・プロツクサム

(ヴァイオリン オブリガード)

ヂットリヒ

二、交響曲 第一番(第二部三部) 甲、アンダンテ 乙、メニエツト

式部職音樂部員

四、洋琴獨彈　ゴス進行曲

ヂツトリヒ

五、バイオリン(洋琴伴奏付)

音樂學校生

甲、夢の曲　乙、春の歌　丙、エントラクテ、ガボツト

六、唱　歌　菅原道真(ピアノ伴奏)

音樂學校生

明治二十七年七月八日午前九時

雅樂々友會大會　於雅樂部稽古場

一、歐洲管絃樂

甲、最愛人指彈　モールライ作　乙、ローベルト歌劇拔萃　マイユルベル作

二、歐洲吹奏樂

甲、密獵の曲ウエルツォーレー　ロルチング作　乙、ハレルヤ　ヘンデル作

三、雅　樂　神樂並舞樂(省略)

同二十七年十月

義勇奉公報國音樂會　於彌生館

一、歐洲吹奏樂　甲、電歌　オフチャ　乙、箏曲　松盡し

東京音樂隊

一、仙花樂　(マンドリン、ヴァイオリン、ハープ合奏)

メンダリン　琴の家小仙

八千代獅子

バイオリン　天羽秀子

ハープ　四竈富士子

一、手風琴合奏 フロリー 越後獅子外一曲

日本橋幼年音楽會

一、唱歌 君が門 軍艦

女子十餘名

一、歐洲吹奏樂 ゼ、ハイスクールカヂツトマーチ 越後獅子

市中音楽會

一、唱歌 君が代 (満場起立合唱)

伴奏吹奏樂 市中音楽會

此の會は音楽雜誌社主催のもので、府下屈指の各音楽團體の集合を見たものであるが、洋樂器を使用したものゝ曲
目のみを挙げ其他は全部省略したものである。此の會の情況が當時の雜誌に次の如く書かれてゐる。

オルガンに合せて唱歌するあり、メンダリン(マンドリン)バイオリン(ヴァイオリン)、ハーブの合奏は耳新し
く吹奏樂は勇壯である云々、尙當日の收入の内金百圓は其の翌日陸軍恤兵部に献納した。仙花樂とは四瀧納治の命
名か、このマンドリン演奏記録は我が國最初と云ふべきものである。

同二十七年十二月八日

恤兵義捐演奏會 主催音楽學校學友會

演奏曲目が無いが、邦樂と洋樂との會で唱歌合唱、ピアノ獨奏、ヴァイオリン、オルガン合奏それに箏、三絃の邦樂
も演出された。

明治二十九年三月七日 神田美土代町青年會幻燈會に於ける音楽演奏

一、吹奏樂 ゼグラジエートルマーチ

横濱市中音楽隊

二、幻燈 軍歌

雪夜の斥候 勇敢なる水兵 夜營の月 兵士のからみ

一、吹奏樂 ミツクスドカンデイ

二、獨唱 低音獨語 遊歴石 シューベルト作

三、フルート、ソロ セレナーデ ヘンデル曲

四、バイオリン、フルート合奏

レペリー コンコニール作

五、ピアノ獨彈 騎兵

六、三曲台奏（七小町）

一、吹奏樂 ファンタジー ジコフ作曲

二、幻燈 軍歌

北白川宮能久親王殿下、三角湧、東北果兒、輜重兵、戦死者を弔ふ歌、凱旋の歌

三、吹奏樂 ゼフターアピクマーチ サウスウエル作

同二十九年四月十八日

同聲會音樂會（幸田延子紹介演奏）

一、ピアノ聯彈

ボアエルデュー作 才女

學友會員

内田 菊子
由比くめ子

二、唱歌 甲、遊獵歌 ウェーベル曲 鳥居枕作歌 乙、那須與一

三、ヴァオリン、ソロ メンデルゾーン作 コレチエルト第一部

學友會々員
幸田 延子

横濱市中音樂隊

納所 辨次郎

奥 好 義

山田 源一郎

奥 好 義

内田 きく子

山勢松 韻外三名

横濱市中音樂隊

凱旋の歌

横濱市中音樂隊

四、三曲台奏

蜂作、吾妻獅子

箏 山 勢 松 韻

五、風琴獨奏^{オルガン} バツハ作 コンチエルト

三絃、胡弓 外 六 名

六、音樂四部合奏

ヘンデル作 第一番

第一ヴァイオリン 幸 田 延 子
第二ヴァイオリン 山 田 源 一 郎

七、クラリネット獨奏^ソ モザート作 ラーゲト

ヴァイオラ 納 所 辨 次 郎
セロ 比 留 間 賢 八
來 賓 吉 本 光 藏

八、ピアノ、ソロ ベートーヴェン作 ムーンライトソナタ

遠 山 甲 子
幸 田 延 子

九、獨 唱(獨逸語)

甲、シューベルト作 死と娘 乙、ブラームス作 五月の夜

一〇 ヴァイオリン合奏

バツハ作 フーゲ

ヴァイオリンソナタ拔萃

小關得、頼母木駒、
荒井慎、林蝶、十田
十、小關ステ、鈴木
フク

十一、唱歌合唱

甲、夢 シューマン作 佐藤誠實作歌

學 友 會 員

乙、春の夕景　ハイドン作　旗野十一郎作歌

十二、三曲合　奏岡安祐

山勢外五名

幸田延子は女子海外音楽研究生の最初の人で、ウキンナ音楽學校に七ヶ年も學び、二十八年十二月歸朝したのである。當時我が樂壇に異彩を放つたことが想像される。來賓吉本光藏は陸軍々樂長で、後に陸軍海外研究生として渡歐してクラリネットを専攻した人である。

同二十九年四月十八日

慈善音樂會　於東京本郷區春木町中央會堂

當時發行の音楽雜誌掲載の情況を擧ぐ、當時を忍ぶ好資料なれば、

午後六時より本郷春木町の中央會堂に於て修繕費募集の爲め慈善音樂會を開いた早や五時頃には來會者堂前に群集し開會間も無く場内寸地を餘さず轟々と詰めかけ樓上樓下殆んど人面を以て充された六時の時計を合圖に會主登壇して開會の大意の述るや忽ちにして壇上に顯れたるは五六歳より十二三歳迄の幼兒八名即ち少年樂隊の一團恰も人形如く整列した教師の指揮鞭揺くや奏樂起りて君が代の頌曲を初め各國の國歌六七曲滿場をして一咳なからしめた第二番には町田杉勢外門人二名の三曲節度能く揃ふて傍聽婦人を首肯せしめ第三番には三遊亭圓遊の落語殆んど滿場の願を解かんとして忽ち壇を降る、第四番には老練なる歸天齋正一の手品達摩の一藝よりトランプの早術一々種を明して參觀人の溜息を開散せしめた第五番には山下利助の薩摩琵琶川中島的一段相も變らず學生多衆の奇聲を發せしめたり第六番にはアレキサンドル夫人の洋琴獨奏にして其妙は僅に専門家の耳を樂ませし如き感あり第七番には笹本義郎の劍舞本能寺にて山下利助の詩吟最一ツやれ／＼の聲と拍手の響く第八番には竹本錦昇軒花澤扇左工門の義太夫姥ヶ餅

第九番には大日本音楽倶楽部員六七名管風樂器の吹奏なりしが樂曲の高尙なる割には奏者の素人も混り居る様に聞える抔と評する傍聴者も有しが處々より好男子……色男……の賞鑒頻りに起りてサクソホンの頸拍子を氣取らしめた第十番には再び少年樂隊のマーチ、唱歌、ワルツ無邪氣の稚兒演奏中に睡眠を催ふしながら矢張り調子を合して居る間に傍聴者の切望にて四百餘洲其他春雨黃海の大捷、成歡の役等數曲を演ぜしに奏樂の了ると共に滿場をして再び會堂修繕の第二音樂會を促さしむるに至らん乎と思ふ計りの喝采ヲ博した。

同二十九年七月四日

三陸海嘯義捐音樂會 同聲會主催 於上野音樂學校奏樂堂

一、唱歌

學友會々員

甲、流れし家 ウエブスター作曲 大和田建樹作歌

乙、湖上 メンデルゾーン作 旗野十郎作作歌

二、ピアノ、ソロ アンダンテー(ソナタ十四ノ二)ベートーヴェン作

三、唱歌(女聲二部合唱)

甲、なき友 メンデルゾーン作 中村秋香作歌

乙、歸る雁がね メンデルゾーン作 中村秋香作歌

四、ヴァイオリン獨奏

甲、カヴァチナ ラフ作 乙、ベルベツウームモピン ボーム作

前田 久 八
内田 きく 子
鈴木 ふく
林 て 子
寺田 こう
幸田のぶ 子

五、唱歌

甲、慈善 グローヴァ作 中村秋香作歌

乙、義勇 メンデルゾーン作 旗野十一郎作歌

六、箏曲 五砵

七、ピアノ聯彈

ミニエツト(ヴェンセンゾド、メグリオ發行)

八、唱歌(ヴァイオリン、ピアノ伴奏付)

廢宅 グノー作曲 中村秋香作歌

九、ピアノソロ ゼブルーク バーバー作

一〇、ヴァイオリン合奏

甲、ノクテユルネ フィールド 乙、モーメントミュージカル シューベルト作

一一、唱歌 薩摩瀉 シューマン作 鳥居枕作歌

一二、箏曲 西行櫻

同二十九年七月四日

樂友會 嘯災義捐音樂會 於東京精養軒

一、吹奏樂 豪壯徐行進行曲

二、同 歌劇密獵大序

學友會 會員

山勢松韻、今井慶松

由比くめ、上原つる

塚越くが、鈴木とめ

林てふ、幸田こう

ヴァイオリン 頼母 木こま

遠山 きね子

學友會 會員

學友會 會員

山勢松韻外三名

エフシューベルト作

ア・ロルヂング作

三、同 ウキナナ府森林譚 舞踏曲

四、舞樂 打球樂

五、同 貴徳

六、吹奏樂 歌劇フェラモルス華燭舞曲

七、同 歌劇カルメン幻想曲

八、同 歌劇グラナダ府一タ大序

九、同 林中禮拜歌曲

一〇、同 奉祝徐行進曲

一一、同 歌劇ファルスタアフ幻想曲

一二、同 ハレルヤ

イ・ストラウス作

アルピンソン作

ゲ・ビツセツト作

クロイツエル作

エフ・アアプト作

ユフ・エツケルト作

ホ・ニコライ作

ゲ・エフ・ヘンデル作

明治三十年三月三十日

ヘンリー、ミルク、セロ演奏會 於橫濱バブリツクホール

彼は伯耳莚ブルツセル府ローヤルオペラの専屬のヴィオロンセロの彈手で、數曲を演奏した。聴衆は外人が多く日

本人の聴衆は數人に過ぎなかつた。

同。三十年五月五日午後二時半

音楽學校學友會臨時演奏會 於東京音楽學校奏樂堂

一、唱歌

會員

甲、二見が浦 ローレ作曲 本居豊頼作歌

乙、去率擧たな シルヒエエル作曲 旗野十一郎作歌

二、ピアノ獨奏 フリウリングスリードメンデルゾーン作曲 會 員 山田源一郎指揮
員 横山鹿衛子

三、唱歌(男聲四部合唱) 會 員 上眞行指揮

甲、飲酒歌 アルミン・フリー作曲 旗野十一郎作歌

乙、春の名残 チュルネル作曲 旗野十一郎作歌

丙、川のながれ クレゼル作曲 大和田建樹作歌

四、オルガン獨奏 フーガ パツハ作曲 會 員 神山末吉

五、ヴァイオリン ピヤノ合奏 ソナタ 幸田延子作曲 會 員 幸田幸、鈴木ふく

六、唱歌 會 員 幸田延子

甲、朧月 グロヴァー作曲 本居豊頼作歌

乙、日いづる國 ヘルン作曲 中村秋香作歌

七、唱歌 四部合唱 會 員

甲、妾薄命 ユングスト作 林はる歌 乙、竹生島エンゲルスベルケ作 由比くめ歌

八、ヴァイオリン獨奏 アンブロンプチユーリーディング作 會 員 鈴木ふく子

九、唱歌 會 員

八島浦 ウエーベル作 鳥居忱歌

指揮 小山作之助

一〇、ピアノ獨奏

橋本正作

甲、ヴァイオリンリードヒエン シューマン作 乙、ダンス エバギョール ヘル作

一一、唱歌

會員

甲、戀の歌 マエヤーベル作 鳥居忱歌 乙、新版圖 アドル・フェンセン作 旗野十一郎歌

一二、ヴァイオリン合奏

會員並其他

甲、アンプロブチュー シューベルト作 乙、ガヴオット シット作

幸田延子作曲の「ソナタ」の演奏は珍しいもので、本邦最初の劇作「ソナタ」の發表である。プログラムに依ると幸田幸子、鈴木ふく子、幸田延子の三人で出演してゐるが、ヴァイオリンが二人でピアノが一人であつた。鈴木ふく子は同年十一月に病死した。

同三十年五月八日午後二時

同聲會春季演奏會 於上野音樂學校奏樂堂

一、唱歌 女聲三部合唱

學友會員

左保姫 中村秋香歌 マルケツケ作曲

二、ヴァイオリン獨奏 コンサルチノー シット曲

頼母木こま

三、唱歌合唱

學友會々員

甲、友の交 山比条子歌 クレンゼル作曲 乙、新版圖 旗野十一郎歌 アドロフェンセン曲

四、胡弓 鶴の巢籠

五、ピアノ聯彈

エグモンド中のオヴァチユーア ベートーヴェン作

六、ヴァイオリン合奏

レゲンデ、ウキニアウスキー曲

七、箏曲 新調

八、ピアノ獨奏 アプロンブノ シューベルト曲

九、ヴァイオリン及ピアノ合奏

コンサルト バハ曲

一〇、唱歌

甲、藤の色香 大和田建樹歌 マエアペーア作 乙、朝の歌 佐々木信綱歌 メンデルゾーン作

同三十年五月廿九日

慈善音樂會 於高師附屬上野音樂學校奏樂堂

一、ピアノ連彈

エル、イタリヤナ、イン、アルゲリ、ロツシニー作曲

アレキサンダー及ヴェール女

二、日本固有音樂演奏 箏、胡弓、三絃

今井、萩岡、山室

山室保嘉外二名

横山鹿枝、高木ちか

橋本正作、瀧廉太郎

頼母木駒、原田ふじ

幸田 幸、小關すて

鈴 木 ふ く

山勢松韻外一名

内田 き く 子

ヴァイオリン 幸田 延、幸田幸子

ピアノ 橋 米 重

學友會々員

三、獨唱 ツー、アンジー ハルトン作曲

四、ピアノ獨彈 ワルゼルス、ブリースリッド ヴグネル作曲

五、ヴァイオリン獨奏 コンサルチノー シット作曲

六、獨唱 アヴェマリア グノー作曲

七、ピアノ獨彈

a、バルカローレ ルピンスタイン作曲

b、ルアーフソデイー
ブラームス作曲

一、合唱歌 オブ、フェーリー、ワンド ワルレース作曲

二、日本固有音樂合奏 胡弓、三絃 岡安砦

三、獨唱 デー、ヴィーニ・ナン、ターダー モザート作曲

四、ヴァイオリン、ピアノ合奏 コンサート パツハ作曲

五、獨唱 ノビル・シグノル メーヤビヤ作曲

六、ピアノ獨彈

a、マルザウルクス ゴーダルド作曲

b、バピロンス シューマン作曲

エツチ・ゼイ・ジン

アレキサンダー

頼母木駒子

エディス・デイヴェル

ドクトル・ヴォン・エベル

ゾーマス及ジン

山室、萩岡、山室

ゾー マス

兩幸田及橋糸江

ゼームス・ワルター

ケーベル

同三十年六月 第一土曜

學友會音樂會 於高師附屬上野音樂學校奏樂堂

無會費（入場無料のことか）で公衆の參聽を縦した。

同三十年六月二十八日

慈善音樂會 於高師附屬音樂學校奏樂堂

府下八王子町大火義捐金募集の音樂會で、主催は内外貴顯紳士有志である。

同三十年七月十日

高師附屬音樂學校卒業演奏會 於上野同校奏樂堂

第一、唱歌

甲、大塔の宮 フリードリツヒ・シルヘル作曲 文學博士黒川眞頼作歌

乙、恵み ルードキツヒシルキツヒ作曲 旗野十一郎作歌

第二、ピアノ獨奏

甲、ウキーゲンリードヘン シューマン作曲 乙、タランテン ロラシユホルス作曲

第三、唱歌

甲、山中幽閉 ポニツケ作曲 黒川眞頼作歌

乙、天津日嗣 ライバルド作歌 大和田建樹作歌

第四、オルガン連奏

ソナタ第一 バツハ作曲 同 天谷秀

第五、唱歌 奥野の狩倉 ハイドン作曲 鳥居忱作歌

第六、ヴァイオリン合奏

甲、リード(オルガン伴奏) シューベルト作曲

卒業生 其他

乙、クライネ、ファンタジー、ユーベル、アイネ、
ルッシェン、メロデー(ピアノ伴奏) ブルーメンステンゲル作曲

第七、唱歌

甲、愛しき我が友 マイエルペール作曲 中村 秋香作歌

乙、少年老易 チュルネル作曲 旗野十一郎作歌

参列するもの千人を算した。

同三十年十月二十六日

學友會臨時音樂會 於音樂學校奏樂堂

一、單音唱歌

山田源一郎指揮

甲、領巾魔嶺 シルレル作 鳥居 忱歌

乙、火炮の雷 ウァルヘルム作 人里見義歌

二、ピアノ聯彈 ソナタ モツァルト作曲

高木ちか、神戸あや

三、祝祭日合唱

小山作之助指揮

甲、君が代 古歌 林廣守作曲 乙、勅語奉答 勝伯作歌

小山作之助作曲

四、オルガン聯奏 ミニユエト ワグネル作曲

天谷 秀、太田勸七

五、四部合唱(四重唱)

安達 かう子

甲、秋の野 ファクス作曲 旗野十一郎作歌

高木 ちか子

乙、窓の秋風 ファクス作曲 中村 秋香作歌

瀧 廉 太 郎

丙、初雁 フランツ・アイリヒ作曲 鳥居忱作歌

石野 嶺

六、ヴァイオリン合奏

甲、プリューリングス アブシード ベステル作曲

乙、ガヴナント シツト作曲

七、祝祭日唱歌合唱

甲、一月一日 千家尊福作歌 上 眞行作曲

上 眞行 指揮

乙、紀元節 高崎正風作歌 伊澤修二作曲

丙、天長節 黒川眞頼作歌 奥 好義作曲

八、ピアノ獨彈 バラード ラインベルゲル作曲

瀧廉太郎 演奏

九、唱歌合唱

上 眞行 指揮

甲、羽衣 ハウトマン作曲 鳥居 忱作歌 乙、秋のみのり

大和田建樹作歌

一〇、ヴァイオリン、セロ、オルガン及ピアノ合奏

インテルメツツオ シンフォニー マスカニハー作

一一、單音唱歌

小山作之助指揮

甲、大 鵬 キュッケン作 鳥居忱歌 乙、義勇奉公 リスル作

全國聯合教育會各府縣代議員を招待し、側ら一般公衆にも來聽を許したものである。

プログラム第一合唱乙の火砲の雷はウキルヘルム作曲の獨逸國歌、キデ、ワハト、アムラインである。又十一、

の甲、大鵬はキユツケン作で佛國々歌マルセーユである。國歌觀念に乏しかつた當時が想像される。

同三十年十月二十七日

音樂演奏會 於東京本郷中央會堂

- 一、吹奏樂
- 二、オルガン獨奏
- 三、尺八合奏
- 四、オカリナ合奏
- 五、オートハープ獨彈
- 六、ピアノ獨彈
- 七、三曲合奏
- 八、二人聯唱(二重唱か)
- 九、吹奏樂勸進帳
- 一、ピアノ獨彈
- 二、吹奏樂ファースト
- 三、獨唱
- 四、オートハープ獨奏 ヘンデル曲
- 五、清樂

陸軍々樂隊
ガントレット
荒木竹翁一家

マクチャヤ
ケール
町田杉勢女外二名
コーツ、マクチャヤ
陸軍々樂隊
ケール
陸軍々樂隊
ガルス
マクチャヤ
長原春園同梅園其他

六、吹奏樂マリタイナ

オートハープソロやオカリナの合奏が珍らしい。

同三十年十一月廿日午後一時半

東京音樂學校同聲會秋季演奏會 於同校奏樂堂

一、單音唱歌 甲、秋の夕 乙、對水感別

二、ヴァイオリン獨奏 コンサルト

三、唱歌 甲、旭日照波 乙、百舌鳥

四、オルガン獨奏 トツカタ、エ、フリーガ

五、獨唱、獨逸語、甲、幻影 乙、若尼

六、ヴァイオリン合奏

甲、リード、オーネ、ヴォルテ 乙、ロンディノ

七、唱歌 甲、此御山 乙、浦島ノ子

八、ヴァイオリン獨奏 ファンタシア、アッパソナタ

九、四部合唱 甲、窓の秋風 乙、君の恵

一〇、ヴァイオリン合奏 プチット、シンフォニー

一一、ピアノ獨奏 ソナタ

一二、唱歌 富士艦

陸軍々樂隊

學友會々員

賴母木こま

學友會々員

島崎赤太郎

幸田のぶ子

會員及學友會員

學友會々員

幸田こう子

會員及學友會々員

會員及學友會々員

橋 糸 重

學友會々員

同三十年十二月廿四日午後一時半

學友會演奏會 於同校

一、ピアノ獨彈 ロンドーアヲトウルカ アルクミユルレル作 田中やそ

甲、昨日今日 中村秋香歌 メンデルゾーン作

乙、書生の旅 鳥居忱歌 ケルネル作

三、オルガン獨奏 第三、クアルテット第一部 シューマン作

四、獨唱歌(伊太利語) フリア ストラデラ作

五、ヴァイオリン合奏 ソナタ ウォールフアール作

六、唱歌合唱 指揮 小山作之助

甲、海國 旗野十一郎歌 マンヂス作

乙、忍ぶ岡 中村秋香歌 モーリング作

七、ヴァイオリン、セロ、ピアノ合奏

ラ、セレナタ ブラীগ作

八、唱歌 指揮 小山作之助

甲、夢 佐藤誠實歌 シューマン作

乙、富士の卷狩 鳥居忱歌 メデルゾーン作

櫻井信彰、益山鎌吾

瀧 廉太郎

太田 勘七
高木 ちか子

九、ピアノ獨弾 無言歌 メンデルゾーン作

神戸 あや子

一〇、四部合唱

安達かう、高木ちか

甲、安薄命 林はる子歌 ユングスト作

瀧 廉太郎

乙、竹生島 由比奈子歌 エンゲルスベルゲル作

石 野 嵐

一一、ヴァイオリン合奏 甲、船歌 ヘツスネル作

乙、インデルシエンケ ヒルレ作

一二、唱歌 四條巖 鳥居枕歌 スポーア作

指揮 小山作之助

明治三十一年一月三十日

同聲會 第一回集會 (演奏の部)

一、開會の辭

小山 理事

二、ピアノ獨奏 ベートーヴェン作ソナタ二七番ノ二

遠山 甲子

三、演説 音楽改良論

渡邊 校長

四、ヴァイオリン獨奏 バツハ作 チャツコーナー

幸田 延子

七、獨唱

幸田 延子

一、トステイー作 ヴレイモリール(羅甸語)

二、ケルビニー作 アヴェマリア(伊太利語)

同三十一年一月十三日

學校唱歌講習會、七、八回講習證書授與式

一、開會披露

二、風琴 進行曲

三、證書授與 四、會長告辭

五、風琴 歌調 二種

六、七回修了賞總代 謝辭

七、八回同 同

八、唱歌 埴生宿 岩清水

九、風琴 舞踏曲

一〇、唱歌 皇國の四季高き譽

一一、風琴 オペロン拔萃調 片鼓の響

一二、唱歌 花月 雪

一三、ヴァイオリン(ロマンス)

一四、唱歌 領巾麾嶺 日章旗

會場 神田錦町三丁目一、伊澤修二會長、役員 小山、山田、小出、高木、橋本、丸山

同三十一年一月廿二日午後六時

明治音樂會第一回演奏、於神田區美土代町青年會館

會員 吉川 サイ子

會員 平野 龜松

伊與木 タキ子

神戶 長二郎

會員 一同

會員 武下 かの子

會 員

講師 高木 たけ子

音樂部 會員

來賓 石野 巍

伴奏 瀧 廉太郎

會員 一同

一、歐洲管絃樂 トイフェルスマーチ フランツスツペ作

來賓及會員

二、三曲合奏 松竹梅

山勢松韻外三名

三、クラリネット獨奏

井上京次郎

甲、デル、フライシエツツ ウエーベル曲 乙、デー、ワイセーダーメ エルデユー曲

四、三部合奏

歌 納所辨次郎

ロマンス 大和田建樹歌 ロパウデ曲

セロ 比留間賢八

伴琴 島崎赤太郎

五、歐洲管絃樂

來賓及會員

甲、ドロメライ シューマン作 乙、ドナウ、ウエルレン

六、長唄 つるかめ

來賓四名其他囃連中

七、洋琴獨彈

前田 久八

甲、ミニエツト モザート作 乙、大洋の浪 プレーク作

八、三曲合奏 松 風

來賓山勢外三名

九、風琴獨奏 アリア パツハ作

天 谷 秀

一〇、長唄 勳進帳

來賓 其他

一一、歐洲管絃樂 ボルジア

來賓及會員

明治音樂會は、島崎赤太郎、納所辨次郎、比留間賢八等の主唱に依つて設立したもので會長は音樂學校主事の上原

六四郎である。ファストヴァイオリン等には、露都の音楽學校出身の金須嘉之進等も加はつて居たのである。

明治三十二年四月二十一日

皇后陛下東京音楽學校行啓に際し謹奏したる曲目、於同校奏樂堂

一、合唱 懐き御影 中村秋香作歌 モツアルト作曲

卒業生及生徒

二、ヴァイオリン二部合奏 ドツベルコンツェルト バツハ作曲

幸田延子、幸田幸子

三、ピアノ獨奏 ソナタ パテティーク ベートーヴェン作曲

橘 糸 重

四、ヴァイオリン、箏合奏 雪の朝 ハツ橋檢校調

生 徒

五、獨唱

幸 田 延 子

甲、船出 フランツ作曲

乙、デル、ノイギーソゲ 佐々木信綱作歌 シューベルト作曲

卒業生及生徒

六、ヴァイオリン合奏

甲、アンダンテ グルツク作曲 乙、ルール バツハ作曲

卒業生及生徒

七、箏 都の春 山頼松韻作曲 鍋島直大侯作歌

生 徒

八、ヴァイオリン、ピアノ合奏

ソナータ ルービンシタイン作曲

ユンケル教師

九、合唱(管絃合奏) 國の光 黒川真頼作歌 メンデルゾーン作曲

ケーベル教師 職員生徒及卒業生

明治三十二年五月七日午後二時

一、合唱

甲、ふるき都 武島羽衣作歌 シューマン作曲

乙、野薔薇 旗野十一郎作歌 ワインワルム作

二、ヴァイオリン及ピアノ合奏

ソナタ ベートーヴェン作曲

三、ピアノ獨彈 ヴァリエーション ベートーヴェン作曲

四、ヴァイオリン獨奏 レゲンデ ウィニアウスキ作曲

五、ピアノ聯彈

ヘブリーデン、メンデルゾーン作曲

六、ヴァイオリン、セロ及ピアノ合奏

トリオ

七、獨唱

甲、リーベストロイ、ブラームス作曲

乙、ツアウベルリード、マイエルヘルムンド作曲

八、ヴァイオリンセロ獨唱

東京音楽學校生徒

幸田 かう子

山縣 きく子

瀧 廉 太郎

エム、ペリー

遠山甲子、橋米重

山縣きく、神戸あや

エム、ペリー

イー、ペリー

幸田のぶ子

ヘルプ夫人

イーペリー

九、ヴァイオリン獨唱

ピアノ伴奏 コンサルトミリートール、ベリオ作曲

一〇、合唱(絃樂及ピアノ伴奏) 薩摩潟 鳥居忱作歌 シューマン作曲 東京音楽學校

來聽者甚だ少く、且曲目中第四のヴァイオリンソロ及第八のヴィオロンセロソロは演奏者に差支あり、五のピアノ連弾もピアノに差支あつて見合せになつた。ユンケルのヴァイオリンソロは非常の喝采を博し、ベートーヴェンのソナタを再演奏した。

同三十二年十一月二十六日

東京音楽學校秋季演奏會、於同校奏樂堂

一、合唱

甲、天浮橋 鳥居忱作歌 カンオリーニ作曲

乙、秋風吟 武島又次郎歌 ハイドン作曲

職員及生徒

二、ヴァイオリン獨奏 アンダンテ、レリギオソ、トーマ作

頼母木コマ子

三、絃樂合奏

甲、アゼストリート グリーク作 乙、アニトラスタンツ グリーク作

職員及生徒

四、ヴァイオリン、ヴィオラ、ピアノ合奏

シンフォニー、コンセルタンテ、モツァルト作

ユンケル

五、管絃樂

幸田延子、ケーベル
職員及生徒

甲、モリス、ダンス ジエルマン作

乙、シュツバーツ、ダンス ジエルマン作

六、ピアノ獨奏 ソナタ ベートーヴェン作

七、合唱 研究生 瀧 廉 太郎
職員及生徒

秋の別 大和田建樹作歌 クレムゼル作曲

夕映 中村秋香歌 伊太利亞 ニーポリタン曲

八、合奏 ヴァイオリン及ピアノ ユンケル
ソナタ ベートーヴェン作 ケーベル

九、合唱(管絃伴奏) 高津宮 鳥居忱作歌 メンデルゾーン作 職員及生徒

アウグスト、ユンケルは此年來朝の音楽學校備教師でヴァイオリンを得意とし、コンダクターとして亦其名を有してゐた。

明治三十三年七月七日土、午後三時半

東京音楽學校演奏會 於同校奏樂堂

一、合唱 甲、樂徳 旗野十一郎歌 バハ作 乙、蘇武 鳥居忱歌 メンデルゾーン

二、ピアノ、ヴァイオリン、ヴィオラ合奏 教師 ケーベル

ファンダンテ、メニエツト、アレグレツト 教授 幸田 延子

モツアルト作 教師 ユンケル

三、獨唱

來賓 青木 某子

甲、グーテ、ナフト 乙、エス、ハット、ヂー、ローゼー

丙、リーベル、シヤツツ フランツ作

四、ピアノ、ヴァイオラ合奏

アレグロ、アバシオナタ アンダンテ、ウンボコ、アダジオ、

アレグレット、グラツイオソーヴィヴァフェ プラームス作

ケール ユンケル

五、合唱

生徒一同

甲、王昭君 武島又次郎歌 メンデルゾーン作

乙、告別 黒川真松歌 メンデルゾーン作

明治三十四年六月四日

皇后陛下東京音楽學校行啓の際演奏したる曲目、於同校奏樂堂

一、合唱 懐き御影 中村秋香作歌 モツァルト作曲

生 生 徒

二、ピアノ獨奏 ソナテイナ クレメンティ作曲

豫科生 小林 禮

三、唱歌齋唱 馬上の少年、寄宿舎の古釣瓶、箱根八里、(中學唱歌)

生 徒

四、ヴァイオリオン獨奏 コンチエルテイノ シット作曲

専修部三年 前 田 襄

五、オルガン獨奏 プレールヂウム メンデルゾーン作曲 師範部二年

齊藤 左右 田

六、管絃樂行奏

ラルゴー ヘンデル作曲

職員及生徒

七、合唱 橘の薫 鳥居忱作歌 ケルビニ作曲

八、箏

越後獅子

九、ピアノ四八聯彈 メヌエツト メグリオ作曲

一〇、ヴァイオリン、ピアノ、オルガン合奏

ローマンス サンサーンス作曲

一一、ピアノ獨奏 ソナータ ハイドン作曲

一二、女聲四部 斯道 中村秋香作歌 ロシニー作曲

生 徒

豫科生 上原三郎

山本富三郎、今井とし

選科生 上原喜勢、吉原ちよ

柳田かう、渡邊さつき

幸田延子、橘糸重

島崎赤太郎

專修部三年 櫻井フキ

專修部三年 前田襄、櫻井フキ

天野ハツ、安井コウ

明治三十五年五月六日

皇后陛下東京音楽學校行啓に際し謹奏したる曲目、於同校奏樂堂

一、女聲合唱

甲、賤の亭瓊 佐藤誠實歌 メンデルゾーン作曲

乙、清流 武島又次郎歌 ブラームス曲

二、オルガン獨奏 ビルド、デル、ローゼ ライヒハルト作曲

三、ピアノ聯彈

生 徒

選科生 島地あつ

選科生 原ミチ

選科生 原ミチ

ソナータ クラウゼ作曲

四、ヴァイオリン獨奏

甲、シシリアノ ヘンデル作曲 乙、ガボット バツハ作曲

五、ピアノ獨奏

甲、ソナテイナ クラーク作曲

乙、ソナテイナ クレメンテイ作曲

六、ヴァイオリン二部

シンフォニー、コンセルタント ダンクラ作曲

七、ピアノ獨奏 ソナータ デュセツク作曲

八、箏

新 晒 深草檢校作

九、ヴァイオリン及ピアノ

ソナータ ヘンデル作曲

一〇、ピアノ獨奏 ソナータ ベートーヴェン作曲

一一、合唱(管絃樂伴奏) 橘の薫 鳥居忱作歌 ケルビニ作曲

選科生 上原セツマ

櫻村タマ

器樂部一年 鈴木淑

同 一年 高橋トヨ

研究生 前田襄

安井コウ

器樂二年 木多かつ

助教授 今井新太郎

器樂一年 金澤柔能

選科生 青木茂

教師 ユンケル

教授 幸田延子

教師 ハイドリツヒ

教師 ケーペル

職員及生徒

同三十五年五月三日、中央會堂の音樂會

同會堂修繕費を得る爲め高木壬太郎、小野美太郎、コーツノルマンノ發起にて去る三日音樂會を舉行した。演奏曲目は近衛軍樂隊の管樂合奏、カウエン夫妻の合唱、ケーベルのピアノ獨奏モリソン夫人の獨唱外尺八三曲、薩摩琵琶等であつた。

同三十五年五月五日午後七時

千代田音樂會、於九段偕行社

演奏者はユンケル教授、幸田延子の合奏、ミス、カイゼルの獨唱、明治音樂會の歐洲管絃樂、其外に邦樂が二三あつた。曲目が無いのが遺憾である。聽衆二百人午後十一時に閉會。

獨唱者ミス、カイゼルは獨逸の人で同國ヴュルンブルグのコンセルファトリウム音樂院に於て、音樂者として學習すべき音樂的教育をうけ、後特に同校教授ストツクハウレンに従つて獨唱の修練をした人で、其眞價名聲の如何は既に定評があり、此時代の獨唱家として唯一のものであつた。

明治三十五年七月五日午后三時

東京音樂學校卒業演奏會、於同校奏樂堂

一、合唱

豫科修了生其他

甲、歸國 本居豐穎作歌 アプト作曲

乙、きらめく星 國風歌 武島又次郎作歌

一、ピアノ獨奏 ソナタ、ネ クーラウ作曲

豫科修了生 東儀哲三郎

- 一、クラリネット獨奏(絃樂伴奏) カンタビレ ロッシニ作曲 專修部卒業生 中村忠雄
 - 一、合唱(管絃伴奏) 海上朝暈 鳥居忱作歌 キール作曲 職員及生徒
 - 一、オルガン獨奏 ファンタジー フランク作曲 專修部卒業生 三上タケ
 - 一、ヴァイオリン獨奏 ソナタ ヘンデル作曲 研究生 安井コウ
 - 一、獨唱(管絃伴奏) アリア(パウルス) メンデルゾーン作曲 選科生 青木兒
 - 一、合唱(管絃伴奏) 愉快 旗野十一郎作歌 ハイドン作曲 職員及生徒
- 同三十五年十月十八日十九日

北海道土人救済慈善音樂會、於上野音樂學校

- 一、吹奏樂 喜劇往古の詩人 陸軍々樂學校員
 - 一、獨唱 カウエン夫人
 - 一、ピアノ獨彈 ケーベル博士
 - 一、マンドリンとヴァイオリン合奏 比留間賢八、石野純
 - 一、獨唱 大山多滿
 - 一、ピアノ獨彈 ケーベル博士
- 第二部は邦樂であるから省略した、主催は近衛公、島津公、松前子の各夫人で土人教育費募集の爲である、ケーベル博士は慈善音樂會にはよく出演した。
- 同三十五年十一月十五、十六日

東京音楽學校秋季音楽演奏會批評(音楽の友)

十一月十五、十六日兩日午後一時半開會にて滿員の盛況は例年に優ること幾十等、今その演奏曲目の順序によつて一般の評判を記さんとはするなり。

合唱、甲種師範科第二年生と本科第一年生との聯合にして去年九月入學の學生、それを指揮せしは同じく去年九月より本校に教鞭を振らるゝ多梅雅なりいでや惡評を聞かさむ、元來この曲は既に聞き古したる舊式の燒きも直さぬそのまゝにて作者クオータルとありしは恐らくシュアタルの誤りなるべし、その演奏は如何に熟達したりや定めて御手のものならんと思ひしが古き曲といへ極めて容易ならざる曲と見えて随分聽者の耳を苦しめたりき、去年新參の學生としては或は重荷に過ぐるには非ざりしか就中ソプラノの哀れなる聲は如何に聽者の手に汗を握らせしか、さてもあらん之れは前座にて候ふものをと誰やらの小聲。

次に可愛らいき小ピアノニストの獨奏ゼクスバリアアオネンといふ曲にて作者は本誌口繪にて御名じみのベートーヴェンといふ名家、而して小ピアノニストは例の小林禮なり、相變らず小さきが故に可愛らしく見ゆるその柔かなる手にて例の自由自在なる演奏の妙味は蓋し校中の呼びものなるべし幸田延子の門下にはたしてこの怜才あり、小林は今瀧も聞きつ見つその發達の著しきには感服の筈にて將來大に有望の評多し、幸に自愛していよ／＼忘ることある可らずとなん、次は合唱籍のあした、これは毎年必ず聞かざるゝ曲なり或は會歌ともいふのにや、流石上出来にて難ずるところを知らざりき人生といふ歌は新曲なるべしとはいへ素人は先づ感服せざらん、随分困難なるべき筈の曲なるを必死と勉めたる者もありしと見えて吾人は左のみ不可の點を聞き出し得ざりき、次は大變なるものなり、ヴァイオリン幸田延子、ピアノはユニケル教師、オルガンはベリー教師の伴奏にこれには只感服の外にいふ處を知らず、或人

口に袖を當て微かに曰くお延様にはお茶の子賽々の曲ですものを難くせのつけやうが無い筈です今度はコンサルトか何か久しぶりで大物に力瘤入れて聴かして戴き度いのよ待つてますからね、時にその聲を制していふ者あり、兎角大家は聴衆を安く見積つて易きものゝ骨の折れないものでまけといて呉れるからひどい。

次はオルガン獨奏にてメンデルゾーンのアダヂオトリシクノモデラート二曲なり、奏者は有名なる、天谷秀にて音のひき立たざるはオルガンの常ながら、兎角聞きばえのせざるは、あたら骨折る甲斐の知られざるこそ返すくも惜しけれ、次は第一部の終りの獨唱合唱管絃合奏と仰々しき見出しにて廿一回猛士とても鹿爪らしく看板を掲げられたるまでは實に立派なり、一步進んで伴奏の樂士におツ取り捲かれて一人ツクネンと屹立する不動尊は例の青木はじめにてすべての出で立ち道具建では甚豪壯にして先づ人目を驚かしめたりき、然るに之れは音楽の發達したる故か、音楽を聞くにはあらで見るといふものなりといふ人あり、そは何故ぞとなじれば乃ち答へて曰くが妙なればこゝに紹介せん、ソロは本校にて名高き病人では無い、名人なる青木兒が層一層の勉強を以て、流暢優麗なる聲にて先づ歌ひ出でしが、如何にせん曲と歌とは全然絶對的に一致せず、これは作者があまり吾が田の水をのみ澄まして増さんとせし故にや吾が身をのみ飾らんとせしにや立派なるべき曲にて不立派なる釣り合ひの歌詞にて聴衆の退屈するよりは之を立派に聴かしめんと勉めし青木兒の身より萬斛の熱汗の流れたる氣の毒さには轉た同情を寄せし人もありつらん、しかも其歌たるや演奏時日に接迫して初めて見るを得たる俄作りの實め塞け然たりしは獨りこの作者の特病として人々の大に氣遣ふところなりといふ。

ユンケル曰くソロのところだけは英語のまゝにせばや、傍より或人口をさしはさんで如何に内地雜居の世なればとてそればかりはなどいふ人ありしもことにおかしかりきとぞ。

第二部 管絃合奏シンフォニーにしてシューベルトといはれし人の作なり、これは本會當日の呼び物にして指揮者たるユンケル教師は平素より既に全力を集中して教導したるものなりといはれしが、成る程これは立派なる演奏なりき、例の舞踏的コンタクトに一層の興味添へて聴衆は思はず微笑を洩らして満足の意を表はしぬ、平素の練習研鑽の苦勞察するに餘りあり當日諸氏が背上に出でし汗の量と熱とをばかり度かりしが如し、此曲は作者が中途まで作りて未だ充分の成功を見ざるに三十餘歳の身を以て世を早うしたるものその傑作中の一節なるべし、されば曲のよきところへ揃て加へて當日の全力を集中したることなれば恐らくは完全に近かるべし。

次には竹柏園の八佳人の中のひとりといふなる橘の糸重子が日頃埋木のかひなき名をば今日こそ知らさめとの出で立ちけなげに、腕に捻りかけて、身はかよはき婦人にてありながら此の難曲を奏すること元より彼の御手なみには左ほどにも覺し召されざらんなれど吾人の目よりは稍々重荷の感無なきこと能はず、彼が苦しんでこの難曲に献じられたる精神は吾人の等しく謝意を表すべきところなり、實は吾人はかゝる大曲を褒貶するの眼識なきを耻づるのみ徒らに文筆を弄して名玉に瑾を附くるは本意に非ず、おほけなくも拜聴したる嬉しさは、返す／＼も吾人を完全なる聴衆と見上げて自ら苦しんで賞献せられしその誠意を謝するのみ一點の欠處を摘むことも能はざるなり、かゝる難曲を難とせずして發想も頗る當を得、極めて巧妙に、行く雲も足を停めつべく梁の塵も動きぬらん、ピアノのわたりに小さき羽のそびらに生ひたる稚兒が上に下にさまよひいざよひ、あこがれて聞き惚る、ミューズの神の今は何處にかなど思はれていとあでやかにたふとしとこそ思ひつれ、まことに師匠ケーベル博士的の撰曲にして指づかひも發想も頗る髣髴たるものあり、吾人は彼に安く見積られずして此大曲に拜聴し得たるを喜ぶの餘りに只だ賞讃の言葉のみを並べぬ、されど物皆一得一失一長一短あるは免れ難き習ひにして一言注意したきことあり、他の義にあらば演奏終りて樂

屋へ退く時に譜まくりには履はれたりし人と共にチヨコ〜と小走りして入られたるは稍々人格に障ることかと思ふは
酷か、彼は既に吾人が大家として並べ立てたる一人にておはしましけるに、大家ともいはるゝ程の人が身の動作をも
可愛らしき乙女ごゝろにまかせて安うも保ち給ふとては其の聞こえ必ずよろしからざることにて候ふよ但し曲はバラ
ードと名つけられぬ、次は獨唱管絃合奏パウルスといふ曲にてメンデルゾーンの作曲なり、ソロの名手はそも誰ぞ、
速からん者は昔にも聞きぬ近からん者は目にも見よ、女學生のサイクリストの元祖ともいふべき自轉車乗りの名手に
て女子嗜輪會の幹事とやらに推されたる少女にして姓を柴田、名を環と呼べるゝ佳人なり、この少女が花の如き唇を
洩るゝソロのひびきに宇頂天外に飛び去らんとする者幾何ぞ、青木兒は男子の看板役、柴田環の君は女子部のかど
みと人おのづから其長處に服して貶すところを辨へず、無評好きの口わるきものも此の二人のみは番外に譲れるが如
し、兎角少女は愛嬌ありて可愛がらるゝものなれば吾人はその尻について雷同せず、大に賞揚して將來有望の言を惜
まざると共に氣取り方未だ子供らしき處ありて音色、發想等悉く大人らしきにひとり其身をゆすることは猶ほ名玉の
瑾か、初舞臺の上出来も伴奏の爲に聲を奪ひ消さるゝの虞れありしは遺憾なりき、之れ寧ろ彼の責めに非ずして伴奏
士の大に注意すべきことなるべし、さても次ぎには、ピアノの獨奏ファンタジーこれはヘルレルといふ人の作にて此
間來朝せられし教師ハイドリツヒが演奏せられたるもの、讀賣新聞に評して曰く、「翁の妙手は感心の外は無いとして
例の目の傾分から改め立てれば矢張り隙き間がある、絃を近く鍵盤の上に載せて左から右へ、右から左へ忙しげに蚤
とり眼で見廻すのは近視眼の故でもあらうが餘程變だ翁の演奏中に一人うしろの小洋琴に腰うちかけて餘念もなく聞
いて居たのはユンケル君、無作法も心づかないこそ目出度けれど、との言なり、彼は近視眼にあらず遠視眼なること
評者の御眼鏡遠いといふべきもの也あゝ名人これ知るのみ、最後に、合唱管絃伴奏(オルガン)愉快節にあらぬ愉快と

いふ歌なり、ハイドンの作にて天地開闢の曲（バリエーション）の一節なり、極めて賑かなる曲にして有名のものなり、既に人のよく知れる筈にして可なりの上出来なりき。

上手にて長きはよけれども、への字にて長きはあしかりなん、へたの長談講義ほど聞き苦しきは非ずといへば先づこゝにおほかたにて筆を措くべし、生徒の増加と共に入場券の多く出づる故に満員の窮屈なるも一入の景氣にて愈々頼母しかりけり。

東京音楽學校分教場試業會批評（音楽の友）

十一月九日午後一時開會、第一には唱歌なき友と漁夫とは女生徒に歌はれましたが前座の屑物中にも稍ましなのが無いとも限らない位の評しか出来ませうまい。次ぎに櫻井ふき子門下の高折宮次といふ十ばかりの黒いジャケツトを着た少年が平臺ピアノにかゝり小品を滞りなく奏したのは感すべく又愛らしくありました。淺羽千代子は洋服粉装にてヴァイオリンを奏したるが音律正確にしてスタイルよく十二三歳の愛らしき少女なるが大に有望なり、角倉あい、石田すと子にて箏曲松虫の連弾あり、原みちといふ人は、山根醫學士考案の改良服を着た少女でソナテイナ（クウラウ作）を巧みにやつてのけました。山本富三郎は今井教授の妹とし子と箏曲（千鳥）を合奏しました。この日オルガンは五回ほど出ましたが、趣味の分らぬ野生にも木田の、アドルフ進行曲と堀しん子のレ、タボリン（ラモー作）の二つは面白く聞きましたよ、吉原のピアノソナテイナ（クウラウ作）青木、奥山、横山三名の箏曲四段砧、最後の唱歌、夕照（レントツ作）これはこの日の大失敗もので、天狗の鼻柱を叩き折られたやうなものでありましたらう。こんなものばかり聞かされた日にや吾人はいくら素人だつておたまりこほしも無いことですよ。

明治三十五年十一月二十九日午後二時

精神病者慈善救済音楽會、於東京音楽學校奏樂堂

一、連獅子 二、浦島

三、三部合奏 メンデルゾーン作曲

ヴァイオリン ユンケル

ピアノ ケーベル

セロ デビス

(邦樂奏者省略)

四、獨唱・オーペロンの一部トラウエ、マインヘルツ ウエーベル作曲 青木某子

五、ヴァイオリン獨奏

甲、カンゾネッタ シモネッチー作曲

乙、マドリガル チャイコウスキー作曲

六、ピアノ獨奏 ファンタジー、オン、アン、オペラ、バイ、アレヴィ ハイドリツヒ

ステフエン、ヘルレル作曲

七、セロ獨奏

デビス

甲、レリジオゾ ゴルテルマン作曲

乙、エチュードカブソース 同作曲

八、獨唱

甲、フェルラツセン ボーム作曲

乙、ツアウベルリード マイエル、ヘルムウト作曲

青木某子

明治三十五年十二月四日

九、ヴァイオリン合奏

ドウエチニー　ゴダルド作曲

ウンケル、幸田　延

明治音楽會第三十回演奏會　於神田青年會館

一、管絃樂（建設視詞の行進曲）　ノツクスネル作

二、管絃六部合奏　寢よ小供　アプト作

三、獨　唱（英語）　イツト、イス、エナイフ　メンデルゾーン作

納　所　辨　次　郎

四、管絃樂　日曜日の兒童（ワルツ）　リツクスネル作

五、管絃四部合奏　イ、味覺と視覺　ブラント作　ロ、ブレチオサの歌一節　ウエーベル作

六、管絃樂　樂會の序曲　フランク作

七、ヴァイオリン連奏　シンホニー　ダンクラ作

多　忠　基、石野　巍

八、管絃樂　精れ髪　ボルカ、マシルカ　ライチツヒ作

九、管絃樂　ガロツプ

一〇、長　唄

明治三十六年一月十一日午後一時

國歌音楽會第一回演奏會　於神田大成學館内

一、ピアノ連彈

二、唱　歌　日本三景　一月の遊び　菊水旗

北村季晴、村岡祥太郎
會　　員

三、ヴァイオリン、オルガン合奏

四、ピアノ獨彈

五、ヴァイオリン連奏

六、唱歌 休の鐘 日本男兒

七、合奏 六段

八、合唱 須磨の曲 米國々歌 佛國々歌

九、合奏 萬歳樂

明治三十六年三月七、八日

東京音樂學校學友會演奏會 於同校奏樂堂

一、合唱

甲、大塔宮 *Silcher*. 作曲 黒川眞賴作歌

乙、領巾廳嶺 *Silcher*. 作曲 鳥居忱作歌

一、ピアノ獨唱 *Sonatina* · *Kuhlar*.

一、獨唱 告げよ、何の何めぞ(露語)

アレクサンドル、ザンデル

一、ピアノ獨奏

會 員

前 田 久 八

石野 巍、石原重雄

會 員

太田勘七、村岡祥太

郎、高折周一、石野巍

樂友俱樂部員

同 上

會 員

會 員 本 居 長 世

會 員 中 島 六 郎

會 員 天 野 あ い

Sonata in Ema' op 14 (Firstmove ment) Beethoven.

- 一、ソナタ 獨奏 Sonata. Wohlfahrt. 會員 東儀 哲三郎
- 一、オルガン 獨奏 Fantaisie in E flat major O Franck. 會員 古澤 きみ
- 一、獨唱 Aria from Oberon. "Traue mein Herz" Weber. 會員 柴田 環
- 一、ピアノ 獨奏 Sonata in F mozart. 會員 高橋 とよ
- 一、合唱
- 一、甲、松の深雪 Schubert. 作曲 乙、嗚呼赤心愛國の士 鳥居 枕歌 會員 高橋 とよ
- 一、箏 都の春 山勢松韻 作曲 鍋島直大侯 作歌 會員 村田みい、金澤やすの
- 一、合唱 會員
- 一、甲、夢 Schumann. 作曲 佐藤誠實 作歌 乙、吹く風 Weber. 作曲 黒川真頼 作歌 會員 小 林 禮
- 一、ピアノ 獨奏
 - a. Concllied. Mendelssohn. b. Spinnlied. Mendelssohn. 會員 小 林 禮
 - 一、獨唱 亡友を懐く Schumann. 作曲 鳥居 枕 作歌 會員 中 島 六 郎
 - 一、ヴァイオリン 連奏 Sonata. Handel. 前田 襄子、天野 初子
 - 一、ピアノ 獨奏
- 一、Sonata in gma, op. 19 (1. movement) B.ethoven. 會員 栗原 きん
- 一、獨唱 Adieu Schubert. 會員 吉川 やま

一、ピアノ獨奏

Sonata Pastorale in Cmf. op. 13. (Last movement) Beethoven.

會員田中やそ

一、合唱 橋の薫 Cherubin. 作曲 鳥居忱作歌

會員

明治三十六年三月

山勢松韻慰勞音樂會、於音樂學校奏樂堂

第一部 日本音樂省略

第二部 洋樂

一、合唱

甲、霜の且 — ボヘミヤ民謡 旗野十一郎作歌

乙、人生 シューマン作 武島又次郎作歌

丙、形見の刀 グリユツク作曲 鳥居忱作歌

二、ピアノ獨奏 リゴレット、ファンタジー リスト作曲

神戸 絢

三、オルガン獨奏 プレエリユヂユム、ウント、フリーガ パツハ作曲

齋藤 左右田

四、ピアノ、ヴァイオリン合奏

フオン、ケーベル

ソナタ ルービンスタイン作曲

アウグスト、ユンケル

五、管絃合奏 シンフォニーシューベルト作曲

△音樂の友に掲げられた批評そのまゝを掲載する。

(甲)の霧の且は生徒一同にも曲の趣味を了解された。(乙)の人生の曲は不感服、特に男聲の二部がフラフラしてゐる。(丙)は先づ普通の出来である。ピアノ獨奏、多少の間違ひは有つたにせよ、この大曲を女の身でとは、只管感服の外がない。音楽學校女教師中では例のない上出来である。オルガン獨奏、上出来。島崎教授の相續はこれで安心。ピアノ、ヴァイオリン合奏は批難の點を求むるに苦しむ。管絃樂合奏、時々不ぞろへの所もあつたが兎に角大仕掛のものをよく纏めた。

同三十六年三月十三日午後六時

明治音樂會第三十一回演奏會 於神田青年會館

一、管絃樂 樂會の序 シェンフェルデル作

二、獨唱 心の若き時 ダツドレーバック作

同三十六年三月廿七日午後六時

日印俱樂部音樂會、於神田錦輝館

一、三曲合奏 櫻狩

一、一調

一、オルガン獨奏 ソナチネ

一、サンスクリット語朗讀

一、ピアノ、ヴァイオリン合奏 ラシンファンテーニ

一、狂言 棒縛

エツチスワン夫人

山秋たま子

齋藤左右田

ムカルヂ

高折周一、巖本捷治

山脇四郎

二、印度歌曲

ニ、英語演説

一、ピアノ連弾

一、三曲合奏 吾妻獅子

一、ピアノ獨彈

一、アリババの進軍

一、エリヤ グルツク

一、英語演劇 ジリアスシーザー

チャクラバチン

ス ワ ン

ケーベル博士、エンサイン

小澤いよ、榮 子

エンサイン

シヤ フェ

スワン 夫人

シーザー モズミダラ

カリフワニヤ 湯 浅 泰 左

アントニー プラン シン

ブルタス チャクラバチン

其他日印兩國學生

ケーベル博士

山 脇 元 清

一、洋樂 ピアノ獨奏

一、狂言 宗 八

△印度留學生學生會館建築費等に充つる慈善的音樂會である。

同三十六年三月三十日

東京音楽學校甲種師範科卒業演奏會

一、等 岡康祐

選科卒業生 青木茂

一、合唱

卒業生及生徒

羽衣 ハウトマン作曲 鳥居忱作歌 富士の卷狩 メンデルゾーン作曲 鳥居忱作歌

一、ピアノ聯彈 ソナタ クラウゼ作曲 甲種師範科卒業生 平澤カツ、牧野むめ

一、オルガン獨奏 ノヴェレッツテハツセンスタイン作曲 甲種師範科卒業生 村田ミイ

一、ピアノ獨奏 タランテラ ヘルレル作曲 選科卒業生 荒川あい

一、合唱、管絃合奏 神風 ハイドン作曲 鳥居忱作歌 職員卒業生及生徒

△演奏者は全部女生のみばかりとは物足りないプログラムである。

同三十六年四月五日午後一時

明治音楽會第三十二回演奏會、於上野校奏樂堂

一、祭禮の曲 大序

チエー、ラタン作

二、獨逸行進曲

三、歌劇 魔笛の歌一節

モツァルト作

四、ローベルト、管樂部合奏

マイエルベル作

五、ミニユエツト

モツァルト作

六、美しくしき時 ワルツ

リツクスネル作

七、美しくしき　ヘレナ

八、クラリネット獨奏　フアンタシー　フランク作

九、チスボシンヨン　ワルツ

一〇、シンフォーニー

一一、菩提樹の曲

一二、ストツク提督行進曲

オツフエンバハ作
多　　忠　　龍

リツクスネル作

マスカニー作

シューベルト作

モツフルト作

明治三十六年五月二日

音楽學校春季音楽演奏會、於同校奏樂堂

演奏者は幸田延子と橋米重の合奏、幸田幸子のヴァイオリン獨奏、ウンケル教授とケーベル博士の合奏其他合唱と管絃樂で例年の通のものであつたが、入場券問題で、端なくも主催者菊地文相が、新聞によつて批難されてあつた。

同三十六年六月六日午後二時

慈善音楽會、於上野音楽學校

一、勇氣と軍紀の行進

一、長　　唄　　勸進帳

一、箏　　吾妻獅子

一、兩騎兵劇の序樂

一、タンホイゼルの歌舞曲　ワグネル作

陸　軍　々　樂　隊

杵屋六次郎外五名

今井慶松外二名

陸　軍　々　樂　隊

陸　軍　々　樂　隊

一、獨唱

一、ピアノ獨奏 インプロピチュ

一、ヴァイオリン ローマンツアドレージョン

一、オルガン獨奏 プラルチユム、ウンド フীগ

一、獨唱

一、ピアノ、ヴァイオリン連奏

一、渡邊綱

△教會建築費に充てるための一番町教會の主催である。獨唱者ミス、カイゼルは獨逸ヴェウルフブルグの

ンセルフアトリウム音楽院卒業後、ストックハウレンに従つて獨唱の練習を爲せし人である。

同三十六年六月十四日

明治音楽會第三十三回演奏會、於上野音楽學校

第一 部

國祭の序曲 エム、ト、ガール作、亂調 チューメル作、支那樂五美人 李孔常外七名合演、ボルカ コルネツ

ト獨奏、長唄 吉住小三郎外四名、美しきポーランド人 チェー、ミロツケル作

第二 部

ナーノン行進曲 エル、ゲニー作、支那樂四美圖 李孔常等、トレチテザの歌 ウエーベル作、ドナウ河の

漣 イベノウイツチ作、勳進帳 吉住小三郎等

カイゼル

オ ル フ

ブ ー ル

齋藤 左右田

カイゼル

ケーベル、プー

陸軍々業隊

明治三十六年六月十三日午後二時

基督教青年會の有志者は上野の音楽學校にて慈善音楽演奏會を開く、その出演者中モンロー、スチツクとメートランドとは最も注目すべき人なり、スチツクは近頃米國より來りしスザパンドのソロ、コルネテエストとして名聲高き人またメートランドは目下横濱のチャータードバンク員にてパリトンシンガーとして東洋第一流の人なりとの噂がある。其他英國公使館のホルン、前倫敦音楽學校教授なりしケルダール等ありて趣味多かりし。

同三十六年七月十日午後二時

東京音楽學校卒業演奏會、於同校

一、合唱

豫科修了生

甲、螢狩 エツセレ作曲 旗野十一郎作歌 乙、海邊眺望 ウェベル作曲 武島又次郎作歌

一、ピアノ獨奏 ソナタ モツァルト作曲 豫科修了生 本居長世

一、コルネット獨奏 アリア トロンベーター、フオン、ゼツキンゲン ネスレル作曲 器樂部卒業生 渡邊康三

一、オルガン獨奏 アレグレット マエスト作曲 選科卒業生 堀 伸

一、ピアノ獨奏 ソナタ モツァルト作曲 選科卒業生 上原喜勢

一、等 松竹梅 三津橋勾當調 教 授 今井新太郎

一、ヴァイオリン獨奏 選科卒業生 上原三郎、村田ミイ

選科卒業生 鈴木保羅

選科卒業生 鈴木保羅

甲、アダジオ、カンタビレ　ダルチン作曲　乙、ルレ　パツハ作曲

一、ピアノ獨奏　アダジオ　モツァルト作曲　器樂部卒業生　本田カツ

一、獨唱　瀧の宮　メンデルゾーン作曲　鳥居忱作歌　聲樂部卒業生　吉川ヤマ

一、ピアノ獨奏　アムプロプテユ　シユールベルト作曲　器樂部卒業生　田中ヤソ

一、合唱　神風　ハイドン作曲　鳥居忱作歌　生　徒

△本居、上原のピアノ并に鈴木ヴァイオリンは素人に大に喝采された。

同三十六年八月十六日午後四時

國歌音樂會夏期演奏會、於東京音樂學校奏樂堂

一、吹奏樂　ウーベルニユール　コリタナ　パラス作曲　近衛軍樂隊

一、獨唱　春のねざめ　シユールベルト作曲　中島六郎

一、ヴァイオリン獨奏　ラルギー　グルツク作曲　安井こう

一、合唱　破籠關春の心　狂言萩大名　音樂研究會々員

一、獨奏　アデキヅ　シユールベルト作曲　山本東次郎

一、アルト、サクサホーヌ獨奏　テキロリエンス　シエイク作曲　吉川ヤマ子

一、合奏　羽衣　旅の興　近衛軍樂隊　音樂研究會々員

一、ピアノ獨奏　クアチオーネン　ヘンデル作曲
 神戶 絢子
 一、吹奏樂　近衛軍樂隊

ローゼン、アクス、テム、ジューデン、ワルツェル、シュトラウス作曲

△上京中の地方の教育者のために催したものである。

明治三十六年九月二十五日午後六時

明治音樂會第三十四回演奏會、於神田青年會館

第一部　一、管絃樂(樂會の序曲)、二、同(ブリターネル歌劇の歌)、三、尺八連奏(夕暮の曲)、四、スペイン樂 留

學生、五、常磐津(新曲鈎女)林中、長門太夫、三登勢太夫、岸澤文字兵衛、岸澤八百八

第二部　六、管絃樂(祝日舞踏曲)、七、同(雜歌)、八、スペイン樂(ラ、パロミタ)、九、同、十、踊(豊の前)巴安

治門弟渡邊りか子、三澤つる子外常磐津連中

同三十六年十月五日午前十時

東京音樂學校紀念式、於同校奏樂堂

一、ピアノ獨奏　ソナタ　クラウス作曲

二、オルガン獨奏　Voluntary, 12.

三、獨唱　コンコニー　一二、一四

四、オルガン獨奏　ベンダー　二〇、

五、ヴァイオリシ獨奏　Naotsumie, Rieding, 作曲

本居長世
 釜范善作
 外山國彦
 吉村リウ
 吉澤重夫

同三十六年十月十七日

帝國女學校秋季音樂會、於神田青年館

- 六、ピアノ獨奏 ソナタ モツァルト作
- 七、二重唱 歸雁外一曲 メンデルゾーン作
- 八、オルガン獨奏 Voluntary 6. 14
- 九、ピアノ獨奏 ソナタ ベートーヴェン作
- 一〇、ヴァイオリン獨奏 ローマンス、リーデントク作
- 一一、オルガン獨奏 祭禮の歌 バツハ作
- 一二、ピアノ獨奏 ファンタジー、メンデルゾーン作
- 一三、合唱 山中幽閑(茸狩)
- 一、ピアノ獨彈 魔神の曲 ウエーベル作曲
- 二、獨唱(露西亞語) まぼろし ザンデル作曲
- 三、ピアノ連彈 鎗騎兵の襲撃 カール、ボーム作曲
- 四、オルガン獨奏 フーガ バツハ作曲
- 五、ヴァイオリン連奏 風車
- 六、詩唱(柴笛)
- 七、ヴァイオリン、ピアノ合奏 秋草(和洋調和樂)

- 成田 藏 己
- 柴田 環、横山 糸
- 江澤 清太郎
- 天野 アイ
- 東儀 哲三郎
- 平川 チヨ
- 小林 禮
- 甲種師範二年
- 澤田 孝一
- 中島 六郎
- 澤田孝一、前田久八
- 廣藤 左右田
- 高折周一、中島六郎
- 若松 爲彦
- 樂友社同人

講演

八、ヴァイオリン、ピアノ合奏 箏曲 八千代獅子(和洋調和樂)

九、ピアノ獨彈 無情の曲 モザート作曲

一〇、獨唱 亡き友のさかづき シューマン作曲

一一、ヴァイオリン獨奏

甲、夢の思ひ シューベルト作曲 乙、獵歌 ウェーベル作曲

一二、薩摩琵琶 城山 但夜の分(臺灣入)

一三、ピアノ獨彈

甲、シヤント、テユ、プララコニーエル セラドル、リツテル作曲

乙、ワルサー アウグドウケント作曲

一四、ヴァイオリン、ピアノ合奏 萬歳樂(和洋調和樂)

明治三十六年十一月二十三、四日

女子實學園慈善音樂會、於橫濱市羽衣町羽衣座

一、洋琴獨彈 天使逍遙の曲 モザート作曲

二、薩摩琵琶

三、洋琴連彈 箏曲六段(和洋調和樂)

四、ピアノ、ヴァイオリン合奏

青柳 有美

樂友社同人

巖本 捷治

中島 六郎

高折 周一

若松 爲彦

前田 久八

樂友社同人

高折 官次

四元 義一

高折周一、高折官次

高折周一、巖本捷治

高折周一、巖本捷治

高折周一、巖本捷治

高折周一、巖本捷治

夢の曲 シューベルト作曲 遊獵の曲 ウェーベル作曲

五、洋琴連弾 騎兵襲撃の曲 カールホーム作曲

六、洋琴獨彈 魔神の曲 ウェーベル作曲

七、ヴァイオリン、ピアノ合奏 長唄秋の色草(和洋調和樂)

八、長唄 九、芝笛 月落鳥啼 雲耶山耶 追分節

一〇、長唄 勸進帳(和洋調和樂)

一一、踊 鶴 龜(歐樂合奏)

踊	高折周一
ヴァイオリン	藤間勘右衛門外二名
ピアノ	高折周一
ピアノ	巖本捷治
ピアノ	巖本捷治

一二、薙刀の形 (戸田派 武甲流)

一三、踊 (歐樂調和樂)

新たに和洋調和樂、樂樂合奏とかいふものが演奏され、當時には新味があつて通俗的に歡迎された點もあつたが洋樂の墮落と謂はなければならない。

同三十六年十一月二十八日、二十九日

公益音楽會、於上野音楽學校奏樂堂

二十八日の部

一、管絃樂

アインツィグ、デル、グラデイアトールン行進曲 フーチツク作

一、管絃樂 カバレリア、ルスチカナ ファンタジー マスカニー作

一、ピアノ獨奏

一、管絃樂 テーツス歌劇序 モツァルト作

一、ヴァイオリン、ピアノ合奏

スイツト リイス作

ヴァイオリン

ピアノ

式部職雅樂部員

式部職雅樂部員

ヴァインセント

式部職雅樂部員

ドブラウイツチ

ヴァインセント

式部職雅樂部員

一、管絃樂

甲、デー、ミユール、イム、シユバルツウアルト アイレンベルク作

乙、ゼー、リザード、エンド、ゼーフロツグ モース作

二十九日の部

一、ピアノ獨奏 コンセルト ファンメル作

一、ヴァイオリン、ヴァイオラ合奏

シンフォニー、コンセルタンテ モツァルト作

ヴァイオリン

ヴァイオラ

幸田延子

幸田幸子

ユンケル

一、獨唱

アリア、アウス、デイ、ケーニギン、フォン、ザバ ゴルトマルク作

ベーン

一、ピアノ獨奏

ケーベル

甲、カウカスス パラキエ作 乙、ケーニヒ、イン、ツール リイス作

一、獨唱

ミセス、ペーン

甲、コム、ウイル、ワンデルン コルネリユース作

乙、エス、ワール、ツール、エルステン、フリユーリングスツアイト チャイコウスキー作

一、ヴァイオリン合奏

ユンケル

シンフォニー、コンセルタンテ アラルト作

幸田、幸子

△帝國教育會の爲の慈善音樂會で、演奏指揮はドブラウキツチで昨年官内省に聘せられた提琴家である。

同三十六年十二月六日午後一時半

東京音樂學校秋季演奏會、於同校音樂堂

一、合唱

生徒

甲、天の浮橋 カシオリニー作曲 鳥居忱作歌 乙、秋風吟 ハイドン作曲 武島又次郎作歌

二、ピアノ獨奏

ソナタ ハイドン作曲

器樂部一年生 本居長世

三、二部合唱

甲、暮秋 シューマン作曲 武島又次郎作歌 聲樂部三年生 榮田環

乙、月前郭公 シューマン作曲 旗野十一郎作歌 研究生 吉川やま

四、ヴァイオリン獨奏

アタジオ タルチニー作曲

研究生 前田襄

五、ピアノ獨奏

ソナタ ベートーヴェン作曲

豫科生 上原喜勢

六、管絃合奏

舞踏曲 シアーマン作曲

職員及生徒

モリス、ダンス シェフアーツ、ダンス トチーダンス

七、合唱

生 徒

甲、雁叫 露西亞民歌 旗野十一郎作歌 乙、雲雀 フレミツン古歌 小野竹三作歌

八、ピアノ獨奏 ソナタ ベートーヴェン作曲 助教 神 戸 絢

九、管絃合奏 スート、カルメン 職員 及 生徒

● プレリユード アラゴホーゼ インデルメツオ ファイナーレ ビゼー作曲

一〇、ヴァイオリン、ヴィオラ合奏 教 授 幸 田 幸

シンフォニー、コンセルタンテ モツァルト作曲 助教 頼 母 木 コマ

一一、管絃合奏、合唱 職員 及 生徒

聖壽無窮 (タンホイゼル進行曲) ワグネル作曲 鳥居忱作歌

明治三十六年十二月十二日午後六時

明治音樂會演奏會、於神田青年會館

一、管絃樂 カール王行進曲、二、歌劇、三、鬼神行進曲、四、發醒シンホニー、五、ドナウの漣、六、彌生の歌

七、シャンペンガロツプ、八、長唄吾妻八景、九、地唄八重衣踊り賤機帯

同三十六年十二月十九日午後六時

第一回音樂演奏會、於一橋東京商業學校講堂

一、管絃樂 軍隊行進曲 シューベルト作

樂友俱樂部員

二、ヴァイオリン アダジオ タルテイニー作

前田 ジャウ

三、オルガン獨奏 ソナタイナ ラインハルト作

齋藤 左右田

四、二部合唱

岡野 貞一

甲、三ツの船 シューマン作 乙、雁來燕歸 クツケン作

村岡 祥太郎

五、ピアノ獨奏 ソナタ (アバシヨナタ) ベートーヴェン作

神戶 絢子

六、長唄 時雨西行

第二部

一、管絃樂 デルフライシユツ ファンタジー ウェーベル作

樂友俱樂部員

二、獨唱及合唱

樂友俱樂部員

甲、夜の歌(管絃伴奏)ダビッド作 乙、紅葉狩 メンデルゾーン作

三、ピアノ獨奏 ルシヤンヅブラコニール テオドルリツテル作

前田 久八

四、管絃樂 シンフォニー(ミニユエツト)ハイドン作

樂友俱樂部員

五、長唄 橋辨慶

△ピアノ伴奏はユンケル教師が行はれた。第一部四の二部合唱とあるは二重唱のことなるべし、終の方の管

絃樂でシンフォニーを演出してゐるが、括弧書より押して、或る一部の演奏の様に考へられる。

明治三十七年二月廿日、二十一日午後一時

東京音楽学校校友會大會、於同校奏樂堂

一、合唱	天安河	Seruff	鳥居忱作歌	會
一、ピアノ獨奏	Sonatina	Clementi	田中	員
一、ヴァイオリン獨奏	Gavotte	Bach	吉澤	員
一、オルガン獨奏	1. Largo. Handel.	2. Gavotte. Bach.	釜范	員
一、ピアノ獨奏	Romance	Heydrich	天野	員
一、獨唱	Aria	Mendelschn.	小室	員
一、オルガン獨奏	Doujuan	Mozart	江澤	員
一、ピアノ獨奏	Sonata	Mozart	横田	員
一、合唱			會	員
一、雁之叫	旗野十一郎作歌	二、雲雀	小野竹三作歌	員
一、オルガン獨奏	Fuga	Eb.rhin	布村	員
一、ピアノ獨奏	Sonata	Beethoven	栗原	員
一、獨唱	Panlape weaving	Garment (from Odyssey)	柴田	員
一、オルガン獨奏	1. Fuga	Bach.	2. praeludium.	員
一、ヴァイオリン獨奏	Fantasia	appassionata.	Vi. ut. temp.	員
一、ピアノ獨奏	Valse Impromptu	for piano.	H. Heydrich	員

一、合唱 黒龍江 Schumann 鳥居忱作歌 會 員

△柴田環の獨唱が此の時既に定評を得て、三月卒業後は、ヴォーカルソロイストとして第一人者に擧げられたのである。

明治三十七年三月二十九日午後三時

東京音楽學校卒業演奏會、於同校演奏堂

一、箏 近江八景 山登萬和作曲 選科卒業生 東條 幸子

選科生 山本富三郎

一、合唱 天の安河 セルフ作曲 鳥居忱作歌 里 祭 露西亞民歌 旗野十一郎作歌 卒業生及生徒

一、オルガン合奏 オルガンソナタ四番(フキナール)メンデルゾーン作曲 甲種師範科卒業生 大熊 しん

一、ピアノ獨奏 ソナチネ クーラウ作曲 器樂部一年生 岩倉 一野 久野 ひさ

一、女聲二部合唱 良友 メンデルゾーン作曲 旗野十一郎作歌 甲種師範科卒業生

國民 メンデルゾーン作曲 旗野十一郎作歌

一、オルガン合奏 シエルゾ、シンフォニック レムメンス作曲 甲種師範科卒業生 南 能 衛

赤尾 寅 吉

明治三十七年四月十日午後二時

明治音樂會恤兵音樂會、於一橋高等商業講堂

一、合唱 橋の薫 ケルビニ作曲 鳥居忱作歌

卒業生及生徒

一、管絃樂 歌劇 ナブコの大序 ヴェルデー作曲

二、ヴァイオリン及ピアノ合奏

ヴァイオリン ドブラウキツチ

シンフォニー、コンサルト ダンクラ作曲

同 多 忠 基
ピアノ 前 田 久 八

三、管絃樂 忍びの旅 ウオルツ ヘルメスベルゲル作曲

四、ヴァイオリン獨奏 コンセルト ペリオ作曲

ドブラウキツチ

五、管絃樂 喜劇ビルゼンの皇子 ルーデルス作曲

六、絃樂四部合奏 甲、トロメライ シューマン作曲 乙、ミニユエツト ポツケリニ作曲

七、管絃樂 ガロツプ ロツク作曲

八、長 唄 大薩摩 日露戰爭譽の魁

九、箏 曲 梅の馨(日露事件)

同三十七年五月二十一日午後二時半

日本音樂會恤兵慈善音樂會、於音樂學校奏樂堂

一、管絃合奏 甲、スラヴィシエル タンツ ドヴォルシヤツク作曲 會 員

乙、バレット(オルフォイス) グルツク作曲

二、ピアノ獨奏 ソナタ ウェーベル作曲 橋 絲 重

三、高音獨唱(ヴァイオリン伴奏) ミス、カイゼル

アリアフロムキセルキセス(ラルゴー) ヘンデル作曲

四、管絃合奏 會員及其他

甲、アーゼス トート グリーグ作曲 乙、アニトラス タンツ グリーグ作曲

五、ヴァイオリン獨奏 幸 田 幸 子

甲、ローマンス ウキニアウスキー作曲 乙、マヅルカ ウキニアウスキー作曲

六、ピアノ合奏 フォンケーベル博士

シンフォニツシエデイヒツンゲン(オルフォイス) リスト作曲 幸 田 延 子

七、高音獨唱 ミス、カイゼル

八、管絃合奏 ワルツエル(キュンストレルレーベン) シトラウス作曲 會 員 及 其 他

△第二部は能番組なれば省略した。復活後の日本音楽會も會長は鍋島直大侯で、當日の収入の全部は恤兵部

と赤十字社篤志看護婦人會へ献納した。

明治三十七年五月二十八日午後二時

東京音楽學校分教場試業會、於本校なる上野音楽學校奏樂堂

一、唱 歌(四重音)

甲、子守歌 佐藤誠實作歌 乙、進軍歌 大和田建樹作歌 ベニケ作曲

生 徒

一、ヴァイオリン ローマンス リーディング作曲

田 邊 尚 雄

一、オルガンソロ

岩 井 な み

甲、リーリツシエ、ステユツケ ケルメル作曲 乙、メヌエット

一、ピアノ連弾 練習曲 デアベリ作曲

渡部君代、同 栗

一、箏 早春興 中村秋香作歌 今井慶松作曲

角倉アイ外三名

一、ヴァイオリン連奏

木 村 雅 子

甲、リーブリヒ シュレーデル作曲

神 田 英 芝

乙、フロイデイヒ 同上

同 百 合

一、オルガン連奏 タンボリン ラモー作曲

辻 美 亞、三須さく

一、ピアノソロ

石 川 し づ

甲、メロデー、シューマン作曲 乙、ソルチアースマーチ 同上

一、ヴァイオリン タランテラ シツト作曲

菊 地 み さ を

一唱 歌(二重音)

女 生 徒

甲、夏の國 旗野十一郎作歌 レンツ作曲 乙、楽しき今日 レンツ作曲

一、ピアノソロ ソナタ モツァルト作曲

一、ヴァイオリン演奏

甲、ランドラ、アーマンド作曲 乙、ポロネーズ 同上

一、オルガンソロ フレルヂユーム メンデルゾーン作曲

一、等 岡康砧

一、ピアノソロ ソナタ ベートーヴェン作曲

一、ヴァイオリン バラデ シツト作曲

一、唱歌(四重音) 我國 大和田建樹作曲 ラインハルト作曲

△田邊尚雄理學士が學生時代にヴァイオリンを弾かれたことはこの曲目で窺はれる。

同三十七年五月二十九日午後一時

恤兵野外音楽會、於小石川植物園

君が代 英國々歌

一、吹奏樂 ウーヴェルチユールギイヨイム、ロシニー作曲

二、唱歌

甲、遠征 鳥居忱作歌 多忠朝作曲 乙、征夷歌 土井晩翠作歌 楠美恩三郎作曲

三、唱歌遊戯

四、吹奏樂

クラリネット獨奏 シーネウンドアリエー、ベルグゾフ作曲 海軍々樂隊

高折 宮次
淺羽千代、内田うめ

岩井のぶ
奥山とし外二名

前田 滋樹
萩原 愛

生 徒

來會員合唱

陸軍々樂隊
諸學校生徒

小學校生徒

五、唱歌

諸學校生徒

甲、廣瀬中佐 横井忠直作歌 納所辨次郎作曲

乙、征露のうた 館 信麿作歌 山田源一郎作曲

丙、征露の歌 平野秀吉作歌 大内 玄益作曲

六、吹奏樂 エールブアリエドラン、ノワー作曲

陸軍々樂隊

七、吹奏樂 ウーヴエルチューレツールオーベル、デイルスチーゲン

海軍々樂隊

ウイベルフタンウキンゾルオツト、ニコライ作曲

八、唱歌遊戲

小學校生徒

九、唱歌

諸學校生徒

甲、征夷歌 土井晚翠作歌 多忠基作 乙、征露軍歌 鈴木勇太郎作歌 内田兼太郎作曲

一〇、吹奏樂 將門拔萃 山本銃三郎編曲

陸軍々樂隊

一一、唱歌

諸學校生徒

甲、廣瀬中佐 横井忠直作歌 海軍々樂隊作曲 乙、海軍 東宮鐵眞呂作歌 海軍々樂隊作曲

一二、吹奏樂 マルシユローダー、シニールレル作曲 陸軍々樂隊

△日本音樂會主催のもので恤兵献金及赤十字社篤志看護婦會寄贈の演奏會のである。

明治三十七年六月四、五日

音樂學校春季演奏會、於東京音樂學校奏樂堂

第一 部

一、管絃合奏 オーヴァアチューア シューベルト作曲

職員及生徒

一、合唱

生徒

甲、新緑の賦 モツァルト作曲 武島又次郎作歌 乙、鴨綠江 ヘンデル作曲 鳥居忱作歌

一、ピアノ獨奏 コンセルト モツァルト作曲

助教 神 戸 絢

一、ヴィオラ獨奏 コンセルト シツト作曲

教師 アウグスト、ウンケル

一、三重唱 ヴラト、ザイン、アイス メンデルゾーン作曲

柴田 環、小室千笑

鈴木 の ぶ

一、管絃合奏 ナルレジエヌ ビゼー作曲

職員及生徒

第二 部

一、合唱 オルフオイス グルツク作曲

職員及生徒

△第一部管絃合奏オーヴァアチューアは腕撞の合奏故悪るからう筈なく、殊に曲風が日本人向の探曲で聴者は大満足
 只四日は初日の勢か時々工合の悪ひ處が有つた。合唱甲新緑の賦は結構で、鴨綠江は共にきは者の表題の如き歌詞
 を附したので其出来ばへは餘り感心出来ない。神戸助教教授のピアノ獨奏獨特の妙技聴者には大物過ぎて高襟連すら
 只うまいと評する外なし。三部合唱柴田、小室、鈴木三人日頃の御勉強の程髓に拜聴した。ヴィオラ獨奏ウンケル
 教師聴く度毎に感服して演奏中は呼吸も出来ぬ位殊に五日は前日に比して層一層の出来、管絃樂是等の合奏は音楽
 學校特有でも只感服の外評言なし。第二部オルフオイスの合唱は一時間半位に渡る大合唱で是れが當日の大呼物丈

に又一しほ面白く殊に曲中高音、中音の獨唱有つて各自特意の妙技を充分に拜聽する事を得た。柴田環の百合姫、吉川のオルフォイス音調麗明室内の紳士淑女恍惚殆ど天界に遊ぶの感あらしめた。概して今回の演奏會は其撰曲宜しきを得たる爲非常の高評であつた。(音楽の友)

明治三十七年六月十四日

華族會館幻燈音樂會、於華族會館

一、奏樂

岡山孤兒院少年音樂隊

二、管絃樂

"The Banner of Freedom" march. Farrar.

東京明治音樂會

三、浦島の舞

(寄附者) 岡山黒瀬小美代(十歳)

合奏

岡山孤兒院少年音樂隊

四、幻燈

岡山孤兒院の歴史、現況、養育部、教育部、實業部、卒業生維持法

内外國の景色、日露戰爭

五、越後獅子の舞

(寄附者) 岡山黒瀬小美代(十歳)

合奏

岡山孤兒院少年音樂隊

六、管絃樂

The New Crn, Overtur Heed

東京明治音樂會

七、活動寫眞

陸軍の閱兵、水兵の體操、騎兵の突撃、軍艦の祝砲、艦隊の進發、南洋の怒濤、魔術、米國日本村の輕業師、各國風の舞踏、ベスピヤス噴火の壯觀其他嶄新なるもの十數種

八、管絃樂 By the River Romance moose

九、エビデアスコープ(寫生鏡)

一〇、奏樂 汽車の曲

△「エビデアスコープ」「ヴァイタスコープ」等は活動寫眞の前身のものであらう。

同三十七年十月二十九日、三十日午後一時

東京音楽學校學友會慎兵音楽會、於同校奏樂堂

一、箏 旅順のほまれ

二、管絃樂 ヴァイオリン獨奏 ラーゴー ヘンデル作曲

三、ピアノ獨奏 ソナタ ベートーヴェン曲

四、ハルモニウム獨奏 プリエール、エ、ベルソース ギルマン曲

五、ヴァイオリン獨奏 コンセルテイノ シツト曲

六、合唱 霜の旦 旗野歌 民謡 鴨綠江 鳥居歌 ヘンデル曲

七、管絃樂 シンフォニー シューベルト曲

八、ピアノ、ヴァイオリン合奏 ソナタ ルビンスタイン作曲

九、獨唱 テル、ネツク、バラード レーヴエ曲

一〇、ピアノ獨奏

フワントジー ショパン作曲 ミル 風車(ハイドリツセ作曲)

東京明治音楽會

岡山孤兒院少年音楽隊

岡山孤兒院少年音楽隊

麻生富久外數名

幸田幸子、管絃會員

天野あ い子

古澤 き み子

多 久 寅

會 員

會 員

橘糸重、頼母木コマ

杉浦 ちか子

ハイドリツセ

一一、管絃樂合唱 聖壽無窮 タンホイザーマーチ ワグネル曲 會 員

△ハイドリヒは此年に招聘した音楽學校の備教師で、ノエルベリーの解職後はその後繼者として、和聲と樂式とを本科生に教授されてゐたピアニストである。この會の總收入千三百五十圓内百四十圓支出、千二百十三圓を愼兵部に獻金した。

明治三十七年十一月十二日午後六時

明治音樂會三十七回演奏會、於神田區美土代町青年會館

第一部 管絃樂

指揮 ドブラウキツチ(顧問)

一、戰勝行進曲 新作

ドブラウキツチ作曲

二、チラノ女王凱旋劇大序

バツ ハ 作曲

三、天童舞踏曲

オーハンカ作曲

四、カバルレリアルスチカナ、人情劇

マスカニー作曲

五、甲、森中の圖

アイン ンベルヒ作曲

乙、獵師の夢

トバニー作曲

第二部 俗 樂

六、長 唄 船辨慶 七、三曲合奏 四季の詠 八、長 唄 みいくさ艦

同三十七年十二月

弔祭會兼月次演奏會 上野學友會主催、於同校奏樂堂

第一 部

一、亡友に對する敬禮 一、會長 二、會員一同(ピアノ合圖)

二、亡友諸氏履歷

三、弔祭文朗讀

四、弔祭唱歌

第二 部

一、ハルモニウム獨奏

二、ヴァイオリン聯奏 ガボツト バツハ作曲

三、ハルモニウム獨奏 フーガー バツハ作曲

四、ピアノ獨奏 ソナタ モツァルト作曲

五、ヴァイオリン獨奏 ソナタ ヴォルフアート作曲

六、ハルモニウム獨奏 ソルヂニー クレメンス作曲

七、獨唱 カンソーネ モツァルト作曲

八、ヴァイオリン聯奏

甲、ビーゲンリード シット作曲

鳥居參與員

外山國彦

會員一同

吉田マキ、木村雅子

神田英芝、神田百合

草川宣雄

川久保美須々

永井漸

君塚正志

柴田環

鳥居ツナ子

多 久 寅

乙、マヅルカ シツト作曲

九、ハルモニユーム獨奏 ソナチネ ラインハード作曲

一〇、ピアノ獨奏 ソナチネ クレメンス作曲

一一、二部合唱

一二、コルネット獨奏 エグモントの一節 ベートーヴェン作曲

一三、ヴァイオリン獨奏 コンセルト ベツオ作曲

一四、合唱 スピンク マドリカル サリバン作曲

コンダクター 田口隆治、若林孫二

明治三十八年二月十一日午後二時

基督教青年恤兵音楽會、於東京音楽學校奏樂堂、主催基督教青年學生同盟會

第一部

一、ヴァイオリンソロ コンセルト バツハ作

一、ピアノ聯彈

パリアチヨネン、ユウバーア、イホテマフナシ

一、獨唱

甲、ラゴー ヘンデル作曲

乙、マイネセーレーイストステーレツゴツト エンメリツヒ作曲

ヴァイオリン助奏

鑰田倉之助

松井壯吉

木村マス

鈴木信、小室千笑

渡邊康三

前田襄子

甲師二、三年生

田口隆治、若林孫二

ユンケル、幸田幸子

ケーベル博士

幸田延子

ミス、カイゼル

ユンケル

一、ピアノ獨彈

甲、インプロムブチユ ショパン作曲 乙、キャプリス ルビンスタイン作曲

一ヴァイオリン獨奏

ローマンチエ ユンセン作曲、

ピアノ伴奏 ケーベル

第二部邦樂につき省略す。

同三十八年二月五日午後二時

國民音樂會第一回演奏會、於神田帝國教育會講堂

一部 一、自由の旗進行曲 フォーラル作曲、二、新世紀 六序 ヒード作曲、三、爽快歌六部合唱 フランク作曲

四、我結婚日圓舞曲 トバニー作曲、二部 五、兒童進行曲 ウィット作曲、六、萬歳 箏曲、七、コチリンオン

方舞曲、八、ガロツプ

△尙ほ同會は團樂刷新並に樂的趣味を一般に普及せん爲め、今回常設の傳習部を設け又毎月一回演奏會を開く由にて
入會者は毎月五十錢(學生は半額)を要し事務所は牛込矢來町十四番地

同三十八年二月十一日午後七時

明治音樂會祝賀音樂會、於神田青年館 明治音樂會管絃樂部員

一、管絃樂 君が代

二、管絃樂 戰勝行進曲 明治三十七年 ドヴラツキツチ作

三、管絃樂 祝祭歌劇大序

二、幻燈 義勇艦隊創設委員説明 三、日露從軍談

四、ヴァイオリン獨奏 (ピアノ伴奏ケーベル博士) トヴラウキツチ

五、活動寫眞

同三十八年二月十八日

祝捷音樂會、於神田青年會館 松本樂器店主催

第一部

一、君が代合唱

二、合唱

甲、領巾魔嶺 ジルヒエル作 鳥居忱作歌 乙、櫻狩 鳥居忱作歌

音樂遊戲協會生徒

三、ピアノ獨彈 ソナチネ クレメンテイ作

角倉 あい

四、オルガン獨奏

濟美音樂學校 久留 たか

歌調 天谷秀著 オルガン教科書中 樂隊の響 新進行曲中

五、ヴァイオリン二部合奏 シンプオニー シューベルト作 高折講習所 中 潮 覺

六、ピアノ獨彈 ソナチネ クーラー作 松本樂器店 加藤 あい子

七、オルガン獨奏

石田 虎夫

デイワイゼ、ダーメ ポイルデュー作 フネラルマーチ

八、ピアノ連彈

女子秋吟會 雄山百合子

ロンドフワウント ベリー作

九、合唱

三浦つる子
音楽遊戯協會生徒

夢 シューマン作 佐藤誠實作歌 探梅 ウェーベル作 鳥居忱作歌

十、ピアノ獨彈 ソナチネ ベートーヴェン作

松本樂器店 松本 廣

第二部

一、ピアノ獨彈 ラブレレ、トユン、ヴァルジ

ケン ダル

二、獨唱 トウセテース、グノー作

林 貞子

三、ヴァイオリン獨奏 タンホイザー ワグネル作

高折 周一

四、獨唱 アラ チャドウツク作

ホー ル夫人

五、ピアノ獨彈

ミス、シリシヤスケー

六、獨唱 廣瀬中佐の死 旗願の陥落 プラハム作

ケン ダル

七、ピアノ聯彈

ミス、シリシヤスケー

マーチオプ、キヤベルレー シューベルト作

巖本 捷治

八、獨唱 ウキルカムブレテプレムロース ペンスウテ作

林 貞子

九、オルガン獨奏 ローマンズ ショツパン作

天 谷 秀

十、獨唱 アルフェアスウキズピスルート サレヴン作

ホー ル夫人

十一、ヴァイオリン、ピアノ合奏 秋の色草(和洋調和樂)

高折周一、巖本捷治

十二、獨唱　ラフト　ベンスウテ作

同三十八年二月二十三日午後六時

東京孤兒院慈善音樂會、於青山學院講堂

一、ピアノ獨奏

二、開會の辭

三、獨吟

四、院主の挨拶

五、二部合唱

六、一絃琴尺八　管絃合奏　松竹梅

七、風琴、明笛、箏曲合奏　吾妻獅子

八、四部合唱

九、マンドリン、ヴァイオリン合奏

一〇、琴合奏　菊水

一一、合唱

ケンダール

發起人

ミセス、ブカナーン
本多貞子

北川はつ子

ミセス、ブカナーン
アイダールハート

富田豊春、佐藤頼齋

長原春田、長原春葉

ミセス、ブカナーン

ミセス、カウイン

アイダールハート
カウイン

三宅愛美、水野重吉

中西はつ、中西たみ

女學院有志

一二、陸軍琵琶 石道丸

△二部合唱、四部合唱とあるは重唱のことなるべし。

明治三十八年二月二十五、六日

東京音楽學校學友會祝捷音楽會、於同校奏樂堂

第一 部

一、オーケストラ、コーラス 君が代 林廣守作曲 ノエルベリー和聲

二、ハルモニウム獨奏 マーチ ギルマン作曲

三、ヴァイオリン獨奏 ソナタ ヴォールフアールト作曲

四、ピアノ獨奏 ソナタ モツアルト作曲

五、女聲三部合唱 賤の苧環 メンデルゾーン作曲 佐藤誠實作歌

六、ハルモニウム獨奏 フアンタチー フランク作曲

七、ヴァイオリン獨奏 ベルソース ゴダールド作曲

八、ピアノ獨奏 ソナタ クレメンテ作曲

第二 部

一、合奏

甲、別れ クレムゼル作曲 犬童信藏作歌

乙 松浦佐用姫 ワインブルム作曲 武島羽衣作歌

小田爲豊、同そよ子

會 員

藤 田 コ ト

西 村 甫 也

本 居 長 世

會 員

松 本 徳 藏

東 儀 哲 三 郎

久 野 ヒ サ

會 員

二、ピアノ獨奏 ソナタ モツァルト作曲

坂本ソノ

三、ヴァイオリン獨奏 コルニドライヘブリユーメロデー

ブルツフ作曲 前田襄

四、ハルモニウム獨奏 マドリガル ギルマン作曲

松井壯吉

五、獨奏 フェースフルジョンニー

ベートーヴェン作曲 小室千笑

六、ピアノ獨奏 ソナタ

フンメル作曲 上原喜勢

七、オーケストラ、コーラス

會員

君は神 ベートーヴェン作曲 東京音樂學校作歌

△同校生徒のみの演奏多く、オーケストラの如きもコンダクターさへも、生徒によつて行はれたものである。ハルモニウム獨奏者松本徳藏は後年 大正天皇御大典奉祝唱歌譜作者である。

護國幼年保護團慈善音樂會 同團は日本全國の小學生徒及中學女學生徒に毎月一錢宛の貯金をなさしめ其蓄積せし金高を以て水雷艇を製造し國家に貢獻せんとする團體なるが去る三月十二日午後零時半より高等商業學校内に於て次の如き順序により慈善音樂會を催した。

一、ヴァイオリン、ピアノ、セロ合奏、二、ヴァイオリン演奏 石野巍、鈴木保羅、三、ピアノ獨奏 前田久八、四、

セロ獨奏 岡野貞一、五、獨唱 納所辨次郎、六、ヴァイオリン、セロ、ピアノ合奏。

同三十八年三月二十七日

音樂學校卒業演奏會 於同校演奏堂

一、箏 選科卒業生山本常三郎、教授今井新太郎(四季の眺) 二、合唱 卒業生及生徒(羽衣)、ハウトマン作曲。

鳥居忱作歌 三、ハーモニウム獨奏 甲種師範科卒業生、青木しの(ミニユエツト)ワゲネル作曲 四、ヴァイオリ
ン獨奏 甲種師範科卒業生、西村甫也(ソナタ)ウォールフアールト作曲 五、ピアノ獨奏 甲種師範科卒業生、犬重
信藏(ソナタ)ハイドン作曲 六、オルガン獨奏 甲種師範科卒業生、吉村りう(ファンタジー)フランク作曲 七、
合唱 卒業生及生徒(愉快)ハイドン作曲、旗野十一郎作歌
明治三十八年三月十九日午後二時半

東京音樂學校春季音樂演奏會、於同校奏樂堂

一、合唱「かちどき」フリーユゲル作曲、武島又次郎作歌、「燕」シューマン作曲、鳥居忱作歌 二、管絃合奏「チ
ルレジエンヌ」ビゼー作曲 三、ヴァイオリン獨奏 管絃伴奏、教授幸田幸「ロマンツエ」エンゼン作曲 四、獨唱、
柴田環「カンツオネ」モツアルト作曲 五、ピアノソロ 管絃伴奏、フォンケーベル「コンセルト」ケルビニ作曲
六、管絃合奏及び合唱「我武惟揚」ワグネル作曲、鳥居忱作歌
同三十八年三月二十五日午後二時

大塚音樂會第三回演奏會 於東京高等師範學校

一、合唱 甲、士氣の歌、乙、打つや鼓聲 聲樂部會員、二、ヴァイオリン獨奏 ホツホツアイト、アルシュ、メ
ンデルゾーン作曲 村上武次郎、三、箏曲 松風 琴長原春田、笛長原春葉、四、ピアノ独弾 メニユエツト
小林庸吉、坂野覺、五、獨唱 甲、ゆうへの夢、乙、落花賦 前田純孝、六、ヴァイオリン獨奏 甲、コンサー
トアリエー、乙、チュエツト 村田沼一郎、七、ピアノ獨彈 ソナチイナ 神保格、八、合唱 甲、二つの心、乙
鶯の歌 歌樂部會員 九、ピアノ獨彈 小林禮、一〇、合唱 祝歌 會員一同

明治三十八年七月八日午後三時

東京音樂學校卒業演奏會 於音樂學校奏樂堂

一、合唱

甲、早起 ニコラウス、デシユース作曲 旗野十一郎作歌

乙、常夏姫 ヘンデル作曲 武島又次郎作歌

一、ピアノ獨奏 アムプロムプチュ シューベルト作曲 器樂部卒業生 成田 藏 己

一、クラリネット獨奏 アヴェ、ヴェルム モツァルト作曲 器樂部卒業生 高 津 環

一、獨唱 エライジャ メンデルゾーン作曲 器樂部卒業生 外山 國彦

一、オルガル獨奏 カンツォナ ギルマン作曲 器樂部卒業生 古澤 きみ

一、ヴァイオリン獨奏 フリユーリングスエルウアツヘン パツハ作曲 器樂部卒業生 東儀 哲三郎

一、オーボエ獨奏 ロマンツエ メンデルゾーン作曲 器樂部卒業生 島 田 英雄

一、獨唱 カンツォナ モツァルト作曲 器樂部卒業生 小 室 千笑

一、ピアノ獨奏 ソナタ ベートーヴェン作曲 器樂部卒業生 天 野 アイ

一、合唱

甲、稜威耀乎 パレストリナ作曲 鳥居忱作歌 乙、征途の夢 エーヨルク作曲 鳥居忱作歌

明治三十八年八月一日午後七時

日比谷公園音樂堂第一回演奏 陸軍々樂隊 曲目(第四十四章公園音樂の部参照)

八月十二日午後七時同第二回演奏 海軍々樂隊 曲目(前同斷)

九月 二日午後七時同第三回演奏 陸軍々樂隊 曲目(前同斷)

明治三十九年三月二十七日

東京音樂學校卒業演奏會、於上野校奏樂堂

一、箏 千鳥の曲 選科卒業生 萩原八重、關 ソノ

一、合唱 甲、鞠場の默契 ノイマルク作曲 鳥居忱作歌 甲種師範科卒業生

乙、早 起 ニコラウス、デシユース作曲 旗野十一郎作歌

一、オルガン獨奏 ミニユエツト バツハ作曲 選科卒業生 山崎謙太郎

一、ピアノ獨奏 アムプロムブチユ シューベル作曲 本科二年生 田中 ろく

一、女聲二部合唱 甲、月前郭公 シューマン作曲 旗野十一郎作歌 甲種師範科卒業生

乙、暮 秋 シューマン作曲 武島又次郎作歌

一、オルガン獨奏 甲、カブリチヨールレーマンス作曲 鈴 木 善 野

乙、ファイナルレーマンス作曲

一、合唱 鞭聲蕭々メンデルゾーン作曲 鳥居忱作歌 甲種師範科卒業生及生徒

同三十九年十月二十一日午後一時

東京音楽院美琴會女子部第二回例會、於同院講堂

- 一、ピアノ獨奏「歌調」井出ふく子、二、オルガン獨奏「ホームスウキトホーム」田島たづ子、三、唱歌「愉快」
 - 四、ピアノ獨奏「進行曲」林原みつ子、五、オルガン獨奏「歌調」舛水みねじ、六、オルガン獨奏「歌劇調」西村喜代子、七、唱歌 甲、「秋の夜」佐藤博士作歌、乙、騎馬勇士、八、ピアノ獨奏「ソナタ」ペーターヴェン作、井出ふく子、九、オルガン演奏、アダチオペーターヴェン作 飯田賛助員、十、合唱「ゆかりの色」女生一同
- 第二部餘興 「赤十字」「活人畫」の意匠

同三十九年十月二十八日午後二時

明治音楽會第四十四回演奏會 於東京音楽學校奏樂堂

- 一、ヴァイオリン、セロ、ピアノ合奏(マツキー、ドブラウイチ、サリンガー)三部合奏曲ゲーデ作 二、獨唱(ロンドナー)歌劇バーベツト中の舞歌(美しき花の咲けるところ)ビクトハーバート作 三、ピアノ獨奏(マツキー)ロンドンガブリチン、メンデルゾーン作 四、ピアノ、ヴァイオリン合奏(ドブラウイチ、マツキー)ソナタ、ペーターヴェン作 五、獨唱、ヴァイオリン、セロ、ピアノ伴奏(ロンゲーカー、マツキー、ドラウイチ、サリンガー)四葉の甘菊花、フアーザードミユツク作 六、セロ獨奏(サリンガー)アタジョー、バアーシアル作 七、四部合奏曲(マツキー、ドブラウキツチ、多忠基、サリンカー)モツァルト作 八、表情歌(ロンゲーカー)

ミスロンゲーカーは獨逸音楽家で來遊中の人、彼の表情歌(樂劇のセリフ)が非常に喝采されてあつた。この歌の内容は甲「クリスマス」の紀念「乙」舊式の藩徽」にて甲の方はクリスマスの夜伯母の家に招かれたる小兒が其室に

入りて眩きばかりの飾り物に眼を奪はれ我を忘れて喜び戯れけるうち、不圖病に臥して家に在る母のことを思ひ出し
 喜色忽ち變じて憂色となる其目もと、口つき體のこなし無邪なき言葉まで宛がら其人を見るがごとく、乙の方は精勵
 の結果富豪となりたる老人が久し振に故郷へ歸れば豚小屋然たる昔の住居に其時のまゝなる薔薇が咲き居たりと云ふ
 筋である。

明治三十九年七月一日午後四時半

日比谷公園音楽演奏 曲目(第四十四章参照)

七月二十二日午後六時 曲目(別項日比谷公園奏樂の部参照)

八月九日午後七時(雨天のため順延)して 曲目(別項参照)

八月十一日午後七時 日比谷公園音楽演奏曲目(別項参照)

九月二十九日午後四時 日比谷公園音楽演奏曲目(別項参照)

十月十四日午後四時 日比谷公園音楽演奏曲目(別項参照)

十月二十八日午後四時 日比谷公園音楽演奏曲目(別項参照)

明治四十年四月十四日午後三時

日比谷公園音楽演奏(曲目第四十四章日比谷公園奏樂の部参照)

四月廿八日午後三時 日比谷公園音楽演奏曲目(別項参照)

五月十二日午後六時 日比谷公園音楽演奏曲目(別項参照)

五月廿六日午後三時 日比谷公園音楽演奏曲目(別項参照)

海軍々楽隊

陸軍々楽隊

海軍々楽隊

陸軍々楽隊

海軍々楽隊

陸軍々楽隊

陸軍々楽隊

陸軍々楽隊

海軍々楽隊

陸軍々楽隊

海軍々楽隊

海軍々楽隊

同四十年四月十七日

明治音樂會四十五回演奏會 於神田青年會館

一、管絃樂 月光進行曲

二、管絃樂 女王ローセ歌劇の序

三、小管絃 ミヌエツト、デ、マノン

四、ヴァイオリン獨奏

五、管絃樂 アダレ、ウォルツ

六、ホルン獨奏 フライシユツ

七、絃樂六部合奏 甲、舞踏會の遠響形容曲 乙、多辯者形容曲

八、管絃樂 コルネヴィルの鐘

九、管絃樂 騎行

同四十年六月九日午後四時

日比谷公園音樂演奏 曲目(別項日比谷公園奏樂の部参照)

六月三十日午後四時 日比谷公園音樂演奏曲目(別項日比谷公園音樂奏樂の部参照)海軍々樂隊

同四十年十二月十四、五日

東京音樂學校秋季演奏會、於同校奏樂堂

同校新任教師フレツク及びマイステルの披露演奏會を同校講堂にて開催、演奏曲目中第二絃樂四部合奏はウンケル

ハリドリツヒ、マイステル、幸田の大家揃ひとて満場唯水を打ちたるが如く第三フレックの獨唱は人をして恍惚たらしめ、第四ハイドリツヒのピアノ獨彈は南歐ヴェニス欸乃にて能く其悲調を寫し、第五マイステルのセロ獨奏は確かに絶妙古代名手の青年時代を見るが如くであつた。最後に賑かなピアノ五部合奏あり午後四時散會した。此日常宮周宮兩内親王及び伏見若宮殿下等の御臨場もあり兩内親王殿下には長時間いと熱心に御聽聞あらせられ其他二條徳川各公爵、林伯爵、英獨葡蘭各國大使、公使夫人等も見受けられ却々の盛會であつた。(音楽世界)

第四十六章 地方に於ける音楽會の普及

軍歌調の流行と共に音楽熱が著しく地方に進出しつゝある際、更らに日清役の連戦連捷に依つて此の機運は一層に増長され、隨所に音楽隊が組織されて遂に軍歌調全盛時代をつくり上げたのである。音楽教育の力に與つたとは言へ、凱旋兵士の口々から叫ばれた軍歌が全國的に普及したことは、争はれぬ事實であるが、其の訛ある軍歌が其の後日露の役に至るまでも歌はれた。

各都市に於ける音楽の發達は戰後實に著しく、音楽雜誌が地方に普及してゐたことを見ても窺はれる。

明治二十三年創刊の「音楽」が漸次其の出版部數を増し、二十六年當時に於ける讀者を地方別に擧げて見るに、東京は第一位を占め次に、名古屋、仙臺、長野の順で、神奈川は横濱を扣へて居るに不拘、京都、大阪、長崎に比べて大差がなかつた。次に北海道、茨城、廣島等が之に次ぎ其他の府縣は極少數のものであつた。

此時代に於いて各都市中音楽演奏會の普及して居たのは、關西では京都で、それに次ぐに神戸、大津、和歌山等で

大阪は大都市でありながら洋楽方面は至つて不振であつた。神戸も横濱よりは遙かに振はない。

東北地方では弘前、山形等に屢々音楽會等の催があつても、其の程度低く、仙臺の右に出づるものは無かつた。仙臺は、基督教々會の勢力なか／＼強く、従つて教會音楽は非常に發達してゐた。こんな風でミス、ハンセン（後に音楽博士となる）の如き秀でた演奏家が盛に演奏してゐた。明治時代の音楽の先驅者に、文部省取調掛當時の卒業生四鹽納治、仁邇の兄弟あり、東京音楽學校卒業生の吉田信太あり、ニコライ堂音楽學校出身、小原甲三郎、金須嘉之進、前田河信近等の如き皆仙臺人であつたことは蓋し理由のないものではない。其の昔伊達政宗公の家臣支倉六右衛門の海外雄飛が何ものかを物語るものであることを信ぜずに居られない。

本州中部に於ては長野縣が第一位で、教育の普及と共に音楽會の催も相當程度の高いものであつた。靜岡地方は唱歌會の活動するのがあり、名古屋は洋樂は邦樂に壓迫せられてその活動が鈍かつた。中國地方では廣島が第一位で、吳市は海軍々樂隊の影響を受けて、洋樂の發達に著しいものがあつた。岡山、山口等も割合に普及して居た。

九州は概して西洋音楽の普及發達した都市多く、長崎、博多に次いで熊本、鹿児島等に於いても盛に洋樂主の演奏會が催されてゐた。

關東地方は一體に音楽は普及してゐたが、帝都を抱擁してゐる關係で餘り目立たない。しかし千葉、山梨、神奈川、群馬の各府縣に於ける音楽的施設に見るべきものがあつた。

日本海方面はその普及の程度一般に微細で新潟、石川を除くほかは音楽會の催等は極くまれであつた。

此の時代に於ける音楽演奏會の曲目を集めたのであるが、邦樂主のものが多い關係で、こゝに掲載したのは其の全部ではない。

明治二十七年二月二十六日、仙臺、東北學院音楽會

仙臺東北學院教師並同地在留の外國人發企で仙臺座に於て開いた。

教會堂新築費用の據集が目的で聴衆は二千五百餘人、滿場立錐の地がないといふ盛會であつた。

スワルツ夫妻のオルガン、ピアノ獨奏、連弾其他唱歌、琵琶、清樂合奏、劍舞、八雲琴、琴尺八合奏、能狂言、

三絃合奏等十數番。

外人ドクトル、スワルツの尺八、同夫人の琴の六段の演奏等は趣味深く、人々は其の奇妙なのに舌を巻いたと言はれてゐる。

同二十七年九月

北海道報國音楽會、禁酒鼓隊主催、函館の町公會堂に於て、曲目二十餘種

外國音楽師ミコシンガーの進行曲、函館音楽隊のプロシャンマーチ、少年禁酒會員の日本刀の歌等は、滿場を感奮せしめた。

同二十七年九月

神戸市植兵隊合音楽會、神戸風琴音楽會主催、於相生座

一、洋樂 マーチ

二、洋樂 ボルカ演奏

三、都の春

四、明樂

神戸音楽會

三谷仙琴、坪井徳次郎

天野城富外數名

藤・橋外數名

五、尺 八

六、手風琴、ヴァイオリン合奏

七、開化の花

八、洋 樂 歌劇の曲

九、奏 樂

一〇、奏樂 オバチユア

一一、淨瑠璃 太閤記十段目掛合

一二、手風琴合奏 六 段

一三、八雲琴 高砂音撞

一四、明笛、ヴァイオリン合奏 月宮殿

一五、箏 五段砦

一六、尺 八 鶴の巢籠

一七、奏 樂 戦争マーチ

時節柄最後の戦争マーチの如きは非常な喝采を博した。當日の諸入貨は一切主催者に於て負擔したのが一層の人氣を引いた。會するもの數千人、第一の劇場も立錐の餘地なし。

同二十七年九月高田恤兵音楽會、於高田市

酒 井 政 市

大井清風、三谷仙琴

天野某外數名

神 戸 音 樂 會

居留地音楽隊

居留地音楽隊

林 義舟、大井清風

喜 連 川 柳 雨

天野城富外數名

藤橋寅之助、三谷仙琴

中島檢校外一名

酒 井 嘉 月

居留地音楽隊

曲目十三番風琴、ヴァイオリン等の奏樂もあつた。

明治二十七年十一月三日、報公大音楽會

天野城富の發起で神港俱樂部に於て同會を開く。恤兵醸出音楽會に劣らぬ盛會を見た。

明治二十八年一月十二、十三日

上毛孤兒院寄附金募集慈善音楽會、於前橋市

一、唱歌 母なき吾屋 忠臣

二、箏 三 絃合奏(二回)

三、琵琶

四、劍舞

五、立琴(ハープ)獨奏

六、落語

七、ヴァイオリン合奏

上毛孤兒院生

秋元豊賀外二名

山下利助

吟 山下利助

ミツセス、バツトン

三遊亭圓花

内田桑太郎

深澤登代吉

聴衆六百餘名、收入百四十圓といふ豫想以上の結果を収めてゐる。立琴は珍らしかつたものであらう。當時來朝の宣教師達の上毛地方に遊ぶものうちにはハープを携へ彈奏してゐるものが多かつたと言はれてゐる。

同二十九年八月二十四日

音楽學校出身者演奏會、於大阪市公會堂

第一部

- 一、單音唱歌 (一)凱旋の歌 (二)我國
- 二、風琴獨奏
- 三、單音唱歌 (一)秋の夕 (二)破邪曲
- 四、風琴獨奏
- 五、ヴァイオリン獨奏
- 六、獨唱歌
- 七、ヴァイオリン及唱歌

第二部

- 一、三重音唱歌 (一)頭巾魔嶺 (二)晚鐘
- 二、風琴獨奏
- 三、獨唱歌
- 四、唱歌 ヴァイオリン、風琴合奏
- 五、風琴獨奏
- 六、單音唱歌 (一)夢 (二)奉迎之歌
- 七、ヴァイオリン及び唱歌
- 八、君が代 (二回合唱)

同聲會員	永井幸次	同聲會員	永井幸次	同聲會員	高橋二三	同聲會員	同聲會員	永井幸次	早川喜左衛門	永井幸次	深澤登代吉	同聲會員	永井幸次	同聲會員	深澤登代吉	來會者一同
------	------	------	------	------	------	------	------	------	--------	------	-------	------	------	------	-------	-------

明治二十九年八月二十八日

音樂學校出身者演奏會、於大津市公道館

第一 部

一、開會の旨意

發起人 六 高 信 藏

二、謝辭

同聲會員 深 澤 登 代 吉

三、唱歌

米 野、深 澤、甲 賀

(一)我 國(風琴伴奏) (二)滋賀の湖 ヴァイオリン、サクソホンアルト伴奏)

四、風琴獨奏 佛國々歌マルセーユ

高 橋 二 三 四

五、唱 歌 (一)秋の夕(風琴伴奏) (二)破邪曲(風琴、ヴァイオリン伴奏)

同 聲 會 員

六、箏曲合奏 松竹梅

山 本、高 瀬、甲 賀

七、獨唱歌(風琴伴奏) (一)オ 女 (二)母の思

宮 部 ふ じ

八、ヴァイオリン獨奏 風琴伴奏

早 川 喜 左 衛 門

(一)ゲベトノ (二)サゲルコール ウエーベル作

九、サクソホンアルト獨奏

甲 賀 某

第 二 部

一、箏曲合奏 六段

深 澤、甲 賀、山 本、高 瀬

二、獨唱歌 秋 景(風琴、ヴァイオリン伴奏)

永 井 幸 次

三、 箏 曲 越後獅子

四、 風琴獨奏 (一)テンネタイマーチ (二)ローマンズ

五、 唱歌 (風琴、ヴァイオリン、サクソホンアルト伴奏)

(一)菊 (二)奉迎の歌 (三)凱旋

山本、高瀬
永井、幸次
同聲會員

明治三十年二月

廣島高師第三回校友會音樂會、於高等女學校

第一部 唱歌(一)秋の祝、總員合唱、(二)あられ一、二、三、學年生、(三)故郷の空四、五學年生、(四)箏曲富貴三人連彈、第二部 唱歌(一)三都一、二、三學年生、(二)歴史は我を、校友、六學年、箏曲四季の友、三人連彈、第三部 唱歌浮雲四部合唱、校友、六學年生、箏曲みだれ三人連彈、第四部 唱歌(一)身も世も忘れ一、二、三學年生、(二)露の玉 四、五學年生、箏曲六段調オルガン獨奏、箏三人連彈合奏、第五部 唱歌桜友會の歌 校友會員一同、箏曲桐壺三人連彈、唱歌(一)朝雲雀、(二)京の四季、校友、六學年生及五學年生合唱、箏曲千鳥二人連彈、第六部 唱歌(一)寧樂の都四、五學年生、(二)秋の七艸、校友、六學年生、箏曲里の曉、四人連彈、唱歌めぐる年月、一同合唱

明治三十年

四月十二日仙臺市公園地挹翠館に開きたる勝間田、武内兩舊知事の送別會に於て勝間田前宮城縣知事は當日同會へ出張奏樂し居たる宮城音樂隊員に向ひて一場の演説をなした其梗概は

本日小生等の爲めに催されたる此の壯嚴盛大なる送別會席上に於て小生が當初來熱心に賛同を表したる宮城音樂隊

の痛快壯絶なる奏樂を以て興を添えられたるは、發起人及び樂隊員の周到なる注意に出づるものにして、感謝する所を知らず、從來宮城音樂隊は我が宮城縣に於て行はれたる凱旋歡迎會其他公私の會合に文明國の完全なる音樂を吹奏して其の世教を裨益せる實に尠少ならずと信ず。而して宮城音樂隊は其の設立以來日尙ほ淺きにも拘はらず樂手の熱心なる練習に依り其の技藝長足の進歩をなし、其奏する所、律を協ひ呂に合ひ人心をして感激鼓舞せしむる果して幾何ぞや。斯の如くにして屢々止まずんば遂には東北唯一の私立樂隊となり、其の妙技を四方に發揮せんと期して待つ可きなり。終に望み一言する所のものあり、小生未だ樂手諸氏に對する惡評を耳にせざるは誠に以て賀すべく慶すべきの限なるが、猶ほ此の上にも益々品行を修めて以て其の品位を一段高尚の位地に進められんことを切望の至に堪へざるなり云々。(音樂第六十八號)

明治三十年十月三十日

宮崎音樂演奏會、於宮崎縣師範學校

第一部

- 一、風琴 進行曲 二、唱歌 御代の秋 三、唱歌 海行かば 四、唱歌 富士筑波
- 五、風琴 進行曲 六、唱歌 菊 ヴァイオリン伴奏 七、唱歌 學問
- 八、風琴 都の春 九、唱歌 喇叭卒

第二部

- 一、風琴 進行曲 二、唱歌 從軍行 三、ヴァイオリン六段 四、唱歌 親の恩
- 五、ヴァイオリン、風琴、箏、唱歌合奏 甲、鏡 乙、四季の月 六、唱歌 虎穴に入らば

- 七、唱歌 招魂祭 八、風琴 甲、ズエイソナタ第一 乙、フォーワードマーチ
九、唱歌 破邪曲

同縣未曾有の企として殊の外人氣に投じ非常の喝采を得た。

明治三十年十月三日

尾州水害罹災者義捐音樂會、於名古屋明治館

君が代金城軍樂會、「八雲琴」、天長節の曲、御榮東の名殘家元社中。「吹奏樂」祝賀進行曲、ヨルキスマーチ金
城軍樂會「板琴」鶴か音、竹の友伊藤竹子外三名。「雅樂」盤涉調青海波樂友會。「上唄」身がはり音頭渡邊く
わ子外二名。「長唄」蓮の糸竹庵原外二名。「尺八」鹿の遠音附下り葉高橋外一名。「清樂」朝天子四季曲、溪庵流
水溪風社中。「箏曲」さむしろ音樂講習所。「狂言」佛師神谷外一名。「吹奏樂」八千代獅子金城軍樂會、「板琴」
松竹梅伊藤竹子外三名。「雅樂」蘇莫者樂友會。「箏曲」古今千鳥の曲宮崎外二名。「長唄」吾妻八景大鹽外三名。
「尺八」残月内田。「箏曲」きねた音樂講習所。「祝言」家土産礦部某。

名古屋音樂聯合會第五回慈善音樂會である。

明治三十五年十一月二十日午前十時

廣島音樂研究會發會式

廣瀬高等女學校校長は國民教育として善良なる唱歌の普及を論じ、同校吉田教諭は音樂と風俗との關係を陳べた。評
議員に廣瀬高等女學校校長、弘澤師範學校校長、三上高等小學校校長の三名を擧げて以後毎日二時間宛吉田教諭、これが指導

を爲す。會員は六十餘名。

明治三十六年二月二十二日

長野音楽演奏會、於長野市城山館

第一・部

一、吹奏樂 甲、ゴツド、セーヴゼクイン 乙、ヘル、コロソビヤ 長野師範附屬軍樂會

一、唱歌 甲、月 乙、名萬代 來賓 數名

一、合奏 ヴァイオリン 早川喜左衛門

メディーテーシヨン(默思) ピアノ 宮島慎三郎

一、吹奏樂 ミカド、ランサー(帝王、舞踏曲) 長野師範附屬軍樂會

一、獨唱(次中音) 草川 宜雄

ホワット、シャール、ゼ・ハーベスト、ビー(善き收穫) 伴 奏 早川喜左衛門

一、クラリネット獨奏 鈴木 謙太郎

ウエツディング、マーチ(婚禮行進曲) 伴 奏 宮島慎三郎

一、唱歌 甲、いざ繁たな(三部合唱) 乙、須磨の曲 長野高等女學校校友會員

一、合唱 萬歳樂 ヴァイオリン 早川喜左衛門

ピアノ 宮島慎三郎

一、ピアノ連彈 ヴィヤナ、マーチ 維也納行進曲) 高 音 草 川 宜 雄

一、吹奏樂 獅子の曲

第二部

一、吹奏樂 フェネラル、マーチ(葬送行進曲)

一、唱歌 信濃の宮

一、ピアノ獨奏 ソナタ

一、唱歌 (三重唱)

テンディング、ツィ、ナイト(今宵の露營)

一、吹奏樂 喇叭の響

一、獨唱 アスリープ、インゼ、ディープ(海底の眠)

一、ブラス、トリオ(喇叭三部合奏)

ホーム、アゲーン(故郷を懐ふ)

一、ヴァイオリン獨奏 オペラ、ボツボリー(歌劇中の一節)

低音 高松 良

長野學校附屬軍樂會

長野學校附屬軍樂會

來賓 諸氏

宮島 慎三郎

高音 草川 宜雄

中音 宮島 慎三郎

低音 早川 正夫

伴奏 早川喜左衛門

長野學校附屬軍樂會

低音 宮島 慎三郎

伴奏 早川喜左衛門

高音 一由 亮太郎

中音 鈴木 鎌太郎

低音 早川 正巳

早川喜左衛門

明治三十六年三月十四日晝夜

日本力行會慈善音樂會、於千葉縣々會議事堂

第一部

- 一、唱歌 甲、ほととぎす(三部合奏) 乙、むつの花
- 一、合奏 虫の音

伴 奏 官 島 慎 三 郎

長野高等女學校校友會員

ヴァイオリン 早 川 喜 左 衛 門

クラリネット 鈴 木 鎌 太 郎

ピアノ 宮 島 慎 三 郎

長野學校附屬軍樂會

一、吹奏樂 甲、デイー、ワツハト、アム、ライン(獨國々歌) 乙、ラ、マルセーユ(佛國々歌)

一、歐米詩吟舞

二、オルガン獨奏 トロメライ、シユーマン作

三、獨 唱 米國々歌、ゼスターズハンゲルドパンナー

四、詩 吟

五、ブルタスピーチ

六、琴 演奏

七、獨 唱 ウキアルセーリング、スキトイズゼオルク

三富百合、大谷玉子

木 脇 國 子

酒 井 勝 軍

大 井 治 男

安 孫 子 貞 次 郎

小 林 ち よ せ 外 二 名

酒 井 勝 軍

一、琴

二、獨唱

三、ヴァイオリン、ピアノ合奏

ワルツ、フロンムファスト、ウイステル作曲

四、歐米詩吟法

五、オルガン獨奏　グロリヤインホルス　トマツス、ハイドン作曲

六、ピアノ獨奏　セクレースピーザー　メンデルゾーン作曲

七、デルサート仕舞

同三十六年三月十五日

京都音樂會第一回演奏會、於府立高等女學校講堂

一、發會の歌

ペリニー作曲　石丸敏雄作歌

講習員、師範三年女生其他有志

二、ピアノ連彈

Oesterreichisches Nationalled. (澳國々歌)

吉田恒三指揮、小林八重野伴奏
師範三年　林　みき、近藤まさ

三、箏曲　我　駒

大江千里作歌　高野檢按作曲

鈴木鼓村、小野包子
吉村初、伊良子千代
浦　井　か　ら

林　竹　枝

高　折　周　一

巖　本　捷　治

三富百合、大谷　玉

木　脇　園　子

巖　本　捷　治

三富百合、大谷　玉

四、唱歌 角倉了以 高安月郊作歌 吉田恒三作曲

五、風琴獨奏 Home sweet home. (樂しき我家)

六、箏、尺八、合奏 千鳥の曲 吉撿按作曲

七、ヴァイオリン獨奏(ピアノ伴奏)

Les Sirenes waltzes (ル・シレンヌワルツ) ウラルトチューフル作曲

八、ピアノ獨奏 Nationale fahue (國旗)

九、箏曲

春の行衛 高安月郊作歌 鈴木鼓村作曲

一〇、唱歌 慈 善(三重音) グローヴァ作曲 中村秋香作歌

一一、講話

一二、風琴獨奏 Evening Reverie (宵の想)

一三、獨唱(ピアノ伴奏) The last rose of summer. (晩夏の薔薇)

一四、ピアノ獨奏 Donatime (ソナチネ第一部) ベートーヴェン作曲

一五、尺八 門開喜(本手)

一六、ヴァイオリン獨奏(ピアノ伴奏)

Royal march. (ロイヤル・マーチ) ウィンネル作曲

一七、唱歌 小野の山

講習 會員

二ノ文 彌十

鈴木鼓村、樋口孝道

中根 直記

増澤 長吉

鈴木鼓村、小野包子

吉村 初子

師範三年女生一同

村岡理學博士

寺町 六郎

増澤 長吉

原田 千秋

樋口 孝道

芝本 信利

師範三年女生

一八、箏曲 巖島詣 高安月郊作歌 鈴木鼓村作曲
鈴木 鼓 村
一九、ピアノ連弾 師範三年 林 みき、近藤まさ

Zigeunerleben. (流浪の生活) シューマン作曲

二〇、ヴァオリン獨奏(ピアノ伴奏) 廣 田 守 信

甲・Largo. (ラーゴ) ヘンデル作曲 乙・Jagerchor. (獵の歌) ウェーベル作曲

二二、唱 歌(ピアノ、ヴァイオリン伴奏) 講習會員、師範三年

小松宮殿下頌徳の歌 池田喜雄作歌 吉田恒三作曲 女生、其他有志

當時の師範學校關係の代表的音樂會ともいふべきものである。

同三十六年三月二十一日夜

外人音樂會 横濱市山手町パブリックホールに於て獨唱家とし有名なるミス、カイゼルの獨唱會が開かれた。彼は獨逸音樂學校出身で、我が國に來遊中屢々この種の會を催してゐる。三十八年頃には上野音樂學校の教師にもなつてゐる。

同三十六年四月十一日午後二時

和歌山縣音樂演奏會、於和歌山市縣會議事堂

一、管絃樂 一、ハンツマンズ コーラス 二、バツターフライシヨツテシ 全 員

二、ピアノ獨奏 ウェーブス、オブ、オーシヨン 前 田 久 八

三、管絃合奏 六 段 全 員

四、ヴァイオリン連奏 ベール

石野 巍、高折周一

五、獨唱 月の處女

岡野 貞一

六、ピアノ、ヴァイオリン合奏 虫の聲

北村秀晴、村岡詳太郎

七、管絃樂 一、スキング、ワルツ 二、ナルチサス、ダンス

全 員

八、ピアノ連彈

前田久八、岡野貞一

一、ハツビー、ニューイヤース、マーチ 二、デョーリシスターズ、ガロツプ

九、合唱 一、各國々歌(原語) 二、露營の夢

全 員

一〇、クラリネット獨奏 グードナイト トーナメント

中村 忠雄

一一、箏曲 千鳥の曲

全 員

一二、管絃合奏 花見車

全 員

一三、合奏 君が代

一 同

明治三十六年六月六日午後二時

自助館建築義捐音樂會、於仙臺市

一、コルネット、ピアノ合奏

ステツク、ドーリング夫人

二、茶の歌

クリヴランド

シュネーグー
ドーリグ

三、ヴァイオリン獨唱

四、獨唱

五、結婚式プロセツション

六、琴 (千鳥曲)

七、ピアノ獨奏

八、ケーク、ウオーク(黒奴の舞踏)

九、獨奏

十、ドリル

十一、大學唱歌

教

授

前田河信近

高橋リカ

ゲルハート夫妻

ヒーランド

クリヴランド

ミスクリヴランド

ドーリントン

シーモール博士

クリヴランド博士

伊藤重代、橋本千代

ドーリング夫人

ミスクリヴランド

ドーリントン

酒井勝軍

自助館生徒

クレイトン

ステツク

クリヴランド

ノツス

△外人が主な音楽會であるが、音楽専門家でなく東北學院の教授並家族達の集合である。
明治三十六年六月五日、六日。

慈善音楽會、主催明治女學校卒業生、於京都市會議事堂

一、軍樂

第四師團軍樂隊

二、ピアノ四手聯彈

パツ トン(九歳)
ケ デ ー(十一歳)

ハンガリアンダンス ベール作

三、獨唱(ピアノ伴奏)

滋賀縣師範教諭 中村 忠雄

渚の小舟 今村九穂作歌 ポルトニアンスキー作曲

四、^{ハイフック}堅箏獨奏 堅箏の起原

パツ トン

五、オルガン獨奏 シルヴワー、ウエーヴ、バルカロール 平安カ學院教師 小林 房子

六、ヴァイオリン、ピアノ合奏 デエツト、ザ、ノルマ ベルニー作曲 高折周一、巖本捷治

七、三曲合奏 箏 小畑てつ子外十名

八、改良最大著音器演奏

九、三曲合奏 箏 山口巖外十名

十、ピアノ獨奏 ミス、ゴルドン

アンダンテー、フロム、シンフォニー、イン シー シニューベルト作曲

十一、ヴァイオリン（ピアノ伴奏）

東京音楽學校講師 高折周一

ドンジュリアン モザート作曲

十二、薩摩琵琶 教盛

四 幸 吉

十三、ヴァイオリン、ピアノ合奏 鶴龜

高折周一、巖本捷治

十四、軍樂 歌劇トラバトル

陸軍々樂隊

十五、獨吟 長唄勸進帳（ピアノ）

高折周一

伴 奏 巖本捷治

十六、箏曲合奏 等

江良千代子

十七、ピアノ獨奏 ソナタ モザート作曲

巖本捷治

十八、薩摩琵琶 小松のみさを（重盛）

四 幸 吉

十九、軍樂

陸軍々樂隊

△番外と薙刀術の型等があつて、深更十二時四十分閉會した。改は最大蓄音器とはロンビヤ會社のデイス
フォノグラフてふ平盤レコード用のもので同市大澤商會の手によつて演出されたもの。

同三十六年六月八日午後七時。

聯合音樂會、於仙臺市。

一、君が代 二、奏樂

三、獨吟 ナインティ、ナイン

酒井勝軍

- 四、奏樂 ヴァイオリン マスコット
- 五、合唱
- 六、奏樂 ヴァイオリン 常磐
- 七、獨吟
- 八、奏樂 コルネット
- 九、合唱
- 十、奏樂 ヴァイオリン ブルツセス
- 十一、演説 音楽の趣味
- 十二、獨吟
- 十三、奏樂 マンドリン
- 十四、合唱
- 十五、奏樂 ヴァイオリン
- 十六、獨吟
- 十七、合唱

- 小 關 勇
- ミス、クリヴランド
- ミス、シュネッダー
- 今野しん、小島いし
- ミセス、ドーリング
- ステツク
- 鈴木さだ、丹羽こま
- 佐藤武三郎
- 酒井 勝 軍
- 持館ふゆ子
- ステツク
- ミセス、ゲルハード
- ミセス、ノツス
- クレートン、ノツス
- 前田河信近
- ミセス、ゲルハード

同三十六年七月十一日午後一時開會

雅樂講習會滋賀支部演奏會、於大津市。

- 十八、獨吟 處世の歌
- 十九、奏樂 コルネツト
- 二十、合唱

酒井 勝 軍
 ステツク
 ミセス、ドーリング
 ミセス、クリヴランド

- 一、奏樂 君が代

彦根音楽隊

- 二、雅樂 登越調、音取、迦陸頻

滋賀支部

- 三、オルガン獨奏 グロリア

東京音楽學校

三谷 俊 造

- 四、八段

- 五、琴、ヴァイオリン、オルガン合奏 ショテシ

岡本ゆき江、吉田稔

- 六、獨唱 舟 出

滋賀縣師範學校教諭

中村 忠 雄

- 七、箏、尺八合奏 雪

- 八、筑前琵琶

- 九、三絃合奏 四季の眺

- 十、題不詳

原ひさ、岡本ゆき江

- 十一、明清樂 紗窓、清平調、溪庵流水

彦根明清樂會

十二、オルガン獨奏 アトランティック、ガロツプ 横濱英和女學校生徒 穂永かほる子
十三、唱歌 彦根女學校敎諭 牧野うめ、穂永うた

十四、オルガン獨奏 クレイトンス、ランド、マーチ

十五、獨唱 二人の兵士 同 かほる子
三谷俊三
中村忠雄

十六、尺八 四、筑前琵琶

十七、箏、三絃合奏 中村忠雄

十八、オルガン獨奏 アンダンテ 岡本ゆき江、吉田稔

十九、箏、ヴァイオリン、オルガン合奏 六段 穂永うた子
滋賀支部
彦根音楽隊

二十、雅樂 平調 音取、陪爐

二十一、奏樂 マーチ 甲賀浪江、甲賀夢仙

明治三十六年十二月十二日。

日本力行會京都音楽會、於京都市議事堂。

一、ヴァイオリン、ピアノ合奏 ヘリゲームホルカ 鈴木 鼓村

二、箏合奏 大原女 薄田泣菫作歌 鈴木鼓村作曲 國風音楽會童女部

三、獨唱

チー、プロミツスミー(我に誓へ)ジナルド、ヅ、コーヴェン作曲

ミス、エリートン
ウキルソン

四、箏、尺八合奏 千鳥 古歌 古澤檢校作曲

尺八
樋口孝道

五、ヴァイオリン合奏 御國の譽

箏
鈴木鼓村
甲賀浪江、竹内曉夢

六、舞踏

ハイランド、スコチツシユ

指揮者
ガダード母子
演舞者
クラーク

バーン、ダンス

ランサース

ダイヤモンド、ポルカ

ヴァルツ、コチロン

サー、ロジヤー、デ、カヴァレ

ド、ルーシーファサリオ
ベネネル
カネベル
カネベル
ベンヌル
リツチャードソン
フランクリン

七、尺八本手 霧海流

八、獨唱 アンサー(應答) アルフレッド、ジ、ロンピン作曲

九、デルサート

十、舞 踏

ハイランド、スコチツシユ

バーン、ダンス

ランサーズ

ダイヤモンド、ポルカ

ヴァルツ、コチリオン

サー、コシヤー、デ、カヴァレー

マク リー ン

樋 口 孝 道

ヒュース、エラートン

大谷 玉、島貫しか

指揮者 ガダード母子

演 舞 者 ク ラ ー ク

クリステンソン

デベニツシユ姉妹

ガ ン セ ル

リツチャードソン

ジエロールド

フ ラ ロ ン

ド、ルーシーファサリオ

ベ ン ネ ル

カ ン ベ ル

カ ン ベ ル

ベ ン ネ ル

リツチャードソン

フランクリン

十一、ヴァイオリン、サクソホンソプラノ合奏

甲賀浪江、甲賀夢仙

明治三十六年十一月二十一日、二十二日

岡山音楽會 故岡田純夫が多年岡山縣師範學校長として將又岡山縣教育會長として縣下の教育事業に多大なる功績を殘せるを以て、彼の歿後檜桓知事を初め星師範學校光岡中學校其他縣下有力なる教育家の發企にて同市に岡田文庫てふ圖書館を設立せむとて該費用募集の爲め同市高砂座に於て音楽會を開いた。兩日とも非常の入場者で合計三千五百餘人に達し入場料金八百餘圓、菓子果物の賣揚高二百餘圓、計千圓以上に達した。演奏の主なるものは海國軍樂隊の吹奏樂、ガンドレットの風琴獨奏、佐々木彌吉の薩摩琵琶で其他同地の特有吉滿舞、三曲の合奏、劍舞、明清樂等であつた。

明治三十七年一月三十日

石川縣音楽研究會春季演奏會、於金澤市金谷館

一、君が代

一、吹奏樂 膠洲灣占領行進曲

北陸軍樂隊員

一、風琴合奏 軍艦、進め矢玉、あなうれし

雅松音楽會員

一、箏曲合奏 四季

石川時外一名

一、唱歌 ひれふり、甲鐵艦

音楽研究會員

一、オルガン獨奏 ル、タンボーリン、フレドニヤ、マーチ

新清次郎

一、合唱 マイ、レスチング、ブレース スチユベル作曲

福見ひさ

- 一、箏曲合奏
- 一、獨唱 菊の歌
- 一、風琴合奏 五忠臣、久田船長、鳥の林
- 一、合唱 スイート、ホーム
- 一、吹奏樂 カウツレリヤ拔萃 ワグネル作曲
- 一、吹奏樂 ポレロ
- 一、風琴合奏 黒龍江、春爛漫、勝ほこりたる
- 一、唱歌 鞍馬、赤十字婦人の従軍
- 一、箏曲合奏 冬、飛燕
- 一、風琴合奏 日本海軍、我が海軍、勇敢なる水兵
- 一、唱歌 學窓聽鐘
- 一、オルガン獨奏 フェネラル、マーチ ベートーヴェン作曲
- 一、唱歌 富士の裾野
- 一、ヴァイオリン合奏

- 新 清 次 郎
- 中越歌子外一名
- 山 室 全 吉
- 雅松音楽會員
- 槻 尾 薫
- 久 保 み つ
- 北陸長樂隊員
- 北陸軍樂隊員
- 雅松音楽會員
- 雅松音楽會員
- 進藤八重子外二名
- 雅松音楽會員
- 音楽研究會員
- 新 清 次 郎
- 北陸軍樂隊員
- ミストル、ユンケル
- ミス、エレイン

一、獨唱 英語唱歌

一、箏曲合奏 千鳥

一、合唱 クロツシング、ゼ、パール テニソン作

星野 靜 枝

中村平次郎外二名

ミス、ベルトン

ミス、レンジ

△軍歌調の多く扱はれた音楽會である。

明治三十七年三月十一日午後一時

玄洋音楽會春期大會、於福岡高等女學校。

- 一、唱歌 ヴァイオリン、オルガン合奏「往け往け日本男兒」作歌外山正一、作曲伊澤修二、師範學校 二、箏曲 都の春、作歌鍋島直大侯、作曲山勢松韻、唱歌中村いし子、村上八重子、樂器永淵直吉 三、オルガン獨奏 高等女學校生徒、樂隊の響、岡本する子 四、洋琴獨奏 グマスク、ローズ作曲、チャールズ クロイ、村上一郎
- 五、唱歌 甲、日の出富士(複音)作歌旗野十一郎、作曲ロッア、乙、日本の兵、作歌旗野十一郎、作曲クツケン 高等女學校生徒 六、唱歌獨吟不詳、小川すみ子 七、清樂 「甲、抹梨花、乙、林流水」月琴丹速水、立花香子、磯野いち、木琴太鼓三吉利三郎、胡琴鷹野久七、提琴村上八重子、笛三吉利吉、蛇皮線吉、松島せい子
- 八、箏曲「甲、千、乙、みだれ」胡弓柴藤貞子、箏堀内さえ子、河野きく子、川島つる子、多久のぶ子、板谷みね子 九、琵琶一丸利恵 十、オルガン獨奏 甲、リンデンマーチ、乙、キャンデル、ガルテン、マーチ、永淵直吉 十一、唱歌「須磨の浦波」女子師範學校生徒 十二、ヴァイオリン、マンドリン、デビソン、熊本商業學校教師マルチン 十三、清樂 甲、軍令、乙、脚魚寶 丹速水外七名(同前) 十四、長崎淺水女學校音楽教師メープ

ル、デビソソ 十五、箏曲 飛燕、樂器小川すみ子、箏多久のぶ子、柴藤てい子、堀内さえ子、河野さく子、川島つる子、板谷みね子 十六、琵琶「征露歌」鶴崎賢定 十七、唱歌、ヴァイオリン、オルガン合奏「大八洲」東京音樂學校選、男女師範學校生徒、高等女學校生徒。

明治三十七年三月十三日。

熊本師範學校音樂會、於同校講堂。

一、唱歌 君が代(二回)

來會者一同起立

二、オルガン獨奏 甲、雨露 乙、チチュー、マーチ

川上きせ子

三、合唱

指 揮 入江好治郎

甲、子守唄(複音) 乙、煙火(複音)

申出しつ、池田つや
福田つよ、佐藤そのを

四、ヴァイオリン合奏 甲、エチュード拔萃 乙、獨逸行進曲

河邊はつ、後藤あい

五、唱歌 甲、巖島 乙、ヘール、コロソピア 丙、大男兒

本科四年男生

六、ピアノ、ヴァイオリン合奏 六段

木村勝、齋藤徳成

七、人形賣り(餘興)

北里善從

八、唱歌 甲、露の玉 乙、卒業を祝ふ

本科一、二年女生

九、箏獨奏 八段

木村勝

十、獨唱 ロ・レライ

渡邊梅壽子

十一、音楽體操 アンヅイル、コーラス

十二、唱歌 甲、春日山 乙、我が艦隊

十三、ピアノの聯彈 レ、ハチツト、カーナバル、ホルカ

十四、合唱

甲、祝ハ吾君ギ(重音) 乙、佐保姫(重音)

指揮 入江好治郎

本科二年女生
本科三年男生
川上きせ、柴田たけ
本科四年男生
本科三年女生

同三十七年四月十四日

第二高等學校有法音楽會、於仙臺第二高等學校講堂

PART I.

1. Piano Solo "Olympia March" T. Nishikawa

2. Chorus "Long, Long, ago" Members of Musical Association

3. Violin Duett "Freischutz" weber Okamoto Y. Yasui

4. Vocal Duett "Selected" G, Kitami S. Sek'in

5. Trio (harmonic) "Köing Karl Marsch" Y. Yasui T. Nishikawa T. Murata

6. Violin Solo "Selected" J. Shikama

7. Trio (piano & violin) "Rokudan" Okamoto Y. Yasui T. Murata

8. Chorus: a. "Wakare no Tori" b. "Shiray ku Members of Musical Association

9. Violin Solo "Tannhauser" wagner Okamoto

PART II.

1. Piano Duets "The Dragon Fighter" Hoffman Mary Schneider

Margaret Schneider

2. Vocal Solo a. "Violets" Wright b. "Twas ever thus" Burns F. V. Dening

3. Organ Solo "Selection from Faust" Gounod A. K. Faust

4. Vocal Solo Marguerite duza J. M. Stick

5. Piano Solo "Hiawatha" Mallet D. Forest

6. Cornet Solo "The Lost Chord" Sullivan J. M. Stick

7. Piano Solo "Mazurka in B" Chopin Mary Schneider

8. Vocal Solo "Sing Me to Sleep" Greene Dening

9. Trio "Juanita" Norton Messers Crane Davison Stick

當時のプログラム其の儘を載せたものであるが、英字で綴られてゐても通俗的なものばかりである。

明治三十七年四月三十日午後七時

青森婦人矯風會恤兵音楽會、於弘前市東奥義塾

一、合唱 男士

弘前女學校生

二、オルガン獨奏

岩淵とも

三、箏 明石

四、合唱 ナンセーリー

五、箏、ヴァイオリン合奏 うすがすみ

六、軍歌 日、米、英の歌

七、獨吟 コロンピヤ

八、箏 ほとよぎす

九、軍歌 決死隊

一〇、オルガン合奏

一一、尺八

一二、合奏 レガート、ガインレー

一三、軍歌 一、廣瀬中佐 二、立てや同胞

一四、ヴァイオリン 都の春

一五、獨吟 從軍行

一六、平曲 那須與一

一七、オルガン獨奏

一八、尺八

飯島としゑ、横尾つね

外國人 一同

會員 有志

小兒 有志

ジョージアアレキサンダー

伴 ひで外數名

高谷 はつゑ

弘前女學校職員

上藤 競外數名

ミス、グリフヒス

ミス、ザールド

有志者

會員 有志者

笹森 むつ

佐野 樂翁

村岡 貞一

工藤 競外數名

一九、オートハープ獨奏 スワネーリワー

二〇、箏 末の松山

二一、獨吟 レセダネシヨン

二二、蓄音器 マキンパールド

二三、唱 歌 送別の歌

ミセス、アレキサンダー

古 郡 外 一 名

ミス、グリフヒス

會 員 有 志

明治三十七年五月五日

吳病院内の奏樂會、於廣島吳海軍病院。

一、行進曲 髣髴たる彼の女の微笑、二、オーベルツィシ、ウインブル王宮歡樂、三、ポツポリー軍人の勇氣、

四、クワドリール 四季の歌、五、梅の春 清元、六、軍用袍 第一號、七、雛鶴三番叟 長唄、八、行進曲

征露の歌

同三十七年五月二十九日

和歌山恤兵音樂會、於和歌山縣會議事堂

一、吹奏樂 ジョージヤンマーチ

二、合唱 起てや同胞

三、箏 曲 巖上の松

和歌山青年音樂團

師範學校男生徒

板原琴子、板原増榮

上野ユキエ、保田花

附屬小學女生徒

四、合唱 甲、出陣 乙、陸軍

五、合唱(二重音) 我國

六、ヴァイオリン合奏 地久節

七、合唱 春の山

八、獨唱 火砲の雷

九、合唱(二重音) 林中の音楽

一〇、ヴァイオリン獨奏 コストリンゲル

一一、合唱 薩摩湯

一二、ピアノ獨奏 スミスマーチ

一三、獨唱 旭の旗

一四、箏曲 夏の曲

一五、合唱 赤穂義士

一六、吹奏樂 凱旋マーチ

一七、合奏 君が代

同三十七年五月八日

廣島師團將校招待音樂會、於廣島高師講堂

師範學校女生徒

高等女學校生徒有志

會 員

師範學校女生徒

吉山 章子

高等女學校生徒有志

吉山 章子

會 員

近森 出來治

近森 出來治

板原琴子、板原増榮

上野ユキエ、保田花

師範學校男生徒

和歌山青年音樂團

一 同

一、唱歌 本科一年我海軍、二、箏 佐々木政子、同てい子、増井たつみ子 亂輪舌、三、唱歌 縣立高等女學校生徒 山を裂く響、豊太閤、四、ピアノ獨奏 藤村すゑ子ソナタ クラーク作曲、五、ピアノ、ヴァイオリン合奏 藤村すゑ子、吉田信太(以下印刷不明につき省略)。

明治三十七年十月十七日

山口縣かなめ音楽會、山口高等女學校々友會かな會主催

一、ブラスバンド 愛國進行曲 凱旋進行曲

教育會音楽隊

二、オルガン獨奏

青木フジ子

三、ピアノ獨奏

黒部 峰 三

四、唱歌合唱(ピアノ伴奏) 雁の叫 勇士

會 員

五、ヴァイオリン獨奏(ピアノ伴奏) 秋の空 ソナテイナ

黒部 峰 三

六、マウスハーモニカ 舌出し三番叟 ケーニヒ、カルマーチ

山口高等學校俱樂部員

七、箏、尺八合奏 御函の響

坂 谷、藤 崎

八、ヴァイオリン、ピアノ合奏 ワルツ

黒部峰三、水野タキノ

九、英語唱歌(ピアノ伴奏) 一、秋の歌 二、カムレイド

山口高等學校音楽部員

一〇、ピアノ獨奏

ミセス、エールス

一一、唱歌合奏(ピアノ伴奏) 離れ小島

會 員

一二、幻燈 日露戦争

會 員

一三、ブラスバンド

一四、唱歌合唱 祝勝紀念歌 其一、二

一五、箏、尺八合奏 四季曲

一六、英語獨唱(ヴァイオリン伴奏) 船人

一七、ピアノ連弾 甲、雨中の想 乙、遊獵

一八、薩摩琵琶

一九、勸進帳(ピアノ伴奏)

二〇、唱歌合奏(君が代)

△戰捷祝賀と恤兵費のための音樂會であつた。

同三十七年九月廿八日

大阪婦人會恤兵音樂會、於中島公會堂

邦樂が主で西洋樂が勢力がなかつた。

同三十七年十月一日午後三時

軍人慰勞音樂會、於札幌市月寒聯隊營内

札幌教會員等の主催で小樽日の丸音樂隊が歐洲吹奏樂十七曲を演奏してゐる。又ジョンソン、ノットの二名の米國々歌、四籠納治のクラリネットソロ等も聴衆に歡迎された。

同三十七年十月八日午後六時半

教育會音樂隊 會員

坂口、藤崎

黒部、峰三

黒部、峰三、松山花拙

山口高等學校音樂部有志

松山、黒部

聴衆 一同

仙臺醫專有志音樂會

洋業主の音樂會でオルガン、セレクトツットのミス、フワストより始まり十數曲目を演じてカレイジソングで終つてゐるが、聴衆が非常に幼稚で洋樂を解してゐるものが少く、三宅文學士は休憩時に聴衆者の幼稚を歎じたとある。當時の洋樂の普及程度が想像される。

明治三十七年十月十六日

關西協樂會恤丘音樂會、於和歌山市縣會議事堂

一、ピアノ聯彈 チゴイネルレーベン

京都師範 吉田 恒三
和歌山師範 近森 出來治

二、合唱(三部) 紅葉狩

伴奏大阪師範 目賀田萬世吉

三、オルガン獨奏

甲、シシリヤ、アーン 乙、マーチ、トリートーンヒル

大阪市岡中學 金田 留平

四、ヴァイオリン連奏 デュラのー

兵庫高女 安達 孝子
神戸親和高女 田村 くに子

五、獨唱 離れ小島

伴奏 京都第一高等女學校 小林八重野
近森 出來治

六、合奏(四部) 林中の音樂

伴奏 會 吉田 恒三 員

七、ヴァイオリン獨奏 バンツト

八、獨唱 廣瀬中佐

九、合唱(四部) 鴨綠江

一〇、獨唱 孤兒

一一、合唱(三部) 我君我國

一二、ピアノ獨奏 ラレエース

一三、合唱(二部)

一四、ヴァイオリン獨奏

甲、ドラム、メシヨアスドーター

乙、カルメン、マーチ

一五、合唱(四部) 竹生島

伴奏 神戸 田村くに子
大橋純次郎

伴奏 大阪堂島高女 目賀田萬世吉
妹尾繁松

伴奏 奈良師範 會 會
吉田丞雄 員

伴奏 御影師範 安達孝子
米野鹿之助

伴奏 奈良高女 男 會 員
宮部フジ子

米野鹿之助
田村くに子

伴奏 小林八重野
大橋純次郎

安達孝子

伴奏 安達孝子、小林八重野
近森出來治、吉田水雄
吉田恒三

明治三十八年一月二十六日

長野恤兵音樂會、於長野市

△この會は關西の中等學校音樂科教員等に依つて成立したものである。

一六、ヴァイオリン連奏 ミリタリーマーチ

伴奏 會 小林八重野員

一七、合唱(四部) 士氣の歌

伴奏 大阪清水谷高女 會 奥山朝恭員

一、吹奏樂 山中の響

長野軍樂會々員

一、獨歌 うれしき御代

長野盲人學校生徒

一、オルガン獨奏 ガボット バツハ作

録 田 伸

一、唱歌 離れ小島

後町小學校三四年女

一、合奏 ヴァイオリン、オルガン 小鍛冶

早川喜左衛門

一、合奏 甲、春の山 乙、花の孤子

來 依田辨之助 賓

一、ピアノ聯彈 マーチ シューベルト作

福井直秋

一、箏

竹山修子

一、吹奏樂 雛鶴三番叟

長野軍樂會々員

一、吹奏樂 夜中巡邏雷鳴

一、唱歌 蟬丸

一、クラリオネット獨奏 コブルゲル、マーチ

一、唱歌 讚岐院

一、ヴァイオリン獨奏 シー、サイド、ガロツプ

一、ブラスコールテツト

一、唱歌 露營の夢

一、合奏 宇治山

一、吹奏樂 ナショナルガードマーチ

同三十八年二月三、四日

鹿兒島僮兵音樂會、主催鹿兒島婦人矯風會、於同市高千穂座

長野軍樂會々員

長野盲人學校生徒

鈴木録太郎

伴 奏 早川喜左衛門

後町小學校三四年生徒

早川喜左衛門

伴 奏 藤澤清美

藤澤清美

Bピストン 藤澤清美

Bバリトン 一由亮太郎

Bベース 北澤哲太郎

Eベース 早川正巳

オルガン 大久保忠三

ヴァイオリン 來賓 早川喜左衛門

クラリオネット 鈴木録太郎

ピアノ 藤澤清美

長野軍樂會々員

- 一、吹奏樂 プレセンベルシマーチ
- 二、開會之辭
- 三、ヴァイオリン、オルガン合奏 バレット
- 四、二絃琴、箏、胡弓合奏 天つ日
- 五、ヴァイオリン、オルガン、箏合奏 六段
- 六、伊集院舞樂
- 七、合唱 日、英、米、獨、國歌
- 八、琵琶 旅順口
- 九、獨唱 カバーゼムオプアー
- 一〇、ヴァイオリン、オルガン合奏
- 一一、琴、胡弓、尺八合奏 千鳥
- 一二、フリユート獨奏
- 一三、吹奏樂 老松
- 一四、蓄音機

音 樂 隊

- シユワルツウエリー
- シユワルツウメリー
- 高野茂、綾部つる子
- 赤尾寅吉
- 今村喜代次
- 竹内靜子
- 西洋人一同
- 伊集院篤
- トマスマ
- シユワルツウエリー
- シユワルツウメリー
- 高野茂外二名
- ビーク
- 音 樂 隊
- 補充大隊備付

一五、演説 戦地の景況

陸軍大尉 山口啓太郎

一六、遊戯 コチロン

一七、オルガン、ヴァイオリン合奏 君が代立てよ武夫

赤梶寅吉、竹内静子

一八、獨唱 露營の夢

佐奈木國子

一九、ヴァイオリン獨奏

赤尾寅吉

二〇、箏合奏 夏草

二一、獨唱 離れ小島

佐奈木國子、赤尾寅吉

二二、異装行列

有 志

二三、吹奏樂

音 樂 隊

明治三十八年二月十五日

比律賓音樂隊の演奏會、於横濱山下町グランドホテル

曲目は手に入れることが出来なかつたが、聴業者は外國人が多く邦人が少なかつた。彼等一行は二十數名で米國博覽會の演奏を了へての歸途立寄つたもので滞在日數が無かつたので其他に於ける演奏は見なかつた。

同三十八年二月二日午後一時

臺灣國語學校音樂會、於臺北市同校講堂

一、唱歌 1 宣戰詔勅(複音) 2 出陣

師、乙、二年A組及國語部二年級

一、唱歌 時は黄金

師、乙二年級B組

- 一、風琴 マーチ
- 一、唱歌 我等は中學一年生
- 一、風琴 ビューチフルリヴー
- 一、唱歌 旅順陥落
- 一、ヴァイオリン獨奏
- 一、唱歌 須磨の曲
- 一、風琴 1 プルーセスマーチ 2 六段
- 一、唱歌 1 昇る日 2 水雷襲撃
- 一、風琴 グランドマーチ
- 一、唱歌 1 海行かば 2 起てや同胞
- 一、唱歌 露營の夢
- 一、尺八
- 一、洋琴 ソナタ
- 一、唱歌 夢(複音)
- 一、ヴァイオリン獨奏
- 一、唱歌 逆巻く浪
- 一、唱歌 1 春の祝(複音) 2 寄宿舎の古釣瓶

師、乙、二年級A組

師、乙、三年級陳克
 中學部一年級
 李 人 寶

第一附屬學校生徒

加藤 忠 太郎

師範部甲科二年級

山城 正 鳴

師範部乙科三年級

大橋 一 郎

國語部三年級

第一、第三附屬學校職員

高橋勸二郎、金須武之

高橋 二 三四

第一、第三附屬學校職員

加藤 忠 太郎

持 地 某 子

師範部甲科二年級

一、洋琴 マルセーユ

一、唱歌 離れ小島

一、唱歌 祝勝歌

同三十八年二月十一日、十二日

恤兵音楽會、於和歌山縣會議事堂

一、唱歌 征露の歌

二、ピアノ、ヴァイオリン合奏 秋の色草

三、吹奏樂 クイツクマーチ

四、唱歌 小供

五、ピアノ連弾 カルナバルマーチ

六、獨唱 再生

七、吹奏樂 君が代マーチ

八、合奏 凱旋曲

志保 田某子

第一、第三附屬學校職員

生徒一同合唱

師範男生徒

近森出來治

阪田冬太郎

千原文次

和歌山青年音樂團

高等女學校生徒

山本よしゑ

木村かね

近森出來治

青年音樂團

音樂研究會員

師範男女生

高等女學校生

△兩日で六百圓の收入があつて、恤兵費に贈つたのである。
 明治三十八年二月二十五日

報國音樂演奏會、於石川縣津幡町議事堂

一、開會の辭

二、唱歌 君が代

三、吹奏樂 ヲーチ

四、唱歌 奉公 東宮鐵眞呂作歌 小山作之助作曲

五、オルガン獨奏 フリートパレット グルツク作

六、合唱 甲、老將軍 乙、樵の歌(二重音) 東京音樂學校作

七、筆曲獨奏 小楠公

八、唱歌 甲、織田信長 乙、勘帶 鍋島榮子作歌、上眞行作曲

九、ヴァイオリン獨奏

甲、オールドフオルクスアットホーム 乙、メランコリー ファスター作曲

一〇、琴曲合奏 松竹梅

山根郡長、莊司會長
 一 同

北陸軍樂隊員

音樂研究會員

新清次郎

音樂研究會河北郡會員

東條 順

女兒小學 生

新清次郎

野々市直次郎

安田甚太郎

石川 と き

槻尾 薫、新清次郎

一一、二部合唱 スウィートホーム

槻尾 薫、新清次郎

一二、吹奏樂 帝國萬歲マーチ

一三、吹奏樂 ロングサン

一四、唱 歌 勇士 旗野十一郎作歌

一五、オルガン獨奏 フレドニヤマーチ

△聽衆千名餘、入場を謝絶するの盛會で收入は傷病兵に寄贈した。

同三十八年三月十一日、十二日午後六時

祝捷恤兵大音樂會、於岐阜市美殿座

開會、參會員一同 君ヶ代合唱

一、ピアノ獨彈 天上の樂 モツァルト作

東京音樂學校生徒

高折 宮次

二、ピアノ、ヴァイオリン合奏

ピアノ

高折 周一

箏曲六段(和洋調和樂)

ピアノ

高折 宮次

ヴァイオリン

伊藤 榮治

三、胡弓獨奏 松の齡ひ

杉原とき子

四、ピアノ獨彈 春風 ハイドン作

高折音樂講習所員

五、ヴァイアオリン獨奏

高折 周一

甲、小兒の夢 シューベルト作 乙、樂しき舞 ウエーベル作

六、箏獨奏 松の榮

杉原 龍子

北陸軍樂隊員

北陸軍樂隊員

音樂研究會河北郡會員

新清次郎

△田舎音楽會の標本とも言ふプログラムである。人寄せのいやみがある。演奏者の肩書が一々ついてゐたのであるが省いた。

明治三十八年四月二十五、六日

傷病兵慰問音楽會(和歌山) 山紫水明の和歌の浦は唯に天然の美景のみならず、其風土頗人身に適し須磨明石にも優るともいふ。我幾多の傷病兵の内二三百人は入り替り／＼同地に療養し和歌山音楽研究會は此國家の爲に負傷した兵士を慰問せんが爲に茲に慰問音楽會を昨秋以來既に四回も催した。四月二十五、二十六の兩日共場内立錫の餘地なき程の大入で今二三の評を下せば、(當時の雜誌評)今野シン子の音聲宜しきには何人も感ぜざるなく、玉川日本錦磯千鳥鶴の巢籠は最も上出来、江志松壽の琵琶は終始大喝采を以て迎へられたるが、當地は洋式の音楽より東洋式の方遙かに受け好きものと見え後藤桃水の尺八は大いに好評を博し、小關男のヴァイオリン、加藤貫一のオルガンは上なるもの、因に費用を差引殘金を恤兵部へ寄附した。(音楽七卷六號)

同三十八年九月九日

長野音楽演奏會、於長野市城山館

- | | | | |
|------------|-------------|---------|-------|
| 一、吹奏樂 | ガボット | ウエーベル作曲 | 長野音楽會 |
| 二、オルガン獨奏 | 練習曲三十四、四十五番 | | 櫻井ちとせ |
| 三、獨唱歌 | サンマー | シューマン作曲 | 青木やす |
| 四、ヴァイオリン合奏 | アンダンテ | | 會員 |
| 五、四部合唱 | 雲雀秋のみり | | 來賓及會員 |

六、女聲二部 勸學 ウイリアムス作曲 會員

七、ピアノ獨奏 ソナチネ クレメンティ作曲 島津 ちか

八、獨唱歌 草川 宣雄

△第二部に於て東京より來たれる東儀哲三郎、小林禮等の出演があり、非常なる光彩を添へ聽者に偉大なる感動を與へた云々の記事があるも、演奏曲目等を評記するを得ない事を憾む。當日の聽衆は晝夜二回共に五六百名であつた。

明治三十九年十月

獨逸音楽家マアクオート夫妻來朝した。彼は二度目の來朝であるが以前には横濱、神戸に於ける演奏會で非常な喝采を博したに不拘、今回は神戸に滞在してゐて中央樂壇には出なかつた。

彼は伯林國立高等學校ヴァイオリン科に學び千八百九十年以來樂器を好同伴として、世界週遊を試みたもので、夫人はアメリカ生の彈琴家である。

彼の技倆は當時の音楽雜誌評を見るに「旂幟は嫩華より整しく幼少の頃より音曲を嗜むこと一方ならず、天稟の妙才は時に斯界の老熟家をして舌を捲しむることも尠からざりしと云ふ(中略)特にヴァイオリンに於て天才を發揮し專心丹精を積みて遂に同技の達人として儼立するに至れり(中略)夫人の使用する縦琴は特に注文により二千金を投じて製出せられたるものなり云々」とある。彈琴家とはハーピストの謂でハーブを持つて來たものである。演奏曲目のなごのぞ惜しむ。

第三編 日本的洋樂時代

下 洋樂の進展

日本的洋樂時代の後期即ち 明治天皇の四十一年より 大正天皇の六年に至る十年間を洋樂の内的進展時代とす。

第四十七章 洋樂の進展期に於ける主なる研究と樂論

音樂の理論的研究の先鞭を打つた人は、村岡範爲博士で、少し後れて田中省平博士がある。これ等の後を追つて理學士の田邊尙雄、工學士の山崎樂堂が輩出した。田中博士は沈滞不振の邦樂を刺戟して之れに覺醒の機會を與へ、田邊尙雄は樂器の發達經路より見た歴史的な研究を發表するなど我が樂壇に寄與した所少からざるものがある。併し乍ら、一部の人々の中には物理學者の立場から音響學的に音樂を論じてある故、其の所説は稍々音樂の實體の全面に及ばざるの憾がないでもない。

明治二十六年以來（二十有餘年間）東京帝國大學哲學科に於て、ケーベル博士が得意の音樂美學の講述をしたが、學生に音樂の素養あるもの少く爲に折角金花玉條の講義も十分に之を咀嚼し得るものなく、其結果は概ね徒勞に歸したと言はれてゐる。それが明治三十年代に至つて、一般民衆の間に音樂が漸次普及するに伴ひ、文科大學の一部を中心として音樂を美學的に研究せんとする傾向が漸く盛んになつて來て、東京音樂學校教授の富尾木知佳、乙骨三郎、田村貞貞等が樂界に知らるゝに至り、公私立大學を通じて新進の音樂研究家が多數輩出する氣運に向つた。

日露戰後我が樂壇が逐年長足の進歩發達を遂げた事は何人も認める處であるが、此時代に於て音樂理論の民衆化が特に著しい進展を劃したのである。

音樂演奏會の如き前半期は沈滞的であつて、或る寂寞を感じた程であつたが、後半期に於て目覺しい活躍を演ずるに至つた。ボーツマス講和會議局を結び東亞の天地に再び珍瓏たる平和の曙光訪づれるや、藝術方面の記事も日を追

ふて新聞雜誌等に掲載されるに至つた。

東京朝日の「音楽の慰安」讀賣新聞の「日本音楽は眞の音楽か」時事新報の「日本の音楽界」山田源一郎談とか、讀賣新聞の登張竹風教授「藝術の定論」日本新聞に、「音楽と家庭」十一月號音楽雜誌には「音楽と感情」等いふ記事が載せられ耳新しく感じた。

翌年に至つて時事文藝週報に藤井環子が「音楽と本質」について論じ、大阪朝日は「耳の修養」と題して音楽鑑賞論に言及してゐる。

東京朝日は永井建子樂長の「夏と音楽」を載せ、又當時學生であつた田邊尙雄は「音楽技術家と理論家に就て」といふ論文を發表してゐる。音楽雜誌も其記事に稍活氣を呈して來て、「音楽理論家の養成」と題して曰く「日本に一人の理論家なし一冊の理論書なし、日本人は音楽理論家を尊ばず」とて、理論家の必要と其養成法を力説してゐる。又一音楽研究者と國樂問題」の評論も書かれてゐる。「清雅高尚なる音楽」下田歌子、「リヒテル和聲樂」田邊尙雄、「音楽美論」木場政雄、「音楽美學論」田邊尙雄、等が血氣に燃ゆる筆を縦横に驅使してゐる。

翌四十一年一月には「音楽世界」「音楽界」の創刊號が發行された。「音楽世界」は毎號ベートーヴェンの一生、メンデルゾーン小傳、ハイドンの一生、ワグネル小傳、モツアルトの一生、バッハの一生、シューマン小傳、ヘルデル略傳、シューベルトの一生、ロツシニー略傳等、樂聖の史傳を載せ、理論方面ではヴァイオリン、ピアノ、オルガンの奏法や歌劇カルメン物語とかタンホイゼル、ローエングリンの梗概、ニューレンベルヒの唱歌師等が載せられた。この雜誌の執筆者には、新人が多かつたが「音楽界」は中央樂壇の雜誌だけあつて、多く知名の人々が執筆してゐた。第二卷には石倉小三郎「グッタルバッセルと音楽」内藤水菴「不遇の樂人ベルリオ」傳記に現はれたシヨパン」、近藤

逸五郎「ショパン作品年表」、小松耕輔「地方音楽の進歩」、田村虎藏「我が國の音楽教育」、前田純孝作「鏡影」、近藤朔風作「乙女のねがひ」、「舟路」、「花乙女」、「わかみどり」、「海のしづけき」、「たゆたふ小舟」、「夜の歌」、「菩提樹」、等がある。また小林愛雄「樂の音」、小松玉巖「春曉」、「夜樂」、「希望の島」、冷浦原有明作「冷光」、内藤水覆作「牧歌」、長尾響作「風の音」、すゐてき作歌「塔影」、犬童球溪作「幻子」、等が載せられてゐる。(以上は明治四十二年六月までの記事)

七月以後新聞雜誌方面では神戸絢子の「佛蘭西で一番感じた事」を東京朝日に掲載、納所辨次郎は「洋樂趣味の普及」と題して中央新聞に、又幸田延子は「家庭に音樂趣味を入れ度い」を東京朝日に掲げてゐる。又、七月には東儀鐵笛が「劇場音樂に就て」を「趣味」に、同月田村虎藏は「我が國音樂教育」と題し大阪毎日新聞に掲載してゐる。

十月には本居長世の「音樂の將來」が無名通信に出た。

十二月には田村虎藏の「唱歌教育上の美感問題」教育研究雜誌に、同月「西洋音樂批評家の責任と資格」を馬耳生が東京朝日新聞に、又、天谷秀の「將來の音樂」が時事新報に、東儀鐵笛の「樂界私議」が東京朝日新聞に、鈴木鼓村の「明治四十二年度の樂潮」が讀賣新聞に掲載つてゐた。

同四十三年一月には愈々音樂記事の執筆者が激増し山田源一郎の「女子と音樂」瀬戸口藤吉の「西洋音樂の普及」が時事新報に、湯原元一校長の「音樂學校新方針」長耳生の「去歳の洋樂界」が東京朝日新聞に、高村光太郎の「詩歌と音樂」が「趣味」に、北村季晴の「洋樂趣味の普及と邦樂の將來」、東儀鐵笛の「現代の音樂は新聲を要求す」が「新聲」に、湯原校長の「音樂教育會の設立に就て」、神保格の「輓近の獨逸音樂」、東儀鐵笛の「日本音樂史考」等が音樂界誌上に散見された。同月又東京日々新聞が「音樂教育の衰微」といふ記事を掲載した。洋樂記事が新聞等に

斯くも盛んに論ぜられるに至つた事は、明治時代には無いことで、世の識者の間に音楽が注目されつゝあることは是を見ても推察することが出来よう。この現象によつて音楽の進展期に直面してゐる事が首肯されるのである。一二の新聞雑誌が世人の音楽に注目しつゝある際中傷的文字を弄して一時の快を買つたものもあつたが、如斯はもとより何等音楽を壊滅せしめる底のもでなかつた。

明治四十二年の中央樂壇は音樂演奏會の催少く、音樂界は極度の不振を呈した。之は警視廳が藝人鑑札を有せざる音樂家の出演を禁じた結果である。音樂家が鑑札さへ受ければ差支へないやうなものゝ音樂藝術の傳統的的精神に生きる音樂家連は所謂藝人と伍するを耻辱として爲に藝術家たる事を斷念し、競うて音樂教師たらんとする者が續出する傾向があつたのである。此分で行けば音楽は退歩するとも發達の見込がないと音樂家連は何れも憂慮したのである。警視廳の目から見れば音樂家だつて一種の藝人たる以上は特別に優遇する必要はない。法令の定むる所に従つて藝人制に準ぜしむる方が好いと主張してゐるが、音樂家の側では政府が堂々たる音樂學校を立て、優秀なる技術家を養成しながら同じ政府が是れを強て藝人に墮落せしむるとは餘りに矛盾も甚しい。斯様なことなら寧ろ音樂學校の本科を廢して師範科ばかりにした方が好いなどいふ事もあつた。

之に關しては前年音樂學校に於て、歌劇の模範的なる試演を公にせんとして準備既に出來上らんとした時に當り、文部當局の差止めとなり中止するに至つたこと等より文藝界一般の研究問題となつた。文部省の文藝に對する方針は全く無理解なやり方であつたが、之に因つて却つて音樂の各方面に於ける鬱勃たる氣魄が中央樂壇に漲り、表面の沈黙は將さに爆發せんとする準備行動で之が遂ひに戰後樂壇の進展を激成するに至つたのである。

新聞雑誌に音楽に關する研究評論の續々公にせられ、音樂家の地方進出に依つて地方音楽の進歩發達が著しく現は

れて来た。

四十一年夏帝國音樂會は地方演奏旅行を大阪、京都、奈良、神戸等に催して成功を収め、翌年夏更に長野、高田、上田、秋田、青森、盛岡、仙臺等に於ける催が實に眞摯なる聴衆の研究的態度を呼び起したことを見ても、地方音樂は學校音樂のみを以て能事終れりとする時代を既に離れたことが考へられた。

湯原音樂學校長は就任以來明晰なる頭腦を以てあらゆる難問題を片端から改め、新聞に雜誌に自ら筆を執り或る時は匿名で或時は本名で著々たる論戰を試み正しき音樂の普及に努力した。學校内部の改革も行はれ規則の改正、研究科の新設、管絃樂の面目一新、秋季演奏會の擴張等を計劃、之等の報道機關誌として「音樂」が生れた。高級な雜誌で現在に至るまで是程の内容と形式とを具備したものはないと云つても過言ではない。表紙「音樂」の文字は長くも嵯峨天皇の御宸筆の模寫であると言はれてゐる。(文科大學史料編纂官藤田文學士調査)。巻頭の吉丸一昌、山田耕作の「女聲三部曲東天紅」が創刊號に相應しく、湯原校長の「ヘルマン、クレッチユマールの「音樂上の時事問題」を紹介す」。田村寛貞の「唱歌の伴奏法に就て」、編輯部員「和聲學」、中田章の「唱歌教授法要義」、島崎赤太郎の「樂聖の遺跡」、天聲子の「メンデルゾーンの作曲に就て」、中山晋平の「新詩論」等が出てゐた。

第二號以後の主なるものを擧ぐれば、

音樂と技巧

「音樂」に望む

和聲學講義

近感近讀

小林愛雄

湯原元一

編輯部

乙骨三郎

フランツ・リスト

音楽者としての孔子(附墨子の非樂論)

ネリー・メルバ

音楽視察談

評論の評論

音楽の空間趣味

西比利亞の汽車中より

音楽進化論

ミツシヤ・エルマン

オルガン自習法

和聲學通解

小學教育に於ける唱歌科の缺陷

管絃叢話

音樂的世界概念としての音樂

ピアノ自修法

歌唱法に就て

音樂の長所短所

牛山充

湯原元一

田村寛貞

上眞行

櫻小雨

(匿名) 三谷緑二

山田耕作

田邊尙雄

田村寛貞

島崎赤太郎

島崎赤太郎

(匿名) 三谷緑二

高野班山

田村寛貞

橘糸重

岡野貞一

乙骨三郎

- シエラルグイン、フアラ
- 音楽教師の爲に言ふ
- ブラームス
- 四半音の記號に就て
- 學校に於ける鑑賞力の養成
- 拍子縦線の心理的研究
- 同時的音程の起原
- 方言詩人ミストラル
- 民謡の起原
- グリンガールのペートーヴエン
- 唱歌教授の缺陷に就て
- フォオレの歌曲
- 現代の流行唄
- 唱歌と國語
- ロバート・シューマン
- 新感觸の斷片
- カントの音楽美論

(匿名)

- 田村寛貞
- 湯原元一
- 田村寛貞
- 湯原元一
- 田村寛貞
- 田邊尙雄
- 牛山充
- 田村寛貞
- ロイテル教師
- 小島酒風
- 三谷緑二
- 田村寛貞
- 湯原元一
- 内藤
- 本居長世
- 乙骨三郎
- 牛山充
- 紫絃郎
- 田村寛貞

現實及藝術上の眞

小學唱歌に對する全國師範學校の意見

パデレフスキーのテムボルバート論

邦人は洋樂の趣味を解し得ざるか

現代國民詩形の由來

感情教育としての音樂

〔曲 譜〕

水の皺

同

哀怨、露國民論

亡き母を思ふ

音波、五月

四ツ葉のクロバ

亡友をおもふ

宵の春雨

雪月花、白露西亞民謡

以上 (明治四十三年)

伊藤吉之助

田村寛貞

乙骨三郎

高野班山

(匿名) 三谷緑二

梁田貞作曲

大和田愛羅曲

吉丸一昌作

吉丸一昌歌、原田潤曲

服部嘉香

ロイテル作曲

國木田獨歩歌、北村季晴曲

吉丸一昌歌、梁田貞曲

吉丸一昌

註……三谷緑二は當時上野音樂學校を出たばかりの青柳善吾の匿名で新人の意氣窺ふに餘りある。

〔論 說 及 研 究〕

音樂に伴ふ視覚幻象

樂壇に於ける役者の不足

シエルリングの音樂美學

今年の音樂界

音聲の衛生

琉球の歌謡及音樂

ワグネル對ニイチエ

田邊君の辯説を讀む

カルヴェ夫人

音樂の心理及美學の根本問題

如何にしてか唱歌の教育的價值を發揚すべきか

ワグネルの音樂論

唱歌の作法につきて

音樂界と文學界との接近

唱歌科の評價に對する研究

三	相	吉	小	湯	乙	田	隻	阿	東	岡	湯	田	湯	上
谷	馬	丸	山	原	骨	村	榎	部	恩	田	原	村	原	野
緑	御	一	柄	元	三	寛	生	次	納	和	元	寛	元	直
二	風	昌	繪	一	郎	貞	生	郎	寛	一	一	貞	一	昭

- 兒童の聲音に就て
- ワグネルの藝術觀
- 音樂と宗教
- 社會政策と音樂の利用
- 歌樂雜考
- ゲーテとベートーヴェン
- 音樂者の補習及其生計問題
- 樂論 二片 (シモンズより)
- シモンズの論文
- 指揮者論
- 名畫の筆意にもとづく新舞踊劇
- 音樂の起原に關するヴァント教授の見解
- 日本の歌劇
- 下座のレストレーション
- 沙翁時代の舞臺
- ハムレットの歌曲について
- 教壇より教壇へ

三	東	島	山	高	高	坪	湯	安	乙	湯	高	吉	湯	東	姉	碧
谷	儀	村	崎	安	橋	内	原	倍	骨	原	安	丸	原		崎	楊
綠	鐵	盛	樂	月		道	元	能	三	元	月	一	元		正	
二	笛	助	堂	郊	穰	遙	一	成	郎	一	郊	昌	一	新	治	子

將來の創作と聲樂

日本聲樂

國語改造論

唱歌に於ける呼吸法に就て

聲樂・夜話

唱歌に於ける呼吸法に就て

シニューマンハインク夫人の清話

詩の音樂的思想

音色と思想

歌曲の協和

民論の想化

リストとその音樂

浪漫的歌劇と寫實的歌劇

〔講義〕

オルガン自修法

和聲學通解

ピアノ奏法

如月生

高安月郊

林竹次郎

岡野貞一

小松玉巖

三谷緑二

淨鏡生

服部嘉香

板倉武

山崎樂堂

塚山生

牛山充

上野直昭

島崎赤太郎

同

橋糸重

オーケストラの話

ヴァイオリン學修に就て

同

音楽に於ける曲と詞

音楽略史

〔曲譜〕

露國民謡曲二篇

春の窓

逝ける友

神言

春の野邊

伊澤修二還歴祝賀會祝賀歌

春の野川

四季の雨

以上(明治四十四年)

〔論説及研究〕

最近歌劇の傾向

乙骨三郎

安藤幸子

頼母木駒子

乙骨三郎

牛山充

吉丸一昌作歌

吉丸一昌歌、梁田貞曲

ペネケン曲、乙骨三郎作歌

メンデルゾーン曲、石倉小三郎歌

ライネツク曲、吉丸一昌歌

同會作歌作曲

吉丸一昌歌、岡野貞一作曲

南能衛曲、吉丸一昌作歌

高安月郊

世界的ピアノ大家レスチエスキューより我は如何に學びしか

テトラツイーニと近世歐羅巴歌劇の傾向

節 奏 の 話

理論家としてこのヴァーツハナー

教授に用ふべき樂譜

日本音樂の發見

家庭用の樂譜

シヨバン研究

獨逸音樂に於ける近代思想

ヴァイオリンのサウンドポストに就て

露西亞音樂界の新人

いろ／＼のきゝかた

近代音樂とリヒャルド、シユトラウス

誤られた唱歌科の價値

伊太利歌劇界の新星

變則な所謂日本歌劇の創造

歌劇と歌優

小	山	牛	三	田	大	牛	野	同	田	乙	ウ	三	田	須	牛	こ
林	崎	山	谷	村	塚	山	々		村	骨	エ	谷	村	藤	山	す
愛	樂	山	綠	寬	仲	花	一		寬	三	ス	綠	寬	春	も	も
雄	堂	充	二	貞	三	香	充		貞	郎	タ	二	貞	吉	充	す

ヴァーツハナーの歌劇

批評家と舞臺監督との對話

獨逸音樂事情の一斑

ジュール・エミール・フレデリック・マクス

マダム・バツターフライ

お伽歌劇「月明り」

中學校に於ける音樂教師論

グリヒーヒとガーデとシボーアとマツスネー

以上 (明治四十五年、大正元年)

明治四十四年に於ける主なる樂論

西洋音樂のわからぬといふわけ(讀賣)

朝日新聞に出た森田草平の「音樂不可解論」及其の論と同じ考へを持つ人の爲めに書かれたもの。

韓國併合と音樂の教育問題(音樂界)

唱歌と國語問題に就て二三子に答ふ(早稻田文學)

これは田邊尙雄が昨年九月「日本俗樂論附現代唱歌の難點」の論文に對して、双槿生が「田邊理學士の現

代唱歌の難點」乙骨三郎が「唱歌と國語」と題して答へ又小松耕輔が十月三日讀賣で「樂界感想三件」と

題した論文の一部分とに對する駁論である。

牛 山 充

伊 庭 孝

湯 原 元 一

牛 山 充

柴 田 知 常

秦 豊 吉

三 谷 緑 二

牛 山 充

小 松 耕 輔

田 村 虎 藏

田 邊 尙 雄

古典音樂と近代音樂	朝日新聞	小松耕輔
音樂界の一年	朝日新聞	長耳生
過去一年間の樂界	讀賣新聞	小松耕輔
絃の私語	都新聞	鄭山生
樂樂に及ぼす詩歌の勢力	音樂界	園山民平
各部省編小學讀本唱歌に就て全國の實際家諸彦に告ぐ	音樂界	田村樂堂
社會と音樂	時事新報	田中正平
音樂より起る快感の原理	早稻田文學	田邊尙雄
明治四十三年音樂史	太陽臨時增刊	田邊尙雄
音樂の鑑賞法	時事新報	田邊尙雄
音樂界の二十年	日本新聞	湯原元一
家庭の音樂	時事新報	音樂學校某
オルガン樂の沿革	讀賣新聞	園田民平
歌謡と美音	時事新報	細谷雄太郎
帝劇と歌劇	東京朝日	小松玉殿
國交と國歌	時事新報	山田源一郎
音樂を學ぶ心得	時事新報	山田源一郎

學校と音樂 (時事新報)

デユビツシーの歌劇(太陽)

現代洋樂家の泰西思想(東京朝日)

各國樂風の特色 (東京日々)

聲樂の調和 (新小説)

感ずる音樂感ぜぬ音樂(讀賣)

音樂と通俗教育會 (讀賣)

西洋音樂と世間 (東京朝日)

如何なる音樂が家庭に適するか(婦女界)

音樂の妙用と社會政策並藝術家に對する國家の保護(社會政策)

明治四十五年に於ける主なる樂論

イブセン劇と試演 (時事新報)

音樂家と公衆の程度(東洋時論)

人と先天的音樂趣味(音樂界)

過去一年の音樂界 (中央新聞)

本年の音樂界に就て(讀賣新聞)

音樂と家庭 (大阪毎日新聞)

田邊尚雄

高村光太郎

吹不斷

小松耕輔

本居長世

小松耕輔

湯原元一

吹不斷

田邊尚雄

湯原元一

北村季晴

神戶絢子

古屋景晴

富尼木知佳

乙骨三郎

幸田延子

洋樂と家庭 (東京朝日新聞)

明治四十四年の樂界(時事新報)

音樂愛玩家と學識草(音樂)

音樂と背景 (音樂)

二面生活に離隔せる意氣地なき現代の藝術家(新公論)

現代の日本に何故世界的大藝術興らぬか(新公論)

現今の聲樂家 (早稻田文學)

新しき舞蹈 (シバキ三月號)

建築家と音樂 (シバキ三月號)

オペラに就て (秀才文壇)

精神文明と音樂 (音樂界)

ワグネルの歌劇 (東亞之光)

露國歌劇の祖 (時事新報)

歐洲樂壇の三星 (時事新報)

藝術家と富貴榮達 (音樂界)

女子音樂趣味養成の研究(音樂界)

能樂と洋劇 (藝文)

神戸 絢子

富尾 木知佳

草川 宜雄

坪内 逍遙

卓 筆 峰

向 軍 治

田 邊 尙 雄

中 谷 德 太 郎

東 風 野 人

松 居 松 葉

高 島 平 三 郎

乙 骨 三 郎

米 川 正 夫

米 川 正 夫

山 本 正 夫

藪 光 吉

藤 代 禎 輔

歌劇に就て (藝文)

歌劇 慢話 (時事新報)

パントマン歌劇を觀る (演藝畫報)

殯官移御の御式に吹奏する樂 (報知新聞)

世界に誇るべき誄歌 (雅樂) (音樂)

御大葬の道樂 (雅樂) (音樂)

殯宮祭の奏樂 (東京朝日新聞)

秘庫に密封せる軍樂 (東京朝日新聞)

道樂と誄歌 (時事新報)

率悼歌の由來 (東京日々新聞)

誄歌の節調 (時事新報)

道樂「萬秋樂」 (大阪毎日新聞)

誄歌と挽歌 (時事新報)

大正二年に於ける主なる樂論

語調と拍子 (音樂)

歐米通俗教育の一斑 (音樂)

我が國將來の音樂 (東亞の光)

北村季晴

百魂香

上眞行

芝葛鎮

上眞行

山崎樂堂

湯原元一

湯原元一

樂劇の心理に就て (音楽)

模倣時代の音楽 (音楽)

唱歌と俳味 (俳味)

音楽界の黎明期 (横濱貿易新聞)

劇と樂との訓練法 (讀賣新聞)

歌劇「グントラム」研究(音楽)

音楽教壇上の女子を論ず(音楽)

トルストイと音楽 (讀賣新聞)

音楽の趣味と美的觀念(中國新報)

近代の舞踊 (讀賣新聞)

奉頌歌曲者としての注文 報知新聞)

邦樂と洋樂 (音楽)

日本音楽と教育 (音楽)

全東洋の音楽的協同(萬朝報)

西洋音楽の將來 (時事新報)

日本音楽は世界最高か最劣等か(時事新報)

音響學及音響心理學上の學說研究(音楽)

桑田芳藏

田村寛貞

小倉鶴峯

東儀鐵笛

秦豊吉

三谷緑二

太田三孝

太宰勝三都

村田實

湯原元一

乙骨三郎

エスタール博士

アルフレット・ウエストハルプ

田村寛貞

田邊尙雄

田村寛貞

田村寛貞

食卓上の樂論 (時事新報)

醫師の發見したカルソールの咽喉(時事新報)

青年作曲家に (時事新報)

師範科全廢論 (音樂)

紳博士の師範科全廢論に就て(音樂)

西洋音樂の將來 (時事新報)

日本は音樂の中等國(心理研究)

大正三年に於ける主なる樂論

日本樂と西洋樂との衝突(大阪毎日新聞)

公衆音樂の教育 (憲政新聞)

本年樂界の回顧 (音樂界)

普通教育音樂向上策(音樂界)

不協和原理としての唸學說の没落(音樂)

表現の手段としての詩と音樂(音樂)

ワグナーの觀たるベートーヴェン(音樂)

音樂の將來 (大阪朝日新聞)

師範科二年生

田邊尙雄

一記者

田邊尙雄

榑保三郎

關根益三

田村寬貞

兼常清佐

田邊尙雄

山本正夫

藪光吉

田村寬貞

柳澤健

小田島次郎

田邊尙雄

舞踊の復活 (大阪毎日新聞)

聲樂の根本形式に就て (音楽)

ペーラーヴェン論 (音楽)

樂界の新曙光 (中央新聞)

日本人と西洋音楽 (大阪朝日新聞)

音程値の定め方 (音楽)

近代樂の作家 (音楽)

獨逸と音楽 (學藝講演)

音樂起原論の進歩 (讀賣新聞)

グルツクの改革 (音楽)

二軍の意義ある民謡俚歌 (大阪毎日新聞)

露西亞舞踏の墮落 (音楽)

聲を愛せよ「カルソーの言」 (讀賣新聞)

山田耕作の聲樂 (時事新報)

ピアノに於けるオクターヴ奏法 (音楽)

滑稽唱歌の研究 (音楽)

ブローイセン小學校唱歌科教則 (教育)

上田敏

吉丸一昌

牛山充

湯原元一

ハンカ・ベツォルド

田邊尙雄

大田黒元雄

湯原元一

乙骨三郎

牛山充

兼常清佐

滋野清武

齋藤佳三

弘田龍太郎

小川友吉

長橋熊次郎

露西亞の新舞蹈(フオーキン)の理論(讀賣新聞)

詩と音楽との關係 (音楽)

デビュシー研究 (音楽)

正確な聴き方 (音楽)

哀愁を帯ぶる秋の音楽(邦樂に似通へる露、伊の音楽)(讀賣新聞)

聲と音楽 (大阪新報)

戦争と舞蹈(男の出征中踊り暮す女)(都新聞)

シュトラウス論 (音楽)

青年教育と音楽の趣味(音楽界)

家庭音楽と唱歌 (音楽界)

大正四年に於ける主なる樂論

軍國の作曲 (讀賣新聞)

音楽の鑑賞と音楽のテクニック(音楽)

鑑賞的教授に就て (音楽)

露西亞の音楽 (音楽)

戦争と音楽 (中外商業新報)

歌劇について (都新聞)

仲田生

萩原朝太郎

大田黒元雄

牛山充

鈴木鼓村

倉開二六

岩本捷治

青木兒

ケイ

柳澤健

小川友吉

上野生

乙骨三郎

本居長世

本居長世

本居長世

歐米樂界の新傾向 (讀賣新聞)

國歌と國民性 (横濱貿易新報)

日本音曲の第二科を論ず (時事新報)

音の振動と音の感覺との關係 (音樂)

音樂に於ける人格の養成 (音樂)

音樂上誤謬及論争點 (音樂)

日本音樂の二系統 (九州日々新聞)

家庭と音樂 (音樂)

現代教育の趨勢を述べて音樂教育の究竟を論ず (音樂)

パデレフスキーの成功の秘訣 (音樂)

尋常小學唱歌に就て (音樂)

大典奉祝歌詞 (日本藝苑の耻辱) (大阪毎日新聞)

露國感想記 (東京朝日新聞)

奉祝歌の作曲と國樂 (萬朝報)

陸軍々樂隊を去る永井樂長 (時事新報)

中學校唱歌科の將來 (音樂)

歐洲戰亂の米國樂器業に及ぼせる影響 (音樂)

高折周一

兼常清佐

田邊尙雄

大田黒元雄

猪瀬久三

榊保三郎

田中正平

小川友吉

猪瀬久三

保科寅治

大庭柯公

草川宜雄

福島琢郎

昔の管絃樂と今の管絃樂(讀賣新聞)

朗詠と曲譜 (東京毎日新聞)

藝術行政 (國民新聞)

遊里音樂は何時家庭から減びるのか(國民新聞)

大正五年に於ける主なる樂論

中學校に於ける英語教授と英語唱歌(音樂)

從來の音樂會を離す(音樂)

此れからの音樂 (大阪新報)

音樂の理論的教育を翹望す(音樂)

デビュツシーの音樂に現はれたる自然(音樂と文學)

アマイルの音樂觀 (音樂と文學)

唱歌と訓育 (月刊樂譜)

戦後の歐洲音樂 (音樂界)

時局に鑑みて國家的觀念を基礎としたる唱歌教授の緊要なるを主張す(音樂)

泰西音樂名家 (音樂)

明日の音樂 (音樂と文學)

露西亞歌劇の研究 (音樂と文學)

山田耕作

山田耕作

湯原元一

湯原元一

長橋熊次郎

喜多方六

湯原元一

小川友吉

大田黒元雄

二見孝平

山本正夫

天野誠

岡本新一

猪瀬久三

大田黒元雄

中根弘

中根弘

日本帝國の新使命 (音樂界)

音樂者と聽衆 (音樂界)

樂聖ベートーヴェンの一日 (音樂)

ブラームス (音樂)

音樂の本質について (音樂)

近代人としてのバッハ (音樂)

歐洲戰爭と音樂 (音樂)

唱歌科目的論 (音樂)

再び音樂の本質について (音樂)

大正六年に於ける主なる樂論

倫理學上より見たる音樂上の諸問題 (音樂)

大戰後の音樂 (音樂)

娛樂的の邦樂に代るべき新藝術 (蓄音器世界)

音樂と早教育に就て (音樂)

ボクミル・スイコーラの來朝 (音樂)

異端者の昇天 (更に音樂藝術の本質について) (音樂)

ソナータ形式を述べて「ムーンライトソナタ」の内容研究に及ぶ (音樂)

平 戸 大

小 林 愛 雄

近 衛 秀 磨

弘 田 龍 太 郎

鈴 木 賢 之 進

二 見 孝 平

長 橋 熊 治 郎

安 達 一 作

鈴 木 賢 之 進

岡 本 新 市

牛 山 充

兼 常 清 佐

相 澤 晃

牛 山 充

鈴 木 賢 之 進

中 田 章

倫敦に於ける唱歌教授意見(音楽)

楽譜問題に就て (音楽)

音楽に於ける音程の起源(音楽)

聲樂家に與ふ (音楽)

示範の原理と其の二面に就て(音楽)

ヂュゼツペゾールデイ(音楽)

英吉利西の一大音楽象(音楽)

マーテルリングに據れる音楽(音楽)

藝術教育の研究 (音楽)

藝術とは何か (音楽)

「和音を構成する各色の色々な排置」に與へたる名(音楽)

音楽的なる樹木 (音楽)

ショパンの思出 (音楽)

女性と近代音楽 (音楽)

草川宜雄

小川友吉

乙骨三郎

二見孝平

岡本新市

二見孝平

牛山充

中根弘

岡本新市

乙骨三郎

如蝸子

高橋正熊

二見孝平

中根弘

音楽に關する研究と論説が新聞に雑誌に發表され、音楽の向上發展著しく大正六年に至つては音楽に關する新文獻の刊行漸く多く價値ある樂典の創作も頻々として世に出でんとする傾向を示した。

第四十八章 オペラの日本進出と日本歌劇の發達

明治時代の新しい藝術を見渡せば文學でも繪畫でも彫刻でも一通りの題目は揃つた。技術が外國のものに及ばなく可笑しくない程度のものが出來かゝつて來た。その中で一番進み方の遅いのは何時も音楽と建築とが算へられてゐたが、然し何れにして立派な學校と立派な先生とがあつて一通りの進路を取つて行く以上は日本で聴く日本人の音楽にそんなに不平をいふ事は出來ないのである。

然し茲に歌劇に至つては全く形がない迄になつてゐることは誰もが立證した事である。云はゞ大體の西洋の藝術は一と通り取つて來たのに歌劇だけは忘れて來たといふ有様であつた。我が國最初のオペラは長崎や横濱に於て古く行はれたが、東京に於ては明治十二年九月、新築落成間も無い新富座にハリリマン夫妻一座ともいふべきオペラの一團の來朝した時である。劇は默阿彌が誓下した「漂流奇談、西洋劇」と題する四幕物の中間に一幕だけ西洋劇を狭んだもので、受けは至つて悪く、美事に失敗したのであつた。この他に英人ミスメー一座が新富座に、露國の女優劇が歌舞伎座に來たが、日本人には全く其趣味を解することが出來なかつた。明治十八年頃、シエイクスピアの「ヴェニス商人」が大阪の戎座で、「何櫻彼櫻錢世中」と題して公演されたが、オペラでない此の劇は、非常に好評を拍したのである。

明治三十五年頃に歌舞伎座で團十郎が娘道成寺を演じた折に邦樂器と西洋樂器で日本曲を演出したと言はれて居るがこれもオペラでは無かつた。

斯う考へて來ると、我が國最初のオペラは、東京音楽劇團であつて、其の演出は「愛宕の夜嵐」であることが確實に認められる。これは横須賀海軍々樂隊を退いて米國に行つて居た池田某が歸國後計劃したもので、音楽が主の樂劇であつたのである。

當時評判だつたのは海軍々樂隊の『溝口の女義太夫紋清殺し』で都新聞に連載された探偵小説を「愛宕の夜嵐」と改題したもので、日本で最初の歌劇らしい歌劇であつたが、流石に東京は恐かつたので和歌山で初演した。ところが非常な大入りで、これに力を得て明治二十九年元旦京都の南座を開けた。俳優には森三之助、松尾次郎、金子彌太郎等といふ腕利きも居たが、大入りと喜ぶ暇もなく、英照皇太后の薨去で自然に解散になつて了つた。

其頃關西の洋樂界はと云へば二十五年神戸に植ゑられた芽がのびて二十七年には大阪に市中音楽隊が出來、これも亦株式組織で營業をやり出した。こゝを根城に時々京都へも出張した。三重縣の津市等では明治二十八年八月一流豪商の連中が音楽團をつくる程に熱が昂まつて來た。かくて二十九年十一月活動寫眞の前身ヴァイスタスコープが輸入され錦輝館に上演以來この二者の間に密接な關係が生じてきた。然し當時は勿論今日から見れば子供だましの様な伴奏で風景といへばワルツ浪が高ければボルカときまつた様に同じ曲しかやらなかつた。それでも今迄より演奏時間が非常に多くなつてきて此處に悲鳴をあげたのは洋樂手であつた。そこで居直りといふ様な形で月給廢止、月十回迄は定額として、それ以上は一回出演毎に五十錢といふ妙な契約が出來上つたのも此の當時である。樂器の編成はといふとクラリオネット、コルネット、バリトン、アルト、ベース、ドラムの依然ブラスばかりであつた。(今福雄)

映寫機につゞいて明治三十一年八月日本に初めて撮影機が輸入せられて以來は音楽は映畫界に非常な活氣を呈し、

洋樂と映畫との關係は漸次濃厚となつて來た。

明治三十一年一月には、陸軍々樂隊の永井建子は歌劇的遊戯の脚本を書き、櫻井の驛楠公父子の別れの場面を歌曲にしたものが發表され、序樂で開幕といふ處等はオペラに似かよらせたものである。

明治三十五年オペラ研究會設立

上野音樂學校にオペラ研究會が設立したのはこの年の秋で、保守的な頑味な當事者と闘つて、このオペラ研究をすることは容易なことではなかつた。

同三十六年に至つて講師ノエルベリーが指導者となつて、於校生と卒業生が歌劇オルフォイスの或部分を演出することになつた。

伴奏はフォンケーベル博士のピアノで、其他にノー、オーケストラといふ奇妙な事もやつたが、これは一回限りで廢してしまつた。

歌劇オルフォイス　ゲルツク作

第一幕　現世場　第二幕　幽界場　第三幕　極樂界場

オルフォイス(アルト)

百合姫(ソプラノ)

アモオル(ソプラノ)

合唱

(ソプラノ)　本多かつ、伊澤乙女、今澤やすの、鈴木よし、志賀ちよ

吉川　やま
柴田　環
官臨　せ　ん

(アルト) 福見ひさ、栗原きん、三浦とめ、鈴木のぶ、天野あい

(テノール) 渡部康三、成田藏巳、島田英雄

(バックス) 堤正夫、澤田孝一、横田三郎、高津環

歌詞譯者 石倉小三郎、乙骨三郎、吉田豊吉、近藤逸五郎

背景と衣裳はその當時の美術學校の先生や生徒が盡力して中々美しい花園のバツクを書いたものであつた。扮装した二十餘名がステージに現はれ、樹木の下でコーラスしてゐる寫眞等が現在遺つて居る處を見ると、確に大々的に舉行されたのである。

明治四十一年六月の雜誌「音樂世界」にこんな記事がある。「東京音樂學校にてオペラ(オルフォイス)を演ずる企畫ある事は久しき以前より好樂家の人々に注意を拂はれ、まちにまたれ居りしに、五月十四日頃の事突然中止延期の事となりたり。其理由とする所は風教上弊害ありと云ふが如し、文部省の干渉なりと云ふ。實に我が樂界にとりては甚しき恨事なり云々」。

又四十二年一月の「音樂界」に「歌劇の試演は數年前より文藝界一般の研究問題であつたが、昨年音樂學校にて模範的なる試演を公にせんとして準備も既に出來上らんとせし時に當り、文部當局の差止める處となり中止するに至つたことは、文藝一般の頗る遺憾とする處である」。

之等の記事に據ると歌劇「オルフォイス」は未だ嘗て演出されたことが無いかの様に見えるが、三十六年七月に於て一度公演されて居ることが事實で前述の通りである。

それが四十一年に至つて再演出といふ間際に至つての中止であるから、樂界も文藝界も聲を揃へて當局を批難した

ことも窺はれる。全都の新聞雑誌が筆を揃へて其の不都合を責めたことも考へられる。

青春に燃ゆる音楽家の鬱勃たる生氣が表面の沈黙こそ守つて居たが、内實頗る動かんとするものがあつたのは事實で、或る何者かを暗示したのである。

こんな具合で歌劇熱は差止問題に依つて却つて大衆の耳に喰込んでしまつたのである。

これより先三十八年には北村季晴作の「露營の夢」が歌舞伎座に於て幸四郎に依つて演出された。歌劇的なものであるが適當な合唱團がなくて遂に慶應のワグネル合唱團が之を後援して目的を達せしめたことがある。

坪内雄藏の率ゐた文藝協會は明治三十九年二月紅集館で發會式を擧げ、同年十一月には歌舞伎で樂劇「常闇」を公演した。東儀鐵笛作曲で二十の樂譜より成るものであつた。出演者四五十人、樂人三十餘人、合唱者百餘人といふ多數で非常の喝采を博したものである。

又同年邦人の手に成つた物を主として研究する團體の樂苑會が成立した。小松耕輔作の「羽衣」や小林愛雄、小松耕輔作の「鑿鐘」等が上演紹介されてあつたが、役者と金との經營難で中止するに至つた。

明治四十年九月英國バントマン歌劇一座は三十餘名の一團で來朝した。歌劇といふので、好樂家連は大きな期待のもとに之を迎へた。しかし開幕の目が來て之等の期待を裏切られ、オペレットやオペラコミックで重音や合唱の處は單音で歌ふことが多いといふわけで、餘りの邦人を見盜つた態度に、好樂家の批難が多く、従つて最初の外人歌劇とも言はれるものが或る一部の不評判を招いた。

九月七日 横濱會堂に於て試演

同 九日 ゼービレオフメイフェル

同 十日 ゼービニーチオフバス

同十一日 ゼー、アルアンド、ガール

同十二日 ゼー、アルムローン

同十三日 ゼー、ホワイトクリサンシウム

同十四日 フロードラ

東京に於ける出演種目

同十六日 ゼベル、オブミーフアイヤー

同十七日 エ、カウテイ、シユール

同十八日 オツキツド

同十九日 プリユー、ムーン

同二十日 ニュー、フロドグー

翌四十二年には横濱外人の組織せるドラマチック倶楽部主催、新設の有樂座に於て、歌劇「ドロシイ」の出演を見た。歌者として最も出色せるはモリソン夫人、コーバル、演技ではブラデイが最も好評を博した。オーケストラは貧弱で器樂は遂に聲樂に劣つてゐたのは遺憾であるが、アマチャの集りとしては演技方面は感服された方で、バンドマン一座の歌劇團と比較して論ずるものさへあつたほどである。

明治四十二年十二月

山田耕作新作歌劇「誓の星」をユニテリアン教會のクリスマスで發表。不揃なオーケストラと合唱團とを以て、ともかくあれだけに演ぜられた點を多とする。歌劇と言へば常に京濱曲外人の獨占物の如く思意されて居た時の催なれば、實に群鷄の一鶴の如き觀があつた、と本邦英字新聞の紙面に批評が出てゐた。

明治四十三年一月末、有樂座で、京濱紳士の催のバンドマイム「ビュイテイ、エンド、ピースト」が舉行された。演技者の熱心なのが第一に賞揚された。筋は外國に數多きフェアリー、テールスのやうなもの。只音樂入の神事劇といふに止まる。

オーケストラもあつたが、ソロの場合には貧相なアツプライトピアノの伴奏が情なかつた。

明治四十二年八月帝國劇場洋樂隊編成

同年八月略竣工に垂んとする帝劇では同座の附屬管絃樂隊を組織することになつて生徒二十名を募集した。教授者はユンケル、ウエルクマイステル等で九月一日より建築中の同劇場に於て開始した。

一ヶ年卒業の後は矢張修業を續けながら演奏せしめ、合格者には最初より幾分の手當金を支給したのである。

先年以來歌劇研究會の「オルフェウス」や小林、小松等の「靈笛」や坪内、東儀の「常闇」等がそれ／＼新企圖として、吾がオペラ界の先驅であつたことは、好樂家のよく知る處であるが、然し之等は一般公衆を相手にする立派な劇場を持たなかつた爲に絶えず樂界に影響を與へて行くことが出來ず、従つて創作を刺戟する力も弱かつた。これに比すると帝劇のオペラの興行は内容の成功は別として、餘程意味の多いことである。其の結果としてオペラの創作に關する種々の議論も現はれ、又日本人の創作にかゝる歌劇を要求する聲が稍痛切に聞えて來た。恐らく反響なしには止まないまでに。

創作は技術が或程度までに達しない間は、創作の域に入ることが出來ないのである。個人に於ても時代の發展に於ても同様である。今迄の洋樂界が創作に従事する餘裕を得なかつたのは一つには此の程度に達せん爲に技術に汲々として居た爲とも見られる。

同四十四年二月四日、歌劇「青髻」を有樂座に興行。

喜歌劇作曲家のサリヅアンが作曲して、ロイテルが、一寸手を入れたと言はれるもので、管絃樂の人数が少ない上に序曲へ「ファウスト」の抜萃をもつて來て間に合せたとかで、全體として高評を博し得なかつた。姉妹の娘に扮し

たミス、ルース、メンテルゾーン及び帝皇王の執權に扮したブレデキーが最ら好評を博したといふ。(音楽)

同年六月、バンドマン、コミツクオペラ

六月三日より七日間横濱の公會堂でバンドマンの歌劇の催があつた。オーケストラは僅に八九人ばかりの貧弱なものであるが、實によくやつてのけて居る。ソロもコーラスもよく、あんなに遊びみたいに、平氣で唱へたものだ。實際情いほど慣れてゐる。グランドオペラは未だ見ないから知らないが、こんなコミツクオペラでもいい、時々來て我が藝術研究者果た愛好者等に何等かの印象を残して行つて貰ひたいと思ふ。残念ながら今の日本には未だこんなものさへないのだから。初日は「我等のギブツス嬢」といふ出物で二日目はゼ、メリーウキード、三日目のはエ、ワルツ、ドウリームであつた。

六月十一日より三日間有樂座に於て催す。

十一日　ゼ、バルカン、プリンセス　三幕

十二日　ゼ、メリー、ウキード　三幕

十三日　エ、ワルツ、ドウリオム　三幕

初日のは倫敦ウエールス座最近の當り狂言、二日目のはデリス座で三年間興行を繼續したもので、三日目のは同じくデリス座の當り狂言であると。

六月九日十日午後六時半から有樂座演藝同志會の第一回試演會「エルガ(仲房の夢)」があつた。北村季晴、同初子等が主となつて劇界を覺醒し且オーケストラを用ひて大いに歌劇界の先驅者たらんとした試である。

第一回試演

「エルガ(僧房の夢)」 七場

ゲルハルト、ハウプトマン作 森鷗外博士(林太郎)譯

オーケストラ 東京フィルハルモニー管絃部員

同年八月、帝國劇場專屬の聲樂部生徒募集す

八月二十五日午前十時よりウンケル、マイステルの二教授及柴田環等試験委員として入學試験を執行した。結果は男百二十七名、女十八名の志願者の中男十一名、女十一名、都合二十二名の假入學を許可し、身許調査の上醜業に従事したものは入學許可を取消したのである。

同年十月、帝國歌劇の初演

十月一日より松居松葉の新作「胡蝶の舞」を上演した。同曲はウエルクマイステルの作曲でバレエ入りの歌舞曲である。オーケストラはウンケル、マイステル等之が教授に當つたもので、バレエはミス、ミツクス教導に任じ、柴田環等は春の女神に、藤間房子は雄蝶に、音羽かね子は雌蝶に扮したのである。

△花法師某の批評の一部をこゝに載せると、『此の劇全體を通じて尤もよく、其氣分が表はれて居るのは第二場で、歌詞と飾付けとオーケストラが申分のないほどであると、しかし、音楽として味ふよりも、色として見る方が主に成る傾がある云々。我が國に於けるオペラに對する前途の光明が確に認められて來た。……』

△杉村楚人冠の批評の一部に曰く、

『日本にて初めてのオペラとて、彼れだけに出來たるは先づ上出來の方としておくべし。但しオペラとは申せ西洋の場末の小屋のバレエの類のみ。服装や髪容、無暗に西洋臭くしたるはうるさし。』

春の女神の冠に電燈をつくるが如き何等の兒戯ぞや。踊る女に、孰れも口を開いて笑顔をさせたるは巴里邊の女にこそ似つかはしけれ。日本ではあまりわざとらしくて忌らし。

歌は房子も、かね子もまづいものなり、丸で野性の聲なり。胡蝶は合唱のみなれば巧拙は分らねど聲は儘に引立たず、ソコになると流石環女史、超然として群を抜いて聲といひ節まはしといひ、殆ど比べ物にならず、僕は森律子ぞ、かねく日本一の賢い女と思ひるしが、今夜初めて日本一の賢い女、今一人ありて柴田環なることを知れり云々。」

其後ユニケル作曲「熊野」が上演されたが滅茶苦茶に悪く言はれて失敗に終り、ウェルク、マイステルが「釋迦」に作曲したものゝ上演が非常な好評を拍した。

「熊野」に比して「釋迦」の評判の善かつた事は、原作者並作曲家によるものであるが、其の重なる理由の一つは「熊野」の主人公が日本の歴史上の人物なるに反し、「釋迦」が遠い天竺の古い時代の人なるに在ることも分る。釋迦や耶須陀羅の口から従來の日本の節と多少かけはなれた節が出ても左程變ではないが、宗盛の口からは滑稽に聞く人が多い。これは「熊野」が失敗し「釋迦」が成功したのであると云へる。

明治四十五年、四月吉丸一昌作歌本居長世作曲の歌遊び「浮れ達磨」が白木屋呉服店餘興場で上演された。松本幸四郎の振附で、少女歌劇とでもいふ形式を具へて居るものであつた。(第三十八圖参照)

同四十五年六月二十四日より一週間

英國バンドマン喜歌劇一座、帝國劇場に於て興行

前年は有樂座に於て三日間興行して大當りであつたが、本年は帝劇に於て七日間行はれた。日本を背景としての劇



歌 遊 浮 遊 遊 遊

作ものも發表された。

「チヨコレツトソルチア」 「ムスメ」 「ダラアブリ
ンセス」

△バンドマン歌劇の來朝によつて昨年以來歌劇熱が興つた。新聞に雑誌に之が評論が掲げられた。

一、能樂と洋劇 藤代禎輔 藝文第七號

一、歌劇について 音樂第三卷八號

一、歌劇と歌優 小林愛雄 同三卷八號

一、歌劇漫話 北村季晴 七月二十一日時事

一、バンドマン歌劇を見る 反魂香 八月號演藝通報

大正二年三月

近代劇協會の三月舉行「ファウスト」に原田潤、清水金太郎が出演した。

同年六月

帝劇は六月舉行の内に「魔笛」を加へて歌劇部の主なるメンバーである原田、清水、原の三名に活動の歩地を與へた。研究の樂堂を後にして街頭に勇ましく走り出て、いさ

ぎよき興行者との握手はどんなに、音楽界の注意を惹起したか、數年來問題であつた歌劇の公演が、こゝに立派に開演されたのである。

同年十月八日

マダム、モット並サルコリー、原信子等の演奏會があつた。歌劇熱の勃興ともいふべきで、これがやがてロイヤル館のオペラコミックを設立するに至つたのである。

大正二年九月、國民歌劇會の設立

西歐歌劇の研究及演奏並に國民的歌劇の創作を目的とし、單に歐米のものを模倣するに非ずして、眞に國民性と合致せる歌劇の作曲の爲に設立せられたもので、森鷗外博士を文藝顧問に、本居長世を音樂顧問に、湯原校長、吉丸教授、興謝野鐵幹、同晶子等の後援を得、滋野男等を贊助員として牛込赤城坂下町に事務所を設けて九月中旬より練習を開始した。

大正三年三月八日

國民歌劇會第一回試演音樂會、於神田區錦町日本音樂協會講堂

合唱、合唱、獨唱等のみで劇は無かつた。

一、管絃樂

ローマンス シユツツ作

管絃樂部員

一、混聲四色唱

ヨシヤ ヘンデル作

技藝部員

一、獨唱

アンデイームジーク ジューバード作

岩淵講師

一、女聲三重唱

本居長世作

技藝部員

一、管絃樂
バルセルナ ワルツ ヒルドレス作 樂部員

一、混聲四重唱
アドゲンツリード ヒーレル作 技藝部員

一、混聲四重唱
あざけり 本居長世作 技藝部員

一、獨唱
鈴木乃婦子

甲、マイリード 乙、デウユウオツフンコールオンマイト プラームス作

一、合唱
うかれ連摩 本居長世作 技藝部員

管絃樂伴奏 樂部員

大正二年七月、寶塚少女歌劇養成所が出来た。

翌年五月には洋風の歌劇を公演した。當時の演出者は二十五名といふ少数なもので、現在に比すれば十分の一にも満たないものであつたが、關西に於ける樂劇の嚆矢ともいふべきである。

少女なるが故に遊戯的氣分で物足りない、千編一律である。感激の伴はない藝術は虚偽だ。男聲を缺く歌劇は片輪である等の批難の聲の中にも、圓滿な發達を遂げ現在の地位を築いた。其の芽生が此の時に育まれてゐたのである。

同三年十二月廿七日

本居長世は十二月廿七日の夜白木屋演藝場に於て創作小歌劇「夢」とお伽歌劇「月の國」とを上演した。舞臺の狭いのと、出演者の技術の未熟のために、作者が想像の中に動いてゐるものを、全部完全に表出する事が出来なかつたために生れ出たものは極めて妙な畸形兒となつて了つた。併し若し十分の費用と時日とを得て十分に練習した上完全に演出したならば或は一世を驚倒させる位の効果を擧げ得たかも知れない。主旋律的材料及び其取り扱ひ方等に於て

批難されたが、兎に角誰がやつても多少の不満足は意地悪に批評家に見出されるに極つてゐる。吾人は寧ろ管絃樂編成上幾多の佛敎樂器を取り入れ、大なる不調和や破綻を示さないで巧妙にこれを織り込み、男聲合唱の中へ般若心經などをきかせて餘程の効果を収め得た等は洩す可らざる功と云はねばならない。絶對の醜絶對の美がないと同様、絶對の缺點絶對の長所があらう筈はない。世人が以つて作者の短所とするところもそのままで長所とも美ともなる事が出来る。(音楽雜誌)

大正五年十月、赤坂に我國最初の歌劇専門の定設ホールローヤル館が出現した。

これは帝劇洋樂部に居たローシーの解雇に伴つたもので、其第一回の上演はオツフェンバツクの「オルフェウス」で第二回「マダム・ゴアの娘」で竹内、清水、原等がローシーを助けて歌劇のために奮闘したのである。

當時入場者は殆ど無く十數人を算するのみであつたことは、此冬を越すことが出来るや否が案じられた程である。入場料もずつと低廉で、その割には價值ある藝術であつたが、民衆はまだオペラを解する迄に行かなかつたのである。

二月、赤城見付のローシーのオペラ、コミツクの二月興行は、モツアルトの「靈笛」をやめ、矢張りオツフェンバツクの喜歌劇にした。

三月、ローシーのオペラ、コミツク座の三月興行はオツフェンバツクとアヘギー合作の滑稽歌劇「美しいヘレナ」で背景は例の如く齋藤佳三の筆になり、中々立派なものであつた。歌優中男では清水、桂の二人、女では原、清水の二人が最もよい様であつた。段々舞臺数を踏むにつれて其他の人々も漸次上達の跡を示して居るのは誠に喜ばしいが、中には面白半分に綺麗な衣裳をつけて舞臺で巫山戯てゐるやうな人も見える。いくら軽いもので事實巫山戯たところ

を演出する場合にせよ頭惱のある藝術家の演出には人をして頭を下げさせる重みがあるべき筈である。どんな端役を勤める人達にも藝術家としての自覚、自己の藝術に對する尊敬がなくてよいと云ふ筈がない。これが新劇壇や、歌舞伎劇の自覚した雰囲気の中では到底舞臺に立つ資格のない青年男女が割合ひに希望者が少いと云うために、歌劇の舞臺へは立ち得ると云うことは我多事なるべき歌劇の前途のために決して喜ぶべき現象ではない。終に主なるキャストを擧げて置く。

パリス(プリアム王の王子)

清水 静子

メネラウス(スパルタ王)

高田 雅夫

ヘレーナ(メネラウス王妃)

原 信子

アガメムノン(諸王の王)

清水 金太郎

オレステス(ア王の王子)

町田 金嶺

ピラデス(オレステスの友人)

水野 讓治

カルカス(主の神の大神官)

桂 與太郎

アキルレス(フチオリデス王)

千賀海壽一

アヤックス一(サラミス王)

鈴木 之夫

アヤックス二(ロクリエン王)

桑 折 悞

四月、「ボカツチオ」上演、管絃樂部員病氣缺席者あつて指揮者竹内平吉の骨折一方ならず、一方原信子、ボツチオ、清水金太郎の桶屋、同静子の桶屋の妻などは夫れ夫れ聴衆の喝采を博した。

六月、喜歌劇「ブム大將」、清水金太郎、原信子がタイトルロールを唱ひ、竹内平吉指揮の管絃業、稍圓熟せる技を示された。

七月、ブランクエツトの作「コルネギーユの鐘」、竹内平吉退いて石川太郎管絃の指揮をとる。守銭奴のスパールに扮したローシーは所作で中々よい處を見せて呉れた。立役は例の如く原信子、清水金太郎で清水静子、田谷力三等も相應にやつて居られた。其他に村長の堀田金星、公證人の義木信夫も居た。

十月、

第一、ピエトウロ、マスカーニの歌劇「田舎の騎士」(カプルレリー アルステイカーナ)

第二、ローシー夫人の伊太利ナポリ舞踏、タランテルラ

第三、喜歌劇「アルカンタラのお医者さん」

役 割「田舎の騎士」

サントゥツア

ソプラノ

原 信 子

ローラ

メゾソプラノ

清 水 静 子

トウヲツドウ

テノール

田 谷 力 三

アルフィオ

バリトン

清 水 金 太 郎

ルチア

コントラアルト

井 上 起 久 子

其他 大 勢

「アルカンタラのお医者さん」

醫者バラセオル

清水金太郎

其妻ルクレツィア

井上起久子

其娘イサベルラ

原信子

同家女中イネヅ

清水静子

バルタザール

堀田金星

其子息カルロス

田谷力三

門番ベレヅ

茂木信夫

同 サンジヨ

網倉安義

警官ドンボンボーズ

堀田金星

其他 大勢

十二月、オードウラン作「マスココツチ」原信子病氣のため清水静子タイトル、ロールを演じた。清水金太郎の領主田谷力三の羊飼等がよく活躍してゐた。しかし繰り人形が器械的に手足を動かしてゐる様に見えた。

大正七年二月

エールデイ作の「ラトウラギアータ」の大作上演

小松王巖譯の(身を誤る女)(椿姫)でタイトル、ロールは安藤文子と清水金太郎である。

ギオレツタ

安藤文子

アルフレツド

田谷力三

フコーラ

アンニーナ

ジエルモンド及ドビニー等

ガストーネ

ドウフオール

岡村文子

井上起久子

茂木信夫

堀田金星

川合想世

三月、原信子、田谷力三等は舊ローシーのオペラ、コミツクの歌優を加へて浅草公園観音劇場に出演した。三月二十五日迄は「マスコスト」を上演、其後は「椿姫」等の上演をしたが、場所柄だけに聴衆多く、歌劇趣味の普及に貢献する處があつたが、漸次聴衆化されて遂に浅草化されたのである。

大正八年三月にはパンヴアード米國喜歌劇團帝劇に來演、十月には露國の歌劇女優チエルスカヤの獨唱會があつた。共に満員でない入場者に帝劇はかなりの痛手を受けたが我が樂界に對して與へた力は大きなるものであつた。

大正九年十二月二十八日、九日、三十日、三日間

歌劇「ランフアンプロデイグ」上演、於帝國劇場

山田耕作歌劇公演會曲目

十二月廿八日午後七時(普通公演)

第一部 (管絃樂演奏)

一、伊太利の旅にあるハロルド

ペルリオーズ曲

二、「牧神の午後へ」の前奏曲

デビウツスイ曲

三、アルヂェリア組曲

第二部 (歌劇)

踊れる兒

デビウツスイ作

主役

全一幕

父 スイメオン アレキサンドロフ

母 リア ヘルミデス

息子 アザエル 伊藤祐司

サンサーン曲

十二月廿九日午後七時(普通公演)

第一部 (管絃樂演奏)

一、歌劇「名歌手」の序曲

二、歌劇「ローエングリーン」より

ローエングリーンのうた

三、新世界よりのスイنفオニー 第二樂章

四、歌劇「名歌手」中より

ブルターのうた

第二部 (歌劇)

タンノイザー

ブーグナー作

第三幕

第一、第二場

主役

エリザベツト姫

コロボドフ

獨唱者

ブーグナー曲

獨唱者

ステベルスキ

獨唱者

ドウオルヂアク曲

獨唱者

ブーグナー曲

獨唱者

ステベルスキ

十二月三十日午後七時(特別公演)

第一部 (歌劇)

タンノイザー

第三幕

第一、第二場

第二部 (管絃樂)

一、「牧神の午後へ」の前奏曲

二、歌劇「名歌手」の序曲

第三部 (歌劇)

歸れる兒

デビユツスイ作

全一幕

主 役

シメオン、ブルフラム アレキサンドロフ

リ ア ヘルミーデ ス

エリザベート スコロホザフ

アザエル 伊 藤 祐 司

舞 踊 エレナ、パアロフ

獨 唱 ステベルスキー

總監督及音樂指揮 山 田 耕 作

歌人 デルフラム アレキサンドロフ

デビウツスイ曲
ブーグナー曲

舞臺監督 土 方 與 志

舞臺裝置衣裳 齋 藤 佳 三

三日間山田耕作指揮の下に我國の歌劇史上特筆大書すべきデビュツスイーの「ランファン、プロディイグ」とワークナーの「タンノイザー」の上演が帝國劇場であつた。すべての方面にこれだけ細い藝術的の注意が拂はれて歌劇が上演されたことは従來我邦に於ては無かつたことゝて、物質上の損失は數千圓の額に上つたことゝ思はれるが、藝術上に收め得た成功は優にこれを償つて餘りがあると思はれる。すべて此上演に關係した人々に吾人の感謝は十分に捧げらるべきであるが、殊に寢食を忘れてこれを指揮した山田耕作の功は洵に没す可らざるものである。もとより第一回の試ではあり、多くの制約の下に企てられたものであるから十全の成果を得ることは出来なかつたが、其收め得た成功は能く彼の苦心に報い得たことであらう。

第四十九章 撥^{フレックトラム}絃^{ストリング}音樂の發展

「フレクトラム音樂」新しい名命であるが、新しい音樂ではない。所謂撥を持つて彈奏する樂器で演出される音樂の總稱である。

しかし日本樂器の三味線や琵琶の類ではなく、洋樂器のマンドリン、ギター、リュート、マンドローネ、ギダローネ、マンドチエルロ、パンチョー等の如き絃をはじいて音を出すものゝ音樂をいふのである。撥の有無には主を置いて居なく。

フレクトラム樂器リユートの渡來したのは、古いことで南蠻船入津後間もないことである。この樂器が歌謡の伴奏用として使はれたのは十六世紀のことで絃が十一本から十三本位あつたのである、恰もマンドリンとギターとを取合せたやうなもので、奏法の難しい處から殆んど邦人の手には渡らなかつた。

マンドリンの來たのは、他の樂器類に比してずつと遅く、殊に十九世紀の中頃（一八〇六年—一八八二年）にスクワレヴィナツチアが此の樂器に大改革を加へガツト絃を鋼鐵線に、木の糸巻を齒車式に従來最高フレットが十五に限られたものを増加して音域を擴張し、更に胴の形を大きくして現在の樂器に改作した關係で、ナポリ型のマンドリンの移入は、どんなに早くとも明治十三年以後のことである。

明治二十七年サミュエルアデル・スタイン來遊して、横濱外人居留地に於てマンドリン、ソサイテーを開いてゐるがこの演奏會は當時の人々には何等の刺激をも與へて居なかつた。又同年九月東京彌生館の義勇報國音樂會に於て仙花樂と名打つてマンドリン、ヴァイオリン、ハープ（當時外人宣教師で持つて居るものが二三あつた）の合奏が行はれた。之は四竈納治門下生で邦樂の八千代獅子の旋律を弾いたものである。マンドリンをメンダリン等と呼んでゐた事から推しても、來たばかりの新しい樂器であつたことが考察される。其後四竈納治に依つて漸次紹介され、明治三十二年頃比留間賢八の研究する處となり、翌三十三年彼が商用で洋行の途次伯林に於てアルテイエン、コルナーライに就てマンドリン奏法の指導を受け、翌三十四年六月歸朝に際し、該樂器を輸入して之が紹介の勞を執つたのである。現在に至るまでマンドリンと云へは比留間賢八がその最初の紹介者であると言はれてゐた。

其の著書にマンドリン教科書がある、滯歐中の肥録で明治三十七年共益商社から發賣されたもので日本最初のマンドリン教則本である。明治三十六年六月にはステツクが仙臺に於ける聯合音樂會でマンドリンの獨奏を行つたが演奏

表現が拙劣で聴衆中に共鳴者を見出しかねたと評されてゐる。其後南薫三、比留間賢八等の肝入でマンドリン合奏團が上野美術學校生に依つて組織され、華々しく演奏された。次いで明治四十年頃慶應のマンドリン團體が田中常彦(澤)によつて活躍をはじめ、マンドリン音楽の搖籃期を脱出したのである。

明治四十三年には同志社大學マンドリンクラブが學生間に設けられプレクトラム音楽研究の魁をした。同四十四年伊太利人アルドフオ、サルコリーの來朝によつて、斯道の發達を促した。彼は聲樂家であるがマンドリン、ギターの奏法に明るくかなりの力量を示し、我がマンドリン、オーケストラに對する貢獻者として認められた。

同四十四年には慶應マンドリン俱樂部が三田慶大内に設立され、プレクトラム音楽の研究にはじめた。當時獨奏者として田中常彦あり、ムニエルの西班牙風狂想曲を演出して獨特なマンドリン曲の存在を知られたのもこの頃で、愈々流行の潮を示した。

大正二年にはサルコリーが指揮者となつて慶應マンドリンクラブを立派な團體に作り擧げた。この年の秋、帝國ホテルに於てヴェルディ百年祭紀念音楽會を催し、サルコリーの下に田中常彦、外數名の邦人と横濱在住の外人數名との合同演奏を行ひ、かなりの効果を收めた。

大正四年武井守成のオーケストラ、シンフォニカ、タケイが創立された。同年七月慶應マンドリン俱樂部主催で、横濱、慶應、三田の三クラブの合同演奏會が催され、華かな南歐情緒も表現されるに至つた。

横濱に於けるマンドリンソサイティは横濱商業學校關係者で確められ教師イーストレーキ(博言博士の子息)が自らギターを持つて率ゐ、邦樂曲をマンドリン、オーケストラ用に編曲したもの等も數多く演出された。

同四年六月には關根文三のギター獨奏會が催された、サルコリーの曲を奏したもので音楽普及會の主催である。同

年十一月精養軒に於て、御大典祝賀演奏會が慶應マンドリン俱樂部の演出に依つて催され、マンドリンオーケストラの完成に近い技巧を示した。

翌五年四月武井守成のシンフォニカ、タケイの團體が組織され月刊の機關雜誌「マンドリンギター」を刊行し愈々新界の勃興期に入つたのである。

第五十章 私立音樂學校並音樂團體の興隆

本時代に於ける音樂は前期に比して其の音樂本質上に著しい向上進歩を見せた。

それは樂理的の研究の進歩に促されて、徒に發表するよりも内容の改善とか充實とかいふ處に着目せざるを得なくなり、作曲方面に頭を突込み出したりしたからである。

各種の音樂團體に離合集散はあつたが、總て改造され確立され前途のあるものが生誕した。故山田源一郎の創立した女子音樂學校や日本音樂協會、鈴木米次郎設立の東洋音樂學校等がその主なるものである。

當時の音樂團體を舉ぐれば、神田區に東京音樂院、女子音樂學校、日本音樂協會、ヴァイオリン俗曲傳習所、麹町區に成樂會、樂聲會、女子音樂園、女子音樂傳習所、本郷區に皋月會、帝國音樂協會、日本橋區に東京音樂會、芝區に國華音樂會、芝唱歌會、小石川區に多唱歌會、下谷に女子音樂體操學校、淺草區に正則音樂傳習所、牛込區音樂教授所、澄月會等で之等の生徒團體員數を舉ぐれば七百近くを算したのである。

本邦最初の私設音樂學校として設立を見た女子音樂學校は、明治三十六年九月に開かれ、明治三十九年二月三日に

は文部省の認可を得てゐる。山田源一郎の經營であるが再三の火災に遭遇してゐる。大震災後は府下中野に新築移轉して昭和二年日本音楽協會と合併して現在の日本音楽學校の設立を見るに至つたのである。

東洋音楽學校は明治四十年五月三日文部省の創立認可を得て、同年八月神田區裏猿樂町の新築校舎に移り九月新学期を開始した。大正十一年財團法人となり大震災火災後、雜司ヶ谷に新築移轉して居る。

明治三十八年創立のものに東京音楽院がある。天谷秀等の經營に成るもので此時代に於ける錚々たるものであつた四十二年十月東音校の受験科を新設した當時は非常な勢力だつた。天谷秀、金須嘉之進、山田耕作、島田英雄、大塚淳等が講師をして居た。また校長には三宅雄次郎博士を戴き基礎も確立して來たのであつたが、天谷の死に依つて遂ひに其の姿を消した。

同じ三十八年創立に女子音楽園がある。松山銜子刀自、千田時次郎に依つて創立されたもので、東京女子音楽學校と改稱して現在に及んで居る。

明治四十二年はオーケストラの改新时期で陸海軍々樂隊に絃樂部が新設された。慶應ワグネル、ソサイテーにも管絃樂が増設され、全國學生團體の先驅をつとめた。翌年四月には東京フィルハーモニー會が岩崎男大隈伯、英國大使マクドナル等の讚助のもとに設立を見た。之等は鈴木米次郎並ウエルクマイステル等の計劃の實現である。明治音楽會は新に二條侯爵を會長に推載し、演奏者は雅樂部の樂人を主として活躍をはじめた。十月には音楽奨勵會が青年華族好樂家の主唱によつて生れ、第一回演奏會を華族會館に開いた。又帝劇に洋樂演奏團體の創立したのもこの時である。

これより先プレクトラム音楽研究が三田學生間に行はれて居たのであるが明治四十三年には京都同志社大學にマン

ドリンククラブが創立された。

次で四十四年には慶應マンドリン倶楽部が、慶大内に確立して、フレクトラム楽器一切の研究を開始した。早稻田大學のマンドリン樂部も此年の創立であるが好樂家には認められなかつた。

デパートメントストアに於ける音樂團體の設立も此年であつた。三越少年オーケストラバンドが二十餘名の團結を見、また名古屋松坂屋管絃樂團も洋樂普及と市民の音樂の向上の名の下に活躍した。

山田源一郎等の日本音樂協會が第九回夏季音樂講習會終了後、規程を改めて東京音樂學校の豫備校的な一ヶ年制の音樂教育を施した。

同四十五年には、初等教育唱歌研究會が保科寅治等に依つて生れ、初等教育に於ける唱歌及遊戯の進歩を發達に努めた。

又作曲家本居長世は如月社を起して、一般音樂の研究を開始し、又絃樂四重奏のハイドンカルテットが杉山長谷夫、芝祐孟、東儀季教、多基永等に依つて設立された。このサークルは堅實な樂人の集りであるだけに最近に至るまで、何等の動搖を見なかつた。しかし東儀を失つて、多忠直が代りその多忠直の死後、その兄多忠亮が後繼したが、又々早逝の危に遇つてゐる。

同團は横濱のみで開演してゐた關係で東京の人々には一般的に知られて居なかつた。殊に諒闇の爲久しく中絶して居た中央樂壇に於ける唯一の高尙なる室内樂趣味の開發者としてこの時代の先驅をつとめた。

大正二年には寶塚歌劇團や歌劇學校が設立された。

同三年には大阪に永井幸次の音樂學校創立、東京高等師範學校には大塚音樂會が出来た。大正四年は大典を舉行せ

らるゝ年で樂界も却々榮えた。音樂普及に少からぬ貢獻した音樂普及會の組織せられたのは四月で、大管絃樂團を組織した東京フキルハルモニ―管絃樂部の發表されたのは五月である。同會の山田耕作の指揮振り、音樂普及會の小松耕輔、東儀哲三郎、大和田教羅等の仕事は新しいものであつた。斯くして特殊的にも一般的にも音樂が異常の進展を來したことは著しいものであつた。

我南滿州に於ける唯一のオーケストラ團たる、大連市ヤマトホテルのオーケストラの設立したのもこの年である。又宮内省雅樂部の武井守成の創立にかゝるオーケストラ、シンフォニカ、タケイの活躍も目醒しいものであつた。

大正五年には内外混聲合唱團が青山學院内に設立され、過半数が外人である珍しい合唱團體である。

合唱等に關する知識に乏しかつた好樂家達も漸く之等の鑑賞に意を拂ふに至り、東洋音樂學校、女子音樂學校の合唱等も聽衆の歡迎を受けた。東京音樂學校の春季大會に於ける入場者も堂に溢れ近年稀有の現象をなすに至つた。現在でこそ音樂演奏會が毎日行はれても、それほどの難事ではないが、當時は音樂演奏會を催すことが容易の業ではなかつたのである。

況や生活の質朴なる地方に於てをやである。

大正六年、室崎清太郎の日本家庭音樂會が山岡、市橋、久世三子爵並貴族院の南弘、樞府の二上書記官長等を顧問として、洋樂と邦樂の研究團體を設立した、現在の中央音樂學校の前身であつて現在下谷眞島町にある。

第五十一章 各都市に於ける市歌制定の機運

市歌といふものは昔は無かつた。これも洋樂の發達に促されて生れたもので、全市民を代表するものといふ考へか
らして、其の市の美觀、市民の氣象、歴史等を誇りとする處をたゞへ、而して現在の活動と將來の抱負を唱ひ出され
たものである。

之等の内容を具備して居ない市歌もあるが、ともかく市歌は新しい時代のものである。併し、時人が自己の住んで
ゐる國を誇り、官城を祝ひ、また都市の繁榮を歌つた歌は昔から可成に多くあつたことを附言する。

今大都市の市歌に就て略記して見れば、市歌の嚆矢は京都市である。當時東京音樂學校の教師であつた黒川眞賴作
歌、同上眞行の作曲で明治三十一年に發表されたものである。

京都市歌（愛郷歌）

一

ちとせの昔 さだめたる

たひらの宮の みやどころ

ちとせの後も たひらかに

かくぞ榮ゆる みやどころ

二

山うるはし みやどころ

川もさやけし みやどころ

花もみちも やまかはの

清しうるはし みやどころ

三

心のはなを うるはしき

てわざにみする みやこびと

これぞ御國の ひかりよと

みてこそあふげ よものくに。

歌詞(一)は、千有餘年の歴史を諷つたものであり、(二)は山水の明媚を讚へ、(三)は美術工藝の淵源を説いてゐる。

大阪市歌 一柳芳風作歌、小山作之助作曲

一

霞こめたり いこま山

浪は静けし 茅渚ちやうの海

三州の野の すゑ遠く

造りたてたる 大都會

大厦高樓 並みなたてる

浪華の春は 夢ならず

あゝ麗はしき 大阪市

二

三韓の船

奥のふね

泊りはてけむ

大伴や

みつの濱松

長しへに

緑の色の

いやましに

行交ふ千舟

もゝ舟の

楫緒もほさぬ

おほ港

あゝ賑はしき

大阪市

三

天皇高殿たかどのに

昇りまし

民の齋を

見ましけむ

その御恵を

いまでも猶

しのぶに餘る

煤煙の

雲の飾りは

やがてこの

民の富なり

くにの富

あゝ頼もしき

大阪市

四

それ勤儉の

月のかげ

高津の宮の 秋に見よ

尙武のはなは 金城の

天守の春の 色に知れ

げに此花と この月ぞ

市民の翳す 旗しるし

あゝ勇ましき 大阪市。

明治三十六年一月六日、大阪ホテルに於て市歌の披露式を擧げ、作曲者小山作之助來會山田源一郎等の演奏があつたのである。

歌詞は大阪朝日新聞社の懸賞募集當選のもので曲はト調四拍子のものである。(曲譜省略)

横濱市歌 森林太郎作歌、南能衛作曲

我が日の本は島國よ。

朝日耀ふ海に

連り峙つ島々なれば

あらゆる國より舟こそ通へ。

されば港の數多かれど

此横濱に優るあらめや。

昔思へば苫屋の烟

横濱市歌

Moderato. $\text{♩} = 92$ 前 尾崎作詞

わがひ のもてほしまむに よ め まひ かふふ う み に
 イ マハ マモフチ マモチフチ ト マルト コロン と 器 ヤ

つらなり ちほはつしーごらなれば ちほら くにりふれこころがよへト
 マチチチカヘマ ニュクランとヒツカ カール タカラモイワキルミナト

まればーおれの ちよーはひれ このよーはに ありーあふ
 いしーむらゝのーけしーや 56リーは6リえーてがしーる

Fine

ちらりほらりと立てりし處。

今は百舟百千舟

泊る處ぞ。見よや。

果なく榮えて行くらん御代を

飾る寶も入り來る港。

明治四十二年の開港五十年紀念祭の事業の一として作られたもので、作曲者南能衛は當時東京音樂學校助教で森林太郎博士は軍醫總監の榮職にあつた。作歌者との間に二度打合せ五日間ばかりの間に作曲されたものであると云はれてゐるが行進曲風に出來て居て、歌謡風でない處が歌ひ手を困らせてゐる。

横濱市歌として採用する事になつたのは六月で七月一日の記念式迄に全市の小學校兒童並市立學校生徒に之を歌はせる事が不可能とあつて、各小學校等六兒童の撰拔生のみを中央部の横濱小學校に集めて之が歌曲の一齊指導を行つた。

作曲者自身も再三出られて實地の指導批評にも與られ最後の練習に於ては、軍樂隊のブラスバンドで伴奏し作曲者自身の指揮のもとに演出してあつた。七月一日の開港紀念式には、本町通りの式場に於て歌はれた。爾來、今日に至るまで全市兒童並に青年の集會記念式等に歌はれ市歌としての眞價を發揮して居る。作曲上に又作歌上に批難するもの多く市長に對して改訂意見を上申したものとさへあると聞く。島國ばかりでない日本を「我が日の本は島國よ」の歌詞はいけないといふのであるとか、藝術味のない人々の議論ではあるまいか、自分は永久にこの市歌の存続を希ふものである。

♩ =84

名古屋市歌

岡野貞一作曲

mp

ア ッ タ ノ ミ ヤ ノ カ ミ カ ゼ ニ
 た だ し き た み が ま ご こ ろ に

ム ラ ク モ ハ レ タ ラ ラ シ ク モ テ
 そ し む わ ざ の は な さ き

mf

ト ヨ サ カ ノ ボ ル ア マ ツ ヒ ノ
 こ が ね の し ろ の ど こ し へ に

cresc *rit*

カ ガ ヤ ク マ チ ノ ヒ カ リ カ ナ
 た か き は ま ち の ほ ま れ か な

次に市歌を主題として出来たものに横濱
 行進曲がある。明治末期から屢々オーケス
 トラで演出されて居るが一般には普及して
 居ない。

名古屋市歌

上田萬年作曲

岡野貞一作曲

熱田の宮の神風に

一 叢雲はれて雄々しくも

豊榮のぼる天津日の

かどやく市の光かな。

二

正しき民がまごころに

いそしむ業の花咲きて

黄金の城のとこしへに

たかきは市の擧かな。

横濱市歌と同時代の作で明治四十三年二月二十八日告示第四號を以て名古屋市長が頒布したものである。作歌者は當時東京帝國大學文科教授文學博士上田萬年で作曲者は東京音樂學校教授岡野貞一である。制定の由来につき同市に糾して見たが判らないが、明治四十三年春同市に開催された關西聯合共進會に盛に歌はれたと云へば、共進會と何等かの關係あるものゝ様にも考へられる。最近、この市歌を主題として「名古屋行進曲」が早川彌左衛門に依つて作曲された。

東京市歌

明治三十九年十二月、東京市が「東京市歌の歌詞」の懸賞募集をした。一等當選者に對しては、百圓以上二百圓以下の賞を與へるといふので締切は同四十二年二月十五日といふ馬鹿に餘裕のあるものであつた。

處が、こんなに長い期間をかけての募集に拘らず、傑作がなかつたものと見えて市歌選定委員が募集唱歌により新に市歌を起草することになり矢松謙澄子が之れに當つた。森林太郎、幸田露伴、姉崎正治、芳賀矢一、井上通泰等の十四名が調査委員になり、佐々木信綱、上田萬年、大口鯛二、等を主査委員に擧げた。七月一日末松子の市歌脱稿したるを以て同子並主査委員三名市役所樓上に列席の上互に末松子の市歌に就て討議研究の上修正を加へたので、同六日午後四時更に十四名の委員を招いて總會を開き愈々市歌の決定を見るに至つたが、遂に纏らずにしまつた。

歌詞は約二十聯位で三味線にも琴にも、オルガン、ヴァイオリン等と東西の樂器にのせて唄ひ得る様に作成したのが長所であり短所であつたものと思はれる。

遂ひその「市歌」は顔を見せずにしまつた。

其後大正九年六月東京市小學校長が帝國教育會に參集して市歌制定を滿場一致で決議をしたが、その制定の運びに

に至らなかつた。

大正十一年に至つて、再び「東京市歌」の懸賞募集があつた。之は前東京市長後藤新平子の寄附にかゝるもので「東京市民歌」と形を換へてゐる。応募者は千三十名で其のうち童謡が五百もあつたのが、この時代の童謡の隆盛を語るものである。十二年六月審査員巖谷小波、島木赤彦、山田耕作、秋田雨雀、西條八十、永田市長、池田、前田助役、佐々木、大村、大迫の三課長が審査の結果左の通り當選した。

市民歌	一等	五百圓	高田耕甫
同	二等	三百圓	賀田錄彌
同	三等	百圓	久保田壽
同	三等	同	荒川修一郎
童謡	一等	三百圓	吉田榮次郎
同	二等	百圓	奥野村吉
同	三等	五十圓	山田丁丙
同	同	同	織田源九郎

以上が當選したもので、これが作曲は、山田耕作に依つて完成し、東京市がセノオ音楽出版社に指定して出版せしめた。

東京市歌 高田耕甫作詞、山田耕作作曲

一、紫匂ひし武藏の野邊に

日本の文化の花咲き亂れ

月かけ入るべき山の端もなき

昔の廣野のおもかげいつこ

二、高閣はるかに連なりそびへ

都のどよみは渦まきひどく

帝座のもとなる大東京の

伸びゆく力の強きを見よや

二、大東京こそわが住むところ

千代田の宮居は我等の誇り

力をあはせていざ我が友よ

我等の都に輝き添へむ

△獨唱的に出來てゐてピアノ伴奏付であるものと四部合唱でピアノ伴奏のと二種類である。

東京市童謡 吉田榮次郎作詞、山田耕作作曲

一、日本一の東京よ

それはどなたがしたのです

ちいさまばあさましましたのです

ちいさまばあさましたのです

二、東洋一の東京よ

それはどなたが、したのです

とうさまかあさましたのです

とうさまかあさましたのです

三、世界一にやまだならぬ

それはどなたがするのです

それはわたしがするのです

それはわたしがするのです

△此の童謡は獨唱曲でピアノ伴奏付である。

神戸市歌 神戸音楽同好會作歌作曲

一

平相國へいしやうこくが一代の 豪華に築く經ヶ島つながしま

福原京の古も 和田の泊りは賑ひき

振へく 神戸市民

二

神戸市歌

神戸音楽団行會作



ヘイショウ コク ガー イチダイ ノ ゴウカニ
 だいなん こうがー たうなん の くせんの
 カイコウ ココ ニー 五ジフネ シン タダシク



キヅクー キヤガシ マ フクハラ ヤウノ
 あとほー みなとが は ながれの すまは
 アカキー ホウアモ テ イトナエ ナセル



イニシへ セー フダノー トマリハ ニギハヒ
 かはれど も えいれい いまもー ますごび
 イナグイ ト ココニー シンキノ ヤセキア



ヤシ フルへ フルカ カウベシニ シン
 レリ フルへ フルカ カウベシニ シン
 フルへ フルカ カウベシニ シン

樂同好會が修正を加へたもので、多くの人々に依つて生誕した市歌と云へばいへ得るものである。

第五十二章 我が國軍樂隊の飛躍

此の時代は軍樂の進展期であつた。陸海軍々樂隊に絃樂が設けられ、而して管絃樂が完全に演奏されるに至つた。

大楠公が當年の 苦戰の跡は湊川

流の末は變れども 英靈今も在すことし

振へく 神戸市民

三

開港茲に五十年 正しく高き抱負もて

營みなせる一大都 茲に神威の奇蹟あり

振へく 神戸市民

この歌曲は大正五年の神戸開港五十年祭記念の作である。歌詞は神戸市民から應募したものであるが、傑作がない爲に審査員等に於て纏めたものである。又作曲は田中銀之助の原作に對して彼の率ゆる神戸音

とも又軍樂の海外的に發展し、戸山軍樂隊が遠く英京倫敦の奏樂堂に於て活躍をほしまゝにした事、皆此の時代である。

明治四十年二月、米國ゼームスタウン萬國博覽會が開催された際にも博覽會の招聘に應じ、海軍が代表の派遣軍艦筑波に樂長瀬戸口藤吉軍樂隊一隊を率ひて乗組み彼地に於て演奏を行つた。歸航には歐洲各國を巡航して各地に演奏を試みた。

同四十一年陸軍に於ては宮内省樂部より多忠基、蘭廣虎、多忠告等を招聘して非公式ながら絃樂の研究を開始し、海軍に於ては同年十二月横須賀鎮守府軍樂隊の一部瀬戸口藤吉外三十一名を東京樂地海軍大學校構内横須賀海兵團軍樂隊派遣所に移し、同月十六日一等軍樂手田中豊明外十三名を絃樂研究の爲東京音樂學校に通學を許したに初まる。之は海軍からの依托生の最初で、軍樂練習生規則改正の結果、専科軍樂練習生の制度を設け東京音樂學校通學中之が練習生を専科練習生と命ぜられたのである。

斯くして陸軍々樂隊の絃樂研究も長足の進歩をなし、明治四十三年三月には日本博覽會に軍樂隊差遣の儀おこり我が陸軍々樂隊最初の海外發展の雄圖をさへ見るに至つた。

此の遊英軍樂團體は戸山學校各隊の生徒並樂手から選抜したもので、三十五名の混成軍樂團である。軍樂生徒隊長たりし永井建子を率ひて三月十六日横濱綱纜で印度洋から佛國を経て英國に向つたのである。滯英日數二十二週間、其間三千七八百回の演奏に咽喉を損じ唇を裂く者が續々現はれるに至つたが、日本陸軍の意氣を示して屈せず吹奏を續けたと言はれてゐる。當時音樂雜誌評に曰く、「英國博覽會社の招聘に應じ日英博覽會の爲に渡英したる我が陸軍々樂隊の英國に於ける其演奏振りは、英國近衛軍樂隊及伊太利軍樂隊に比して輕重なし、とて大いに好評を博し頗る面

目を施した。』また曰く、「世界軍樂隊中第二位の好成績を占めた云々」と其の精勵や思はれる。

演奏曲目中には、長唄觀進帳、清元北州乃至は琴曲六段、常磐津子寶等純江戸趣味のものをも演じたのであるが、之等は却つて西洋曲よりも非常に歓迎され、満都の士女を驚倒せしめたものであると。

明治四十四年

三月廿六日、海軍々樂長瀬戸口藤吉、我が國最初の管絃樂の一隊を率ひて英國皇帝戴冠式參列の爲、遺英艦隊旗艦鞍馬に乘組み渡英した。

曩に日英博覽會の開催に際して我が陸軍々樂隊は遠く倫敦に赴き、其の妙技に依つて満都の士女を驚かし、歸來其の意氣頓に揚つたものがあつた。

當時、吾人は其武者振りの極めて勇ましいのを見て愉快に堪へざると共に、更に海軍々樂隊の伎倆をも併せて彼れに示すの機會あらんことを希もしてあつたのであるが、再び我が軍樂の海外發展の時期が到來したのである。海軍々樂隊の海外派遣はこれまで一再に止まないものであるが、絃樂が採用されての第一回の渡航とあつて非常な興味を以て見られた。この一隊中には二十ヶ年間に於て腕を磨いた鹽田、沼田、吉田、笹井等も參加して居たのである。

戴冠式終了後の消息

同年九月十六日、マルタ島より瀬戸口軍樂長が、湯原音樂學校長に宛た書翰を拔萃して掲ぐ。

……前略……戴冠式終了後、艦隊は英國を一週し、佛、伊、埃等の十七ヶ所に寄港仕り其都度、努めて陸上に日本軍樂の紹介を試み、公園其他汽車旅行にて奏樂致し候、その中主なるものは、ジブラルター一回、倫敦二回、ポーツ

マス軍港一回、各國軍樂隊音楽會一回、ブリマス一回、ハーロー一回、グラスゴー博覽會二日間、ゼノア一回、スベチヤ一回、埃國フイウメ一回、アパチア一回、ポーラ一回に有之、何れも實力より以上、多大の賞讃を博し本航海中最も日本の國威を發揚したるものは音楽なりとの評を得、多年御盡瘁被下候音楽を、此機會に有要ならしめ候は我々の最も名譽とする所に有之、聊か貴官の御骨折に酬ひたる者と信じ候、滯英中小生は公命を帯び獨逸リユードマン及ヘツケルの樂器會社を視察仕り序を以て突然伯林に、多、山田、萩原の諸氏を訪問仕り候處、意外の來訪に喜び迎へられて一夜を語り明し申候、翌日は諸氏の紹介にて音楽學校を參觀し、其夜はワグネルのマイステルゼンゲルを觀劇致し三日間滯在の上歸英仕り候。佛國にては例のグランドオペラに、ファウストを觀、多大の研究を仕り、羅馬にては感慨多き古跡を見物致し、又音楽を聽きては無量の感慨にそよる征衣の袖をぬらし申候、云々。(音樂二卷十號)

瀬戸口樂長は實に音楽の素養深くあらゆる難曲にも理解があり至る處に確實なバトーンを振られたと言はれた。彼は獨逸語によく通じて居た事等が斯道の研究を深からしめた一つであるとも言はれてゐる。

明治四十二年、陸軍武官々等表改正に伴ひ樂長の官等進級が行はれた。

一月、陸軍武官々等表改正の結果一等軍樂長を中尉相當官に二等軍樂長を少尉相當官に、而して之れに伴ひ近衛師團軍樂長永井岩井及朝鮮駐劄軍樂長工藤貞次は一等樂長に進級した。

因に軍樂隊條例の設けられし當時よりの官制は一等軍樂長(少尉相當官)二等軍樂長(准士官)軍樂次長(曹長相當官)一等軍樂手(當時の一等軍曹)二等軍樂手(當時の二等軍曹、現今の伍長相當官)軍樂手補(上等兵相當官)樂生(一等卒相當)であつたのが途中で一度改正され一等軍樂長を樂長(少尉相當官)に二等軍樂長を廢し樂長補(准士官)を置き軍樂次長を一等樂手(曹長相當官)と改稱し一等軍樂手を二等樂手に改め更に三等樂

手の官制を設けて二等軍樂手を三等樂手となし、軍樂手補を樂手補に改め樂生を廢した。それが今回再び一、二等樂長の官制を設けられ當時の樂長を一等樂長（中尉相當官）とせられたのである。

明治四十三年（陸軍）官制の改正により進級等行はれたが、それが各軍樂隊長の異動に及んだ。

近衛軍樂隊長永井岩井及朝鮮駐劄軍樂隊長工藤貞次（工藤は前年滿限の處一ヶ年間留任す）停年滿限に依り相前後して退職し、爲めに戸山學校教官山本銃三郎は近衛師團軍樂隊長に第四師團軍樂隊長補和田儀助は二等樂長に進級の上朝鮮駐劄軍樂隊長に補せられた。

工藤貞次略歴

一等樂長工藤貞次は盛岡出身で、明治八年十一月陸軍教導團軍樂隊に入り十年の西南役に征討軍團附として本營に在り、十一年七月樂手十四年六月樂師に任ぜられ、十五年八月（故古谷弘政と共に）佛國留學を命ぜられ巴里のコンセルヴァトアールにクラリネット及び和聲學對位法を學んだ。二十二年十一月業成り歸朝するや軍樂長並に軍樂基本隊教官に任ぜられ、日清戰役には出征の功に依り勳六等單光旭日章を授けられ、三十三年北清事變にも出征、三十四年近衛軍樂隊長三十六年戸山學校軍樂生徒隊長に補せられ、三十九年韓國駐劄軍に從ひ、四十二年停年滿期の處一ヶ年留任を命ぜられ、四十三年退役となつたが、性溫厚篤實、一意唯軍樂の爲めに精進努力した。永井建子、春日嘉藤治、平野主水等は何れもその薰陶を受けた、我が陸軍々樂の基礎を固くした元老である。その得意はクラリネットであり、實に巧妙であつたが昭和二年二月六日御大葬儀の前夜物故された、行年六十九。コンセルヴァトアールの終末試験の際同校先生の伴奏でコンチエルトを演奏した時は、數名の大家の列席して居たことゝて非常に緊張して發汗し、試験を終へ控室に入り壁に凭れて休息して居たが、後でその壁がしつとり濡れて居たのには並居る人々皆驚いたと。

明治四十二年（海軍）

四月十二日、専科軍樂練習生教授課程中に初めて唱歌科を加へられた。

同月、軍樂長赤崎彦二は一隊を率ひ練習艦隊旗艦に乗組み米國及英領加奈陀方面巡航（第二艦隊軍樂隊臨時解散）

當時は海軍軍樂隊は屢々高輪の御殿に於て演奏行はれたのであるが六月十日、昌子、房子兩内親王殿下より、高輪御殿に於て演奏の際軍樂指揮杖壹個づゝ東京派遣軍樂隊に下賜されたことがあつたと承る。

一月七日（陸軍）

大正天皇（皇太子殿下の折）兩國々坡館附撲台覽有り、土俵入りの時と、殿下の着御退出の折に近衛軍樂隊の奏樂があつた。殿下の行啓の時に於ける軍樂の演奏は禮式なるも、軍樂入の土俵入りは珍しいものである。

十月一日午後一時半（海軍）

湯原校長及ユンケル教授は海軍依托生の絃樂の試演會を催し、海軍當局者を招待して其成績を發表した。管絃樂演奏は之が抑の始で曲目は、進行曲、格闘者の告別、ブランケンブルグ作、シユワルツワルドの水車、アイレンベルグ作、圓舞曲ドナウ河畔ストラウス作、進行曲プリンアイテルフリードリヒ、ブランケンブルグ作。

當日の成績は凡てが上乘のもので短日月の練習として豫想外の技巧に感じ合つた。

明治四十三年（海軍）

旅順鎮守府軍樂隊を廢さる。

五月三十日、軍樂練習規則改正せらる。

六月五日、管絃樂演奏を公開した。（有樂座に於て）

十月三日、皇后陛下芝離宮にて管絃樂を聽し召させ給ふた。

十一月、軍樂長野坂榮太郎軍樂隊一隊を率ひ練習艦隊旗艦に乗組み墨斯哥方面巡航。(第二艦隊軍樂隊臨時解散)

十二月一日より第二期專科練習生、音樂學校授業開始。

十一月海軍々樂隊の第一回卒業生を出す。

明治四十四年十一月、軍樂長井下田龍平、軍樂隊一隊を率ひて練習艦隊旗艦に乗組み濠洲方面巡航。

明治四十五年、大正元年(陸軍)

四月、軍樂部第三次服制の改正が現制式(四十五年式)に改められ、又十一月、第三次軍樂隊の擴張増設及異動が行はれた。

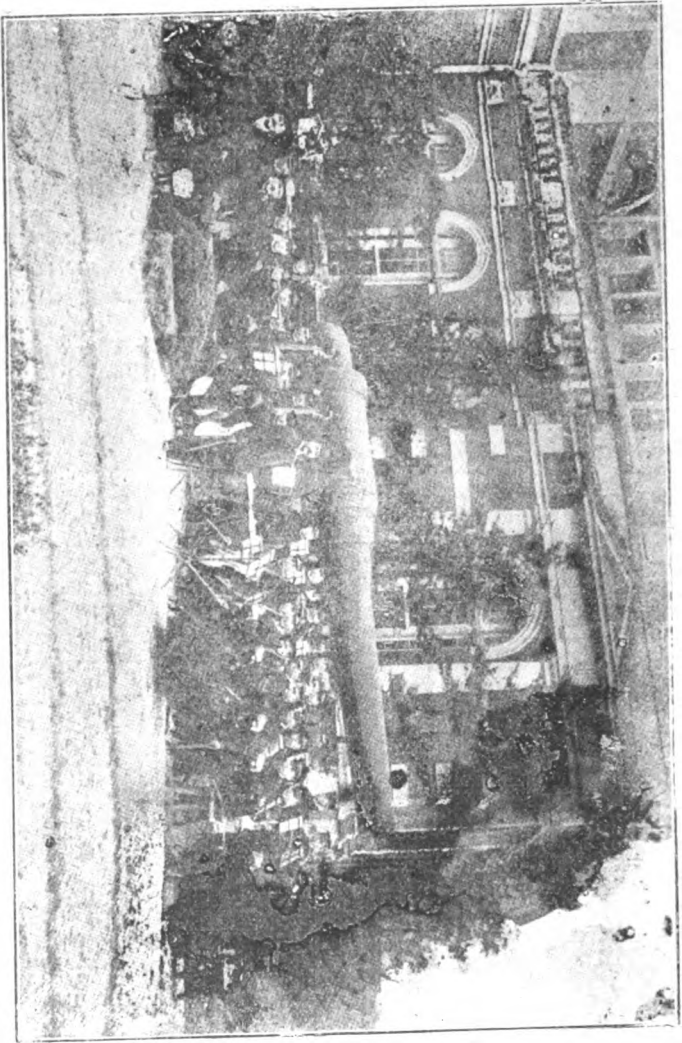
第三師團軍樂隊が設置せられ關東陸軍々樂隊長松波與三郎、同隊々長に轉補し、戸山學校教官富澤學好は二等樂長に進級して關東陸軍々樂隊長に、第四師團軍樂隊付隊長補、大内玄益は二等樂長に進級の上戸山學校教官に補せられた。

大正元年(海軍)

九月十三日、明治大帝御葬儀に參列せしめらる。

十二月、軍樂師小澤濱藏軍樂隊一隊を率ひ練習艦隊旗艦に乗組み濠洲方面を巡航した。(第二艦隊軍樂隊臨時解散)
御大葬當日の軍樂「哀の極」

元來日本の軍樂には十二曲あり第一は「君が代」で天皇陛下及皇族の御目出度き場合に奏し、第二は「すめら御國」で軍隊相逢ふ場合に用ひる、第三の「海ゆかば」は將官禮式の場合、第四の「扶桑歌」は分列式上に奏する。第



隊樂々置演るせ儀指に役臺のルケソユ

五「あしびき」は、軍旗に對し、第六「大君の」は、目下廢せられたが軍隊師營に際して奏したもので、第七「あらしき岩根」は坂を登る時、第八は「哀の極」であるが皇室の御葬に限り用ひらるゝもので陸軍達百五十三號には夫々樂曲の用途が規定して居るが「哀の極」ばかりは何とも記して居られない、これは餘りに畏れ多い故であらう。第九「國の鎮め」は靖國神社參拜の時、第十一「水漬屍」は一般の葬祭、第十一「命を捨てゝ」は出棺の場合、第十二「吹なす笛」は途上行進に用ひるのである。

以上の如くで「哀の極」は 皇室御葬儀より外に決して奉奏しないものなのに、「哀の極」を「アイのキヨク」と訓み、「哀の曲」と混じ普通軍人の葬儀にも「哀の極」を奉じたなど世間で口にも筆にも記されたのは誠に笑ふべきである。「哀の極」の曲を日本國民が聞いたのは英照皇太后の御葬儀の時に只一度あるばかりで、其時以來曲譜は因く封じて近衛軍樂隊の倉庫に秘められて會て何人の手も觸るゝことがなかつたものである。

「哀の極」(明治三十年一月の記事參照)は獨人エツケルト作で、當日は樂長以下四十五名が笛十種、喇叭十四種、太鼓二種で奉奏するのであるが宮城より青山迄は五十一町との事なれば餘程遅くしても幾回となく繰返すこととなる。

因に「哀の極」の稽古は毎日午前中二時間半宛やつて居たが、竹橋内では宮城近きため御遠慮申上げ近衛第二聯隊の清水門内に變更した。(八月十八日朝日)

大正貳年(陸軍)

四月、第四師團軍樂隊長小島賢八郎は停年滿限退職の爲朝鮮駐劄軍樂隊長和田儀助其後任に轉補し近衛師團軍樂隊附樂長補守谷範造は二等樂長に進級して朝鮮駐劄軍樂隊長に補せられた。

大正二年(海軍)

四月一日、海軍々樂隊配置表を發布せらる、三十二名一隊の制に改まつた。

同月、軍樂隊長潮戸口藤吉は東京音楽學校管樂講師並樂語調査委員囑託となる。

因に樂語調査掛、主事乙骨三郎、調査員島崎赤太郎、囑託員、永井建子、上眞行、赤崎彦二、潮戸口藤吉。

大正三年（海軍）

四月、軍樂師田中豐明は軍樂隊一隊を率ひて練習艦隊司令部附として軍艦淺間に乗組み、米國及英領加奈陀の沿岸巡航。（第二艦隊軍樂隊臨時解散）

五月二十四日

照憲皇太后陛下御大葬儀に參列を令せられた。

十二月一日、福喜多領雄海軍々樂師となる。

大正四年（陸軍）

軍樂隊第一次縮少と異動。

三月、行政整理に伴ひ滿韓兩軍樂隊同時に撤廢せらる。爲に各軍樂隊共に甚大の影響を蒙り人員の淘汰整理が行はれた。先づ第三師團軍樂隊長松波與三郎及第四師團軍樂隊長和田儀助待命となり關東陸軍々樂隊長たりし富澤學好第三師團軍樂隊長に轉補し、朝鮮駐劄軍樂隊長たりし守谷範造は第四師團軍樂隊長に轉補された。

九月八日戸山學校軍樂生徒隊長一等樂長永井建子豫備役を仰せつけられ（停年滿期退職に伴ひ）近衛軍樂隊長一等樂長山本銃三郎其後任に戸山學校教官二等樂長大内玄益、近衛師團軍樂隊長に轉じ第三師團軍樂隊長春日嘉藤治二等軍樂長に進級戸山學校教官に補せらる。

九月六日、永井建子送別演奏會が戸山學校に於て催された。

又將校集會所でも同校將校團の人々と軍樂生徒隊の諸士の懇ろなる接待で永井樂長のために開かれた立食の饗應があつて教育總長上原大將閣下の祝辭、同樂長に代つて同校將校團總代の謝辭があつてから、上原大將の發聲で永井樂長のために乾杯し、主客歡を盡し、また前途を祝福した。當日の曲目は、

第一部、(吹奏樂)、一、序曲「夏に於ける氣象」ベルラー。二、舞曲「新鮮なる薔薇の花」チュリーヌ。三、劇樂「ラインの唄」の指環」の中より(ブールキューレ)ブリーグナー。第二部、(管絃樂)幻想曲「快よき北歐の戀」キニスレル。五、象徴的舞曲「多腦河に傳はりし奇しき神話」、フシック。第三部、(吹奏樂)六、戯曲「アランの谿間の筏」、サンドリー。七、劇樂「毒草を嘗めて貞操に活きたラクメ」、デリープ。八、琴曲編次「匈牙利の詩史」二、リスト、番外自作行進曲と「オールド、ロングサイン」の歌に依りて軍樂に告別した。

永井建子略歴

慶應元年九月廣島縣佐伯郡石内村に生る。明治十一年單身上京漢學塾に學び十三歳にして教導團に入る。

在職三十有七年の間、我が帝國軍樂隊の上に甚大の功勳を貽し、眞に有終の美を告げられたる人である。當局に於ては彼の功績を思ひ、官制の改革を行つて迄も停年期限の延長を計らんとしたと傳へられてゐる。而しその企劃は行なはずして豫備役編入となり前官衙の囑託の名によつて、更に軍樂隊の教育に執筆さるゝ事に定まり、我が音樂界のために慶賀すべき一記録が生れたのである。

明治三十六年二月佛蘭西、獨逸、白耳義の三ヶ國に差遣せられ同三十七年十二月歸朝。

明治三十八年五月日露役より凱旋、日比谷公園音樂の第一番館の指揮棒を振つた。

四十三年三月日英博覧會のため我が遺業音樂團の指揮者として渡歐各地に於て演奏を爲しそれが三千七八百回も行はれたと言はれてる。

大正四年十月一日叙正六位（陸軍一等樂長從六位勳五等）

作曲には「道は六百八十里」「雪の進軍」「日章旗」等の如き軍歌調のものから行進曲等のもの迄數多い。

東京音樂學校講師囑託。

大正四年（海軍）

四月、軍樂師島田福次郎は軍樂隊一隊を率ひ練習艦隊司令部附として旗艦に乗組み濠洲及南洋方面を巡航した。

八月二十日、軍樂長瀬戸口藤吉は文部省に於ける大禮奉祝唱歌樂譜審査委員を囑託せられた。

十一月四日、即位御大禮の爲東京派遣所軍樂長瀬戸口藤吉は管絃樂隊一隊を率ひ京都供奉を命ぜられ大饗宴に於て

奏樂を行はせられた。（二條離宮）

第一、第二艦隊司令部附軍樂隊は儀仗附として京都に派遣され大嘗宮の儀仗に服したのである。

大正四年十二月

早川彌左衛門、石井春省、海軍々樂師に任ぜられた。

大正五年（海軍）

三月二十三日、海軍々樂隊操式改正せらる。

四月、軍樂師佐藤清吉は軍樂隊一隊を率ひて練習艦隊司令部附として旗艦に乗組み濠洲及南洋方面へ巡航。（第二艦

隊軍樂隊臨時解散）

十二月、近藤信一、志村孝一、澤台保好等海軍々樂師に任ぜられた。

大正六年（海軍）

四月、軍樂師河合太郎は軍樂隊一隊を率ひ練習艦隊司令部附として旗艦に乗組み英領加奈陀及北米合衆國太平洋沿岸を巡航して歸る。（第二艦隊軍樂隊臨時解散）

九月、福喜多鎮雄は軍樂隊二十六名の一隊を率ゐて第二艦隊榛名艦に乗艦した。

十一月十五日、軍樂長正七位勳五等瀬戸口藤吉滿期停年に達して豫備役被仰有。彼の年來の大功を稱ふため朝野の貴顯有志集つて十一月十四日午後一時より帝劇に於て告別演奏會を催した。

曲の最後に山田耕作が特に作曲して瀬戸口樂長に贈呈した紀念曲を、早川軍樂師が指揮したのが珍らしかつた。

第一部

一、序曲、「羅馬の謝肉祭」
ベルリオース作曲

二、音詩「中央亞細亞の廣野」
ポロティン作曲

三、低音獨唱、管絃樂附
樋口信平

歌劇「猶太の女」中の抒情調
アレギー作曲

四、甲、アングァンテ、カンタービレ
チャイコフスキー作曲

乙、西班牙舞曲
サラサーテ作曲

第二部

五、洋琴、管絃樂競奏
小倉末子

イ短調司伴樂

グリーヒ作曲

六、第五交響樂中の第二樂章

チャイコフスキー作曲

七、深音獨唱

サルコーリ

劇「トスカ」の一節「星きらめきぬ」

プツチーニ作曲

八、但曲、「アル、の女」

ビゼー作曲

甲、プレリュード 乙、メヌエツト 丙、フアランドール

瀬戸口軍樂長に贈る

山田耕作々曲

瀬戸口藤吉略歴

明治元年五月 鹿兒島市小川町に出生。

同 十五年 海軍入籍。

同 廿七年 海軍々樂師任命。

同 三十三年 北清事變の功により勳六等を賜はる。

同 三十六年 海軍々樂長任命。

同 三十八年 日露戰役の功に依り勳五等双光旭日章を賜はる。

同 四十年 米國セントルイスの博覽會に軍艦筑波に乗組み參列。

同 四十四年 英帝戴冠式に軍艦鞍馬にて參列、後英佛の各國を塊伊訪問して演奏。

一、外國に於ける御前演奏、英、獨、伊、葡、西各皇帝、並米大統領。

一、囑託、東京音樂學校講師、大正博覽會審査員、大禮奉祝唱歌委員。

一、作曲の重なるもの、軍艦行進曲、敷島行進曲、嗚呼乃木大將、東京行進曲、威海衛封鎖、嗚呼北白川宮殿下、其他の作曲、編曲等は省略。

一、功績 一、海軍管絃樂の創設、二、日比谷公園音樂の改善、三、海軍々樂教科書の編制。

大正六年（陸軍）

七月、軍樂生徒隊長山本銃太郎停年滿期退職の爲、近衛師團軍樂隊長大内玄益後任に、第三師團軍樂隊長富澤學好近衛師團軍樂隊に轉補し、戸山學校教官春日嘉藤治第三師團軍樂長に、第四師團軍樂隊は樂長補杉本一枝二等樂長に進級、戸山學校教官に補せられた。

第五十三章 譯歌謠曲並音樂圖書出版界の進展

戦時には戦闘氣分の横溢した軍歌調の唱歌が盛に出版されたが、平和克復の成るに及んで、それが國民的唱歌に傾き而して漸次唱歌本來の立場に戻り、遂ひに藝術的な歌謠曲が現はるゝに至つた。

明治四十年には獨逸歌謠曲が上野の音樂學校に歌はれて以來、之等の歌曲が雜誌に或は單行本にと其の姿を現はした。それと同時に音樂の學理方面に關する圖書の刊行も現はれて、明治時代の音樂出版界に大なる發展を劃し、それが大正の御代に進展したのである。

從來とて譯歌謡曲が無かつたのではないが、これまでの所謂唱歌曲に限られ、歌詞は「教育的」といふ事にのみ意を拂つたものが多く、爲に藝術味の缺けて居るものが多かつたのである。そこへ現はれたのは近藤逸五郎等の譯歌謡曲で、當時の新詩壇の新しい活躍と歌劇の勃興とに依つて開かれた寶庫は非常に驚喜を以て迎へられた。

明治四十年六月、近藤逸五郎編著の「獨唱名曲集」が出版されたのが抑の始めて同四十二年九月には小松耕輔に依つて「名曲新集」が出版され、同十二月には天谷秀と近藤朔風共著の「女聲唱歌」が刊行された。いづれも邦譯歌詞付の歌謡曲集で、「ジヨセランの子守歌」、「菩提樹」、「シューベルトの子守歌」、「ローレライ」……なじかは知らねど心わびて……等の歌曲が青年女子の間に非常な歡迎を受けたのである。

當時の譯詞者としては、近藤逸五郎（朔風）を初め、石倉小三郎、上田敏、乙骨三郎、與謝野寛、晶子、小林愛雄、長谷川時雨、前田純孝、小松耕輔、内藤雀等がある就中近藤朔風の譯詩は實に於ても量に於ても傑出してゐた。ベートーヴェンの「靈異」、シューベルトの「子守唄」、リストやシューマンの「花乙女」、歌劇タンホイザーの「宵星」シューベルトの「菩提樹」、「海の靜寂」、「終焉」、ショパンの「乙女のねがひ」、歌劇オルフエオ中の「こだま」、等の如きは皆彼の譯詞である。併しグノーのセレナーデを「夜の調べ」と題し、オルフエオの水精のうたを「船唄」等とした、新作歌詞の作詞もないではないが、概して原歌の意を探て作歌してゐるが故に原語を以て歌ふと同様の感があると迄評されたほどであつた。

惜しいことに朔風は早逝した。朔風の後を受けて立つた人々は非常に多く、樂譜出版界に翻譯詞の樂譜が非常の勢で出現し、セノオ樂譜等は此の時代に四十番迄も算するに至つた。堀内敬三譯詞の歌劇ミニオン「君よ知るや南の國」妹尾幸陽の西班牙小夜樂「ラ・パロマ」、石倉小三郎のシューマンの「流浪の民」等が最もよく歌はれたものである。

本時代後半期に入つて創作界も稍賑つて來た。御大葬に成つた奉悼歌と對して御一周年には 明治天皇奉頌歌が成つた、此等の歌曲は上野音樂學校の謹作で、哀しき諒闇の樂界の記念である。乃木大將及同夫人の徳は多くの詩人或は音樂家の心を動かして歌曲を作らしめた。尋常小學唱歌の完成したのもこの時で、明治十五六年時代の小學唱歌には創作味が少ないのに對して、國定小學唱歌は、全部が創作歌曲であり、初等教育唱歌の革新であり、小國民の心理にびつたりと合つたので歓迎を受けたのである。

大正三年には 皇太后陛下崩御あらせられて世は再び諒闇に包まれた、音樂學校謹作の奉悼歌が歌はれたが、御大禮奉祝を前に扣へた樂界は漸次華かに轉回をはじめた。山田耕作の帝劇に於けるフィルハーモニー會の演奏に、自己の創作曲「まんだらの華」、シンフォニー「からどきと平和」の發表されたこと等は、特記すべきである。

前代未聞の御盛儀に際して多くの奉祝歌曲が創作せられた。文部省選定の奉祝歌の外に東京音樂學校では邦樂に於て琴曲及三絃曲の諸流、洋樂に於て伴奏付合奏曲及管絃樂進行曲の數種が謹作された。日本音樂會からも進行曲が獻納された。オーケストラの大典に對する創作の試みの漸々殖えて來た。次で立太子式の奉祝唱歌が華かに唱はれる等邦人の手に成つた我が國々民樂の基礎を確實に築かれるに至つたのである。

次に音樂關係の出版圖書はその目錄を擧げる事に止めるが、之等の中には貴重なる文献あり、文化と教育との發展のために永遠に傳ふべきものと認められるものさへある。

明治四十年刊行音樂關係圖書。

「四季の歌」全 楠美 恩三 郎 編 五月發行

「獨唱名曲集」全 近藤 逸五 郎 編 六月發行

「中等教科女子唱歌」全 渡邊 森 藏 編 六月發行

「獨唱合唱西歐名曲」四 近藤 逸五郎 編 七月發行

「器樂名曲集」第一集ヴァイオリンの卷 第二集オルガンの卷 第三集ピアノの卷

「音樂通解」全 東儀 鐵 笛 著

「樂典初梯」全 近藤 出來 治 編

「最近樂典大要」全 渡邊 彌 藏 著

「泰西音樂大家傳」全 細目邦太郎、有澤潤編著

明治四十一年刊行音樂圖書。

「日英唱歌集」二 福井 直 秋 編

「音樂世界」創刊號 一月より京都十字屋田中商店發行

「音樂世界」第一卷第一號 一月より東京樂界社發行

「音樂新報」と「音樂」雜誌の合併したものである。

「中等音樂教科書」甲種、四 北村季晴著

「初等和聲學」全 島崎赤太郎、福井直秋著

「女子唱歌花紅葉」全 白井規矩郎、内田糸太郎共編

「高等唱歌集」三 納所 辨次郎 編

「最近中等唱歌集」全 天 谷 秀 編

「オルガン速成」

メイソン閣、帝國音樂協會編

「普通樂典教本」全

開成館音樂課編

「音響と音樂」全 田邊 尙雄著

明治四十二年刊行音樂關係圖書。

「統合女學唱歌」四 開成館編 二月發行

「中等唱歌」全 東京音樂學校編 五月發行

「女子音樂教科書」生徒用四 永井幸次、田中銀之助共編 五月發行

「和洋名曲集」全 山本 正夫編 八月發行

「名曲新集」全 小松 耕輔編 九月發行

「女聲唱歌」全 天谷秀、近藤逸五郎共編 十二月發行

「さんびか」第二編 編者代表エーエムマクネーヤ、別處梅之助。

マクネーヤが中心となり三輪、別處、湯谷三人が翻譯と創作の原案を作り、それをマクネーヤが選定したものと書かれてゐる。第一編の「さんびか」と違つて作者の名が書いてある。

「音樂辭典」全 提 正夫編

「新編唱歌教授法」全 新 清次郎著

「獨彈聯彈ピアノ曲集」第一卷 澤田孝一、福井直秋共編

主なる創作歌曲。

「大國民の歌」後藤新平男作歌、山田源一郎作曲 十月十三日遷相官邸に於て山田源一郎門下學生によつて試唱せられ、全國的に發表されたものであるが惜しい哉永續して歌はれない。

一

五大洲なる我が友よ大國民を何と知る
速く祖より傳へたる至大至美の心靈の

大國民は國廣く民の衆きを謂ふべしや

榮ゆるあたり掩はてこれぞ大和の島根なる。

二

天照る神の御旨てふ平和と自由文明を
世界に富をわかたんと働く人の在るところ

三つの据といたゝきて 一に通商 二に労働

東と西の境域なく大和島根ぞこと／＼く。

三

建國以來日の御子と稜威を仰ぐ神の國
算盤はじき田をうてといざ事あらば銃とりて

大國民は唯それを獨り尊しと傲ちんや

御國に民は身や捧ぐそれを健しと誇らんや。

四

人道主義に背く國天に驕なす國あらば
一たび鞘に納めては昨日の仇も今日の友

世界のために懲さんと抜きつ戦ふ劔太刀

高く笑ひて肱を把り歌聲合す酒ほがひ。

五

佛蘭西早百合 支那牡丹矢 車菊は日耳曼尼
八千代の春に色添へて簇がる葢の睦まじく

亞米利加櫨しに英の薔薇 露西亞は紅き花じるし

咲くや櫻は愛の華これぞ日本の姿なる。

六

あやに長し明らけく治まる御世の天皇は

赫燦照らす日の如く四海の平和宜り給ふ

みめぐみとよくこの極み國てふ國は安らけく

人てふ人は親しまんこれぞ日本の心なる。

明治四十三年音楽の刊行圖書。

「古今名曲集」 山本正夫編 二月發行

「教科統合中學唱歌」 三 田村虎藏編 四月發行

「音楽」 三月東京音楽學校樂友會に於て發行のもの

「中等唱歌集」 二 福井直秋編 七月發行

「簡易複音唱歌集」 小松耕輔、園山民平共編 七月發行

「音楽初歩」 天谷秀著

「尋常小學讀本唱歌」 文部省編 七月發行

「教科統合女學唱歌」 四 田村虎藏編 八月發行

「音楽辭書」 全 吉田恒三編 大阪開成館 一月發行

「唱歌教授法通論」 山本正夫著

「普通樂典大要」 開成館音樂編輯 十一月大阪開成館發行

主なる創作歌曲、

「日韓合併の歌」 報知新聞に發表 (八月二十九日)

「東天紅」 女聲三部 吉丸一昌作歌、山田耕作々曲 音樂一卷一號

「水の雛」 二曲 梁田貞作歌、大和田愛羅作曲 音樂一卷二號

「數へうた、ヴァリエーション」 本居長世作曲 音樂一卷三號

「亡き母をおもふ」 原田潤作曲、吉丸一昌作歌 音樂一卷四號

「亡き友をおもふ」 國木田獨歩作歌、北村季晴作曲 音樂一卷七號

「宵の春雨」 吉丸一昌作歌、梁田貞作曲 音樂一卷八號

「春の窓」 吉丸一昌作歌、大和田愛羅作曲 音樂一卷八號

「幼稚園進行曲」 原田潤作曲 音樂一卷十一號

明治四十四年音樂の刊行圖書。

「女子音樂教科書」 教師用、卷一より五迄 永井幸次 田中銀之助共編

「西歐名曲集」 山本正夫編

「尋常小學唱歌」 一二年用 文部省編

「忠君愛國歷史唱歌」 鳥居忱著

「教育幼稚唱歌」 園山民平編

「中等音樂教科書」 (乙種) 四 北村季晴著 十月發行

「君が代、行進曲」 吉本光藏作曲 セノ才樂譜三

「補習女子音樂教科書」 永井幸次、田中銀之助共編

「中央鐵道唱歌」 福山壽文作歌、福井直秋作曲 二月發行

「ローマ字唱歌うらしま」 土岐哀果作歌、多梅稚曲 二月發行

「ジーバー氏著唱歌法」 學友會譯編

「オルガン使用構造解剖修繕法」 八木子厚著

主なる創作歌曲、

「隅田川」 小松耕輔作歌、梁田貞作曲

「春の窓」 吉丸一昌作歌、梁田貞作曲 音樂二卷一號

「伊澤先生還曆祝賀會祝歌」 同會作歌作曲 音樂二卷七號

「春の野川」 吉丸一昌作歌、岡野貞一作曲 音樂二卷七號

「四季の雨」 吉丸一昌作歌、南能衛作曲 音樂二卷九號

「合歡の花」 鈴川民平作歌、園山民平作曲 音樂界十號

明治四十五年(元年)刊行音樂關係圖書。

「ドンブラコ」お伽歌劇 北村季晴著

「ボツケツト唱歌」 福井直秋編

「新作唱歌」 第一、二集 吉丸一昌編

「最新ピアノ教科書」 小松耕輔編

「音程教本」 全 福井直秋著

「乃木大將の歌」 吉丸一昌作歌、小松耕輔作曲

「幼年唱歌」 第一集 吉丸一昌著

「乃木大將唱歌武士道の華」 村瀬清陰歌、北村季晴作曲

「尋常小學唱歌伴奏樂譜歌詞評釋」 一學年自至六學年 福井直秋著

主なる創作歌曲。

「畫の夢」 高安月郊作歌、梁田貞作曲 音樂三卷一號

「夕 顔」 吉丸一昌作歌、梁田貞作曲 音樂三卷三號

「おぼろ夜」 近藤義次作歌、弘田龍太郎作曲 音樂三卷三號

「涙」 小林愛雄作歌、山田耕作々曲 音樂三卷四號

「春雨」 相馬御風作歌、澤田柳吉作曲 音樂三卷六號

「二人の戀」 服部嘉吉作歌、船橋葵吉作曲 音樂三卷七號

「風車と水車」 武笠三作歌、中田章作曲 音樂三卷八號

「畫」(春四章の中) 林古溪作歌、弘田龍太郎作曲 音樂三卷八號

大正二年刊行音樂關係圖書。

「新作唱歌」 第三、四、五集 吉丸一昌編

「高等女學校樂典教科書」 全 樂書刊行協會編

「樂典大要」 全 鈴木米次郎著

「コーテ氏著音樂史要」 東京音樂學校翻譯學友會出版

「新定樂典教科書」 上下 石原重雄編

「新譯律氏和聲樂」 全 淺田泰順譯著

「尋常小學唱歌教科書」 一、二學年二 田村虎藏編

「ギオリン、サードホジュシヨ」 全 安藤幸子、島崎赤太郎閱

「叙事唱歌」 小袖曾我、石原重雄作歌曲

「歌遊うかれ達磨」 吉丸一昌歌、本居長世作曲

主なる創作歌曲、

「春の行衛」 弘田龍太郎作曲、高安月郊歌 音樂四卷六號發表

「明治天皇奉悼歌」 久保猪之吉歌、榊保三郎作曲（大正元年十一月三日作） 音樂四卷七號に發表

「ヴァイオリン曲スーヴニア」 松山長谷夫作曲（大正元年八月二十一日作） 音樂四卷八號に發表

「さすらひ」 三木露風詩、山田耕作歌（大正二年六月二十二日伯林の作） 音樂四卷九號に發表

「早春賦」 吉丸一昌作歌、船橋榮吉作曲 音樂四卷一號

「籠の小鳥」 白鳥省吾作歌、柿村徳藏作曲 音樂四卷三號

「明治大帝奉頌唱歌」 東京音樂學校謹作曲 音樂四卷八號

大正三年刊「音樂關係圖書」

「蓄音器世界」 第一卷第一號 神田世界社發行

「音程教本件奏譜」 福井直秋著

「尋常小學唱歌教授書」 三學年 田村虎藏著

「獨逸胸窓の歌」 吉丸一昌歌、島崎赤太郎作曲

「新作唱歌」 第六、七、八集 吉丸一昌著

「聖歌新曲」 淺田泰順作、(帝大生で八月に故人となる)

「オルガン曲集」 楠美恩三郎編

「リード、オルガン、アルバム」 島崎赤太郎編

「尋常小學唱歌」 完成

約四年の日子を経て六月末、六學年の出版を見るに至つたもので、民間出版のものより隨に一進境あるを認められた。

主なる創作歌曲、

「音に誘はれて」 吉丸一昌作歌、弘田龍太郎作曲 音楽第五卷二號

「東京音楽學校寄宿舎團樂の歌」 吉丸一昌作歌、本居長世作曲 音楽第五卷四號

「涙の幣」 吉丸一昌作歌、本居長世作曲 音楽五卷七號

「雪國の歌」 吉丸一昌作歌、島崎赤太郎作曲 音楽五卷九號

「寂寥」 薄田泣菫作歌、梁田貞作曲 音楽五卷十號

尺八オブリガート付である。

「皇太后陛下奉順歌」千家尊福作歌、東京音樂學校作曲

金剛石のみさとしに

磨くこゝろの玉簪

袖の涙は拂ひても

盡きぬ歎をいかにせむ。

時計の針の御をしへを

深く心にきざみつゝ

學びの業にいそしみて

大御靈をば慰めむ。

伏して惟みるに 皇太后陛下天資玲瓏にあうせられ、明治大帝維新の大御業を内助あらせられ給ひしのみならず、文藝の道にさへ秀でさせ給ひて「磨かずば」の御歌、「金剛石」及び「水は器」の御歌の如きは普く國民の拜唱し奉るところにして 長くも古今東西にたぐひあらせられざる國の大御母として中外齊しく坤徳を仰ぎ奉つたのである。然るに今や俄に崩御あらせらる、洵に恐懼の至りに堪へず、國民齊しく奉悼の至誠を捧げ奉つたのである。

歐洲戰亂の餘波が青島戰から地中海々戰と戰亂の渦中に卷込まれた時に國民は成金熱に浮かされて、戰時氣分が薄かつた。従つて中山晋平のカレーシャが唄はれ、日清日露役當時の様な歌調の創生もなく、却つて英國に於ける戰時流行歌曲が原語そのまゝで歌はれた。極く些細な事ではあるが時代の反映と見る時に考へさせられた問題である。

It's a long way to Teppany

It's a long way to go;

It's a long way to Tepperary

To the sweetest girl I know,

Good bye piccadilly !

Farewell Leicester Square !

It's a long long way to Tepperary

But my heart is right there !

Right there !

遙に見ゆる島影は

我がイギリスかなつかしや

空水速く隔りて

テパレーの野は見えねども

心は通ふふるさとの

我をばまてるこ女子に

豪雨をそれぬ身なれども

なれが情の言葉に

戎衣の袖をしぼるなり〜

さらば〜

さらば

懐しのピカデイヤ

レスタスクエヤ

(註)

Tepperary はアイルランドの地名

此歌は元アイルランドの民謡でアイルランドを去るを歌ふたもの。

大正四年刊行音楽關係圖書。

「大正天皇大禮奉祝歌」東京音楽學校作曲

「西洋音楽講話」田邊尙雄著

「オルガン教科書」中田章編

「大正幼年唱歌」第一集（第十二集）

「師範學校樂典教本」福井直秋編

「師範學校本科二部樂典教本」福井直秋編

「新作唱歌」第十集 吉丸一昌著

「バツハよりシンエンベルヒ」大田黒元雄著

「最近舞踏行進曲集」山野樂器店

「カード樂譜」六七號 中田章、納所辨次郎各編

主なる創作歌曲、

「御大典奉祝唱歌」松本徳藏作曲 音楽六卷十號

「祝南英文庫開庫の歌」三十五年作のを徳川頼貞改作 音楽六卷十號

「樂譜ヴァリエーションズ」山田耕作々曲 音楽六卷七號

「宵の春雨」吉丸一昌作曲、山田耕作々曲 音楽六卷五號

「夏の野」 弘田龍太郎編曲、吉丸一昌作歌 音樂六卷五號

「日和下駄」 藤井清水作曲

「御大典奉祝進行曲」 中田章作曲

大正五年刊行音樂關係圖書。

「大正幼年唱歌」 第四、五、六、七集 小松耕輔、梁田貞、葛原幽共編

「立太子禮奉祝歌」 諸星寅一作歌、小松耕輔作曲

「中等唱歌教科書」 上下 中田章、島田英雄共編

「ベートーヴェンとミレー」 ロマンローラン著、加藤一夫譯著

「リヒャルド・ワグナー」 田村寛貞著

「最近科學上より見たる音樂の原理」 田邊尙雄著

「春の愁」 澤田柳吉作曲、小林愛雄作歌

「印象と感想」 音樂編集 大田黒元雄著

「近代音樂精髄」 大田黒元雄著

「小學歷史唱歌」 傳田治朗編

「高等小學唱歌科教授細目」 青柳善伍著

「歐米學校唱歌」 大日本學校音樂調查會出版部

「麗はしき天然」 田中穂瑞原曲、澤田柳吉編曲 (セノ才樂譜)

主なる創作歌曲。

「習作」海軍々樂手守田貞記作曲 音樂七卷五號

「消えてあとなき」永田龍雄作歌、藤井清水作曲 音樂七卷十一號

「望郷の歌」吉丸一昌作歌、成田爲三作曲 音樂七卷十二號

「母よさらば」吉丸一昌作歌、成田爲三作曲 音樂七卷三號

「始業式の歌」吉丸一昌作歌、成田爲三作曲 音樂七卷二號

排日歌、米紙に現はれたもの

七月卅日（日曜）の“American Magazine Section of the Los Angeles Examiner”に恐ろしく誇張した毒題の挿畫をした上に、次の様な排日歌が載せてある。歌詞も曲もエヂュスマイダレ、スマイダと云ふ人の手に成つてゐる。譜は略して歌詞だけのせる。

氣をつけろ！カリフォルニア 用心しろ！

—

あいつ等は亞米利加は仔羊の様に倒れるだらうと云ひくさる。

だのに亞米利加は時局を了解しない。

そして亞米利加が平和の鳩を養つて居る限り、

戦争の話なんか消えて了ふと云つてゐる。

そして國民に迫つてゐる危険を知らずゐる。

併し世人を搖り起さずには止まない様な何かと起らうとしてゐる、
若しも我々が奮起して日本人共を追つ拂はなければ！。

(合唱)

カリフォルニア、あいつらはお前の岸邊に潜伏してゐるぞ！

カリフォルニア、あいつらはお前の戸口の陰に隠れて隙を窺つてゐるぞ！

あいつらの數は十萬あるぞ、さうして此上長く隠れてはゐまい、

あの卑劣者共奴はどんな悪い事でも遣りかねないぞ、

あいつらは一人残らず昔の日本の野心に充ちた軍人だぞ、

氣をつけろ！カリフォルニア、用心しろ！

二

我々におとなしく、卑殘な方法で仕へる虫蟻に至るまでも

我々は兄弟の様になつてやると云ふ事を確説する者もある、

併し我々が眺めて待つてゐる中にあいつらは金門中に道入つて了つた！

おい、神様、星條旗を助けて下さい！

陸軍と海軍と白館(政府)は隙間だらけであるのに、

我國の津々浦々は日本の奴等がうちやついてゐる！

(合唱、同上)

あいらは戦闘艦を有つてゐる。

そしてマグダレナ灣頭に立つて、おい亞米利加のおちさん。

俺等がお前さんに警告してやる事を聞きませんかとぬかす。

あいつらは我々に會ふ時はにこ／＼してゐるが陰では常にせつせと仕事をしてゐる。

さうして我々のカリフォルニアを盗んで呉れようと待つてゐるのだ！

だからあのポケットに一ぱい地圖を入れた東郷から眼を離すまいぞ、

もう日本は信用出来ないと言ふ事が解つたんだから！

(合唱、同上)

大體の歌詞は以上の通りのものである。眞に憂國の至情から出たものであるとすれば、レッスィングの此舉も敬服す可きものであらうが、果して斯かる方法が至高至上の藝術たる音楽の聖職に従ひ、此藝術の生命たる調和の眞精神を體得した藝術家の取る可き賢明なる所置であらうか。夫れは兎も角此歌を高唱して徒らに無益なる感情の浪費をしなければならない人々も同情して遣らなければならぬ。我々はたゞ斯かる賢明を缺く行動に酬いるに當り眞に我大和民族固有の敵に鹽と糧食とを送る至仁至愛を以つてするのみである。世界第一の大國民たる襟度は如何なる事があつても失つてはならない。

大正六年刊行音楽關係圖書、

「近代音楽家評傳」 ロマンローラン著、尾崎喜人譯者

- 「樂器の解説」 渡邊彌藏著
 「西洋音樂史綱」 富尾木知佳著
 「現代唱歌集」 弘田龍太郎、澤田柳吉作曲、小林愛雄著
 「歌劇大觀」 太田黒元雄著
 「洋樂夜話」 太田黒元雄著
 「續洋樂夜話」 太田黒元雄著
 「教科中心唱歌教授の實際」 小松ひろ子著
 「聲樂教科書」 澤田孝一著
 「唱歌基本練習教科書」 大和田愛羅編
 「第一歌曲集」 露風卷 山田耕作作曲
 「高等小學唱歌教授細目」 青柳善伍著
 「律動遊戲」 第一卷 土川五郎著
 「サクラ、グリーンション洋琴連奏曲」 松島彝子作曲
 「水ぐるま」 最新樂譜二編 松島彝子作曲
 「新子守歌」 讀賣一等當選 清水都代三作歌、山田耕作作曲
 「夕のはま」 最新樂譜三編 松島彝子作曲、尾上作歌
 「小唄宵待草」 竹内夢二詩、多忠亮作曲（セノオ一〇六）

「カード樂譜」三四號迄出版

「歌劇名曲集」五 セギラの理髮師の歌 小林愛雄譯

主なる創作歌曲、

「越天樂變奏曲」 信時潔作曲 音樂第八卷

笠置の山を出でしよりの曲と殆ど等しい日本古調の越天樂の二十二の變奏曲である。

「奈良女子高等師範學校々歌」 東京音樂學校作曲 音樂第八卷

同校歌は 皇后陛下よりの御下賜になつたもので同年六月作曲なりたるものである。

「秋景」 三浦圭三作歌、草川信作曲 音樂八卷三號

「メヌエツト」 成田爲三作曲 音樂八卷二號

「アンダンテ」 近衛秀麿作曲 音樂八卷七號

「草の實の飛ぶ日は悲し」 川路柳虹歌、藤井清水曲 音樂八卷九號

△セノオ樂譜のやうな一歌曲一冊のものは邦人創作のものに限つて採録した。又、邦人創作のものでもカード樂譜のやうなものは省いた。それはあまりに繁雜であるが故である。

第五十四章 此の時代に於ける東京音樂學校

戰勝を喜ぶ國民の心理は軍國主義から平和主義の謳歌へと向つて行く。軍歌より歌謡曲へ、歌謡曲から歌劇曲へと

泰平的音樂の勃興して行く秋に際し、明治四十一年十月戊申詔書が煥發された。去華就實の大詔に、國民は等しく明治大帝の聖徳に感激した。而して國民の總てが形式より離れて内容の充實に向つた。秋のシーズンには演奏會は著しい減少をみたが、然し音樂の本質的の伸張には何等の支障なく却つて堅實な進展をして行つたのである。

世論は絶対に西洋音樂を其儘に普及せしめよと言ふ人もあれば又日本音樂を其儘に併行して普及せしめよと言ふ人もあり、出來得る丈新しい西歐曲をのみ輸入せよと唱ふ人もあれば、在來の日本古曲を保護的に發達せしめよと唱ふ人もあつた。

根本的に歐米樂を尊重せよと呼ぶ人もあれば又絶対に日本音樂を改善して奨勵せしむべしと呼ぶ人もある。此の間に立ちて同校は一方西洋樂の教育に於いては嚴然たる獨逸式の方針をとり、又一方日本在來樂の調査に於ては保存及發達改善の方策を採り、以て輸入的混淆期に處すべき所謂まちがひのない圓滿主義を採つてゐたのである。

日露の開戦と同時に就任した、女子高等師範學校長高嶺秀夫は明治四十年六月に至つて東京音樂學校長の兼任を免ぜられ同日北海道廳事務官湯原元一は其後任として任ぜられた。

明治四十年九月には文學士乙骨三郎が教授に、十月にシャロツテ、フレツク、十二月にはハイインリツヒ・ウエルク・マイステルが音樂教師として就職した。

獨逸歌謡曲が學校に謡はれたのも此年で、近藤逸五郎編纂の「獨唱名曲集」の出版に伴つて全國的に流行を見た。

同校卒業式は從來本科生と師範科生と別々に行はれてゐたのであるが、此年からは三月に於て同時に舉行するに至つた。

明治四十年三月二十三日午後二時卒業演奏プログラム

一合唱

甲、稜威羅乎

乙、霜の且

一ハーモニウム合奏

フォルスピール

一獨唱

リナルド

一ピアノ獨奏

ソナタ

一ヴァイオリン獨奏

コンセルト

一ハーモニウム獨奏

ファンタジー

一獨唱

オチソイス

一ピアノ獨奏

カブリシヲ、ブリランテ

パレストリナ作曲、鳥居忱作歌

ボヘミア民歌、旗野十一郎作歌

甲師卒 中田章、原田彦四郎

リヒテル作曲

聲 卒 井村はるよ

ヘンデル作曲

器 卒 田中ろく

ウエーベル作曲

器 卒 多 久 寅

ベリオ作曲

甲師卒 中島かつ

キストレル作曲

聲 卒 竹内イマコ

マックス、ブルッフ作曲

器 卒 上原喜勢

メンデルゾーン作曲

一獨唱

シヨフング

一合唱

甲、雲雀

乙、菊の盃

明治四十一年四月、新作唱歌で有名な文學士の吉丸一昌が教授に就任、七月シャロツテ、フレツク解唄、同年三月二十八日卒業演奏會

一舞 千島の曲

一合唱 鞠場の黙契

一オルガン獨奏

ソナチネ(第一章)

一ピアノ獨奏

ワルツ

一獨唱

菩提樹

一ヴァイオリン、ピアノ合奏

ソナタ

聲 卒 鹽 濱 ちか

ハイドン作曲

フレミツシユ古歌、小野竹三作曲

ペートーヴェン作曲、武島又次郎作曲

選 卒 藤岡美代、北村三岐、小池也壽

ホミリウス作曲、鳥居忱作曲

甲師卒 上野外喜尾

ラインハルト作曲

器 卒 杉 中 薫

シ・パン作曲

聲 卒 山田耕作

シューベルト作曲

器 卒 山井基清

ペートーヴェン作曲

一オルガン獨奏

クライネ、プレリュヂウム及フーゲ

一絃樂四部合奏

ヴァリエーション

一オルガン獨奏

カンツォネッタ

一ピアノ獨奏

ヴァリエーション

一合唱 聖の御世

教師 ヘルマン、ハイドリッヒ

甲師卒 大西 正直

バツ ハ作曲

器卒 山井基清、澤邊眞、大塚淳

聲卒 山田 耕 作

ハイドン作曲

甲師卒 松井 あい

ギルマン作曲

器卒 本居 長世

ヘンセルト作曲

グルツク作曲、鳥居忱作歌

同四十一年五月には同校唱歌編纂係に於て「中等唱歌」を出版した。同月には同校生五十餘名の演奏旅行を企てた。地方音楽の開拓のもとに計劃したものである。

十二月十六日海軍々樂隊員田中豊明以下十三名を絃樂研究の爲、同校に通學を許し、専科軍樂練習生の制度を設けた。之が海軍々樂隊の管絃樂の基礎となつたのである。

同校學生より成るオペラ研究會はオルフォイスを演出する企劃ある事は久しき以前よりの好樂者達の注意を拂はれ期待されて居たのであるが、五月十四日突然之が中止延期の事となつた。其理由とする處は風教上弊害を認むるとの

下に文部省の干渉を受けたものであると。

同月、同校選科生の志望者が非常に多く收容しきれず、爲に整理して男子のみの入學を許可した。當時ピアノ科五十名、ヴァイオリン科二十七名、オルガン科二十六名、箏科四十名、唱歌科に三名の先願者があつたのであるが、之が翌年に至つて女子の入學も許可し、女子は午後一時より五時迄男子は従前通り五時半より七時半迄教授することになつたのである。

明治四十二年四月、職員の定員が改正せられ、各一名増員となる。(教授十四人、助教授十四人)

同月、規則改正せらるる要點を擧ぐれば、

- 一、本科三學年制を廢し五ヶ年以内の在學を許す事、蓋し音樂の如き藝術の學校に於て劃一の教育を施すは生徒の個性に割切なる教授をなす能はざるものあるを以てなり
- 二、本科及研究科の學科目を主科、副科及兼科の三種に別ち其間に輕重の等差を設くる事
- 三、從來の經驗に依り樂歌部を廢止す
- 四、研究科作曲部在學年數を特に三ヶ年とし作曲家の養成に一層盡力する事
- 五、豫科の修業年限を三ヶ年に延長したる事
- 六、四ヶ年修業の高等女學校卒業生を入學せしむる便宜上入學年齡滿十七歲以上を滿十六歲以上と改正
- 七、選科の入學年齡を滿十二歲以上とし其在學年數に制限を加ふ
- 八、舊卒業生に復習補習の便宜を與ふる爲め聽講科を置く
- 九、學資補助の途を開く

東京音樂學校規則

第一章 總 則

第一條 本校ハ汎ク音樂ノ教授及攻究ヲナシ兼ネテ音樂教員ヲ養成スル處トシ

第二章 學 科

第二條 本校ノ學科ハ本科及師範科甲種乙種トス

前項ノ外豫科研究科選科及聽講科ヲ置ク

第三章 修業年限

第三條 本科ノ修業年限ハ三箇年以上五箇年以内師範科ノ修業年限ハ甲種師範科ニ在リテハ三箇年、乙種師範科ニ在リテハ一箇年トス

豫科ノ修業年限ハ一箇年以上二箇年以内トシ研究科ノ修業年限ハ作曲部ニ在リテハ三箇年以内其他ノ部ニ在リテハ二箇年以内選科ノ修業年限ハ一學科目ニ付キ滿五箇年以内トス

第四章 學科目及其課程

第四條 修身ノ外凡ヘテノ學科目ハ本科研究科ニ於テ之ヲ主科副科及兼科ニ別ツ

第五條 豫科ノ學科目ハ修身、唱歌、器樂（ピアノ、オルガン又ハヴァイオリン）音樂通論、國語、外國語（英語又ハ獨逸

語）體操トス

第六條 本科ハ別チテ聲樂部、器樂部トス其ノ學科目左ノ如シ
聲樂部ニ在テハ修身、唱歌（獨唱、合唱）ピアノ、音樂通論、和聲論、樂式初步、音樂史、國語、外國語（英語又ハ獨逸語）體操トス

器樂部ニ在リテハ修身、器樂（ピアノ、オルガン、ヴァイオリン、グイオラ、グイオロンセロ、コントラバス、フリユート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、ホルン、トロンボン又ハトロンロンベツト）合唱、音樂通論、器樂合奏（室樂及管絃樂）和聲論、樂式初步、音樂史、國語、外國語（英語又ハ獨逸語）體操トス

第七條 聲樂部ニ在リテハ唱歌ヲ主科トシ、ピアノ、音樂通論、和聲論、樂式初步及音樂史ヲ副科トシ其ノ他ノ學科目ヲ兼科トス器樂部ニ在リテハ專修ノ器樂ヲ主科トシ合唱、器樂合奏、音樂通論、和聲論、樂式初步及音樂史ヲ副科トシ其他ノ學科目ヲ兼科トス

第八條 豫科及本科ノ各學科目ノ每學年配當並其ノ每週教授時間左ノ如シ

學年	學科目	聲樂部教授時數			器樂部教授時數			豫科教授時數
		第一	第二	第三	第一	第二	第三	
修身	一	一	一	一	一	一	一	一
唱歌	八	八	八	八	同上	同上	八	八
器樂	二	二	二	三	三	三	三	同上
音樂通論	一			一			一	一
器樂合奏				四	四	四		一
和聲論			二		二	二		
樂式初步			二			二		
音樂史	二	二	二	二	二			
國語	三	三	三	三	三	三	三	三
外國語	三	三	三	三	三	三	三	三
體操	三	二	二	二	二	二	二	二
計	三	三	三	二	二	二	三	三
練習	時若干	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上

第九條 本科所定ノ學科目中其ノ配當年度内ニ修了セザリシモノニ就キテハ次年以後ニ於テ之ヲ修了セシム

第十條 本科ノ國語及外國語(同前)ハ本校所定ノ程度以上ノ學力アリト認メタル生徒若ハ修了ノ見込ナシト認メタル生徒ニハ其ノ全部又ハ一部ヲ課セサルコトヲ得

第十一條 豫科ノ器樂ハ第一學年ニ於テハ「ピアノ」ヲ課シ第二學年ニ至リ生徒將來ノ志望ニ依リ「ピアノ」「オルガン」又ハ「ヴァイオリン」ヲ課ス

第十二條 第六條ノ學科目ノ外隨意學科目トシテ美學、音樂論、教育學及音樂教授法ヲ授ク

第十三條 研究科ヲ別チテ聲樂部器樂部及作曲部トス其ノ學科目左ノ如シ

聲樂部ニ在リテハ唱歌(獨唱、合唱)ピアノ、外國語(英語獨逸語又ハ伊太利語)内外文學、美學トス

器樂部ニ在リテハ器樂(ピアノ、オルガン、ヴァイオリン、ヴィオラ、ヴァイオリンセロ、コントラバス、フリユイト、オーボエ、クラリネット、ファゴット、ホルン、トロンボン、

又ハトロンベツト)器樂合奏(室樂及管絃樂)外國語(英語又ハ獨逸語)美學、音樂論トス

作曲部ニ在リテハ音樂理論、ピアノ又ハ合唱、外國語(英語又ハ獨逸語)内外文學、美學、音樂論トス

第十四條 研究科ノ聲樂部ニ在リテハ唱歌(同前)ヲ主科トシ

「ピアノ」ヲ副科トシ其ノ他ヲ兼科トス、器樂部ニ在リテハ器樂ヲ主科トシ器樂合奏(室樂及管絃樂)ヲ副科トシ其ノ他ヲ兼科トス、作曲部ニ在リテハ音響理論ヲ主科トシ「ピアノ」又ハ合唱ヲ副科トシ其ノ他ヲ兼科トス

第十五條 研究科ノ各學科目ノ每學年配當並其ノ每週教授時數ハ其ノ都度之ヲ定ム

第十六條 研究科ノ各部ノ兼科ハ學校長ノ意見ニ依リ之ヲ課セサルコトヲ得

第十七條 第六條第十三條ノ規定ニ拘ハラズ當分ノ內學校長ニ於テ獎勵ヲ要スト認ムル器樂ノ一ヲ志望ノ生徒ヲシテ併修セシムルコトヲ得又本科及研究科ノ器樂部ニ在リテハ生徒ノ志望ニ依リ専修器樂ノ外他ノ器樂ノ一ヲ併修セシムルコトヲ得前項ノ併修器樂ハ之ヲ副科中ノ一學科目ト視做ス

第十八條 師範科ヲ別チテ甲種師範科及乙種師範科トス其學科目左ノ如シ

甲種師範科ニ在リテハ修身、唱歌、器樂(オルガン、ピアノ又ハヴァイオリン)音樂通論、和聲論、音樂史、教育學及音樂教授法、國語、英語、體操及遊戲トス

但器樂中オルガン、ピアノ及ヴァイオリンニ付キテハ其ノ中ノ一ヲ選修セシメ其ノ他ノ一ヲ隨意科目トス、國語及英

語ニ付キテモ亦同シ

前項ノ外隨意科目トシテ、美學及音響論ヲ授ク乙種師範科ニ在リテハ修身、唱歌、オルガン、音樂通論、唱歌教授法、國語、體操及遊戲トス

第十九條 甲種及乙種師範科ノ各學科目ノ每學年配當並每週教授時左ノ如シ

科名	甲種師範科			乙種師範科
	第一年 教授時數	第二年 教授時數	第三年 教授時數	第一年 教授時數
修身	一	一	一	一
唱歌	八	八	八	一〇
音樂通論	三	二	二	三
和聲論	二	一	二	二
音樂史	二	二	二	二
教育學	二	二	二	二
音樂教授法			一	第三學期一
國語	三乃至六	同上	同上	同上
英語	三乃至六	同上	同上	同上

體操及遊戲	二	二	二	二
計	三二	三二	二八	二五
練習	若干時	同上	同上	同上

第二十条條 選科ノ學科目ハ本科ノ主科ニ屬スルモノ及第ニ限ル

但シ同時ニ三學科目以上ヲ併修スルコトヲ許サス

第二十一条條 聽講科ノ學科目ハ本科研究科ノ主科及副科並音楽

教授法トス

第二十二條 漢科ノ每週教授時數ハ一學科目ニ付三時間以下ト

ス

第二十三條 本校規定ノ學科目ノ外音楽ニ關係アル學術技藝ニ

付キ課外教授ヲ爲ス其種類及時數ハ每學年ノ始ニ於テ校長之

ヲ定ム

第五章 學年、學期、休業

第二十四條 學年ハ四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

第二十五條 學年ヲ分チテ三學期トス第一學期ハ四月一日ヨリ

九月十日ニ至リ第二學期ハ九月十一日ヨリ翌年一月七日ニ至

リ第三學期ハ一月八日ヨリ三月三十一日ニ至ル

第二十六條 春期休業ハ四月一日ヨリ同月十日ニ至リ夏期休業

ハ七月十一日ヨリ九月十日ニ至リ冬期休業ハ十二月二十五日ヨリ翌年一月七日ニ至ル

第二十七條 祝日、大祭日、日曜日及本校設立記念日(十月四日)ハ休業トス

第六章 入學、休業、退學

第二十八條 入學ノ期ハ毎年一回ニシテ學年ノ始メトス

但シ臨時入學ヲ許スコトアルヘシ

第二十九條 本校ニ入學セントスル者ハ第一號及第二號書式ニ

據リ入學願書ニ履歷書及戶籍簿本ヲ添ヘ差出スヘシ

但シ漢科ニ入學セントスル者ハ戶籍簿本ヲ要セス

第三十條 漢科ニ入學ヲ許スヘキ者ハ品行善良ニシテ左ノ掲ク

ル學科目ノ試験ニ合格シタル者タルヘシ

但シ中學校第二年級ヲ修了シタル者若ハ之ト同等以上ノ學

力アリト認ムル者ハ第一乃至第五、高等女學校第二年級ヲ

修了シタル者若ハ之ト同等以上ノ學力アリト認ムル者ハ第

一乃至第四ノ試験ヲ要セス

入學試験學科目

一 國語 中學校高等女學校第二年修了ノ程度

二 日本歴史 同 右

三 日本地理 同 右

四算術 同右

五英語 同右

六普通樂譜 大要

七唱歌 文部省發行小學唱歌集ノ程度

但シ必要ノ場合ニハ器樂ニ就キ併セテ試験ヲ行フ

第三十一條 本科ニ入學ヲ許可スヘキ者ハ豫科卒業ノ者若クハ

試験ニヨリ之ト同等以上ノ學力ヲ有スト認メタル者トス

但シ他ノ學校ニ於テ修メタル學科目ニシテ本校ニ於テ修ム

ルモノト同等以上ト認ムルトキハ其ノ科目ニ限リ試験ヲ須

キサルコトアルヘシ

第三十二條 研究科ニ入學ヲ許可スヘキ者ハ本科卒業生中學藝

優等ニシテ尙將來進歩ノ見込アル者ニ限ル

但シ本科卒業生ニアラサルモ試験ニ依リ之ト同等以上ノ資

格アリト認ムル者ニハ研究科ニ屬スル學科目ノ學習ヲ許可ス

ルコトアルヘシ

第三十三條 甲種師範科ニ入學ヲ許可スヘキ者ハ品行善良年齡

滿十次以上ニシテ師範學校中學校若ハ修業年限四箇年以上ノ

高等女學校本科ヲ卒業シ當該學校長ノ薦舉ヲ受ケタル者ニ就

キ左ノ入學試験學科目第一及第二ノ試験ヲ行ヒテ之ヲ定ム

但シ前記ノ資格ヲ有セサル者ハ入學試験學科目第一乃至第

七ノ試験ヲ行ヒテ入學ヲ許可スルコトアルヘシ

入學試験學科目

一唱 歌

二普通樂譜 大要

三國 語

四數 學

五理 科

六地 理

七歷 史

但シ右試験ノ程度ハ師範學校中學校又ハ修業年四箇年ノ高

等女學校本科卒業ノ程度ニ於テ之ヲ定ム

第三十四條 乙種師範科ニ入ルヲ得ヘキ者ハ品行善良ニシテ高

等小學校ヲ卒業シ左ノ入學試験學科目第一ノ試験ニ合格シタ

ル者又ハ第一乃至第五ノ學科目ニ就キ試験ノ上之ト同等以上

ノ學力ヲ有スル者タルヘシ

入學試験學科目

一唱 歌

二國 語

三日本歴史

四地 理

五 算 審

第三十五條 漢科ニ入學ヲ許可スヘキ者ハ所選ノ學目ヲ學習スルニ堪フト認ムル者タルヘシ

但シ必要ノ場合ニハ音楽上ノ能力ヲ試験シテ其可否ヲ決スルコトアルヘシ

第三十六條 聽講科ニ入學ヲ許可スヘキ者ハ相當音楽上ノ素養アリト認ムル者タルヘシ

第三十七條 本校ニ入學試験ヲ受ケントスル者ニハ體格検査(明治三十三年文部省令第四號學生生徒身體検査規定ニ依ル)ヲ行ヒ其ノ許否ヲ決ス又師範科ノ入學者ニ就キテハ口頭試問ヲ行ヒテ其ノ教員タルノ適否ヲ定ムルコトアルヘシ

但シ選科及聽講科入學者ハ既ノ限ニアラス

第三十八條 甲種師範科ノ入學試験ニ合格シタル者ハ三箇月以内假入學ヲ許シ資性品行及學業成績ヲ考察シ適當ト認ムル者ニ限り本入學ヲ許可スルモノトス

第三十九條 生徒疾病其他正當ノ事由アリテ二箇月以上修學スルコト能ハサルトキハ豫メ期間ヲ定メテ休業スルコトヲ得
第四十條 生徒疾病其他ノ事故ニ因リ缺課シタルトキハ其ノ事由ヲ記シ保證人ヨリ三日間以内ニ届出ツヘク疾病七日以上ニ及フトキハ診斷書ヲ添付スヘシ

第四十一條 生徒疾病ニ罹リ又ハ止ムヲ得サル事故アリテ修學スルコト能ハサル者退學セントスルトキハ其ノ事由ヲ詳記シ保證人連署ニテ願出ツヘシ

第四十二條 左ノ各條ノ一ニ該當スルモノハ之ヲ除名ス

一 正當ノ事由ナクシテ引續キ一箇月以上缺席シ又ハ同期間出席僅ニ數回ニ止マル者

二 屢遲刻缺席常ナラサル者

三 學力劣等ニシテ成業ノ見込ナキ者

四 授業料ノ怠納三十日以上ニ及フ者

前項ニ指定シタル場合ノ外除名ニ關シテ臨機ノ處分ヲナスコトアルヘシ

第七章 誓約及保證人

第四十三條 入學ノ許可ヲ得タル者ハ第三號若クハ第四號書式ノ誓約書ヲ差出シ且宣誓ヲ爲スヘシ

但シ選科及聽講科ニ入學スル者ハ宣誓ヲ要セス

第四十四條 保證人ハ二人トス一人ハ父母後見人又ハ親戚ニシテ他ノ一人ハ東京市内若ハ其ノ附近ニ住居シ年齢資産共ニ保證人ノ責ニ堪フル者タルヘシ

但シ保證人タル父母、後見人又ハ親戚ニシテ他ノ一人ノ保證人タルヘキ者ト同一ノ資格ヲ有スルトキハ他ノ一人ノ保

證ヲ要セス

第四十五條 保證人ハ其保證スル生徒ノ本校ニ對スル一切ノ債務ヲ保證シ且該生徒ノ操行修學ヲ監督スルモノトス
第四十六條 保證人死亡シ又ハ保證ノ責ニ堪ヘサル事由發生シタルトキハ更ニ保證人ヲ定メ誓約書ヲ改メ差出スヘシ

第一號書式 (用紙美濃)

入學願

私儀御校某科(某部第何年級)ニ入學志願ニ付試験ノ上(無試験ニテ)御許可被成下度別紙履歷書相添へ此段相願候也

本籍地何々
現住所何々

族籍、何某男女兄弟姉妹又ハ戸主

年月日

本人何 某◎
何年何月何日生

東京音樂學校長何某殿

第二號書式 (用紙美濃)

履歷書

族籍

何 某
何年何月何日生

出生地何々

父兄職業何々

何年何月何日何學校ニ入り何年何月何日卒業

(卒業證書寫別紙ノ通)

何年何月何日何某ニ就キ何々修業何年何月何日何々ノ事由

ニ因リ退學又ハ廢學

何年何月何日何業ニ從事

賞罰何々
右ノ通りニ有之候也

年月日

右 何 某◎

第三號書式 (用紙美濃)

三錢 印紙 誓約書

私儀今般御校ニ入學御許可相成候ニ付テハ御規則堅ク相守リ專心勉學可仕此段誓約候也

本籍地何々

現住所何々

族籍何某男女兄弟姉妹又ハ戸主

年月日

本人何 某◎
何年何月何日生

前書何某入學ノ御許可ヲ得候ニ付テハ御校御規定ノ保證人ノ責任ハ拙者(又ハ拙者共)ニ於テ引受け候尙本人ヲシテ前

記ノ誓約ヲ嚴守セシメ可申因リテ此段保證候也

本籍地何々

現住所何々

何某父母後見人
又ハ親族關係

職業
保證人

何 某◎
何年何月何日生

本籍地何々
現住所東京市
(又ハ府)何々

職業
保證人

何 某◎
何年何月何日生

東京音樂學校長何某殿

第四號書式 (用紙美濃)

參錢
印紙

誓約書

私儀今般御校甲種師範科ニ入學御許可相成候ニ付テハ御規則堅ク相守リ專心勉學可仕又卒業ノ後ハ明治四十三年文部省令第三號東京音樂學校甲種師範科卒業生服務規則ヲ遵奉可致此段誓約候也

本籍地何々

現住所何々

族籍何某男女兄弟姉妹又ハ戸主

年月日

本人

何 某◎
何年何月何日生

前書何某入學ノ御許可ヲ得候ニ付テハ御校御規定ノ保證人ノ責任ハ拙者(又ハ拙者共)ニ於テ引受候尙本人ヲシテ前記ノ誓約ヲ嚴守セシメ可申因リテ此段保證候也

本籍地何々

現住所何々

何某父母後見人
又ハ親族關係

職業
保證人

何 某◎
何年何月何日生

本籍地何々
現住所東京市
(又ハ府)何々

職業
保證人

何 某◎
何年何月何日生

東京音樂學校長何某殿

前書保證人何某ハ本市(區)ニ居住ノ者ニ相違無之候也

年月日 何(道縣)何郡(市區)町村)長 何 某◎

前書保證人何某ハ本區(町村)ニ住居シ公民権ヲ有スル者ニ相違無之候也

年月日 東京市(府)何區(何郡何村)長

何 某◎

備考 一名ノ保證人ハ父母後見人又ハ親族ナキトキハ相當ノ資格アル者ヲ以テ之ヲ代フルコトヲ得

第八章 試業並進級修了及卒業

第四十七條 試業ハ每年年末ニ之ヲ行フ

但シ學年ノ半途ニ完了スル學科目ハ其當時試業ヲ行フ

選科及研究科ノ試業ハ學科目修了ノ際之ヲ行フ

第四十八條 本科卒業試業ハ在學三學年以上研究科及選科修了

試業ハ在學二年以上ノ者ニアラサレハ之ヲ行ハサルヲ以テ常

例トス

第四十九條 試業ノ成績ハ點數ヲ以テ之ヲ評定ス本科及研究科

ノ主科ハ三百、副科ハ二百餘科ハ一百ヲ以テ滿點トシ兼科ノ

唱歌及樂器ハ二百餘科ノ唱歌ハ二百其ノ他ノ學科目ハ各一

百ヲ以テ滿點トシ選科ノ各學科目ハ各一百ヲ以テ滿點トス

第五十條 試驗ノ成績ハ本科及研究科ノ主科ニ於テハ八十點

以上副科ニ於テハ百點以上兼科ニ於テハ四十點以上ヲ以テ合

格トシ兼科ノ唱歌及樂器ニ於テハ八十點以上副餘科ノ唱歌

ニ於テハ百二十點以上其ノ他ノ學科目ニ於テハ四十點以上ヲ

以テ合格トス

第五十一條 音樂技術ニ關スル試業ハ特ニ命シタル教官列席ノ

上之ヲ行ヒ擔任教員ト合議シ其ノ評點ヲ決定ス

但シ本科卒業及研究科修了ノ場合ニハ特ニ試驗委員ヲ設ケ

テ試業セシムルモノトス

第五十二條 修了又ハ卒業試業ニ合格シタル者ニハ修了證書又

ハ卒業證書ヲ授與ス

第五十三條 第十條後段第十六條ニ依リ兼科ヲ缺キ主科副科ノ

ミヲ修了シタル者ニハ其ノ科目ノ修了證書ヲ授與ス

聽講生及半途退學者ニハ本人ノ願ニ依リ在學ノ證明ヲ爲ス

コトアルヘシ

第五十四條 試業ニ缺席シ追試業ヲ受ケントスル者アルトキハ

缺席ノ事由己ムヲ得サルモノト認ムル場合ニ限り之ヲ行フ

第九章 受験料、入學料及授業料

第五十五條 新ニ本校ニ入學セントスル者ハ研究科及聽講科ヲ

除クノ外兼科本科及副餘科ニ在リテハ受験料トシテ入學願書

ニ金二圓ヲ添ヘ納付スヘシ又選科ニ在リテハ入學料トシテ入

學許可ノ當日金壹圓ヲ納付スヘシ

既納ノ受験料ハ入學セサル場合ニモ之ヲ返付セス

第五十六條 授業料ノ年額左ノ如シ

一 本科 金貳拾五圓

一 兼科 金貳拾圓

一 選科 金拾五圓

第五十七條 選科ニ在リテ二學科目以上ヲ修ムル場合ニハ一學

科目ノ授業料ヲ全額トシ他學科目ニ付キテハ每學科目金五圓

ヲ減額ス

第五十八條 聽講科ノ授業料ハ一學科目ニ付年額金拾圓以上貳拾圓以内ノ範圍ニ於テ學校長之ヲ定ム

第五十九條 師範科及研究科生徒ヨリハ授業料ヲ徵收セス

第六十條 特待生ニハ共特待生タル間又許可ヲ得テ休學スル者

ニハ次期以後休學中授業料ヲ免除ス

第六十一條 他官廳ノ委託學生ニハ文部大臣ノ許可ヲ得テ特ニ

其ノ授業料ヲ免除スル事アルヘシ

第六十二條 授業料ハ左ノ三期ニ區分シ第一期ハ四月ヨリ六月

迄第二期ハ九月ヨリ十二月迄第三期ハ一月ヨリ三月迄トシ其

納付期日ハ其ノ期ノ初月二十日ヨリ二十八日迄トス

第一期分 年額ノ十分ノ三

第二期分 同 十分ノ四

第三期分 同 十分ノ三

既納ノ授業料ハ本人退學ノ場合ト雖モ之ヲ返付セス

第六十三條 授業料納付期日後入學シ又ハ漢科ノ學科目ヲ増加

シタル者ハ其月ヨリ起算シ月割ヲ以テ其ノ期ノ納額又ハ増加

額ヲ即日納付セシム

第十章 學費及獎學金

第六十四條 本科及研究科生徒中特ニ品行善良學藝優秀ニシテ

學費ノ支辨ニ困難ナル者ニハ其ノ學費ヲ補助スルコトアルヘシ

シ

第六十五條 研究科ノ生徒ニハ研究ニ要スル實費ノ全部又ハ幾

分ヲ支給シ又ハ毎月一定ノ學費ヲ支給スルコトアルヘシ

第六十六條 本科及研究科生徒ニシテ本校ニ於テ獎勵ヲ要スト

認ムル學科目ヲ修ムル者ニハ毎月一定ノ學費ヲ支給スルコト

アルヘシ

前項ニ依リ學費ノ支給ヲ受ケタル本科生徒ハ卒業ノ後研究科

ニ入ルヲ要ス

第六十七條 前三條ニ依リ支給スル實費及學費ノ金額並之ヲ支

給スヘキ生徒ハ學校長之ヲ定ム

第六十八條 甲種師範科官費生ニハ學費トシテ月額金五圓乃至

八圓ヲ支給ス

第六十九條 前各條ノ學費一箇月未滿ノトキハ日割ヲ以テ支給

シ卒業修了死亡ノ月ハ全額ヲ支給シ退學ノ月ハ全部支給セス

第七十條 左ノ各項ノ一ニ該當スル場合ニハ學費ノ支給ヲ停止

ス

一 私ノ事故ニ因リ二週間以上引續キ缺課シタルトキハ其翌

日ヨリ缺課繼續中

一 疾病傷痍又ハ己ムヲ得サル事故ニ因リ六十日以上缺課シ

タルトキハ其ノ翌日ヨリ缺課繼續中

一 休學又ハ停學處分中

第七十一條 學費ノ支給ヲ受クル者ニシテ中途退學スル者又ハ

退學ヲ命セラレタル者ニハ既ニ受ケタル學費ヲ償還セシム

但シ疾病傷痍又ハ酌量スヘキ事情アルトキハ償還スベキ學

費ノ全部又ハ幾部ヲ免除スルコトアルヘシ

第七十二條 獎學金ハ寄附者ノ指定ニ依リ又其ノ指定ナキモノ

ハ學校長ノ意見ニ依リ支給又ハ貸付ス

第七十三條 前條ニ依リ貸付スル獎學金ハ卒業後滿一ケ年ヲ經

過シタル月ヨリ貸付ノ月數ニ相當スル期間内ニ於テ月賦返納

セシム

但シ期限ニ先チ一時ニ全額又ハ幾分ヲ返納スルコトヲ得

第七十四條 寄附者ノ指定ナキ獎學金ノ支給又ハ貸付ヲ受クル

者ニハ第六十九條乃至第七十一條ヲ準用ス

第七十五條 本科及研究科ノ生徒ニシテ學費ノ支給又ハ貸付ヲ

受クント欲スル者ハ第四號書式ニ準シ誓約書ヲ差出スヘシ

第十一章 特待生及生徒心得

第七十六條 本科生徒ニシテ學藝優等品行善良ナル者ヲ以テ特

待生トナス

第七十七條 特待生ハ每學年ノ始ニ於テ學校長之ヲ定ム

第七十八條 本校ノ生徒ハ本校ノ公開ノ音樂演奏會及音樂演習

會ニ出席演奏スルノ義務ヲ有ス

第七十九條 本校ノ生徒ハ研究科生徒ヲ除キ學校長ノ許可ヲ得

ルニアラサレハ私ニ教授ヲナシ又ハ本校以外ノ公開ノ演奏會

ニ出席演奏スルコトヲ得ス

第八十條 生徒心得ニ關スル細則ハ學校長別ニ之ヲ定ム

第十二章 懲戒

第八十一條 學校長ハ非違ノ行爲アル生徒ヲ懲戒スルコトヲ得

第八十二條 懲戒ヲ分チテ譴責停學及放校ノ三種トス

第十三章 音樂演奏會及音樂演習會

第八十三條 本校ハ時々音樂演奏會及音樂演習會ヲ開ク

第八十四條 音樂演奏會ハ公開シ音樂演習會ハ公開セサルヲ以

テ常例トス

第八十五條 音樂演奏會及音樂演習會ニ關スル細則ハ學校長之

ヲ定ム

附 則

第八十六條 本規則ハ明治四十二年四月一日ヨリ施行ス

入學志願者心得要項

一、出願期日

入學志望ノ者ハ大正二年三月一日ヨリ十日迄ノ間ニ到達スベ

キ日取ヲ以テ願書ヲ差出スベシ

二、受験者資格

種科ニ入學セントスル者ハ品行方正身體健全ニシテ左ノ學力ヲ有シ技術者タルニ適當ノ者タルベシ

中學校又ハ高等女學校第二學年ヲ修了シタル者若ハ之ト同等以上ノ學力アル者、但シ中學校高等女學校第二學年在學中ノ者ニシテ當該學校長ニ於テ本校入學期以前ニ修了スベシト認メタル者ハ修了者ニ準ズ

甲種師範科ニ入學セントスル者ハ品行方正身體健全年齡滿十六年以上ニシテ左ノ學力ヲ有シ師範學校、中學校、高等女學校教員タルニ適當ノ者タルベシ

師範學校、中學校又ハ修業年限四箇年以上ノ高等女學校本科ヲ卒業シ當該學校長ノ薦舉ヲ受ケタル者若ハ之ト同等以上ノ學力アル者但シ師範學校、中學校、高等女學校在學中ノ者ニシテ當該學校長ニ於テ本校入學期以前ニ卒業スベシト認メタル者ハ卒業生ニ準ズ

乙種師範科ニ入學セントスル者ハ品行方正ニシテ左ノ學力ヲ有シ小學校教員タルニ適當ノ者タルベシ

高等小學校卒業ノ者若ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者

三、入學試驗科目

豫科

國語(中學校、高等女學校第二學年修了ノ程度) 日本歴史(同上) 日本地理(同上) 算術(同上) 英語(同上) 普通樂譜(大要) 唱歌(文部省發行小學唱歌集ノ程度) 但シ必要ト認ムル場合ニハ器樂ノ試驗ヲ行フ

中學校第二學年ヲ修了シタル者ハ唱歌及普通樂譜、高等女學校第二學年ヲ修了シタル者ハ唱歌普通樂譜及英語ノ外試驗ヲ要セズ

甲種師範科

唱歌、普通樂譜(大要) 國語、數學、理科、地理、歴史試驗ノ程度ハ師範學校、中學校又ハ修業年限四箇年ノ高等女學校本科卒業ノ程度ニ於テ之ヲ定ム

師範學校、中學校、高等女學校卒業者ニシテ當該學校長ノ薦舉ヲ受ケタル者及之ト同等以上ノ學力アル者ハ唱歌及普通樂譜(大要)ノ外試驗ヲ要セズ

乙種師範科

唱歌(文部省發行小學唱歌集初編ノ程度) 國語、日本歴史、地理、算術

高等小學校卒業者又ハ之ト同等以上ノ學力アル者ハ唱歌ノ外試驗ヲ要セズ

四、募集人員

費科 約三十人 甲種師範科(官費約二十人、私費約十人)

乙種師範科 約二十人

五、入學試験

入學試験ハ本校ニ於テ左記日割ノ通施行ス

一 費科 大正二年三月二十七日ヨリ

甲種師範科 同 三月二十八日ヨリ

乙種師範科 同 三月三十一日ヨリ

六、入學手續注意

(イ)入學願書ニハ履歴書戸籍謄本、最近ニ在學シタル學校長ノ證明セル學業成績並ニ品行證明書寫眞及受験料金二圓ヲ添付スベシ

(ロ)戸籍謄本ハ大正二年二月一日以後作製シタルモノ寫眞ハ手札形單獨半身脱帽同年一月一日以後撮影シタモノ

(ハ)受験料ハ現金又ハ郵便小爲替(拂渡局及請取人ノ指定ナキモノ)ヲ以テ納付スベシ

七、入學願書及履歴書書式 (省略)

(ニ)甲種師範科入學志望ノ者ニシテ師範學校中學校又ハ高等

女學校本科ヲ卒業シタル者若ハ在學中ノ者ハ當該學校長ノ

薦舉ヲ受クベシ其資格ナキ者ハ修業證明書ヲ提出スベシ

(ホ)費科及乙種師範科入學志望ノ者ニシテ師範學校中學校高

等女學校卒業ノ者ハ卒業證書寫在學中ノ者又ハ半途退學ノ

者ハ當該學校長ノ修業證明書ヲ提出スベシ

(ヘ)官公立學校在職者其他公職ニ在ル者ニシテ入學試験ヲ受

ケントスル者ハ入學願書ニ所轄廳ノ認可書ヲ添付スベシ

(ト)在學中平時ニアリテ兵役ニ服スベキ者及夫ヲ有スル者ハ

甲種師範科官費生タルコトヲ得ズ

(チ)入學志願者ハ試験前日迄ニ受験證ヲ請取ルベシ地方ヨリ

上京スル者ハ試験中滞在スベキ宿所ヲ定メ試験前日迄ニ届

出ヅベシ

受験者ニシテ居所ヲ變更シタル者ハ速ニ届出ヅベシ

七、入學願書及履歴書書式 (省略)

明治四十二年五月、寄宿舎規則を制定して本郷區西須賀町に女生徒の假寄宿舎を設置した。

同月、ルードルフ・エー・ロイテル招聘。(大正元年九月迄)

六月、佛國留學中の神戸絢子教授歸朝、同月、ヘルマン・ハイドリヒ解備(明治三十五年一月就職)、七月二十日、

同校選科修了證書授與式舉行、同月 幸田、武島兩教授退職となる。幸田退職教授は同月歐洲各地の漫遊の途に着いた、同月 ラファエル・フォン・ケーベル博士解僱。(明治三十五年五月就職)

十二月、ベッツオールド着任。(大正十三年三月迄)

ベッツオールド經歷

東京音樂學校の聲樂科にてはフレックが昨年七月歸國して以來ユンケルが兼任し來りしも専任教師を要する爲め先頃より誰彼と選定中の處目下清國天津に滞在中なるハンカ、ベッツホオールド Mrs. Hanka Petzold を招くことゝなつた。彼は明治四十一年五月某伯爵と共に突然上野音樂學校に來りて校長に面會を求め、翌日唯一人の音樂會を催してピアノ演奏會獨唱等を爲して非常に喝采を博したるが此事端無くも因縁となり同校教師に赴任したのである。彼は諸威クリスチアナ生れにて父は市長母は音樂に造詣深く彼は幼より音樂の教育を授けられ、子供の頃當時ヴァイオリン王と呼ばれしオールブルが、ベルゲン市にて催したる演奏會に出で、天晴れ後世可恐少女よと稱せられたる。其後巴里に出で樂界の名手と交遊して専念ピアノを研究し頗て現代の泰斗リストに就き最後の仕上げを爲さんとしてワイマルに赴きリストより其奥技を傳へられたるが之れに満足せず更に唱歌に熟達せんと欲し再び巴里に戻りてマティルデ、マルケージに師事し、後ドレスデンに行きオルヂーニに就いて學び、更にバイロイトに赴きてリストの娘にしてワグネルの後嗣なるコシマ、ワグネルに就いて唱歌を學び、後にコーペンハーゲンなるかの王立歌劇場に初舞臺を踏みてワグネルの傑作「タンホイゼル」中のエリザベート姫に扮して大に成功し一躍して全歐に其名聲を轟かしたるが其後諾、丁、獨、瑞、佛、英の諸國の音樂會に出席して樂界の流行兒となり、倫敦にて或る演奏會に臨し時の如き倫敦第一流の批評家より當代隨一の名手なるソフイー、メンデルと比較せられ、又ミュンヘンに行てはテレザ、カレ

ニオールに比せられた。彼は年齢五十に近く長大肥満の體軀見るからに快活善良なる性質を表してゐる。

明治四十二年三月二十五日木午後二時、東京音樂學校卒業演奏會 於奏樂堂

一、合唱

常盤

アルカデルト作、武島又次郎作歌

一、ピアノ獨奏

器 卒 香川 鈴

フムプロムプテユー

シューベルト作

一、オルガン獨奏

甲師卒 高橋 テツ

アレグロノントユロツボ

ギユルマン作曲

一、獨唱

聲 卒 大和田愛羅

アーリア (パウルス)

メンデルゾーン作

一、ヴァイオリン、ピアノ合奏

器 卒 川上 淳

ソナータ

萩原英一

一、ピアノ獨奏

器 卒 泉 千代

ロンドブリルアンデ

ウエーバー作

一、オルガン獨奏

器 卒 平尾 勇

バルテイタ

パツハ作

一、獨唱

聲 卒 安本 恒

アリア (オディソイス)

一、ピアノ獨奏

ソナータ

一、合唱

甲、あゝいづちゆく

乙、埀頭別離

以上

ブルフ作

器 卒 原 ミチ

フムメル作

ベートーヴェン作、乙骨三郎歌

スカンディニア民謡、旗野十一郎歌

明治四十三年、此年を一言で概評すれば頗る沈靜不振の姿であつたといふ。依然として年來混沌たる状態を持續して居たかの様に認められて居たが、これ等は主として表面の觀察で、元來人間の向上的善的本能は一刻たりとも靜止する事を許さないものであるから、沈靜不振の現象の底にも仔細に觀察するときは却つて實實の態度を以て着々歩を進め、やがて來る春の準備の致された事も亦争はれない事實である。

一月、月刊雜誌「音楽」を創刊した。これは學友會雜誌を擴張したもので、實に形式内容共に立派なものである。同校の教授と學生の力に俟つ處多く、發刊の基礎並學友會の制度改革には學生委員中山晋平、猪瀬久三、青柳善吾、小田島次郎等の勞不尠ものがあつた。

二月、本校敷地内に新築校舎の木造七十三坪を交付された。それは前年七月起工十月竣工のもので工費は僅に七千三百圓といふケチな建物であつた。木造二階建てで周圍は西洋下見板張のペンキ塗り内部は白塗壁のものである。

三月、職員の設定を改正せられ教授十三人、助教授十二人となる。

明治四十三年三月、規則の一部改正された。

三十五年文部省令第六號東京音樂學校甲種師範科卒業服務規則は本年三月十日同省令第三號により左の如く改正せらる。

第一條 東京音樂學校甲種師範科卒業生は卒業證書受得の日より左の期間引き續き教育に關する職務に従事するの義務を有す。

一、甲種の學資支給を受けたるものは 五ケ年

二、乙種の學資支給を受けたるものは 三ケ年

三、學資の支給を受けざるものは 二ケ年

第二條 東京音樂學校甲種師範科卒業生は卒業證書受得の日より左の期間文部大臣の指定に従ひ奉職するの義務を有す。

一、學資の支給を受けたるものは 二ケ年

二、學資の支給を受けざるものは 一ケ年

第三條 東京音樂學校甲種師範科卒業生にして特別の事情により第一條の義務を履行する能はざるものは其理由を具し東京音樂學校長又は地方長官を経て義務の猶豫又は免除を文部大臣に出願することを得

前項により出願したるものある時は東京音樂學校長又は地方長官に事實を審査し意見を具し願書を進達すべし。

第四條 東京音樂學校甲種師範科卒業生にして左の各號に該當するものありたる時は文部大臣の指揮により學資の支給を受けたるものにあつてはその在學中に於ける授業費及學資、學費の支給を受けざるものにおいては授業費を償

還せしむ。

但し情狀により其の全部又は一部を免除することあるべし。

一、第一條の義務を履行せざるもの、

二、服務年限中懲戒免職又は免許狀褫奪の處分を受けたるもの、

前項授業費の金額は文部大臣の認可を受け學校長之を定むべし。

第五條 東京音楽學校甲種師範科卒業者にして服務年限中研究科等に入學せんとするものある時は時宜により許可することあるべし。

第六條 東京音楽學校甲種師範科卒業者にして第三條により其の義務を猶豫せられたる時又は前例により研究科等に入學したる時は其の猶豫又は在學の期間は服務年限に算入せず。

附 則

本令は公布の日より施行す。

本令施行以前に入學したるもの、服務年限に關しては仍従前の例による。

▲甲種師範科生徒學費支給細則

第一條 甲種師範科官費生徒の學費は甲部支給及乙部支給の二種とす。

第二條 支給すべき學費金額左の如し。

甲部支給 一ヶ月 金八圓

乙部支給 一ヶ月 金五圓

第三條 學費を支給すべき人員は學校長之を定む。

第四條 學費は毎月末日之を支給す。但し休日ニ當る時は繰上ぐ。

附 則

第五條 本則は明治四十三年四月一日より實施す。

明治四十三年五月二十三日文部省令第十二號

甲種師範科の學科目中、器樂にピアノ、オルガンの二科目であつたのが、五月二十三日文部省令第十二號で「ヴァイオリン」をも加へられる事になつた。であるから、入學すると直ぐにヴァイオリンについてる人とピアノについてる人とある。従前の様にオルガンだけではない。

三月、小學唱歌集編纂上の參考として東京音楽學校は文部省を経て全國師範學校に依つて調査したる意見書。

質 問

一、歌唱法は凡そ第何學年迄繼續するを適當とするか。

結 果

凡そ二迄繼續 一五校

尋三迄 三六校

尋四迄 二六校

尋五迄 二校

尋六迄 一校

凡そ三より尋四迄 五校

二、略譜に依る教授は凡そ何學年より始め何學年に終る

を適當とするか。

三、本譜に依る教授は凡そ第何學年より始むるを適當とするか。

四、重音唱歌は凡そ第何學年より始むべきか又何重音まで課するを適當とするか。

尋三より尋五迄	三校
尋三より尋六迄	一四校
凡尋四より尋五迄	三校
尋四より尋六迄	二七校
尋四より高一迄	三校
尋四より高二迄	一校
凡尋五より尋六迄	一〇校
尋五より高一迄	四校
尋三より	一校
尋四より	四校
尋五より	一二校
尋六より	一一校
高一より	四四校
高二より	二校
凡尋四より(三重音迄)	一校
尋六より(三重音迄二重音迄各二)	四校
高一より(三重音迄一校他は二重音)二四校	

五、以上の外、略譜の廢止、又は存置に關し其他總て唱歌教授に關して意見あらば承知したし。

高二より(三重音迄六校他は二重音迄)四四校
存懐説 四七校

疑問 八校
全廢 二〇校

教科書編纂上の希望

- 一、教科書、生徒用と別かち教師用には唱奏上及び教授上の注意を付せられたし。(石川、新潟、福岡、千葉、高田)
- 一、教師用には平易なる伴奏譜を添へられたし。(新潟、千葉、奈良女高、青森、秋田、富山)
- 一、生徒用には略譜程度には略譜、本譜程度には本譜にて出版せられたし。(新潟)
- 一、教科書の初頁には發聲口形圖を掲げられたし。(神奈川)
- 一、各學年相當に系統的に基本教練の材料を加へられたし。(千葉、栃木、秋田、愛媛、島根、鳥取、靜岡、青森、岡山)

- 一、本譜の下に略譜の記入は避けられたし。(神奈川)
- 一、掛圖譜製作せられ度し。(青森、秋田)
- 一、初年級用には繪畫を添へられたし。(千葉、靜岡)
- 一、速度、發想記號を本邦名にて附せられたし。(沖繩)
- 一、樂典上の説明を挿入せられ度し。(栃木)
- 一、弱聲部起りの曲を避けられたし。(千葉)

- 一、階名唱法を一定すること。
- 一、階名唱法を和名にすること。(御影、池田)
- 一、略譜階名唱法も原語にすること。(東京高師女、青森、福島、其他數校)
- 一、階名唱法は洋名和名共各缺點なり新たに制定すること。(岐阜)
- 一、俗樂にまぎらはしき短旋法は避けられ度し。(秋田、岡山)
- 一、少量の俗樂調を加へられたし。(神奈川)
- 一、材料豊富なること。(高田)
- 一、材料を少量にして教科書以外に他より適宜選擇の餘地あること。(奈良高師女)
- 一、従來行はるゝものは材料多量に過ぐ故に自然練習不十分となる。(愛知第二)
- 一、國民的趣好に適するものを加ふること。(東京高師女、福島、千葉)
- 一、國家的精神を發揮するものを加ふること。(千葉)
- 一、兒童の士氣を鼓舞するもの、軍歌採用のこと。(徳島、茨城)
- 一、勞働、子守用のものを加ふること。(千葉)
- 一、原曲を加ふること。(鳥取)
- 一、遊戯用唱歌には其動作の説明を添へられたし。(千葉)
- 一、學藝會、學級會、集合、開會、閉會、教師送迎、朝禮等の唱歌を撰ばるゝこと。(千葉、島根)
- 一、歌章は四章迄のこと。(静岡、秋田)

一、德育的意味を存する歌詞は表面より道德を道德として説きしものより暗々裡に精神に深く孝の道を説くにも「父母には孝を盡くすべし」といふよりも父母の子を愛育する苦心の有様を寫し出したるものが餘韻あるかと存す。(茨城)

一、讀本に拘泥して歌ひ惡き唱歌は避けられたし。(千葉)

一、従來行はるゝ中にて高尚優美なるものは併用せられたし。(千葉、島根)

一、男女兩性に別ちて夫々適當なる材料を配當せられたし。(島根)

一、校歌として何れの學校にも適する小國民的歌曲を加へられ度し。(島根)

一、祝祭日唱歌を平易に改作し全國一定せられ度し。(福島、島根)

一、單音より重音に移る階段として輪唱を加へられたし。(山口、徳島、滋賀、其他數校)

一、他教科書と關係ある歌曲は其參照すべ書名番號頁數を添へられたし。(神奈川)

一、作歌曲者の名を附し尙各其意見を添へられたし。(廣島師)

明治四十三年三月廿五日、上野音樂學校卒業演奏會、於同校演奏堂

一、等 都の春

漢科卒業生 益戸長、外四名

二、合唱 オルフオイス中の第一

グルツク作曲

三、ピアノ獨奏

器樂部卒業生 石橋 テル

アンブロンブテュ

シユーベルト作曲

四、獨唱

聲樂部卒業生 船橋 榮 吉

タンホイゼル中のロマンス

五、オルガン獨奏

ソナータ

六、ピアノ獨奏

ソナータ中のフィナーレ

七、ヴァイオリン獨奏

コンチエルテイノ

八、ピアノ獨奏

カルナヴァアルミニオン

九、オルガン獨奏

バツサカリア

一〇、ヴァイオロンチエロ、獨奏

コンチエルト(第二章及三章)

一一、合唱 オルフオイス中の第三十四

四月、レコードコンサート第一回演奏會を催した。

六月、高野辰之教授と爲る。

本年より十月の授業成績を公表する爲に秋季に於ても演奏會を開催することになつた。所謂春秋二季の制度の初で

甲種師範科卒業生

ワグナー作曲

鈴木ミツ子
ギルマン作曲

器樂部卒業生

鈴木あい子

ベートーヴェン作曲

器樂部卒業生

蜂 谷 龍

シツト作曲

器樂部卒業生

貫名美名彦

シユツト作曲

器樂部卒業生

張 福 興

バツハ作曲

器樂部卒業生

竹 内 平 吉

ゴルターマン作曲

グルツク作曲

ある。

明治四十四年一月、本校規則中左の通り改正になつた。

第三條中第二項豫科ノ修業年限「二箇年」ヲ「一箇年以内」ニ改ム

第十八條但書ヲ「但樂器中オルガン、ピアノ及ヴァイオリンニ付キテハ其ノ中ノ一ヲ選修セシメ其ノ他ノ一ヲ隨意科ト

ス、國語及英語ニ付キテモ亦同ジ」ニ改メ第三項中「ヴァイオリン」ヲ削ル

第四十六條第四號書式中「甲種師範科官費生トシテ」ヲ「甲種師範科ニ」ニ「明治三十五」ヲ「明治四十三」ニ「省

令第六」ヲ「省令第三」ニ「官費卒業生」ヲ「卒業生」ニ改ム

第四十九條中「兼科ハ一百ヲ滿點トシ」ノ次ニ「豫科ノ唱歌及器樂ニハ三百點」ヲ加フ

第五十條「兼科ニ於テハ四十點以上ヲ合格トシ」ノ次ニ「豫科ノ唱歌及器樂ニ於テハ八十點以上」ヲ加フ

第五十三條ヲ「第十條後段及第十六條ニヨリ兼科ヲ缺キ主科副科ノミヲ修了シタル者ニハ其ノ科目ノ修了證書ヲ授與

ス」ニ改ム

第五十五條中「入學セントスル者ハ」ノ次ニ「研究科」ヲ加フ

第八十八條ヲ「甲種師範科官費生ニハ學費トシテ日額金五圓乃至八圓ヲ支給ス」ニ改ム

第六十九條ヲ「前各條ノ學費一箇月未滿ノトキハ月割ヲ以テ支給シ卒業修了死亡ノ月ハ金額ヲ支給シ退學ノ月ハ全部

支給セズ」ニ改ム

同四十四年四月、多久寅文部省留學生として三ヶ年間提琴研究の爲獨逸留學を命ぜられその途に着いた。萩原英一は私費を以てピアノ研究のため多久寅と共に渡獨した。

二月、ユンケル教師普國政府より音楽界に於ける功勞を以て「プロフェツソール」の稱號を授與された。
三月、海軍々樂隊第一回委託生、英國皇帝戴冠式に參列を命ぜられた。

四月、本月授業料が改正實施され本科二十五圓、豫科二十圓、選科學科毎に金十五圓となる。

五月、同校が主として編纂の任に當つた文部省の尋常小學唱歌一、二年用が出版された。

九月、湯原元一校長は音楽制度と教育行政の取調の爲文部省より歐米各國へ出張を命ぜられた。

同月、學友會演奏會、邦人作曲の發表。

十二月、教授從五位勳六等鳥居悅、勳五等瑞寶章に叙せられた。

明治四十四年三月二十五日

東京音楽學校第二十四回卒業演奏、同校奏樂堂に於て開く。(第一部、卒業式、第二部、演奏)

一、ピアノ獨奏

短へ調 ロンド(ソナタの第三章)

甲種師範科卒業生 伊 達 愛

ペートーヴエン作

二、獨唱

カヴァティナ

聲樂部卒業生 岡見メリーモリス

ロツシニー作

三、オルガン獨奏

短ハ調 フーグ

器樂部卒業生 山 田 フク

パツハ作

四、ヴィオロンチエロ獨奏

短ロ調 コンツェルト(第一章及第二章)

器樂部卒業生 林 顯 藏

ゴルターマン作

五、ピアノ獨奏

ブレリユーデイウム及フリーグ

六、ヴァイオリン獨奏

第七番 コンツェルト

七、合唱

甲、常盤

乙、菊の盃

明治四十五年三月廿五日午後二時

東京音楽學校第二十五回卒業演奏會

一、等

都の春

一、オルガン獨奏

バツサカーリア

一、ヴァイオリン合奏

甲、メデイトーション

乙、フユード(短ト調)

一、ピアノ獨奏

器樂部卒業生 松島 舜子

メンデルゾーン作

研究科修了生 永田 その

ローデ作

アルカデルト作、武島又次郎歌

ベートーヴェン作、武島又次郎歌

選科卒業生 大平 喜代

山崎松韻作曲、鍋島侯爵作歌

器樂部卒業生 池田 阿斐

バツハ作曲

器樂部卒業生 筒井ふさ、師範科卒業生

バツハ、グーノ作曲

バツハ作曲

器樂部卒業生 永田 また

ロンド、カブリッツチヨロノ

一、ヴァイオリン獨奏

エア、ヴァリ

一、ピアノ獨奏

バルテイタ(短ト調)

一、三部合唱

歌劇「フライシユツワ」中のテルツエツト

一、ヴァイオリン獨奏

コンサート第七番第二樂曲

一、中音獨唱

歌劇「プロフェート」中のカヴァライネ及エア

一、ヴァイオリンチエロ獨奏

コンサート第一及第二樂曲

一、合唱

甲、常盤

メンデルゾーン作曲

器樂部卒業生 兩角 龍吉

ダンクラー作曲

器樂部卒業生 石原かす子

バツハ作曲

器樂部卒業生 小笠原保子

同 中尾リョウ

同 澤崎 定三

ヴェイバー作曲

器樂部卒業生 末吉 雄二

ペーリオ作曲

器樂部卒業生 中島 かね

マイアペーア作曲

器樂部卒業生 多基 永

ピアツテイ作曲

アルカードルト作、武島又次郎歌

乙、あゝいづちゆく

ベートーヴェン作、乙骨三郎歌

明治四十五年一月、入學受験料一圓を二圓と改む。

同年七月、湯原校長歐米十ヶ月の視察を了へて歸朝した。

大正元年七月三十日 俄然諒闇にとざされた。秋季は寥々寂々の感深く、たとへ學藝研究のためとは言へ斯くあるべきものと考へられた。

九月、ロイテル教師解備となる。

十一月、學則を改正して甲種師範科入學試験科目に普通樂譜大要を加へられた。

十二月、ユンケル教授解職せらる。

ユンケル略歴

アウグスト・ユンケルは一八七〇年一月二十七日獨逸のアツヒエンに生れ十二歳にしてコロン音楽學校に入り一八八七年同校卒業、其後ヨアヒムの門に入りヴァイオリンを研究して、米國に渡りボストンシムフォニーオーケストラのヴァイオリンを弾き、又ソロイストとして盡した。其後市加古に行きて樂長となり、オーケストラ指揮に研究を積まれたのである。一八九七年世界漫遊の旅を思ひ立ちて獨逸より瑞西、伊太利及印度支那を経て明治三十二年飄然來朝、職を上野校に奉じてより拮据勉勵十四年我が音楽界の爲に貢獻する處甚大なりし、己に明治三十八年十二月二十七日勳五等旭日章御下賜、同四十五年六月三日に至つて勅任教授に準ぜられたのである。

又三十九年には普國政府より極東音楽の開發に盡した勳功を以て「ムジック、ディレクター」の稱號を授與され同四十三年には更に「プロフェッソール」の稱號を贈與された。



エンケル去つて、十四年後の大正十五年四月、山田耕作等の下に日本交響樂祭が三夜に涉つて盛大に舉行されたのであるが、同協會は我が國交響曲の恩人としてエンケルを表彰してゐる。實に我が國オーケストラの發達と交響曲の演奏研究に盡された功勞は實に偉大であつたことを思ふものである。創作にローゼントリード等がある。

大正二年一月十三日、グスタフ、ク

ロイン並バウル、シオルツ就任、島崎教授の通譯で兩教師の就任挨拶あり、終つてクロイン教師はシオルツ教師の伴奏で、メンデルゾーンのホ短調司伴奏の第一樂章及第二樂章を奏し、又、シオルツ教師はシヨパンのファンタージアを弾いた。

クロインはエンケルの後任シオルツはセイテルの後任で共に獨人器樂家である。

元教師エンケルは一月十一日出帆のプリンツルードキツヒ號で歸國の途についた。

三月、牛山充 五月、瀬戸口藤吉講師囑託せらる。

六月、職員の設定を改正せられ助教十一人となる。

六月、學則中夏期休業中甲種師範科官費生に學費を支給せざる事に改正さる。

大正二年三月廿五日午後二時、卒業證書授與式舉行、

報告、校長告辭、文部大臣祝辭、卒業生惣代答辭例の如く、終つて第二部の演奏に移る。

一、ピアノ獨奏

へ長調ノヴェレット第一番

器樂部卒業生 綠川 政野

シューマン作

二、低音獨唱

歌劇「シーモンボツカネーグラ」中のロマンツァ

器樂部卒業生 樋口 信平

ヴェールディ作

三、ヴァイオリン

ト長調司伴樂二十三番(第一樂章)

器樂部卒業生 内田 豊

ヴィオッティ作

四、風琴獨奏

イ短調ファンタージアとフリーガ

甲種師範科卒業生 木岡 信

パツハ作

五、中音獨奏

歌劇「アルチエステ」中のアリア

器樂部卒業生 竹内 うめ

グルツク作

六、ヴァイオリン

ホ短調司伴樂八番(第一樂章)

甲種師範科卒業生 草川 友忠

ロード作

七、ピアノ獨奏

ト短調ソナータ(第一樂章)

器樂部卒業生 藤田 愛

シューマン作

八、高音獨唱

歌劇「リゴレット」中の抒情調

九、風琴獨奏

變ホ短調、バツサカーリヤ

十、ヴァイオリン獨奏

レシアンド

十一、ピアノ獨奏

ハ長調司伴樂(第一樂章)

十二、合唱

甲、繪畫と彫刻

乙、初春の歌

丙、郊宴の歌

大正三年三月廿五日午後二時、東京音樂學校卒業演奏會。

一、箏(生田流) 老松

二、箏(山田流) 菊水

三、ピアノ獨奏

スケールツォ(第一番作品十六)

聲樂部卒業生 藺部 ふさ

グエールディ作

甲種師範科卒業生 草川 友忠

カルク、エレアト作

器樂部卒業生 杉山長谷夫

ヴィニアフスキ作

研究科卒業生 松島 舜子

ベートーヴェン作

生 徒

フックス作曲、高野辰之作歌

バレストリーナ作曲、乙骨三郎作歌

ゼーダーマン作曲、吉丸一昌作歌

甲種師範科卒業生 工藤 千代

メンデルゾーン作

四、中音獨唱

手琴に寄する歌

五、ピアノ獨奏

は長調ソナータ(第三地作品二第一樂曲)

六、ヴァイオリン獨奏

レジャンド(作品十七)

七、最高音獨唱

歌劇「フーゲノッテン」中の侍童のカツティネ

八、ピアノ獨奏

森の景色(作品八十二)

九、合唱

い、夜の歌

ろ、墳墓と月影

十、ヴァイオリン獨奏

ファンタージア、アラバシオナータ中のラールゴ及フィナーレ(作品三十五)

十一、ピアノ獨奏

は短調、コンチェルト(第三番作品三十七)

聲樂部卒業生 近藤 義次

シューベルト作

甲種師範科卒業生 喰田 八重

ベートーヴェン作

器樂部卒業生 佐藤 謙三

ヴィーニアフスキ作

聲樂部卒業生 長坂 好子

マイアーベリア作

器樂部卒業生 高安 百合子

シューマン作

生徒 徒

エンセン作、高野辰之作歌

シューベルト作

器樂部卒業生 田中 ひさ

ギュータン作

器樂部卒業生 弘田 龍太郎

ベートーヴェン作

十二、最高音獨唱

歌劇「フライシュッツ」中のアガートのアリア

十三、ヴァイオロンチェロ獨奏

コンチェルト中のアンダンテ(作品四十五)

十四、ピアノ獨奏

と長調ファンタジー(作品七十八)

十五、ヴァイオリン獨奏

い短調第二コンチェルト中のロマンス(作品二十二)

四月、多久寅教授となる。

五月、照憲皇太后崩御あらせられ、再諒闇となる。

六月、同校に於て編纂にかゝる文部省尋常小學唱歌全部完成を見るに至つた。

九月、獨人音楽教師クローンは、歐洲戰亂に際し、軍籍にあるを以て東京を退去する事になり準備を備へたが、止ることになつた。

大正四年三月廿五日午後二時、東京音楽學校卒業演奏。於同校奏樂堂

一、ヴァイオリン

司伴奏ト長調、二十三番

二、三重唱

山下テイ、森川達子、渡邊鈺

聲樂部卒業生 永井いく

ヴェーバート作

研究科修了生 多基永

モーリツク作

研究科修了生 石原かず子

シューバート作

研究科修了生

齋藤リヒヤルド

ギオツテイ作

歌劇「カルメン」中の三重唱

三、オルガン獨奏

ソナータ、ロ短調、第一番、作品三十六

四、ヴィオロンチェロ獨奏

ホ短調司伴中のセレナタ、作品三十四

五、ヴァイオリンとピアノ

ソナータ、ヘ長調、第五番、作品二十四

六、合唱

イ、相聞の曲(ヴァイオリン獨奏附)

ロ、子守唄

七、ヴァイオリン

司伴業、イ短調、第七番、作品九

八、低音獨唱

ベルトの愛らしき娘

九、ピアノ獨奏

幻想曲、作品二十八

ビゼー 作

白坂 ミイ

カルク、エラート作

萩原 正彦

リンドナー作

關根益三、高折宮次

ベーターヴェン作

生徒

マックスブルッフ曲、吉丸一昌歌

ヴァイオリン 田中 久

クリーゼ編曲

井川 富子

ロード 作

樋口 信平

ビゼー 作

山口 節

モンテルソーン作

十、最高音獨唱

夜鶯の歌

蘭部 ふさ

十一、ピアノ獨奏

光輝狂想曲

マツセ 作

十二、合唱

歌劇「ローエングリン」中の婚禮の歌とミユンスターへの婚禮行列の歌

高折 宮次

大正四年五月、文部省令第十四號を以て師範科の唱歌科及國語科の教授時間を改定せられ學則十八條第十九條を改正さる。

マンデルゾーン 作

生 徒

十月 天皇陛下、皇后陛下、皇太子殿下の御眞影を下賜せらる。

十二月、御大禮奉祝音樂演奏會を開く。

大正五年一月、永年戸山學校軍樂隊の名樂長たりし永井建子は同校の講師囑託となる。

同年十一月十六日、皇后陛下の行啓を仰いで創立以來第四回の御前演奏を舉行し、御大禮奉祝曲並立太子禮奉祝曲其他を奏した。

御大禮 奉祝合唱歌

歌 教授 吉丸一昌 曲 教授 島崎赤太郎 謹作

御大禮 奉祝進行曲

助教 大塚淳 謹作

立太子禮 奉祝歌

文部省 謹選

立太子禮 奉祝合唱歌

歌 教授 大須賀續 曲 教授 島崎赤太郎 謹作

第一部

一、オルガン獨奏

祝典前奏曲

一、最高音獨唱

旅人の歌

ヴァイオリン助奏

ピアノ伴奏

一、ピアノ獨奏

イ、春の曲

ロ、練習曲

一、セロ及ピアノ合奏

ソナータ

一、合唱

イ、幼兒

ロ、秋

第二部

一、ピアノ獨奏

助教授 中田章

レンメンス作曲

聽講生 長坂好子

グリーノー作曲、大須賀續作歌

聽講生 蜂谷龍子

研究生 山口節子

助教授 久野ひさ子

グリーク作曲

シヨッパイン作曲

セロ助教授 信時潔、ピアノ研究生 高折宮次

ルービンシタイン作曲

生徒 一同

露西亞民謡、旗野十一郎作歌

和蘭民謡、吉丸一昌作歌

講師 小倉すゑ子

狂想曲

一、ヴァイオリン獨奏

幻想曲

一、次低音獨唱

イ、春を惜む

ロ、印度の調

一、ヴァイオリン及ピアノ合奏

ソナタ

一、管絃樂

戯曲「ラルレジェンス」中のメヌエツト及フアイランドール

サン、サーンス作曲

聽講生 田中ひさ子

ヴェータン作曲

ピアノ伴奏 聽講生 石原和子

講師 船橋榮吉

マツスネ作曲、大須賀續作歌

ベンベル作曲、大須賀續作歌

ピアノ伴奏 助教授 貫名美名彦

ヴァイオリン 教授 多 久 實

ピアノ 教授 萩原英一

フランク作曲

職員及生徒

ビゼー作曲

大正五年三月廿五日午後一時半、東京音樂學校卒業演奏會。於同校奏樂堂

一、洋琴獨奏

器樂部卒業生 足立ふさ

ハ短調 ロンド (作品一)

二、次低音獨唱

秘密

三、風琴獨奏

ハ短調 バツサカリア (ツェルナー編作)

四、ヴァイオリン

ニ短調 司伴樂中のロマンス、第二番、作品廿二

五、アルト獨唱

歌劇「豫言者」中のカヅティーナとアリア

六、洋琴獨奏

ニ長調 ソナータ 作品二十八、第一樂章

七、次低音獨唱

歌劇「道化師」の口上

八、洋琴獨奏

ト長調 狂想曲 ロンド、作品百廿九

九、ヴァイオリン

ト長調 司伴樂中のアレグロとアダージェオ

シヨパン 作

聲樂部卒業生 水野 康 孝

ブルフ 作

甲種師範科卒業生 厨 二 郎

バツハ 作

甲種師範科卒業生 清 水 勝 藏

ギーニアフスキー 作

聲樂部卒業生 花 島 秀

マイアーベリア 作

器樂部卒業生 鈴 木 采

ペートーヴェン 作

聲樂部卒業生 柴 田 知 常

レオンガブルロ 作

器樂部卒業生 井 上 は る

ペートーヴェン 作

器樂部卒業生 大場 勇之助

モツアルト 作

十、箏

十一、低音獨唱

歌劇「タンホイザー」中の歌試合

十二、ピアノ

ト短調司伴樂中の第一樂章

十三、ヴァイオリン獨奏

主題と其替手

十四、ヴァイOLONチエロ

ホ短調司伴樂中の第二樂章、作品卅四

十五、ソプラノ獨唱

歌劇「デイノローラ」中の影を見て唱ふアリア

十六、ヴァイオリン

イ短調司伴樂、第五番、作品廿一

十七、混聲合唱

い、祈禱の歌

ろ、太平頌

は、エルメランドの歌

研究科聲樂部修了生 金 健 二

ワグナー作

器樂部卒業生 榊 原 直

デュセツク作

器樂部卒業生 多 忠 亮

ロード作

器樂部卒業生 犬井英夫

リンドナー作

研究科聲樂部修了生 長坂好子

マイアーベール作

研究科聲樂部修了生 田中ひさ

モーリツク作

生 徒

ウエーバー作

ロンベルグ作

瑞典民謡

大正六年三月二十四日午後一時、東京音樂學校第三十回卒業演奏會、於同上野音樂學校。

一、洋琴獨奏

ハ短調旋轉曲、作品一

器樂部卒業生

古谷 幸一
シヨパン 作

二、ヴァイオリン

イ短調司伴樂、七番、作品九、第一樂章

甲種師範科卒業生

草川 信
ロード 作

三、洋琴

ト短調司伴樂、第一樂章

器樂部卒業生

宇佐美 ため
デウツセーク 作

四、上高音獨唱

歌劇「デイノラ」中の對影抒情調

聲樂部卒業生

武岡 鶴代
マイアーベア 作

五、風琴獨奏

レグレソツイの主題に基くハ短調二重追復曲

器樂部卒業生

眞篠 俊雄
パツハ 作

六、等

奧組雲井曲(本雲井調子)

組合せ

中組末松(平調子)

選科修了生

八橋 檢校 作
佐川 國

選科修了生

北島 檢校 作
渥美 繁野

七、洋琴

イ短調司伴奏、作品八十五、第一樂章

選科修了生 瀨美 富貴
器樂部卒業生 室岡 清枝

八、洋琴、ヴァイオリン合奏

〔ヴァイオリン
洋琴〕

研究科器樂部修了生 柴崎 ヤス

へ長調奏鳴樂、第五番、作品二十四、第一樂章

石原かす子
ベートーヴェン作

九、洋琴

ト短調司伴奏、作品五十八、第一樂章

研究科器樂部修了生 高折 宮次

モシエレス作

十、合唱

甲、祭祀の歌

シューバート作

乙、夕べの歌

フツクス作

丙、繪畫と彫刻

フツクス曲、高野辰之歌

大正六年四月、小倉末子教授となる。

五月、職員並研究生の御前演奏。

天皇皇后兩陛下には袖ヶ濱の島津公府邸に行幸の節、橋永重、安藤幸、神戸絢、多久寅、萩原英一、川上淳、信時
深、石原和子、末吉雄二、樋口信平、武岡鶴代の十一名は御前演奏の光榮に浴した。

六月、湯原元一校長は東京女子高等師範學校長に任ぜられ文部省督學官茨木清次郎が同校長に任ぜられた。

八月、生徒奨励金給與規程を制定した。

九月、久野久子教授となる。

第五十五章 諒闇と音楽

明治大帝崩御の御事があつてから帝國の全土は憂愁の黒雲に閉され、普天の下率土の濱、鳥も啼かず花も笑はず、木石も共に哀傷して措く所がない。

主上には五日間の慶朝を仰せ出され一般に歌舞音曲を停止になつたが、誠に勿體ないことで何れも深甚な哀悼のなげきの聲のほか、此の深い臆痛なユニヴァーサルサイレンスを破るものはなかつた。音を以て人心の救養に當つてをるものも謹んで口に唱聲を絶ち、手を樂器に觸れなかつたのである。

徳川時代の昔には將軍の薨去にさへ一ケ年間の歌舞音曲の停止の命令があつたと言はれて居るに、今日では陛下の崩御にさへ命令を以つて音曲が禁止されるのは僅かに五日である。

之は一に聖恩の洪大を語るものに他ならないが、一方に於いて之を法令のやうな形式を以つて禁止する必要がなくなつたといふ事實も亦、忘れることが出来ない。それは 大帝御病重らせらるゝとの報一度傳はるや、直ちに歌舞音曲を自發的に停止し、宮城の廣場に頭づいた民衆の數限りなかりしを思ふ時に、強いて之を強要するの必要がなく、また音楽が文化の華たることも次第に了解されて來たのである。

諒闇中は歌舞音曲を停止すべきが當然である。殊に娛樂を主要目的とするものに於いて然りである。

併し乍ら全く音楽によつて僅かに糊口の資を得て居る音楽の師匠、僅に一管の尺八や一提の三絃を以て親子三人の露命を繋いでゐる門付けや縁日のほのくらしい小路に土座して見えない目に涙を流し乍ら、覺束なげの追分や松前の一と節に、鬼のやうな丈夫の腸さへ九回の思あらしめる可憐な尺八吹きを忘れることが出来ない。それと同時に音楽教育に従事して居る我滿天下の教師に對する苦衷を思はずにも居られないのである。

當時の某新聞紙が夏休中に唱歌講習の準備のために自宅でピアノを弾いたのが問題となつて不謹慎呼ばはりをして不忠の二字を冠らしめたといふ事がある。

新聞の言説は一顧の價もないのであるが、愚論に迷はされることの多い世の中であるといふので音楽界の問題とさへなつた。

第一に我々の取り扱つてゐる音楽は、少くとも學校音楽は國家を擧げて深嚴な喪に服すべき時と雖も決して廢すべき性質のものではない。否一日と雖もこれなくしてはあるべからざるほどの權威と力を有つてゐるものとしたい。我々の取り扱つてゐる音楽は御遠慮申し上げて居つても差し支へない様な所謂歌舞音曲とは全然其性質を異にしてゐるものと解釋したい。

古への聖帝明王がこれを以て國を治め、古への聖人賢者がこれを以て人の心を高きに導いたその神聖なる音楽、これが我々の一生を賭して守るべく養ふべき音楽ではあるまいか。即ちこれなくしては一日たりとも國を治めることは出来ない、これなくしては人の心を淨化することが出来ない。さうした貴い力、さうした神聖な權威、これが私共の音楽ではないだらうか。

我々の音楽は徒らに慰さみ半分に弄ぶ賤妓や薄兒の音曲ではない、大きく云へば治國平天下、人心教化の聖力とし

て、至高至上の權威であるからして、これを行使するに方つて何等憚々たる俗論を顧慮して居る必要があらう。最も細心の熟慮の後、最も大膽に我々の天職の遂行のために勇往邁進すべきである。そして完全に此天職を爲し遂げた時我々は我々の 天皇陛下に對し奉つて最も善良な、忠臣となり、又人道のために最も偉大な勇者とも仁者ともなれるのである。

若し我々の取り扱つてゐる「音楽」が、他の「歌舞音楽」とか「鳴り物」とか云ふやうな極めて哀れな立脚地しか有つて居ないものと同じ名の下に御遠慮を強いられて、これに盲従して居なければならぬ様な無價値な、無權威のものならば、早速そんなものを教へるために貴い時間と努力と金錢とを費すやうな學制を改めた方が賢いやり方である。

人間はパンばかりでは生きて居られるものではないとは千年も昔に云はれてゐる。人間の心には色々の食べ物が大切であり、世の中が文明になればなるほど此心の食べ物に不自由させないやうに、そしてそれもよい心の食べ物を食べさせてやるやうに力めること、これが明君賢宰相の念頭を去つてはならぬ最大の心配でなくてはならないのである。そして我々は此のよい心の食べ物と與へ、その食べ方を教へてやる貴い天職を帯びて來てゐるのである。

諒闇中だからと云つて畫をかくのを止めると云つた新聞のあるのをきかない、詩を作るのを遠慮しろと云つた記者のあるのを耳にしない、小説を出し劇を作るのを不忠である、不謹慎であると叱つた社會の木鐸のあると云ふことをも不幸にして語られない。何故社會は我々にばかりかうした片手落ちのやり方をするか。畫かきが顔料と線とを以てその思想感情を發表し、詩人、小説家、戯曲家が文字を以てこれを發表し、彫刻家が石膏とマールを以てこれを發表する如く、我々は音と云ふ材料をつかつて吾人の悲しみも喜びも表はしてゐる。

我々は音を以て我々の悲しみも喜びも發表する。それをなぜ我々ばかりが遠慮しなければ不忠の臣といふきくも恐ろしい汚名を甘受すべく餘義なくされるのであるか。

愚かな俗人は音楽とさへ云へば陽氣なもの、他人の悲しみも嘆きも知らぬ様に小面悪く響くものとかう傳習的に間違つて思ひひがめて居る。そして我々の胸一杯の悲しみを籠めて弾く一つ一つの音の傳へる誠實な嘆きの聲にも彼等の耳は聾なのである。四分の二拍子の長調の舞踊曲にも無限の哀愁が絡れてひどくのを聴いて落涙すやうな心耳を有つてはゐないのである。

又一方から考へてみると、我々の先人があまりに淺薄過ぎて崇嚴沈痛莊重の調べを賤さなかつたことにも罪がある。そしてたゞ俗人が好くからと云つて輕薄な似而非音楽を濫作した結果音楽は他人の悲嘆の時には遠慮すべきものなりなど、云ふ間違つた斷定をこゝろへさせたものとも思はれる。そしてかうした斷定の出るのもつまりは「音楽」が人の心に及ぼす權威の至大なるものを認めてゐるからのことである。だからこれらの輕佻浮薄な似而非音楽に代ふるに崇高の調、莊重な音を以てしたならば我々が有つてゐる最大の悲しみ最深の嘆きを致さなくてはならないやうな場合に於て、先づ第一に要求されるものは我々音楽であるべきことは疑を納れないのである。

さうしたならば世の中に「音楽は悲しみの時に奏すべきものに非ず」など、云ふ様なわけのわからぬ有司も俗人もなくなつて、一も音楽二も音楽と云ふことになり、従つてそれらの崇高、幽玄、莊重、宏偉の音楽が人心に與へる感動より來る好結果は測り識ることが出來ないやうになるべきである。

かう云つてみると矢つ張り罪は半分我々音楽者の方にある。我々は前に云つたやうな、俗衆の下劣な趣味に媚びるやうな俗惡極まる、輕佻浮薄な似而非音楽をすてゝ、高い人類の靈的生活に至大至重の交渉を有するやうな眞の大音

樂を造り出さうではないか。そして吾人のさし向き携はつてゐる學校音樂に於ても、少くとも此抱負を以てコツコツとその土臺の建設に盡してほしいものである。

單に思想の遊戲に過ぎない様なものならば、吾人にはそんな音樂は要らない。(音樂三卷十一號)

奉悼歌の由來

奉悼歌は 大行天皇御斂葬當日各學校の遙拜式に合唱哀悼の誠意を表せしめ度いと云ふ東京音樂學校の趣旨で文部省に建議したのが、同省の賛成を得、その結果本居豐穎が作詞、作曲は東音校職員會議の上齋戒沐浴して作曲したもので重に島崎教授の作意に因るものであると。奉悼歌を學校の儀式に用ゐたのは、英照皇太后御大葬の時が抑々のはじめでこの時も同じく音樂學校の作曲で作詞は黒川眞頼翁が三十一文字の歌を二首作られたのに作曲したものであつた。今度のは今様に七五を加へたもの、二つが追悼の歌で其の外最う一つ御徳を頌したる同型の一章と總てと三章従つて作曲も、一二章と三章とが異なつたものが作られてあつたが、小學兒童に歌はせるといふ點から簡單を主として歌詞を第一二章に止め、曲も同じものを繰返したのである。

大正元年八月廿二日

大行天皇奉悼歌 本居豐穎作歌、東京音樂學校作曲

一

八洲の外の海かけて

御稜威輝く天つ日の

ひかりをかかくす黒雲に

ふるは涕のあめのした
世は闇とこそなりにけれ。

二

千世萬代もましませと

いのり奉りし我が君の

かへらぬ道の大行幸

泣けど叫べどそのかひも

なき今日とこそなりにけれ。

右は文部省より各府縣學校に配布されたものであるが、小學校に於て之を歌ふ間に違はず殊に遙拜式が夜に於て行
はれた關係で全國的に歌はれるに至らなかつたことを記憶してゐる。

大正元年九月五日

明治天皇奉悼歌

松平乗承作歌、東京音樂學校作曲

御稜威耀く四方の海

ひろきみがけを仰ぎつゝ

御代萬世と御民等が

天地かけて祈りしを

あゝろき雲のかゝる日に

逢ひまつるこそかなしけれ。

海の内外もへだてなき

我斯道のこの業に

年ごろうけし御恵の

露にしすぼりし我袖を

またうちしぼる今日の日

あひまつるこそかなしけれ

大正元年十一月三日赤十字社發行。

明治天皇奉悼歌

久保猪之吉作歌、
楠保三郎作曲

とこしへにあめをしらすと

かなしくもこのおほみゆき

なくこなす民のことごと

神佛こへど祈れど

大御心かへしまつるに

ちからなきかな。

ゆるぎなく定めたまへる

日の本のこのいしやまよ

よろづたみひとつ心に

末かけて必ず守らん

あめにしてにひおほがみも

まもらせたまへ。

大葬奉送曲「哀の極」

「哀の極」の由來並曲譜は第三十八章に詳記の通りであるが、明治大帝の大葬に際して再び奏せられた。

この曲は變ロ短調四分の四に作曲され、トリオは三度上のニ長調になつてゐる。曲頭第一に木管（クラリネットその他）に哀切を極める主旋律が現はれ、金屬管樂器が副旋律を奏しながら進み四回反覆されて全體の總奏となり、ピッコロやフルリユートが高く絹を裂くやうに叫びながら第二の特徴ある旋律を吹く。それより大體同じやうなリズムで嚴かに進み、雄大の感じがするトリオに入る。この後に再び第一部分が反覆され、哀切悲痛の趣きを盡して終る。

本來は極めて緩く奏すべきものであるが御輜車を引く牛の歩度に合せる必要上、一分間に八十三歩の速さとなつてゐる。又御輜車が近うくと沿道に參列する軍隊の喇叭手も御通過になるまで「哀の曲」を吹奏したがこれは陸軍禮式で制定されてゐるラツバの譜で軍隊隊の奉送するものとは全く別のものである。

第五十六章 御大典に於ける奉祝音樂

大正四年七月十三日、文部省は懸賞募集に依つて得た歌詞に對して縦線の如き修正を加へて發表した。

一

天地のむた窮なき

原…動きなき

天津日嗣の御位に

原…高御座

我が大君ののぼります

今日の御典の尊さよ。

二

垂穂の稻の大御饌に

原…足穂

白酒黒酒を取そへて

皇御神にさゝげます

大御祭のかしこさよ。

三

大き正しき君が代の

原…大御代

大御祝に外國の

原…今日の御のり

つかはし人も列なりて

原…つかさ人等

共にことほぐめでたさよ。

原…楽しさよ

審査委員には芳賀矢一博士、森林太郎博士、池部義象、尾上八郎、武島羽衣等で修正案に關しては委員會で大分議論があつたのである。

「動き」は新しい詞で「天地」に對して適應句でない。「高御位」では「に」が缺けて居て少し整はぬ故と一般にわかりやすいやうにするため。

「足穂」垂穂が古來多く使はれて居て落つきがいゝ。「今日の御のり」十日の御即位式をのみ歌つて十四日の大嘗祭迄を祝ひ歌ふとして「大御祝」とした。

「大御代」大き正しき大御代ではあまり「大」が重なるから「君が代」と修正した。

「つかさ人」は古い詞でいゝ句だが、此處では外國の君主代表者を指して居るので、外國の君主代表者は當日の席次も我が皇族席の上に置かせられる程だから之を「司人」と本邦の役人同様に見て仕舞ふも如何と即ち「つかはし人」にした。

「樂しさよ」を「めでたさよ」にしたのは第一、第二の歌詞共に結局が客觀的に歌つてあるに此の歌詞だけ主觀的に歌ふもどうあらうといふので訂正されたのだ。

七月十三日の東京朝日新聞に「用語が古いが莊重である」とて芳賀博士が次の通り言ふてゐる。

「當選の歌は、長短の工合がいゝのと即位式と大嘗祭と大正の年號が讀み込まれてゐるのがいゝ。言葉は古く莊重で集つた内ではいゝ歌である。歌としては他にいゝのがあつたが小學生にも歌はせ儀式も年號も讀み込んであるといふ上から見ると缺點がある。いろ／＼批難も出るだらうが、歌を見るのが易く作る事はむづかしいのだ。」大き正しき」はコヂつけだといふ人もあるが古い言葉にあるから差支はない。要するに文部省の募集としては大成功である。」

大禮奉祝歌當選者

賞金五百圓

島根縣松江市北堀

湯川 貫 一

佳作五篇

賞金百五十圓

同 百 圓

同 七十五圓

同 七十五圓

同 五十圓

以上の内湯川、小木曾は教諭、其他は全部小學校訓導である。

應 募 總 數 二千有餘點

大禮奉祝歌樂譜富選者

一 等 五百圓

佳 作 百 圓

同 百 圓

同 百 圓

同 百 圓

以上の内松本、永井、益山は東京音樂學校出身其他は師範出身の訓導である。

應 募 總 數 千六百三十曲。

右審査委員 委員長 加藤弘之博士

名古屋市立第二高等女學校

島根縣八束郡秋鹿小學校

岡山縣英田郡泉小學校

千葉縣長生郡豊田村

大阪市西區阿波座上通

小木曾 啓次郎

奥原 福市

沖田 廣一

水鳥川 安爾

大倉 まさ

神戸市湊川小學校訓導

埼玉縣北埼玉郡下忍村

大阪市清水谷高等女學校

東京市麻布飯倉尋常小學校

富山市相生町五七

松本 徳藏

鈴木 康嗣

永井 幸次

益山 録吾

皆川 景昌

委員 湯原元一、田中正平博士、榑保三郎博士、田村虎藏、島崎赤太郎、楠美恩三郎、芝葛鎮、永井建子、瀬戸口
藤吉、上眞行、岡野貞一、山田源一郎、小山作之助、鈴木米次郎。

以上の内、特別委員島崎赤太郎、上眞行、田村虎藏、岡野貞一、山田源一郎等に於て豫選を爲し、三十三曲を豫選した。

九月七日午後二時文部省新館樓上に於て全審査委員會を開いて十二曲を特選し批評審議の末、實地演奏合唱を試みて更に其中より五曲を選び同夜十一時半に至り全部の審査を結了したのである。

奉祝歌の樂譜の一部修正、

當選せる御大典奉祝歌詞用樂譜は小學生に唱はしむるに少しく難澁の個所あり且、悟勞にも批難すべき點ありたるを以て審査委員中より、島崎、田村、小山等を修正委員に擧げ攻究の結果一部の修正を爲した。(九、一〇報知)

御大典奉祝唱歌の樂曲が實に千六百三十の多數に達したことは誰もが豫想以外のことであつた。音樂藝術殊に作曲の方面に於ては修養の年月なほ淺く寥々として聞ゆるものなき状態にあるを以て當局は應募數の如何を氣遣つたほどなのである、それが歌詞の二千に比して作曲の千六百は實に心強く感ずると同時に 明治天皇の御治世の恵の下に發生し生長したる音樂の將來を想うて慥に 陛下の大御恵の萬分一に報ひ奉るものと欣喜したのであると。
七月十四日官報に作曲者の應募規程に反したるものが六十餘曲とある。

大變夜宴の歐洲管絃樂、

大變第二日及び夜宴の西洋音樂は陸海軍々樂隊又式部職雅樂部の三者にて奏樂し、指揮者は海軍は瀬戸口藤吉、陸軍は山本銚三郎雅樂部は芝葛鎮にして曲目は左の通である。

畫の部

一、戴冠式行進曲

二、マノン ファンタジー

三、パンバ序曲

四、ボンデュール、セレネード

五、露西亞舞踏曲ワルツ

六、メシストセル ボトボウアリ

七、ブリューリボン行進曲

夜の部

一、行進曲

二、ラ ミュー ト ド ボルチーチ(序曲)

三、カバルレリーア ルスティカーナ(ファンタジー)

四、ワルツ

五、オイゲン オネギン(セレクション)

六、イタリアン イン アンゼリア(序曲)

七、マノン(セレクション)

八、セーナ、ピットレスキュー

式部職業部作

佛、マルレス作

佛、ヘラルド作

佛、ガバツト作

佛、ラント作

佛、ボアト作

米、カルチ作

式部職演奏

オーベル作、海軍々樂隊吹奏

マスカーニ作、陸軍々樂隊吹奏

ゼルコン作、式部職演奏

チャイコフスキイ作、海軍々樂隊吹奏

ロシイニ作、陸軍々樂隊吹奏

プチャーニ作、式部職演奏

マツスネー作、海軍々樂隊吹奏

九、アクエリー(ワルツ)

十、トウロワートル(ポトポプリ)

十一、バリアツチ(セレクシオン)

十二、フランエツト(行進曲)

ガネー作、陸軍々樂隊吹奏

エルデイ作、式部 職 演奏

レオンカワヰロ作、海軍々樂隊吹奏

陸軍々樂隊吹奏

曲目選定は陸海軍と、雅樂部と九月に持寄つて銓衡を重ねた上決定したもので、伊太利、佛蘭西、露西亞、亞米利加の曲から選抜することになつた、獨逸曲は敵國の故に採用を差扣へたのである。

又式部職樂部作曲の大典奉慶行進曲は、十數年間宮内省樂部に奉職中のウキルヘルム、ヅヅラキツチの作曲で頗る歡喜に溢れた情緒を遺憾なく表したもので曲中に君が代の國歌を挿み、華麗の中に莊重の意を加へたものである。

宮内省式部職洋樂教師塙太利人ウキルヘルム、ヅヅラキツチは十數年間式部職に奉仕し、從來宮中豐明殿の正安、觀菊、觀櫻會等の御興を添へ牽りし管絃樂は一として彼の指導に依らざるなく殊に彼は我日本の風土に深く親しみ、一生を日本に終りたしとさへ語り居れる程にて常に我國體の義をも嘆美し、大帝崩御に際しては甚くも感動して「悲曲」(曲譜不詳)を作り、昭憲皇太后に捧げ奉つた。彼は元來伊太利生れの天才的音樂家にして、二十歳前後には既に塙國維也納に樂名を馳せ少年ヴィオリニストとして到る所に喧傳されたが、斯る人には有勝の世事には頗る無關心にして今回端なくも我國と彼の祖國とは國交斷絶の己むなきに至つても眞に何等關知せざるものゝ如くである。

第五十七章 中學校長會議に於ける音樂科無用論

明治四十五年五月六日より十一日迄東京高等師範の大講堂に於て、全國中學校長會議が開かれた。出席者三百名にして、文部省の諮問案に對する種々の答申があつた中に、第七諮問案の『中學校の教育をして其目的に一層適切ならしめんが爲に、現行規程その他諸般の施設中改善を要する點なき乎』につき、委員長菊地謙二郎は『改善を加へ實施に便ならしむるの方針によつて審査を遂げたる』十箇條の委員答申案を報告した、その第四條は、

『法制經濟、及唱歌は之を缺くことを得しめ當分の内と限らざる事』

といふのである。而してこの原案は、本會議にも全會の賛成を得て、全會の可決となつた。蓋し現行規程は「當分の内缺く事を得」とあるのを「當分の内と限らず缺けば缺きても差支なし」とする義である。即ち現行（當時）規程では、必要の學科と認めて居るが、この答申案では必要と認めない事になつたのである。換言すれば唱歌科を課せざるを以て中學教育の改善の一策と見、實地に便ならしむる方針の一案と見たのである。

唱歌を以て實施に不便なるものと見たるは教師を得るに困難なり、教員不足なりといふ事が、その一つであらうがしかし年々四十五名の卒業生が出て居る有様なれば當分の内こそ不足もすれ、五年ならずして供給がつくのである。

四十二年七月の調査によれば全國の中學校數は公私立併せて三百四校の中唱歌科を缺いて居る中學校は僅に百十七校で、過半數の百八十七校は唱歌科を設けて居るのである。

將來國民の中樞となるべき、青年の指導者達が唱歌科についてかくの如く觀じて居る事は、最も注意すべき現象である。と輿論を喚起した。

八月の「音楽」には『中等學校長諸君に問ふ』とて左の文が掲げられ會議に列した校長諸君の辯明を要求してゐる。

音楽は人生の要求なり、欲望なり、人爲を以てこれを止むべからず。然るに正しき樂趣の種子を疎くことをなさず

して、若し教養したる子弟が鄭衛の音を學びて雅正の心を失ひたりとせば、その責任は果して誰に歸せんとするか。

吾人は切に本年四月の全國中學校長會議に列したる校長諸君の辯明を聞かんと欲するものなり。

音楽を以て教育の具とし學課の目に加へたるは二三十年この方なり。創初の時なれば方針も定まらず教授その人も同じく教案の資材に於いても全きを得がたきは當然のことなれども、それは甚しき根本問題にあらず、教養の用としての可否は、己に既に定りたることなれば、氣を平かにして心を長くして他日の結果を待つべきものたるべし。

見よ眞に音楽の教養を中等學校に得たるものは年齢二十前後の學生にして、いまだ社會の表に立てる人にあらず。故にその効果及影響はなほ十年の後にあらざれば見ることも能はざるものなり。三十代の働き盛りのものは、音楽の教養を受けたるの人にあらず。然るに何の性急者ぞ反りてその可否を論じて不用なりとの議を決す。これ謂ゆるかの苗を抜いて生長を試みるの徒にあらずや。吾人は切に本年四月の全國中學校長會議に列したる校長諸君の辯明を聞かんと欲するものなり云々。

また「誤られた唱歌科の價值」と題して、中學校長會議の決議案を難じたものもある。この論文は三谷綠二の書かれたもので實に名論卓説であることを疑はない。全文を轉載して參考の資料に供したい。三谷綠二とは現在の東京高師の青柳善吾の匿名であることを附言する。

認められたる唱歌科の價值

三谷 綠 二 記

昨今教育界には吾人に對して忌むべき風潮が流れ出した。曰く兒童の心身發達程度に對して、現行の教科目は過重に失するから須らく教科の整理を斷行して、教科の廢合を行ふべきであると主張する教科過重論。義務年限六ヶ年は長期に失するから、之を五年に短縮し且つ六ヶ年の効果と同一ならしめんが爲めに、主要の教科のみを存續し他は之

を廢棄すべきであるとなす短縮論。國民として必須なる實業的教科を主眼とせる實學論。智的教科は主にして技能的教科はその末端なりとする偏智論。列擧すれば際限がない、併し吾人の看過すべからざるはその何れの場合にも唱歌科が疎外せられて、或は葬り去られ若くは葬り去られんとしつゝある一事で、此事は獨吾人の立場からばかりでなしに教育の本質上から考察しても、悲むべき現象ではあるまいか（吾人に關係の無い他教科に就ては論じないが、然し公平な論をなさうと思ふなら矢張念頭に置く必要がある）吾人は夫等の謬論を論評して併せて唱歌科の本質を論じて見たいと思ふ。

義務教育年限を五ヶ年に短縮するといふ理由は、國民の經濟的負擔を軽減しようとする理由と、少しでも早く被教育者をして社會に立つて活動の緒に着かしめようとする二點を主眼として居る。時間短縮の結果、唱歌、圖畫、地理歴史等を教科目より削除するのであつて、此論者は以上の教科の價値を比較的認めないことになつて居る。修身、國語算術、體操だけを授ければ立派な國民が出来るものなりとの主張である。思はぬ事の甚しきものであつて若し此論法で進まば、國語をして萬能の教科たらしめ、而して國語と體操とにて優に立派な國民が出来る譯になることであらう然らば更に年限を二個年位短縮せしめ得べきやも知るべからずである。教育の事業が斯くの如く簡單なもので、而も易々と人間を作り得ば幸福であるが、しかく容易な業では決してないことは喋々を要しない。經濟的負擔にしても各國に比較して又國內の財制に比較して過大なりと憂ふべきことでもなからう。

實學派の論者は、教育の終局の目的は富強の國民を養成して國家を確立することであるから、此目的に添ふ爲には實業教育を尊重して商業、農業、手工を教科目に入れ、以てその礎地を作らねばならぬといふ論で、藝術教育は著しく疎遠せられて居る、特に唱歌科の如きは然りである。爲めに實業科を加設する結果として唱歌科を缺いて居る處も

ないでもない、そして普通教育の本旨を誤つて居る、仕方な敢て居る、愚の極ではあるまいか。勿論實業科は尊重せねばならぬ、然し偏するのは得策でない、實業科を尊重するが如くに唱歌科をも尊重せねばならぬ、それが最も聖い仕方ではなからうか。

智的教科を本位とする偏智論に就ては、曾て吾人は「音楽」に意見を發表してあつたが更に摘要すれば、唱歌科の如きに多大の時間を浪費するは無益有害であるから、祝祭日唱歌位に止めて該科を修身科乃至は體操科に併合すべきである、之が唱歌科の目的の上から最有効の方法であらうといふ論旨である。この言が一縣の教育を主宰する教育の意見としては、無謀であり淺薄であるとして吾人は論説しておいたが、一人でも斯くの如き非常識の者があつて、而も堂々天下に公言せられては或は妄言に迷はされぬ人が世間にないとも限らぬ、若し多數がこんな意見に擒はれたとしたならば由々しき大事として、唱歌科の爲めに悲むべきのみならず、實に教育の爲めに嘆ぜねばならぬ次第である。教育の事業を破壊するものは教育者自身であるといふ謗も否定し得まいと思ふ。

現行の教科目は非常に繁多にして、心身發達の全からぬ幼年兒童にありては、その負擔に堪へぬから、成可く之を軽減して、教科目の或物を放棄せよといふ過重論は、唱歌科廢棄の一に算へて居る。吾人が解釋に苦む點は、心身發達程度に對して負擔に堪へぬと主張しながら種々の加設科目のあることである。若し堪へぬとしたならば夫等の弊は一掃すべきである、そして既設の科目に對して充分なる効果を擧げんことに研究努力すべきである、此點に就ては聊か忽諾に附されて居るではあるまいか、又論者の言が眞なりとしても實際に於て心身の發育を阻害したとか不具者を出したとかの實例も聞かぬ。元來教育者は餘りに神經過敏であり過ぎる、決して教育者が憂慮する程兒童の心身が脆弱ではない、若し負擔過大に失するならば尙更唱歌科の如きを存置せねばならぬ。この論をなす餘暇があらば宜しく

ルソウの教育説でも研究すべきではあるまいか、何となればルソウの教育説は我現時の教育の通弊に對する頂門の一針として最も剴切を極むるものであるからである。

要するに諸論を總合すれば、唱歌科は無價値であるから、深い根底がないからこれを削除するとか輕視するとかに歸着する。然らば果して無價値無根底であらうか、吾人意見を自由に述べて見たいと思ふ。

過般全國中學校長會議の際「唱歌科及法制經濟は缺くことを得しめ當分と限らざること」といふ議決を見た、此事項に就ては既に「音楽」に其意見を發表せられた。以前の施行規則に依ると唱歌科は設くべきが本體で、教員を得る事が出来ぬか、又は經費の都合にて止むなき場合には當分之を缺くことが出来た、併しそれも當分であるから、三五年内には完成せしめねばならなかつた。然るに今回は永遠に唱歌科を缺いても良いので、換言すれば何うでも好いものになつた。中學校長が如何なる斷案の下に唱歌科を議決したかは吾人の知る處ではないが、兎に角中學校長が比較的舊時代の人が大多數で、従つて音楽に就ては何等の知識も意見も無いのも確であらう、換言すれば該科とは縁が遠いのであるから、斯くの如き議決も又止むを得ないことである。然し止むを得ないとして吾人は傍觀すべきではない、斯科の爲めに活路を開拓せねばならぬ責任を有して居る。

由來人間は自己の趣味とか好惡とかを唯一の標準として事物を評價する美點と缺點とを有して居る。即ち自己の趣味に適合したものは價値を肯定し、適合せざるものは價値を否定する傾向がある。この標準が私事の場合には兎も角も之を公事に適用した時に大なる弊害を生むものである。此弊は智的教科よりも技能的教科に於て特に甚しいと思ふ。實に藝術的教科中就唱歌科はその最たるものであらう、何故かならば何時も公平なる評價者が無い爲に悲むべき運命に陥らしめらるゝのは、多くの場合斯ういふ標準に律せらるゝからではあるまいか。

一は唱歌科が實生活に没交渉であるといふ謬見に基因して居る。成程唱歌が生産的方面から考察したならば、一個の歌曲を唱ひ得たからと言つて有形的には何れだけの利徳も生じない、一曲を奏し得たからと言つても幾何の利潤を得らるゝ譯でもない、専門家として立つ以外には經濟的方面とは全く没交渉である。然し斯ういふ論は普通教育と職業教育とを混同した論で、極言すれば普通教育の精神を忘れて職業教育を夢想して居るものである。既に立脚點が相違して居るのであるから主張に於ても大逕庭のあることは勿論であるが、普通教育の精神を離れては唱歌科が三文の値もなくなるけれども其精神さへ失はねば無限の價值がある。斯う言つても普通教育に於て不生産的の人間を造つても好いと言ふことではない、教育の正しい目的を正當に果さねばならぬ、その爲めには唱歌も他教科同様に須要なる一科であることを言ふのである。

或教育者は動ともすると普通教育を、高等の専門學校に入學すべき豫備教育と誤解して居るものもある。そして某の學校に入學すべき爲めには某學科は不必要であるといふが如く専門學校の試験科目が普通教育の唯一の緊要學科になつて居る奇觀がある。此見解から推論すると、工業學校に入學するものには數學、物理、化學は緊要の學科ならむも唱歌は寧ろ無用の長物である、然し音樂學校に入學するものには唱歌が最も緊要にして、植物、動物、鑛物の如きは厄介至極の學科と言はざるを得ない。斯くの如く生徒の目的に依つて教科目の輕重を論ずるは大謬見にして、その何の目的を有するにかゝはらず、普通教育といふ以上、同様の價值を認め同様の取扱を爲さざるべからざるや論がない。

然らば唱歌科が普通教育に必須教科として占むべき特質は何か、之を概論して擧筆したい。

吾人は道德上の判斷に於て常に良心の聲を標準とするが如く、趣味の高下は美醜の判斷に直接の關係を持つて居る。

然るに此良心を堅實に且つ高尚ならしむる爲には高尚なる趣味の修養は偉大なる効果があると思ふ。世間の多くの人が野卑なる趣味に支配せられて良心の命に従ふ力を失つて、道徳上の罪惡を侵すが如きは最も留意せねばならぬことで、野卑なる趣味を退けて高尚なる趣味を養ふことは、善良なる意志の遂行を容易ならしむるばかりでなく吾々の品性が又麗しき性質を帯びて來ることは疑を入れない。シラーは「人間は其肉體的狀態に於ては自然より苦痛を受くるも、その美的狀態に於ては此苦痛を免れ、其道徳的狀態に於ては此苦痛を支配する」と説いて、美は吾々の肉欲を純化して道徳に入る第一歩であると主張して居るが、美の効果を多少消極的に論じた傾がある。小西文學士は一步を進めて美は道徳そのものに影響して、高雅なる品性を作る效力があると言つて居る。斯論の如く道徳上に趣味が至大の關係を有し、これが一個人を支配し國民全體を支配する時に於て更に國民全般の趣味が國民道徳の上に大なる形を以つて表はれて來ることを思はゞ決して趣味に就ての研究は閑問題ではない。

然らば趣味の對象は何かと言へば美である。けれども吾人はこゝで美學を管々しく説かうとするのではない、只必要の限りを述べれば好い。美學說に就いては多々あるが今は最も有力なるものとしてフォルケルト博士の説を擧げる。博士は四則の主觀客觀の美の規範を論定して、その根定を感情移入とした。即ち自己の感情が作者の感情と一致融合する夫が美の極致であると言つて居る、換言すれば自他感情の統合融和の狀態と見做すことも出来る。例へば國歌を合唱する場合の如く人々相互に感情移入して一國の感情の結合が生ずる、斯くの如くして大にしては國民感情の統合となる譯である。之に依つて見るも美を目的とする唱歌科が何邊にその意義があるかと首肯することが出來ようと思ふ。唱歌科の任務決して小なる仕事ではない又容易の業でもない。

スペンサーの如きは「人間は慰安を要す此爲に藝術を要する」と言つて居る。松本博士も「藝術は生の慾望の精神

「靈である」と同じやうな意味で論じて居られるが、慰安とは活動を意味して居るではあるまいか、若し活動を意味して居るならば、藝術は慰安の具でなくて實に活動の要素である。その活動は個人としては品性の高雅なるを要し、國民としては國民感情の融合が必要である。若し唱歌科をしてスペンサーの説に従はしむれば單に慰安の具に過ぎずして、フォルケルト博士の説に従へば國民感情融合上、千金の値を有するに至るのである。藝術の中でも靜的の繪畫よりも、動的である音楽は特に偉大なる力を以つて吾人の精神に共鳴する、それだけ強度の勢力を有する事は勿論であらう。故に吾人は藝術と言ふ言葉の主として音楽といふ意味に用ゐて來た。如斯修身科と相待つて道徳的情操の方面に偉大なる關係を有して居るが故に、歐洲の中世紀に於ては唱歌と拉典語とは學校に於て主要なる教科とし、ルナルは唱歌の力によりて神を認めしめんと企て、神學以上の地位に進めようとした。兎に角彼の國にては、徳育の教科として宗教と唱歌とは離るべからざるものとして居る。我國にありては宗教に換ふるに倫理修身がある、少くも倫理修身とは相離るべからざるものにした。い。

獨逸の教育では既に數年前から此問題の研究を開始して居る。即ちドレスデン及ワイマーに於ては研究会を組織し熱心その問題の解決に勉めて居る。又ハンブルヒ市に於てはリヒトワルク等が主唱となりて、音楽演奏會、繪畫の展覽會等の方法に依つて、兒童の美的教育、趣味教育を實行して居るといふことである。其他これ等に關する著述としてもラング博士の「獨逸青年の藝術教育」など特に注目すべきものである。日本の現在に比較して羨望に堪へぬ次第である。

吾人は唱歌科が美感の養成に至大の勢力があり、美感といふことが趣味教育といふことになり、轉じて趣味といふことが徳性の涵養上に波及することを概論した。然し此目的以外に未だ効果はあるが論述すべき時間を持たぬから省

くが、要するに余が主張するのは唱歌科といふものが普通教育の一角に安定なる位置を保持すれば好い、そして教育を完成し得れば充分である。唱歌科を修身科以上の位置に進めようともせぬ、國語科よりも重要なものともせぬ、従つて唱歌科の教育的價値を誇張する必要もない、要は唱歌科を正當に解釋して相當の價値を是認されたいのである。(明治四十五年八月)

中學校に於ける音樂教師論

三 谷 綠 二 記

我が國の中學校に於ける音樂と音樂教師とが、歐米各國に於ける中學校の如く尊い習慣と美しい制度との下に立つて、相當の權威と地位とを有して居るならば、秃筆を呵し貴い紙面を汚して迄愚論を公表する必要を認めないが、現在の如く萎微して振はざる悲運に陥りつゝある状態を親しく見聞して居る吾人は何うしても嘆々せぬ譯にはいかぬ。然し吾人は音樂そのものに就ては特別に論じない、主としてその教師を論じて見たいと思ふ。それは外でもない教師論を盡せば自然音樂も明瞭になるからである。

孔子の音樂論を引き出したり、西哲の言を借りる迄もなく、音樂の教育的價値を否定するものは恐らく一人もなからうと思ふ。その價値を是認しその必要を觀じつゝ中學校の音樂科が然かく不振の状態を永久に繼續して居る理由は抑々何邊に存するのであらうか。吾人は此の根本理由を二つとする、即ち多くの中學校長が困陋なる謬見を抱懷してその任に當つて居ること、一は適當なる教師を得ることが現在の制度では困難であること、の罪ではあるまいか。最近の調査に依れば中學校の數は全國を通じて三百に近いのであるが、音樂を加設して居る數は僅に一割に満たぬ有様で、専任の教師を有する學校は數校、他は僅に兼任か乃至は法令の條項に依つて永久的に當分之を缺いて居るのである。斯くして發展が無い、進歩が無いと言ふ寧ろ自明の理である。

吾人は之から中學校に適したる教師を論ずることとする。中學校に於ける音楽教師としては第一に人物である、斯ういふと他の學校の教師になる者は何でも好いやうに聞えるがそういふ意味では無い。兎に角、中學校は他に比して自由教育で、個性の發展、性格の養護、それ等は餘りに嚴格ではない、稍々放任の氣味である處からして所謂中學校の校風が構成せられて、何處も同様に腕白者が多い、年齢の點からしても小生意氣に流れ易い時期である。それ等の者を統御して行かうとするには、相當に威嚴を要する、その威嚴に依つて威壓するのでなければ成功は尅束ない。それでは所謂音楽者の態度では駄目である。然しその威嚴も装ふただけでは物にならぬ、矢張修養に依つて得たる威嚴でなければならぬ。由來理學的の學科擔任の教師には一種の威嚴があり、文學的の學科の教師には威嚴が無い、何處か押れ易い處がある。之は畢竟意志的であるのと感情的であるのととの差からして一方は落着があり、他方は浮薄に流れ易い傾向を有して居るからであらうが、音楽の教師には遺憾ながら此弊がある。教育者としての音楽家には最も避けねばならぬことであらう。次ぎには少し放膽であらねばならぬ。如何なる事に遭遇するとも動ぜぬ所が緊要であるさもないと足許を見るに敏なる彼等に乘ぜらるゝ恐がある、かうなると事毎に蹉跌を來し易いと思ふ。熟々觀るのに音楽者には餘り悪人は居らぬ、何れかと言へば善者が多い、善人は換言すれば、お人好しである、お人好しには小心者が多い傾向がある、で此傾向から脱して少し人が悪くならねばならぬ、そして大膽なる工夫が必要であらうと思ふ。さすれば赴任早々から悲嘆の聲を發することもなくなるだらうと思ふ。此の二點を持って工夫修養すれば、他は一般の教師としての注意を人並にすれば充分である。非常識であるとの批判の如きは群雄割據の中學校に於いては相互の事であつて、音楽教師のみ甘受すべき理由はない。

技術に比較的拙劣でも中學校の授業には支障を來さぬ。拙劣でも好いといふ意味は、程度上から考へたことで、

教師學校高等女學校程度にあつては相當なる技術を必要とする、否優秀であればある程結構である。中學校とても拙劣であるより優秀であることを望むのであるが、吾人の將に言はんとする教師に對つてはそれ程の完全したる教師を望まぬ只三學年迄の教材を取扱ひ得れば充分である、之とてもほんの初歩に過ぎぬ事であるから、格別憂慮すべき程のこともなからう。その代りに音楽教師は他の一つの任務を負はねばならぬ。その任務とは英語か或は國語かの一科を教授し得べき能力を得ることである。斯く言へば音楽教師としての特色が無くなるやうであるが、決してそうではない。現在の制度乃至經濟、周圍の狀況等を考察し實に止む可らざるの致す處で遺憾ではあるが如何ともすべからざる運命である。然し此悲しむべき運命が却つて音楽教師自身に好結果を齎らす場合もある。この項は吾人が主なる論點であるから詳細に論述する。

何故に音楽教師の主眼とすべき生命とすべき音楽の完璧を望まずして、而も英語國語の兼科教師とならざるべからざるか、何故に專問の音楽教師として獨立することが能ぬのか。現今の制度に於ては音楽の授業時間は一週一時である。假りに生徒定員四百名の中學校に於ては一週の授業總時數僅に六時間、六百名定員に於て九時間、八百名定員に於て十二時間、而も八百名定員の中學校は全國に數校のみである。六時間乃至は十二時間の授業時數に於て一人の専任教師を置く事は、貧弱なる學校經濟を以つてしては到底堪へ得る處ではない。中學校教師の一週間に於ける授業の平均時數は拾六時間であつて、最多の廿一時間、最少の十二時間を以つて限度として居る。而して俸給の平均額は五十圓なるものは全國に於いて二三縣に止り、他は四十四五圓を出でざる有様である。之を一人の所得額に見るに三十圓を最下とし七拾五圓を限度として居る。此經濟狀態に於いて、假りに三十五圓の音楽教師を聘傭し一週僅に九時間内外の授業時數を擔當せしむる事は、如何に必要缺くべからざる教科にもせよ、目今の有様にては不可能の事に屬す

此事は獨り音楽のみならず他教科に於いても同様である。然るが故に見すゝ必要に迫られながらも、止むを得ず當分之を缺くことになる。此状態を救済する爲めには是非とも比較的縁の近い英語或は國語の兼科を強ふるの止むなきに立至つて居る。兼科の強制は音楽の精神を没却せしむるに似たれども、それは多少の偏見であらう。由し偏見にした處がその偏見なりにも救済の方法を講ぜねば、眼目の音楽が前述の理由に拘束せられて阻害することになる。では非とも兼科を勵行せねばならぬ譯である。然しその兼科教師が豫定以上の効果を得るや否やは疑問であるが、普通の成績だけは擧げてゆくことが出來やうと思ふ。現に高等師範學校では體操を主にし英語地理歴史國語漢文等の兼修をなさしめたる教科を年々供給して居るが、其成績は良好である。由來技術に屬する學科は輕視され易い、その事が直に技術科教師を輕んずる傾向がある。然るに一方に於いて地理なり國語なりを教授することに依つて、自然非處に信頼の心が起つて來る、その結果は教師に對する態度を變じて來て、牽いては技術科そのものも輕視しなくなる、この事は悲むべき現象であるが事實であるから仕方がない。此惡傾向や人物經濟、學校經濟を考慮したからであらう、高等師範學校は兼修の體操教師を出した。それが良好なる成績を示して居るのであるから、音楽教師が兼科教師になつたからとても屈辱でもなければ恥辱でもない、却つて音楽を擁護し發達せしむる大動機であると言はねばならぬ。

それに依つて教師自身も安心して職務に忠實なることが出來るし、又將來自身の發展上に最も好都合である。

地方に赴任したる音楽教師が大なる理想と、遠大なる抱負とを懷いて、就任したにもかゝらず、直に悲觀してかこつとか他に轉任を企てるとかを自らも經驗し、他からも耳にすることであるが、これ等は畢竟當人の意志の薄弱なことや豫期が高大に過ぎた過失でもあらうが、一には地位に對する不安、不自然的な周圍の壓迫から來る苦悶、それらも必その原因をなして居るであらうと思ふ。その何人を問はず自己の地位が不安定であつたり、不確定である位不

愉快なことはなからう。自己の占むべき地位は凡そ承知して居る、然しながら承知の出来ぬ地位に命令的に据ゑられた時、自己の低下せる地位に對して反抗的に疑問が萌芽する、そして何處かに安定なる地位を求めやうとする、これ必然的結果ではあるまいか。周囲の壓迫、換言すれば音楽教師を目して一種差別のある人間として目眦して居る。更に之を詳言すれば階級の差つた毛色の相違せる者として、公私ともに接する氣分が流れて居るでは有るまいか、一歩進めば没分曉たらしめられる。此悲むべき概念は音楽教師自身が造り出した罪もあらう、然し周囲が謔れる思想を保持して不知の間に壓迫を加へて居る罪も看過する譯にはゆかぬ。結局自己といふものを正當に認識して呉れぬことであつて、自己を認識されない位苦痛はなからう、不可解の自己として取扱はれることは如何にも殘念に相違なからう、そこで自己を正しく解釋して呉れる天地を求める氣分になるので、決して吾人が神經過敏的の臆断でないと思ふ。或音楽教師が吾人に面白き例話を談つた。彼は篤學の士であつて竊に教育學を研究して、やがて教員檢定試験を受験した。其消息が同僚間に知れ渡ると、傍若無人なる談論を彼が目前に於て敢て爲たりし徒輩が、以後の態度は滑稽な程に一變したと言つて哄笑したことが有つたが、常識を以て判斷し得べからざる此例は而も事實であるから如何んともすることが出来ぬ。萬般が斯くの如しとすれば、矢張吾人の主張の如く兼科の教師たることが、音楽教育そのもの爲めにも、音楽教師自身の爲めにも、最も適當なる所置であらうと思ふ、況やその事が音楽教育の永遠の大計なるに於いてをやである。

上述の理由の下に吾人は音楽教師養成機關に就て一言する。音楽學校の甲種師範科に於いて年々音楽教師の三十名内外を地方に供給されるが、此音楽教師は純粹の音楽教師で、師範學校高等女學校に適當したものであつて、中學校の需要に適して居らぬ。中學校よりの需要に對しては止むなく、國語に稍々優秀なる者を當てるのであるが之とて

も充分ではない。此缺陷を充實する爲めには、養成機關を根本的に改革する必要があらうと思ふ。此點に就ては當局者も非常なる苦心をされるやうであるが、種々なる故障が存在するのであらう、充分な改革は行はれぬ。教育學術界中學校號の誌上にて田村虎藏氏は吾人と同主張の下に、音楽教師を高等師範學校に於いて養成する事が、兼修學科の點に就て便宜であるから須らく高等師範學校に音楽専修科を設置せよと論じて居られた。然し吾人の所見を以つてすれば、兼修學科に就ては便宜であるかは知らぬが、専修學科即ち音楽の修業に就ては最も不便である。主であるべき音楽の修業を完全ならしむるには音楽學校に優る所はない、即ち音楽學校に於いて出來得るだけ完全な設備をなし、出來得るだけ教養の方針を改正して、優良なる兼科教師（資格を尊ぶ社會は兼科の教員免許状をも強請せしめる）を供給する事が、最も當を得たる所置であらう。其爲めには特種の設備も必要であらう、修業年限の延長も必要であらう生徒募集に就て入學程度を高める必要もあらう、従つて之に要する經費も増加する事であらう、それ等實施上の大小の問題に至つては、一に當局者の方寸にある事で、局外者の付度や容喙は必要ではない。要は速に吾人が主張を實現せられた曉を謳歌したい、そして音楽が認識せられ音楽教師が解釋せられた夕を嘆美したい。（明治四十五年十二月）

第五十八章 音樂演奏會の變遷

戰後音楽の普及發達するに伴ひ斯界は眞に上野園萬能の時代を作つた。東京音楽學校は樂界の覇府の如き權威を振ひ其の出身音楽家ならでは夜も日も明けぬ有様であつた。偶々一二の天才が現はれても、それが上野園以外の人であつたならば、世間は一瞥をも與へて呉れなかつた。

樂界の權威たる東京音樂學校は官立だけに文部省の壓迫がまた強く、頑冥不靈でグルツク作の歌劇「オルフオイス」の試演さへも禁止されるといふ状態であつた。又警視廳の取締方針の改まつた關係でか、音樂演奏會の開催にもひどい壓迫を加ふるに至り頗る振はなくなつた。

其の方針が改つたといふのは之迄の音樂會は學術の講演會と同様に取扱はれてゐたのが入場料を取れば必ず寄席か劇場でなければいけない。つまり興行物の一種として取扱はれる様になつたのである。從來も發起人自身が各自金を出して青年會館邊の會場を漸く借り入れ等したものであつたが、今度の様に寄席に非らずんば劇場と限られては少々の出資では出来ないものである。でなければ全く入場料を取る事が不可能故益々發起人は困る。こんな關係で折角盛運に向つた音樂會も、此の制限のために全く其の勢を殺かれて了つた。當時警視廳が斯くも嚴重に取締つた原因は、薩摩琵琶などが慈善の名の下に營利的にやるものが多かつたが故であると。併し西洋音樂と琵琶とを同視するとは、あまりに音樂に對する理解がなさ過ぎたのである。

併し乍ら此の時代は音樂の進展期であつた事は疑はない。東京音樂學校學生等の歌劇の公開が禁止されても日本歌劇が勃興して各所に演出され、又音樂演奏會が黙しても之は表面の沈黙で、其實内容の頗る動かんとするものであつた。而して青年樂人の鬱勃たる生氣が盛に燃えた。殊に音樂學術的方面とか之等の普及に關する樂論の叫びとが激増して出版界を賑はし、之が影響をうけて音樂會の地方進出を見るに至つたことは確かに音樂界の一轉期であつた。

音樂學校の演奏旅行も、明治四十一年に於て企てられ成果を收め、其他の團體或は個人による地方樂壇の進出が盛に行はれた。一時不振の状態に落ちて居た東京音樂學校の管絃樂團は四十三年に至つて復活し、從來年一回の演奏會であつたのが、春秋二季に舉行されるに至つた。又外人音樂家の樂壇進出も夥しく非常な活躍を見るに至つた。

陸海軍々樂隊の動靜はと見るに、警視廳とは無關係で外人鑑札の有無に拘らず至る處に活躍し、特に日比谷公園奏樂堂に於ける月二回の定期演奏には、多分の民衆を喜ばしめ、洋樂の普及に對する貢獻は著しいものであつた。

從來軍樂には管樂器のみを使用して、絃樂器を使用して居なかつたのであるが、明治四十二年に至つて絃樂の研究を開始し、海軍々樂隊に於ては東京音樂學校に特別派遣生を送つて之が指導を受けしめ、陸軍に於ては宮内省雅樂部樂人を招いて研究する等管絃樂の基礎を樹て、之が演出を見るに至つた、が間もなく明治大帝の崩御の大悲痛に遇ひ、奏でるものも聴くものも無く公園奏樂堂は一ヶ年間閉ざされた。

大正三年には昭憲皇太后崩御の悲しみに包まれてあつたが同年秋には日獨戰爭の出兵に伴ふ恤兵音樂會が各所に突發的に催された。

大正四年秋御即位式の御大禮奉祝音樂會等が各地に催され、中央樂壇に於ける奉祝演奏等にも著しき進歩を示した翌五年十月には立太子式を擧げられ、又國母陛下の東京音樂學校行啓の光榮に浴す等、最近十年間の樂界は下半年期に至つてかなりの進歩を示すに至つたのである。年次別に音樂會の狀況を列舉すれば、

明治四十一年

- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 一月廿九日、澄月會第一回音樂演奏會於神田美土代町青年會館 | 一月廿一日、明治音樂會第四十八回演奏會於神田美土代町青年會館 |
| ウアイオリンソロに多久寅のブルツクのコール・ニードライ、ウ | ドウラウキツツの指揮でシニューマンの歌劇大序、ヘンデルの「ラ |
| イオラソロに多忠朝、ウアイオリンコンチエルトのダンクラ作 | ルギー」ダンクラ作「シンフォニーコンセルト」等が奏され、 |
| のを以上の二人で、次に合明ベリーの和聲になる「君が代四部」 | 最後にラコチー將軍行進曲は多忠基の指揮、管絃樂員二十四、 |
| ベートーヴェンの「美しき自然」、シニューマンの「流浪の民」等 | 二月十六日 東京音樂學校學友會第二回演奏會。 |
| が中島六郎の指揮によつて演出された。新春最初の音樂會とて | 二月二十三日 東京音樂院芙蓉會音樂演奏會。 |
| 聴衆は割合に多かつた。 | 三月二十一日、二日 東京音樂學校内外人演奏會 於同校奏樂堂 |
| | 絃樂五重奏 シーマイナー、モツアルト作曲エーメーヂャー、 |

ドヴオルシヤツク作曲を、ユンケル安藤、幸田、ウエルクマイ
 ステル、ドクトル・アーシャソンに依る演奏や、チエルロソ
 でグゼイドフ作のコンチエルトアレグロをウエルクマイステル
 が演奏されたのが珍らしいものであつた。前日は學生のため入
 場料を半額にしたのであるが兩日とも聴衆は會堂に満ちた。

四月三日 明治音樂會 於美土代町青年會館。

一 管絃樂 歌劇シウスビール序曲 オク ス作

二 管絃樂 タンホイゼル中拔萃ファンターシーワグネル作

三 絃五部クラリネット及フアゴット合奏

マノン劇拔萃ミニエツト(舞曲) マセネット作

四 絃五部合奏 バピラゲ キレット作

絃五部合奏 マドリガレ シモネツチ作

五 管絃樂 マルスブル(舞曲) マルギス作

六 管絃樂 オールドハイテルベルヒ紀行の曲 トバニ作

指揮者ドグラウキツチ

四月二十二日 慈善音樂會 於帝國ホテル。

モザートの獨想曲をカワベルマン夫妻に依つて演出され、ロイ
 テル教師のシューマンのシンフォニーものゝピアノ獨彈、又カ
 ツベルマン夫人のリストのリコルダンザとチャイコフスキーの
 オイゲネエ、オーネガイネのピアノ獨彈は聴者の心を惹いた。

會衆三百餘、閑院宮妃殿下、英國大使の先導にて台臨あらせら
 れた。

五月九日 露國音樂家一行來朝、麗樂家のニコラス、フイグ
 ネル夫妻、ピアノのルーテンベルグ。

五月十四日 日比谷公園奏樂 赤崎軍樂長指揮の下に演奏。

一、行進曲、競馬王 二、樂しき生涯 三、さても晴した五
 月かな 四、歌劇ファスト拔萃 五、空色のすみれ 六、歡喜

七、魔笛 八、愉快の會合マーチ。

五月十五日 東音のオペラ「オルフォイス」研究會が文部省
 のために風教上弊害ありとて上演禁止された。

同月 東京音樂學校音樂團體が、地方音樂を開拓せんとのも
 とに職員生徒五十餘名の合唱隊の編成により、山梨、長野、新
 潟の三縣下に演奏旅行を企てた。官立學校としては近來の壯舉
 として注目されたのである。

五月二十四日 早稻田大學圖書館寄附音樂會 於東音樂堂

五月二十八日 獨逸艦隊管絃樂演奏 於帝國ホテル舞踏場。

横濱碓泊中の獨逸軍艦シャルンホルスト及びグナイゼナウ號の
 混成軍樂隊管絃樂人員(二十五)快活に嚴肅に呼吸もつかず二
 時間打通して演じた。一般に保守的の進行曲風のもの美しく聴
 かれた、タンホイゼル序樂等は會場の所爲か反響が強かつた。

會衆二百餘名中に英大使をも見受けた。

六月六、七日 東京音樂學校演奏會 於同校奏樂堂。

一、管絃樂ヘンデ作曲序曲 二、合唱及管絃樂キール作曲海上
朝歌島居枕作歌 三、管絃樂伴奏ピアノ司伴奏フムメル作曲ビ
アノ教授幸田延 四、絃樂及セムバロ司伴奏ヘンデル作曲バイ

オリン獨奏教授安藤幸セムバロ教師ハイドリツヒ 五、管絃樂
スイトレゼリニイユマスネ作曲一、セーシナルリヂユース 教師
ヴエルクマイステル 二、アントルアクト 三、プレリユード

六、合唱管絃及オルガンメンデルゾーン作曲獨唱及び合唱ヘル
ヘンウンゼルグベツト助教授藤井環教師フレツク合唱「天の

岩戸」乙骨三郎作歌指揮者教師ユンケル。

六月十九、二十日 聖路加病院寄附音樂會 於東京音樂學校
奏樂堂、外人の主催で、白耳義公使夫人の名残の演奏會。

六月二十七日 故高津環追悼音樂會 於東京音樂學校。

六月二十八日 軍樂隊の日比谷公園演奏會。

七月十一日 日比谷公園奏樂 陸軍々樂隊演奏。

七月二十五日 日比谷公園奏樂 海軍々樂隊。

八月 帝國音樂會の關西地方に演奏旅行を企てた。之が地方
樂壇の發展に好結果を及ぼしたものである。

十月十一日 東洋音樂學校第一回演奏會。

十月十一日 日比谷公園奏樂 永井陸軍々樂長指揮。

十月二十九日 日比谷公園奏樂 瀬戸口海軍々樂長指揮。

十一月二十二日 日比谷公園奏樂 本年の最終として。
十一月二十二日 ワグネルソサイター第十二回演奏會 於三
田演說館。

管絃樂は多忠基外十二名、バーナード作のキンググロズ序曲、
パロー作のエンゼルボルカマリツクスナー作のアウスシエー

ネルツアイトワルツ クラーク作ラマツツツシユが奏された。

十一月二十三日 東京高師大塚音樂會 於同校講堂。
十一月二十八、九日 東京音樂學校秋季演奏會 於同校奏樂堂

十一月二十九日午後二時 東京音樂學校演奏會 於同校奏樂堂
一、管絃樂ゴルドマルク作曲序曲サクンタラ 二、獨唱、合唱
及管絃樂アルツ作曲乙骨三郎作歌美しきエレレン(獨唱ペイン夫

人藤井環、三、管絃附ピアノ司伴奏ベイトーヴエン作曲短
ハ調 四、管樂ライネケ作曲歌劇マシフレツト王前奏及チャイ

コフスキー作曲小夜樂中の悲歌(ヘルマンハイドリヒ) 五、管
絃樂及合唱ワグネル作曲乙骨三郎作歌歌劇タンホイセル中の行
進曲。

明治四十二年 (月順不同)

十一月二十三日 大塚音樂會秋季演奏會 於高師講堂

本居長世のピアノ、山井基清のヴァイオリン等が主なものであつた。

十一月廿七、廿八日 東京音楽學校秋期演奏會 於同校奏樂堂

一、管絃樂 歐劇「イフィゲニー、イン、アウリス」の序曲
グルツク作曲

二、管絃樂件奏付ピアノ 教授 神 戸 絢 子

カプリシオ、アリヤン メンデルゾーン作曲

三、管絃樂 エロイカ、シムフォニー第一進行
ベートーヴェン作曲

四、ピアノ獨奏 教授 神 戸 絢 子

甲、セリナーデ シェーベルト、リスト作曲

乙、ラ、ヴェロシテ ジュー、マテイアス作曲

五、甲、管絃樂 セロソロ 教師 ウェルクマイスター

スイト「ラ、セリニー」の一節 マス ネ作曲

乙、絃樂 ガボツト ヲユリ作曲

六、管絃樂合奏 騎士の娘
ベーカー作曲

シュトールベルヒ伯原歌 乙竹三郎譯

十二月五日 日比谷公園奏樂

十二月五日 東京音楽院芙蓉會第四回秋季大會 於神田橋和

強樂堂。

曲目中に講師島田英雄のオーボエソロ、シューマンのロマンス、同山田排作のセロソロ、ベルギニルのアダヤオ等がある。

十二月十一日 帝國音樂會演奏會 於神田青年會館。

十二月十二日 神戶音樂會 於神戶山手トア、ホテル。

東音校のエンケル、ハイドリツヒ、ウェルクマイスター等の外人教師に安藤、幸田兩教授等の演奏であつた。東都樂壇の大家を網羅したものである。

十二月十二日 大阪音樂演奏會 於大阪土佐堀青年會館。

大橋純二郎等の一派のもので曲目中には特記すべき曲も樂人も見えない。

十二月十六日 明治音樂會演奏會 於神田青年會館。

十二月二十四日 女子音樂學校演奏會 於同校。

三月二十五日 東京音樂學校卒業演奏會 於同校奏樂堂。

オルガンのソロが二つもあつた。

三月二十八日 ウェルクマイスターセロ獨奏會 於東音奏樂堂。

一、絃樂四部合奏メンデルゾーン作曲
エンケル安藤、幸田教授、

ウェルクマイスター 二、ヴァイオリンセロコンセルト、ドボジ

ヤーク作曲
ウェルクマイスター、ケーベル教授 三、獨唱ア

ベマリア、ケルビーニ作曲
鹽濱チカ子 四、ヴァイオリンセロ及

ピアノ合奏、ソナタベートーヴェン作曲ケーベル博士ウエルクマイスター 五、絃樂四部合奏甲、エアーバハ作曲 乙、スチールツオメンデルゾーン作曲ユンケル、安藤、幸田教授ウエルクマイスター 六、獨唱 甲、エスハツト、デイローゼローベルトフランツ作曲 乙、ヴィルストデニ、マインヘアバハ作曲 鹽濱チカ子 七、ヴィオロンセロ獨奏 甲、ラールヅウト、モツアルト作曲 乙、チイゴイネルタンワデイラール作曲ウエルクマイスター 八、ピアノ四部合奏、アラツインガ、レサブラームス作曲ケーベル、ユンケル、幸田、ウエルクマイスター。

四月十一日 日比谷公園ブラスパンド奏樂 永井陸軍々樂長指揮。

第一部

- 一、米國行進マデリア スクワース作
- 二、歌劇フィレモンとボーシー夫妻の名節 グローノオ作
 - 甲、牧謠の序樂 乙、哀情の詩歌 丙、酒神祭の聯舞
- 三、佳廉なるヴァルス ショパン作
- 四、歌劇花やもめ クハール作
- 五、ギニイヨーム(ワイリヤ)(ナル劇中の行進) ロシニー作

六、祝祭舞會ホロネズ

スショーフエー作

七、歌劇エロジアト

マスネー作

八、狂亂ヴァルス

シツク作

四月二十五日 ベッツオード音樂會 於東音楽樂堂。

獨唱に獨彈に共に秀でた樂人でショパンの「ペラート」リストの「ラフンディ」の如き好評を拍した。これは東音の教師にならぬ前のものである。

I. C. Teur les Airs de Ballet d'Alceste

..... Gluck-Saint-Saens,

(Piano),

II. Arie d. Elisabeth aus Tannhäuser..... Wagner,

(Song),

III. a. Solveigs song (Par Gyn)..... Grieg

b. Lozeley Liszt.

c. Erkönig Schubert.

(Song),

IV. Trio D minor..... Mendelsohn,

a. An tario, h. Scherzo,

(Piano, Violin, Cello),

V. a. Feuerzauber (Walkyro)..... Brassin-Wagner,

b. Vogel als Prophet..... Schumann,

c. Etude Chopin,

d. Ballade (Fr. p'n.

(Piano).

四月二十五日 明治大學音樂會 於神田青年會館。
山井基清、島田英雄、本居長世、東儀、鈴木鼓村等の演奏が
した。

四月二十七日 ショロシキキキキ提奏音樂會 於帝國カ
ネ。

コンキネのソナタ等が演田れた。

PART 1.

I. Violin-solo Sonata in D durHandel.

- a. Adagio. b. Allegro. c. Larghetto.
- d. Allegro.

Mons. Vigneti.

II. Piano-Solo Fantaisie Improptsee in C. Sharp
..... Chopin.

Professor Heydrich.

III. Violin-solo :

- a. Aria.....Bach
- b. Mazurka de Concert.....Wieniawski.
- c. Le Cygne Saint-Saens.
- d. Kubalik SerenadeDrlas

Mons. Vigneti.

PART 2.

I. Violin-solo Sonata in D dur...Jean Marie Leclair.

- a. Un Poco Andante. b. Allegro.

c. Sarabande Lente. d. Tambourin.

Mons. Vigneti.

II. Violin-solo Hejre-Kari (Usarli) Hubay.

Mons. Vigneti.

Piano-solo Melody in F Rubinstein.

Professor Heydrich.

IV. Violin-solo :

- a. Romanza.....Senden.
- b. Z-pateado Sarasate.

Mons. Vigneti.

五月九日 日比谷公園奏樂 永井樂長指揮。

第一部 一、行進曲コンスタンチノープル 二、序樂古詩人の
歎息ニ、ヴァルス永久の辭 四、甲、ベルカウインナの佳人
乙、フォレスト、クワードリール 五、劇樂アチラ
於二部 六、劇樂サモラの貢 七、英國々風歌 八、ツウス
チツン行進ソナー

五月二十二日 慶應義塾十三回演奏會 於同校講堂。

五月二十三日 日比谷音樂 海軍瀨戸口樂長。

五月二十四日 露國聲樂家の演奏 世界漫遊の途次日本に渡
來したる露國有名のオペラ聲樂家カミオンスキー並に藝名をフ
ダムブルンと呼べる夫人は其友人たる露國大使館附財務官ウキ
ン、キン其他の餘暇で帝國ホテルに音樂會を開催。

五月二十九日 殿殿國寄附慈善音樂會 於神田メソナスト中

央會館。

絃樂四重奏、多久寅、川上淳、大塚淳、山田耕作等に依つてハイドンのアレグロ、コンブリオヤモザートのアヴェエグエールムヤメヌエツト、パツハのアリア等が奏された。

五月二十三日 日比谷公園奏樂 海軍々樂長瀬戸口藤吉指揮

第一部

- 一、ガルーソリ行進曲 ヒューム作
- 二、歌劇ラ、トラヴィアタ序曲 ウエルデー作
- 三、舞踏の要求、四舞曲 ウエーベル作
- 四、歌劇フーゲノワント(中古新教の異名)

幻想曲

五、愉快の會合、編成曲

第二部

- 六、歌劇「グラオダノ合誓」中歌旋及合唱曲 クロイツチエル作
- 七、シヨツプングの合唱曲 ハイドン作
- 八、悲劇ルマア姫、幻想曲 ドニゼツチ作

六月十三日 日比谷音樂堂奏樂 陸軍戸山學校軍樂隊

第一部

一、セダン軍隊進行曲

メイステール作

永井建子指揮

二、祭典序曲

三、獨帝ゲアルス舞曲

四、歌劇、小公爵幻想曲

五、天地創造(オラトリオ)聖樂

第二部

- 六、「ボルチシ」の啞女劇より求索せる行進曲レオンシツク編
- 七、「ボルチシ」の啞女劇の幻想曲 アウーベル作
- 八、(甲)怒り給ふな、ゲアルワ舞曲 セーラー作
- (乙)襦袢の中の生れ兒よ、トーステツプ舞曲

ストーン作

六月五日 學生聯合音樂會 於神田青年會館
學生の聯合故に種々雑多の曲日の排列であつた。併し非常の盛會で一層の新境を示したのである。

一、合唱

A 春の怨 B 虹の歌

二、ガアイオリン獨奏 美術學校音樂部員 チヤールン

トロイメライ

三、男聲四部

妹尾幸次郎 柳田謙

塔影

尾本龍 塚田左一
ブレオトリウス作

惟一俱樂部員

シニューマン作曲

大塚音樂會(高師)

ロツシニー作曲

四、ピアノ獨彈
ワグネルソサイテイ 山崎 誓立

A ノックトユルネ B ハイソヴエー シェーンベルグ作曲
唯一俱樂部員

五、絃樂四部
ラーゴー ヘルデル作曲

六、獨唱
明治大學音樂部員 赤見 榮 洽

リツプリングスプレツエン メンデルゾーン作曲

七、男聲四部
三上豊 熊谷古重 神山豪太郎 阿部義宗
青山學院音樂部員

メラー、ゴース、アワパーク外一曲 レスリー作曲

八、ヴァイオリン四部
ワグネルソサイテイ

加藤武二 松川善次郎 大栗醇 チャールン

A フライシツツ中の佳章及味嘆調 ウエーベル作曲

B 四 舞 曲 モツアルト作曲

九、合唱
美術學校音樂部

A 祈 願 B 春 雨 山田耕作作曲

十、ヴァイオリン獨奏
ワグネルソサイテイ 加藤 武二

フサユーリングスエルワツヘン パツタハ作曲

十一、獨唱
ワグネルソサイテイ 土屋 哲 司

A レシグネーション
メンデルゾーン作曲

B フェースフルゴヨニー
ベーターヴェニ作曲

十二、絃樂四部
ワグネルソサイテイ音樂部員

小夜樂中の歌謡曲
モツアルト作曲

十三、男聲四部
美術學校音樂部員

有田四郎 チャールン 岩崎文七 齋藤佳三

A 夏夜の星 B オンゼ、チャベルステアス カレッツァソング

十四、獨唱
唯一俱樂部員 妹尾幸次郎

A デルリンデンバウム B フリユーリングラソベ
シュネーベルト作曲

十五、絃樂合奏
慶應義塾ワグネルソサイテイ

森のさゝやき(ワルツ舞曲)
スタンレー作曲

六月十日 雅樂部演奏會 於牛込雅樂所。

第一部は雅樂、第二部は管絃樂が多く、ウエーベルのオペロン、

オウエルツレーヤブチニーのマダム、パツタフライ等が奏され

たが、ヴァイオリンの進歩が著しく聴者の耳をひいた。

六月十二、十三日 東京音樂學校春季演奏會 於同校音樂堂

非常の盛況で新任教師ルドルフ、ロイテルのピアノがあつた。

安東恒の獨唱もよかつたが管絃樂は精練足らずと評された。

一、管絃樂 歌劇「フライシユツ」の序曲
ウエーベル作曲

二、ピアノ獨奏
ルドルフ、ロイテル

甲、ガブオット及ミユセツト
ダルベール作曲

乙、エチュード二曲

ショパン作曲

三、管絃樂 シンフォニー「短口調」(不完)

シユールベルト作曲

四、ピアノ獨奏

シユールマン作曲

五、獨唱合唱及管絃樂

獨唱 安東 恒

歌劇「ローレライ」

メンデルゾーン作曲 吉丸 昌譯歌

六月十三日

日比谷公園奏樂 永井陸軍々樂長指揮。

六月十九日

廣島丁未音楽會 於廣島高師講堂

同會長北條時敬の萬國道德教育會議より歸朝記念に催されしもの。

一、ピアノ連奏

ミス、ソウター ミス、ラニヤス

メツドサンマー、ナイツ、ツリーム

メンデルゾーン作曲

二、獨唱

ミス、ラニヤス

ラ、センラーター

ブラガ作曲

グ、イオリンオブリガード

吉田 信 太

三、ピアノ獨奏

ミス、サウター

アンダンテ、ロンド、キャブリツシラソ

メンデルゾーン作曲

四、合唱(二部)

ミス、ソウター ミス、ラニヤス

グリーディング

メンデルゾーン作曲

五、ピアノ獨奏

ミス、ラニヤス

ベルサウス

ショパン作曲

六、獨唱

ミス、サウター

ザベリー、バードンド(ラッパルカーモア)

クラーク作曲

七、グ、イオリン獨奏

吉田 信 太

ヴアルツ フロムフウスト

グノー作曲

八、ピアノオルガン合奏

ミス、ラニヤス ミス、サウター

ローマンツアー

フリース作曲

九、獨唱

ミス、ラニヤス

ザビユータスソング

バクー作曲

十、ピアノ獨奏

ミス、サウター

ノツツールン

ショパン作曲

十一、合唱

會 員

露營の夢

北村晴季作曲

七月十日午後七時：九時

日比谷公園奏樂

陸軍戸山學校軍樂隊長

永井建子指揮

一、拳銃兵 行進曲

カール作

二、「ストラトニス」劇序曲

メーユル作

三、戀のバツザア(ワルツ)圓舞曲

クレイン作

- | | | | | | | | |
|-----------------------|--------------|----------|----------|-------------|---------------|---------------|---------|
| 四、ベヤトリス | ジーテング劇 | 幻想曲 | ペリニール作 | 三、オルガン獨奏 | ガボットバツハ作 | 大木美保子 | |
| 五、陣營の守衛と | 混輯曲 | | クロイツァ作 | 四、ヴァイオリン獨奏 | | 清川かつ子 | |
| 六、オペロン劇 | 序樂(再演) | | ウエーベル作 | アンブロンフテュー | シュニーベルト作 | 塚本いの子 | |
| 七、フライシユツツ(射士) | 劇幻想曲(再演) | | ウエーベル作 | 五、ピアノ獨奏 | ロンド | ベートーヴン作 | 本 科 生 |
| 八、銀鈴(ヴァルス) | 圓舞曲 | | サイサエン作 | 六、唱歌 | A 祭日 | B 夏のたのしみ | 玉木のぶ子 |
| 番外 | 天地創造 神事樂(再演) | | ハイドン作 | 七、オルガン獨奏 | | | |
| 七月廿四日午後七時：九時 | 日比谷公園奏樂 | | インネス作 | 八、ヴァイオリン獨奏 | A ラインハルドの一曲 | B レーメンス | 服部はなへ子 |
| 一、ペンシルバニア行特別列車行進曲 | | | | 九、箏曲 | 越後獅子 | | 大木美保子 |
| 二、悲劇 | エグモンド | | | 一〇、唱歌 | A 護良親王 | | 本 科 生 |
| 三、夢想 | 幻想曲 | | | | B 世の態 | | 普 通 科 生 |
| 四、船歌 | 圓舞曲 | | アルミンダゲ作 | 一一、ピアノ獨奏 | ソナタ | | 松井タツ子 |
| 五、喜劇 | 亞非利加旅行 | 編成曲 | シュツペ作 | 一二、ヴァイオリン獨奏 | | | 山井基清 |
| 六、歌劇 | リュベツァール序曲 | | フロトワ作 | A ベルソリス | B ドナウエレン | ゴツダード作 | |
| 七、ワ、アノラ | 西班牙風小夜樂 | | アイレンベルグ作 | 一三、不詳 | | | |
| 八、松明 | 舞踏 | | マイヤベイヤ作 | 一四、ピアノ獨奏 | | | 本居長世 |
| 九、歌劇 | 魔神の大團圓 | | バツハ作 | 一五、箏曲 | | | 氣賀瓦次 |
| 七月十七日 | 樂媛會音樂演奏會 | 於女子音樂學校。 | | 七月二十四日 | 日比谷公園奏樂 | 海軍々樂隊 | |
| 女子音樂學校の増築落成記念の音樂會である。 | | | | 七月二十六日 | 富士山上に於ける管絃演奏會 | 有志音樂家一團の富士登山。 | |
| 一、ピアノ獨奏 | ソナティナ | テセツク作 | 須田ヨシ子 | | | | |
| 二、唱歌 | A ウォーター | B 夏休 | 普 通 科 生 | | | | |

八月 帝國音樂會の演奏旅行が行はれた。

前年關西に於て成功を見たもので、長野、上田、高田、秋田、青森、盛岡、仙臺の各地に於て非常の喝采を受けたのである。

八月十四日 日比谷公園演奏 永井陸軍々樂長指揮

一、山嶽黨 序曲 ラ キ ー作

二、ドノオの波(ワルツ) 圓舞曲 イバノビシー作

三、プロエメールの宥恕劇幻想曲 マイユルベール作

四、ヴァレリーの牧女(チロリエンヌ) 緩舞曲 ブラシユトール作

五、冥想 行進曲 ヴアツテール作

六、魔笛劇 序樂 モツアルト作

七、エロガアド幻想樂(再演) マスネール作

八、白栗鼠(ホルカ) 圓舞曲 アリイア作

八月二十一日 日比谷公園演奏 海軍々樂隊

九月十一日 日比谷音樂堂演奏 陸軍戸山學校軍樂隊

一、軍隊行進 年若き衛兵 永井建子 指揮

二、序的行進 國民詩の戴冠 セルニツク作

三、圓舞 煩悶ヴァルス シヤルパンチエール作

四、歌劇 ドンフワンの幻想樂 メ ト ラ作

五、緩舞 煙火ボロネーズ ホルステール作

六、カヴァチース コルネツト獨奏 ロ シ ニ ー作

七、歌劇 マキステルジングル(歌匠の長) 幻想樂 ワ ゲ ネ ル作

八、米國行進マンハツタンワ者 ス ー ザ ア作

九月二十五日 日比谷公園演奏 海軍々樂隊 瀨戸口謙吉指揮

一、レツドウイング 亞米利加土人の奏樂 ケルリーミルス作

二、歌劇序曲 白姫 ボエルゲユー作

三、圓舞 圓舞曲 トランスラトウール作

四、聖樂 スタバマーテル讚歌曲 ロ シ ニ ー作

五、歐羅巴旅行 冥想曲 コンラッゲ作

六、悲劇オセロ 幻想曲 ウエルデー作

七、佛國風の喜劇 ケ ラ ベラ作

八、ウアーソングス オブザイ、ボーイスインブリーエー

九、歌劇豫言者 拔萃曲 ロウレンドウ作

九月十一日 日比谷公園演奏 戸山陸軍々樂隊 永井樂長指揮

九月十九日 東洋音樂學校第三回演奏會 マイヤペール作

一、管絃樂(バツハ作、チアノ歌劇の序) 二、ピアノ獨奏(フ

キルド作、ノクチュニネ) 本居長世 三、管絃樂(レノール作、フ

スタアゲ、ウキツウキ、ウォルツァー) 四、ピアノ獨奏(フンメ

ル作、ソナタ)本居長世 五、聯唱(メンデルゾーン作、ウオツ

サルハツト)原田潤、大和田愛羅 六、管絃樂(行進曲)

九月二十五日 日比谷公園奏樂 海軍々樂隊瀬戸口樂長指揮

十月二日 ウキザアス演奏會 於横濱グレート座

十月九日 ウキザアス演奏會 於神田青年會館

第一部 一、ピアノ合奏 ウキザアス、エルゼー イントロダクシヨ、エンドボロネース ショパン作 二、獨唱 ベンネツト(マダシヨンデーブルームデープロウエレレセルレスズゼーネニスカル作) 三、ピアノ獨奏 エルゼー(ヴァルスオブレレスト作エモロスキー―チャイコウスキー作) 四、セロ獨奏ウキザアス(ソナタエボツケレネ作)

第二部 五、獨唱 ベンネツト(アイアツテンアトフロムラブスシツクネスバルセル作)(アトトウキヲイトーネヴェイン作) 六、ピアノ獨奏 エルゼー(ハンガリアンラプソデー(十三)レス作) 七、獨唱 ベンネツト(マンダレーヘツチユコツク作) 八、セロ獨奏 ウキザアス(ロアンヌスアレンスキ作、スケルセーヴァレゴインヌ作)(タイムラスアイラブトゼーマウンテンスローア作)

世界周遊途次再来朝の音楽會で同年四月來朝の際は東伏見宮妃殿下始め邦人好樂家の大喝采を博したものである。

十月十日午後三時：五時日比谷公園奏樂 陸軍々樂隊

一、マイエルペール作劇フュグノーリ求索せる行進

二、グインドソールの快活婦人劇の序

三、コツペリアの聯舞ヴァルス

四、歌劇ザロフレデロフラ姉妹幻想樂

五、グルツクワグニチル年間の名曲斷片集

六、運命、妄想的大行進

七、北方の彗星クワドリール

八、歌劇リユスチーゲンヴエイベル

(グインドソールの快活婦人)幻想樂

九、洋式日清歌接續行進曲

十月二十四日午後三時 日比谷公園奏樂 海軍々樂隊

一、行進曲 シンデレラ

二、歌劇序曲 左官と鐵屋

三、圓舞曲 ベスト府民

四、叙述的意想曲 コロムプス

五、歌劇拔萃曲 フロレンスノ五旬祭

六、歌劇拔萃曲 マンゼルアンゴ

七、オーベルレンデル

ブリュネー編

ニコライ作

デリーブ作

レコツク作

シライネル編

フラチロール作

プースケー作

ニコライ作

ル、一作

ボーウエル作

アウベル作

ランネル作

ヘルマン作

クチブルカ作

レンコケ作

ダングル作

八、喜劇拔萃曲 **ボカツチヨ** **ズッペー**作

九、歌劇序曲、海賊 **バムバ**(一名大理石の花嫁) **ヘロールド**作

十月九、十日 午後二時 學友會演奏會 於東京音樂學校奏

樂堂

一、合唱 **會 員**

鎌の川上 **チャイコフスキー**作曲

二、ピアノ獨奏 **永田 また**

ソナタ **クレメンティ**作曲

三、獨奏 **岡見 メリ**

ヴェネチアニツシエツ、ゴンドルリード **メンデルゾーン**作曲

四、オルガン獨奏 **橋村 その**

第一章 長へ調 **ソナタ**イネ

五、獨唱 **船橋 榮吉**

ダーリーグイヒ、ウンター、デンボイメン **メンデルゾーン**作曲

六、セロ獨奏 **信 時 潔**

ロマンス **ダビドツフ**作曲

カンテレイナ **ゴルターマン**作曲

七、オルガン獨奏 **岡山 民平**

パストラール **パツ ハ**作曲

八、獨唱 **清水 金太郎**

九、ヴァイオリン獨奏 **シユールベルト**作曲

コンメルティ **峰 谷 龍**

一〇、ピアノ獨奏 **シ ッ ト**作曲

ブレリユード **賀名 美名彦**

ユイモレスク **シヨパン**作曲

シエルツオー **チャイコフスキー**作曲

一一、絃樂四部合奏 **多久寅 川上浮 大塚淳 山田耕作**

セレナーデ **モツアルト**作曲

一二、合唱 **會 員**

流浪の民 **シユーマン**作曲

十月二十三、四日 **同仁會音樂會** 於東京音樂學校。

十月二十四日 **日比谷公園演奏會** 海軍々樂隊。

十月二十四日 **ワグネルソサイター第十四回音樂會** 於慶應

義塾三十二番講堂。

同會樂器部オーケストラの最初の演出でコレネット、クラリネ

ット、トロンボーンの吹奏樂器が加へられ、ウオレリス作のマ

リタナ拔萃曲が管絃樂で奏された。曲目は邦樂が半分といふ、ワ

ダネル奥が少なかつたのである。

十月三十一日 仙臺三高等學校音楽會 於二高講堂。

二高有志音楽會第十八回演奏で、管絃樂グリーグスマーチ、とかガロツプとかいふ幼稚なものであつた、ガミスハンセンのピアノソロは立派なものであつた。

十一月十日 東京音楽院芙蓉會秋季演奏會。

十一月十三日 明治音楽會第五十回演奏會 於東京音楽學校

管絃樂 魔界の彈丸劇曲 ウエーベル作

管絃樂 無完結のシンホニー シューベルト作

ヴァイオリン獨奏 演義雜管絃伴奏 ロマンツウエンツェン作

管絃樂 ワルツ佛蘭舞踏曲想戀の曲 ベルゲル作

管絃樂 ハイデルベルヒ記行歌曲 トパニー作

番外俗曲長唄省略

十一月二十一日 日比谷公園奏樂 永井陸軍々樂長指揮

一、男 氣 行進曲 ラタン ス作

二、ミレイユ劇 序 曲 グ ノ 一 作

三、ミレイユ劇 幻想樂 グ ノ 一 作

四、知 彦 草 國舞曲 ドウリン 作

五、英國々風 歌曲集 エツケルト 作

六、ハムレット劇 幻想樂 トオマス 作

七、ハムレット劇 六聯輝 トオマス 作

春の祭 獵犬の踊

默演伎 ワルツ マジユルカ

フレイア ボルカ ストレツトの末節

八、タンホイセル劇 幻想樂 ワグネル 作

十一月二十三日 早稻田第四回音楽會 於神田青年會館

絃樂合奏(ファイユ、デウルゲマン)三部合奏(故郷を思ふ、野ばらの花)ヴァイオリン四部合奏(ラ、アウリーベ)ピアノ獨奏(ラ、シヤス)ヴァイオリン二部合奏(シンフォニー)四部合唱(故郷、いざうたな)管絃樂合奏(ナノン、マルシエ)

絃樂合奏(ウキリアム、テル)絃樂四部合奏(ソナチネ)獨唱(ローレライ、ダウエルン、デー、リーベ)ヴァイオリン二部合奏(デルカリフ、フホン、バクゲツト)ピアノ獨奏(シランメルリード、ヘルベルグ)ヴァイオリン獨奏(未定管絃樂合奏)(ピツテ、シエーン)。

明治四十三年

二月六日 ベツツオールド音楽會 於有樂座。

ユンケル、ウエルクマイステル等も出演、セロのソロで伊太利

風の輕いものが大受けであつた。

三月二十五日 上野校卒業演奏會 於同校

(曲目東音校の部委照)

四月三日　フィルハーモニー會第一回演奏會。

鈴木米治郎ウエルクマイステル等によつて、新時代の要求に應ずべき音楽を振興する目的で、新たに興つた同會は大隈伯、英國大使マクドナルド及岩崎男等の贊助を得て發會式を舉げた。

此のフィルハーモニー會といふのは、當時歐米地方では既に廣く行はれてゐる好樂家の會合で、同會も、純然たる専門音樂家と、一般好樂家との調和結合を商るといふのが目的である。その手段として専門家及び會員の演奏會を年六七回催す外、新時代の好尚に適切な新曲と新著作の發刊をやらうといふのである。

曲　目

一、三部合唱　ピアノ

ヴァイオリン

フ　　ヒ　　オ

ユ　ン　ケ　ル

セ　　ロ

短ハ調のトリオ

ウエルクマイステル
ベートーヴェン作曲

二、獨唱

甲、諸威の民歌

ベッツォルド
グリーゲ作曲

乙、獨逸の守歌

ブラーム作曲

丙、二つの星

ウエルクマイステル作曲
エンケル　安藤幸

三、ヴァイオリン二部合奏

コンサート

四、ピアノ獨奏

ゴードード作曲
ベツォルド

甲、夢　乙、ボロネイズ

リッセル作曲

五、セロと箏の合奏

箏　安藤幸　鳥居某
セロ　ウエルクマイステル

甲、メヂテーシヨン　パツハ作(ウエルクマイステル編曲)

乙、ローマンス　　ゴルターマン作

六、ピアノ獨奏　　本居長世

數(歌のバリエーション)　本居長世作曲

七、獨唱(箏唄)　　ベツォルド

甲、櫻　　箏　原　作

乙、盤　　ウエルクマイステル作

八、セロ獨奏　　ウエルクマイステル

歌の曲　　同　　作　　曲

九、三部合奏　　ピアノ　　ユ　ン　ケ　ル

ヴァイオリン　　ウエルクマイステル

セ　　ロ

○セロ獨奏を第二面で伴奏したのは珍らしい。音の和と作者の勢力のために試演したものである。箏の伴奏は仲々振つて居た、惜しいことには箏の音が少しく小さく、且漸次早くなる

ので、むしろウエルクマイステルが合せて行く様な傾向が見えた。

○獨唱の華唄、西洋人が日本の華唄を日本語で唄ふのだから發音は極めて可笑しいが聲が大きいから唄ははつきりと聞えた表情もたつぷりであつた。「櫻々」と唄ひ始めた時は笑聲も所々に聞えた。ウエルクマイステルの此唄につけたハーモニも、佳く出来て居る。次の歌で「清き流れのいさら川」の所などは上出来だつた。拍手聲の如く遂に二回奏臺に現はれた。

(音樂四號)

四月九日 ユンケル、ウエルクマイステル、ベツオルト、三教授音樂會 於神田青年會館。晝夜二回に涉つて行はれた。

四月三十日 高等工業學校第四回音樂演奏會 於藏前同校講堂。

四月十五日 レコードコンサート 於東京音樂學校。

フアラ、メルバ、ゼンブリツヒ、フーゲツト、ミハイロアの獨唱、エルマン、クベリツク、ヨアヒム、サラサテのヴァイオリン、ホルマンのセロのレコードに朝十時から夕の五時迄。

五月二十八、九兩日 東京音樂學校春季音樂大演奏會 於同校演奏堂。

一、管絃樂 フレリユード及フーゲ ベツハ作曲アーベルト編

二、管絃樂付ピアノ

コンセルト第五長變ホ調

三、管絃樂シンフォニー第三短イ調

四、獨唱

甲、デルシユヴァーン

乙、フォアリーフクローヴァス

丙、ローゼンリド

五、獨唱合唱及管絃樂

歌劇「ローレライ」

メンデルゾーン作曲 吉丸一昌譯歌
二日目は朝來非常な暴風雨であつたが、會衆は雨を犯して來り直に満員となつた。好樂の氣風が如何に横溢して居るか分る。

五月二十九日

日比谷公園奏樂 萬帝廟御で久しく中止して居たが同日午後三時久しぶりに開かれて人氣を集めた。

一、ブツビニヒ行進曲

二、グスタフの序

三、歌劇露帝と木匠 幻想曲

四、海色 圓舞曲

五、哀の極

六、隈取安宅の松

ベツツオルド

メンデルゾーン作曲

メンデルゾーン作曲

ベツツオルド

シエルデルフ作曲

ロイテル作曲

ユンケル作曲

ソロベツツオルド

メンデルゾーン作曲

吉丸一昌譯歌

バイエル作

オーベル作

ホルチンカ作

ミロツケル作

エツケルト作

(邦樂)

七、歌劇エスクラルモンド

八、舞踏の夢 團舞曲

六月五日 好樂會第二回演奏會 有樂座に於て。

一、絃樂

甲、ガボツト

乙、オルフォイス中のペレット

二、獨唱

甲、急激調

乙、好き朝

三、セロ獨奏

甲、エチュード

乙、ローマンヌ

四、ピアノヴァイオリン

セロ三部合奏

三部合奏曲 全部

五、獨唱

甲、歌劇 プロフキット中のアリア

乙、歌劇 バルベル中のアリア

六、ヴァイオリン獨奏

甲、ローマンヌ

マスネー作

ストラウス作

海軍々樂隊

パツハ作

アルツク作

柴田環

ローデ作

ダグリーク作

サリンジャー

シヨパン作

グビドツフ作

ロイテル

ウンケルマイステル

ブラーム作

柴田環

マイエルベル作

ロツシニー作

ミス、ダンデス

ベートーヴェン作

乙、レベリ

七、ピアノ獨奏

甲、ローマンヌ第六

乙、奇中の奇

丙、ホンガリ國風歌

八、絃樂

甲、ガボツト

乙、カバレリアルスチカカー節

獨奏者、サリンジャーのセロは素人としては達者であつた。

ヴァイオリンのダンデスは獨逸の音樂學校出身としては期待に反した。

六月十一日午後六時

應應ワグネル音樂會 於同藝三十二番

一、管絃合奏

ナートン マーチ

二、ヴァイオリン獨奏

ベルスソース

三、獨唱

甲、ウアングラ

乙、リンデン、パウム

ビュータン作

ロイテル

シヨパン作

チャイコフスキー作

リスト作

海軍々樂隊

パツハ作

マスカーニ作

器樂部員

リヒシャルドジェネ作

松川善次郎

ゴダート作

妹尼幸次郎

シニューベルト作

シニューベルト作

四、ヴァイオリン二部合奏

加藤武二 下條小四郎

六月十二日午後三時

日比谷公園奏樂 海軍々樂隊

五、ピアノ獨奏

山崎晋立

一、蜂巢行進曲

シロザ作

インビテーシヨン ワルツ

ウエーバー作

二、歡喜序曲

フロトウ作

六、男聲四部合唱

聲樂部員四名

三、カルメン圓舞曲

ストラウス編作

甲、ワルザヤース、フエヤウエル

キンゲル作

四、歌劇 ドンパスカール幻想曲

ドニゼツチ作

七、管絃合奏

器樂部員

五、喜しき傳言(ボルカ曲、コルネット獨奏)

ベオーメ作

愛國歌集

エツケル作

六、ハンスザツク序曲

ロルチンク作

八、ピアノ獨奏

ヴキツカース

七、箏曲六段

ドニゼツチ作

甲、ルマビヨン、エチユード、コンセー

ル ラヴァイエ作

八、歌劇 愛妾幻想曲

陸軍々樂隊

乙、ダイレクトレイト マーチ

ル サ作

一、黎明行進

アンラス作

九、琵琶 小 音

錦 心

二、ボルチシの啞女序曲

オーベル作

一〇、長 唄 鳥羽の戀塚

吉住 小三郎

三、日本の祝詞 圓舞曲

ピヲル作

一一、三曲合奏 笹の露

外杵屋六四郎連中

四、長唄勸進帖

(邦樂)

一二、長 唄 勸進帖

モツアルト作

五、歌劇ドンジュアン 幻想曲

シヨパン作

會を賑ねる毎に邦樂味が少くなつて行くのであるが、邦樂が後座を勤めてゐたのだこの音樂會も非常な盛會で獨唱者も獨奏者も學生として立派なもので、男聲の四重唱もよかつた。

四部合唱とあるも四人で歌つたもので四重唱と書くべきであらう。管絃合奏は管四、絃十一であることを附記しておく。

六月十六日 日比谷公園奏樂 海軍々樂隊

一、遠く彼方へ 行進曲

エバンス作

二、歌劇 聯隊の娘 序曲

ドニゼツチ作

三、ラウラ 圓舞曲

メリヨフケル作

四、ゼーイ、ウイドー拔萃曲	レヘーヤ作	五、新内 累身賣の段	富士松 賀太夫外一名
五、歌劇 デイノラー 幻想曲	マイアーペーア作	七月十六日 日比谷公園奏樂 海軍々樂隊	
番外 軍艦行進曲		七月二十三日 日比谷公園奏樂 戸山軍樂隊	
六、歌劇 輕騎兵 序曲	シュワベル作	七月二十三日 日比谷公園奏樂 戸山軍樂隊	
七、清樂 太湖船		一、吾等の愛する聯隊 行進曲	イルタル作
八、甲、オーベロン 序曲	ウニーベル作	二、セントシシリア 序曲	ヘンデル作
乙、ヒューオン 騎行進曲	同	三、歌劇 魔王の分據 幻想曲	アーベル作
六月十二日 日比谷公園奏樂 海軍々樂隊		四、南方の薔薇 圓舞曲	ストラウス作
六月二十六日 日比谷公園奏樂 陸軍々樂隊		五、勳進帖 下編	(邦 樂)
七月三日午後六時半 美音會第十九回演奏會 於有樂座		六、歌劇 ローエングリン 幻想曲	ワグネル作
一、ピアノ獨奏	神 戸 絢 子	七、ドラ王妃 圓舞曲	ホー ル 作
甲、アンブロンチヌ	シ ヨ バ ン 作	八、カンボヂア 進行曲	ステイルマン作
乙、魔王	シユーベルト作リスト調	九月十一日 日比谷公園奏樂 海軍々樂隊	
二、ヴァイオリン獨奏	頼母木 駒子	一、奧地利の陸軍 行進曲	アイレンベルグ作曲
ペラード及ゴロネーズ	ヴュータン作	二、ヨハンフォンバリース 歌劇序曲	ポアルヂョー作曲
三、ピアノ獨奏	橋 糸 重 子	三、森の水車	アイレンベルグ作曲
甲、ノクテュルン	シ ヨ バ ン 作	四、カブリツチオーサ 圓舞曲	ラ イ タ 作曲
乙、カプリス	サンサーンス作	五、音楽夜襲 綜合曲	メンデルゾーン作曲
番外吉備舞	太田益子 外三名	番外 ドーブ	
四、長唄 四季の花里	岡安南開 外多数	六、假裝舞踏會 綜合曲	ヴェルデイ作曲

七、邦樂 或後獅子

八、アレッサンドロストラテラ歌劇終曲 フロトウ作曲

九月音樂獎勵會の設立

學習院出身の音樂好きな連中の手に由つて成る。

會則を抜粹すれば

一、本會は左記の目的を有す

1、高尚なる西洋音樂の通俗的理解併に學理的的研究 2、

其の普及 3、青年音樂者の獎勵

二、之等の目的を達するために左の手段及び其他便宜の方法を

探る。

1、毎年凡五回の音樂演奏會を開く

2、演奏會毎に適當なる方法を以て其の音曲を説明し且其

音曲は必ず二回以上演奏する

3、會員又は其知己の希望に依り音樂教師を紹介す。

三、本會々員は左の者を以て組織す

1、學習院に關係あり、又はありたるもの、中有志者

2、會員の紹介により本會の許可したるもの

四、細則は別に之を定む

細則

一、會員は一口に付毎月五十錢の會費を納むる事

二、一口につき演奏會毎に切符二枚を配布す

三、本會の事務は當分の内發企人及其他便宜の者にて處理す

四、本會事務所並に會計は當分の内左の所に置く

牛込區若松町七三番地 二條厚基

九月十日 日比谷公園奏樂 海軍々樂隊

十月十日 海軍依托生絃樂試演會 於東京音樂學校

湯原校長並ユンケル教授に依つて催された。海軍當局者等を招

聘して其成績を發表したのであるが、短日月の練習として豫想

外の技巧に感服したものが多かつた。

曲目は 進行曲、格闘者の告別 プランケンブルグ作、シユワ

ルツ、ワルドの水車、アイレンベルガ作、圓舞曲、ドナウ河畔、

ストラウス作、進行曲、プリンアイトルフリードヒ、プランケ

ンベルグ作。

十月十六、七兩日 東京音樂學校學友會演奏會 於同校奏樂

堂

一、合唱 會 員

甲、雁の叫び ロシヤ民謡 旗野作歌

乙、秋 オランダ古謡 吉丸作歌

二、オルガン獨奏 安藤 意

ソナターナ ラインヘルト作

三 ヴァイオリン 獨奏

シシリアーノ

杉山 長谷夫

ベルゴレージ作

四、獨唱

甲、エスハットデイローゼズイツヒベクテークト

澤 時 定 之

フランソワ作

乙、イムヘルブスト

フランソワ作

五、ヴァイオリンセロ 獨奏

アンダンテ

林 顯 三

ゴルターマン作

六、ヴァイオリン 獨奏

ソナタ

末 吉 雄 二

モツアルト作

七、獨唱

セミラミス中のカプアティナ

中 島 か ね

ロツシニー作

八、ピアノ 獨奏

甲、ファンタジア

松 島 奏

パ ッ ハ 作

乙、プレリュード

シ ョ バ ン 作

九、ピアノ 四部合奏

作品四七 變ホ長調

番外 ピアノ 獨奏

カーナヴァル

教師

シニューマン作

一〇、獨唱及合唱	オルフェウス中の一節	會 員
十月廿九日 第五十三回明治音楽會演奏	於神田青年會館	グ ス ッ ク 作
一、管絃樂	フィガロ大婚劇序曲	モツアルト作
二、管絃樂	洪牙利舞踏曲	ブラームス作
三、ヴァイオリン 獨奏		窪 兼 雅
ソナタ		タルティニ作
四、管絃樂	歡喜雜歌曲	シヌライネル作
五、ピアノ、ヴァイオリン 合奏		芝、萩 原
ソナタ		ベートーヴエン作
六、絃五部合奏		森、山井、芝、奥、東儀
メヌエツト		ボケリニー作
七、管絃樂	グラチアートル將軍凱旋進行曲	フチツク作
十月三十日	フィルハーモニー第三回演奏會	於有樂座
一、管絃樂		海軍々樂隊
ラ、スピエル	歌劇の序曲	ケーラベラ作
二、ヴァイオリン 獨奏		頼母木 駒 子
バラツト、ポロネーズ		ピニュータン作
三、獨唱		マダム ベ イ ン
オデユツセウス中のアリア		ブルツフ作

四、ピアノ三部合奏

マダム ベッツォオルド

ニンケル ウエルクマイスタル

ピアノトリオ

アレクスキイ作

五、ピアノ獨奏

マダム ベッツォオルド

扮鬼舞節曲

サンサーン作

六、管絃樂

海軍々樂隊

ヴァルス

ワルトテレフェル作

七、獨唱

マダム ベイ

憐を知る人ぞ知る

チャイコフスキイ作

愛の歌

グノー作

八、三部合奏

メンデルゾーン作

トリオ

海軍々樂隊

九、管絃樂

海軍々樂隊

十一月 ミニユオン歌劇のファンタジイ

トーマス作

十一月 東京音楽學校學友會秋季演奏會

於同校奏樂堂

一、獨唱、合唱及管絃樂

會員

獨逸平和曲

ブラームス作吉丸一昌譯歌

甲、惱みあるものは幸なり

ベリトノ獨唱

乙、神よ、吾に救へよ

研究生清水金太郎

二、洋琴同伴樂

教師 ロイテ

短二調(作品第七〇)

ルビンシュタイン作曲

甲、モテラート、アツサーイ

乙、アンゲンテ

三、管絃樂

會員

スイト「ラ、レジエンヌ」

ビゼー作曲

甲、プレリユード

乙、ミニエツト

丙、アダージョ

丁、カリヨン

四、獨唱

本科生徒 中島かね

「オディツセウス」中の歌調

ブルツフ作曲吉丸譯歌

五、女聲三部合唱

會員

甲、清流

ブラームス作武島又次郎作歌

乙、述懐

ブラームス作同

六、管絃樂

會員

歌劇「オペロン」の序曲

ウエーバー作曲

十二月十日午后二時

於日比谷公園奏樂 遣英陸軍々樂隊の

分散記念演奏

一、鎗と刀 行進曲

スターク作

二、アルジエールの伊太利人 序曲

ロシニー作

三、太平洋 舞曲

ヴノワース作

四、俗語的行進二種

甲、クラケツト

クレラーニス作

乙、夜間巡邏

五、ダラ王女劇の抜萃 幻想樂

六、英國學生歌集

七、ファウスト劇抜萃 幻想曲

八、俗語的舞曲二種

口笛のヒエレット ホルカ

九、國風樂 英國回想其二

○十二月上旬英國より歸京東京市の歡迎と依頼に應じたもので

非常の盛會であつた。最、目立つたのは永井建子の指揮振の

著しい捷り方と樂器の良いことであつた。告別記念とは遣英

軍樂隊は、歸朝後解散するための告別である。

十二月十三日 明治音樂會常例演奏會 於神田青年會館

一、管絃樂 ベドレ序曲

二、同 アベマリヤ

三、ヴァイオリン獨奏

ファンターシー、バレット

四、絃五部合奏 舞踏會夢想曲

五、ピアノ獨奏

アンダンテ

モウセレスク

ア ツ シ作

フ オール作

ダークラス作

ゲ ノ ー 作

ベツトフォード作

ゴットフレ作

六、管絃樂 Gモール、シムフォニー

七、管絃樂 舞踏の夢想曲

八、琴合奏 嵯峨の曲

九、繁大夫節 紙屋治兵工

十、三曲合奏 奏・浮船

十二月 日 ベツツオールド音樂會 英國大使夫人主催 於東

京音樂學校演奏堂

一、三部合奏 マダム フヒオ、ユンケル、ウエルクマイステル

トリオへ長調

二、高音部獨唱

リゴレット

三、セロ獨奏

ソナターダ

四、高音部獨唱

ロンギングアットレスト

五、絃樂四部

ウエルクマイステル

一、アダゲオ

六、五部合奏

ピアノ五部合奏曲

モツアルト作

ストラウス作

加藤、米川

小井手、加藤

加藤、米川、鎗田

於東

ベートーヴェン作

柴田 琢

ヴェアイ作

ウエルクマイステル作

ヴァレンティニ作

マダム ベイ

ブラームス作

ユンケル、安藤幸子、幸田延子、

ウエルクマイステル

二、シエルツオー

ベイン、ユンケル、安藤幸子、幸田延子

ウエルクマイステル

ウエルクマイステル

ウエルクマイステル

七、ピアノ獨奏

ドウボルシヤツク作

ベッツォールド

一、アンダンテ

グリーク作

二、カーナヴァル

グリーク作

十二月四日 音楽奨励會第二回演奏會

於華族會館

一、ピアノ獨奏

買名 美名彦

アンダンテ(F長調)

モツアルト作

二、ヴァイオリンセロ獨奏

竹内 平吉

ゲザングスツエーネ(G短調)

ウエルクマイステル作

三、ヴァイオリン獨奏

窪 兼 雅

スーヴェニール(D長調)

ドウルドラ作

四、セロ獨奏

竹内 平吉

フィナーレ(アレグロB短調)

ホルターマン作

五、洋琴獨奏

買名 美名彦

フハンタジ、アムプロムチユー(C短調)

ショパン作

六、ヴァイオリン獨奏

窪 兼 雅

チヨイネルワイゼン(C短調)

サラサーテ作

伴奏 萩 原 英 一

○此の會の特色は演奏者が一曲を二回宛演奏するのであるが、

聴者は急坂の拍子をあげせて添く同一曲を三回以上の登場を

餘儀なくせしめた。就中最後のチヨイネルワイゼンに至つて

は前後四回の演奏が終つても拍手の音止まず、致方なく幹事が

立つて閉會を宣した。(音楽二卷二號)

明治四十四年

一月七日 好樂會第四回演奏會 於有樂座

一、絃樂四部合奏

ユンケル、安藤幸子、幸田延子、
ウエルクマイステル

變は長調 イ、稍息の調

ロ、緩徐の調

ハ、古舞の調

モツアルト作

ニ、急速の調

ベッツォールド

サムソン及ダリラ中の拔萃

サンセエン作

三、セロ獨奏

ウエルクマイステル

は長調セロ、コンセルト全部

ダルベール作

四、ピアノ獨奏

ベッツォールド

甲、賦奏曲

ショパン作

乙、ラブソテイ

リ ス ト 作

五、絃樂五部合奏

ユンケル、安藤幸子、幸田延子、
ウエルクマイステル、フヒオ

甲、アンダンテカングタ

チヤイコフスキー作

乙、カンツオネツタ

メンデルゾーン作

六、高音部獨唱

甲、秘めたる愛

乙、君は何處に在すや

七、絃樂五部合奏

い長調五部合奏曲全部

イ、急調 ロ、緩徐調 ハ、スケルツォ ニ、終曲

一月四日午後六時

於同院講堂。遺英戸山樂隊の演奏が主であつた。

一、鎗と刀 行進曲

二、ウキリヤム、ナル 序曲

三、ネツカル河原 ワルツ

四、印度デルヒの遠征軍

五、太洋

六、アイルランド 幻想曲

七、タンホイゼル

(曲目 主催者側に於て選定せるものである)

一月二十三日

世界的に名聲ある獨唱家佛人エムマ、カルヴエ夫人は渡米の途次神戶上陸、二十三日の夜横濱に著、有樂座で演奏會があるとか、一晩に四千圓出さねば演奏せぬそうだと

か、入場料は十圓要るとか御前演奏を希んで居るとか、種々様

々な取沙汰をお土産として一回の演奏もせずに二月三日横濱出

帆で飄然として去つた。

二月五日 第五回早稻田音樂會 於神田青年會館

一、絃樂合奏 コンセルト、グロツシー ヘンデル作

二、四部合唱 梅津、南、楊井、伊東

三、絃樂合奏 ドナウ河の漣 カールウイヘルム作

四、ヴァイオリン獨奏 イヴノヴィン作

五、三部合唱 浦のあけくれ 楊井二郎

六、ヴァイオリン二部合奏 ファウスト ヘンデル作

七、ピアノ獨彈 伊東貞雄

八、絃樂合奏 セレノード シューベルト作

九、絃樂五部合奏 モツアルト作

一〇、ピアノ獨彈 大塚、信時外三名

ノクターン 眞名美名彦

ファイールド作

カーナヴァル、ミニオン

一、絃樂四部合奏

アンダンテ、メヌエット

大塚、信時外二名

チャイコフスキー作

二月五日午後一時半

第十四回「大塚音楽會」於高等師範講堂

一、合唱

シユット作

七、合唱

如月の歌

霧

會員

八、男聲三部合唱

グートナイト

夜打の且

ストウんツ作

九、ピアノ獨彈

アムプロムチユ

二、ヴァイオリン合奏

原田陸諦、牧ヶ野敬信

一〇、ヴァイオリン獨奏

一、獨唱

エーガーコール

ウエーベル作

秋草

エール、ケーニツヒ

三、男聲二部合唱

赤水、西村、甲斐

一二、箏

領巾振山、紅梅

ローレライ

ジルヘル作

領巾振山、紅梅

同

四、オルガン獨奏

栗原徳長

一三、ピアノ獨彈

クスコス、ポスト

アレルヤ

レーマン作

カスコス、ポスト

ヘルマン、ネツケ作

マルシユ(アウス、フヒガロスホツホツアイト)

モツアルト作

二月十一日 カベルマンの演奏會 於築地精養軒

ヘルマン、ネツケ作

五、獨唱

シユーマン作

一、ピアノ獨彈

オルゲルコンセルト

カベルマン夫人

デイ、バイデン、グレナテア

シユーマン作

オルゲルコンセルト

カベルマン

六、合唱

會員

二、ヴァイオリン獨奏

甲、ウイユリ

カベルマン

曙の富士

ルボツフ作

乙、ウイユリ

アルメスター、ヴァイオリン編曲集

カベルマン

残雪

グローベル作

一、アレゲラ

アルメスター、ヴァイオリン編曲集

シユーマン作

會員

リオン

アプト作

村田、野澤、土田

パーキンス作

中西哲子

シユーマン作

吉澤重夫

清水金太郎

シユーマン作

鈴木鼓村

同

澤田柳吉

- 二、ガヴオット
ル　リ　　一作
- 三、獨逸舞曲
モツアルト作
- 乙、セレナーデ
ドル　ドラ作
- 三、獨　　唱
榮　田　環
- 甲、アヴェ、マリヤ
クルビニー作
- 乙、フエアゲソリツヘス、シテンドヘン
ブラームス作
- 四、男聲二部合唱　　多
- 四、ピアノ獨奏
カベルマン夫人
- 五、ヴァイオリン獨奏
ロサマンデ中の拔萃
- 甲、ヴァリエーション、プリランテス
シ　ヨ　パン作
- 六、獨　　唱
ロサマンデ中拔萃
- 乙、ノクテクルヌ
ケ　リ　　ク作
- 七、オルガン獨奏
ヴァリエーション
- 五、獨　　唱
榮　田　環
- 六、ヴァイオリン獨奏
マイエルベール作
- 八、合唱　歌の徳
- 甲、カンツオネタ
ダムプロツシオ作
- 九、男聲四部合唱
齋藤リヒアルド、津田修一
- 乙、セレナーデ
ピ　ル　　木作
- 一〇、絃樂合奏
- 丙、ジークフリード、バラフラレーゼ
ワグネル、ウイルヘルミー作
- 一〇、絃樂合奏
甲、夜響の巡邏
ホルステット作
- 乙、ガルカ
マイエル作
- 七、ピアノ獨彈
カベルマン夫人
- 歌劇　タンホイゼ序曲
ワグネル、リスト作
- 二月十九日午後一時　東洋音樂學校第十一回學友會練習會
- ハ　　ロ　　ルド作
坪　　淨　　波
ハイドン作
レ　　ニ　　ー　　マン作
松　平　文　子
シ　　ニ　　ー　　マン作
齋　藤　リ　ヒ　ア　ル　ド
柿　山　や　五　子
ペ　　ッ　　ハ　　作

- 一、女聲二部合唱 旅の夜 杉平文子、須田よし子
- 二、ヴァイオリン二部合奏 ガボット ネットケ作
- 三、女聲三部合唱花曇 宮田とく子、高本きみ子、町田さと子
- 四、ピアノ獨奏 須田よし子
- 甲、コンデルリード メンテルゾーン作
- 乙、ミニユエツト ボケリニー作
- 一五、合唱管絃樂伴奏 理想の郷
- 二月十九日午後六時 音樂奨勵會第三回演奏會 於華族會館
- 一、オーボエ獨奏 栗原
- モデラート(ト長調) ヴェルラウスト作
- 二、ヴァイオリン獨奏 芝
- エレジー(ハ短調) エルンスト作
- 三、コルネット獨奏 高津敏
- リゲレット中のファンタジア ヴエルテイ作
- 四、ピアノ獨奏 眞名美名彦
- 甲、プレリユード(變ホ長調) ショパン作
- 乙、ノクテルヌス(變ロ長調) ファイールド作
- 五、クラリネット獨奏 高見麗吉
- アングラント(變ホ長調) クローゼ作
- 六、ヴァイオリン獨奏 芝

パレツトの二節(ファンタジア、イ短調、イ長調)

○會衆約百五十、例によつて清楚な集りであつた。此會の聴衆は何れも心から泌みりと音樂を味はつて見たいと云ふ連中に由つて滿されるのはいつも乍ら嬉しい事だ。聴衆の中に田中館博士、田邊學士、白樺の連中などが見えた。曲目も今回は管樂器の趣味を味はせやうと云ふ積りで拵へたのでクラリネットやオーボエ等がはいつて居る。

田村學士の簡單な解説があつたあと會規に由つて各部宛、二度繰返されて演ぜられた云々……伴奏は管の方は春日、絃の方は眞名。

- 二月二十五日午後一時 青森師範音樂演奏會 於青森縣同校
- 一、オルガン獨奏 フェネラルマーチ 二甲 長谷川
- 一、ヴァイオリン獨奏 一、ヴァイオリン獨奏 釜范敬
- 一、オルガン獨奏 殖生の宿 二乙 太田
- 一、獨唱 櫻町 釜范敬
- 一、ヴァイオリン獨奏 金婚式 三乙 金澤
- 一、合唱 海 女講全部
- 一、ピアノ獨奏 ソナチネ 四乙 松枝良作
- 一、獨唱 海邊の嘆 二乙 秋元
- 一、ピアノ獨奏 甲、ソナタ 乙、カレドニアン 釜范敬

一、獨唱	菩提樹	一甲	阿	部	女子師範學校
一、合唱	甲、郭公 乙、岩戸開きの曲	二部	女	一、合唱	一部 二年生
一、合唱	薩摩海		女	甲、搖籃歌	シニューベルト作
一、ピアノ連弾	ウインナマーチ	四甲	山形、長谷川	乙、胡蝶	フオルクスリート作
一、合唱	浦のあけくれ	三四年全體		二、オルガン獨奏	一ノ三 森 下
三月二十六日	丁未音楽會演奏會	於廣島高等師範學校		甲、懷郷 乙、ミニユエツト	
一、唱歌	雪遊び、鶯	附屬小學校尋一、二		三、女聲三部合唱	好樂會員
一、同	日本武尊、鶏の聲	同	尋三	なき友	スボーア作
一、同	加藤清正、日本海軍	同	尋六	四、ピアノ連弾	フロージ マルシヌ 一ノ三 森、和田
一、同	春の野山、吾等は中學一年生	中學	一年	五、獨唱	旅愁
一、同	探梅、二人の兵士	中學	四年	六、ヴァイオリンピアノ合奏	マルシヌ、タンホイゼル
一、三部合唱	戀しき母、霜の且			七、女聲三部合唱	想起
一、獨唱	湖上の月			八、ピアノ獨奏	フアンタジイ
一、ピアノ連弾	ポツブルリー	吉	田、内 藤	九、獨唱	二人の兵士
一、獨唱	世の戀			一〇、ピアノ連弾	ワルツ
一、三部合唱	慈 善				一ノ二 岸川、越川
一、四部合唱	祝の歌				ネーソン作
一、獨唱	海の音	竹	中 利 一		
一、三部合唱	夜の御社				
二月廿五日	松本女子師範彰風會音楽演奏會	部長野縣松本			

一、獨唱

甲、久方の月 乙、別れ

一、ヴァイオリン獨奏

リゴレット

一、女聲二部合唱

花

二、尺八、箏合奏 山嵐

一、獨唱

ジョスランの子守歌

一、ピアノ、ヴァイオリン合奏

ソナタ

一、四部合奏

雪

三月四日 臺北國語學校校友會第九回音樂演奏會 於臺北國

語學校講堂

一、吹奏樂

一、オルガン獨奏 デマシシマチン

一、獨唱 谷間の梅

一、ヴァイオリン合奏(ホームマン練習曲)

一、オルガン獨奏 ローマンス

青木 兒

リンドブライト作

石野 嶺

ヴュータン作

二部 二年生

瀧原 太郎作

高橋、高橋

青木 兒

ゴダール作

井出茂太、石野嶺

ペートーヴエン作

研究會 員

瀧原 太郎作

館

師、國 二年生

師 四、 柯

師 三、 葉

師、四 年 生

師 四、 呂

一、ピアノ連弾 メニユエツト

一、唱歌 湖上の月

一、オルガン獨奏 パセカグリア

一、吹奏樂 ファンタジー クラリネットヴァリエーション

一、唱歌 甲、雲雀 乙、胡蝶

一、ピアノ獨弾 ソナチネ

○此の以外に入江好次郎のヴァイオリン、獨奏、同夫妻のピアノ連弾、フォールス女のピアノ、張福興のヴァイオリン等があつた。

三月四日 佛人提琴家ピネウイツチの送別音樂會 於華族會

館

一、ヴァイオリン、ピアノ、セロ四部合奏

長い調

二、ヴァイオリン獨奏 ソナタ(短は調)

三、セロ獨奏 ベリエーション、シンフォニー ポールエルマン作

四、ヴァイオリン、ピアノ二部合奏

ソナタ(短は調)

ペートーヴエン作

一、ピアノ獨奏

甲、バルカロール

リヤド 作

師 四、呂、柯

附屬女學校生

張 福 興

臺北音樂隊

師、三 年 生

高橋二三四

ホ イ ス作

ビ パ ー作

六、ヴァイオリン獨唱

乙、カプリツシオ

ロ シン ガ作

二、ピアノ獨奏

久野 久子

甲、ローマンズ

ラ ロ ー 作

三、絃樂四部合奏

ヴァイオリン ユンケル、同 安藤幸子
ヴィオラ 幸田延子、セロ デビス

乙、ラバイル

シニューベルト作

四、セロ獨奏

ウエルクマイステル

丙、チャントジュエー、アルレンベルグ

ワグネル編

甲、インタールディーアム

グラッソウノウ作

丁、ガボツト

グールツク作

乙、シエルツオ

メンデルゾーン作

戊、アンダンテ

タルテイニ作

四、セロ獨奏

ウエルクマイステル

巳、セレナーデ

ドルドラ作

甲、フモレスク

ドヴォールシャツク作

庚、ローマンズ、アンダーリユース

サラサート作

乙、メロディー

マツスネー作

辛、スペンダンス

サラサート作

丙、スピンド

ホツバー作

七、ピアノ、セロ、ヴァイオリン三部合奏

ベートーヴェン作

五、絃樂五部合奏

ヴァイオリン ユンケル、同 安藤幸子
ヴィオラ 幸田延子、セロ デビス

作品三十八

(○)ピアノはトロロヴィツチ夫人、セロはニツコー、ヴァイオリ

ンはローチクとヴィネツチが弾いたのである。ピネウイツチ

は去る四十二年に渡來したるヴァイオリストである。

三月二十日 東京ファイルハーモニー會第五回演奏會 於帝國

ホテル

一、三部合奏曲

ピアノ フヒオ、ヴァイオリン ユンケル

七、ピアノ四部合奏

ピアノ フヒオ、ヴァイオリン ユンケル

セロ ウエルクマイステル

第三、第四段

ヴィオラ 幸田延子、セロ ウエルクマイステル

第一段

チャイコフスキー作

第三、第四段

ブラーム作

○當時樂壇の聴き物とされてゐた音楽會であるが、會場は銀座芝居のやうなステージで、天井は高く音の反響は堅く、一體にバラック式で大いに不愉快だつた。殊に第一の曲の途中迄は人が、がや／＼してよく聞きとれなかつた。併し總體としては非常に面白かつたといふて居る。(音楽)

三月二十二日 私立女子音楽學校日本音楽協會聯合春季音楽演奏會 於青年會館

一、合唱

卒業生及生徒

常盤

ヤコブス、アルカデルト作 武島作歌

二、ピアノ獨奏

普通科卒業生 古 谷

ソナタ ト短調

ベートーヴェン作

三、ヴァイオリン合奏

卒業生及生徒

マルシ、ダタアライ

メンデルゾーン作

四、女聲二部合唱

卒業生及生徒

春の山

ウエーベル作、中村秋香歌

五、ピアノ獨奏

普通科卒業生 吉 村

スケルツォ

シュエーベルト作

六、獨唱

普通科卒業生 園 越

A、アデイウ B、アムメエヤ

シュエーベルト作

七、ヴァイオリン二部合奏 ヴァイオリン科 卒業生 阿保、内海

ソナタ(ムーソライト)

アレグレット

モツアルト作

八、獨唱

本科卒業生 伊 藤

A、フリユウリングスグラウベ

シュエーベルト作

B、ズライカ

メンデルゾーン作

九、絃樂三部合奏

原、阿 保

トリオ、ロオマンヌ及ロンドオ

マ ザ ア作

一〇、絃樂三部合奏

吉澤謙師、原、阿保

A、ラルゴ

ヘン デル作

B、メニユエツト

ベートーヴェン作

一一、女聲三部合唱

卒業生及生徒

田毎の月

クルシユマン作、旗野歌

一二、ピアノ獨奏

本科卒業生 伊 藤

ノクチュルネエ

シヨパン作

一三、獨唱

謙師 船 橋 榮 吉

アンデイライエル

シュエーベルト作

一四、箏曲 竹生島

謙師 清 水 金 太 郎

一五、獨唱

謙師 清 水 金 太 郎

エールケエニツヒ

シュエーベルト作曲

一六、ピアノ獨奏

謙師 深 田 柳 吉

ソナタ(ムーソライト)

ベートーヴェン作

一七、合唱

歌劇オルフォイス中の合唱

(第一及第三十一番)

○最初と最終の合唱指揮は清水で、鋭角的のタクトと批評してゐる。また一般の音楽のスタンダードが年毎に上つて来て年々の進境が目覚ましいほど目に見えて来る。(音楽)

三月二十二日 東洋音楽學校第二回卒業演奏會

一、絃樂合奏 マサニエロ

二、合唱 橋の薫(其一)櫻井驊

三、ピアノ獨奏 ロンド

四、男聲二部合唱

五、ヴァイオリン獨奏

インテルメッツォ

六、女聲二部合唱

花

七、ヴァイオリン二部合奏曲

八、合唱 橋の薫(其三)菊水の響

九、絃樂合奏 ローマンス

一〇、二部合唱 旅の夜

一一、ヴァイオリン獨奏

卒業生と生徒

グルツク作

研究會 譯歌

一、獨唱 花樂

二、オルガン獨奏

三、ファンファレー

一四、ピアノ獨奏

一五、合唱(絃樂伴奏付) 陸摩湯

三月二十五日 上野校卒業演奏會 於上野校(曲目は東音校の部参照)

飯田隆健

飯淵渡邊

松平文子

マスカンニ作

宮田高木

町田石川

アレイエル作

ケルビニー作

遠藤和

松平須田

遠藤和

トロメライ

板倉さと子

楠山八重子

一三、オルガン獨奏

一四、ピアノ獨奏

一五、合唱(絃樂伴奏付) 陸摩湯

三月二十五日 上野校卒業演奏會 於上野校(曲目は東音校の部参照)

四月二十二、三日 學友會春季演奏會 於東京音樂學校奏樂堂

一、合唱

甲、近ける友

乙、神言

二、オルガン獨奏

クライネ、ブレルデイウム、ウンドフーゲ

三、ヴァイオリン獨奏

アムプロムチエ

一、低音獨唱

二、低音獨唱

三、低音獨唱

四、低音獨唱

五、低音獨唱

シユーマン作

板倉さと子

楠山八重子

一三、オルガン獨奏

一四、ピアノ獨奏

一五、合唱(絃樂伴奏付) 陸摩湯

三月二十五日 上野校卒業演奏會 於上野校(曲目は東音校の部参照)

四月二十二、三日 學友會春季演奏會 於東京音樂學校奏樂堂

一、合唱

甲、近ける友

乙、神言

二、オルガン獨奏

クライネ、ブレルデイウム、ウンドフーゲ

三、ヴァイオリン獨奏

アムプロムチエ

一、低音獨唱

二、低音獨唱

三、低音獨唱

四、低音獨唱

五、低音獨唱

五、ピアノ獨彈

ソナータ作品第三

藤田愛子

一、二、合唱
ベートーヴェン作
シューマン

會員
ハイドン作

六、ヴァイオリン獨奏

アンダンテレリジオーソ作品七〇

杉山長谷夫

四月二十二日 基督教女子青年會基本金募集音樂會 於帝國
ホテル カペルマン、ピアノ、ルース獨唱、ロイター教師出演
四月二十三日 東京フイルハルモニイ管絃俱樂部員歡迎の大
演奏會 於仙臺第二高等學校講堂

七、女聲二部合唱

甲、ウアンドラース、ナツハトリードルーピンシタイン作

原のぶ子、林とよ子

乙、デル、エレゲル

同

一、校歌
會員

八、ピアノ獨彈

ファンタジー、オウ、カブリツス

小泉千賀子

一、絃樂合奏
春の夢
フイルハルモニイ會員
パツハ作曲

九、高音獨唱

ドン、ファン中のツエルリーネのアリア

青山なみ子

一、合唱 花
自助館生徒
フイルハルモニイ會員

一〇、セロ獨奏

コンセルト第一、二

多基永

一、獨唱
夜響の巡邏
マダムサイフル

一一、ヴァイオリン獨奏

コンセルテノ中のアンダンテ

末吉雄二

一、ヴァイオリン獨奏
東北學院生徒

番外 ピアノ獨彈

ツエー、モール、ファンタジー

ベツツォールド教師
シュニーマン作

一、絃樂合奏
サンバ歌劇拔萃(理想曲)
フイルハルモニイ會員

同 獨唱

エルザの夢(歌劇、ローエングリンより)、ワケヘル作

一、合唱
聯合各専門學校

響き泉(歌劇、フィガロの婚禮より) モツアルト作

一、絃樂合奏
ミニユエツト
フイルハルモニイ會員
ホツケリニイ作曲

一、合 唱	宮城女學校生徒	一、君ヶ代	會 衆 一 同
一、管絃樂	ファイルハルモニー會員	四月二十八日	好樂會演奏會 於青年會館
婚禮行進曲	メンデルゾーン作曲	一、絃樂四部合奏	會 員
一、琴 新青柳	琴 伊藤かよ子、同 山下松華、三絃 山下松琴	A、ソルネンシャイン	シ ユ ー マ ン 作
一、オペラ	會 員 有 志	B、ルール	パ ッ ハ 作
一、琴 七小町	琴 島松園、同佐藤千鶴、三絃 山下松琴	二、男聲三部合唱	テ ノ ー ル ー バ リ ト ン ー バ ス ニ
一、絃樂合奏	會 員	春のたそがれ	マ ラ ン 作
ローマンヌ	ウエルクマイステル作曲	三、ヴァイオリン獨奏	會 員 阿 保 徳 哉
一、合唱 暴風	尚綱女學校生徒	ベルソース	ゴ ダ ー 作
一、コントラバス獨奏	カヴァティネ	四、絃樂三部合奏	ヴァイオリン、ヴィオラ、セロ
一、男聲四部	會 員	トリオ第三番	マ ー ザ 作
一、管絃樂合奏	ワルツ	五、ヴァイオリン合奏	會 員
一、ピアノ獨奏	ハン セン女	A、ブリテイッシュグラナデー	作 者 未 詳
一、絃樂合奏	ファイルハルモニー會員	B、ヨハンフランパリス	ポ ー ル デ ン 作
一、マサニエロー歌劇拔萃曲	ヲーベル作	六、絃樂三部合奏	ヴァイオリン、ヴィオラ、セロ
一、絃樂合奏	ファイルハルモニー會員	トリオ第六番	マ ー ザ 作
ポルカ	バイエリ作	七、男聲三部合唱	會 員
一、絃 樂	ファイルハルモニー會員	ふるさと	モ ッ ア ル ト 作
東京行進曲	ウエルクマイステル作	八、獨唱(テナール)カスリーン、マヴェールニーン島	田 英 雄
一、閉會の辭	林 會 長	九、セロ獨奏	飯 田 賢

ノクターン

一〇' 獨唱(チナー)

ニーナ

一、 絃樂四部合奏

A、 ラーモ

B、 メニエント

一二' ブリノ獨奏

ロンド、カプリシオン

四月二十八日

1. Overture z. Op.: "Tunlauer und der Sängerkrieg auf der Wartburg".....R. Wagner

2. Drei Stücke aus der Op.: "Feramors".... A. Rubinstein.

a) Bajodoretanz.

b) Lichteranz der Bräute von Kaschmir.

c) Hochzeitsanz.

3. Zweite ungarische Rhapsodie.....Fr. Liszt.

4. Jubel-OuvertureC. M. V. Weber.

5. Balletmusik d. a. Op.: "Aurstin"H. Marschner.

a) Allegro con spirito.

b) Allegro risoluto.

ホルターマン作

淺香 謙三郎

スルモレーセ作

ヘンデル作

ハートウヴェン作

小林 禮

メンデルソーン作

於帝國ホテル

e) Allegretto gracioso.

G. Grosse Fantasie a. d. Op.: "Madame Butterfly."

.....G. Puccini.

○ 軍樂隊は獨逸では第二流だそうだが其の奮揚として迫らない態度は實際證據に價する。指揮者としてのリヒターは派手なシユキイケルと對照して其指揮振に一層の光彩を添えさせた感がある全く崇敬である。

事も附加したい。(音楽)

四月二十九日 淺草高等工業學校第五回春季演奏大會於同校

一、 ヴァイオリン合奏

甲、 イルシ、グターリ

乙、 ヨハンセン、ホンバリ

二、 男聲四部合唱

丙、 トウワー、ローゼン

三、 オルガン獨奏

クローリア、イン、エタセンセ

四、 獨唱

テイー、バイデン、グレナティール

五、 絃樂四部合奏

器樂部員

メンデルソーン作

ガイデル作

器樂部員

ラーナー作

大岩 逆

ハイドン作

小島兵太郎

レニーマン作

器樂部員

甲、ソクネンシヤイン	シニユーベルト作	マヅルカ	ウイニアッスキー作
乙、ルーレ	バツハ作	一五、獨唱	樋口信平
六、合唱	聲樂部乙部員	アリア(ツァーベルフルーテ)	モツアルト作
ローレライ	ジルヘル作	一六、セロ獨奏	飯田實
七、ピアノ獨彈	増戸憲雄	ノクターン	ゴルトマン作
エーゲルリード	メンデルゾーン作	一七、獨唱	カスリン
八、ヴァイオリン獨奏	鍋島卯八	一八、絃樂四部合奏	マヴールニン
甲、アングダンテ	モツアルト作	甲、ラーゴ	吉澤、阿保、内海、飯田
乙、フィナーレ	ドニゼシチ作	乙、ミニユエツト	ヘンデル作
九、男聲四部合唱	聲樂部員	一九、ピアノ獨奏	ペートーヴエン作
ソクメルモルゲン	ハウプトマン作	ロンド、カブリツォ	小林禮
一〇、清樂合奏	清國留學生部員	〇四月二十九日 横濱音樂院春季音樂會	メンデルゾーン作
甲、浪淘沙 乙、柳腰金		一、ヴァイオリン二部合奏	於横濱羽衣座
一一、絃樂三部	器樂部員	A、愛國心 B、ヴァングダンス	三根いままゑ、會員
トリオ	マザール作	二、獨唱	榮田環子
一二、男聲三部合唱	聲樂部員	A、夜のしらべ	グーノー作
甲、山居樂日	フォルクスウアイゼ	B、ヘルゲブリツヘス、シユテンドヘン	ブラームス作
乙、春 曉	ハイドン作	三、ヴァイオリン獨奏	ユンケル
一三、男聲二部合唱	ホイスパーリングホープ	A、ローマンツエ	ルービンシユテイン作
千野、藤井	吉澤重夫	B、マヅルカ	ウイニアウスキー作
一四、ヴァイオリン獨奏			

四、ピアノ獨奏

A、カーナヴァル

B、ノクターン

五、獨唱

カロ、ノーマ(リゴレット)

六、獨唱

アルセスタ中のアリア

七、ピアノ、ヴァイオリン合奏

スート

第二部及番外は總て日本曲なれば略す。

五月三日 桐生の高専女學校 東京音楽學校學友會女子部の

旅行團の演奏會

一、合唱

賤のおだまき

一、オーガン獨奏

クライネ、ブレルーアウム、ウन्द、フーゲ

一、獨唱(高音部)

アツハ、ノツホ、アインマル

一、ピアノ獨奏

ファンタジー、オウ、カブリッス

ベツオールド

グリーク作

シヨパーン作

柴田環子

ヴェルデー作

ベツオールド

アルツク作

ベツオールド、ユンケル

シュエツト作

一、獨唱(高音部)

バルビエル中のカヴァティナ

一、ピアノ獨奏

甲、ブレルユード

乙、同

一、獨唱(高音部)

甲、リターナイ

乙、四葉のクローヴァー

一、ピアノ獨奏

パピヨンス

一、合唱

贊詩

五月二十日

海牙デー祝賀音楽會

短二調

ヴァイオリン

二、高音部獨唱

甲、ロジーナのカヴァティーナ

乙、セレナーデ

三、ピアノ獨奏

青山浪子

ロツシニー作

松島桑子

シヨパーン作

同

中島かね子

シュューベルト作

ロイテル作

松島桑子

シュューマン作

會員

島居忱作歌、アプト作

帝國ホテル

ピアノ ベツオールド

メンデルゾーン作

セロマイステル

柴田環子

ロツシニー作

グノー作

ベツオールド

- | | | | |
|-------------------------------|---------------|-------------------------------|-----------|
| 甲、ノクターン | グリック作 | 四、歌劇「ファウスト」拔萃曲 | グノー作 |
| 乙、ヴァルス、アムプロムチユト | リスト作 | 五、空色の童 舞踏曲 | アイレンベルヒ作 |
| 丙、バルカロール | シヨパン作 | 六、歡喜 大序曲 | ウエーバー作 |
| 四、ヴァイオリン獨奏 | ユンケル | 七、歌劇「魔笛」拔萃曲 | モツァルト作 |
| 甲、アングァンテ、レリジオーゾ | トメ作 | 甲、愉快の會合 綜合曲 | ウイントーベルヒ作 |
| 乙、ガヴオツト | リース作 | 乙、ヒアワザ 行進曲 | モリート作 |
| 五、高音二部合唱 | ベツオールド、柴田環子 | 三月廿八日 サルコリー主催にかゝる聲樂音樂會 於帝國ホテル | |
| レ、ボヘミーネ | ブラームス、ヴァイアルド作 | | |
| 六、ヴァイオロン、チエロ獨奏 | ウエルク、マイステル | 一、合唱 常盤 | 帝劇歌劇部員 |
| ソナタ | ボツケリニ作 | 二、獨唱 イエルサレム | 齋田文子 |
| 七、高音部獨唱 | ベツオールド | 三、獨唱 ワンドラア | 小林啓吉 |
| 甲、ローマンズ、ドウ、ミニヨン | アムプロアー、トーマ作 | 四、獨唱 魔笛 | 柴田環 |
| 乙、トロイエ、リイベ | ブラームス作 | 五、獨唱 アイダ | サルコリー |
| 丙、ワルデスケスブレツヘ | シニューマン作 | 六、ピアノ獨彈 | トコロウイツチ |
| 八、ピアノ、ヴァイオリン合奏 | ベツオールド、ユンケル | イ、バルカローレ | ロ、ラブソデイ |
| ソナタ | グーリク作 | 七、ヴァイオリン獨奏 | ロンドカプリシオ |
| 五月二十一日 日比谷公園音樂會 海軍々樂隊 指揮者赤崎彦二 | トバニー作 | 八、獨唱 オー、ホアイ、ソー、スーン | 増田里子 |
| 一、鐘馬王 行進曲 | ラターソン作 | 九、獨唱 ルチア、ドラマ、メルムーア | 柴田環 |
| 二、樂しき生涯 序曲 | ストラウス作 | 一〇、合唱 イ、秋の夕暮 | ロ、オルフォイス |
| 三、さても麗はしき五月かな 圓舞曲 | | 三月廿一日 校友第九回議會 於岡山縣立岡山高等女學校 | 帝劇歌劇部員 |

(其の音楽の部のみを抜萃)

- 一、合唱 甲、梅 一年い組 乙、夜 一年は組 全體
- 二、獨唱 甲、子守歌 乙、燕 一年ろ組 則武直枝
- 三、オルガン合奏 三年ろ組 毛利、門内、有松、神山、平賀
- 甲、ドノウ河の謎 乙、ロチエスターマーチ
- 四、合唱 甲、ながれ 乙、松上の鶴
メンデルゾーン作 二年い組 二年ろ組 二年は組
- 五、オルガン獨奏 四年い組 長島 久 恵
クラプエル ソナタ モツアルト作
- 六、ピアノ獨奏 四年い組 竹 井 郁
ソナチネ クレメンテー作
- 七、絃樂四部合奏
甲、ヘール コロンピヤ マーチ
第一ヴァイオリン 岡田、安原、渡邊榮
乙、クラウン プリンス グランド マーチ
第二ヴァイオリン 池田、本郷、佐々木、片桐
ヴィオラ 赤尾教諭、セロ 來賓、ピアノ 來賓
- 八、合唱 三年 全體
甲、螢の歌 フ ラ ー 作
乙、春興 モデンニー作
- 九、オルガン合奏 井上、遠山、小山、小牧、池上、迫藤

- 甲、ガボット パ ッ ハ 作
- 乙、センチニアル マーチ
- 一〇、ヴァイオリン合奏 一部 片山、尾關 二部 尾谷、高谷
甲、カックラー ダンス ハ ッ ト ン 作
乙、安南王行進曲
- 一一、ピアノ連弾 森幹子、伊達富士
- 甲、ウエディング マーチ メンデルゾーン作
- 乙、ウキンナマーチ
- 一二、ヴァイオリン獨奏 本 遊 龜 江
甲、ラーゴー ヘ ン デ ル 作
- 乙、デ、クシコス、ボスト「ギヤロツプ曲」 ネ ッ ケ 作
- 一三、獨 唱 四年い組 岡 玖 磨
- 甲、ザ、クリスマス、メンエザ 乙、晝の夢
- 一四、合唱 四年い組 四年ろ組 全體
- 甲、深夜の都會 ライヒアルツ作
- 乙、春 曉
- 三月廿六日 音楽奨励會第五回演奏會(産樂會) 於華族會館
- 一、フライシユツツ中のエーレンヒエンのアリア ウエーバー作
中 尾 龍 子
- 二、アム メーア シニューベルト作 澤 崎 定 之

三、ピアノ獨奏

ロンド、カプリチオゾ メンデルソーン作

永田 たま子

四、ラ、ガツア、ラドラの Aria、ロツシニー作 林 豊子

五、ブール、デイチエテイ ロツタイー作 齋藤 花枝子

六、a、ゴウンネ、デル、ゼームート b、イム、ヘルバート

フランツ作 澤崎 定之

七、セミラミス中のカヴァティナ ロシニー作 林 豊子

八、ピアノ獨奏 小泉 千賀子

プレリユード ショパン作

九、セレナーデ グノー作 齋藤 花枝子

一〇、バアピアノ、フオン、 中尾 龍子

セヴィラ中のカヴァティナ ロツシニー作

四月十九日 慈尊音楽會 於帝國ホテル

一、高音獨唱

甲、オー、ホワイ、ソー、スーン 増田 さと子

乙、御身は花の如し

二、次中音獨唱 シューベルト作曲

ボヘーメ ル サコリー

三、高音獨唱 プチニール作

ヴァリアチオネ(英語) 柴田 環子

ア ク ア作

四、高音獨唱

メロデー

ド・ヌヴェイナ

五、高音獨唱 シューマン作

ル、ニル ド・ヌヴェイナ

六、次中音獨唱 サビトルルロー作曲

マダム、バツターフライ サルコリー

七、高音獨唱 プチニール作

マルガレッツテ(ファウスト) 柴田 環子

八、ピアノ連弾 ケ ノ ー作

い、ワルツ る、エチユード ショパン作

九、二部合唱 ド・ヌヴェイナ夫人 サルコリー

カバレリア、ルステイカーナ マスカニー作曲

四月十四日 日比谷公園音楽 海軍々樂隊

一、ロートリングル 行進曲 ガンネ作曲

二、陽氣な女房 歌劇序曲 ニコライ作曲

三、チヨコレートソルザヤー 歌劇拔萃曲 ストラウス作曲

四、ダラー、プリンセス 四舞曲 ロツテル作曲

五、蘇格蘭の記憶 拔萃曲 ゴットフレイ作曲

六、ハンズサククス 歌劇序曲 ロツティンゲ作曲

七、ラー、マノラ セレナーテ曲 アイレンベルグ作曲

番外 汐波み

ハ カバレリヤ、ルスティカーナ

マスカニー作曲

四月十六日 午後七時半より有樂座に於て、東京フヒルハル

モニー會第八回演奏會

一、ピアノ、ヴァイオリン、セロ合奏 ピアノ フェーオ

ヴァイオリン ユンケル、セロ ウエルクマイステル

短に調三部合奏曲

アレンスキー作

二、獨唱

柴田 タマキ

歌劇 オデッセウス中のアリア

ブルツ 作

三、絃樂四部 ユンケル、川上、大塚、ウエルクマイステル

甲、カンタビーン

チャイコフスキー作

乙、メヌエット

ボケリニー作

丙、トウロイメライ

シユーマン作

四、ピアノ獨奏

ハーグローヴ

短と調ラブソチー

ブラームス作

五、セロ獨奏

ウエルクマイステル

短い調コンセルト

ダビド 作

六、獨唱

青木

甲、イトウ、イズ、イナツフ(エライヤヤ中のアリア)

メンデルゾーン作

乙、湊の千鳥

七、ピアノ獨奏

甲、タンドル、ア、ヴー

乙、スケルツォ

八、獨唱

甲、歌の翼の上に

乙、ブラブユラのヴリアチオン

九、ヴァイオリン、ピアノ合奏

ユンケル、フェーオ

五月五、六日 東京聯合大演奏會 石原重雄主催 於木挽町

歌舞伎座

第一日(五月五日)

一、三部合奏

ピアノ ロイテル、ヴァイオリン ユンケル

セロ マイステル

ムーブメント

二、ソプラノ獨唱

ホルクマン作

コーン、エ、ベツロ

柴田 環 女

三、ヴァイオリン獨奏

ドロゼツテイ作

マヅルカ

窪 兼 雅

四、セロ獨奏

ザルブイツチ作

トロテール作

ハーグローヴ

シユツト作

メンデルゾーン作

柴田 タマキ

メンデルゾーン作

ローデ作

- 甲、アンダンテ
乙、タランテラ
五、テナー獨唱
甲、マダム、バターフライ
乙、リゴレット
六、ヴァイオリン獨奏
甲、アンダンテ、レリザオン
乙、インドリエラア
七、ピアノ獨彈
甲、ヴァルス、ミニオン
乙、シャツテン、タンツ
八、二人迷唱 ザルコリー、ボヘメ、ブツチニー作 柴田 環
九、歐洲管絃樂
甲、コロネーションマーチ 東京オーケストラ
乙、フラ、ディアボロ オーベル作
一〇、三曲合奏 松竹梅
一一、於伽歌劇 素歌合唱 ドンブラコ(桃太郎) 北村季晴初子外十數名
一二、哥澤 住吉、夕立、初紫、綱は上意
一三、歐洲管絃樂 東京オーケストラ
- ゴルターマン作
ボツパー作
ザルコリー
ブツチニ作
ヴェルデイ作
ユンケル
トーメ作
リース作
ロイテル
シユツツ作
マツクダウエル作
東京オーケストラ
環
柴田
- ゼ、メリーウキドー
一、三部合奏 ピアノ、ベツオルト、ヴァイオリン
二、バリトン獨唱
三、ヴァイオリン獨奏
四、ピアノ獨彈
五、ソプラノ獨唱
六、セロ獨奏
七、ピアノ獨彈
- セロ
マイステル
メンデルゾーン作
清水 金太郎
シユーベルト作
シユーベルト作
ユンケル
スヘンゼン作
ポーム作
澤田 柳 吉
メンデルゾーン作
シヨパン作
ベツオルト
ワグネル作
マイステル
ベツキヤル作
ゴンズ作
ベツオルト

第 二 日 (五月六日)

甲、バラッド ショパン作
 乙、ラツブツディ リスト作
 八、歐洲管絃樂 東京オーケストラ
 甲、フキガロ モツアルト作
 乙、ユニヴァーサル、ピース、マーチ ランベイ作
 九、歐洲管絃樂 東京オーケストラ
 モーゲンプレツター、ヴァルツ ストウラウス作
 (以下省略)
 五月十六日 東北學院創立二十五年記念集會第一音樂會
 ランデスのピアノノ獨彈が主なるもの。
 五月二十六、七兩日 本願寺音樂部第九回春季演奏會と樂團披露會 於大連市演藝館
 五月二十七日 櫻風會音樂會 於女子大學新講堂 ベツツオールド出演す。
 五月廿七、八日 東京音樂學校春季演奏會 於同校音樂堂
 五月二十八日 午后三時半 日比谷公園演奏 戶山學校軍樂隊 指揮者永井建一
 一、デモドン河の城跡 行進曲 アリエー作
 二、紺青の花菖蒲 ヴァルス ドオリング作
 三、田舎娘 カントリー、ガール新歌劇 モンクトン作

四、樹下の音樂會 管絃式序曲 メーエー作
 五、野師の群 サルタンバンク喜歌劇斷片 ガンヌ作
 六、A、律旋と追調と メロディとフウガ メンデルゾーン作
 B、其日の白薔薇 幻想樂 ヘンメルレー作
 七、藝者 日本趣味の新歌劇 ジュンヌ作
 八、花やもめメリーウイドー劇的ヴァルスリ ハーレル作
 六月三、四日 雅樂及洋樂の演奏會 於宮内省雅樂研究所
 一部は全體雅樂なれば略す。

第二部 歐洲樂

一、管絃樂 オーヴアチエーアウイリアム、テルロツシニー作
 二、阿 歌劇マダム、バツターフライの接續曲 アツチニー作
 三、管樂器六部 古代佛蘭西舞蹈曲 シエーレル作
 一、ポーレ 二、サラバンテ 三、ミニユエツト
 四、管絃樂 ダンス、マカブレ サンサンヌ作
 五、絃樂五部
 イ、アルレージエンヌ アダジエツト ビゼー作
 ロ、ウル、ウイイーネル、ホルカ シーレル作
 ○雅樂の管絃は何れも趣味がある、あまり技巧の末節に流れない處が何よりも聽き心地がよい、某夫人のガヴァテイナーやアヴェマリアよりも我が國の一曲の方がどの位藝術の眞意

に副つてゐるかわからない。勿論自分は奏者の精神について云ふのである云々。

第二部の歐洲樂は(一)、は少しごた／＼した。(二)(三)は管が美しく殊に(三)は面白い曲であつた。等と皆、讀辭ばかりであるから略す。(音樂)

六月七日 美音會の於二十四回演奏會 於有樂座

一、唱歌及ヴァイオリン 唱歌 柴田環、ヴァイオリン

エレオラランデイス、ピアノ伴奏 ラパウ、ランデイス

秋の歌、春の歌 獨人 ワ イ ル 作

二、ヴァイオリン獨奏

ロマッツ曲 丁抹人 スヴエンドセン作

ウエニスの舟唄 獨人 リ ー ス 作

三、ピアノ獨奏

子守唄 波蘭人 ショ バ ン 作

四、獨唱

胡蝶の歌 英人 コーベット作

寶石の段(歌劇ファウスト拔萃) 佛人 グ ノ ー 作

五、長唄 新古演劇十種の三内 蜘蛛

六、二曲 田植幸

七、踊り 蒔の榮 衣裳背景を用ふ

六月十日 津田英學塾の基金募集の音樂會 於築地の立教高等女學校

ワットニー女のピアノソロ。ルース女の獨唱、山田女の獨唱が主なるもの。

六月十一日 女子音樂學校同校樂媛會演奏會

一、三部合唱 會 員

春興 勝間霞舟歌 マツジンキ作

二、ピアノ獨唱 犬 井 英 夫

ソナテイネ デエセツク作

三、ヴァイオリン獨奏 モデラート 山 本 義 雄

四、ピアノ獨奏 高 野 靜 子

ソナテイネ クレメンテイ作

五、獨唱 那 須 は ま 子

ハイデン、レーゼライン シニューベルト作

六、ピアノ獨唱 廣 部 好 子

ソナテイネ クーラウ作

七、オーガン獨奏 那 須 は ま 子

フエネラル、マーチ ベンダー作

八、三部合唱 會 員

甲、神 靈 本 居 豐 顯 歌

乙、君は神

九、オルガン獨奏

インヴオケーション

一〇、三部合唱

幻燈

番外 箏曲 四季の詠

獨唱 デル、クロイツツプフ(シュニーベルト) 清水金太郎

ピアノソロ ファングジア、オウ、カブリツス 澤田柳吉

四部合唱

甲、ワツセル、フアールト

乙、リツテルス、アプシート

六月十一日 岡山縣師範學校主催第二回岡山音楽演奏會

於岡山縣同校講堂

一、合唱

甲、ながれ 乙、曉の鐘(人聲伴奏)

二、ヴァイオリン獨奏

甲、ツレ、ジヨルニ 乙、ツ、ネクスト、ピン、イヒ

三、オーガン獨奏 ガボツト

四、獨唱 笛の音

五、ピアノ聯彈

ペーリーヴェン作

杉 隆 子

レーメンス作

合 員

ガ ブ ン作

來 賓 有 志

メンデルゾーン作

キンケル作

女子師範生

日 置 重 子

藤 原 万 三 良

水 野 康 孝

大 倉、富 岡

甲、ウインナマーチ

乙、パリセル、インツークシマーナ

六、ヴァイオリン獨奏 デイヤヴオロ

七、オーガン獨奏 ソナタ

八、ピアノ四部合奏ピアノ 飯島、一ヴァイオリン 大倉、富岡

二同 新谷、グイオラ 赤尾、セロ 小笠原

甲、ナシヨナルガードマーチ 乙、センチアルマーチ

九、男聲四部合唱 明治の大御代

チナー 小笠原、新谷

一〇、オルガン獨奏

甲、神巫の合唱曲 乙、ヒュネラルマーチ

一一、ヴァイオリン合奏

甲、アレグロ 乙、レ、タムボラン

一二、四部合唱

甲、里祭 乙、海邊の眺望

一三、オルガン獨奏 ヌナタ

一四、ヴァイオリン合奏

甲、ブレイゲラ 乙、ジブシーマーチ

一五、獨唱

甲、オー、ホワイ、ソースーンザローズカンフレンド

山 本 宮 子

森 下 茂 子

大 倉、富 岡

赤 尾、セロ 小 笠 原

新 谷、グイオラ 赤 尾、セロ 小 笠 原

チナー 小 笠 原、新 谷

藤 原 忠 晴

赤 尾、小 笠 原

富 岡、大 倉、小 笠 原、赤 尾、飯 島

新 谷 八 太 郎

大 倉、富 岡、小 笠 原、赤 尾、新 谷

富 岡 靜 女

乙、落花

八、ピアノ四部 ハレルヤ ピアノ 富岡、ヴァイオリン

大倉、新谷、飯島、ウイオラ 赤尾、セロ 小笠原

○演奏したものが大した曲でないが、當時師範の音楽會としては非常に變化に富んでゐたものである。

六月十六日 東京フィルハーモニーソサイティー第六回音楽

演奏會 於帝國ホテル

一、ピアノ四部 ピアノ ロイテル、ヴァイオリン ユンケル

同 幸田延子、セロ マイステル

變ホ長調(第一と第四樂句) ドウヴオツルシヤツク作

二、獨唱 柴田環子

フリスヨーフ中のアリア マツクス、ブルツプ作

三、絃樂四部 ユンケル、安藤幸子、幸田延子、マイステル

A、ヴァリエーシヨンス シューマン作

B、メヌエツト 同

四、ピアノ獨奏 ロイテル

A、ノヴェレット(第七) シューマン作

B、サンク、ウイザウト、ワルツ チャイコフスキー作

C、ワルテストラウシエン リスト作

D、トクタ デブツシー作

五、獨奏(高音)

A、ヘルプストリード 柴田環子

B、フリエーリングスリード 同

ヴァイオリン、オブリガード ユンケル

六、ピアノ五部 ロイテル、ユンケル、安藤幸子、幸田延子

ウイルクマイステル

短(調(第一及第四樂句) プラームス作

六月廿五日 日比谷公園奏樂 英帝戴冠式奉祝の意を加へた

演奏 戸山軍樂隊長永井建子指揮

一、行進攻守同盟 チュリータ作

二、土耳其の後宮に携帶せられしイルリオの序 セラグ作

三、メリウキドー 花やもめ劇 リハール作

四、ヴァルス 青葉茂れる郷土に クレアン作

五、大歌劇 タンホイセル ワケネル作

六、新劇ワアルツ、ドリーム 舞踏の夢 ストラウス作

七、ボレロ式ビビユラル、エスパナ舞 シアブリエー作

八、英吉利回想 其三

終りに英國々歌と君が代

○第五タンホイセルは三十八年の音楽堂開きに演じてゐるが其

他は全部初演のものである。

六月二十九日

伊澤修二還暦祝賀演奏會 於東京音樂學校

五、涼しい森

アイレンベルヒ作

一、伊澤修二還暦祝賀會祝歌

本校生徒

六、フライシユツフ

ウエーベル作

一、ピアノ獨奏

神戸絢子

七、行進曲 競争會

ウエーベル作

スピンネルリード

ワグネル作

八、コロンブス阿米利加發見

一、ピアノ、ヴァイオリン合奏 フアンタチア

幸田延子

七月十五日 大阪音樂俱樂部主催 中の島公會堂に開かれた演奏會

ビニーターン作

安藤幸子

七月一日 明治音樂會第五十五回演奏會

於神田青年會館

一、管絃樂 獨逸國民歌集

小島賢八郎編曲

一、管絃樂 歌劇ウイリヤムテルの序曲

ロシニール作

二、合唱 甲、夜 乙、忠臣

コーラス會員

二、同 胡蝶夫人の拔萃

ブチニール作

三、ヴァイオリン獨奏

頼母木駒子

三、管絃六部合奏 アレセイネ

ビゼー作

甲、アンダンテレジョーン

トールメ作

子守唄

ラタシ作

乙、カプリス

ボーム作

羅也納のポルカ

ケエラー作

四、ピアノ獨奏

神戸絢子

四、管絃樂 扮鬼舞踊

サンサーン作

ヴェーソー、フアントム(幽霊船)

ワケネルリスト作

番外 殘月 一絃、尺八

川瀬、小曾根

五、小管絃樂

楠部、林、蒼野、新納、高濱、大村

說教師及操人形 高野山

若山若太夫

シユルンメルリード

ツーレン作

七月十五日 日比谷公園奏樂 海軍々樂隊

六、ヴァイオリン獨奏

頼母木駒子

一、蜂の巢行進曲

ストラウス作

第九コンセルト

ベリオ作

二、歌劇 アルビン

ストラウス作

七、管絃樂

音樂俱樂部員

三、ラブーネキレベルト ワルツ曲

ストラウス作

歌劇 十字勳章の由來

マウベル作

四、ジノラ粉挽き水車の歌劇 幻舞曲

ストラウス作

八月十九日午後七時

東京音樂講演會第一回演奏會 於神田

青年會館

- 一、ピアノ獨彈
ノクダーン
- 二、獨唱
デイ、アルマツハー
- 三、ヴァイオリン獨奏
セレナーデ
- 四、獨唱
ロマンツエ
- 五、ピアノ獨彈
ワルツ
- 六、獨唱
アン、デイ、ムジーク
- 七、ヴァイオリン獨奏
コンセルト
- 八、獨唱
甲、エル、ケーニツヒ
乙、デル、ウアンドラー
- 九、ピアノ獨奏
甲、はるさめ

- 小島左馬太郎
- シヨバン作
- 清水金太郎
- シニューベルト作
- 窪兼雅
- ドウルドラ作
- 船橋榮吉
- ワグネル作
- 澤田柳吉
- シヨバン作
- 船橋榮吉
- シニューベルト作
- 窪兼雅
- サイツ作
- 清水金太郎
- シニューベルト作
- 同
- 澤田柳吉

乙、ムーンライトソナタ(終章)

ベートーヴェン作

○この會は清水、船橋、澤田、窪等が新しく組織したものである。鑑賞するに誰にも解り易い講演を加へたなら、現今の我が洋樂界に裨益する處が大であるといふ見地から成立したもので、當夜の演奏は上乘のものと言へないが、聴衆を集めるに困難な時期に於てあれだけの音樂會を見たのは成功と言はねばならぬ。講述は少し長すぎた感がする云々。(音樂)

八月二十日 東京音樂院演奏會(講習終了式を兼ねて)金須、天谷、島田等の演奏が主なもの。

八月二十日 女子音樂學校夏季講習會終了音樂會 於同校

八月十二日 東京音樂學校夏季講習會演奏會 於同校講堂

管絃樂歌劇イフヒゲニア大序グルツク作。獵夫の夢、トバテ作。

カルメン雜曲集抜萃ビゼー作。等が演出された。

八月二十四日 慈善音樂會應廳義塾ワグネルソサイテーター員は大

阪土佐堀青年會館に於て開く。演奏者は杉江、杉山、加藤、林、

妹尾等數名。

八月二十六日 日比谷公園奏樂 陸軍々樂隊の演奏 永井樂長

指揮

一、行進健兒中の精兵 ビデガン作

二、歌劇 プレシオザ ウエーベル作

三、新劇 ヴオルツ、テコロレイト好きの兵卒 ストラウス作

四、甲、アダジオ 偶感的ソナタ ベートーヴェン作

乙、ポレロ(バランス)(コーネット、ビュージェル聯奏)

五、大歌劇 ローヘングリン(序と白鶴武士出現の前夜) ブーヴェロリ作

六、序曲 羅馬人のカルナヴァル祭 ワグネル作

七、新劇 ダラープリンセス ベルオーズ作

八、南米殖民地歌集 ランブ作

スワニー河、人做鳥、古里、旅人、豊饒地國歌集等

九月十三日 静岡教會波多野牧師、静岡師範の原教諭等の主催で静岡教會堂に於て開く、清水金太郎、澤田柳吉等出演

九月十八日より約一週間 東京ファイルハルモニーオーケストラ部員の米澤、山形、青森、函館方面に演奏旅行

一、管絃樂 歌劇イフヒギニアの大序 グルツク作

一、同 舞曲ポルカ ベイエル作

一、絃樂合奏 春の夢 パツハ作

一、ヴァイオリン獨奏 ファウスト中のワルツ グノー作

一、管絃樂 獨逸國民歌集

一、フリユート獨奏 ローマンス ウイルクマイステル作

一、管絃樂 軍隊行進 シューベルト作

一、同 ダラーワルツ レオフォーホル作

一、フリート獨奏 アデンの薔薇 ベートーヴェン作

一、絃樂合奏 マサニエロ オーベル作

一、トラムベツト獨奏 ローマンス トリコネー作

一、ヴァイオリン獨奏 スランパリード ゴルダート作

一、管絃樂 ドンファン中の一節 モツアルト作

一、同 夜警巡邏 ボルステット作

一、同 カルメン雜曲集 ビゼー作

一、ヴァイオリン二部合奏 二部合奏曲 マザス作

一、ダブルベース獨奏 カパチネ ラツフ作

一、絃樂四部合奏 セレナーデ ハイドン作

一、管絃樂 獵夫の夢 トベニー作

一、絃樂合奏 歌劇ザンバ拔萃曲 ヘロルド作

一、管絃樂 結婚マーチ メンデルゾーン作

一、管絃合奏 マンフレッド ライネツケ作

○獨奏者ヴァイオリン田中平三郎、フリユート横山國太郎、トラムベツト奥山貞吉、ダブルベース木村仙吾。

九月二十三日 日比谷公園樂樂 陸軍々樂隊演奏樂長永井建

子指揮

一、フワンフアーレ式炬火行進 祭の前夜

二、ヴァイオトマン歌劇 海賊中の要章、ウエルヂ序樂 生活の

樂しみ

三、ボツレール軟和的ヴァルツ 新鮮薈薇

四、チュリイ大歌劇 フルケリー 武連の女神

五、ワグネル新曲行進 日本軍の精華

六、ビゼー 理髮師の大序 ロシニー新劇 ベロニツク

七、長編ヴァルツ 海洋の岸 ブノワース

十月廿一、二日 東京音樂學校學文會秋季演奏會 於同校奏

樂堂

一、合唱

甲、宵の春雨

梁田貞作曲、吉丸一昌作歌

乙、月

瀧廉太郎作

二、ヴァイオリン獨奏

佐藤謙三

三、聲樂三部

蘭部、竹内、梁田

コンファアンツテ中の一節

モツアルト作

四、ヴァイオリン獨奏

筒井ふさ

ロシニ作の主旨に基くヴァリエーション ダンクラ作

五、聲樂二部

ドンファン中の一節

六、ピアノ獨奏

ソナタ作品五三

七、獨唱及合唱

歌劇 アルツエステ中の一節

八、オーガン獨奏

甲、二重フーゲ

九、ヴァイオリン二部

ソナタ

一〇、高音獨唱

歌劇 フライシュツ中の抒情調

一一、ヴァイオリン獨奏

コンセルト第八

一二、ピアノ獨奏

甲、ベルシニエズ

乙、インテルメツツオ

一三、男聲四部

甲、騎士の訣別

中尾、原田

モツアルト作

山田多

ベートーヴェン作

會員

グルツク作

池田河雙

鳥崎赤太郎作

バツハ作

末吉、雨角

ヘンデル作

小笠原保子

ウエーベル作

田中ひさ

ロ一デ作

小倉末子

シヨパン作

ブラームス作

澤崎、船橋、原田、樋口
キンケル作

乙、小夜の歌

一四、絃樂

甲、ラーゴ

乙、ラウレ

番外 ビアノ獨奏

マルシユニエル作
マカニニー、ヴァリーエーション作品三五
ブラームス作
ボルデイーニ作

○此の日文部大臣長谷場純孝、福原次官、田所局長來聽、其他

八百の聽衆である。第一部のヴァイオリンソロの二番と四番とは交代された。第二部の男聲四部は澤崎の急病のため、船橋が代つて獨唱した。ワグナーの「ローエングリン」中のローマンスを唱ふことになつたら伴奏の譜がないため、メンデルソーンの「グリーク、イツヒ、ウンター、テムボイメン」を歌つた。

ロイテルのピアノソロは米國大使館に用件が出来て一四番目に演奏された。第二日目は前日より三十分早く初めた關係かロイテル教師は自分の番に合はず、ベツツオールド夫人が代つてショパンの短と調のバラードとグリークのカーナヴァルを弾いた。しかしロイテルが来て再びロイテルの獨奏もあつた。

○邦人創作曲の發表されたのは珍らしい。八番の甲オルガン二重フーゲは鳥崎教授が滯歐中の作で此の曲は第一のフーゲの

主想が終る後、第二の主想が出てそれが終る時所謂縮奏部で第一、第二の兩テマが同時に現はれて終局になるのである。

合唱「宵の春雨」は、「降るや春雨宵の町、軒の燈火露にぬれて、柳は静かにうなだるゝ、そこも知らぬ物の音はさびしきかな、消えてつゞき、つゞきて消ゆ、たが心を吹きすさむらん。」

「月」は作歌作曲とも、故瀧藤太郎の作「ひかりはいづこ、かはらぬものを、ことさら秋の月かげは、などか人に物思はする。などか人に物思はする。あゝ鳴く虫も同じ心か あゝ鳴く虫も同じ心か こゑのかなしき。」

十月二十二日 日比谷公園奏樂 陸軍々樂隊演奏指揮永井樂長

一、行進曲 秋季行軍 ポポノ 自作

二、序曲 肩かけの金剛石 プリユイエー作

三、歌劇 ミニヨンの獨吟とフォールラータ舞踊 トオマス作

四、グランド、ヴァルス「オツソリーの聲」 プノワース作

(佛の國境オツソー南嶺を水源とする一溪流が幾多の奇狀を呈して絶佳の山容を恣迎す)

五、歌劇 ホフマンの妾 かつファンベツハ作

六、冥想的序樂 アポロー神

ピオロオ作

七、西班牙の軍鼓的歌舞

レツトフォルト作

八、A、アルジエンタ劇の前奏

ピゼー作

B、銅像劇中の聯舞

レイエー作

曲目に解説が付いて居たが省略した、時代が解説を要求してゐるものとも考へられる。

十月二十六日 明治大學音樂會 於同校記念館

新校舎落成と創立三十年記念祝賀の爲の催である。

一、三部合奏

ピアノ ベツツオールド ヴァイオリン

ユンケル、セロ ウエルクマイステル

作品五十三番

ルピンシュタイン作

二、獨唱

タンホイゼルのエリザベスの祈

ベツツオールド

三、ヴァイオリン獨奏

ワグネル作

甲、短二調コンセルト中のローマンズウキニヤウスキー作

乙、ガボツト

リース作

四、ピアノ獨奏

甲、グルツク、ダルケストの歌

ベツツオールド

乙、ワルレンシタツトの湖水

サンサーン作

丙、短二調 ペラーデ

リョバン作

五、ヴァイオリンセロ獨奏

ウエルクマイステル

短二調コンチエルト

ゴルターマン作

六、獨唱

ベツツオールド

甲、夜

トーマ作

乙、カルメン中のハベネラ

ピゼー作

七、三部合唱 ベツツオールド、ユンケル、ウエルクマイステル

ブラームス作

作品八十七番

第二部

○日本音曲なれば省略す。新講堂は音響に對して少も注意を拂つてないためか思はしくない。また來聴者の質が悪いので囁き合ひが多かつた。

十一月五日 音樂獎勵會第六回演奏會 於華族會館

一、ヴァイオリン獨奏

杉山長谷夫

アンダンテレリチオーソフランシス

トーマ作

二、次中音獨唱

船橋榮吉

歌劇 ローエングリン中のローマンズ

リヒャルト、ワグナー作

三、ヴァイオリン獨奏

竹内平吉

エレヂー

ラッソ作

四、ピアノ獨奏

タクマドユルシイ

- イ、ノルウェヂアンブライダルプロセション グリーク作
ロ、ヴァルツ 短ホ調 ショパン作
- 五、ピアノ三部 杉山、竹内、眞名
ロンド 竹内平吉作
- 六、ヴァイオリンセロ獨奏 竹内平吉
ガヴオツテ ドーバー作
- 七、次中音獨唱 船橋榮吉
イ、ダリイグイヒウンターデンブオイメン
- ロ、ミドウムング メンデルゾーン作
八、ヴァイオリン獨奏 杉山長谷夫
コールニドライ プルツフ作
- 九、ピアノ獨奏 タクマ、デュルシイ
ファンタゲイ アンブロンチユ ショパン作
- 伴奏者 松平信博、眞名美名彦
- 竹内平吉の創作が發表された。創作演奏の機運が漸く動いて來た。従來は同じ曲を二度宛繰返してあつたが今回からは一度になつた。
- 十一月二十六日 女子音樂學校日本音樂協會の同窓會發金にかゝる秋季大音樂會 於明治大學講堂
- 一、三部合奏 ロイテル、ウンケル、ウイルクマイステル
變ホ調 シューベルト作
- 二、高音獨唱 柴田環子
甲、フリトヨツフ マクスアルツフ作
乙、ウイラネレ エパデラツカ作
- 三、ピアノ獨奏 ロイテル
スケルツォ ショパン作
- 四、ヴァイオリンセロ獨奏 ウエルクマイステル
甲、ブレルデイム ボツベル作
乙、ガボツト 同
- 五、ピアノ獨奏 ロイテル
甲、トロイカファルト チャコフスキー作
乙、セレナーデ第百十八 ブラーム作
- 六、高音獨唱 パデレウキスキー作
甲、夜の調 柴田環子
乙、ルシア グノー作
- 七、ピアノ、ヴァイオリン合奏 ドニゼツテイ作
ソナタ ユンケル、ロイテル
- 八、合唱 フヴォルレヤツク作
- 女子音樂學校生徒其他

流涙の民

シューマン作、石倉小三郎譯歌

ロイテルのピアノ獨奏は當日第一の出来だ。甲の東洋的色彩に富んだ美しい曲で陰影と對照さに富み何とも云へない愉快な感じを與へた云々、最後のコーラスは清水指揮である。

十一月廿六日 日比谷公園奏樂 陸軍々樂隊

此の年に於ける最終のもの。

一、行進曲 兜の鷲飾

グキツテーヂ作

二、序樂 赤十字

チヌーリース作

三、劇樂 アイーダ

ヴェルディー作

蘇士運河通の記念劇、埃及王の女が敵將を愛し他の嫉視を受け入獄中一面には結婚式の讚美歌聞ゆる悲喜の對照なり。

四、ヴァルツ ダニユープ河の碧流

ストラウス作

五、劇的シムフォニー シヤトウ、ゲイヤールの一夜

セルニツク作

ブローギユのマルゲリエット姫が自己の髮にて縊れ死せしセーヌ上流の城跡に行はるゝ妖怪の舞踏を想像せしむ。

六、序樂 アルジュールの伊太利人

ロシニール作

七、甲、幻想ヴァルツ 山と谷

シツク作

乙、ボルカ 葡萄酒

八、劇樂 フォウスト拔萃二種

レブラン作

十二月六日午後八時 東京ファイルハルモニイ演奏會 於帝國劇場

劇場

一、セロ及ピアノ合奏

ウエルクマイステル、ロイテル

ソナタ

二、獨唱

ルビンシタイン作
杉浦 ちか子

歌劇サムソン及デリラ中の一節

サンサーン作

三、ピアノ獨奏

神戶 絢子

甲、嬰は短調

シヨバン作

乙、バラッド第四十七

岡

四、獨唱

ベツツオールド

歌劇フラインダツチマン中の一節

ワグネル作

五、セロ獨奏

ウエルクマイステル

セレナード及タランテル

リンドホル作

六、獨唱

サルコリー

歌劇 カルメン中の一節

ビゼー作

七、ピアノ獨奏

ロイテル

バガニウエリエーションズ

アラームス作

八、獨唱 セロ助奏

ベツツオールド

甲、アベマリア

乙、モールヴェルディーズフトケント

チャイコフスキー作

九、四部合唱

歌劇ファウスト中の四部合唱

岡見、鈴木のぶ、船橋、原田

一〇、獨唱

甲、歌劇トスカ中の一節

乙、マチナダ

サルコリー

プチニー作

レオンカヴァロ作

最も喝采を博したのは、サルコリーの獨唱とロイテルのピアノとで再三演奏するの止むなきほどであつた。ロイテルがピアノに對する前に貴賓席の宮殿下に敬禮されたのは、その禮に厚い態度が注意を惹いた。一般に華々しい立派な出来であつた。

サルコリーは明治八年に伊太利の樂都フローレンスに生る。

父は植物學者である。藝術に燃えた彼は父との衝突を起さざるを得なかつた。フローレンス音樂學校で學び、卒業の初舞臺はヴェニールデイの歌劇「アイデー」であつた。

かくて伊太利の各都市を廻り歐羅巴の音樂中心城市に喝采を博し、遂に南米、合衆國を廻り、二十年の繁劇な生活の心の安靜と聲の養生のために上海のさる外人團體の招聘をうけて

東洋に來て、上海の革命軍の旗風におそれて、方向を變へて我が國に來られたのである。作曲家としてはワルツを作つてミランで金賞を得た人である。

十二月九、十日兩日 東京音樂學校秋季大演奏會 於同校奏樂堂

一、管絃樂

ユーゴー作劇曲 リュイ、ブラスの序曲メンテルゾーン作

二、ピアノ及管絃樂 職員及生徒、ピアノソロ 久野ひさ子

コンチエルト へ短調 ウエーベル作

三、合唱及管絃樂 シルレル作詩 ネニーゲ ツ 職員及生徒

四、管絃樂 職員及生徒

甲、ラルゴ へンデル作

ヴァイオリンオブリガード 頼母木 駒子

乙、葬禮進行曲 シヨパン作

五、獨唱 ベッツォオルド

歌劇 アルツエステ中の歌劇 グルツク作

六、管絃樂 職員及生徒

イブセン作 ベールギンドのスケイト中の二節

甲、アーゼの死 乙、アニストラスの舞踏

八、合唱 オルガン及管絃樂 職員及生徒

神の御稜威

シュニーベルト作

イ、ソーターロー

山田源一郎作

指揮者 ユンケル教師

ロ、隠月夜

獨逸民話

十二月二日三日の兩日に舉行すべきものが變更されたもので

九、絃樂四部

園山民平 外三名

ある。

イ、薔薇の歌 ロ、モルゲンリード

十二月 日 沖繩縣師範學校音樂會 於同校講堂

一〇、ピアノ獨奏

安次富マカト

一、合唱 イ、古城の秋 ロ、土曜日 附 屬 尋 六

ソナテイネ

クレメンテ作

二、ピアノ獨奏 行進曲 本科三 石垣 平 良

一一、合唱

本科四年

三、獨唱 イ、漁歌 本科一 湧川 富 次

イ、懐友

シルレン作

四、ヴァイオリン獨奏 ロ、ザラストローズ、オブサムマー 本科四 山内 盛 彬

一二、合唱

本科二年

ガボツト 本科四 山内 盛 彬

イ、曉景 カノン
ロ、國の鎮め

獨逸民話

五、合唱 女子本科一年

一三、ヴァイオリン獨奏

島袋 光

イ、花賣女 獨逸民話

リツカードマーチ

ヘンデル作

ロ、農の樂しみ 園山民平作曲

一四、獨唱

安次富マカト

六、オルガン獨奏 本科四 砂川 寛 榮

月光

サンサーン作

七、ピアノ、琴合奏 六段 安次富、山口、細谷

一五、沖繩音樂
カヤヤテ コタイ節 作田節 早作田節

高安朝常 外三名

八、合唱 本科一年

一六、男聲三部 イ、日の國 ロ、雪と螢
一七、ピアノ獨奏 沖繩民話 園山作

喜世川、奥儀、大城
園山民平

一八、セロ獨奏 矢野 勇 雄

イ、秋の夕暮 ロ、ホームスキートホーム

一九、合唱 本 科 生

榮ある今日 スカンヂナビヤ民謡、園山民平編曲

各縣師範關係の音楽會中から特に沖繩縣のを採つた。

十二月二十三日午後一時 神田女子音楽學校演奏會

一、ピアノ獨奏 加藤 清 子

ソナチネ クレメンタイ作

フレイリツヒエルランドラン シューマン作 和田光子

二、合唱

甲、秋のあはれ マラン作曲 鳥居 枕作歌

乙、漁夫 ノールエキシメロディ 武島羽衣作歌

三、ヴァイオリン獨奏 廣 部 好 子

ブリユーベル、オプスコットランド、カルニー調

四、ピアノ獨奏 高 野 静 子

ソナタ モツアルト作

五、ヴァイオリン獨奏 和 田 光 子

ローマンズ オスカリーデング

六、合唱

甲、秋の夕暮 ショツテツシエメロデー 武島羽衣作歌

乙、庭の菊 ケルピニー作曲 大和田建樹作歌

七、ピアノ獨奏 廣 部 好 子

ソナタ ベートーヴェン作

八、ヴァイオリン獨奏 瀧 本 隆 重

アヴェウエルム コルプス モツアルト作

九、ピアノ獨奏 ロンド ベートーヴェン作 犬 井 英 夫

一〇、箏曲 みだれ 安 川、 樺 山

一一、ピアノ獨奏 古 山 幸 一

シツクス パリエーション ベートーヴェン作

一二、合唱

甲、流れぬ流 メンデルゾーン作曲 島 原 廣 歌

乙、神 樂 ダンハウゼン作曲 同

丙、観菊の宴 シューマン作曲 黒川真直作歌

明治四十五年

一月廿八日 音楽奨励會第八回演奏會 於華族會館

ヴァイオリン 窪兼雅、ピアノ 小倉末子

一、ヴァイオリンコンチセルト サ イ ツ 作

二、甲、スーヴェニア ドウルドウラ作

乙、ガルドンズツエーネ、アウス、デア、

ファストファンダジー グ ノ ー 作

三、マツルカ

四、甲、ソナテ ピアノ

乙、ベルセーズ ピアノ

丙、エチュード ピアノ

五、セレナーデ

六、G線上のアリア

七、テノイネルヴァイゼン

ブアルザツキ作

ベートーヴェン作

ショパン作

ショパン作

ガルキン作

パツハ作

サラサーテ作

伴奏者 貫名、澤田

○聴衆の善いのと、ソロイストが活氣に充ちた青年音楽家ばかりで、曲目も中々面白いのを聴かせてくれるので當時東京で随分澤山に開催される音楽會中最も特色あるものとなつた。

ヴァイオリンソロの終り迄暗譜で弾いたのに驚いてた、小倉女の態度の落着いてゐるのは人々をいたく喜ばせた。アンコールにはショパンの練習曲作品第十の四番を弾いてくれた云々。(音楽)當時はヴァイオリンソロは暗譜でやつてなかつたことが頷れる。

一月十六日 好樂會第一回(發會)演奏會 於神田青年館

一、結集合奏

甲、パレット

乙、ガゴツト

會 員

グ ル ッ ク 作

バ ツ ハ 作

一、低音獨唱

二、ヴァイオリン獨奏

三、カバテイナ

四、男聲四部

一〇、獨唱

二、低音獨唱

三、ヴァイオリン獨奏

カバテイナ

四、男聲四部

甲、グラレーベスルーエ

乙、アム、シルヴエスタアーベンド

五、オーガン獨奏

カンツォーネ

ルシアンマーチ

六、結樂三部

トリオ第六番

七、ピアノ獨奏

八、男聲四部

メルツナハット

九、ヴァイオリン獨奏

アニトラスタンツ

一〇、獨唱

甲、エルイスツ

乙、フェルボルゲンハイト

一、ピアノ獨奏

樋口 信平

田中 平三郎

ラツフ作

澤崎、近藤、淺香、樋口

クロツス作

シユルツ作

松井 壯吉

ギルマン作

會 員

マザール作

小林 禮

澤崎、近藤、淺香、樋口

ノロイツエル作

吉澤 重夫

グリーク作

船橋 榮吉

ヴオールフ作

ヴオールフ作

ロイテル教授

甲、ガボット

乙、ノクチュルネ ト調

丙、ラブソードイー十二番

ダルベル作
シヨパン作
リ ス ト作

○眞田子爵を會長とし、手島高等工業學校長を顧問として樂界

諸名家の贊助の下に孤々の聲を擧げた好學會は吉澤等の苦心

に依つて出來たものである。出來は一級に佳なりだつた、舟

橋榮吉の獨唱は大受けであとの曲を一つ禮唱した。

當夜最も目立つて深い感銘を與へたのはロイテルのピアノで

樂器がまるで變つてしまつたかと思はれる、否それどころで

はない、ピアノの生命を有つて直に自ら我々に向つて話しか

けてくる云々。(音樂)

二月廿二日午後七時 音樂獎勵會(シヨパンアーベント)

於華族會館(澤田柳吉ピアノ獨奏)

一、ワルツアー 二、アムプロムブチユ 三、プレリユード

四、シエルツオー 五、ノクチュルネ 六、ワルツアー

七、バラード 八、ノクチュルネ 九、幻想即興曲

二月三十日 慈善音樂會(大阪市南地火災救護) 於大阪市

中の島公會堂

一、管絃樂 十字軍勳章の由來

大阪音樂協會員

二、ピアノ獨彈 甲、狩の歌 乙、即興曲 三、善和氣

三、マンドリン、ヴァイオリン、ピアノ合奏 麗麗なる花束

高濱、中川、大村、三巻

四、女聲二部 花

五、クラリネット獨奏 樂壇の美曲

六、小管絃樂 眞面目と滑稽

七、唱歌 夢、浦のあけくれ

八、管絃樂 ダニウプ河の漣

○第二部は日本音曲のみに付省く。

三月十日 熊本第一回音樂獎勵會演奏會 於熊本市物産館集

講所

一、合唱

春夜の興

二、オルガン獨奏

バルティダ

三、ピアノ獨彈

ウエツティングマーチ

四、合唱

海

五、ヴァイオリン獨奏

コンセルト 長ト調

立花、大島
林 耳

コーラス會員
大阪音樂協會員

熊本音樂會員

ブラームス作

猪瀨 久 三

ベツ ハ作

成田、大童

メンデルゾーン作

熊本音樂會員

デットリツヒ作

長橋 熊太郎

ヴァイオワッティ作

六、合唱

鶯の歌

熊本聲樂會員

フ ラ ー 作

二、合唱 人形

三、オルガン獨奏

七、絃樂四部合奏

甲、アヴェヴェルム

犬童、高橋、猪瀬、長橋

モツアルト作

四、合唱 親しき友

五、合唱 琵琶湖

乙、ラーゴ

ヘン デル 作

六、獨唱 才女

七、オルガン、ヴァイオリン合奏

八、ピアノ獨奏

アマプロムチ

成 田 茂 己

荒城の月 朝顔

九、合唱

籬の川上

熊本聲樂會員

八、合唱 小楠公

○萬向なる音楽趣味の普及を圖る目的で組織したもので、中津

圖書館長、松本五高、宮島高工兩教授が幹事となり猪瀬久三

等の苦心に成れるものである。

三月廿五日 東音校第二十五回卒業演奏會 於同校奏樂堂

四月二十八日 長野縣大町小學校音楽演奏會 於長野縣大町

小學校

一、合唱 天神様

尋 三 男

二、男聲四部

澤崎、淺香、築田、樋口

尋 四 女

下 平 調 導

高 一 女

尋 五 女

實科女 杉 本

下 平、仲田調導

尋 四、 男

尋 三 女

山崎又五郎

ロシニ ー 作

尋 六 女

實科 女 生

高橋 春 香

○小學校兒童の音楽會として銘打つての會合なれば特記した。

五月十八日 好樂會第二回演奏會 於東京

一、絃樂合奏

甲、ラルゴ

乙、ガボット

會 員

ヘン デル 作

グル ッ ク 作

デイ、カベル

三、セロ獨奏

トロメライ

四、低音獨唱

甲、歌劇 震笛中の一節

乙、歌劇 フィガロの結婚中の一節

五、ピアノ獨奏

アンダンテ、カンタビレ、エ、プレストアジタト

六、絃樂合奏

序曲 ハイムケールアウスデヤフムデ

七、男聲四部

ヘルツ

八、ヴァイオリン、ピアノ合奏

ソナタ ト調

九、獨唱

甲、隔田川

乙、オタマジャクシ

一〇、ピアノ獨奏

クロイツェル作

飯田 實

シユーマン作

樋口 信平

モツアルト作

モツアルト作

小林 禮

メンデルゾーン作

海軍々樂隊

メンデルゾーン作

澤崎、淺香、梁田、樋口

シ ル レ ル 作

フボラウイツチ

トドロウイチ

ルービンスタイン作

梁田 貞

梁田 貞作曲

梁田 貞作曲

トコロウイチ

甲、テーマ、ウイズ、バリエション

乙、エチウード

一、管絃樂合奏

抜萃曲 ファウスト

○吉澤繁夫の經營にかゝるものでこれが第二回の演奏である。

梁田貞の創作を西洋曲と伍して自ら歌はれたのは邦人創作發

表の傾向を示してゐるものである。

五月十八日 神戸樂友會第一回音樂演奏會 於神戸市

一、管絃樂

序曲 種入の我家

二、男聲四部

甲、ボニー 乙、誰が

三、ヴァイオリン獨奏

バズテの息 匈牙利調

四、四部合唱

甲、菩提樹

乙、愛の乙女子

五、オルガン獨奏

六、男聲四部

甲、植生の宿 乙、ラ、マルセーズ

ラ モ ー 作

シ ヨ バ ン 作

海軍々樂隊

グ ノ ー 作

グ ノ ー 作

グ ノ ー 作

グ ノ ー 作

神戸絃樂會

トベニ ー 作

神戸聲樂會

石河 武雄

ケラーペラ 作

M E C 唱歌隊

シユールベルト 作

シユールベルト 作

ミス エ、エル・ハウ

神戸聲樂會

神戸聲樂會

神戸聲樂會

七、管絃樂

甲、舞踏曲 波を越へて

神戸絃樂會

乙、婚禮行進曲

メンアルソーン作

乙、行進曲 歌人タンホイゼル

エフ、ピ、ウオーカ、エル、ビュース

ワグネル作

八、合奏合唱

飛ばすや、森になく小鳥

エルガー作

九、獨唱

甲、小夜の曲

岡島まさ子

乙、青春

グノー作

一〇、ピアノ獨奏

ソナタ ホ調短旋法

ミスダムソン

一、管絃樂

甲、歌劇 マルタ拔萃曲

神戸絃樂會

乙、タランテラ 伊國シシリア農夫の急速舞曲

フラトウ作

一二、獨唱

たのしこの世

ゼー、エス、オツクスフオード

一三、男聲四部

甲、出陣 乙、リトリヤ

神戸聲樂會

一四、管絃樂

甲、緩徐曲 サイプライズ、シンフォニー

神戸絃樂會

乙、ピアノ獨奏

ハイドン作

〇オルガン、ソロのエ、エル、ハウは我フレイベル幼稚園の創立者で、彼の著書幼稚園唱歌集は明治二十五年に出版、今尙使

用されてゐる。

五月十八、十九日

東京音楽学校學友會演奏會

於同校奏樂堂

一、獨唱及合唱

會 員

甲、僧院の庭

ボヘミヤ民謡

乙、別れ路

プロツス作

丙、洗宴の歌

栗田貞作

二、高音獨唱

隅田川

青山なみ子

三、オルガン獨奏

二重フーガ

梁田貞作

四、聲樂三部

歌劇「雲雀」中の一節

草川友忠

高音部

島崎赤太郎作

高音部

蘭部ふさ子

中音部

青山なみ子

モツアルト作

竹内うめ子

高安百合子

アマプロムティユ作品百四十二第三番

シニューベルト作

六、中音獨唱

甲、晝の夢

乙、涙

七、次中音獨唱

甲、シユテンドヘン

乙、フリーリオンクスグラウベ

八、ヴァイオリンソ

第九番司伴奏 作品百四番

九、聲樂二部

歌劇 ドンファンの一節

一〇、ヴァイオリンセロ

ロ短調司伴奏中の緩徐調 作品五十一

一一、高音獨唱

歌劇 イルバルビエーレ、デイ、

シヴィリア中の咏情調

番外 ピアノ獨奏

ルフエスタンデーゾープ

一二、獨唱及合唱

流浪の民

中島 かね子

梁田 貞作

山田 耕 作

梁田 貞 貞

シヌーベルト作

シヌーベルト作

田中 久子

ベリ オ作

次中音部 船橋榮吉

モアアルト作

多基 永

ゴルターマン作

蘭部 ふさ子

ロフシニー作

ベツオールド

アルカン作

會 員

シヌーマン作

ルを感じてたまらなかつた。「隅田川」も「二重フーガ」も「晝」も「涙」もあれだけに行けば十分で、限りのない熱をぶふ愚は學びたくない。(音楽七號)

六月一、二日兩日

宮内省雅樂部演奏會 於同省雅樂所

第一部 雅 樂

一、大和歌 久米舞

二、舞 樂 振鈴二節 甘州 古鳥蘇 蘇莫者 八仙 長慶子

第二部 歐洲管絃樂

一、オウエルツレー、フィデリオ

二、甲、ノルウエジアン、ダンス第二

乙、スラブニツク、ダンス第六

三、アレシオン

四、絃樂五部

甲、ゼ、デス、オブ、オース

乙、アトラス、ダンス

五、ギブシーラブ、セレクチオン

六月四日夜 露國合唱團スラウヤンスキー一座演奏會 於東京有樂座

一、アリナドウバイ、ニキーチナ

(十一世紀の歴史)

ストラウヤンスカ女 座員一同

チャイコスキノ(音楽家)

二、イ、ナ、ロウゲムユ、ストロンダ

一、二、ノীগ、ロツコエ、スカザーニエ、オ、レベチペーロシ

ロ、ウエイシヤ、カブスツヤ

一三、イ、ザ、レチエンコイ、ヤルメーリ

(昔時の歌)

座員

(ナロドネイヤベース)

三、ドロウイニー(愛國の歌)

男聲 音楽家連

ロ、ウ、ウオロツ、パチューシキニフ 右樂唱者座員一同

四、ムラーク、ノーチ、バウ、ナセムリユ

同 上

一四、ア、テイ、ドリア(西比利亞囚人の歌) 男樂々 家連

(ホルワトスカヤの歌)夜の番兵

同 上

一五、エキ、ウフニエム(船人夫曳船の歌) 同 上

五、ウオウヌイ、ナ、ウオウゲ

座員 一同

一六、ステレゴサ、ムラウエイ(夜談) ストラウヤンスカヤ女 並びに十歳の子供 ワーニヤ

六、イ、チエロエクヂエネー、ピョート

(ナイトワヤ、ペロ、スカヤの歌)

六月八日 ペコニア、ソサイエーティ第一回試演會

ロ、ウ、ボーレペリヨウ、サスヤヤラ

於東京麻布

(快樂の歌)

ストラウヤンスカヤ女

一、絃樂合奏 双頭の鷺 行進曲 部員

樂隊 バラライカ、ドームラ、タンブリカ、其他種々

二、ハーモニカ合奏 ゴールデンゲート 序樂 部員

七、ロスキー、マルシユ

三、絃樂合奏 樂しき愛蘭 ツーステップ 部員

八、イ、ニ、シト、ワポリユシケ、ホ、シエロツワニヨツシヤ

四、絃樂合奏 マンドリンセレネード 部員

ロ、ロ、ヤ、バイドウーリ、デイウチヨノチカ

五、ヴァイオリン二部 トラパトール 下位、田原 部員

九、カマリンカヤ

六、絃樂合奏 タンホイセル行進曲 部員

一〇、スウエチツト メーシヤツ

番外 絃樂合奏 老松(長唄) 部員

一一、プロオドキ、マスレニツト

七、ハーモニカ合奏 チェリコツト 行進曲 部員

ポール、イズ、オーベルイ、スネグーロチヤ

八、絃樂合奏 十字勳章 序樂 部員

九、絃樂合奏 インダランド ヴルツ

一〇、ヴァイオリン二部 アレグロ

一一、ハーモニカ合奏 ガロツプ

一二、ヴァイオリンソロ獨奏

アダデオ 絃樂伴奏

一三、絃樂合奏 祭の夜 行進曲

○會員の多數は銀行員とか會社員の職業を有つた途中で職務の合間に研究した眞面目な努力の結果を発表するの目的である。

六月八、九日 東京音楽學校春季演奏會、於同校奏樂堂

一、管絃樂 歌劇「フライシユン」の序曲 ウエバー作曲

二、ピアノ 管絃伴奏 教師ロイター

コンチエルト 短ト調 メンデルゾーン作曲

三、絃樂合奏 セレナーデ モツァルト作曲

四、合唱 管絃樂伴奏 シューマン作曲

流浪の民 石倉小三郎譯歌

五、ヴァイオリンソロ獨奏 ウエルクマイステル

コンチエルト 短イ調 サンサーン作曲

六、管絃樂 プレリユード、コーラル及フリーギユ

ベッハ作曲

六月十六日 日比谷公園奏樂 海軍々樂隊演奏

一、行進曲 外交家 瀨戸口藤吉指揮

二、歌劇序曲 フィガローの婚禮

三、歌劇曲 惡魔ローベルト

四、圓舞曲 プリニューベルス

五、歌劇拔萃曲 舞踏の夢

六、祝婚行進曲 眞夏の夜

七、終曲 ストラテラ

八、歌劇拔萃曲 トロヴアドール

六月二十二日、洋琴家アドヴァータイザーとハーグロウ夫人

演奏會、於東京音楽學校奏樂堂

一、ソナタ短變ホ調の第一進行

二、エチュード 短ヘ調

三、ファースト、モダンスイートの初めの二進行

四、バラード 短ト調

○ハ夫人は紐育にて二年、ウィーンにて一年、倫敦にて二年間

マクダウエル作

フレームス作

ベートーヴェン作

ショパン作

マクダウエル作

フレームス作

ピアノを修められてゐる。

六月二十二日 大阪音楽協會第十一回演奏會 於大阪市中の

烏公會堂

一、管絃樂 アルフレット國王行進曲 會 員

二、ピアノ獨奏 舞踏の案内 三 善和氣

三、獨唱 甲印度國王歌曲一節、リゴレット劇のカンツォネ 杉江秀

四、小管絃樂 理髮師の歌 林、大村、新納、菅野、高濱、楠部

五、ヴァイオリン獨奏 甲、アベマリア 乙、ガボット 高濱孝一

六、胡弓獨奏 鶴の巢籠 菊富、菊原兩檢校

七、管絃樂 音樂者の感想 會 員

八、合唱 流浪の民 七聲會々員

九、絃樂四部 小夜樂 芦田、新納、高村、大村

一〇、三絃、箏、宇治巡り 菊富、菊野兩檢校

一一、管絃樂 生活の夢 會 員

六月二十九日午後七時 熊本師範第一回音樂演奏會 於熊本

縣師範學校講堂

一、唱歌 青葉の笛 一年 丙組

二、ピアノ、ヴァイオリン合奏 四丙 橋本辰彦

合婚式

三、唱歌 深林道遙

四、合唱 花 二部

五、ヴァイオリン、ピアノ合奏 六段

六、唱歌 蟹

七、唱歌 田植

八、風琴演奏 ヴインナマーチ

九、唱歌 露の玉

一〇、唱歌 ターターロー

一一、ピアノ、ヴァイオリン合奏 狩の曲

一二、合唱 春を樂しめ 二部

一三、ピアノ、セロ合奏 マーチ

一四、唱歌 友だち、茶摘

一五、ピアノ、ヴァイオリン合奏

クシコスゴスト

一六、合唱 ほととぎす 三部

四乙 橋本 清

二年 甲組

四年 丙組

四甲 下田 美春

四乙 師富 重孝

一年 甲組

二年 丙組

四丙 宮崎 親行

四乙 奈須 友喜

一年 乙組

二年 乙組

四乙 松本 邦保

四丙 渡邊 重房

四年 乙組

奉賓 萩瀬久三、長橋熊次郎

二部 生

奉賓 猪瀬 久三

長橋 熊次郎

四年 生

會衆 一同

七月六日 東京音楽學校學友會第一回土曜演奏會 於同校講堂

一、合唱 會員

夜の演 吉丸一昌 作歌

シユーベルト作

吉丸一昌 作歌

シユーマン作

竹内うめ子

ロシイニー作

高新 富次

シヨバン作

四、聲樂二部 高音、原信子

歌劇「フリスト」中の二部 次中音、澤崎定之

木岡 信子

ラインハルト作

船橋 榮吉

船橋 榮吉

二人の戀 船橋 榮吉

服部嘉香 作歌

樋口 信平

七、洋琴獨奏 鎌川 政野子

ワルツ 作品六十

マツルカ 作品七

八、聲樂四部 前部ふさ、中島かれ、澤崎定之、船橋榮吉

歌劇「ファウスト」中の四部

九、洋琴獨奏 藤田 愛子

ソナタ 作品二十二

一〇、聲樂二部 前部ふさ子、船橋榮吉

歌劇「バルビエーレ、デイ、シウイリヤ」中の二部

一、ヴァイオリン獨奏 ロッシニー作

コンセルト 作品二十三 佐藤 謙三

一二、洋琴獨奏 ヴィオットテイ作

忘られたるリズムの試作中の一番 作品二十八 小泉 千賀子

一三、中音獨唱 アレンスキー作

歌劇「ヘロディアード」中の咏嘆調 中島 かね子

一四、合唱 マッスニー作

心の花 會員

吉丸一昌 作歌

バルメ作

七月七日 東洋音楽學校第十五回演奏會 於同校講堂

一、合唱

甲、何處へ行く

乙、ゆける友

二、ヴァイオリン獨奏

ベルソニス

三、獨唱

甲、オールドドラングサイン

乙、オールドケンタッキーホーム

四、オルガン獨奏

バルティタ

五、管絃樂 フヒガロ歌劇の序

六、獨唱

甲、アッハノツホアインマール

乙、晝の夢 フルート伴奏

七、ヴァイオリン獨奏

ベルソニス

八、ピアノ獨奏

スレイプ

九、合唱 男聲三部

浦のあけくれ

一〇、管絃樂

七月十四日 海軍々樂隊演奏 日比谷公園奏樂

一、行進曲 塊太利の鷲

二、歌劇序曲 セライル城の誘拐

三、圓舞曲 徳術家の生活

四、牧歌 森の中の水車

五、三人舞曲 ヘンリー八世

六、歌劇序曲 イヴエトット王

七、西班牙舞曲 エスヂアアンテナ

八、拔萃曲 鷗の武士

九、ワーステツプ舞曲 富隈娘

日比谷奏樂室に於ける管絃樂演奏の最初である。

軍樂として管樂を採用した事は遠く明治初年であるが、絃樂は採用されなかつた。それが海軍部内に於ても四、五年前よりこれが採用の提議あり明治四十一年十二月より隊員を東京音楽學校に通學せしむること二年、漸く此日市民の前に試演奏をしたものである。

大正元年

十一月二十六、七日 東京音楽學校學友會秋季演奏會 於同

校奏樂堂

一、合唱

會

員

員

員

員

員

員

員

イ、泣願の歌

ロ、花の涙

二、ピアノ獨奏

ソナタ作品十、第一

三、女聲合唱

ローベル

四、風琴獨奏

バルテューダ

五、高音獨唱

イ、ブルディチエステイ

ロ、スプリングタイム

六、ヴァイオリン獨奏

イ、ソナータ 變ホ長調

ロ、シチリアーノ

七、次中音獨唱

イ、トレエネンレーゲン

ロ、ゴンドルリード

番外、中音獨唱

吉九一昌作歌

バッフハ作曲

高安月郊作歌

弘田龍太郎作曲

千葉光子

ペートルヴエン作

會 員

マイアーベア作

磯江清

バッフハ作

安藤文子

ロッフタイ作

バウルヴキダル作

田中清治、澤康雄

モツアルト作

バーゴレージ作

近藤義次

シュューベルト作

メンデルソーン作

竹内 暮子

壹 春聲四篇中

八、男聲合唱

水兵の歌

番外、中音獨唱

イ、濱邊の孟蘭盆

ロ、新なる思

九、洋琴獨奏

ソナタ、作品十三

一〇、高音獨唱

歌劇ダスグレンツヘンデスエレミタン中

のローゼの咏嘆調

一一、四部合唱

高音長坂よし子、中音竹内うめ子

次中音淺香鱗三郎、低音金 健二

歌劇フィデリオ中の四部

一二、ヴァイオリン

可伴奏第七番

一三、合唱

林古溪作歌

弘田龍太郎作曲

會 員

ワグネル作

中島かね

高安月郊作歌

弘田龍太郎作曲

高安月郊作歌

澤田柳吉作曲

山口節子

フムメル作

蘭部 房子

マイヤール作

田中久子

ペートルヴエン作

田中久子

ロ 下作

會 員

會 員

會 員

「メシアス」中の「ハレルヤ」

十一月三十日、十二月一日 ユンケル送別音楽演奏會 學友

會主催 於東京音楽學校演奏堂

一、管絃樂 歌劇フェドールの序曲 マツスネー作

殘られし作曲家在天の靈のために

二、ピアノ獨奏 管絃樂伴奏 ベツォーランド

三、管絃樂 シムフォニー ロ長調、第四番 カーデ作

四、ヴァイオリン 安藤 幸子

五、獨唱、合唱及管絃樂 ソプラノ 蘭部 ふさ

美しきエレン ペリトシ 船橋 榮吉

マクスブルッフ作

○指揮はユンケル教師で最後の思出に熱心籠められたもの。曲

はシユポアー、グリーヒ、ブルツフの大作ばかりで東洋一の

大演奏會であると評してあつた。

十一月二十二日 好樂會第三回演奏會 於東京神田青年會館

一、ヴァイオリン、セロ、ピアノ合奏 會 員

甲、アンダンテ プレエル作

乙、ロンド プレエル作

ヘンデル作

二、オルガン獨奏 マーチ

三、絃樂四部 伊藤 克巳

甲、アーベンドリート 乙、ヴァルツ 會 員

丙、ダス、ドイツチエ、フアーテルランド

四、ピアノ獨奏

五、絃樂合奏 デュエット、アウス、ドン、フアン モツアルト作

六、ヴァイオリン獨奏 吉澤 重夫

七、低音獨唱 コンセルト中のアンタンデ ベリ 信平

八、オルガン獨奏 草川 宜雄

九、高音獨奏 甲、歌劇エルナニ中的一節 ヴエルデイー作

乙、歌劇ファウスト、フェルダムニス中的一節 ベルリオーリス作

甲、モルゲングルツス 草川 宜雄

乙、フリーリヘルランドマン シューマン作

甲、歌劇フィガロ「ホホッアイト」中のアリア 小笠原 保子

乙、アニローイ スコツチフォルクソング モツアルト作

丙、セレナーデ

一〇、ピアノ獨奏

甲、ソワレ、ドヴィエンヌ

乙、ノクチュルネ

丙、ヴァルス

一一、獨唱

甲、デア、シユベン

乙、バストラーレ

丙、リード

十二月十一日 ユンケル送別音樂會

一、ピアノ、ヴァイオリン、セロ三部合奏

ピアノトリオ

二、高音獨唱

三、ヴァイオリンセロ

四、中音獨唱

歌劇フライシユツツ中のアリア

甲、コル、ニードライ

乙、タランテルラ

グ ノ ー 作

ベツオールド

シ ヨ バ ン 作

サンサーン作

ベツオールド

グ リ ー ヒ 作

ビ ゼ ー 作

シ ユ ー マ ン 作

ユ ン ケ ル

ウエルクマイステル

アレンスキー作

ペツオールド

ウエーベル作

マイステル

ブルツフ作

マイステル作

中島かね子

歌劇ヘロディアード中のアリア

五、ピアノ四部合奏

マツスネ作

フユール

ユンケル

ラプソディ第十二番

七、ピアノ、ヴァイオリン二部合奏

六、ピアノ獨奏

三、高音獨唱

四、ヴァイオリン獨奏

甲、熊野中のアリア

乙、ハバネラ

甲、ローマンヌ

乙、ガヴオツテ

十二月十四日 學友會第三回土曜演奏會

一、合唱

甲、禮拜の歌

マツスネ作

フユール

ユンケル

ラ ン デ イ

マイステル

ブラームス作

ベツオールド

リ ス ト 作

フ ユ ー ル

ユ ン ケ ル

ペツオールド

シ ユ ッ ト 作

ユ ン ケ ル

ベツオールド

ユ ン ケ ル 作

ビ ゼ ー 作

ユ ン ケ ル

ウイニアフスキー

ボ ー ム 作

合 員

吉丸一昌作歌

會 員

會 員

會 員

會 員

會 員

會 員

會 員

會 員

會 員

會 員

會 員

乙、春のしらせ

パッ ハ作

八、ピアノ獨奏

弘田 龍太郎

二、ピアノ獨奏

吉丸一昌作歌

甲、ブレイユード

作品二十八の第一

シヨバン作

三、次中音獨唱

メンデルゾーン作

乙、トロイカ

十一月 作品三十七の第十一

グリーヒ作

四、ヴァイオリン獨奏

菅原 蒼子

丙、妖精の舞踏

作品十二の第五

グリーヒ作

五、高音部獨唱

シニューベルト作

九、中音獨唱

歌劇プロフェート中の二節

マイヤーベア作

歌劇イル・バルビエーレ・ディ・シヴィーリ

内田 豐子

番外、風琴獨唱

ソナタ イ短調

中田 章

六、ヴァイオリン獨奏

モツアルト作

一〇、合唱

シエツフング

ハイドン作

七、次中音獨唱

永井いく子

大正二年

二月八日

學友會演奏會 於東京音樂學校奏樂堂

甲、アン、シルヴィア

末吉 雄二

一、合唱

會

吉丸一昌作歌

乙、リンデンバウム

パッ ハ作

二、風琴獨奏

オーサンクタイシマ

シルドクネヒト作

早春賦 新曲

安藤 文子

乙、故郷を離るゝ歌

船橋 榮吉作

吉丸一昌作歌

番外、高音獨唱

浅香 鱗三郎

櫻井 みつ

プロシヤ 民謡

メンデルゾーン作

甲、アン、シルヴィア

シニューベルト作

乙、リンデンバウム

シニューベルト作

シールドクネヒト作

三、高音獨唱

歌劇サムソンとダリラ中の春の抒情調

四、ピアノ獨奏

バラッド 作品第七

五、低音獨唱

歌劇畫笛中のザラストロの抒情調

六、高音獨唱

歌劇フライシユツツ中エンヒンの抒情調

七、ヴァイオリン獨奏

バラッドとボロネーズ

八、聲樂二部

歌劇フィデリオ中の二部

番外、ピアノ、ヴァイオリン二部

ソナータ ハ短調

イ、アルレグロ

ロ、アダージェツ

ハ、スケルツォ

ニ、アルレグロ

九、絃樂合奏

一、ザラバンデ中のラルゴ

二、結婚式進行曲

長坂 好子

サンサーン作

谷村 なつ

ラインベルゲル作

金 健 二

モツァルト作

肥田野さくら

ウエーベル作

蜂 谷 龍

グイユーター作

中音 竹内うめ、船橋榮吉

ベートーヴェン作

ヴァイオリン クローン教師

ベートーヴェン作

ピアノ ショルツ教師

クローン教師

ベートーヴェン作

ニ、アルレグロ

會 員

ハ フ ハ作

メンデルゾーン作

○新任のクローン、ショルツの兩教師の出演が満堂の聴衆に多大の感動を與へた。

二月二十三日 東京フィルハルモニー第十回演奏會 於東京

音樂學校奏樂堂

一、ヴァイオリン、ピアノ合奏

ソナタ 短は調

二、獨唱

歌劇トリスタン及イゾルデ中の叙情調

三、ピアノ、セロ合奏

ポロネイス、ブリリアンテ

四、ヴァイオリン獨奏

ロマンス及チンガレーゼ

五、ピアノ獨奏

甲、戲樂 短變る調

乙、幻想樂 短へ調

六、獨唱及二部

甲、歌劇ベヤツオ中の序歌

乙、歌劇ドン、ゲユアン中の二部

七、セロ獨奏

甲、ロマンス

ウキニアフスキー作

クローン、ショルツ

ベートーヴェン作

クローン、ショルツ

ベートーヴェン作

クローン、ショルツ

ベートーヴェン作

クローン、ショルツ

ベートーヴェン作

クローン、ショルツ

ベートーヴェン作

クローン、ショルツ

ベートーヴェン作

クローン、ショルツ

ベートーヴェン作

クローン、ショルツ

ベートーヴェン作

クローン、ショルツ

ベートーヴェン作

クローン、ショルツ

ベートーヴェン作

クローン、ショルツ

乙、タランテレ
八、ピアノ及弦樂

ポツバ ー作
フニア、安藤幸子、幸田延子
クローン、ウエルクマイステル
ソヴオルシヤツク作

五部合奏曲 長い調

三月十、十一兩日

帝國音樂會第十回演奏會 於東京有樂座

一、男聲四部

澤崎、島田、外山、樋口

野をばのがれて

ハウプトマン作

二、ヴァイオリン、ソロ

杉山 長谷夫

カヴァティナ

ラッ フ作

三、女聲獨唱

竹内 うめ

歌劇プロヘー中のカヴァティナ及アライ

マイエルベエニア作

四、男聲獨唱

船橋 榮吉

甲、歌劇タンホイゼル中のローマンス ワグネル作

乙、歌劇バヤツツオ中のプロロオグ レオンカヴァルロ作

五、ピアノ、ヴァイオリン、セロ三部合奏 高折宮次、杉山長谷夫

大和田 愛羅

甲、アルレグロオ

ハイド ン作

乙、フウモレスタ

シュリーマン作

六、男聲四部

澤崎定之、島田英雄

甲、食卓の歌

乙、祝歌

七、ピアノ獨奏

フアンタジイ

八、男聲獨唱

甲、全能の神

乙、夕の夢

丙、魔王

九、女聲獨唱

歌劇タンホイゼル中のアライ

一〇、ピアノ、ヴァイオリン、セロ重奏

フィナアレ

三月二十五日 上野校卒業演奏會 於同校樂堂

(曲目は東音校の部参照)

四月五日 松本樂器店の獨逸ホマイヤピアノ會社との合同披

露音樂會 於東京築地精養軒

一、ピアノ、ソロ

ベツオールド

ソナタ

グリーヒ作

二、バス、ソロ

樋口 信平

外山國彦、樋口信平

フエスカ作

マアルシユネル作

ベツオールド

シヨバン作

清水 金太郎

シユーベルト作

シユーベルト作

ベツオールド

ワグネル作

高折、杉山、大和田

ハイド ン作

- a、歌劇シモンボカネラ中のローマンツ ヴエルディー作
- b、歌劇ユーザン中のカヴァチネ ハレーヴィ作
- 三、ヴァイオリン、ソロ 杉山 長谷夫
- ローマンツァ ウイニアフスキー作
- 四、ソプラノ、ソロ 蘭部 房子
- 歌劇リゴレット中のアリア ヴエルディー作
- 五、ピアノ、ソロ ベツォールド
- a、エチュード リ ス ト 作
- b、ボロネーズ ショパン、リスト作
- c、バルカローレ ショパン 作
- 六、ヴァイオリン、ソロ 杉山 長谷夫
- スウベニーア ドルドラ作
- 七、ソプラノ、ソロ 蘭部 房子
- 歌劇テノラ中のアリア マイアベリア作
- 八、ピアノ、ソロ ベツォールド
- シムホニツシニン、エチューデン シューマン作

- 二、歌劇 リゴレット
- 三、歌劇 魔笛
- 四、小夜樂
- 五、騎手の別れ
- 六、歌劇 ファウスト舞曲
- 七、二人の兵士
- 八、歌劇 魔笛中の五部

四月二十日 女子音楽学校再築費補助慈善音楽會 於東京音
 樂學校奏樂堂
 一、三部合奏

原田 潤、竹内 平吉
 塚田左一、清水金太郎

ニ短調

ヴェルディー作 原田 潤
 モツァルト作 モツァルト作
 河合磯代、清水金太郎
 モツァルト作 菅井生、小松三樹三、竹内平吉、小林武彦
 キンケル作 原田、竹内、塚田、清水
 グノーゼ 笹井 生
 シューマン作 竹内 平吉
 モツァルト作 清水金太郎外四名
 於東京音 樂學校奏樂堂
 ピアノ ベツォールド
 ヴァイオリン 安藤 幸子
 セロ ウエルクマイステル
 メンデルゾーン作曲

二、獨唱

歌劇ディノラ中のアリア

蘭部 ぶさ子

マイエルベル作曲

三、セロ獨奏

ホ短調コンセルト

ウエルクマイステル

リンドネル作曲

四、ヴァイオリン獨奏

ホ短調コンセルト

安藤 藤 幸

メンデルゾーン作曲

五、ピアノ獨奏

ニラブソディース

シヨルツ

ブラーム作曲

甲、ロ短調 乙、ト短調

六、ヴァイオリン獨奏

デュオ及びヴァリエーション

クローシ

レオナルド作曲

七、獨唱

歌劇タンホイゼル中のアリア

ベツォーラ

ワグネル作曲

八、三部合奏

ヴァイオリン

ピアノ

安藤 藤 幸

セロ

ウエルクマイステル

變口長調 第二十一番

四月二十七日 東京フヒルハルモニー第十一回演奏會 於東

京高輪岩崎男邸

例によつて管絃樂の演奏についてセロのソロ、同伴樂がウエ

ルク・マイステルによつて奏され、蘭部房子のヴォーカルソロセ
グキラの理髮師等が演出された。

四月二十七日 陸軍戸山學校演奏 於同校庭

永井軍樂長、春日樂長補指揮のもとに遺英記念行進曲以下の
吹奏樂を行った。

五月二十二日 ヲグナー百年記念演奏會 於東京音樂學校奏

樂堂

一、女聲合唱

會 員

歌劇フリーゲンデホルレンダー中の絲織リ娘

ワグナー作

二、聲樂二部

歌劇ローエングリン中のアリア

高音蘭部房子、中音竹内うめ子

三、中音獨唱

タンホイザー中のアリア

竹内うめ子

四、高音獨唱

ルラツビー

蘭部 房子

五、高音獨唱

歌劇リエンツイ中の抒情調

小笠原 保子

六、男聲合唱

歌劇フリーゲンデホルレンダー中のアリア 會 員
ワグナー作

七、低音獨唱

歌劇ディブルキユール中のヴォータンの別れ

樋口 信平

八、中音獨唱

甲、夢

ワグナー作
中島 かね

乙、天使

ワグナー作
ベツォールド

九、洋琴獨唱

一、歌劇ブルキユール中のリーベスリッド

二、歌劇フリゲンデホルンダー中のスピンド

五月三十一日、六月一日 東音學友會春季大演奏會 於同校 奏樂堂

一、合唱

甲、天使の歌

乙、聖歌

二、次中音獨唱

甲、シュテンドヘン

乙、アウフ、フリーゲルンテスゲザンゲス

三、洋琴獨奏

ソナータ作品第二、第一番中のプレステイシモ

四、男聲二重唱

甲、歌劇鑼笛中の二重唱

乙、エントヒユールンゲの二重唱

五、洋琴

ニ短調司伴奏

六、高音獨唱

甲、アデイウ、ドウ、マイン

乙、ル、フィール、ドウ、カデイ

七、ヴァイオリン二重奏

二重司伴奏第三番

八、洋琴

ロ長調司伴奏第一樂章

九、女聲二重唱

歌劇フライレユツツ中の二重唱

一〇、ヴァイオロン、セロ獨奏

一一、合唱

安息曲

ペーターヴエン作

次中音佐藤豊吉 低音金健二

モツアルト作

モツアルト作

高折 宮次

モツアルト作

安藤 文

マツスネー作

ダリペー作

田中久、峰谷 龍

パッハ作

石原 かザ

ペーターヴエン作

永井いく、長坂よし

ウエーバー作

林 顯 藏

ブルツフ作

ケルビーニ作

四月二十七日 名古屋市榮ホール開催音樂會 於名古屋市榮

ホール

一、絃樂合奏

シュリーツト

絃樂部員

ウインター作

一〇、ヴァイオリン獨奏

スーヴァニア

杉山長谷夫

ブルブラ作

二、ヴァイオリン、ピアノ合奏

短イ調ソナタータ第一樂曲

杉山長谷夫作、高折宮次

ベートーヴェン作

一一、ヴァイオリン獨奏

短イ調コンチエルト作品第九の第一樂曲

杉山長谷夫

ローデ作

三、ヴァイオリン獨奏

マドリガール

杉山長谷夫

シモネフティ作

一、ピアノ獨奏

イ、ワルツ

サイラー女

ボルジーニ作

セレナーデ、パディーネ

ガブリエル、マリー作

杉山長谷夫作

二、獨唱

トスカ

サルコリー

プッチイニー作

四、ヴァイオリン獨奏

鶴龜

鈴木梅雄

三、ヴァイオリン獨奏

レゲンデ

杉山長谷夫

ウイニアスキー作

五、ピアノ獨奏

トロイカ

チャイコフスキー作

四、獨唱

リゴレット

サルコリー

ヴェルディ作

六、ヴァイオリン二部

シムフォニーコンチエルトナンテ作品第一〇九の三

杉山長谷夫、鈴木梅雄

五、ヴァイオリン獨奏

スウベニア

杉山長谷夫

ドウルドゥラ作

七、ヴァイオリン獨奏

ローマンヌ

鈴木梅雄

六、獨奏

パツターフライ

プッチイニー作

八、ヴァイオリン獨奏

越後獅子

浅香鱒三郎

七、ピアノ獨奏

サイラー女

九、テノリ獨奏

フリーユリングス、グラウベ

ソナタ
 八、獨唱
 マチナーダ
 ベートーヴェン作
 サルコーリ
 レオンカヴァッロ作
 五、絃樂合奏 アンダンテカンタビレ 作品第
 十八 絃樂四重曲中の
 六、合唱 鬼火
 七、管絃樂 スキット
 六月十三日 音樂演奏會 於大阪青年會館
 一、ピアノ獨彈
 ウワルツ
 セレナーデ
 二、獨唱
 トスカ
 三、ヴァイオリン獨奏
 レゲンデ
 四、獨唱
 リゴレット
 五、ヴァイオリン獨奏
 スーヴニア
 ローマンズ
 六、獨唱
 バタフライ
 七、ピアノ獨彈
 サイラー女
 ボルジーニ作
 ショパン作
 サルコーリ
 プチーニ作
 サイラー女

六月七日、八日の兩日東京音樂學校春季大演奏會が新任教師のタローンの我國に於ける最初の指揮振りには満場は盛んな拍手を以て迎へた。曲は皆輕快洒脱の風致に富んでゐる豪放な點は無いが如何にもデリケートでタローンの性格を裏書きするに充分のもの計りであつた。

一、管絃樂 ロザムンデの序曲
 二、バリトン獨唱
 イ、トラウム、ドウルヒ、デムメルグ
 シュトラウス作
 ゴル
 フ作
 ショルツ教師
 ヘンセルト作
 ラルゲット
 プラームス作
 瑞典民謡
 エングスト編作
 七、ピアノ獨彈
 サイラー女
 ボルジーニ作
 ショパン作
 サルコーリ
 プチーニ作
 サイラー女

三、洋琴
 へ短調同伴樂 作品第十六
 イ、アルレグロ、パチティーク
 ロ、ラルゲット
 四、合唱
 イ、ダイン、ヘルツェン、ミルド
 ロ、シュビン！シュビン！
 五、管絃樂 スキット
 六月十三日 音樂演奏會 於大阪青年會館
 一、ピアノ獨彈
 ウワルツ
 セレナーデ
 二、獨唱
 トスカ
 三、ヴァイオリン獨奏
 レゲンデ
 四、獨唱
 リゴレット
 五、ヴァイオリン獨奏
 スーヴニア
 ローマンズ
 六、獨唱
 バタフライ
 七、ピアノ獨彈
 サイラー女
 ボルジーニ作
 ショパン作
 サルコーリ
 プチーニ作
 サイラー女

六、合唱
 イ、ダイン、ヘルツェン、ミルド
 ロ、シュビン！シュビン！
 七、管絃樂 スキット
 六月十三日 音樂演奏會 於大阪青年會館
 一、ピアノ獨彈
 ウワルツ
 セレナーデ
 二、獨唱
 トスカ
 三、ヴァイオリン獨奏
 レゲンデ
 四、獨唱
 リゴレット
 五、ヴァイオリン獨奏
 スーヴニア
 ローマンズ
 六、獨唱
 バタフライ
 七、ピアノ獨彈
 サイラー女
 ボルジーニ作
 ショパン作
 サルコーリ
 プチーニ作
 サイラー女

七、管絃樂 スキット
 六月十三日 音樂演奏會 於大阪青年會館
 一、ピアノ獨彈
 ウワルツ
 セレナーデ
 二、獨唱
 トスカ
 三、ヴァイオリン獨奏
 レゲンデ
 四、獨唱
 リゴレット
 五、ヴァイオリン獨奏
 スーヴニア
 ローマンズ
 六、獨唱
 バタフライ
 七、ピアノ獨彈
 サイラー女
 ボルジーニ作
 ショパン作
 サルコーリ
 プチーニ作
 サイラー女

八、管絃樂 スキット
 六月十三日 音樂演奏會 於大阪青年會館
 一、ピアノ獨彈
 ウワルツ
 セレナーデ
 二、獨唱
 トスカ
 三、ヴァイオリン獨奏
 レゲンデ
 四、獨唱
 リゴレット
 五、ヴァイオリン獨奏
 スーヴニア
 ローマンズ
 六、獨唱
 バタフライ
 七、ピアノ獨彈
 サイラー女
 ボルジーニ作
 ショパン作
 サルコーリ
 プチーニ作
 サイラー女

ソナタ アンダンテ及アレグロ
八、獨唱
マチナーダ

マチナーダ

ベートーヴェン作
サルコロリ
レオンカバルロ作

六月廿二日 關西音樂協會演奏會 於大阪大丸樓上

甲、愛國心 乙、ポツポリー 名曲集、金婚式 ヴァイオリン、ピアノ伴奏、送別 聲樂二重唱、メヌエツト クラリネット四重奏、阿都野原 ヴァイオリン ピアノ伴奏、天然の美 ポツポリー一戰捷旗 ストリングバンド プラスバンド、平和曲 ヴァイオリンピアノ伴奏、シチリアーノ ヴァイオリン二重奏、ドナウ河の漣 サキソホーン四重奏、ラストローズ オーケストラ、歌劇ミカド 社長土産、プリンツ・アイテル・フリードリッヒ プラスバンド、アレグロ、ヴァイオリン二重奏、ピアノ伴奏、ガートン ピアノ獨奏、ゴールディングゲート ヴァイオリン二重奏、元録花見躰乞食袋 プラスバンド、

六月二十一日 横濱山下海岸教會音樂會 於同教會

一、獨唱 横山 孝次郎
二、ピアノ獨彈 フェーリス女學校有志
三、合唱 共立女學校有志
四、ヴァイオリン獨奏 芝 祐 孟

五、デウエツト

六、合唱

七、獨唱

八、四重唱

七月七日 第四回土曜演奏會 於東京音樂學校奏樂堂

一、合唱

殖生の宿

二、高音獨唱

甲、ブル、デイチエスタイ

乙、モントナハト

三、洋琴獨奏

ハ長調ソナタ 作品第二十 第四樂章

四、高音獨唱

甲、ベルラ、グロリア、ダドラルビ

乙、デイ、シユトウメ、フォン、ホルタイイオーパー作

五、次中音獨唱

甲、デイ、ロートスブルーム

乙、フリーリソングストウラム

六、洋琴獨奏
ロンド、プリルランテ

相喜之助、熊谷右重

フェーリス女學校有志

近藤 ミツ

教會 男女

會 員

ビシヨフ作

山下 貞

ロフタイ作

シユーマン作

山口 節

ウエーバー作

永井 いく

ポノンチーニ作

近藤 義次

シユーマン作

シユーマン作

弘田 龍太郎

ウエーバー作

七、中音獨唱

歌劇プロフェット中のアリア

竹内 うめ

マイアーベリア作

八、ヴァイオリン

佐藤 謙三

第九番司伴樂 作品第百四、第二、第三樂章

九、次中音獨唱

歌劇フライシニユツ中のマックスの大アリア

澤崎 定之

ウエーバー作

一〇、合唱

甲、空しく老ひぬ

會 員

高野辰之作

乙、故郷を離るゝ歌

獨 乙 民 謡

吉九一昌作

七月十八日 報知社主催

明治天皇奉頌唱歌披露音樂演奏會

明治天皇奉頌唱歌

本所二葉小學校生徒

海軍々樂隊伴奏

一、ピアノ獨奏

ファンタジー、アムプロムティユ

松 平 信 博

二、男聲四部合唱

澤崎定之、船橋榮吉、栗田貞、大和田愛藏、外山國彦、島田英雄、

樋口信平、柴田知常

甲、殖生の祖

乙、火砲

三、ヴァイオリン

司伴樂 七番 第一樂章

四、絃樂四重奏

ピシヨツア作

田 中 久 子

ロ ー ド作

杉山長谷夫、澤康雄

大塚 淳、林 顯三

シモネフティ作

モツアルト作

甲、マドリガール

乙、メヌエット

七月二十三日

九月二日

九月九日

一、行進曲

二、序曲

三、幻想曲

四、圓舞曲

五、綜合曲

六、序曲

七、接續曲

八、幻想曲

日比谷公園奏樂 戸山學校軍樂隊

女子音樂學校落成記念音樂會 於新校舎

勝利の旗

富隈娘

歡喜の鐘

トロヰトール

リユウベツアール

モツアルト集

フライシニユツ

プローション作

ジュッペ作

フ アル 作

ワルドトフェル作

ゾールディ作

フロトール作

ク リ ン グ 編

ウエーベル作

九、行進曲 ネルソン子爵

ウセー ル作

八、絃樂四重奏

窪、東儀、多、蘭

九月十三日 黒猫社主催音楽會 於青年會館

九月十二日

窪、東儀、多、蘭

一、等

鈴木 敏村

ベッオールド獨奏會 於橫濱市

モツアルト作

秋風の曲

光崎 檢 校作

ベッオールド獨奏會 於橫濱市

ベッオールド

二、絃樂四重奏

窪、東儀、多、蘭

一、ピアノ獨奏

ベッオールド

A、セレナーデ

ハイデ ン作

A、トカータ及びフィグ

バハ、タウジツヒ作

B、メヌエフト

ボツカシイニ作

B、ムーンライトソナタ

ベートーヴエン作

三、ホレン獨奏

蘭 十一郎

二、中音獨唱

鈴木 のぶ

A、マイスタージンガー中の歌

ワীগナー作

A、ギーゲン、リード

ブラームス作

B、フライシユフツ中のカヅチネ

ウエーベル作

B、エキーゲリイペ

同

四、高音獨奏

原 のぶ

三、高音獨唱

ベッオールド

トウラギアータ中のアリア

ゾール デイ作

A、トウロイメ

ワীগナー作

五、ヴァイオリン獨奏

窪 兼 雅

B、エリザベス、ブレイヤー

歌劇タンホイザー中

ワীগナー作

ベルソイス

ゴダール作

の 一節

ワীগナー作

六、バリトン獨唱

清水 金太郎

四、不詳

ギン デット

A、デイ、アルマハト

シニューベルト作

五、ピアノ獨奏

ベッオールド

B、トロヅトーレ

ゾール デイ作

A、セレナーデ

ボロディーヌ作

七、バス獨唱

樋口 信 平

B、ノクチュルネ

シヨパン 作

A、イル、フューリオソ中のローマンス

ドニゼツテイ作

C、シヤントボロナイズ

シヨパン、リスト作

B、フォーストの罪中のセレナーア

ベルリオス作

D、グノーメンタンツ

リス ト作

六、高音獨唱

A、ソルゼーヂソング

B、モントナハト

七、男聲高音獨唱

歌劇フライシユツ中のアリア

八、ラブソング第九番

ペスターカルナツル

贊助出演者に鈴木のお、澤崎定之、ギンアツト等があつた。

九月二十七日 第六回土曜演奏會 於東京音樂學校奏樂堂

一、女聲合唱

甲、波風、おぼろ、雲 小學唱歌集

乙、虹の歌、おきやがり小法師、軍持 尋常小學唱歌集

丙、達磨さん、お玉杓子、近眼のしくじり 新作唱歌

二、ピアノ獨奏

山口 節子 エンセン作

三、女聲二重唱 織りなす錦 中等唱歌集 會 員

四、ヴァイオリン獨奏 澤 康 雄

ニーナ ベルゴレーゼ作

五、ソプラノ獨唱

永井 いく ビショッパ作

六、風琴獨奏

ファンファール

七、箏曲 松竹梅

八、管絃樂 幻想曲 ホフマンの物語

九、獨唱 太平の曲 小學唱歌集

一〇、ピアノ獨奏 第五番ソナタ 第一樂章

一一、テノール獨唱 甲、母のおもひ 小學校唱歌集

乙、雲雀 一二、ピアノ獨奏 敷へ歌ヴリエーション

一三、管絃樂 甲、クセロフオーンの獨奏ポルカ「雀」

乙、行進曲 鐵夫長

中 田 章

レムメンステ

教授 今井慶松外二名

海軍々樂隊

オッフエレバツハ作

金 徳 二

谷村 ナツ

ベートルグエン作

近藤 義次

本居 長世作

松平 信博

本居 長世作

海軍々樂隊

ツエルラー作

九月廿八日 通俗音樂會第一回演奏會 於上野校奏樂堂 主

催東京音樂學校學友會

府下小學校女教員と市内の五六の病院看護婦のみに限り招待

券一千枚の配布をしたものである。

之は湯原會長の多年の宿望であつたので音楽界の活動範圍が擴張されたものである。

九月廿七日 日比谷公園奏樂 陸軍々樂隊

一、序樂

林間の音樂會

二、喜歌劇 マスコットの拔萃

三、フライングダッチマン

四、幽霊船劇中蘭人漂流の歌

五、オツフエンバッハの作物に據る妮乃

六、モザイククシヨバン

番外、管絃樂四曲

A、新行進 桂冠青年

B、序樂 紀新元

C、ヴァルス 意匠

D、劇樂 フワウスト

七、歌劇アスカニオ

九月二十八日 外人音樂家演奏會 於大阪北濱帝國座

一、ヴァイオリン、ピアノ二重奏

短に調 作品第三十八

二、ピアノ獨奏
哀悼行進曲

三、獨唱 歌劇ローエングリン中の一節

我れ汝の爲めに戦はむ

四、ピアノ獨奏

夜の調べ

五、ヴァイオリン獨奏

コーマンズ

外にマンドリン四重奏もあつた。

十月 東京音樂學校男子部三十八名の東北演奏旅行

大塚淳指揮

一、合唱 甲、秋のあはれ 乙、漁火

丙、荷車、お玉じやくし、達磨さん、なんだつけ

二、ヴァイオリン三重奏 甘き夢 多忠亮、荒木得三、館山甲午

三、獨唱 甲、亡妹 乙、落格 佐藤 豊 吾

四、ピアノ獨奏 メヌエット 榊 原 直

五、男聲二重唱 紅葉狩 水野康孝、柴田知常

六、ヴァイオリン獨奏 大場 勇之助

七、合唱 水夫の歌

パウロスキー
シヨバン作

ザルコーリ

ワーグナー作曲

パウロスキー

リス ト作曲

ドウブラキツチ

キーニアフスキー作曲

八、男聲四重唱

近藤武次、佐藤豊吾

甲、雨後の月 乙、花と朝

柴田知常、金 健二

九、ピアノ獨奏 數へ歌ゲアリエーション

弘山 龍太郎

一〇、獨唱 エニスの舟歌

近藤 義次

一一、ヴァイオリン獨奏 司伴樂作品第七番

佐藤 謙三

一二、絃樂合奏 メリウキドー中の拔萃曲 會

員

一三、君が代合唱 絃樂伴奏

聽衆一同合唱

右の外水野康孝の獨唱、館山甲午のヴァイオリン獨奏、湯前純

親のピアノ獨奏、高折宮次のピアノ獨奏、多忠亮のヴァイオリン

獨奏、多基永のチェロ獨奏等所によりて一二變更あつたが曲目

に大差がない。

十月四日 東京音楽學校女子部演奏旅行

於宇都宮市

一、合唱 二重唱 歸雁

メンテルゾーン作

二、ピアノ獨奏

井上 春子

ソナタ

クレメンティ作

三、中音獨唱

花島 秀子

甲、殖生の宿

ビショフア作

乙、アズマリヤ

ケルビーニ作

四、ピアノ獨奏

谷村 ナツ子

ペラーデ

ラインベルガー作

五、ヴァイオリン獨奏

田中 久子

コンツェルト

ベリ オ作

六、高音獨唱

波邊 銈子

甲、四つ葉のクローバ

ロイテル教師作

乙、フィガロ中のアリア

モツァルト作

七、ピアノ獨奏

喰田 八重子

グリルレン

シュートマン作

八、高音獨唱

長坂 好子

甲、白菊

スコットランド民謡

乙、ソルフエーガの歌

グリヒ作

九、ヴァイオリン獨奏

蜂谷 龍子

ペラーデ・エ・ポロネイズ

ビエータン作

一〇、合唱 白菊 三重唱

クルツシュマン作

十月八日 帝國ホテルにて白樺社第一回音楽會が開催された

出演者は原みち、中島かね、ハアグロロブ、サルコリー。

十月十二日 ベルリナー。トゥリオコンサート 於東京音楽

學校奏樂堂

一、三重奏 安藤幸子、ショルツ、ウエルクマイステル

短イ調トゥリオ作品五十番

チャイコフスキー作曲

い、ペツン、エレチアーク

ろ、テーマ、コン、ワリアチョトニ

は、ワリアチョーネ、フィナーレ、エ、コーダ

二、セロ及ピアノ合奏

長へ調ソナータ作品六番

い、アルレグロ、コン、プリーオ

ろ、アンダンテ、マ、ノン、トゥロツボ

は、アルレグロ、ギイボ

三、三重奏

長口調トリオ作品八番

い、アルレグロ、コン、プリーオ

ろ、スケールツォ アレグロ、モルト

は、アダージェオ に、アルレグロ

十月十二日 日比谷公園奏樂 海軍々樂隊

行進曲 比武士の進軍、序曲 ストラデルラ、四舞曲 エス

バナ、接續曲 ホフマン物語、笛合曲 蘇格蘭の記憶、行進

曲 軍艦、序曲 マルタ、木琴獨奏 ボルカ曲雀、幻想曲

カルメン、行進曲 饒夫長

十月二十五、六日 東音校學友會秋季大演奏會 於同校奏樂堂、ゴールデイー百年記念のもの

十月二十六日午後 日比谷公園奏樂 陸軍々樂隊

一、行進曲 羅馬の東帝國

二、序樂 アロルド

三、國風歌集 蘇國の寶石

四、ワルツ 朝刊新聞

五、劇樂 オテルロ

六、戲曲 アランの鑿間の反響

七、劇樂 マルタ

八、樂會的ボルカ 三羽の小禽

九、劇樂 アイダ

十月二十三日 塊國のオペラシンガー、シルバ夫人の獨演會

於帝國ホテル、曲目の主なるものはマスカニのカヴァレリア、

ルスチカーナ、ビゼイのカルメン、ワーハナーのタンホイゼ

等

十月二十八日 ゴールデイー百年記念音樂會 於帝國ホテル

出演者はドロブスキ、三浦たまき、アンドレス、中島か

ね子、ザルコリ、タム、パウロスロスキー等

十月三十一日 日比谷公園奏樂 陸軍々樂隊臨時奏樂

一、ボロネーズ 祭曲 スシアフェール作

二、序劇 ボヘミアの少女 パル フ作

三、喜歌劇 赤車の拔萃 ヘルベルト作

四、ヴァルス ベギー

スチスアルド作

五、歌劇 ボヘミアの少女

ペル フ作

六、軍樂と喇叭の併合 新分列式

永井 建 子作

七、歌劇 椿姫

ヴェルディ作

八、フォレスト劇中の大騒舞

グノー ー作

九、行進曲 ストロープの詩想に寄する村燕

十一月九日 ベッオールド、クローン、橋本重子、鈴木信子、神

戸絢子、船橋榮吉演奏會 於東京音楽學校演奏堂

一、ピアノ、ヴァイオリン二重奏

ベッオールド、クローン

ソナタ

モツアルト作

二、次中音獨唱

船橋 榮吉

イ、トゥラウムドウルヒデイ、デムメルング

シュトラウス作

ロ、アイントウラウム

グリーヒン作

三、ヴァイオリン獨奏

クロー ー作

四、洋琴獨奏

マクスブルツフ作

イ、チャントボロネイズ

ベッオールド

ロ、セレナーデ

ショパン、リスト作

ハ、トカーダ

ポロテイーヌ作

シニューマン作

五、中音獨唱

イ、ギーゲンリード

ロ、エキーグリーベ

六、洋琴聯奏

替手附緩徐曲

七、高音獨唱

イ、エレギー

ロ、薔薇の結婚

八、ヴァイオリン獨奏

ハ、歌劇 チッド中のアリア

イ、ロマンツエ

九、洋琴獨奏

ロ、スーヴニールドウモスカウ

十一月二十九日

ラブソデー

ホナル

一、ヴァイオリン、ツロ

ロ短調ヴァイオリン司伴樂

二、ピアノ、ツロ

鈴木 のぶ

ブラームス作

ブラームス作

橋本重、神戸絢

シニューマン作

ベッオールド

マスネ ー作

フランク作

マスネ ー作

クロー ー作

スエンドゼン作

キーニアフスキー作

ベッオールド

リス ト作

於帝國

サンサーン作

ベッオールド

リ

スト作

十二月六、七日 東京音楽學校秋季大演奏會 於同校奏樂堂

一、管絃樂 ゲーテの悲劇 エグモンドの序曲

作品第八十

ベートーヴェン作

二、管絃樂附ヴァイオリン司伴奏

ヴァイオリン

グスターフ、クローン

指揮者

ハインリッヒ、ウエルクマイステル

三、管絃樂附合唱

アンテの廢墟中の進行曲及び合唱

作品第百十四

ベートーヴェン作

四、ピアノ、オルガン及び絃樂合奏の前奏曲に基く

默想曲

バッハ、グノー作

ピアノ

久野ひさ子、オルガン 中田章

五、甲、絃樂附合唱

歌劇アウリスに於けるイフィゲ

乙、ソプラノ獨唱

歌劇フィガロの結婚中の宣叙

調と抒情調

モツァルト作

ハンカ、ベツォールド

ソナタ、ハ長調 第四樂章

十二月廿日

學友會第七回土曜演奏會

於東京音楽學校奏樂堂

一、合唱

會 員

九、ヴァイオリン

佐藤 謙三

甲、踊りの歌

乙、夢の幸

二、ピアノ獨奏

ソナタ 作品第十四、第一

三、テノール獨唱

甲、エニスの歌乃

乙、蓮の花

四、ヴァイオリン齊奏

ルール

五、バリトン獨唱

甲、アストラ

乙、リナルドの宣叙情と抒情調

六、ヴァイオリン獨奏

コンセルティノ

七、ピアノ獨奏

ソナタ、ハ長調 第四樂章

八、アルト獨唱

歌劇セミラミス中の抒情調

九、ヴァイオリン

佐藤 謙三

シユルツ作、吉丸一昌歌

バッハ作、高野辰之歌

指揮者 船橋 榮吉

足立 ふさ

ベートーヴェン作

水野 康孝

メンデルゾーン作

シユーマン作

井川富士、柴崎ヤス、田中静

ベッ ハ作

柴田 知常

ルービンシタイン作

ヘンデル作

齊藤、リヒャルド

ジッ ト作

菅原 菅

ウエーバー作

森川 達子

ロッシーニ作

伴奏樂第七番

香外、二重唱

歌劇フィガロの結婚中の二重唱

一〇、ピアノ

光輝狂想曲

一、甲、管絃樂

藝術家の生活

乙、管絃樂附合唱

君が代

十二月二十一日 第十三回音楽獎勵會演奏會

於東京華族會館

一、歌劇フィガロの結婚

ケルビーノの抒情調

二、メロデー作品第十二、第三番

アンソニー

ヴァイオリン獨奏

三、歌劇ライシユツ

エーンヒエンの小抒情調

四、ノエンツァン作品二十一、第一番

ベリオ作

長坂好子、永井いく

モツァルト作

藤田愛子

メンデルゾーン作

會員

ヨハン、シュトラウス作

會員

林廣守作

指揮者 大塚淳

モツァルト作

ゴイ、ケ、サベータ

チャイコフスキー作

シュラディーク續作

芝祐孟

ウエーバー作

コムトシュランカー

シューマン作

ピアノ獨奏

五、月夜

晝の夢

六、歌劇エレミットの鐘ローゼの抒情調

番外、甲、ノクチュルネ 嬰へ長調

乙、糸續りの歌 歌劇 飛んで行く和蘭陀人中

ピアノ獨奏

七、歌劇リゴレット

チルダの抒情調 カairo、ノルメ

八、匈牙利舞踊曲第五番

ヴァイオリン獨奏

九、秘めしなやみ作品九

蓄薇が枝

一〇、歌劇シゲリアの理髮師

ロジーホの抒情調

ウーナ、ゾーチネ、ボロ、ファ

伴奏 ベツォールド、緑川政野、眞名美名彦

蘭部房子の獨唱が主でそれにベツォールド、緑川政野、眞名美名彦

五、眞名美名彦等が讃助したものである。

緑川 政野

シュートマン作

梁田 貞作

メイラール作

シヨパン作

ワーハナーリスト

ベツォールド

ゾールティ作

ヨアヒム・ブライムス作

芝祐孟

アレキサンダー、フォン、フィリッツ

同 人作

ロッシニ作

同 人作

同 人作

同 人作

同 人作

同 人作

同 人作

同 人作

十二月十四日 宇都宮音楽會第一回演奏會 於栃木縣女子師範學校講堂

梨本宮妃殿下御臨場あらせられた。

一、絃樂四重奏

大塚淳、澤康雄、杉山長谷夫、林顯藏

絃樂四重奏曲第五番

ハイド ン作

二、ピアノ獨奏

綠川 政野

イ、ブレイユード

シヨ、バ ン作

ロ、ノゾレツテ

シュニーマン 作

三、低音獨唱

樋口 信平

イ、イル、フューリオージョ中のロマンツァ

ドニゼッティ 作

ロ、歌劇兵器鍛工中のリード

ロールツイング 作

四、オルガン獨奏

木岡 信子

ブレルーティウム及びフーガ

バ、ッ ハ 作

五、高音獨唱

蘭 部 房

歌劇ドンファン中のアリア

モツァルト 作

六、琴 千鳥曲

加藤松實、神野喜美

七、絃樂四重奏

大塚淳、澤康雄、杉山長谷夫、林顯藏

アンダンテ、カンタービレ

チャイコフスキー 作

八、長唄 勳逸帳

神野きみ、杵屋六藏、桐谷らめ

九、絃樂四重奏

大塚淳外三名

イ、アンダンテ

シュニーベルト 作

ロ、メヌエツト

同

一〇、ヴァイオリン獨奏

杉山 長谷夫

イ、フウストファンタジ

グ ノ ー 作

ロ、ガブツテ

ゴツセクタ 作

一一、高音獨唱

蘭 部 房

歌劇セギラの理髮師中のカヴァティナ

ロッシーニ 作

一二、ギオロンチニェロ獨奏

林 顯 藏

變ロ長調コンチェルト 第二章

ゴルターマン 作

一三、低音獨唱 歌劇シモン、ボッカ

樋口 信平

一ニエラ中のロマンツァ

ゾールディ 作

一四、絃樂四重奏

大塚淳、澤康雄、杉山長谷夫、林顯藏

セレナーテ

モツァルト 作

大正三年

一月二十二日 獨逸大使館 皇帝誕生祝賀演奏會

一、絃樂 ローザムンデの序曲

シュニーベルト 作

二、ピアノ、ヴァイオリン、セロ合奏

ヴァイオリン 安藤幸子、ピアノ ショルツ、セロ ウエルクマイステル

トウリオ

三、ヴァイオリン獨奏

アンダンテ及アレグロ

ブラームス作
フォン、メルンドルフ

四、ピアノ獨奏

a、カブリツトヨ

ドゥヂールジヤツク作

b、フモレスケ

ユオン作

五、a、合唱 絃樂伴奏

歌劇アウリスのイフィゲニー中の合唱
音楽學校生徒
グルツク作

b、獨唱

歌劇フィガロの婚禮中のアリア
モツァルト作
ベツォールド

a、合唱 絃樂伴奏

アーゴ、ゼールム、コルプス
モツァルト作

六、絃樂

a、メヌエット

音楽學校生徒
ポッケリーニ作

b、ピツチカート

デリーア作

七、ギオロンチェロ獨奏

a、サラバンデ

ウエルクマイステル
ポッペル作

b、メヌエット

ベッケル作

八、ヴァイオリン獨奏

a、アンダンテ

フォン、メルンドルフ

マードレマルチニークライスラー作

b、ポエム

ファイビヒ作

c、ベルベートウム、モビーレ

ノヴェーテック作

九、a、ピアノ及ヴァイオリン付き合唱

ブルフ

ヴァイオリン獨奏

頼母木 駒子

b、空しく老いぬ シュビン、シュビン

一〇、絃樂 歌劇ゼライルよりの誘拐中の序曲

モツァルト作、指揮者クロニン

東京音楽學校の管絃樂とコーラスの出演に、來朝中のメルンドルフのヴァイオリンソロがあつた。各宮妃殿下をはじめ列國使臣朝野の貴顯が列席された最も華やかな演奏會であつた。二月十三日 山田耕作アーベント未來社發企 於東京築地の精養軒

A 歌劇七人の王女(Die Sieben Prinzessinnen)

メネテルリンク作

王 外山國彦 王妃 三浦環 王子 船橋榮吉

B リード九篇

一、嘆 三木露風作 二、戦後 小林愛雄作

三、涙 小林愛雄作 以上 外山國彦

四、樹立 三木露風作 五、信仰と牢獄 同上

六、Fischerhüden(テオドル、フォンターネ作)

以上三浦環

- 七、ふるさと 三木露風作
- 八、さすらひ 三木露風作
- 九、すゝりなくとき 三木露風作 以上船橋榮吉

○山田耕作は十二月六日柏林を去つて途中露都を訪れ三十日下の關に着したばかりで彼はその創作に「第七の女」(坪内博士の落ちたる天女)、メエテルリングの「七人の王女」、三木露風の象徴詩「闇の扉」と齋藤住三の「曼陀羅の華」に基くシムフォニー詩、シムフォニー、ソナタ、其他大小數十の歌曲、器楽曲を所持してゐるが、これ等の作品に於て示して居る傾向に於てどの位進まれるか、我が現今の創作界を隔絶すること萬里なるを思はせる。(音楽雜誌)

二月十四日 學友會 第八回土曜演奏會

於東京音樂學校演奏堂

一、合唱

亡き母を思ふ

二、ピアノ獨奏

アムプロムティユー

三、女聲二重唱

甲、レ、マニユナレル

吉丸一昌歌、原田詞曲

鈴木 木 采

シュューベルト作

山下禎、森川達子

グ ノ ー 作

乙、パール、ユニユベルニユイ

四、ヴァイオリン獨奏

甲、ベルセーズ

乙、ガブツテ

五、高音獨唱

シエツフング

六、ヴァイオリン獨奏

コンセルテティーノ 第一樂章

七、オルガン獨奏

甲、フーガ

乙、レイナーレ

八、ヴァイオリン二重奏

ソナタ

九、テノール獨唱

フィガロのカヅティーナ

一〇、ピアノ

同伴樂作品八十五

一一、男聲四重唱

近藤義次、佐藤豊吾、佐久間孝夫、金健二

甲、デア、エントフェルンテン

乙、フライ、クンスト

グ ノ ー 作

井 川 富

アラ ー ト 作

パ ッ ハ 作

渡 邊 銚

ハイ ド ン 作

喰 田 八 重

シ ッ ト 作

白 坂 ミ イ

アオルゲベルグ作

エ ル ネ ー 作

澤 康 雄、田中清治

ヘ ン デ ル 作

佐 藤 豊 吾

モ ッ ア ル ト 作

高 折 宮 次

フ ム メ ル 作

シュューベルト作

シ ュ ャ ッ ツ 作

番外、ヴァイオリン

蜂谷龍

司伴樂二番

シュボーア作

一、合唱 甲、秋の夜乙、ハレルヤ ヘンデル作

三月十五日 音樂奨勵會第四回演奏 於東京華族會館

一、司伴樂 作品二十五 マックス・ブルッフ作

い、ブレリユード、アルレグロ、モデラート

ろ、アダーチヨ

は、フィナーレ、アルレグロ、エネルギーヨ

二、ソナタと短調 タルティイーニ作

三、子供の頃 作品十五 シューマン作

い、異國からろ、可笑しな囁は、鬼ごっこに、ね
だる子ほ、仕合へ、重大事件

○窪リサイタルとして、弘田龍太郎の賛助出演を受けたもので

彼獨特の藝術を示されたのである。

三月十二日 劇樂演奏會 於東京神田美土代町青年會館

一、四重唱歌劇マルタ 第四幕目農家の庭の場中の小唄

日本語 河合磯代、春日桂、松山芳野里、小島洋々

二、高音獨唱歌劇ベル、ジュ、ブレジル第一幕の中シヤル

マントアノー 佛語

原信子、フリユートオブリガート、横山國太郎

三、次中音獨唱歌劇カリフォルニアの金銀の娘 第三幕

日カリフォルニア深林の場中の咏嘆調 伊語

グストロ、サルコーリ

番外、ヴァイオリン獨奏

窪兼雅

ヘヤー、カーティ

フッバイ作

四、高音獨唱

三浦環

甲、歌劇トスカ第二幕目スカルピア居間の場中の咏嘆調 伊語

ブチーニ作

乙、歌劇リゴレット第一幕目リゴレット家門前の場中の咏嘆調 伊語

ゾールディ作

五、上低音獨唱

清水金太郎

歌劇タンホイザー第三幕目ワルトブルグ城外の場中の咏嘆調 獨語

ブーハナー作

六、二重唱

三浦環、グストロ、サルコーリ

歌劇カプリレリア、ルステイカーナ第一場日街頭の場中の二重唱 伊語

マスカリーニ作

であつたが、三浦環は差支のために出演せず、其代りに原信子が唱つた。

三月一日 東洋音樂會第四回演奏會 於神田裏糞樂町東洋音樂學校奏樂堂

一、管絃樂 歌劇フェスタバルの序

二、獨唱

甲、歌劇シユティンメ中の子守歌

乙、歌劇ドン、ファン中の夜樂

三、ピアノ獨奏

ノゾレット

四、管絃樂 獨逸民謡

五、獨唱

甲、シー、ムス、エルザゼインデゼイル

乙、歌劇フィガロ中の一節

六、ヴァイオリン獨奏

シーン、ドゥ、ペレー

七、獨唱

甲、歌劇ロベート、デア、トイフェル中の一節

マイヤーベア作

乙、歌劇シモン、ゴツカニエラ中の一節

ウヰールディー作

八、管絃樂 波を越えて 舞踏

三月二十五日 東京音樂學校卒業演奏會 於同校奏樂堂

(曲目、東京學校の部参照)

六月六日、十四日

學友會春季演奏會 於同校奏樂堂

一、合唱

祈願の歌

二、ヴァイオリン

司伴樂作品二百十三

三、オルガン獨奏

バルタイータ

四、ヴァイオリン

司伴樂イ短調

五、ピアノ獨奏

一、ブレルデイウム

二、サラペンデ

六、ヴァイオリン

三、リゴードンホルベルヒのスイーテ中より

七、合唱

子守謡

八、ヴァイオリン

司伴樂ト長調

九、ソプラノ獨唱

歌劇フライシユツ中のエーンヒエンの華想調

會 員

シュールベルト作曲、吉丸一昌作歌

多 忠 亮

メンデルゾーン作

和 田 央

パ ッ ハ作

館 山 甲 午

アッコ・レー作

山 口 節

齋藤、リヒヤールト

ジ ッ ト作

會 員

キユッケン作曲、吉丸一昌作歌

大 揚 勇之助

ザ イ ッ作

山 下 貞

一〇、ヴァイオリン
ウエーバー作
田中ひさ
三、ヴァイオリン獨奏
コンチエルト
田中ひさ

同伴樂
パフハ作
四、最高音獨唱
カプチナー
永井いく

番外、ギオロンチエロ獨奏
教師 ウェルクマイステル
セルギー作
五、絃樂 大コンチエルト
番外、單音唱歌 一、かたつむり 第一學年 二、時計の歌

い、歌劇聯隊の娘による幻想曲
セルギー作
カプチナー
ロフシーニ作

ろ、西班牙の舞踏作品五十四、第一手琴に寄せて
ポッパード作
番外、單音唱歌 一、かたつむり 第一學年 二、時計の歌

一一、絃樂合奏
會員
第二學年 三、茶摘 第三學年 四、藤の花 第四學年

第十七番大同伴樂作品第六
ヘンデル作
五、納涼 第五學年 六、兒島高德、蓮池、四季の雨 第六學年

番外、ピアノ二重奏
第一ピアノ 教師ショルツ 第二ピアノ 久野久子
六、合唱
子守謠
東京音樂學校學友會員

シムフォニックボエム匈牙利
リスト作
七、セロ獨奏
キヌケン作曲、吉丸一昌作歌
ウエルクマイステル

一二、合唱
イ、神曲天地創造中のみ空は語る傳き御神 ハイドン作
セルギー作

ロ、君が代
林廣守作曲
ろ、流浪民族の舞踏
ジェラル作

六月七日 東京府教育會主催音樂會 於東京音樂學校樂堂
八、ピアノ獨奏
シヨルト

一、合唱
東京音樂學校學友會員
い、スケルツオーバルセ
モシユコッフスキー作

祈願の歌
シュニベルト曲、吉丸一昌歌
ろ、匈牙利のラプソディ
リスト作

二、ピアノ獨奏
山節
九、ヴァイオリン獨奏
クローン

スイテ
グリヒ作
い、ロマンツェ
ベーターヴェン作

一、前奏曲 二、サラベンデ 三、リゴードン
田中ひさ
田中ひさ
パフハ作
永井いく
ロフシーニ作
ヘンデル作

ろ、ヘーアカーティ
アーベイ作
○全國の教育者大會に上京した人々を招いたので、非常の盛會であつた。

七月十二日 山田耕作獨唱會 於東京丸の内保險協會

○シニューマン作

女—戀、生活

シャミツソ一の詩

一、彼の人を見てしより 二、すべての中にあるはしき彼の人

三、思ひもよらぬ 四、婚禮の支度

五、何とて我れを見まもりたまふや

六、今こそ君は失寵を與へぬ

○シニューベルト作

七、朝の挨拶 八、幽霊 九、少女の嘆き

一〇、彼女のうつし繪 一一、ライヤー弾き 一二、若き尼

○ペートーヴエン作

一三、アーデライーデ

○チャイコフスキー作

一四、あこがれを知る者のみ、痛みを知る

一五、あなたたゆみに

○リヒアルド、シュトラウス作

一六、明日 ジョン、ヘンリー、マケーの詩

一七、あゝ途に別れは来りぬ フェーリツクス、ゲーラの詩
一八、黒髪わが額にかゝる時

○ワゲネル作

一九、トゥリスタンの問ひ 二〇、エリツクの唄

二一、マイスターズインガー中のゾルターの歌

二二、ローエングリーンの物語

伴奏 賈名 美名彦

八月九日午後二時 東儀、大和田、小松演奏會 於富山縣立

高等女學校

一、三重奏 ヴァイオリン 東儀 哲三郎

セロ 大和田愛羅 ビアノ 小松耕輔

序奏 鷹の巢 アイゼンマン作

二、男聲獨唱 大和田 愛羅

歌劇リゴレット中の味嘆劇 ゼールデイ作

三、ピアノ獨奏 小松 耕輔

インテルメツオ プラームス作

四、ヴァイオリン獨奏 東儀 哲三郎

甲、天使の夢 ラグエー作

乙、ハンガリアン、ダンス シスカールハウゼン作

五、男聲獨唱 大和田 愛羅

甲、海邊にて

シュールベルト作

金の笏

シュレツペレル作

乙、墳生の宿

ビシヨッフ作

○此の三人のトリオで、北海道の演奏旅行後富山市に來たもので、同地方が三十年來の大出水で交通遮斷せられたのであるが、

六、ヴァイオリンソロ獨奏

大和田 愛羅

一行の音楽會は無事であり且盛會であつた。

甲、ノクターン

ゴルターマン作

九月二十六日 東京音楽學校學友會第十回土曜演奏會 於東京音楽學校奏樂堂

乙、トロイメライ

シューマン作

七、三重奏 歌劇ファウスト中より抜萃

ピアノ小松耕輔

一、合唱

會 員

ヴァイオリン東儀哲三郎 セロ大和田愛羅

東儀 哲三郎

二、二重唱

高野 辰之歌

八、ヴァイオリン獨奏

東儀 哲三郎

聖夜

山下 禎、花鳥秀

コンチエルト第七章

ロード作

三、ギオロンチエロ

ベルリオース作

九、三重奏

ヴァイオリン 東儀 哲三郎

四、テノール獨唱

犬井 英夫

セロ 大和田愛羅

五、ソプラノ獨唱

水野 康孝

ゼ カリフ オウ バグダット

ボエルヂウ作

六、ピアノ獨奏

菅 原 秀

一〇、男聲獨唱

大和田 愛羅

七、ソプラノ獨唱

ト ー マ 作

喜歌劇フィガロ結婚中の咏嘆調

モツァルト作

八、ピアノ獨奏

ト ー マ 作

一一、ヴァイオリン獨奏

東儀 哲三郎

九、ピアノ獨奏

菅 原 秀

チゴイネルワイゼン

サラサーテ作

タランテレ

菅 原 秀

一二、男聲獨唱

大和田 愛羅

七、ソプラノ獨唱

ト ー マ 作

文部省唱歌集一より六まで抜萃

ヴァイオリン 東儀 哲三郎

歌劇ミニヨン中の抒情調

ト ー マ 作

一三、三重奏

セロ 大和田愛羅

八、ピアノ獨奏

石原 和子

ロンド、カプリッチョ

ペートーヴェン作

九、二重唱

永井郁、船橋榮吉

歌劇ベネディクトとペアトリス中の

ペルリオース作

一〇、合唱

會 員

涙の幣

吉丸一昌歌、本居長世曲

指揮者 樋口 信平

十月十七、十八日

恤兵音楽演奏會 東京音楽學校校友會主

催 於同校音楽堂

十七日

一、合唱

會 員

甲、雁の叫び

露 西 亞 民 謡

乙、獨逸靡戀の歌

シュルツ曲、吉丸一昌歌

二、オルガン獨奏

眞 條 俊 雄

ソナテイーネ い短調作品第三十八

ラインハルト作

三、ヴァイオリンセロ獨奏

鼓 城 昌 平

甲、に短調同伴樂中のアンダンテ

ゴルターマン作

乙、歌劇セザルベ中の間奏曲

エミールビツイ作

四、アルト獨唱 歌劇プロフェット中

森 川 達 子

の抒情調 あはれ吾子よ!

マイヤーベア作

五、ピアノ獨奏

高 折 宮 夫

ファッシング、シュヴァンク

シュューマン作

六、ソプラノ獨唱

長 坂 好 子

歌劇カルメン中のミカエラの宣叙調と抒情調 ビゼー作

七、管絃樂

會 員

三舞曲

ジャーマン作

八、絃樂附き合唱

會 員

君逝きぬ

ペートーヴェン作

九、バス獨唱

樋口 信平

甲、歌劇マクベス中のパンクラーの抒情調

エールテイー作

乙、歌劇ファウストの劫罰中のメフェイスのセレナーデ

ペルリオース作

一〇、ピアノ

弘 田 龍 太 郎

は短調同伴樂中のラルゴ作品三十七

ペートーヴェン作

一一、ソプラノ獨奏

永 井 い く

歌劇ミニオン中のフィリーナの抒情調

ト マ 作

一二、ヴァイオリン獨奏

助教授 喜多襄、佐野その

鳥居つな、蜂谷龍、田中ひさ

第六ソナタ中のプレリユードとガヴァットとロンド

バ ッ ハ 作

- 一三、ピアノ獨奏
 - 眞名 美名彦
 - 歌劇ユーディン中のボロニの小歌調
 - アレギー作
- ソナタ と短調作品二十二
- 一四、ソプラノ獨唱
 - シユーマン作
 - 七、管絃樂
 - 會
 - 歌劇ハムレット中のオフィーリア狂亂の抒情調 トーマ作
 - 三舞曲
 - シヤーマン作
- 一五、合唱及管絃樂
 - 會
 - 八、絃樂付き合唱
 - 會
 - 甲、歌劇プロフェット中の戴冠式行進曲 マイヤーベア作
 - 君逝きぬ
 - ベートーヴエン作
 - 乙、君が代
 - 九、テノール獨唱
 - 澤崎 定之歌
- 十八日
 - 林 廣 守作
 - 歌劇ローエン格林中のローエン格林の名宜り
 - ワグネル作
- 一、合唱
 - 會
 - 一〇、ピアノ獨奏
 - 小泉 ちか
 - 甲、雁の叫び
 - 露西亞民謡
 - ソナタ作品四十二
 - シユーベルト作
 - 乙、獨逸膺懲の歌
 - シュルツ曲、吉丸一昌歌
 - 一、ソプラノ獨唱
 - 蘭 部 房
 - 二、オルガン獨奏
 - 眞篠 俊雄
 - 歌劇ハムレット中のオフィーリアの狂亂の抒情調
 - ト ー マ 作
 - ソナティーネい短調作品三十八第三番
 - ラインハルト作
 - 三、ヴァイオリンセロ獨奏
 - 犬井 英夫
 - 一二、ヴァイオリン齊奏
 - 助教授喜多麿、佐野その
 - 第三司伴樂中アンダンテ
 - ホルダーマン作
 - 鳥居つな、蛭谷龍、田中ひさ
 - 四、ソプラノ獨唱
 - 渡 邊 銓
 - 第六ソナタ中のアレリユードとガチットとロンド バツハ作
 - 川久保美須々
 - 五、ピアノ獨奏
 - 山 口 節
 - 一三、ピアノ獨奏
 - シヨパン作
 - シケルツォー作品五十四
 - シヨパン作
 - 六、バス獨唱
 - ボロネーズ作品四十第一番
 - シヨパン作
 - 一四、テノール獨唱
 - 船橋 榮吉
 - 柴田 知常
 - 甲、シユテンドヘン
 - シユーベルト作

乙、魔王

一五、合唱及管絃樂

甲、歌劇豫言者中戴冠式進行曲

乙、君が代

十二月十二、十三日

校樂樂堂

一、ピアノ獨奏

甲、子守唄

乙、ミニョン行進曲

二、獨唱

フライシユッツ中の叙情調

三、ヴァイオリン獨奏

ファンタジーアツパシヨナータ

四、獨唱

バア、ラ、グロリーア、ダドラルビ

五、ピアノ獨奏

ソナタ、アツパシヨナータ

邦樂(省略)

十二月十三日

東洋音樂學校第十七回學友音樂會 於同校

一、四重唱 かさねの薨蔽

シュートベルト作 會 員

マイヤーベア作

林 廣 守作

女子櫻楓會慈善音樂會 於東京音樂學

賈名 美名彦

シ ■ パン作

ボルゲン作

永井 郁子

ウエーバー作

田中、久子

ギュータン作

永井 郁子

ボノンチーニ作

久野 久子

ベートーヴエン作

二、ピアノ聯彈

甲、ハンガリアンダンス

乙、同

三、獨唱 たゆたふ小舟

四、ヴァイオリン獨奏

一〇、女聲二重唱 旅の夜

一一、コルネット獨奏

甲、バルムロウス、フォレ

三、獨唱 旅の夜

四、ヴァイオリン獨奏

シンブルアベ、フランシス、トーマ

五、四重唱 甲、搖籃 乙、嵐の曲

六、ヴァイオリン四重奏

甲、無言歌

乙、アベ、ゲールム

七、ピアノ獨奏

甲、前奏曲

乙、幻想的即興樂

八、管絃樂

オルフォイス歌劇の序オツフェン

九、ヴァイオリン獨奏

甲、子守歌

乙、エア、グリューション

阿部軍次、土屋平三郎

丙、ロンドミタリ

吉野 ひさ子

杉江 泰一郎

メンデルゾーン作

モツアルト作

松 平 博

シ ■ パン作

同 上

東京オーケストラ團

バ ヲ

蒲池 鋼藏

ゴダード作

ダンクラ作

ルービンシタイン作

波多野 鍊太郎

乙、ペフシー、ボルカ、カッセイ

一、管絃樂 マホメットの樂園ワルツ

ブランクイット作

一三、低音獨唱

樋口 信平

歌劇ベスブリ、シチリアーニ中の一節

ウエールディ作

一四、管絃樂

歌劇ジブシー、ラヴの拔萃

フランブレイハー作

一五、管絃樂

甲、輕快なる舞踊 チャーレス

東京オーケストラ團員

乙、青島陥落行進曲

十二月六日東京フィルハーモニー絃剛恤兵シムフォニー音樂會

一、歌劇ローエングリーンの前奏曲

指揮 山田 耕作

二、音詩曼陀羅の華

ワグネル作 山田 耕作

三、歌劇

獨唱者 永井 郁

カルメン中のミカエラの宣叙調と抒情調

四、歌劇

獨唱者 柳 兼子

カルメン中のカルメンのハバネーラ

五、シムフォニー

かちどきと平和 山田 耕作

大正四年

二月十三日 學友會第十二回土曜演奏會

一、男聲合唱

歌劇ファウスト中の兵士の合唱

會 員

二、女聲二重唱

グノール作 内田琴、廣田ちづゑ

甲、ユーバー、アイン、シュティユンドライ

乙、さすらひ人の夜の歌

イー、ラッセン作

三、ピアノ獨奏

ルーピンシュタイン作

甲、夜の曲 變イ長調

鈴木 采

乙、夜の曲 變ホ長調

ファイールド作

四、ヴァイオリンセロ

小司伴樂 イ短調 作品四十六

グエー、クレンゲル作

五、ピアノ獨奏

井上 はる

光輝旋轉曲 作品六十二

ウエーバー作

六、ヴァイオリン

田中 靜

小司伴樂 作品三十一 第二樂章

ジッ ト作

七、ソプラノ獨唱

渡邊銜 ヴァイオリン助奏田中久

八、女聲合唱

會 員

アベ、マリア 貝ッハ、グノー作

樂劇タンホイザー中の若き巡禮の合唱

九、ヴァイオリン獨奏

荒木 得三

甲、サラバンド

ヘンデルブルーメルメスター

乙、ガブット

メューラーブルメスター

一〇、ピアノ獨奏

足立 ぶさ

ソナタ 作品二

クレメンタイ作

一一、バス獨唱

柴田 知常

甲、歌劇ファイガロの結婚中の抒情調

モツアルト作

乙、歌劇ファウスト中のメフィストフェレスのセレナーデ

グ ノ ー作

一二、ヴァイオリン

井川 富子

司伴奏 第八番 第一樂章

ロ ー ド作

一三、ソプラノ獨唱

長 阪 好子

歌劇捷利者中のシメーヌの宣叙調と抒情調 マッスネー作

一四、合唱

會 員

鄭愁予、ワイト

イー、エス、エンゲルスベルヒ作

君が代

林 廣 守作

五月十六日 戸山樂團竣工披露演奏會

於戸山學校軍樂隊

一、行進曲 聖シリエンヌ

ウー ジオー作

二、行進曲 戴冠式の鐘

バートリッザ作

三、序樂總技會

ベ ラ 作

四、甲、亞米利加の夜廻り

コックスマーア作

乙、ガロップ、夜中の警鐘、ボンアの繰出し

五、樂劇 ボヘミヤの少女

ベ ル フ作

六、樂劇 羅馬 其一と二

マ ス ネー作

七、ブルス リラの花束

デ イ オー作

八、甲、新流行軍歌 想へば遠しテイバレリー

ヤッザ、ウイリアムズ合作

乙、ボルカ竹林棲息の黒奴

グ ロ ード作

丙、木琴獨奏ラ、ジュアナ

ハ ウ ギル作

九、接續曲 ショパンの思ひ出

ベ ッ ケル編

第一部大内教官指揮、第二部永井樂長指揮

番外として平野樂長補指揮の軍樂生徒の演奏があつた。

五月十六日 音樂普及會の海軍々樂隊を主とする第二回演奏會 於神田女子音樂學校

會

一、管絃合奏

海軍々樂隊

歌劇ウキリアムテルの序樂

ロ フ シーニ作

二、絃樂四重奏

海軍々樂隊

イ、アンダンテ、カンタービレ

ハ イ ドン作

ロ、アルレグロ

モ ツ アルト作

三、管絃合奏

海軍々樂隊

歌劇ミニョンの拔萃

ト ー マ作

四、ヴァイオリンセロ 司伴奏 イ短調	阪西 久治	一二、管絃樂合奏	アフチーニ作
五、ソプラノ獨唱	原 のぶ	蘇格蘭の思ひ出	海軍々樂隊 ゴットフレイ作
甲、ギルラネラ	デルアクーナ作	五月二十日午後六時	指揮者 瀬戸口 謙吉
乙、セレナーデ	パオロトステ作	第九回獻堂記念音樂會 於東京麻布福	
六、木琴獨奏	毛谷 平吉	音教會	
スバ温泉の記念	ゲルダルト作	一、絃樂合奏	
七、管絃合奏	海軍々樂隊	ベコニアソサイテイ、行進曲復活	ス ーザ作
歌劇カルメンの拔萃	ビゼー作	二、音樂合奏	同 上
八、管絃樂合奏	海軍々樂隊	歌劇拔萃ローエン格林	ワグネル作
イ、支那の歌トンキノイゼ	クリステイーネ作	三、箏曲	
ロ、印度の歌ホゴモコ	レーゴース作	四、ヴァイオリン獨奏	スタスワカー
ハ、東洋風曲キスメツト	マルケイ作	五、音樂合奏	ベコニアソサイテイ、ブルス五月の夜
九、クラリネット獨奏	石川 利三郎	六、音樂合奏	デュブレーヌ作
舞曲エムマ、リギーリ	ビルエル作	マトロール 英兵夜間巡邏	同 上
一〇、管絃樂合奏	海軍々樂隊	七、絃樂合奏	ベコニアソサイテイ
歌劇トスカ拔萃	アフチーニ作	八、箏曲	アッ シ作
一一、最高音獨唱	原 のぶ子	七、絃樂合奏	長唄越後獅子
甲、歌劇トスカ二幕日のアリア	アフチーニ作	九、絃樂合奏	ベコニアソサイテイ
乙、歌劇マダム、パッタフライ二幕日のアリア			

接續曲 米國學生歌集

ベコニアソサイテイー

一〇、君が代

會衆 一同

教會を中心として青年會の音樂會だけ教會臭も音樂臭も少い

五月二十九、三十日 東京音樂學校演奏會 於同校音樂堂

一、合唱 聯唱及管絃樂

ワグネル

歌劇 ローエングリーンの第三幕

イ、前奏

ロ、第一場 婚儀曲の合唱

ハ、第二場 エルザとローグリーンの聯唱

二、ピアノ及管絃樂

ろ短調 カプリッチオ プリムランテ 作品二十二

メンデルゾーン

三、獨唱 管絃樂伴奏

歌劇 フィガロの結婚式第四幕中のスザンナのアリア

モツァルト

四、ヴァイオリン演奏

と短調 司伴樂作品 二十六

アルレグロ モデラート 前奏 アダーチョ

五、ピアノ獨奏

教師 パウルショルツ

ろ短調 ソナタ 新作

教師 ウエルクマイスター

アルレグロ

アンダンテ ソステヌート

ブレスト スケールツォ

アルレグロ モデラート フィナーレ

六、二重合唱及管絃樂

歌劇 ローエングリーンの婚儀行列の歌

七、管絃樂

歌劇 リエンツイの序曲

五月一日 仙臺第二高等學校有志音樂會 於同校講堂

一、絃樂合奏 交響樂中緩徐調 ハイドン

二、ピアノ獨奏 進行曲 プライズバンド

三、絃樂合奏 薔薇の花園

四、ヴァイオリン獨奏 甲、夢

乙、クシコス ポスト

五、管絃樂

指揮者 ゲスターフ クローン

會 員

會 員

はなやしめ

六、高音獨唱

甲、海

乙、森の中で

七、フレンチホルン獨奏

カバテイーナ

八、ヴァイオリン獨奏

スーヴニア

九、絃樂合奏

勝利の旗の下

一〇、ピアノ獨奏

ト短調 ラブソナタ

一一、絃樂合奏

金婚式

一二、ギター伴奏附獨唱

甲、小島の罪ひ

乙、若き思ひ出

一三、絃樂合奏

支那官吏

一四、オルガン獨奏

露國々歌替手

レーハール

サイブル

マクダエル

マクダエル

アンケニー

ラッパ

熊谷講師

ドウルドウラ

會員

ブロン

ハンセン

ブラームス

會員

マリー

ウユルフェル

ベヒスタイン歌、シューマン

リニッケルト歌、フランツアプト

會員

ノルマンフレイ

櫻井みつ

一五、管絃樂

姉妹

五月二十三日

東京フィルハーモニー會管絃樂部の第一回公

開試演 於丸の内帝國劇場 山田耕作の主筆する

指揮 山田耕作

一、序曲

二、美しき背きダニウツ河に沿ひて

三、藝術家の生活

四、維納氣質

五、不朽のワルツ

六、離婚の女

七、妖女の舞踏

八、氣輕な寡婦

六月五日 第二回山野音樂會 於帝國ホテル

一、マンドリンオーケストラ

喜歌劇 惡魔拔萃曲

海のさゝやき

ロンベルダの小夜樂

二、ペリトン獨唱

歌劇 道化師の内トリーニヨの序歌

會員

ボレルクラーク

山田耕作

シユトラウス

シユトラウス

シユトラウス

フアール

フアール

フアール

レハール

レハール

レハール

レハール

レハール

オーベベル

サルベツチ

アルフィエーリ

ムダ

レオンカヴルコ

三、ピアノ獨奏

パウロウスキー

一、吹奏樂

近衛軍樂隊

エロイデ、ショパン、ショパンの歌調に依るポロネーズ、

演奏會の序曲 幸ある船路

指揮者 山本 鏡三郎
メンデルゾーン作

四、バス獨唱

我は山を漂泊ひぬ

リ ス ト

二、唱 歌

東京音樂學校生徒及來會者齊唱
本會作歌作曲

雄鷲は西に行きぬ

レ ー ア

三、管絃樂

海軍々樂隊、東京音樂學校、月山學校軍樂隊
指揮者 瀨戸口 藤吉

五、男聲二重唱

歌劇 運命の力の内 今こそ君に誓はめの聯唱

サ ル コー リ、タ ム

喜歌劇 寄宿舎の前奏曲

シ ュ ヲ ヲ 作

六、ソプラノ獨唱

歌劇 トスカ中の愛と音楽の歌

ド ニ ヲ ヲ ヲ テ イ

四、ピアノ獨奏

美麗なるワルツ
谷 村 な つ
シ ヲ バ ン 作

七、三重唱

歌劇 ランマームーアのルチーアの内

メンデルゾーン、サルコーリ、タム

五、管絃樂

月山學校軍樂隊、東京音樂學校、海軍々樂隊
式部職樂部 指揮者 永 井 建 子
イ、瀟灑的ワルツ 金と銀
レ ー ハ ー ル 作

六、十二日

我が心を抑ふるは何ぞの三聯唱 ドニツエツテイ

ロ、美麗なる幻想曲 民謡「久しき前に」に基づく
クシロホーン獨奏と其換手
デイットトリッヒ作

於東京音樂學校奏樂堂

演奏人員は無慮百八十名に達し日本開關以來の尅大な音樂會であつた。曲目第二の祝賀の歌を唱ふ前に伊澤修二が主人側を代表して侯爵に祝辭と謝辭とを述べ、一同は一齊に起立して來賓の方に向ひ祝歌を齊唱した。

六、箏 曲

箏 今井慶松、三絃 萩岡松韻、胡弓 山室千代
鶴島侯爵作歌 山勢松韻作曲

七、低音獨唱

武徳樂 雅樂曲
ルードルフ デイトトリッヒ作のピアノ伴奏を用ふ

七、低音獨唱

種 口 信 平
鶴島侯爵作歌

武徳樂 雅樂曲

ルードルフ デイトトリッヒ作のピアノ伴奏を用ふ

八、ヴァイオリン獨奏

バラッドと波蘭舞踏曲

田中ひき
ギュータン

番外 齊唱、尋常小學唱歌二曲

七、ヴァイオリンソロ獨奏

犬井英夫

九、高音獨唱

蘭部ふさ

ヴァイオリン助奏 田中ひき

歌劇 ロザルバの間奏曲

ビッチ

小夜樂

グノー作曲 近藤逸五郎譯歌

八、合唱 甲、若松懷古

シューベルト曲、吉丸一昌歌

一〇、管絃樂

式部職業部、東京音樂學校、戸山學校軍樂隊

乙、鐵道開通の歌

マルシュネル曲、吉丸一昌歌

海軍々樂隊

指揮者 芝 葛 鏡

九、ヴァイオリン獨奏

末吉雄二

表敬行進曲

リヌスト

一〇、低音獨唱

金健二

六月四日より九日に亘り

若松、新潟、高田、上田、甲府で

甲、夏野

ウヰーバー曲、吉丸一昌歌

演奏した。學友會春季演奏旅行。

乙、新作唱歌二曲

吉丸一昌編

一、絃樂合奏 小夜樂

モツアルト

一、絃管合奏 戴冠式行進曲

マイヤーベア

二、ピアノ獨奏

湯前純親

一二、合唱 絃樂伴奏 君が代

林廣守

アンプロムティユ 作品九十第四番

シュューベルト

場所により左の演奏があつた。

林廣守

三、次中音部獨唱

水野康孝

○ヴァイオリン、清水勝藏、北原季男、獨唱、佐藤豊吾、柴田

晝の夢

高安月郊歌、梁田貞曲

知常、其他番外として上田町に於ては、近藤義次の獨唱、高

四、ヴァイオリン獨奏

ヴァイオリン助奏

多忠亮

田市に於ては小林禮のピアノ獨奏。

若き日の思ひ出

杉山長谷夫

六月十九、二十日 學友會春季演奏會を、二十日は管絃樂全

五、合唱 甲、忠 臣

ビーデルマン編

部中止のため代りにベッオールド、ショルツ兩教師のピアノ

乙、雁の叫び

ロシア民謡 旗野十一郎歌

聯奏があつた。

六、絃樂合奏 大司伴奏中より

ヘンデル

一、管絃樂

會 員

歌劇 アウリスのイフィゲーニエの序曲

ゲル ック

ファンタジー 作品二十一

ブローツフヒ

二、ソプラノ獨唱

武岡 鶴代

九、テノール獨唱

水野 康孝

ラ ツインガーラ

ドニツェッティ

甲、アムメーア 乙、彷徨ひ人の夜の歌

シュューベルト

三、アルト獨唱

廣田ちづゑ

一〇、ヴァイオリン獨奏

蜂谷 龍

歌劇 オルフオイス中のオルフオイスの抒情調

ファンテージー カプリース

ギエータン

アッハイヒ ハーベジーフェアローレン

ゲル ック

一一、ピアノ聯奏

第一ピアノ 弘田龍太郎

四、ヴァイオリン

多 忠 亮

一二、管絃樂

第二ピアノ 眞名美名彦

小同伴樂 ト長調

リーディンク

シムフォニー詩 タフソー悲哀と勝利

リス ト

五、アルト獨唱

花 島 秀

一二、管絃樂

合 員

甲、歌劇 ミニョン中のミニョンの抒情調

ト ー マ

管絃樂組曲 カルメン

合 員

乙、同上 ステイリエンヌ

合 員

番外 ピアノ聯奏

第一ピアノ ベッオールド夫人

六、管絃樂

合 員

ル プレリユード シムフォニー詩

合 員

森の水車

アイレンベルヒ

第二ピアノ シ ョ ル ツ

合 員

七、合唱

合 員

一三、合唱 管絃樂附

合 員

甲、歌劇 マイスタージンガー中の合唱

ワグネル

君が代

合 員

乙、宵の春雨

吉丸一昌歌、淺田貞曲

六月廿六日 音楽奨励會第十六回音楽演奏會

合 員

八、ソプラノ獨唱

内 田 琴

於東京華族會館

合 員

甲、ハイデン レースライン

シュューベルト

一、ソプラノ獨唱

永坂好子 ヴァイオリン助奏 田中ひさ

乙、モントナハト

シュューマン

畫の夢

合 員

番外 オルガン獨奏

助教授 中 田 章

二、ピアノ獨奏

合 員

- 甲、アレリユード ト調作品二十八第三番 ショパイン
 乙、ベルセイズ ト長調 作品三十八 グリーヒ
 三、ソプラノ獨唱 永井郁子
 歌劇 オペロン中のリツィアのカヅティーナ ウエーバー
 四、ヴァイオリン獨奏 田中久子
 幻想的舞踏曲 作品百 ベリオ
 五、ソプラノ獨唱 永井郁子 ヴァイオリン助奏 田中久子
 セレナーデ グノーリ
 六、ピアノ獨奏 藤田愛子
 甲、ノクターン 作品二十七第二番 シ・バン
 乙、波蘭土舞踏曲 作品三第一番 ザギエシャルヅンカ
 七、ソプラノ獨唱 長坂好子
 歌劇 ルシッド中のシメーヌの抒情調 マフスネー
 八、ピアノ獨奏 松島舞子
 プリリアント ボルカ 作品七十二 ウエーバー
 九、ソプラノ獨唱 永井郁子
 歌劇オテルロ中のデスデモーナのアベマリア エールテイ
 一〇、ヴァイオリン獨奏 田中久子
 バラッドとボロネイズ 作品三十七 ギエータム
 六月二十七日 山田耕作の指揮する東京フィルハーモニー會
- 管絃樂部第二回公演 於帝國劇場
 一、歌劇 アアハッサンの序曲 初演 ウエーバー
 二、管絃樂伴奏附男聲合唱 初演 プルッフ
 テルモビレリーの戦死者に
 三、スイنفォニー第拾壹番 初演 ハイドン
 甲、アデーヂオーアルレグロ 乙、メヌエツト
 丙、フィンアーレ
 四、管樂五重奏曲 バストラル 初演 ビエルネ
 五、歌劇 歸郷中の二重唱 初演 メンデルゾーン
 六、アルルの女
 甲、アレリユード 乙、メヌエツト
 丙、アデーヂオ 丁、カリロン
- 九月十日 東京音樂學校學友會第十四回土曜演奏會
 於東京音樂學校演奏堂
 一、合唱 會員
 甲、真心の泪 ノイマーク曲、吉九一昌歌
 乙、海員の歌 獨逸民話、會員歌
 二、ソプラノ獨唱 武岡鶴代
 歌劇ウイリアムテル中のマテイルダの華想調 ロッシーニ
 いまし静けき森よ 第二幕の初め

三、ベテソール獨唱

柴田知常

於横濱のフェーリス女學校講堂

甲、歌劇 エロイデアード中のエロード

一、絃樂四重奏曲第八番中のアルレグロコンスピリート

王の叙調抒情調

マフスネー

二、低音獨唱

ハイドン

乙、歌劇 地獄に墮ちたるフォースト中の

歌劇 イルフリオーゾ中の華想調

ドニツェツァイ

メフストフレスのセレナータ

ベルリオース

三、洋琴獨奏

シロパン

四、ヴァイオリン獨奏

館山甲午

甲、輪舞曲 作品六十九第二

乙、輪舞曲 作品六十四第一

同伴樂 第一第二樂章

ザイツ

四、高音獨唱 フリユート助奏附セレナーデ

グノー

五、ソプラノ獨唱

武岡鶴代

五、絃樂四重奏

アダージオ 作品百二十五第一

歌劇 シキリアの床屋中のロジイナの小樂調

ロッシーニ

六、低音獨唱 マクベス中の抒情調

エールデイ

ウナゾーチエボーコフア

水野孝廉

七、ヴァイオリン獨奏

甲、旋律G線フリムル 乙、リゴードン、モンシニー

六、テノール獨唱

シユーベルト

八、高音獨唱 糸を續ぐグレートヒエン

シユーベルト

甲、リターナイ

シユーベルト

九、絃樂四重奏曲 第九番終曲アレスト

ハイドン

乙、シユテンドヒエン

廣田チツエ

ヴァイオリン

芝祐孟、岡東儀某、ヴァイオリン及びヴ

七、コントラルト獨唱

マイアーベア

ヴァイオリン

杉山長谷夫、ヒロ 林顯三、獨唱 樋口信平、

歌劇 豫言者中のフィーデズの抒情調

會員

長坂好子、洋琴 弘田百合子

長坂好子、洋琴 弘田百合子

八、合唱

會員

長坂好子、洋琴 弘田百合子

長坂好子、洋琴 弘田百合子

甲、忌垣の前に

ハイドン曲、古丸一昌歌

長坂好子、洋琴 弘田百合子

長坂好子、洋琴 弘田百合子

乙、秋に

獨逸古民曲、會員歌

長坂好子、洋琴 弘田百合子

長坂好子、洋琴 弘田百合子

君が代

林廣守 指揮者 榊原直

長坂好子、洋琴 弘田百合子

長坂好子、洋琴 弘田百合子

十月廿五日 ハイドゥンクワルトット第六回演奏會

聖十月廿六日 東京フィルハモニー會管絃樂部の第三回月次

公開試演音楽演奏會 於帝國劇場 山田耕作指揮

一、歌劇 露那の序曲 メンデルゾーン

スインフォニー かちどきと平和の第二變奏曲

アダチヨノン タントエボコ マルチャレ 山田耕作

三、管絃合奏 セレナーデ セロ獨奏附 フォルクマン

四、口短調 シインフォニー

甲、アルレグロ モデラート

乙、アンダンテ ヨンモート シュューベルト

五、アルサスの風景 マッスネー

甲、菩提樹の下 乙、旅宿にて ブルッフ

六、セロ管絃合奏 コールニードライ

七、戲曲 アルの女の第二番

甲、バストラル 乙、インテルメッツォ

丙、メヌエット、イ、フィランドール、ビゼー

十月二日 九州帝國大學フルハーモニー會

於同大學内精神病教室大談堂内

一、ピアノ ヴァイオリン二重奏 ワグネル、ジンダレエ

二、ヴァイオリン獨奏

甲、悲曲作品百二十三中より ベリオー

乙、舞踏會の光景中のアレグロ ペリオー

三、ヴァイオリン獨奏 惡魔の舞踏全部 バガニーニ

四、高音獨唱 戀歌サリザン嬢

五、ヴァイオリン司伴樂 第二番アンダンテイノと

ロンドルフセ ペリオー

六、ヴァイオリン司伴樂 第一樂章を略し

アダージェオとフナーレ全部

七、ピアノ ヴァイオリン二重奏 ドニツァテの歌劇

ラムマームーアのルシー中の大幻想曲ベリオとオスボルン

八、洋琴五重奏 小交響樂第五 ダンクラ

○此の演奏會は禰アーベントと稱せられるもので禰博士が主となり純大學系のものである。

十月十七日 鳴友會主催の第二回音楽會

於淺草區七軒町第一高等女學校講堂

一、女聲三重唱 會員有志

甲、ヘーベ ダイネ アウゲン アウフ メンテルゾーン

乙、フェイスフル ジョーニー、ペートーヴェン

二、ピアノ獨奏 會員 藤田愛子

バセティク ソナータ ペートーヴェン

三、獨唱 會員 鈴木乃姪子

甲、フォン エギーガー	リーベ、ブラームス	一、箏、松竹梅	箏 今井慶松、門人 木賀慶重
乙、デアガンクツームリーブヒェン	ブラームス	二、獨唱	三絃 高橋榮清、胡弓 山室千代子
四、ピアノ獨奏	會員 原 みち子	歌劇 ナブコ中のツァクリアの祈り	樋口 信平
ファンタジー アムプロムテュ		三、ヴァイオリン獨奏	エー ルディ
五、ギオロンセロ獨奏	ニブコ	甲、アンダンテ レリギオーゾ	田中 久子
六、ヴァイオリン獨奏	クロ	乙、カブリッツォ	ト
ツイゴイナークイゼン サラサーテ		四、獨唱	ボ
七、獨奏	ベツオールド	アーエ マリア	長坂 好子
甲、フェルトアインザムカイト	ブラームス	五、ピアノ獨奏	ケ ノ
乙、エレギー	マスネ	パラード	眞名美名彦
丙、スキーディアシエス	ポルスカ	六、獨奏	シヨパン
八、ピアノ獨奏	ベツオールド	歌劇 床屋中のロジナーのカヅチーネ	長坂 好子
甲、プレリュード	シヨパン	七、ヴァイオリン獨奏	ロツシーニ
乙、エテイユドトランサンダン	バガニーニリスト	甲、タイスのメヂタチオン	多久 寅
九、ヴァイオリンピアノ合奏	ベツオールド、クロ	乙、チンガレスカ	マスネ
クロイツァーンナード	ベートーヴェン	八、獨唱	ツエツリン
甲、アンダンテ コン グリアチオーネ		歌劇 シモンボツカネーラ中のロマンス	樋口 信平
乙、プレスト タランテラ		九、ピアノ獨奏	エー ルディ
十月廿三、四の兩日 熊本回春病院後援會の慈善大音楽會		ワルス式の練習曲	神戸 絢子
於東京音楽學校樂堂			サンサーン

一〇、長 唄

十月廿四日 山田耕作氏の指揮する東京フィルハーモニー會

管絃樂部の第四回月次公開試演音樂會 於帝國劇場

一、歌劇 レオノーソ序曲

二、アンダンテ ホ短調スイーテ

三、女聲獨唱 管絃樂伴奏附

歌劇 タンホイザー中のゾーヌスの抒情調

四、エロニーク

五、スキート ヤヤホネー 日本組曲

甲、さらしの曲 乙、お江戸日本橋 丙、かつぼれ

六、女聲獨唱 管絃樂伴奏附

歌劇 マルタ中の残りの薔薇

七、チブシーの戀

八、藝術家の生活

〇五、六は喝采されて再奏と再唱を餘義なくされた。

十一月六日 ワグネルソサイティー主催御大禮奉祝音樂會

於慶應義塾講堂

一、合唱 甲、君が代 乙、熱歌

二、絃樂合奏 河のほとりにて

三、次中音獨唱

秋夜懷友 犬童球溪歌

〇、ヴァイオリン獨奏

甲、ベルセース

乙、クシコスポスト

五、男聲合唱

聖歌

六、チェロ獨奏

甲、レベリー 乙、オンスティルト、トリンカウス

七、上低音獨唱

戀の羊飼

八、絃樂合奏

泉

九、男聲合唱 甲、尊敬する神

乙、エビフィニアス

一〇、絃樂四重奏

抒情調

一一、次中音獨唱

歌劇 カルメン中の一部

一二、ピアノ獨奏

スケルトツオ カブリーチエ

ライトン曲

佐藤清太郎

アラビヤ曲

ネッケ

會 員

シュニーベルト

日比谷 平太郎

中井 定夫

ベ ル グ

會 員

リスベルク

ベートーヴェン

ゼ ル テ

加藤 武二

パ フ ハ

澤崎 定之

ビ ゼ ー

日比谷 平吉

ゴダール

一三、ヴァイオリン獨奏

ハンガリアンダンス

番外 次中音獨唱

甲、歌劇 トスカ第一幕中よりの一節

乙、ファンテラ アル、エスタ、

一四、長唄 以下邦樂につき省略

十一月七日 廣島縣師範學校自適會音樂部秋季演奏會

於同校

一、單音唱歌

甲、泉統 乙、日出づる國 音樂教科書

二、單音唱歌

祝ひ日 唱歌教科書 常盤木 西洋民謡曲 附屬尋小五男兒

三、單音唱歌

祝ひ日 唱歌教科書 常盤木 西洋民謡曲 本四 武田義雄、三上登

四、ピアノ連彈

五、單音唱歌

甲、和氣清麻呂

乙、とよとし

六、二重唱

甲、愛國の歌 乙、豊年

七、オルガン連奏

甲、忠愛の歌

乙、レ、ベチット、カーナブル、ボルカ

八、獨唱 巡禮

九、二重唱

甲、希望 西洋民謡 乙、この君この國 ボーエルデュ

一〇、ピアノ連奏

ザ、ピーチ

一一、三重唱

聖母無量

一二、二重音及單音歌

甲、我が國

乙、悠紀齊田御田植歌

一三、三重唱

甲、水草 英國民歌 乙、うかれだるま

一四、二重唱

甲、菊 乙、故郷を想ふ

一五、ピアノ、ヴァイオリン合奏 前奏曲

磯貝縣立廣島高等女學校教諭、内田廣島女學校教諭

一六、二重唱

中田山中高等女學校教諭

本三 重廣孝道、牧野敏恵

ベ、カント

ストレーポック

渡邊教諭、本四 長谷川要

本科 第三學年生

本科 第四學年生

本科四 向井肆郎次、長谷川要

ス ミ ス

本科 第四學年生

ベリーニ

附屬高小二女兒

ネーゲリ

青柳善伍講付

本科 第四學年生

來賓、本市小學校女教師諸君

來賓、本市小學校女教師諸君

來賓、本市小學校女教師諸君

來賓、本市小學校女教師諸君

來賓、本市小學校女教師諸君

來賓、本市小學校女教師諸君

一七、ピアノ獨奏

竹村三原女子師範學校教諭

鳥取高女高橋教諭、鳥根女師立花教諭

フアンタジ

山本廣島高等師範學校助教諭

一、オルガン獨奏

ナショナルガートマーチ 補習矢島澄江

番外 鶴龜 邦樂長唄

メンデルゾーン

一、ピアノ獨奏

松江高女宮崎教諭

君が代合唱

會衆 一同

ソナタ

ベートーヴェン

十一月十二日 山陰音樂會 於鳥根縣松江高等女學校講堂

晝の部

一、單音唱歌 イ、子守唄 ロ、富士山

一年 乙組

一三、獨唱 イ、四季の月 ロ、フターロー 片岡教諭

二、單音及二重音

二年 甲組

一四、三重唱 イ、星 ロ、妙なる調べ 補習科

イ、湖上の月 ロ、たそがれ

一五、單音及二重唱 イ、月下懷郷 ロ、旅の暮 二年乙組

三、オルガン獨奏 タイタスマーチ

四年 高橋よしの

一六、四重唱 イ、雁の叫び ロ、冬の野のたそがれ ハ、菊の盆 山陰音樂會員

四、二重唱及三重唱

三年 甲組

一七、獨唱 菊 四年 植村きくの 鳥根女師立花教諭

イ、懷友 ロ、秋のあはれ

鳥取師範 片岡教諭

一八、ピアノ獨奏 パラーデ ラインベルガー

狩の曲

メンデルゾーン

一九、單音及輪唱 イ、海邊眺望 ロ、花もみぢ 二學年

六、獨唱 秋夜懷友

三年 石黒ふみ

二〇、獨唱 イ、セーリング ロ、君は神 米子高女秋山教諭

七、ヴァイオリン獨奏 司伴樂

ギオッティ、猪瀨教諭

二一、二重唱 イ、深夜の都會 ロ、秋風 三學年

八、單音唱歌 イ、菊水 ロ、秋の宮

一年 甲組

二二、オルガン獨奏 イ、プレリユードとフーゲ 高橋教諭

九、三重唱 イ、胸のたゞ中 ロ、山里

四年 甲

二三、ピアノ獨奏 ロ、ローマレス サンパロルス レムメンヌ

一〇、三重唱 三つの舟

松江高女宮崎教諭

アムプロムチユ 鳥根師範猪瀨教諭

シュールベルト

二四、獨唱

イ、晝の夢

ロ、夏の野

二五、オルガン獨奏

イ、故郷の空

二六、三重唱

二七、ピアノ、ギオロンテェルロ三重奏

二八、三重唱

イ、御代の恵

二九、獨唱及四重唱

三〇、絃樂合奏

夜の部

一、四重唱

二、單音唱歌

三、獨唱

四、オルガン獨奏

甲、デー・フワイゼダーメ

乙、ドン ファン

五、ピアノ獨奏

宮崎 教諭

梁田 貞

メンタルズーン

四年 田代 八重子

三年 乙組

急速調

立花、宮崎、猪瀬 教諭

四年 乙組

山陰音樂會員

山陰音樂會員

山陰音樂會員

山陰音樂會員

山陰音樂會員

一年 高橋 和子

一年 高橋 和子

米子高女校秋山 教諭

ボイエエルデュ

モツアルト

鳥根女師立花 教諭

六、ヴァイオリン獨奏

甲、マドリガール

乙、ハンガリアン

七、獨唱

八、オルガン獨唱

九、箏

一〇、獨唱

夜の調べ

一、オルガン獨奏

甲、フーゲ

乙、ヘレーネ

一二、獨唱及三重奏

一三、二重唱

一四、單音唱歌

一五、ピアノ獨奏

結婚マーチ

一六、獨唱

一七、オルガン連奏

甲、ほゝふみ

鳥根師範猪瀬 教諭

シモノフチイ

ケラベラ

梁田貞、鳥取師範片岡 教諭

四年 村上、春代

三年 清原利子、佐藤幸、佐藤あや子

二年 江角初野、内村たか

松江高女宮崎 教諭

鳥取高女高橋 教諭

ゴルカ・レムメンヌ

山田定子、梶谷竹子、金澤市子

浦のあけくれ

四年 學年

補習科

片岡 教諭

メンタルズーン

補習 和田 玉 龍

四年 森本つゆ、佐々於陸

一八、獨唱 秋の夜 立花 敬諭

一九、ピアノ獨奏 楠智 矢田 春子

ソナテイーネ クーラー

二〇、獨唱 イ、旅愁 ロ、譽の翁 秋岡 敬諭

二一、三重唱 田毎の月 宮崎敬諭、高橋敬諭、立花敬諭

二二、ピアノ ヴァイオリン チェルロ三重奏 急速調

ハイドゥン 立花、宮崎、猪瀬敬諭

二三、單音唱歌 乃木大將 二 學 年

二四、ピアノ獨奏 宮崎 敬諭

嵐 ウェーバー

二五、四重唱 山陰音樂會員

薩摩湯 シューマン

二六、絃樂合奏 君が代マーチ 山陰音樂會員

十一月十三日 御大禮奉祝音樂會 於廣島高等師範學校講堂

一、齋唱 附小 一部 六年

甲、秋尋常小學唱歌 乙、演習、中等唱歌

二、獨唱及び齊唱 甲、木の葉新作唱歌 附小三年 鴨坂喜美

乙、菊 幼年唱歌 同 三部三四年全體

三、コルネット獨奏 杉 原 雅

甲、子守唄 ブラームス

乙、ライン河を趣えて通ひ來、蘇國民謡

四、唱歌遊戲 浦島太郎 尋常小學唱歌 齊附小二三部二年女兒

五、獨唱及齊唱

甲、二宮尊徳幼年唱歌 附小一部四年 松本 七郎

乙、廣瀬中佐 吉田 信太

六、クラリオネット、コルネット、ピアノ合奏

グート町 蘇國民謡

八、クラリオネット 清山歌一 B、クラリオネット 飯島徳治

コルネット 山崎隆義、ピアノ 菊地熊太郎

七、齊唱 附 中 一年

甲、"Twinkle, Twinkle Little Star"

乙、"Little Tling" フランクリン集

八、連唱 附小二部六年 深田廣子、五年 加藤文子

甲、紅葉 小學唱歌集 姉妹 デュエットトリオ集

九、ピアノ獨奏 櫻 正 雄

ソナテイーネ クレメンティ

一〇、絃樂合奏 第一ヴァイオリン 松田、成田、清山、櫻

第二ヴァイオリン 加藤、砂川、太田

ギョーラ 淺香、宮四 チェルロ 植村、西野

ピアノ 菊池 指揮者 武藤、安藤

甲、ガブツト

グルック

一九、管絃樂

第一ヴァイオリン ホイヤー講師

乙、金婚式

ガブリエル アリー

第二ヴァイオリン 松田、成田、清山、櫻、加藤、砂川、太田

講演 奉祝唱歌作曲者 神戸市湊川小學校訓導 松本徳藏

大禮奉祝唱歌の作曲に就て

ギオーラ、淺香、宮西 チェルロ 植村、四臨 クラリ

一一、三重唱 秋の野原 音楽教科書

文理科一年

オネット 飯島、村上 コルネット 杉原、山崎

一二、ピアノ獨奏

山本助教諭

ホルン 吉村、木村、バス、神山、ピアノ、ハフチエ

幻想曲

メンデルゾーン

木 指揮者長橋助教諭

一三、三重唱 三ツの舟 音楽教科書

本科一年

戴冠式進行曲

セントジョージ

一四、二重唱

附小高等科女兒及二部五六年女兒有志

二〇、齊唱 大禮奉祝唱歌 文部省撰

會衆一同

甲、歌の松波 乙、豊年 中等音楽教科書

附中五年 林 公三郎

十一月十七日 福岡フィルハーモニー會の御即位奉祝音楽演

一五、獨唱

“Last Rose of Summer” 愛蘭民謡

附中五年 林 公三郎

奏會 於福岡市西中洲公會堂

一六、ピアノ、ヴァイオリン、チェルロ合奏

山本助教諭、ハフチエスン講師

一、甲、絃樂合奏 會員一同 大奉典祝唱歌 中野きよ子 藤作

乙、小管絃樂 會員一同 皇子殿下進行曲

ヴァイオリン セイヤー講師、チェルロ

長橋助教諭

歌劇 ケーニヒスキンダー中の一節 フムバードインク

指揮者 楠 會 頭

戴冠式進行曲

マイアーベリア

二、ピアノ獨奏

指揮者 楠 會 頭

一七、四重唱

本科一二三年 指揮者 植村久二

御即位大典の曲

中野 教師

祝へ國民

ヘンデル

三、ピアノ連弾 ヴァイオリン合奏

モツァルト

八、オルガン獨奏

松本徳藏

三、ピアノ連弾 ヴァイオリン合奏

楠博士夫人、小野博士夫人、中野夫人

ファンタジー

フランク

楠博士夫人、小野博士夫人、中野夫人

ファンタジー

フランク

楠博士夫人、小野博士夫人、中野夫人

楠博士夫人、小野博士夫人、中野夫人

御即位進行曲 歌劇 豫言者中の一節

マイヤーペーア

ドラントル作品八十五、二番

ヘルラー

四、小管絃樂

會員一同

六、バス獨唱

柴田知常

大典奉祝曲 荒川文六謹作

作曲者 指揮

歌劇 道化師中のトリーニオの口上

レオンカヅルロ

五、小管絃樂

會員一同

七、女聲合唱

會員

大典奉祝曲

メンデルゾーン

八、洋琴獨奏

古谷幸一

シンフォニー カンターテ 讚歌第五及第六曲

指揮者 輔會頭

九、ヴァイオリン

アッコレ

萬歲曲 獨唱者 中野教師

指揮者 輔會頭

ソナタ作品七

多忠亮

六、絃樂 ピアノ、オルガン合奏 會員一同

指揮者 輔會頭

一〇、ソプラノ獨唱

山下禎

番外 ヴァイオリン 榎保三郎 司伴樂 第二番全部 ベリオ

ウエーバー

歌劇 アラジルの真珠中ツォーラの抒情調

フエリシアン ダギワド

十月廿九、三十の兩日 秋季大演奏會 於上野校奏樂堂

會員

一一、洋琴獨奏 唱詠的緩徐調と昂奮的急速調

井上はる

一、男聲合唱

會 員

一二、混聲合唱

會員

二、ヴァイオリン

メンデルゾーン

一、洋琴獨奏

メンデルゾーン

小司伴樂作品三十一 第二樂章

北京 季 男

番外 パリトーン獨唱

船橋榮吉

三、風琴獨奏

眞篠 俊 男

甲、イッヒ グローレ ニヒト

シュールベルト

パッサカリア ハ短調

バ ッ ハ

乙、歌劇 アルキユール中のゾーダンの愛の歌 ワグネル

四、アルト獨唱

花 島 秀

一、混聲合唱

會員

歌劇 サムソンとダリラ中のダリラの抒情調 サンサーン

足 立 ぶ さ

歌劇 ダンホイザー中騎士と貴女の合唱 ワグネル

五、洋琴獨奏

足 立 ぶ さ

十一月二十一日 第一回特別演奏會 於東京音樂學校奏樂堂

一、合唱

流浪の民 作品二十九の三番

會 員

幻想曲と追復樂

ベ ッ ハ

二、洋琴獨奏

ロンドカブリッチオーソ 作品十四

空 岡 浩 枝

司 伴 樂 第五番 作品二十一 第一樂章

蜂 谷 龍

三、高音獨唱

歌劇 フィーガロ中のスザンナの宜叙調と抒情調

武 岡 鶴 代

一、アルレグロ アマビレー
二、スケルツォ (アラ サブヤード)
三、ラルツゲト 四、アルレグロ

四、ヴァイオリン

小司伴樂 イ短調 作品七十

大 場 勇 之 造

一〇、ハ中音獨唱

外 山 國 彦

五、高音獨唱

歌劇 フィーガロの婚禮中のケルビーノ抒情調

内 田 琴

甲、一音

コ ル ネ リ ウ ス

六、男聲三重唱

フアウスト 澤崎定之、アレンティーン

一、ニ短調 二、ニ長調 三、嬰ハ短調

ウ エ ル ク マ イ ス テ ル

歌劇 フアウスト中の決闘三重唱 足下のこところは?

乙、祝祭ボロネーズ

ウ エ ル ク マ イ ス テ ル

七、次中音獨唱

歌劇 自由射手中のマルクスの抒情調

佐 藤 豊 吾

一、ニ、合唱

會 員

森を牧場をわれとともに

ウ エ ー バ ー

君が代

合 唱 指 揮 者 榊 原 直

八、大風琴獨奏

助 教 授 中 田 章

十一月廿七日

第十五回土曜演奏會 於上野校奏樂堂

一、合唱

甲、御大謬奉祝の歌

乙、神垣の歌

二、ピアノ獨奏

アムプロムテュ作品九十の二番

三、ソプラノ獨唱

歌劇 フィガロ中の小姓の抒情劇

四、チェロ獨奏

匈牙利幻想曲作品七

五、アルト獨唱

歌劇 豫言者中のフリーデズの抒情劇

六、男聲三重唱

水野康孝、メフィストフェレーズ 柴田知常

歌劇 ファウスト中の決闘三重唱

七、ピアノ獨奏

ソナタ作品四十二の一番

八、ソプラノ獨唱

赫を續ぐグレートヒエン作品二

九、ヴァイオリン

九番司伴樂作品百四

會 員

湯川貫一歌、松本徳藏曲

ボヘミア民曲、牛山充歌

宇佐美ため

シュューベルト

内 田 琴

モツアルト

犬 井 英 夫

グリツツマツヒエ

廣 田 チ ヲ エ

マイアーペーア

アレンティーン

柴田知常

ケ ノ

鈴 木 采

シュューベルト

長 坂 好 子

シュューベルト

井 川 富 子

ベ リ ョ

番外、テノール獨唱

甲、一音作品三の三番

乙、來ませ、いざともに月下を逍遙せん

一〇、合唱

秋

君が代

作曲者不詳、作歌者不詳 林 廣 守

十一月二十九日 戸山學校軍樂生徒隊卒業演奏會

於戸山學校軍樂隊

第一部 管絃樂

一、序 曲

二、歌劇 田舎の騎士

三、舞 曲 空 色

第二部 吹奏樂

一、行進曲 戴冠式大行進

二、歌劇 シレーユ

三、序曲 聲響の人

四、歌劇 ドンキホーテ

十一月廿一日 東京フィルハーモニー會管絃樂第五回公開音

樂會 於帝國劇場 指揮者 山田耕作

外 山 國 彦

コルネリウス

コルネリウス

會 員

作曲者不詳、作歌者不詳

林 廣 守

指 揮 者 楠 原 直

- 一、歌劇 アウリスのイフィゲニア序曲 ケルツク作
- 二、高音獨唱 愛する者に 山田耕 作
- 三、洋琴獨奏 管絃伴奏 メンデルゾーン作
- カブリッチチオ プリラン
- 四、絃樂合奏 甲、無言の歌 チャイコフスキ作
- 乙、メヌエット モツアルト作
- 五、ヴァイオリン、ピアノ合奏 東儀哲三郎、ピアノ 伊達愛
- ヴァイオリン 山田耕 作編曲
- 千鳥の曲
- 六、高音獨唱 管絃伴奏 ワグネル作
- 歌劇 タンホイザー中の抒情劇 リス ト作
- 七、洋琴獨奏 維納の夜會
- 八、管絃樂 ヘンリー八世への音楽 は、松火舞曲
- い、モリス、ダンス ろ、羊飼舞曲
- 十一月廿三日夜九時 チエリスト、エリザベス、セロ獨奏會
- 於帝國ホテル
- 一、ソナタ、プレリユード、デーガ、サラバンダ、マルレマンダ コレルリ作
- 二、歌 謠 ハモシンド
- 三、ニーナ ベルゴレーゼ作
- ロンドド ヌイ
- ミヌエツト
- アンパトー
- ブルス
- 四、歌 謠 アダザオ
- スケールツォ
- ルシース
- 十二月五日 東洋音楽學校學友會第十九回演奏會 於同校
- 一、小管絃樂 生 徒
- 甲、學校生活 乙、ホーム、スキートホーム
- 二、四重唱 甲、草苗 乙、月下の船
- 三、ピアノ獨奏
- 甲、變奏曲 乙、戴冠式進行曲
- 四、女聲二重唱 レイス リード
- 五、ヴァイオリン獨奏 前 田 鏡
- 甲、ルール パ ッ ハ作
- 乙、メロデー ジ ャ ト作
- 六、男聲四重唱 懷良友
- 阿 部 軍 治
- マイアーベア作

七、ウアイオリン二重奏

小倉誠三郎、前田環

八、四重唱 巡 證

クロイツァー作

九、ピアノ獨奏

保坂連治

フアンタジー オー カプリース

メンデルゾーン作

一〇、四重唱 甲、夜の歌

クローラー作

乙、夜樂

シュルツ作

一一、管絃樂

甲、歌劇 秋の女王の序

ビッパゲ作

乙、ホルカ 艦隊司令官(コルネット獨奏)

丙、歌劇 マリターナの拔萃 ラリース作

十二月十九日 山田耕作第六回公開試演音樂會 於帝國劇場

一、アルゲリアのスキート

甲、序樂

乙、佛軍行進曲

サンサーン作

二、テナーホルン獨奏

植村安吉(三越少年音樂隊員)

幻想曲

ロリンスン作

三、ト調五重奏曲中のロンド

モツァルト

四、歌劇 豫言者中の戴冠式行進曲

マイアーベア作

五、絃樂合奏 セレナーデ中のワルツ

チャイコフスキー作

六、ピッコロ獨奏

岩波桃太郎(三越少年音樂隊員)

鶯の歌

七、西班牙舞曲

フリリボウスキー作

八、御大典奉祝前奏曲

山田耕作

十二月廿三日より廿九日まで

東京音樂學校學友會演奏旅行

於名古屋、京都、大阪

一、混聲四重唱

會員

御大典奉祝歌

松本徳淺作

二、絃樂合奏

會員

歌劇 豫言者中の戴冠式行進曲

マイアーベア作

三、高音獨唱

武岡鶴代

歌劇 セピラの床屋中のロジーナの小歌調 ロッシーニ作

四、男聲合唱

會員

甲、若松懷古

シュールベルト作

乙、歌劇 漂浪蘭人中の水夫の合唱

ワグナー、グオルク、シューマン

五、洋琴獨奏

山口節

幻想的即興樂

シロパン作

六、ウイオロンセロ獨奏

萩原正彦

コールニートライ、マックス

ブルッフ作

七、洋琴獨奏

高折宮次

- 甲、ノクターン
- 乙、スケルツォ
- 八、混聲四重唱
- 神曲 メシア中のハレルヤ
- 九、同上
- 一〇、風琴獨奏
- 一一、同上
- 一二、女聲三重唱
- 一三、洋琴三重風琴附
- 一四、次中音獨唱
- 一五、同上
- 歌劇 カルメン中の花のアリア
- シヨパン作
- シュリーマン作
- 會 員
- ヘンデル作
- 會 員
- 眞 篠 俊 雄
- バ ッ ハ作
- 中 田 章
- ゲオルゲベルグ作
- ジョンヘネット作
- 會 員
- ロッシーニ作
- 弘田龍太郎、末吉雄二
- 萩原正彦、中田 章
- 本居長世、弘田龍太郎
- 船 橋 正 次 郎
- レオンカヴロロ作
- 澤 崎 定 之
- ビ セ ー 作
- 一六、ヴァイオリン獨奏
- 幻想的舞曲
- 一七、同上
- ロマンス
- 一八、絃樂合奏 大司伴奏
- 一九、混聲合唱
- 雲井仰げば
- 君が代
- 大正五年
- 一月廿二日 露國女流ヴァイオリニストベルソン獨奏會
- 於帝國劇場
- 一、ヴァイオリン獨奏 司伴奏
- 二、洋琴獨奏 甲、ガブットと其替手
- 乙、ポロネーズ
- 三、ヴァイオリン獨奏
- 甲、メロデー
- 乙、紡 車
- 丙、微 風
- 四、ヴァイオリン獨奏 ツイゴイナークライゼン サラサーテ作
- 五、洋琴獨奏 甲、默 話
- チヤイコフスキー作
- 田 中 ひ さ
- ベ リ オ 作
- 末 吉 雄 二
- ベートルヴェン作
- ヘンデル作 會員
- 會 員
- 吉丸一昌歌、鳥崎赤太郎作曲
- メガニーニ作
- ラ モ ー ー 作
- シ ョ パ ン 作
- チヤイコフスキー作
- フ オ ー レ 作
- フ ー バ イ 作
- サラサーテ作
- チヤイコフスキー作

乙、前奏曲

六、ヴァイオリン獨奏

甲、ノクターン

乙、シシリアンヌとリゴードン

丙、子守唄

丁、ポロネーズ

ラハマニノフ作

五、洋琴 は長調

六、歌 甲、春立たば

乙、涙

丙、宵の春雨

丁、マルツシアの歌

三木露 風詩

ヴァリエーションズ

小林愛 雄詩

同

吉丸一 昌詩

小山内薫 譯詩

一月廿日 音楽奨励會第十回演奏會、山田アーベント

東京華族會館

洋琴曲 ショルツ教授、歌曲 山田耕作、同 同都下

一、洋琴 と短調

二、歌 甲、嘆

乙、風ぞゆく

丙、燕

丁、ふるさとの

三、洋琴 と長調 ソナータ

い、極めて快活に ろ、非常に静かに唱ふ様に

は、精力的に、はつきりした旋律で

四、歌 甲、ナマリ泣く時

乙、信仰と牢獄

丙、わが世の果ての

丁、樹立

五、洋琴 は長調

六、歌 甲、春立たば

乙、涙

丙、宵の春雨

丁、マルツシアの歌

三木露 風詩

ヴァリエーションズ

小林愛 雄詩

同

吉丸一 昌詩

小山内薫 譯詩

七、洋琴 ホエーム七章

八、歌 甲、漁夫の娘

乙、愛する者に

番外 二月十九日 第十六回土曜演奏會

一、混聲合唱 母よさらば

二、洋琴獨奏

三、高音獨唱 狂想曲 嬰へ短調作品五

四、次中音獨唱

歌劇 フーゲント教徒中の小姓の抒情調

歌劇 ローエングリン中のローエン

歌劇 グリーンの告別の歌

テオドールフォンターネ詩

エドワード メリケ詩

三木露 風詩

會 員

吉丸一昌歌、成田爲三曲

土方 貞

メンデルゾーン

武岡 鶴代

マイアーペーア

水野 廉孝

ワグネル

五、男聲四重合唱

進取の歌

會 員 露國民謡、吉丸一昌曲

ろ、フレムダンス、エビスタル、第十四番 ベルマン
二、四重唱 遂げぬ思ひ(仕損じた戀の狩) 作者不詳

六、洋琴獨奏

ソナタ ヘ短調 作品二

鹽島 美喜

三、洋琴獨奏 タランテルレ 作品八十五番 二番 ヘルラー
リヒャルドシュトラウス改作

七、中音獨唱

甲、歌劇 サムソンとダリラ中の一節

花島 秀

四、三重唱 歌劇 ファウスト中の決闘三重唱 ケノー
五、四重唱 い、滑稽酒歌 フェスカ

乙、歌劇 セミラミーデ中の一節

ロッシニ

ろ、黄昏の歌 ズッターリンク

八、ヴァイオリン獨奏

司伴奏 ニ長調 作品二百十二第一、第二、樂章

荒木 得三

六、四重唱 い、靜かに ベーメフムバーディンク
ろ、ブルーデファエルデンイ ハルダンゲン、ゲエルフ

九、低音獨唱

一〇、混聲合唱

歌劇 アイダ中の凱旋軍歡迎合唱

會 員 ウェールデイ

七、洋琴獨奏 い、即興曲 作品二十九
ろ、ハ長調 ソナタ中のロンド 作品二十四 ウェーパー

君が代

林 廣 守

八、四重唱 い、歌劇 漂流へる和蘭人中の擄取の歌
グークナアーシューマン

二月二十七日 音樂奨勵會の廿回演奏會 於東京華族會館

オイテルベクワルテット 澤峠、船橋、外山、島田、樋口

洋琴獨奏

菅 原 某

ろ、歌劇リエンツイ中の戦ひの歌 アークナアーシューマン
三月一日 第一高等學校記念祭音樂演奏會

三重唱伴奏

高折 宮 夫

指揮 軍樂隊一等樂長 山本統三郎

一、四重唱

い、黄昏の頃

ガ エ ル フ

一、行進曲 戴冠式
ベートリッヂ作

二、序曲 騎砲兵

三、歌劇 コルネギルの鐘の拔萃

四、ワルツ 藝者

五、ボルカ みそさどい(ピッコロ獨奏)

六、幻想樂 獨逸作曲家の紀念

七、歌劇 マスコット中の幻想樂

八、ワルツ 三色旗

九、幻想樂 オペラ姿見鏡

一〇、甲、ワンステツア 山あらし

乙、トゥースフ、ロバートエリー號を待ちつゝ

一一、幻想樂 亞米利加萬歲

一二、幻想樂 サン チュアン山の役

三月四日 熊本回春病院後援慈善音樂會

於東京青山學院樂堂

一、絃樂四重奏

アダーチオプレスト

二、低音獨唱

甲、歌劇 雲笛中の祈り

乙、歌劇ラマームアのルーシー中の一節 ドニツェテイ

三、ヴァイオリン獨奏

甲、旋律 G線專奏

乙、ガブツト

四、洋琴獨奏

五、絃樂四重奏

インクァルデーアム

六、洋琴獨奏

七、高音獨唱

歌劇 フーゲノット教徒中の一節

八、ヴァイオリン獨奏 甲、第二子守唄

乙、リゴードン

九、低音獨唱

歌劇 マクベス中の一節

一〇、絃樂四重奏

アルレグロ マノン トウロツポ

三月廿一日 女子音樂學校卒業演奏會

於東京女子音樂學校樂堂

一、洋琴獨奏

結婚行進曲

二、マンドリン三重奏

杉山 長谷夫

フライムル作

モツァルト作

弘田 龍太郎

ハイドン四重奏團

グラヅノフ作

弘田 龍太郎

長坂 好子

マイアーベリア作

レナード作

モンシニー作

樋口 信平

ウエールデイ作

ハイドン四重奏團

ハイドン作

齊藤ゆき江、宇佐林子

メンデルゾーン

鳥勇造、細井義弘、東郷普三

甲、波路を越えて

乙、故郷なる老いし人々 變奏附

三、風琴獨奏

ミラ デイ ア セルベ ラグリメ

四、ヴァイオリン三重奏

甲、舞曲

乙、歌劇 オイリアンテ中の合唱曲

五、風琴獨奏

凱旋行進曲

六、マンドリンとギターラの合奏

歌劇 椿姫中の一節

七、洋琴獨奏

ソナタ

八、二重合唱

甲、さらばよ君

乙、春の窓

九、ヴァイオリン三重奏

甲、ラルゴ

乙、ガブツト

一〇、洋琴獨奏

ローザス

フォスタター

杉浦深恵

ウエールデイ

小平たつ、鈴木保羅

グルック

ウエーバー

江南 敏

レムメンス

細井義弘、東郷晋三

ウエールデイ

丸山美津

モツァルト

生 徒

ゲーベル

アリベ曲、小林愛雄歌

小林たつ、鈴木保羅

ヘンデル

グルック

鶴野 君

狩人の歌

一一、マンドリーノ三重合奏

マンドラ 鳥勇造、ギターラ 東郷晋三

歌劇 イルトウロゾトーレ中の一節

一二、獨唱

甲、ゲザンゲ エーラス

乙、アウスデンリデーデルントラウエル

一三、ヴァイオリン獨奏

バストラール

一四、風琴獨奏

甲、心の喜び

乙、オッファートリー

一五、箏曲合奏

一六、二重合唱

甲、春野の戯

乙、春近し

三月二十一日 東洋音楽學校卒業音楽演奏會 於同校講堂

一、洋琴聯奏

甲、メニユエット

乙、セレナーデ

メンデルゾーン

マンドリン 細井義弘

ウエールデイ

外山 國彦

フ

シユトラウス

鈴木保羅

シングリ

松井 壯吉

ニコール

アンヂエロ

パーエルト

生 徒

カラシオロ曲、葛原幽歌

ブラームパッサージュ、葛原幽歌

前田河のぶ、加藤綺

ベートヴェン

ハイドゥン

二、四重合唱

甲、美しき友(人形に)

乙、春野

三、獨唱

甲、わすれな草

乙、子守唄

五、ヴァイオリン獨奏

甲、歌劇田舎の騎士中の一節

乙、マドリガル

六、女聲二重合唱

甲、月夜

乙、戀しき故郷

七、洋琴獨奏

ソナタ

八、男聲四重合唱

甲、イン デル フェルネ

乙、ダス リード

九、小管絃樂

甲、歌劇オルフェウスの序

乙、眞珠の夢

一〇、四重合唱

甲、何處へゆく

乙、さびしき心

一一、チェロ獨奏

華想調

一二、小管絃樂

甲、ワルクネルの歌劇タンホイザーの拔萃曲ニオモセス編

乙、行進曲自由の鏡

五月十四日 音楽奨励會クロロン教授獨奏會

於東京華族會館

一、ニ短調司伴樂中の第一第二樂章

二、マラケエーニヤ

三、甲アンダンテイーノ、バードレ マルテイーニ

乙、リーベスリード、サムマルテイーニ

四、莫斯科みやげ

五、へ長調ロマンツエ

六、ジブシーの舞踊

七、ハイレ カテイ

八、ツイゴイネルグイゼン

生徒

ペートーヴエン

ジュリエルモ

高桑 慶照

ゴルダーマン

スーザ

ウイーニアフスキー

サラサーテ

クライスラー

エル マン

キーニアフスキー

ペートーヴエン

ティツダナルナッシェ

フ バ イ

サラサーテ

十二月九日 第十八回土曜演奏會 於東京音樂學校奏樂堂

同校學友會主催

一、合唱

會 員

甲、讚歌

モツアルト曲、大須賀賴歌

乙、春祭り

メンデルソーン曲、大須賀賴歌

二、低音獨唱

矢田部 頌吉

歌劇蜜笛中のサラストウロのアリア

モツアルト

三、洋琴獨奏

島 秀 代

四、アルト獨唱

藤 卷 滿 江

秋に 作品十七、六番

フ ラ ン ツ

五、ヴァイオリン二重奏

草川信、成田爲三

シムフォニーコンセルタント、作品百九、三番

ダンクラ

六、合唱

會 員

黄昏に 作品六十四、二番

ブラーム曲、大須賀賴歌

七、洋琴獨奏

滝 川 貞 江

ソナタ 作品十、一番

ベートーヴェン

八、ソプラノ高音獨唱

小 櫻 幸

プール デイナムステイ

ロ ッ テ イ

九、風琴獨奏

眞 篠 俊 雄

英國々歌の主題とその變奏曲

一〇、洋琴獨奏

淺 野 愛

タランテル 作品八十五、二番

ヘ ル ラ ー

十二月三日午後二時 久野久子恢復祝賀演奏會 於東京音樂

學校奏樂堂 主催學友會並女子大禮風會

一、ソナタ アッパシヨナータ

ベ ー ト ー ヴ ェ ン

甲、アルレグロ アッサイ 乙、アンダンテ コンモート

丙、アルレグロ、マノン トウロッパ

二、甲、春に寄す 作品四十三、六番

グ リ ー ヒ

乙、那威の楳入行列 作品十九、二番

グ リ ー ヒ

三、第一大司伴奏 第一樂章

シ ョ ー バ ン

四、ラブソディー ト短調作品七十九、二番

ア ラ ー ム ス

五、甲、リード ホ長調

メ ン テ ル ソ ー ン

乙、エチュード ハ短調作品十、十二番

シ ョ ー バ ン

六、歌劇リゴレットの書き替へ曲

リ ス ト

十二月九日 大田黒元雄獨奏會「スクリアピンとデビュッシー

の夕」於本郷退分青年會館 音樂と文學社の主催

一、前奏曲 作品二の第二番

リ ス ト

二、マヅルカ 作品三、番號不明

リ ス ト

- 三、ノクターン 作品五の第二番
 - 四、プレリユート 絃品十一の第四番、レント同上の第十三番、同上の十六、ミステリオーズ
 - 五、プレリユード 作品十六の第三番
 - 六、プレリユード 作品三十三の第一番と第三番
 - 七、ボエーム 作品四十四の第二番
 - 八、慾望 作品五十七の第一番
 - 九、踊れる愛撫 作品五十七の第二番
- デビュッシー
- 一、第一アラベスク 一八八八年作
 - 二、月の光スイートベルガマスクの第三 一八九〇年作
 - 三、牧神の午後の前奏曲 一八九四年作
 - 四、雨の花園印象の第三 一九〇三年作
 - 五、神聖の踊 踊の第一 一九〇四年作
 - 六、子供欄 一九〇七年作
 - 七、枕める寺 一九一〇作
 - 八、亞麻の髪せる乙女 一九一〇年作
 - 九、玩具箱 子供のためのバレ
- 彼は異常な努力家であり精力家である。異常なる強記にその

異常の精力をもつて努力する爲に、時には口不詳なきものからの稱を受くる程、藝術の百骸に互つての知識を蒐集されてゐる。著書もある。

十二月十日 佐藤謙三ヴァイオリン獨奏會

一、司伴奏

第一樂章 アルレグレ、モデラート プルッパ作

二、甲ローマンズ キーニアフスキー作 乙、マヅルカ 同作

丙、コールニートライ プルッパ作

三、ソナタ

ニ長調 ヴァイオリンとピアノ ベートーヴェン作

四、レヂェント キーニアフスキー作

五、甲、アダージェヨとロンド ベリオ作

乙、セレナーデ シューベルト作

六、ローマンズ ベートーヴェン作

七、ソナタ ハ長調ヴァイオリンとピアノ グリーヒ作

十二月十日 東洋音楽學校學友會第二十一回音樂會 於神田

煉樂町同校講堂

一、四重合唱

甲、雁の叫び ロンチャ民謡 乙、雲雀 芬蘭土古曲

二、獨唱 エレサレム

三、ピアノ三聯奏

甲、ユダマカボイズ中の行進曲 乙、ロンドチュルニール

四、獨唱 アーゴマリヤ

五、ヴァイオリン二重奏

甲、アレグロモテラート

乙、ミニユエツト

六、獨唱 ブール、ディチエステイ

七、男聲四重唱

甲、マイマイドレー

乙、アムシルベステル

八、ピアノ三聯奏

シムフォニー中の一節 アンダンテ

九、女聲二重合唱

甲、恩愛

乙、姉妹

一〇、ヴァイオリン 司伴奏

一一、女聲三重合唱 甲、秋の夕暮 乙、庭の菊

一二、ヴァイオリン四重奏

甲、歌劇オルフォイス中の舞曲

乙、ミニユエツト

一三、四重合唱 歌劇オルフォイス中の一節 グルック

一四、小絃管樂 同校附屬、東京オーケストラ團第二班

甲、歌劇人生の四季の序

乙、カムバスの反響 學生歌

丙、アンネローリーの幻想曲

丁、歌劇ルチアの拔萃

大正六年

一月二十一日 音楽普及會第十八回演奏會 於東京本郷退分

基督教青年會館

一、ピアノ、ヴァイオリン、セロ三重奏 榊原直、多忠亮、犬井英夫

甲、セレナーデ 作品二十九

乙、幻想曲 六十一の一番

二、獨唱 小曲數曲

三、ヴァイオリン獨奏 作品十六

四、獨唱

キヤメロン人の行進

五、ヴァイオリンセロ

ミュゼット舞曲

グルック

ベネット編

ローリソン編

ドニツェラテイ

ルッアート

シヤミナード

大和田愛羅

多忠亮

ガブリエルフォーレ

梁田貞

キヤムベル

犬井英夫

オッフエンバフハ

六、男聲三重奏

梁田貞、大和田愛羅、東儀哲三郎

老ブラックジョー

フォスター

七、ヴァイオリンとピアノ

多忠亮、榊原直

ト長調司伴樂 シヤルメンカのカデンツアを有する

第一樂章

ヨーゼフハイドウン

八、ピアノ獨奏

噴田ヤエコ

甲、背譚 シューマン 乙、出來心 シューマン

梁田貞

九、獨唱

ドニツェッタイ

光の天女ラファヱリタより

一〇、ピアノ、ヴァイオリン、セロ三重奏

榊原直、多忠亮、犬井英夫

ト短調三重奏曲作品百十一

シルシュナー

二月十日

大田黒元雄近代音樂演奏會 於東京帝大基督教青年會館

年會館

一、洋樂獨奏

シペリウス

甲、トウオネラの白鳥 乙、ブルス

丙、ベレアとメリサンド イ、バストラール ロ、メリサ

ンドの死

スクリアピン

甲、尚奏曲作品二の二番

乙、前奏曲作品十一の十五番及十六番

丙、詩 作品四十四の二番

二、ヴァイオリン獨奏

甲、バストラール

乙、アーゼの死

三、洋琴獨奏

甲、埃及 埃及の小船の歌 ラムセス大王の葬送

乙、詩 靈の同情の花園、鐘

四、上高音獨唱

歌劇胡蝶夫人中の一節美しき日に

五、洋琴獨奏

甲、第一のアラベスク 乙、月光 丙、枕める寺

丁、玩具箱 小兒のためのバレエ

イ、ブレリユード ロ、ブルス ハ、ボルカ ニ、エ

ビローグ

二月四日 音樂の講演と演奏會 於東京音樂學校講堂

一、管絃樂

甲、タンホイザー行進曲

乙、浪漫的序曲

本野精吾

ハンスジット作

グリッヒ作

シクルスコツト

名出 克己

ブッチーニ作

デビュフシー

ワグネル作

ケーラーペーラ作

一、講演 家庭の音楽

男爵 宮原二郎

五、ヴァイオリン獨奏

杉山長谷夫

一、四重合唱

グルック作

甲、ギジョン 作品二十八

ドウルドウラ作

歌劇オルフェオ中の合唱

グルック作

乙、ルメネットウリエ、マツルカ作品十九、二番

一、管絃樂

甲、シュベルト歌謠改作曲

ロバート編曲

六、上高音獨唱

歌劇デイノラー中の一節

立松房一

乙、那威國風改作曲

ロバート編曲

七、洋琴獨奏

マイアーベア作

一、講演

世界音楽の過去現在及將來 著者機應用

理學士 田邊尙雄

甲、幼想即興曲 作品六十六

小倉末子

二月十七日午後七時 ハイドン四重奏團第十一回演奏

於本郷青年會館

乙、子守唄 作品五十七

シ・パン作

一、絃樂四重奏

甲、ローレライ

獨逸民謡

八、絃樂四重奏

第一ヴァイオリン芝祐近、第二同東機季敷

乙、ボツトドウィーベン、ツアドウベンケツスマイヤール編作

アンダンテ、コンモート、メヌエット

グリシカ作

二、上高音獨唱

歌劇ラマームーアのルチア中ルチアの小歌調

立松房一

○ハイドン、クワルテツトは明治の終に組織されたもので、横濱のみで開催されたのであるが、東京入りはこれが最初である。中央樂壇に於ける唯一の室内樂であるとも言ひ得る。

三、ヴァイオリンソロ獨奏

ドニツェツタイ作

二月二十四日 東京音樂學校友會第十九回土曜演奏會 於東京音樂學校樂堂

タランテラ作品三十三

多基永

四、絃樂四重奏

ボツパー作

一、合唱

ハイドン作

ギワーチエアダーチヨメモニツトファイナール

甲、春の夜 乙、三崎傳説の歌 露國民謡、大須賀續歌

二、洋琴獨奏

變ホ長調ソナタ作品十三の最終樂章

金子眞佐

三月二十一日 卒業演奏會

於東京女子音樂學校

三、アルト獨唱

歌劇アルチエステテ中の抒情調

廣田チヅエ

一、二重合唱

ボルトニアンスキ

四、洋琴獨奏

第三前奏曲と追復曲 平均率洋琴曲

川上きよ

二、風琴獨奏 練習曲

普通科卒業生朴尙貞

五、テノール獨唱

甲、手琴に寄す

近藤義次

三、洋琴獨奏

星 基

乙、夜の歌

シュューベルト

四、ヴァイオリン合奏

渡邊ヤイ外一名

六、絃樂四重奏

第一ヴァイオリン 田中英太郎
第二ヴァイオリン 草川信、ギオーラ北原秀男

五、洋琴獨奏

マザ 伊藤 武子

ギオロンセロ平井保三

六、三重合唱

モツアルト 生 徒

第五重奏曲

七、ソプラノ獨唱

歌劇椿姫中のギオレッタ抒情調

ハイドン

甲、足

大塚 楠緒歌

八、洋琴獨奏

ハ短調ソナタ作品第十の一番第一樂章

ウエールディ

乙、春をたのしめ

ウエーバー曲、武島羽衣歌

番外、テノール獨唱

歌劇マノン中のグリユーの夢

西とも 五

七、洋琴獨奏

木科卒業生 宇 佐 林 子

九、合唱 ローザムンデ中の牧人の合唱

マッスネー

八、三重合奏

メンデルゾーン 獨唱 講師内田琴子、合唱 生徒

シユューベルト

九、箏曲合唱 (省略)

マイアーベア曲、小松玉巖歌
メンデルゾーン曲、鳥居 忱歌

一〇、洋琴獨奏

専修科卒業生 丸山 みつ

二、洋琴獨奏

ソナタ
加藤 綾子

ソナタ中のロンド

ベートヴェン

前田河のぶ

一、洋琴獨奏

本科卒業生 鈴木 政治郎

三、獨唱

歌劇フィガロ中の一節
モツアルト

嵐

ウエーバー

四、ヴァイオリン獨奏

草間 實

一、二、ソプラノ獨奏

講師 内田 琴

シチリアーノ

ベルゴレージ

セレナーデ

グノー

五、獨唱 美しき神に近づき

加藤 綾子

一三、ヴァイオリン獨奏

講師 鈴木 保羅

六、洋琴獨奏

前田河のぶ

バストラル

ジンゲリー

六つの變奏曲

ベートヴェン

一四、バリトン獨唱

講師 外山 國彦

七、男聲四重合唱 野薔薇の花

エルナー

甲、昔の歌 乙、森の逍遙

グリーヒ

八、ヴァイオリン獨奏

前田 環

一五、洋琴獨奏

講師 香川 鈴子

ラルゴ

グ ル ッ ク

ブルス フリアン

シヨパン

九、女聲三重合唱

グ ル ッ ク

一六、二重合唱

生 徒

昔譚少女シンデレラの初段

シニールト

春野の一路

メンデルゾーン、葛原剛歌

一〇、ヴァイオリン四重合奏

シニールト

一七、舞曲合奏 (省略)

三月二十一日 東洋音楽学校第八回卒業式並ニ創立十年記念

甲、サラバント

バ フ ハ

音樂會

乙、ミヌエツト

モツアルト

一、四重合唱

一一、四重合唱 歌劇田舎の騎士中の一節

マスカーニ

甲、歌劇田舎の騎士中の一節

マスカーニ

一二、小管絃樂

同校附屬オーケストラ三班員

乙、歌劇フィガロの結婚中の一節

モツアルト

喜歌劇オルフェーの序

オッフェンベッハ

一三、ソプラノ獨唱	講師	永井 郁子	歌劇ファイガロの結婚中のスザンナの歌	モツァルト
歌劇シギリーアの理髮師		ロフシーニ		船橋 榮吉
一四、小管絃樂			五、バリトン獨唱	蘇古蘭民謡
甲、聖歌ナザレ		ケ ノ ー	甲、螢の光	船橋 榮吉編
乙、薔薇の籠		エー・アルバート	乙、つき	小學唱歌集
一五、獨唱	講師	樋口 信平	丙、きのふけふ	大和田 愛羅
歌劇猶太の女の一節		アレ・ギ ー	六、バリトン獨唱	栗田 貞
一六、小管絃樂 幻想曲 ロジカ		シュニーベルト	甲、土産のつどら	栗田 貞
一七、雅樂 (省略)			乙、おさる	小松 玉麿
四月十五日 音樂普及會第二十一回演奏會			丙、にじ	空岡 清枝
於東京本郷青年會館				ウエーバー
一、獨唱		船橋 榮吉	七、洋琴獨奏	武岡 鶴代
甲、菩提樹		シュニーベルト	奏鳴樂 作品三十九	グ ノ ー
乙、夕の星 歌劇タンノイザー中より		ワグネル	八、上高音獨唱	東儀 哲三郎
二、洋琴獨奏		宇佐美 ため	小夜樂	ト ー メ
哀傷奏鳴樂第一樂章		ベートーヴェン	九、ヴァイオン獨奏	船橋 榮吉
三、ヴァイオリン獨奏		東儀 哲三郎	アンダンテ レリチオーソ	シュニーベルト
無言歌 作品第三十七		ハウザ ー	一〇、バリトン獨唱	シュニーベルト
豫言、物語り、孤獨、切愛			甲、春の信仰	リヒャルド、シュトラウ
四、上高音獨唱		武岡 鶴代	乙、月夜	シュニーベルト
			丙、たそがれの夢	リヒャルド、シュトラウ

○宇佐美、武岡、室岡等はこの年の卒業生である。花時の日曜

のことゝて來會者多かつた。

四月一日 日比谷公園奏樂 海軍々樂隊演奏

指揮 瀬戸口樂長

一、行進曲ブルーランチャー將軍

二、歌劇ボルテイーチの姫娘の序曲

三、甲、特性描寫曲 花のさゝやき

乙、東洋風特性描寫曲 命運

四、五部よりなる組曲 露西亞舞踊

い、ツアルケ る、ブルス レント は、セーヌ

に、マヅルカ ぼ、露西亞行進曲

五、新喜歌劇 ティーナよりの拔萃

六、吾詩 芬蘭士

七、歌劇 ロメオとジュリエットの拔萃

八、歌劇 エルナーニよりの拔萃

九、歌劇 漂流せる和蘭人の幻想曲

四月十四日 洋休雅ソヴアイオリン獨奏會

於東京神田青年會館

一、同伴樂 第一、第二樂章

二、甲、流浪の民マヅルカ

乙、諧謔曲

ゲオルグハリー・コエッピンク

ガブリエラマーリ

ブルッフ

三、甲、夢

乙、思ひ出

丙、旋律

四、纏やかなる波蘭士舞曲

五、ト長調奏鳴樂

六、甲、夜の曲

乙、小歌曲

七、流浪民族の歌

ピアノ伴奏 高折宮次

○自己の藝術の正當なる評價を天下に求めようとする傾向が窺はれる。

はれる。

四月二十二日 日比谷公園奏樂 陸軍戸山軍樂隊演奏

指揮 陸軍一等樂長 山本銃三郎

吹奏樂

一、行進曲サイレン

二、歌劇 セミラミーデの序曲

三、オツフェンバツハの思ひ出

四、四舞曲 酒と女と唄

五、歌劇 サムソンとギリラの拔萃

番外、喜歌劇 陽氣な後家さん

レハール

サンサーン

シュトラウス

ゴッットフレー

アッロニ

アッロニ

アッロニ

アッロニ

アッロニ

アッロニ

アッロニ

管 絃 樂

六、弦曲 喜劇

七、甲、ボルカ 胡蝶

乙、幻想曲 緑なる草野の舞踏

八、歌劇 ロンジュモ一の飛脚の幻想曲

九、吹奏樂 壯嚴なる大弦曲千八百十二年

四月廿九日 番町教會婦人会主催慈善音樂會

於東京音樂學校奏樂堂

一、三重唱

歌劇 ファウスト中の決闘 三重唱

二、低音獨唱

歌劇 ユーティン中の抒情調

三、ヴァイオリン獨奏

甲、まぼろし

乙、提琴手 マヅルカ

四、洋琴獨奏

甲、安慰曲

乙、歌劇 蘭和人の雜歌

五、二重唱

甲、天使

六、洋琴獨奏

甲、歌 乃

乙、ト短調 プレスト

七、高音獨唱

歌劇 サッフォー中のおゝわが不朽の歌よ

八、低音獨唱

歌劇 リエンツイ中の全能にます父

九、上高音獨唱

甲、頌聖母歌

乙、靜かに立てよ

一〇、洋琴獨奏

嬰ハ短調奏鳴樂

第二部邦樂(省略)

五月十九日 ハイドウン四重奏團演奏會(東京に於ける第二回) 於東京本郷追分帝大學生基督敎青年會館

一、絃樂四重奏

甲、アエ ズルム コルプス

乙、アリー

二、低音獨唱

乙、アアリー

乙、秋の歌

メンデルゾーン

ベッティールド夫人

ルービンシュタイン

シューマン

花鳥秀

澤崎定之

ワグネル

ベッティールド夫人

シュトゥツケン

ワグネル

ベッティールド夫人

ベートーヴェン

ベートーヴェン

ベートーヴェン

モツァルト

モツァルト

モツァルト

樋口信平

歌劇 メフィストフェーレの序詞

ポ イ ー ト

ギオロンチエロロ 多基永

三、ヴァイオリンソロ

多 基 永

五月二十日 東京市細民児童救済慈善音楽會

第三可伴奏の第二樂章

ゴ ル タ ー マ ン

於東京音楽學校奏樂堂

主 催 東京市特殊小學校後援會

四、絃樂四重奏

四重奏曲 作品六十四の第二番

ハ イ ド ン

一、管絃樂

短調 交響樂 第一樂章

海軍々樂隊

アルレグロ モデラート

二、低音獨唱

甲、歌劇 マクベス中の抒情調

シ ュ ー ベ ル ト

アダージェオ カンタービレ

乙、コルメルラの小歌調

グ エ ル テ イ

メヌエツト

三、洋琴獨奏

乙、コルメルラの小歌調

フ ィ オ ラ ア ン テ イ

フィナーレ

四、上高音獨唱

狂想曲

小 倉 末

五、ヴァイオリン、ヴィオラ、ヴィオロンセロ三重奏

四、上高音獨唱

糸とる少女

サ ン サ ー ン

作品九の第二番中 アンダンテ クアジ

五、ヴァイオリン獨奏

サラバンドとタムブラン佛蘭西古代舞曲

長 坂 好 子

アルレグレット、ロンド

ベ ー ト ー ヴ ェ ン

五、ヴァイオリン獨奏

サラバンドとタムブラン佛蘭西古代舞曲

シ ュ ー ベ ル ト

六、ヴァイオリン獨奏

芝 祐 孟

六、管絃樂

レ ク レ ー ア

ハイレカティ

フ ッ バ イ

六、管絃樂

海 軍 々 樂 隊

七、低音獨唱

樋 口 信 平

歌劇 トロバトーレの幻想曲

ウ エ ー ル デ イ

歌劇 ベトラー中の小歌調

ド ニ ツ ム ッ テ イ

邦樂(省略)

ウ エ ー ル デ イ

八、絃樂四重奏 甲、同奏曲

グ ラ ブ ー ノ フ

五月二十五、二十六日の兩日 東京音楽學校春季演奏會

乙、メヌエツト

ボ ッ ケ リ ー ニ

於同校奏樂堂

指揮者 歌師 グスターフ クロニン

ヴァイオリン 芝祐孟、同東儀秀敏、ギョラ 杉山長谷夫

一、管絃樂 變ホ長調 交響樂 第一番 ハイ F ン

- 二、合唱 甲、アペマリア 女聲合唱 プラームス 三、高音獨唱
 乙、慰安 混聲合唱 レーガー 歌劇サムソンとダリラ中のダリラの愛の歌 サンサーン作
 三、ヴァイオリン 教授 安藤 幸 四、ヴァイオリン 小司伴樂 第二、第三樂章 ジョット作
 田中英太郎
 四、管絃樂 舞踏の勸誘作品六十五 ウェーバーペリリオース 五、洋琴獨奏 奏鳴樂 イ短調 作品四十二 淺野あい
 五、高音獨唱 研究生 花島 秀 六、上高音獨唱 歌劇 リゴレット中のデルダの歌 シューベルト作
 武岡鶴代
 六、管絃樂付き洋琴 變ニ長調司伴樂 教師 ショルツ 七、絃樂合奏 會 員 ウェールデイ作
 七、管絃樂及風琴付き合唱 風琴 助教授 中田 章 八、絃樂合奏 黃丹曲 第二及第四 フック 員 作
 八、管絃樂 歌劇 ニュールンベルヒの名歌手の前奏曲 九、洋琴獨奏 洪木 會 員 桑サーン作
 ヲグネル
 六月九、十日 上野音樂學校學友會春季演奏會 光輝旋轉曲 光輝旋轉曲 平川保三
 於東京音樂學校奏樂堂 一〇、ヴァイオリンソロ獨奏 マックスブルッフ作
 一、合唱 會 員 祈禱の歌 柴田知常
 甲、歌劇 蝶子夫人中の船唄(ハミング)ウェールデイ作 一一、深音獨唱 甲、歌劇 シモンボッカネグラ中のフィエスコの 宜叙調と物語調(くだけしこゝろ) ウェールデイ作
 乙、歌劇 道化師中の鐘の合唱 レオンカザルロ作 島 秀代
 二、洋琴獨奏 夜の曲 ホ長調 作品十七 ファイールド作 乙、歌劇 マクベス中のバンクオーの宜叙調と

抒情調(恰もみ空よりさかしまに) ウェールデイ作

番外 ヴァイオリン 末吉雄二

第二司伴樂 ブルックツフ作

番外 洋琴獨奏 助教授 久野ひさ

一、嬰ハ短調奏鳴樂 作品二十八

ムーソライト ソナタ ベートーヴェン作

二、甲、練習曲 ハ長調 作品十 シ・パン作

乙、諧謔曲 嬰ハ短調作品三十七 シ・パン作

一、合唱附獨唱 會 員

歌劇 身を誤る女中の酒宴の歌 ウェールデイ作

指揮者 合唱 教授 萩原英一、絃樂 助教授 大塚淳

○兩日ともに雨天、過去八年間にこんな悪天候がなかつた。

六月九日夜 交響樂的演奏會 於東京本野外務大臣邸

指揮 山田耕作

一、管絃樂 序曲 ニ長調 山田耕作作曲

二、ヴァイオリンソロ獨奏 多基永

アンダンテ レント ピアッティ作

三、獨奏 ソロピエフ嬢

甲、ロマンヌ グリシカ作

四、交響樂 ちとせと平和 山田耕作作曲

五、管絃樂 源氏樂帳 山田耕作作曲

イ、花散る里 ロ、須摩 ソロピエフ女

六、獨唱 症 策 雅

七、ヴァイオリン獨奏 甲、ロマンヌ スズンゼン作

乙、マツルカ ギーニアヴスキー作

八、洋琴獨奏 變ニ長調の練習曲 チエレミシノフ女

九、管絃樂 劇樂 わしも知らない リ・スト作

イ、序曲 ロ、劍の舞 ハ、妃の舞 ニ、亂舞 山田耕作作曲

○聴衆は本野外相より招待を受けた内外の紳士淑女のみであつた。山田耕作作曲が演出されたが眞にその價值を認め得たものは少數であつた。併し此年開かれたすべての演奏會中最も注意すべき重大な意味を有するものであることが切實に感ぜられた。

五月廿日 日比谷公園奏樂 陸軍戸山學校軍樂隊演奏會

指揮 陸軍一等樂長 山本鏡三郎

一、新軍隊行進曲 國防 ラムベ

吹奏樂

吹奏樂

吹奏樂

吹奏樂

吹奏樂

吹奏樂

二、序曲 音樂家

三、ウエールデイの思ひ出

四、新舞曲二

甲、フォックストロット 泉

乙、ワンステップ ハウズエヴリリフトウル

シンクインディキシ

五、歌劇 ユーグノーの幻想曲

管絃樂

六、序曲 マイダス王

七、圓舞曲 樂しき歌

八、歌劇 マルタの拔萃曲

吹奏樂

九、歌劇 ローエグリン 第一幕の幻想曲

七月七日 第二十回土曜演奏會 於東京音樂學校奏樂堂

一、合唱

夜の窓の前に立ちて

歌劇 田舎の騎士中の合唱

二、洋琴獨奏

ハ長調旋轉曲 作品二十四

三、低音獨唱

フロート

ゴッドフリー

ローズ

ガムブル

マイアーベア

アイレンベルヒ

ダッドウラ

フロート

ワグネル

ボロネーズ

會員

一〇、會員

歌劇 ファウスト中の舞踏の歌

七月八日 東洋音樂學校學友會第二十二回演奏會 於同校

一、四重合唱

高木タケ

ウエーパー

矢田部賢吉

二、洋琴獨奏

甲、嵐の船 乙、子守唄

甲、ブロンゾンスの歌

乙、歌劇雲笛中のサラストウロの抒情調

四、洋琴獨奏

嬰ハ長調奏鳴樂 作品七

五、高音獨唱

夜のごと静けし作品三二六、二十七番

六、低音獨唱

歌劇 アウリスのイフィゲニーの一節

七、ヴァイオリン獨奏

祈りの歌

八、上高音獨唱

神事劇天地創造中のカプリエルの抒情調

九、洋琴獨奏

ボロネーズ

會員

歌劇 ファウスト中の舞踏の歌

七月八日 東洋音樂學校學友會第二十二回演奏會 於同校

一、四重合唱

甲、嵐の船 乙、子守唄

二、洋琴獨奏

マッスネー

モツアルト

水野 清

ベートーヴェン

藤巻 滿惠

ポリーム

山崎 善次郎

グルック

草川 信

ブルッフ

金子 豊

ハイドン

渡邊 トリ

シ・バン

會員

グノー

會員

キユッケン

木村 いと

銀の波

三、二重唱 幸福

四、洋琴獨奏

エイオリネのバルブ(O)

五、獨唱

ハイドラン レイスライン

六、ヴァイオリン獨奏

ホ短調小司伴樂 作品三十一

七、獨唱

われは君を愛す

八、ヴァイオリン二重奏ローザムンデ中の一節

九、女聲三重唱

昔話 シンデレラ中の一節

一〇、絃樂四重奏

アンダンテ カンタービレ

一一、四重合唱

安息曲 中の第二、第五章

一二、小管絃樂

甲、夜響の巡邏

乙、南の星 歌劇小序

十月十三日

音樂奨勵會第二十七回演奏會 於本郷青年會館

山田耕作作品自奏音樂會

一、兒供のおつたん 十章

二、黎明の看經

三、源氏樂帳拔萃

い、花の宴の巻より

ろ、花散る里の巻より

は、須磨の巻より

四、舞踊詩 青い煙

五、更衣詩曲 哀詩

瀧藤太郎作 荒城の月を主題としたもの。

六、更衣曲 散り近く乙女

― 埃國民族を主題として―

七、い、牧場の靜夜

ろ、壺の一輪

は、月光に棹して

八、メラデー ねたみの火 初演

九、い、夜の詩曲

ろ、スクリアピンに捧ぐる曲

は、聖誕第一章 初演

一九一六、七、二四作曲

一九一六、一〇、二四同

一九一七、三、二五同

一九一七、三、二一同

同 三、二四同

一九一六、三、八同

一九一七、一、一五同

一九一六、八、五同

一九一七、四、二一同

同 五、二同

同 四、二九同

同 九、二〇同

同 三、二〇同

同 四、二八同

同 七、二一同

一〇、舞踊詩劇マゲダラのマリヤ初演一九一六、三、一二同

モリス メーテルリンクの戯曲に因る。

十一月四日午後一時 海軍々樂長瀬戸口藤吉告別大演奏會

於帝國劇場

一、序曲 羅馬の斷肉祭

二、音詩 中央亞細亞の廣野

三、低音獨唱 管絃樂附

歌劇 猶太の女 中の抒情調

四、甲、アングンテ カンタービレ

乙、西班牙舞曲

五、洋琴 管絃樂奏

イ短調司伴樂

六、第五交響樂中の第二樂章

七、低音獨唱

歌劇 トスカの一節 星きらめきぬ

八、組曲 アルルの女

甲、プレリユード 乙、メヌエット 丙、フアランドール

○伊太利大使クサニコン、アアロニエーリ侯爵等も來場した。

最後に山田耕作の瀬戸口樂長に贈呈した記念曲を、早川軍

樂師が指揮して、瀬戸口樂長に贈つたのや、「君が代」を演奏

して會を閉じた處は純西洋式に従つたものである。

瀬戸口樂長の主なる作曲は、軍艦行進曲、敷島行進曲、東京行進曲などであるが、海軍のオーケストラの創設に著しい功績をあらはしてゐる。

十一月廿四日 學友會第二十一回土曜演奏會

於東京音樂學校演奏堂

一、絃樂合奏

作品四十八 セレナーデ中の悲歌

二、洋琴獨奏

奏鳴樂 作品二 第一樂章

三、高音獨唱

歌劇 自由射手中のエーンヒェンのロマンス ウェーバー

四、ヴァイオリン

小司伴樂 作品二十四 第一、第二樂章

五、低音獨唱

さすらひ人 シューベルト

六、ヴァイオリン

ニ短調司伴樂 第一、二樂章 作品三十二

七、高音獨唱

歌劇 豫言者中のフィーデズの歌 藤卷 滿江

會員

チェイコフスキー

土谷 とみ

ペートーヴェン

萩野 あや

林 龍 作

リーディング

矢田部 勁吉

シューベルト

高階 哲應

ザ イ ツ

藤卷 滿江

マイヤーベア

八、ヴァイオリンセロ獨奏

犬井英夫

四、合唱

奏鳴樂 ラルゴリ 軍隊風のアルレグロ

ボツチリニエ

い、空しく老いぬ 瑞典民謡 ユングスト編、高野辰之作歌

九、洋琴獨奏

和田國男

ろ、心の花 作品六十二 フラームス作曲、吉丸一昌作歌

美しきドリーナよ來よ

ウエーバー

五、管絃樂 ファウストの地獄落 作品二十四

番外 次中音獨唱

助教授 船橋榮吉

い、風情の舞踏 る、鬼火の舞踏 は、匈牙利進行曲

歌劇 カルメン中のトレアドルの歌

ビゼー

ウエルクマイスタル

一〇、絃樂合奏

會員

六、ギョロンチエロ獨奏

ウエルクマイスタル

オーゼの死とアニトラの舞踏作品四十六

ケリヒ

イ長調 ソナタ

ボツケリーニ作曲

十二月 日 東京音楽學校秋季音楽演奏會 於同校奏樂堂

グリン

七、ピアノ聯奏

ショルツ、ベツォールド

一、管絃樂 歌劇 ルッスランとルッドミラの序曲

カ作曲

悲壯なるコンチエルト

リ ス ト作曲

二、獨唱 ソプラノ

ベツォールド

八、獨唱 合唱及管絃樂

ゲータ作譯歌最初のヴァルブルギスの夜 作曲六〇

イ、小夜中に靜かに惱は來る

ゾル

メンデルゾーン作曲

ロ、君は早月の微風の如く溫和に

リ ス ト作曲

アルト 廣田ちず五、テノール 澤崎定之

三、ヴァイオリン

頼母木こま

バリトン 船橋榮吉、ベイス 樋口信平

ニ短調 コンチエルト 作品二十二

指揮者 クロイン

第一章及第二章

ギーニアフスキー作曲

邦本

洋樂變遷史終

昭和六年十月一日印
昭和六年十月五日發
行 刷

本邦洋樂變遷史

定價金六圓五拾錢

著 者 三 浦 俊 三 郎

株式會社日東書院代表者

發 行 者 武 田 勘 治

印 刷 者 並 河 三 郎

東京市外濫谷町猿樂五十一番地

印 刷 所 眞 興 社 印 刷 所

東京市外濫谷町猿樂五十一番地



發 行 所

東京市神田區中猿樂町十七番地
振替口座・東京六五四二一番

株式會社

日 東 書 院

